スチルネル著

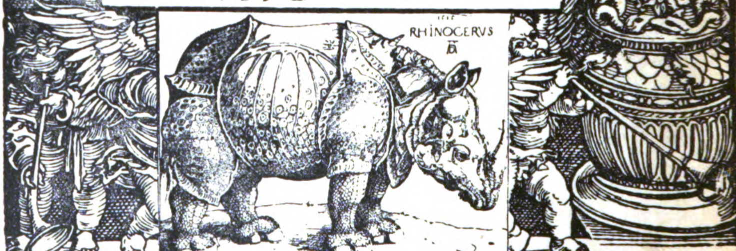
自我經

辻潤譯

マツクス・スチルネル著

自我經

（唯一者と其所有）



内容

讀者のために

○この本を始めて讀む方のために、便宜と思はれる氣のついた點を少しばかり書いて置きます。この本は元來あまり讀み易い本ではありません。原文が既にむづかしいのですから、この種の書物を譯すにあまり適當ではない日本語に改める時に、それが愈々讀み悪くくなるのです。寧ろ一般の讀者のためにスティルネルの思想のどんなものであるかと云ふことを傳へるには、やはり解説風に、パラフレーズして、要點を明瞭にすることが至當なのかも知れません。けれど、僕はさう云ふ器用なことが出來ない質の人間なので、なるべくスティルネルをそのあり〳〵のまゝにむき〳〵だしにして見せることにしました。

○僕には獨逸語が殘念ながらよく讀めないので、これを英譯から重譯しました。しかし、單語位は字引を引けばわかるので、時々原書を參照したところもあります。英譯は "Ego and His Own" と題して、亞米利加の言語學者で同時にアナアキストである Steven T. Byington と云ふ人が主として譯したので、それを當時亞米利加で一番だと云はれてゐたスティルネル學者(序文參照)のウオーカアが檢閲し、更に英語と獨逸語とどちらが自分の國語だかわからなくなつてゐると云ふ、

これもスティルネリアンである Emma Hellen Schumm と George Schumm の二人が手傳ひ、それ等の人々の解釋が相異する場合には、この書（英譯）を發行した亞米利加のインディビジュアル●アナアキストのベンジヤミンタツカアが間へ入つて定めると云ふ風に、隨分念入りに譯されたものなので、原書の "Der Einzige und sein Eigentum," と云ふ書名をどうして譯していいかと云ふことに就て先づ頭を痛め、その題名の文字通りの譯 "The Unique One and His Property" ではあまり野暮くさく、牽引的でないと云ふところから "The Single One and His Property," "The Only One and His Preperty" "The Individnal and his Prerogative" などと色々やつてみたがどうも面白くなく、結局、文字通りではないが如何にも齒切れがよく、感じが出てゐると云ふので、"The Ego and His Own" としたなどと斷つてあるのを見ても、充分に信頼される譯者であることが肯かれます。僕もこれを讀んだ時に題名に就て少しく迷ひましたが、變に氣の利いた眞似をするよりもと考へて、そのまた文字通り「唯一者とその所有」として置きました、スティルネルの「唯一者」のどんなものであるか、その「所有」と云ふ意味がなんであるかは結局この書全體を通讀しなければわからない事なのです。

●この本は全體を「人間篇」と「自我篇」の二つに分けてあります。「人間篇」では主として古來からの思想史を歷史的に批評した形になつてはゐますが、實は自分の獨自の考へを述べるに都合のい

い部分だけを並べてそれ等を縦横に翻弄し、痛烈に粉砕してゐるのであります。第二篇の「自我篇」(之は續いて出す事になつてゐます)では「所有人」即ち「唯一者」のなんであるかを說いてゐるので第二篇を讀んで更に第一篇に戻れば、一層明白に彼の態度が解かることになるのです。それから"Ich heb' Mein' Sach' auf Nichts gestgellt" (萬物は巳にとつて無だ)と云ふゲエテの句を冒頭に置いた序詞ともなんともつかないものは、これこそ自我交響樂(エゴオシンホニイ)の序曲(プレユード)とも見做さるべきもので、これを聽いただけでも、彼の音樂が如何に無二であるかが響いてきます。序に申して置きますが、世に音樂的な文章と云ふものが存在してゐると致しますれば、僕の知つてゐる限りスティルネルの文章程イントリケートな意味で音樂的なものはあるまいと存じます。試みに序曲の最初の數行を御目にかけます。

"Was soll nicht alles Meine Sache sein; Vor allem die gute Sache, dann die Sache der Menschheit, der Wahrhrheit, der Freiheit, der Humanität, der Gerechtigkeit ; seiner die Sache Meines Volks, Meines Fürsten, Meines Vaterlandes ; endlich gar die Sachedes Geistes und tausend andere Sachen. Null Meine Sache soll niemals meine Sache sein, „Pfui uber den Egoisten, der nur an sich denkt!"

○「英譯發行者の序」中にタッカア氏は左の如き注意を與へてゐます。『例令讀者はこの書の最初の

四分の一が稍々晦澁で禁斷的に思はれても、その爲めに決して逡巡しては駄目だと自分は忠告して置く。精讀は殆んどあらゆる困難を征伏するであらう。若し讀者が少しく辛棒すれば、彼は後になつて多大の報酬を發見するであらう。讀者の爲めに自分は特に著者の文體の缺點を指摘して置く。著者は自分と反對な說を駁してゐる時に、彼自身の說と反對說とを充分明瞭に區別して置かない。その結果として讀者は漸次昏迷に深入りして行く。するとそのうちに忽然として彼の誤解の原因が明らかにされる。さうなると彼は再び後戻りをして、讀み返さなければならなくなるだから、自分はこれを先づ注意して置く。それから、著書全體の構造から來る他の困難がそこに橫つてゐる。これ等に關して自分はバシユ教授の書から、左の數節を引照することを最善だと信ずる。「凡そこの不思議な書に初めて接した時程、當惑することはない。スティルネルは彼の屋敷の建築に關して、何等の智識をも與へず、最も僅かな道標の緌をも供給しない。この書の外形に現はれた區別は極めて僅かで、徒に人を昏惑させるものである。最初の頁から最後の頁に至るまで、無二の思想が轉回してゐる。しかしそれは無限の脈絡に分離されてゐる。そしてそれ等には悉く豐富な血液が激動してゐる。で、人はそれ等を悉く記述せんとする程に誘惑される。この書には何等の展開も進步もない。反復が無數である……このヘンテコ、或は寧ろ文章の不在によつ

て閉口しない讀者は、純粹な智力的勇氣を證明するものである。始め人はアホリズムに充ちた無數の論文に出會つたやうに思ふ……しかし、若し諸君がこの書を數回繰り返して讀むなら、そして各部分の親密を貫徹したなら、その時諸君は、それを全體として精査する事が出來る。――すると次第にそれ等の斷章が自から密着して、スティルネルの思想があらゆるその統一と、力と、深さに於て現はれて來る。』また英譯者のバイイングトンは、若しこの書の文體に人を惹きつける力がないと云ふなら、自分は自分の仕事を拙劣にやつたので、眞に原著者を傳へたことにはならないが、若しその文體がヘンテコであると云ふなら、自分はその責任は悉く負ひたくはないのである。自分は單に著者自身が用ひた俗語と、專門語の混合を再現しようと試みたばかりである。そして著者は言葉を習俗的に用ゐるよりも、寧ろ自己の思想を端的に發想しようとしたのであつた。そして著者の文體の特徴は思想の絲が同一の言葉を種々なる形や、意味で繰り返すところに存してゐると云つてゐます。兎に角スティルネルの文體が如何にその思想と共に獨一無二なものであるかは、略々讀者に御推察のついたことと思はれます。

○これから順序としてスティルネルの人物や、生涯に就て述べるべきでありますが、これはいづれ機會が出來たら、別冊として書いて見たいと思つて居りますから、今は極めて簡單に申しあげて

置きます。元來、マックス・スティルネルと云ふのは本名でなく、額（スティルン）の高いところから幼少の折につけられた綽名で、それをそのまま雅號に用ひたので、本名はヨハンカスパア、シユミット（Johann Kasper Schmidt）と云つたのです。彼は一八〇六年、ババリアのバイロイトで生れました。一八二六年から二八年まで伯林に居て、それからエルランゲンに移つて其處に一年ばかりゐました。その間彼は主として哲學と神學とを勉強したのです。一八二九年に彼は勉學を中止して、獨逸の國内をあちらこちらと旅行をして廻り、一八三二年まで、ケニスベルグにゐたりクルムにゐたりしてゐましたが、再び伯林に戻つて勉强しました。一八三五年に彼は高等學校の教員免許狀を受けたのですが、別に就職はしませんでした。そして一八三九年になつて伯林のある女學校の教師になつたのですが、一八四四年にその位置を棄て、それから以後はズット伯林にゐて、一八五六年其處で死にました。彼自身の哲學にあまりに忠實?であつた彼はその結果?として極めてジミな生涯を送つたのです。彼は溫順で、遠慮深く、引つ込み思案な人間だつたと云はれてゐます。社會的にキワ立つた印象を與へたことなどは、勿論なかつたらしいのです。學校教師としての生活も、彼の著述を完成すると同時に、自分からその職を擲げ打つたのです。彼は精神病の母親を抱えて伯林の町々を轉々し、いつでも貧困と失敗の苦痛を嘗めてゐたのです

彼の生涯の中で一番華々しい事件であると云はれてゐる、當時の新しい女マリイデーンハルトとの共同生活も、彼の貧乏と失敗の爲めに三年許りで破れてしまつたのです。スティルネルが彼女の財産を全部消費してしまつたと云つて、彼を棄てて女は逃げてしまひました。彼は再び孤獨になつて、相變らず收入の不規則な生活を送りました。負債の爲めに二度程留置場に入れられたことなどもあつた位です。彼はある下宿で死にました。そして毒蠅に咬まれたのがその原因だつと云はれてゐます。社會的に見たらば彼の一生は、實に悲慘なものであつたと云はなければなりません。しかし彼の哲學を奉ずる者が恐く、彼の如き生涯を送らなければならないと云ふやうな理窟はまさか立ちはしないでせう。

僕の知つてゐる範圍で申しますと、自分が日本で最初にスティルネルの名に接したのは、恐らく十年前(だつたと記憶します)に久津見蕨村氏が「無政府主義」と題する書物(これは間もなく發賣禁止になつたやうでした)の中で、簡單に紹介されたのを見ましたが、それが恐らく始めてのやうであります。その後、五六年前に相馬御風氏が「個人主義思潮」と云ふ書物を出して、纏つた紹介をし、それと前後して大杉榮君が「近代思想」誌上で一二度その紹介を書き、僕が加藤一夫氏の編輯してゐた「科學と文藝」誌上に四五回この書物の譯を連載し、その前に一度卷頭の「萬物は己

にとつて無だ」を、土岐哀果君の編輯してゐた「生活と藝術」に載せたことがありました。また一昨年友人の木蘇穀君が「潮」と云ふ雜誌にヒユネカアの書いた評傳を載せました。その他にも誰か紹介してゐる人があるかも知れませんが、僕は存知ません。この四五年來日本の思想界が民主主義や、社會主義や、人道主義に風靡されたためか、ニイチエが流行したやうに遂に日本では流行したやうに遂に日本では流行しませんでした。

○昔、未だ日本が今のやうに開けなかつた時分には「無政府主義（アナーキズム）」と申しますと、なんでも非常に恐ろしいものでもあるかのやうに思はれ、無政府主義者と云へば、まるで狂犬か狼ででもあるかのやうに、やたらに暗殺をしたり、爆裂彈を投げつけたりする人のやうに思ひ込まれたものですが、今の人がきいたらさぞビツクリすると同時に可笑しがることでせう。そんな人にお釋迦様でも基督でも、老子でも莊子でも、トルストイでもみな立派なアナキストだつたと云つたら、ずいぶん驚くことだと思ひます。スティルネルは通常個人主義的無政府主義者若しくは、哲學的無政府主義と見做れてゐますが、彼は彼の書物のどの部分にも、自分はエゴイストであると云つてこそゐますが、アナアキストであるとは決して申してはゐません。彼はなんのイズムをも認めてはゐません。だからスティルネルに教義があるとしますれば、それは教義のない教義だと云はな

ければなりません。彼の至上命令（若しそんなものがあるとすれば）は唯だ「汝は汝の汝であれ」、「汝は汝の汝を生きよ」であります。「予はかくかくの眞理を說く、故に汝等は予の眞理を遵奉し、それに從つて生きざるべからず」と云ふやうなことは、何處にも申しては居りません。スティルネルの眼から見ますれば、すべてある主義や教義を奉じ、それを唯一神聖の眞理であるかの如く信じて、それに仕へる人々はそれが社會主義者（例令へばマルクス）であると無政府主義者（例令へばクロポトキン）であるとを問はず悉く理想主義者であり、彼の所謂「憑かれた人」なのであります。

○僕はこれまで自分の交友中に、社會主義や無政府主義の人々のゐるが爲めに屢々世の中から又官憲から、社會主義者であり又無政府主義者であると思はれてきました。僕はまた自分の實生活の行爲の上から、さまぐ\の非難と嘲笑と、侮蔑と罵詈とを頂戴いたしました。しかし僕はそれ等に對して、未だ嘗て辯解や反駁をしたことは一度もありません。なぜならそれは自分の趣味でもあり、スティルネルの無教義の教義？を奉ずる者であるからであります。僕はこの機會に於て、日本の官憲に對しては自分の社會主義者でもなく、無政府主義者でもないことを明らかに申し上げて置きます。それと同時にまた僕を知つてゐる世間に對しては、スティルネリアンである自分

の如何に羊の如く溫順で、また意久地のない男であるかを改めて申し上げて置きます。また僕が時に淺草公園の劇場に現はれて、役者の眞似などをすることを心配して下さる御親切な方々に申上ます。人間になん等の Vocation をも Calling をも又 Function をも認めないスティルネリアンである僕は、時に役者となり、時に寄席藝人となり、時に浮浪人となり、時に食客となり、時に飜譯業者となり、時に小說を書き、時に職工となり、時に……となることがあるでありませう僕は唯だ自分の自我(スティルネルはそれを schöpferische Nichts ——創造的虛無と呼んでゐます)のおもむくままに生き行くのみであります。まことに「予に於ては自分自身を假想する假想から出發する。けれど予の假想は『自己の完成の爲めに努力する人間』の如く、その完成の爲めに努力はしない。けれど唯だそれを享樂し、費消する點で予に役立つ、予は予の假想を費消する。それ以外の何者でもない。」であります。(一九二〇年、四月)

唯一者とその所有

序文

五十年位、早からうが、遲からうが、このやうな革命的な書物の場合には大差がない。この書が光明を認めたのは、所謂革命的運動が人心に準備されつつあつた時であつた。しかしその擾亂は單に政府に干與せんとするさまぐ〵の慾望に起因する擾亂で、畢竟、普通とは異なつた方法で、支配しようとか、支配されたいとか云ふことに過ぎなかつた。一八四八年の『革命家等』は或る觀念に魅せられてゐた。かれ等は到底思想の支配者ではなかつた。その當時以來自から革命家たることを誇りとする人々は大概同じように或思想の奴隷であつた、――卽ち異つた權威（オーソリテイ）に寄寓してゐるに過ぎなかつた。

勿論、今此處で、この書の中心思想の說明を企てようと云ふ誘惑はある。しかしかくの如き努

力はこの書を手にする人にとつては不必要であるらしい。著者が彼の思想の意義を説明せんが爲めにとつた注意は、憑かれた人間と云ふ者は普通の思索の型にはまつてゐないものを、どれ程、誤解する傾向があるものだかと云ふことを明らかにしたことでも解つてゐる。著者の學識は夥しいものであつた。その言葉や思想を驅使する彼のやり方は決して他人の企及し得ないものかも知れない。そして彼は種々なる方法で彼の議論を展開させる必要があると判斷してゐた。だから、議論の精神に觸れる人々は恐らく、同一の結論を、これ以上簡略な方法で他の人々に印象せしめようとは望まないであらう。或はたとへ或人がスティルネルを讀んだ後でそれが出來ると思ふかも知れないにしてもそれがしかく確然となされ得るとは、よもや考へる事は出來ないであらう。著者は公衆の爲めに待たなければならない時ですら、それを確かな仕事にこしらへあげてゐた。しかし、それでも、この書が批評家等に受け入れられる有樣を見れば、人は他人に色々な議論を提供することは出來るが、理解を與へることは出來ないと云ふ諺の眞理が十分に證據立てられてゐるのを見るであらう。系級(システム)の製造者や、系統(システム)の信者等は、自我の性質に關する或議論がさま〴〵の自我の共通な特性に向けられねなければならず、又一個の普遍としてそれ等が干與する物に對する系統的議論を立てなければならないものだと云ふ頭から脫する事が出來ないのだ。批評家等は

著者が如何なる種類の人間に就て語つてゐるのかと訊ねる。かれ等は『著者は何を信じてゐるのか？』と云ふ質問を繰り返す。かれ等には『自分は自分自身を信じてゐる』と云ふ明らかな答の要領を捉み得ないのである。それは夙にスティルネル以前の普通兵に歸せられてゐる。かれは、Einzige(唯一者)なる自覺せる自我主義者の信條は何んだと訊ねる。この困惑に對して、スティルネルは云ふ、その質問を變へろ、『何に？』の代りに『誰れ』としろ。さうすればその人間を名指すことによつて、答は直に與へられる！と。

これは、勿論、思想に支配されてゐる人々や、新しく支配する思想を求めてゐる人々にとつては、あまりに單純である。かれ等は人間と云ふものを分類したがつてゐる。今、私の中に、汝が分類し得るものは特殊な私自身ではない。『人間』は個人としての私の存在の水平線若しくは零である。それを超えて、自分は自分が出來る丈け聳立する。少なくとも自分は『一般の人間』以上の或者である。種々なる理想に對する先在する崇拜及び自己無視は、精々の處でエゴからSomebodyを造つた。しかしより屢々暴虐な教義の恩惠や屑を以つて充さるべき空虚な器(うつは)を造つた。かくしてそれはNobodyである。スティルネルは病的な服從を排斥する。そして彼自身の所有として彼自身を知り且つ感じてゐる各人を認めるに、賤劣なNobodyでもなく、困惑されてゐるSomebody

でもないとする。だからそれは足の平らな、頭の普通な Mr. Thisbody である。その人は、彼が自分の姓名を持つてゐるやうに、彼自身の性格と善き快樂とを有してゐる。

この書を攻擊し、著者の小著の中に答へられた批評家等――それはジョン・ヘンリイ・マツケイによつて忘却から救助されたのだが――は悉く最も驚くべき凡庸と無力な惡意とを示してゐる。

一八九六年その初版を出した『無意識哲學』及びその他の著述に於て、この書に注意を向けることに務めたエドヴアルド・フオン・ハルトマン博士に吾人は負ふところが少なからずある。自分はハルトマン博士が用ひた批評の自由の爲めに彼を羨やみはしない、そしてスティルネルの教義の讃美者はフオンハルトマンがズツト後にやつた一事をまつたく承認しなければならないと自分は考へてゐる。一八九六年八月十日の "Der Eigene" には彼によつて書かれた書簡が掲載された。それには色々な意味がある、就中、フリイドリツヒ・ニイチエが後年彼の論文を書いた時にはスティルネルの書を知らなくなかつたと云ふことを判斷せしめるに足る資料を與へてゐる。

フオン・ハルトマンはスティルネルが更に進んで、彼の信條を展開さしたならばと云ふことを希望してゐる。ハルトマンは君と僕とは同精神で、異つた二對の眼を通じて眺めてゐるに過ぎないと云ふやうな意味を暗示してゐる。その時人は答へて、自分は汝の爲めに自分自身を果はす必要

はない。何故なら、自分は自分自身の中に――我々を持つてゐるから、と云ふかも知れない。そしてその分で行くと、フォン・ハルトマンは單に矛盾に就て彼自身を非難してゐることになる。何故なら、スティルネルがこの書を書いた時にはハルトマンの精神がそれを書きつゝあつたからである。そしてスティルネルが他のどんな人間からも異なつて居り、彼の自我がフイヒテの超絶的普遍ではなく、『血肉のこの刹那的自我』であつたと云ふことを、ハントマンが、スティルネルの形式で裏書きしてゐないと云ふことは、將に悲しむべき事柄である。君と僕とが異つてゐると云ふのは普遍としてではなく、一緒には推論出來ない事實の結合としてである。『自分』は幾分かハルトマンである、だからハルトマンは『自分』である。けれど私はハルトマンでもなく、ハルトマンは私でもない。又自分はスティルネルの『自分』ではない。スティルネル彼自身のみがスティルネルの『自分』であつた。スティルネルにとつて人が一個の自我であると云ふことは比較的どれ程、無意味なことであるかにひきかへて人が自覺せる自我であり、自から意識し、自から意志する人間であると云ふことはどれ程重要なことであるかを注意せよ。

　自覺もせず、自から意志せざる人々は絶えず利己的な動機から行動しつゝ、それを種々なる衣で包んでゐる。スティルネルの教義に照してそれ等の人々をよく〳〵注意して見よ。さうすれば

かれ等は僞善者らしく見えて來る、かれ等は如何にも多くの善き道德的なそして宗敎的を持つてゐる。しかしその根底にはいづれも利已が隱れてゐる。しかしかれ等は、それが偶然の一致以上のものだと云ふことを知らないのだと云ふことを吾人は信じ得る。

スティルネルの中に、吾人は政治的自由に對する哲學的根柢を有してゐる。エゴイズムの實際的發展がやがて國家の崩壞となり、自由の結合になると云ふ彼の興味の明瞭で斷乎たるものである。そしてジョシア・ウォーレンの經濟的哲學と完全に調和する氣質と言葉の相異を暫時許すとしても、スティルネルとプルウドンの間には本質的な一致がある。各自が自由を欲してゐる、そして自由人の增加とかれ等の叡智の進步の中に壓制者に對抗する補助力を認めてゐる。しかし一方で、ニイチエとプルウドンとが共通の目的と傾向で前進し、――かれ等の迷信の社殿と墓場を汚辱する勇氣以外に共通する物を有してゐると云ふことを僅かの間でも眞面目に爭ふ人がゐるであらうか。

ニイチエはこれ迄はスティルネルの弟子であると云はれて來た、そして、ニイチエの著書からの都合のいい寄せ集めの爲めに、彼の書物の或物は實際以上に有意義なものを含蓄すると想像されるやうになつて來た――しかしそれは人が拔萃ばかり讀んでゐる間だけの話である。

ニイチエは數十數百の著者を引用してゐる。彼はあらゆる物を讀んでスティルネルを讀まなかつたのであらうか？

しかしニイチエがスティルネルと異なつてゐるのは恰も綱渡りの輕業が代數の方程式と異つてゐるやうなものである。

スティルネルは彼自身の爲めに自由を愛した、そして悉ゆる男女が、自由になるのを見ることを愛したが、彼は權力に對する慾望を持つてはゐなかつた。民主政體は彼にとつて虛僞の自由であり、自我主義が純粹な自由であつた。

ニイチエは、これに反して、貴族的でないと云ふ理由で、民主政體に對して彼の侮蔑を濺ぎかけてゐる。彼は猫の如き貪慾に屈從しなければならない人々はあきらめて服從することを教へられなければならないと云ふことを要求する程、掠奪的である。彼が文明の大部分の街路をウロツキまわる『無政府主義的群犬』に就て云々する時は、その文體の前後の關係から、彼が共產主義者を意味してゐることは眞實である。しかし彼のナポレオンに對する崇拜、數千年間歐羅巴を支配すべき貴族主義の勃興に對する不安の彼のペーソス、東洋風に婦人を取り扱はんとする彼の思想等は、ニイチエが極めて舊い道を案出したものだと云ふことを示してゐる。そして彼は暴虐を崇

拜してゐるのである。しかし我々個人的自我的無政府主義者等は誤解されないやうに、ニイチエ派の人々にかう云ひ得るかも知れない、我等はナポレオンに憐憫の情を持てとは頼まない、又掠奪する男爵達に正義を行ふことをも求めないと。かれ等は何物をも崇拜せず、何物にも服從しない人間の如何なる者かをスティルネルから學んだ人々と妥協することがかれ等自身の幸福の爲めに便利であることを發見するであらう。勤勉な小羊を捕食すべく生れた男爵風の姿をした鷲のニイチエの倨傲に對して我々は寧ろ嘲笑的に左の皮肉な質問を呈する。おまへ達の爪は何處にあるのだ？若しその『鷲』が只の裏庭の家禽であることが發見され、その上にもつと愚劣な、しかしながら二個の太陽の間の似非鷲を制禦する力を有する家禽が鐵の如き距を犧牲者に突き立つて切苛んだとしたら如何か？

スティルネルは人間がかれ等の神を造るが如く暴君を造るのだと云ふことを示してゐる、そして彼の目的は暴君を滅亡するにある。

ニイチエは暴君を熱愛する。

文體に於ても、スティルネルの著書はニイチエの「ツアラトウストラ」の幼稚なゴタゴタした語法やその虛僞な想像に比して最大級の對照を示してゐる。鷲が友情を以つて蛇を『擔つて』ゐると

云ふやうな不自然な取り合せを何人が曾て想像したであらう？その所作が裸き出しの言葉で語られてゐるが、何物もそれから出て來ない。スティルネルにあつて、我々は眞面目な心に話しかけられた、生々した熱心な議論に出遇ふのである。そして全ての讀者は、彼が精神的獨立と、それを取り用ゐる勇氣とを失はない限り、その言葉が彼の教訓と利益になることを感ずる。この書の驚くべき大膽は全人類に對する全心の愛を以つて浸されてゐる。それは著者が偏見の一イオタをも示さず、何等人間の階級的思想をも抱いてはゐないと云ふ事實によつて證明されてゐる。彼は政府を排した。しかし何にか便宜と思はれる規律を立てようとした。そしてその爲めには單に我々の便利のみが與かればいいのである。かくして暴虐に向ふ性癖が、最早斯くの如き法則に服從出來ない聰明な反抗に出會ふ時にのみ一般の自由が現はれるであらう。加之、スティルネルの男らしい同情と哲學的傾向とは支配と云ふことは一種の虚榮であり、轉倒せる誇りの惑溺であることを著しく示してゐる。我々は更にこの著者を嘆美すべきか、或は愈々彼を愛すべきか、その孰れであるかを知らないのである。

婦人に對するスティルネルの態度は特殊のものではない。彼女は若しその能力がありさへすれば一個人たるの資格がある。そしてその場合、男子が云ひ、感じ、考へ、計畫する何物によつて

も手加減される必要がない。これはこの書に於てよりは更に彼の生涯によつて充分證據立てられた。しかし、この書に於ても、婦人を男子よりも劣等な地位に置いたり、或は階級とか貴族とかを承認した點は一行だもない。

同樣にこの書には曖昧とキザな神秘思想の何物も發見されない。其の中のすべては著者の力の及ぶ限りで明瞭にされてゐる。それを明瞭にしない者はスティルネルの弟子でも、後繼者でも又は共力者でもない。

或人は訊ねるかも知れない、どうして測鉛(プラムライン)をつけたアナアキズムがスティルネルによつて宣言された放肆なエゴイズムと親善を計ることが出來るかと。測鉛は狂崇物ではなく、一個の智的確信である。そしてエゴイズムは動物生活の一般的事實である。個人の自然な利己心より百萬倍も自分の上に强い壓制の存續の爲めに自からを許す偏見に充ちた兩足動物の代りに、因はれざればならないものだと云ふこと以上に明らかなことは自分にとつてはないと云つてもいい。測鉛Einzige(唯一者)を吾人が有する以前に、先づエゴイズムの事實が人間の自覺となつて現はれなけの教義が不平等な人心の間に義務として、――人道の宗教として、――誤まり抱かれる時にそれは實際、アルハベットを知らずして讀書せんとし、結婚契約の代りに博愛を置んとするが如き混

亂である。しかし、若し測鉛が科學的であると云ふなら、それは自分の所有であり、自分の財産たり得る。そして自分は、事情がその使用を許す場合にはそれを選んで使ひもする。しかし自分は自分の家を建てるに當つて、それが科學的だからと云ふのでそれを用ゐる義務の束縛を感じない。しかし、自分の意志が、聰明であつて、單にわがままばかりではないから、測鉛を採用するに當つて、先づ邪法を除かなければならない。飛ばない鳥、ヒツ掻かない猫のない限り、繩の先に不變の鉛をつけてゐない測鉛はない。エゴイズム對自己讓與の問題の實際的方面、政治上に於けるエゴイズムの試みに向つては、かう云ひ得るかも知れない。義務の觀念によつて動かされない人間は他人に對して不親切であり、或は不正であると云ふ信仰は、その信仰を懷いてゐるそれ等の人々が、かれ等自身に對してよりも寧ろかれ等の爲めに生きる他人を持つことに非常な感興を感じてゐると云ふ間接な告白に過ぎない。しかし自分は今多くを賴みもせず、期待もしない。自分は他人が個人的にかれ等自身の爲めに生き、種々なる場合に、私自身の爲めの自分の生活——我々自身の爲めの我々の生活——に反抗するやうな行爲を止めるならばそれで滿足してゐる。

若し基督教が世界を禍より轉ずることに失敗したとすれば、敬虔な道德的極印を有する合理教が同じ仕事に成功するだらうと云ふことは夢想出來ない。基督教或はその他の博愛的ラブは無抵

抗に於て試みられる。模範が支配者や、暴君や、モツプの心を變化するだらうと云ふのは夢である。若し最も極端な自已讓與が失敗するとすれば、如何にして基督教的愛と世俗的訓戒の混合とが成功し得よう？之は少なくとも放棄されなければならない。基督とトルストイの政略がやがて吟味され得る。しかしトルストイの信仰は現在の試驗や失敗を以ては滿足せしめられない。彼はこれがなされなければならないからと主張する人の昏迷を有してゐる。『自分はこれをかうしたい』と考へるエゴイストはなほそれが或信仰や服從の事實によつて成就されるものではなく、同時に無抵抗の上に不意打を食はさうとして覗つてゐる者があると云ふことをも認める知覺を有してゐる。我々はいつでも我々と一緒に多くのファラオ(Pharaohs)を持つてゐる。

この著しく卓越した書中の數節は著者が如何に同情に充ちた人間であるかを示してゐる。我々は彼が悠然として發表した意見や情操、道德的義務の觀念を迷信の最後の形式として侮蔑する彼の態度を反省する時に、我々は義務と云ふ感傷的な空想の全滅が最も純潔な寛大に對する神經的エネルギイの幾分を解放し、よりよき分別を以つて價値ある物を撰擇すべき智力を淨化するものであると云ふ考へを保證され得ないであらうか？

J・L・WALKER

萬物は己にとつて無だ

全體己の世話のやけないものと云つたらなんだらう！、先づ第一に「善のため」、それから「神のため」、人類のため、眞理の、自由の、人道の、正義の、それから己の人民、己の王樣、己の國のため、おしまいには心のためと云ふことまで、そしてその他、有象無象のため、己の世話のやけないのはただ己のためばかりだ、『自分のことばかり考へる利己主義者には恥あれよ！』か。

そんなら己達は見てみよう、どんな風にかれ等はかれ等のためを取り扱つてゐるか——そのかれ等の爲めに己達が働き、身を捧げ、熱心にならなければならないかれ等が。

君達は神樣に就て澤山深い報告を與へてくれた。そして數千年來、『神格のもろ〳〵の深さを探求した』、そしてその核心を見屆けた、だから君達は勿論どんな風に神樣お自身が『神のため』にうき身をやつしておいでになるかと云ふことをよく御存知な筈だ。その神樣のために盡せと己達は云はれてゐるのだ。そして君達はまた神樣のやつてゐらつしやることを隱しはしない。さて、全

體、神樣のためとはなんだ？一體、神樣は己達の要求するやうな眞理と愛のためだなんて見當ちがひなためを自分のためにしておいでなさるだらうか？　この誤解には、君達もかなり恐れることと思ふ、それから君達は神樣のためと云ふのは、實は眞理と愛のためだが、このためはなにも神樣にとつて見當ちがひと云ふ譯ではない、なぜなら、神樣御自身が眞理と愛でゐらせられるからと云ふやうなことを敎へてくれる。それなら、神樣も己達のやうな蟲ケラ同然、自分のためだと云つて、他のためによけいな無駄骨を折つてゐらつしやるわけだ――とかう云ふ風に云へば君達はさぞ吃驚することであらう。『若し神樣御自分が、眞理でなければ眞理のために御盡しになるやうなことがあるでせうか？』神樣は勿論、御自分のため許りに御盡しになる。なぜなら、神樣は全ての全てでゐらつしやる、それだから、全ては神樣のためなのです！　けれど、私どもは全ての全てではありません、そして私どものためはみんな小さくて、つまりません、ですから、私どもは『より高いために仕へなければ』なりません――なる程わかつた。神樣は自分の世話ばかりやく。自分のことばかりに忙がしい。自分のことばかり考へてゐる。それから、自分ばかりを眼中に置く！　神樣の御機嫌にかなわない奴こそいい面の皮だ！　神樣は御自分より高いなにものにも仕へない、ただ自分ばかりを滿足させる。して見ると神のためと云ふのは如何にも純自我

的だ。

それから、己達がためにしなければならない人類はどうだ？　人類はなんのために盡してゐるか、自分より高いもののために盡してゐるだらうか？　どうして、人類はただ自分ばかり眺めてゐる。人類はただ人類の利益を助長する。人類がそれ自身のためだ。人類は發展するかも知れない。國民と個人をさんざんそのために疲勞させて、用のすんだ揚句は御禮だと云つて歴史の糞溜の中へかれ等を投り込む。人類のためは——純自我的ぢやないだらうか？

己はもう己達の上にためを投げつけて己達のではなく、自分の蟲の好いやうにくにするやうな奴を一々省みる必要はない。その他のものにしろ、まあ君達自分で見て見給へ。眞理にしろ、自由にしろ、人道にしろ、正義にしろ君達が熱心になつてそれ等に仕へると云ふこと以外になにを求めるだらう？　なにしろ、傍から熱心な服從を受けてゐる間が、かれ等の全盛時代なのだ。まづ獻身的な愛國者に保護されてゐる國民を見給へ。愛國者等はみんな血なま臭い戰場で死ななければ、飢餓と缺乏の戰さで倒れる。國民はなんで、そんなことにかまつてゐるものか？　かれ等の死骸の肥料で國民の『花が咲く！』個人は『國民の偉大なため』死んだ。そして、國民は感謝の言葉を送つて——利益を受ける。己はそれを自我主義の御禮の仕方と呼ぶ。

× That it may develop, it causes nations and individuals to wear out in its service, and, when . . .

それから、自分の人民をいかにも可愛がつて世話をやいてゐるあの土耳古帝(サルタン)を見給へ。彼は如何にも無我それ自身のやうぢやないか、そして始終人民のために自分を犧牲にしてゐるぢやないか？　如何にも、『彼の人民』のために。まあ、やつて見給へ。彼のものぢやなく、自分のものとして君を示して見給へ、彼のエゴイズムを脫する代りに、君は一寸牢屋へ旅行をするであらう。土耳古帝(サルタン)は自分以外の何物のためにも盡さなかつた。彼は彼自身にとつて全ての全てだ。彼は自身にとてて唯だ一つである。そして、『彼の人民』の一人に敢へてならないやうな奴はどんな者でも許しはすまい。

そして、君はこれ等の立派な例から、自我主義者が、一番得だと云ふことを學ばないであらうか？　自分は自分としてそれから得るところがあつた。そして、無我でそれ等のエライ自我主義者等に仕へる代りに、寧ろ、自分自身がエゴイストにならうと思ふ。

神と人類は自分達以外の何物のためにも世話をやかなかつた。だから己も同じように己のために己の世話をやかう。己だつて神と同然他の者からはなんでもない。己は己の全てで、たッた一つだ。

若し神が、若し人類が、君の確言するやうに、自分に對して全ての全てである素質を充分內に

持つてゐるとすれば、己は未だその素質に於て缺けたところがあると感じて自分の『空虚』に就てなんの不平をもこぼすまい。だが己は創造的虚無だ。その無から己自身は創造者として萬物を創造する。

だから、まつたく己に關係のない全ての關係は向ふに走るがいい！　君は少なくとも『善のため』が自分のためでなければならないやうに考へてゐるであらう。全體、善とはなんだ？　惡とはなんだ?、兩方とも己には無意味だ。

神のことは神のこと、人類のことは人間のこと。己のは神のことでも人間のことでもなんでもない。況して、眞理、善、正義、自由のことではなほない。だからまつたく己のことだ、そして一般のものぢやない、けれど、無二(einzig)だ、己が無二だから。

己以外のことは己にとつて全く無だ！

（註）萬物は己にとつて無である。これはゲエテの "Vanitas! Vanitatum Vanitas!" の最初の行、"Ich hab' Mein' Sach' auf Nichts gestellt" の意譯である。即ちこれを直譯すれば、「自分は自分の事柄を何物の上にも置かなかつた」となる。

工人間篇

人間は人間にとつて至上の存在だ、とフイエルバハが云ふ。

人間がたつた今發見された、とプルノオバウエルが云ふ。

それなら、我々はこの至上の存在とこの新發見に對して、もつと注目して見ようではないか。

I　人生

人間がこの世の光りを瞥見する瞬間から彼は彼自身を發見しようとする。そして彼が自分以外のものと一緒に雜色混合の中に動搖してゐる紛亂から彼自身を把持しようとする。

しかし、少年と接觸する全ての物もその代り、少年の攻擊に對してそれ自からを防禦し、そしてそれ自身を確く固守する。

それで、各自がそれ自身を守ると同時に、他のものと絶へず衝突するやうになるから、自己肯定の闘爭が避けがたくなるである。

勝つか負けるかこの二つに一つの間に、闘爭の運命が波動するのである。勝つた者が殿様になり、負けた者が臣下になるのだ。前者が主權を握り、「至上權」を振ひ、後者が恐怖と服從に於て「臣下の義務」を盡す　である。

しかし兩者は敵になる。そして常に機會を待ち望んでゐる。かれ等は相互の弱點を覗つてゐる——子供等は兩親の弱點を、そして兩親は子供の弱點を、(たとへばかれ等の恐怖を)。鞭が人間

を征服するかである。

少年時代に於ては、解放が全ての物の底に徹しようとする傾向を取る。即ち物の「背後」にあるものを把まふとする。だから我々は何人の弱點をも偵察する。その確かりした本能を子供等が持つてゐる事はよく知られてゐる。だから我々は物を破碎することを好む。隱された隅々を隈なく探し、道のあちらこちらに蓋はれてゐるものを精察し、出來る丈け全ての物に對して色々なことを試みるのである。我々が一度物の背後にあるものを把む時に、我々は自分の安全を覺るのである。たとへばその鞭が我々の執拗に對してあまり薄弱である事實を捉へ得た時に、我々は最早それを恐れはしない、そして「それを乘り越へて」しまふのである。

その鞭の背後に、それよりも偉きい我々の執拗、我々の不屈な勇氣が立つのである。我々は次第にかの不可思議な恐怖を感じてゐた鞭の威力、父の嚴酷な容貌など云ふ我々にとつて神秘幻怪なすべての物の背後に到達する。そして全ての物の背後に、我々は我々の沈着、勇氣、我々の反抗力、我々の優勢、我々の征服力等を發見するのである。之まで我々に恐怖と服從とを鼓吹したものの前に、吾々は最早オヅ〳〵と退かない、吾々は勇氣を起す、全ての物の裏面に吾々は吾々の勇氣と優越とを發見する。兩親及び强權者の鋭どい命令の背後に、結局、吾々の勇氣ある撰擇

若しくは吾々、機智に優れた敏捷が立つのである。そして吾々が自分自身を感ずるに從つて、これ迄不可抗に思はれたものが次第に小さく見えて來る。そして吾々の巧妙、敏捷、勇氣、執拗とはなんであるか？心(Geist)以外の何物であらう！

永い間、吾々は後年に至つて吾々を消耗し盡す闘爭を免かれてゐる――それは理性に對する戰である。少年期の最も美しい部分は理性と戰ふ必要なくして過ぎる。吾々はそれに對してまつたく無頓着である。何等の干渉をもしない。吾々は理性を許容しないのである。吾々は論證によつて何物にも說きつけられない。そして立派な議論、法則等に對して聾である。しかしながら、甘言や懲罰に對して抵抗することは吾々にとつて困難なのである。

理性とこの嚴酷な生きるか死ぬかの戰ひが後に入りこんで、新生面を開くのである。少年期に於て我々は我々の頭腦を多く惱ますことなくして疾走する。

心とは最初の自己發見の名稱であり、最初に神聖な物、即ち神秘な物、幽靈、「天上の諸力」等を不神聖にするものの名稱である。我々の青春の新鮮な感情、この自己の感情が今や何物にも服從しない。世界が不信用になる。なぜなら吾々がそれ以上になり、我々が心であるからである。

今や初めて我々はこれ迄我々が世界を少しも理智的に眺めず、單にそれを見詰めてゐたと云ふ

ことが解るのである。

我々は我々の力の初歩を自然力に對して振ふやうになる。我々は兩親を一個の自然力と見做してかれ等に服從する。後に我々は云ふ、父母は見捨てられなければならない。凡ての自然力は粉碎される者と見做されなければならない。彼等は征服せらるべきであると。合理的な、即ち「智的」な人間にとつて、一個の自然力と見做される時に家族は存在の理由を失ふのである。兩親と兄弟等に對する反逆が現はれ初める。しかし若しこれ等のものが智的な、理性的な力として「再生」するなら、それは最早以前の如きものではなくなるのである。

そして兩親ばかりではなく、一般の人間が青年によつて征服される。かれ等は青年にとつて何等の障害にもならない、そして無視されてしまふ。なぜなら今、青年は、人は人間より寧ろ神に服從しなければならないと云ふ。

この高い見地からすべて「地上の」ものが輕蔑すべき遠方に退く。なぜなら標準が天上のものになるからである。

態度が今やまつたく轉倒した。そして未だ心として自覺しなかつた少年が無心の學問で成長したにひきかへて、青年は智力的な地位を占めるのである。青年は物を捉へようとはしない、(たと

へば彼は自分の頭に歴史の data を得ようとはしない)けれど物の中に隱れてゐる思想、たとへば歴史の精神を捉えようとする。しかるに少年は勿論その連絡を理解はするが、その觀念や精神を理解はしない。だから彼は a priori (先天的に)、理論的に、即ち觀念を求めずに、なんでも學ぶことが出來るものをつなぎ合す。

少年期に於て人は世界の諸法則の抵抗に打ち勝たなければならないやうに、今では彼が志す全ての物の中に、彼は心、理性、彼自身の良心などの故障に出遇ふのである。「それは不合理である非基督教的だ、非愛國的だ」とこのやうに良心が吾々に叫ぶ。そして我々を威嚇する。人間が隱れてゐるものを眺めてゐる間は、恐ろしいのは復讐のエウメニデス女神でも、ポセイドンの怒りでも、神のそれでも、又は父の罰鞭でもない、だが――良心である。

我々は今「我々の思想を追つ馳ける」、そして我々が以前兩親や人間の命令に從つたやうに思想の命令に從ふ。我々の行爲の過程は少年期に於て我々の兩親の命令によつて決定せられたやうに我々の思想(觀念、概念、信仰)によつて決定せられる。

すべてそれ等に對して、我々は少年の時、既に考へてゐたのである、ただ我々の思想に肉がついてゐなかつたのみである。それは抽象で、絶對で、思想以外の何物でもなかつた。それ自身

天で、純粹な思想、論理的思想の世界であつた。

しかるに、それ等は我々が或物に就て抱いた單なる思想であつた。我々はその物に就てかうだとかああだとか考へたのである。であるから我々は「神が今我々の見るやうな世界を造つた」と云ふ思想を持つかも知れない、しかし我々は「神格それ自からの深さ」を考へたり探つたりはしない我々は又「それはそのことに就ては眞理である」と考へるかも知れない、しかし眞理それ自身に就ては何も考へもしなければ、一文章の中に「神は眞理である」と云ふことを結び付けもしないのである。「眞理である神格の深さ」に我々は觸れはしないのである。「眞理とは何ぞや？」と云ふやうな純論理的な、即ち神學的疑問の上にピラトは足を止めてはゐない。と云つて勿論彼はある特殊な場合に於て「その物の内にはどんな眞理があるか？」即ちその物は眞であるかと云ふことを確かめるに躊躇しない。

或物に結び付けられた思想は未だ純粹な思想（Nichts als (Gedanke)）絶對な思想とは云はれない純粹な思想を光明に齎し、その干與者たることは、青年の悅びとするところである。眞理、自由、人道、人間等の如き思想界に於けるあらゆる光明の形象は若々しい靈魂を照し、そして激勵する。

しかしながら、精神が本質的なものとして承認せられる時、更にその精神の貧富が問題になる。だから人は精神上の豊富を求めるやうになる。精神は自己の帝國を建設すべく次第に膨脹せんとする――それはたつた今征服されたこの世の帝國ではない、かくの如くして精神はそれ自らにとつて全ての全てにならうとする。即ち自分は精神ではあるが、まだ完全な精神ではない、だから先づ完全な精神を求めなければならないと云ふやうになる。

しかしそれにも拘らず、たつた今精神として自分自身を發見した自分はスグ又自分のではなく天上のものとして完全な精神の前に叩頭して自己を失ひ、自分の空虚を感ずるやうになるのである。

精神は確かに萬物の本質的要點である。しかしそれでは全ての精神は「正しい」精神であらうか？ 精神の理想とするところは正しい眞の精神、即ち「聖靈」である。その精神は自分のでもなく君のでもない、だがそれは一個の理想、天上の精神で、「神」なのである。「神は精神である」。そしてこの高きに在す「天の父は彼に祈るそれ等の人々にその精神を與へるのである」。

壯年は彼がこの世界をあるがままに見ると云ふ點で青年から區別される。彼は、青年のやうに至る處に於てその誤謬を發見し、彼の理想に從つてそれを改善しやうとは欲しない。人間はこの

世と交渉するには自己の理想によらず、自己の利害觀念に從はなければならないと云ふ見解が確立される。

人間が彼自身を精神としてのみ知り、彼の存在の全ての價値を精神である點で成立するものと感じてゐる間、(靑年にとつて彼の生命、その「肉體生活」を最も愚劣な名譽と云ふやうな空な物の爲めに與へることは容易である)そしてその人の持つてゐるものが單に思想のみであり、彼が活動の範圍を發見した時、いつかそれを實現しようとする觀念ばかりである間は、その人は單に實行されない觀念、或は思想と云ふ理想ばかりを持つてゐるのである。

人が彼の具體的自己を以て戀に落ち、血あり肉ある生ける人間として彼自身のうちに快樂を取るやうになる迄は、個人的な或は自我的な利害觀念を持たない。我々が人間にかくの如きものを發見するのは壯年に於てのみである。それは單に我々の精神の利益のみではなく、全體の滿足、全人(ganzen Kerls)の滿足、利己的のインテレッセである。試みに壯年と靑年とを較べて見よ、そして壯年が一層頑固に、より少なく寛大に、利己的に見えないであらうかを見よ。だから壯年は靑年より惡いのか？　否と、汝は云ふ。彼は唯だ一層確かになつたのだ、若しくは君がまたさう云ふやうに一層「實利的」になつたのである。だが主要な點は壯年が靑年よりも一層彼自身を中

心とすることである。青年は神、祖國など云ふ外物に昏惑されるのである。だから壯年は第二の自己發見を示す。青年は精神として彼自身を發見して、再び一般の精神、完全な、神聖な精神、人間、人類——即ち、すべての理想中に彼自身を失つてしまつたのであるしかし壯年は彼自身を具體的精神として發見するのである。

少年は單に非智的なインテレツセ(即ち思想や觀念を缺いだインテレツセ)を持つてゐた、青年は單に智的なインテレツセを持つてゐた。壯年は具體的な、個人的な、自我的なインテレツセを持つ。

「若し少年がそれ自身を充すことが出來る或目的物を持たないなら、彼は倦怠を感じる。なぜなら少年は未だ如何にそれ自身を以つてそれ自身を占領すべきかを知らないからである。然るに青年は、目的物を傍に投げ棄てる、なぜなら思想が目的物の代りに現はれたからである。彼は彼の思想、彼の夢想を以て彼自身を充たす、智的に彼自身を占領する、即ち「彼の心が占められてゐる」のである。

青年は智的でない全ての物を「外面的なもの」と云ふ侮蔑的な名稱の下に總括する。それにも拘らず、若し青年が最もツマラナイ外面的なもの(例へば學生倶樂部の習慣その他の諸形式)に拘泥

するなら、それは彼がそれ等の物の中に精神を發見するからである、そしてその時それ等の物は青年にとつて象徴の役目を務めるのである。

自分が全ての物の裏面に自己を發見し、そしてそれを心として發見するやうに後に至つて思想の背後に自己を發見しなければならない、——即ち、萬想の創造者若しくは所有者としてである、精神時代に於て、思想は自分の頭をそれ等が乗り越える迄生長した、しかしその思想と云ふも元來その頭から生れた子供なのである。それ等が自分の周圍にさまようて熱病の幻影のやうに自分を痙攣さした。——恐しい力である。

その等の思想はかれ等自身の爲めに具體的になり、神、皇帝、羅馬法皇、祖國など云ふやうな幽靈になつた。若し自分がかれ等の具體化を破壞するなら、その時自分はかれ等を自分のうちに取り返して、「自分のみが具體的だ」と云ふことが出來るのである。そして今自分は世界をそのあるがままに自分に取る、自分のものとして、自分の所有として。自分は全てのものを自分に歸する。

若し自分が一個の精神として、最も深い侮蔑を以つてこの世界を投げ棄てるなら、自分はまた所有者として種々なる精神や觀念をかれ等の「空虚(アイテルカイト)」に投げ棄てる。かれ等は最早自分の上に何

等の力をも持たない、「地上の力」が精神に對して何等の力をも持たないやうに。

少年はこの世の物に甘んじて、彼が少しづつその物の背後にあるものを把むことに成功した迄現實（リアリステツシユ）的であつた。青年はさまぐ〜の思想に鼓吹されて、彼の道を進み、彼が壯年になり、自我的な人間になる迄は理想（イヂリアリステツシニ）的であつた。壯年は彼の意の儘に從て悉ゆる物と思想とに交渉する。そして彼の個人的利害を全ての物以上に置く。最後に老年は？自分が老人となつた時、それに就て話す充分な時がまだあることであらう。

II　舊時代と新時代の人々

我々の各自がどうして彼自身を發展さしたか、何に向つて努力したか、何に到達したか、何を失つたか、彼は以前にどんな目的を追求し、そして彼の心は今どんな計畫と慾望の上に置かれてゐるか、彼の見解がどんな變化を經驗したか、彼の主義がどんな混亂を經驗したか、——要するに、彼が今日、昨日若くば數年前の彼と異つたどんなものになつたか、——これを再び彼が多少の容易さを以て彼の記憶から引張り出して來る、そして彼は彼の目前に他人の生活の開展を眺める時、彼自身のうちにどんな變化が起つたかを特別なキビキビシサを以つて感じるのだ。だから我々は我々の祖先等がかれ等自身を忙がしくしたさまざまの活動を眺めやうではないか。

A　古代人

習慣が一度我々の基督敎以前の祖先等に對して『古代人』の名稱を與へたのだから、我々はかれ

等に逆らつてそれを投げ棄てるやうなことはすまい、我々の經驗ある人々と比較して、かれ等は將に子供等と呼ばるべきである、しかし我々は寧ろ我々の善良な祖先としてかれ等を尊敬することを續けよう。しかしどうしてかれ等が舊くなつたか、そして誰れがその新を口實としてかれ等を押し除けたか？

我々は、勿論、革命的革新者と無禮な後繼者とを知つてゐる、彼は彼の日曜日を聖祝する爲めに祖先等の安息日の神聖をさへ取り去つた、そして彼自身を以つて新年代學を始めるべく時の過程を妨げた。我々は彼を知つてゐる、そしてそれが基督教者であることを知つてゐる。しかし彼は永久に若々しいであらうか、そして彼は今日もなほ新人であらうか、或は彼も亦彼が『古代人』に取つて代つたやうに、取つて代られるであらうか？

祖先等は疑もなくかれ等自身かれ等を葬つた青年を生んだに相違ない。それなら我々はこの生殖の行爲を覗いて見ようではないか。

『古代人に對してこの世界は一個の眞理であつた、』とフォイエルバハ（Feuerbach）が云つてゐる、しかし彼は『眞理の背後にある虛僞を探さうと努めた、そして遂にかれ等が實際探しあてたと云ふ重要な附け加へをすることを忘れてゐる。フォイエルバハのそれ等の言葉によつて意味され

たことは若しそれが『この世の移りやすく空である』と云ふ基督教者の御題目の傍に置かれるなら容易に認められるであらう。なぜなら基督教者が決してその神聖な言葉の空なことに就て彼自身を信服させることは出來ないが、それを永久な動かすべからざる眞理であると信じ、その深さが探求されればされる程、その眞理は愈々華々しき光明と勝利に來らねばならないと信じてゐるやうに、古代人は古代人でこの世界と世俗の諸關係(E、G、血族の自然結合)が眞理であつて、その前にかれ等の無力な『自分』が屈服しなければならないと云ふ感情のうちに生活した。古代人が最高の價値を置いたそのものが無價値なものとして基督教者等によつて蹴飛ばされる、そしてかれ等が眞理として認めたものを、これ等の人々が怠惰な虚僞として烙印する。祖國の高い意義が消え失せる、そして基督教者は『地上の一異邦人』(ヘブライ書、十一章、十三章)として彼れ自身を考へなければならない。ソフォクレス』(Sophocles)の Antigone のやうな藝術品が飛び出した葬儀の神聖が賤劣なものとして表指されてゐる(『死者をしてかれ等の死者を葬らしめよ』)。家族羈絆の破りがたき眞理は人間が容易に脱しきれない虚僞として表はされてゐる、(馬可傳十章、二十九節)そしてすべてに於てさうである。

若し我々が今、反對なものが二方面に眞理として現はれたと云ふことを見るなら、乃ち一方に

は自然なものが、他方には智的なものが、一方には地上のものやその關係が、他方には天上のもの(神聖な祖國、『天上のエルサレム』等)が眞理と見える時、なほそこにどうして新時代とその拒むべからざる相反が古代から出現することを得たかと云ふことを考へるべき餘地がある。しかし古代人等かれ等自身はかれ等の眞理を虚僞とする方に向つて努めて來たのだ。

我々をして直に古代の人の最も華々しい時代、ペリクレスの世紀の眞中に飛びこましめよ。當時は詭辯學者流の教養が流行しつつあつた、そして希臘はこれ迄彼女にとつて恐しく贄實な事柄であつたものを遊戯化してしまつた。

祖先等は動かすべからざる存在の力によつてあまりに永く奴隷にされてゐた、だから後世の子孫等は苦い經驗によつてかれ等自身を感ずることを學ばなければならなかつた。故に詭辯學者(ソフイスト)等は、勇氣ある無禮を以つて、『質朴なる勿れ』と云ふ安心させる言葉を發言する、そして『すべての物に對して、汝の理解、汝の機智、汝の心を用ひよ、人間がこの世の中を最もよく渡り、彼自身の爲めに最上な運と、最も愉快な生活を備へ得るのは善良な、そしてよく習練された理解を持つことによつてである。』と云ふ合理的な教義をまき散らす。かくしてかれ等は心のうちにこの世に對する人間の眞の武器を認める。これはなぜかれ等が辯證的技能、言葉の驅使、論議の術等に

重きを置くかと云ふ理由である。かれ等は心がすべてのものに對して用ゐられなければならないと公言する。しかしかれ等はなほ精神の神聖からは遙かに離れてゐる。なぜならかれ等にとつてそれは、奸詐と反抗が同一の目的に向つて子供等に役に立つやうに、一個の手段であり、武器である。かれ等の心は賄賂を以つて誘ひがたき理解である。

今日我々はそれを一方に偏した理解の教養と呼び、そして『汝の理解を養ふばかりでなく、また特に汝の心にも培かへ』と云ふ警告を附け加へるであらう。ソクラテスも同一のことをやつたなぜなら、若し心がその自然の衝動から自由にならず、最も偶然な内容を以つて充されたままであり、そして全然物質の力のうちにある批判されない熱望（Begehrlichkeit）I、E、最も種々なる物慾(Gelüste)の器以外の何物でもないとしたら、――その時自由な理解が『惡心』に仕へなければならず、そして惡心の欲するあらゆる物を辯明することは避けがたいことであつた。

だからソクラテスは、人間が彼の理解をあらゆるものに使用するだけでは未だ十分ではない、何の爲めにそれを働かすかと云ふことが問題だと云つてゐる。我々が今、人は『善の爲め』に仕へなければならない、と云ふとする。しかし善の爲めに仕へることは――道徳的だと云ふことである。それでソクラテスは倫理學の開祖である。

詭辯派流の教理の主義はたしかに自己の慾望の最も盲目なそして最も從屬的な奴隷でも一個の立派なソフイストになり、そして彼の粗雜な心の爲めにあらゆるものを手入れして說明することが出來るかも知れないと云ふ可能性に導かれなければならない。その物の爲めに『善い理由』が發見されないかも知れず、或は萬難を排して防ぐことが出來ないかも知れないと云ふやうなものが果してあり得るであらうか？

だからソクラテスは云ふ、『若し汝の敏捷性が重んぜられたいなら、「純な心情」を持たなければいけない。』この點に於いて心情の希臘的解放の第二期が始まる、心情の純粹の時期である。第一期は理解の萬能を宣言する詭辯學者等によつて終りを告げられた。しかしその心情は世俗的の心として殘つた。常に世俗的慾望に影響せられるこの世の奴僕として殘つた。この粗野な心情が今から修養されなければならなかつた――心情修養の時代。(die Periode der Herzensreinheit) しかしその心情はどうして修養されるか？ この心の一方面の理解が到達したもの、――乃ち、あらゆる干渉と自由に戯れる能力、――をまたその心情が期待してゐる。世俗的なすべてのものはその前に侮辱すべきものとして來なければならない、だから結局家族、國民、祖國等が心情の爲めに、乃ち、祝福の、心情の祝福の爲めに見捨てられる。

日常の經驗は心情が數年前にその爲に鼓動することを止めた或物を理解が棄てたかも知れないと云ふ事實を確かめる。その樣に詭辯者流の理解も亦有力な古代の諸權力を支配するやうになつた、その結果それ等の力は今や、嘗てそれ等が煩はされずに住んでゐた心情から追放の必要に迫られ、遂に人間のうちに何等の交渉をも持つことが出來ないやうになつた。

この戰ひはソクラテスによつて開かれた、そしてその戰ひは舊世界の消滅する日迄は平和には終らない。

心情の吟味がソクラテスと共にその出發を始める、そして心情のあらゆる內容が篩にかけられる。それ等の最後のそして最も極端な闘爭に於いて、古代人等はあらゆる內容をその心情から投げ棄てた、そして最早何物に向つてもそれを鼓動せしめなかつた、これが懷疑派の仕業であつた。心情の同一の淨化が今懷疑時代に行はれた。理解が詭辯時代にその確立に成功したやうに。詭辯的修養は人間の理解が最早何物の前にも靜止しないと云ふ思想を破り、そして懷疑的修養は人間の心情が最早何物にも動かされないと云ふ思想を破つた。

人間がこの世の諸運動に捲きこまれ、そして世の中に對する諸關係によつて煩はされてゐる間は、――そして彼は古代の終り迄さうである、なぜなら彼の心情がなほ世俗から獨立する爲めに

戰はなければならないから、――その間彼はまだ精神ではない。なぜなら精神は肉體なしである。そして世の中と具體とには何等の關係をも持つてゐない。精神にとつてはこの世も亦自然の羈絆も存在しない、存在するのは只精神的なものと精神的な羈絆ばかりだ。だから人は先づ、懷疑的修養が彼に示すやうにそのやうに完全に無關心に向ふ見ずに、まつたく關係なしに、ならなければならない、――世界が破滅してもビクともしない程世の中に對してまつたく無頓着にならなければならない、――彼が自分を無世界、卽ち精神として感ずることが出來る前に。そして人間が何等の關係なく、世界なき、精神としての一存在として彼自身を知ると云ふのは古代人等の巨大な仕事の結果である。

あらゆる世俗の煩ひが彼を去つた後、今では彼は唯だ彼自身に對して全べての全べてである、彼は彼自身の爲めにのみ在る、乃ち彼は精神の爲めの精神である、或は、もつと簡單な言葉で云へば、彼は唯だ精神的のことにのみ注意する。

基督教の蛇の智慧と鳩の無邪氣に於て心の古代的解放の二方面――理智と情――がさやうに完成されてゐる、で、それ等が再び若く新しく見える、そしてどちらも最早世俗と自然によつて自からを昏惑せしめない。

かくして古代人は精神に登つた。そして精神的にならうと努力した。しかし精神として活動しようと欲する人間は彼が以前自から從事することが出來たものとは全く異つた仕事に牽引される。その仕事は眞に精神に對して有すべきものを與へるので單なる感覺や敏感（Scharfinn）に對してではない、そしてその精神はひたすら物の支配者にならうと努力する。精神はただ精神のことにのみそれ自身を急がしくする。そしてすべての物に『心の足跡』を探ねる。信ずる精神にとつては『萬物が神から來る』そしてそれがこの起原を示現する範圍に於てのみ彼を慰める。哲學的精神にとつては萬物が理性のスタンプを以つて現はれる、そして彼がそのうちに理性i、e、精神的滿足を發見し得る範圍内に於てのみ彼に興味を與へる。

それなら精神は單に精神的でないものと、乃ち物質と絶對に干渉しないと云ふのではなく、ただ物質の背後にそして以上に存在する本質、思想とのみ干渉するのである、——古代人はその努力をしながつたのではない、なぜならかれ等は未だそれを持つてゐなかつたのだ。否、かれ等は單にそれに向つて奮闘し慾求する點に到達した、そしてだからかれ等のあまりに有力な敵である官能の世界に對してそれを鋭くした（しかし何がかれ等にとつて感覺的でないものがあらう、なぜならエホバ或は異邦人の神々は未だ『神は精神である』と云ふ概念から遙かに離れてゐた、その

時は『天上の父の國』がまだ感覺的の場所に踏み入つてゐなかつた）――かれ等は官能の世界に對してかれ等の感覺、かれ等の敏感性を鋭くした。今日に到る迄古代の早熟な子供等である猶太人はそれ以上に進まなかつた。そして容易に物質の支配者になり、かれ等を强制的に服從させるかれ等・深慮と理解のあらゆる敏活と力を以てしても、かれ等は物質を無視する精神を發見することが出來ない。

基督教者は精神的利害觀念を有する、なぜなら彼は精神的人間として彼自身を許してゐるから猶太人はこれ等の觀念をその純粹に於て理解することさへもしない、なぜなら彼は物質を無價値にすることを自から許さない。彼は純粹の精神性に到達しない、たとへば基督教徒の信仰に於て宗教的に發表され、單に（仕事なしに）ジャスティフハイする精神性に。猶太人の非精神性はかれ等を永久に基督教徒から隔離する。なぜなら精神的人間は非精神的人間に對して不可解である、非精神的人間が精神的人間に對して輕侮すべきものであるやうに。しかし猶太人はただ『この世の精神』のみを持つてゐる。

古代の鋭敏性（Scharfsinn）と深遠性（Tiefsinn）は基督教徒の精神と精神性から地が天と離れてゐるやうに遙か離れてゐる。

自由な精神として自己を感じてゐる人はこの世の物々によつて壓服されたり、煩はされたりはしない、なぜなら彼はそれ等を無視してゐるから。若し人がなほそれ等の負擔を感じてゐるとすれば、彼はそれ等に重きを附すべく十分小心でなければならない、――たとへば人が彼の『いとしい生活』(lieb Leben)に拘つてゐる時は、明らかにその一例である。すべての物が一個の自由精神として彼自身を知り導くことに集注する人は一方彼が如何に貧しく供給されるかは少しも注意しない、そしてまつたく自由な或は樂しい生活をする爲めに如何に彼の準備をしなければならないかを少しも反省しない。彼は物質の上に關する生活の不便によつて煩はされない。なぜなら彼は唯だ精神的にそして精神的食物に生きるから、しかしこれ以外では獸のやうに殆んどなんにも知らずに色々な物を呑み下す、そして彼の秣が盡きる時、確かに、肉體的に死ぬ、しかし精神として不朽であることを自から知つてゐる、そして一種の渇仰若しくは思想を以つて彼の眼を閉ぢる。彼の生涯は精神的なことを職業とする、――思索することである。自餘は彼を悩まさない。彼をして勝手に彼が出來、そして撰む精神的なことに自から多忙ならしめよ、――信仰に、黙想に、或は哲學的認識に、――彼のすることは常に思索することである。そしてだからこれが遂にまつたく明らかになつたデカルト(Descartes)は『自分が考へる、乃ち自分が存在する』。と云ふ命

題を置くことが出來た。これは自分の思索が自分の存在若しくは自分の生活だと云ふことだ。自分が精神的に生きる時にのみ自分は生活する。精神としてのみ自分は眞に存在する、或は自分はどつからどこまで精神で精神以外の何物でもないと云ふのだ。自分の影を失くした不幸なピイタア・シユレミル(Peter Schlemihl)は精神になつたこの男の肖像である。なぜなら精神のからだには影がない。——これに反して、古代人はどんなにちがつてゐたらう！かれ等はそれでも力それ自身を承認しなかりと男らしくかれ等の態度を持したかも知れないが、かれ等は物の力に對して確けれぱならない、そして出來る丈それに對してかれ等の生活を保護すると云ふ以上には進まなかつた。唯だ後になつてかれ等はかれ等の『眞の生活』がこの世の物と戰つてかれ等が送つたところのものではなかつたと知つた。そしてこれ等の物から『ふり向いた』。そしてかれ等がこれを知つた時、かれ等が基督教徒、卽ち i、e、近代人、又は古代人の革新者になつた。しかし物から轉じた生活、乃ち精神生活は最早自然から何等の滋養をも取らない、が『思想にのみ生きてゐる』、そしてだから最早『生活』ではない、しかし——考へることだ。

だがそれかと云つて古代人に思想がなかつたと想像されてはならない、丁度最も精神的の人間には恰かも生活がないかのやうに思はれてはならないやうに。寧ろかれ等はすべての物、世界、

人間、神々等に就てかれ等の思想を持つてゐた。そしてすべてこれ等をかれ等の意識に齎すことに鋭敏に活潑にかれ等自身を示した。しかしかれ等はあらゆる物に就て考へ、そして『かれ等の思想を以つてかれ等自身を苦しめた』けれど、思想そのものを知らなかつた。かれ等の位置を『私の思想はおまへ達の思想ではない。天が地より高いやうに、私の思想はおまへ達の思想より高い』と云ふ基督教者の言葉と比較して、そして我々の幼稚な思想に就て上に云はれたことを思ひ出して見よ。

それなら、古代は何を求めてゐるか？眞の生活の享樂！君等はその根底に『眞の生活』(wahre Leben) と同一なものを發見するであらう。

希臘詩人シモニデス (Simonides) は歌ふ。『健康は死すべき人間にとつて最も高貴な善である、これに次ぐべきは美である、第三は詐僞によらずして得られた富、第四は若き友達の仲間に交はる享樂である』これ等は悉く人生の善きものである、生の快樂である。シノペのディオゲネス (Diogenes Von Sinope) は出來る丈最も僅かな慾を持つことによつて發見した生の眞の享樂以外に果して何を求めてゐたらう？ 悉ゆる境遇の下にあつて爽快な氣持の中にそれを見出したアリスティパス (Aristppus) はそれ以外に何を求めたか？かれ等は快活な曇りなき生活勇氣と爽快な

求めてゐる。かれ等は『上機嫌たらん』ことを求めてゐるのだ。

ストイック派の人達は賢人を實現しようと欲する、實利的哲學を奉ずる人、如何に生活すべきかを知る人を、――つまり賢明な生活を實現しようとする。かれ等は世の中を侮蔑し、發展なく擴張なき生活に生き、世の中と親しき關係を有せず、e、i、孤獨な生活に、他人との生活ではなく、生活としての生活に生きる人を發見する。ストイックのみ生きる、その他のものは悉く彼の爲めに死んでゐる。これに反してエピキユラス派(快樂派)の人々は動的生活を要求する。

古代人は、かれ等が上機嫌たらんと欲すると同じく、よい生活、幸福(ewdeemonia)、最も種々な形式に於ける安穩を慾求する(猶太人は特に子供と財寶に惠まれた長生を欲する。)デモクリトス(Democritus)は――例へば――人間が『恐怖と激動なく滑らかに生きる』『靈魂の安寧』と云ふが如きものを稱贊する。

で、彼が考へることはこれによつて彼が最上に世を渡り、彼自身の爲めに最上の運を備へ、そして世界を最もよく渡つてゆくと云ふことである。しかし彼は世の中から脫却することが出來ないから、――そして實際出來はしないと云ふ譯は彼の全活動が世の中を脫却する、乃ち世の中を排斥すると云ふ努力にとられてしまふからだ(ではあるが排斥せられるものが依然として存在す

ることは必要である、でなければ最早排斥するものは存在しないだらう)、――彼は結局解放の極度に達する、そして唯だより少なく解放された者と程度に於て區別される。よし彼が地上の感覺を消滅して、遂にただ "Brahm" (梵) と云ふ單調な囁きを許す程度に達したとしても、到底本質的には肉慾的の人間と區別されることは出來ないであらう。

ストイックの態度や男らしい德でさへ結局、――人間は世の中に對して彼自身を主張し肯定しなければならない――と云ふ丈の程度に達するばかりである。そしてストイック派の倫理學(かれ等の唯一の學問、出來かれ等は精神に就ては何事も云ふことが出來なかつた、しかし世の中にして如何にそれが振舞ふべきかを示すことが出來た、そして自然(物理學)に就てはただこれ丈乃ち賢人は世の中に逆つて彼自身を主張しなければならないこと)は精神の教養ではない、しかし唯だ世の中を排斥し、世の中に逆つて自己肯定をする教養である。そしてこれは『生活の沈着と平靜』に於て成立する。そして最も明晰な羅馬人の德に於て。

羅馬人等(ホレイス Horac シセロ Cicero 等)も亦この實利哲學(Lebenweisheit)以上には行かなかつた。

エピユラス派の快樂(hedone)もストイックの教へると同一の實利哲學である、ただもつて胡

麻化しのある、欺僞的なものである。かれ等は單に世の中に對して他の態度を取ることを敎へる單に世の中に對して狡猾な態度をとることを忠告する。世の中は欺かれなければならない。なぜならそれは私の敵だから。

世の中との斷絶は懷疑派によつて完全に實行される。世の中と自分との關係はまつたく『無價値、無眞理』である、テイモン（Timon）は云ふ、『我々が世の中から受けるあらゆる思想、感情には眞理が含まれてゐない』『眞理とはなんだ？　とピラト（Pilate）が叫ぶ。ピロ（Pyrrho）の敎義によれば世の中は善でも惡でも、美でも醜でもなんでもない、しかしこれ等は自分がそれに與へる賓辭である。テイモンはかく云ふ、『ものそれ自身に於ては善も惡もない、しかし人間がただかうだとかああだとかこれに就て考へる。』世の中に相對しては唯だ ataraxia（不動）と aphasia（不言——或は、他の言葉で、孤立せる內部性）が殘される。世の中に『最早認識さるべき眞理』がない。物々はかれ等自身矛盾する。物に關する思想には差別がない（善も惡も悉く同一であるだから一人が善と呼ぶものは他は惡だと見る）。玆に『眞理』の認識が終りを告げる。そしてただ認識力のない人間、世の中に認識すべき何物をも見出さない人間のみが殘される、そしてこの人間がそこに在つても少しもそれに就て顧慮しない眞理の空虛な世界を見棄てる。

かくして古代は物の世界、世界の秩序、全體としての世界と共に終結する。しかし世界の秩序、或はこの世の物には單に自然が附屬するばかりでなく、人間が自然によつて置かれて彼自身を見るあらゆる關係、例へば、家族、社會、――約言すれば、所謂『自然の覊絆』が屬する。精神の世界と共に基督教がそれから始まる。今なほ武裝して世界に面する人は古代人、――異教徒（その階級に猶太人も亦、非基督教徒として、屬する）――である。自分の『心の樂しみ』自分の興味（インテレツセ）自分の同情、自分の――精神以外の何物によつても指導されない人間は近代人、基督教者である。

古代人が世界の征服に向つて働き、そして人間を他の物との關係の重い桎梏から解放することに努力した如く、遂にかれ等は又國家の滅亡とすべて個人的の物に重きを置くやうになつて來た。勿論社會、家族等は、自然關係として、自分の精神的自由を減少する厄介な障害である。

B　近代人

『若し誰れでもクリストのうちにゐるなら、彼は新しく造られたものである。舊いものは過ぎ去つた、見よ、すべてが新しくなるのである』（コリント後書、五章、十七節、）『古代人にとつて世

界が眞理であつた』、と上に云はれたやうに、我々は玆では『近代人にとつて精神が眞理であつた』と云はなければならない。しかし此處でも、彼處の如く、我々は『かれ等が眞理の背後にある虚僞を探さうと努めた、そして遂にかれ等が實際探しあてた』と云ふ追加を略してはならない。

古代が取つたと同一の過程がまた基督教に於ても說明されるかも知れない。そこでは理解が宗教改革の準備時代迄基督教の信條の範圍に囚人として止まつてゐた、しかし宗教改革前の世紀に於ては詭辯的にそれ自身を肯定し、そして信仰のあらゆる教義を以つて異端の惡戯を恣にした。そしてその當時特に伊太利及び羅馬の宮殿では『若し心情が基督教的でありさへすれば、理解はその氣儘に振舞つても正しいかも知れない』と云ふことが語られた。

宗教改革のズット以前人民は美しく紡がれた『爭論』にまつたく慣されてゐた、だから羅馬法皇や、その他たいていの人達はルウテルの出現をも亦初めは單に『僧侶の口論』として眺めた。人文主義（Humanismus）は詭辯主義に相應じる、ソフィストの時代に於て希臘の生活が（ペリクレス時代）百花爛漫の狀を呈した如く、最も華麗な事柄が人文主義の時代、——或はマキアエリズムの時代（印刷術、新世界等）とまた云ふ人があるかも知れない——に起つた。この時には心情がまだその基督教的內容からそれ自身を釋放しようとする慾求から遙か離れてゐた。

しかし遂に宗教改革が、ソクラテスの如く、心情それ自身を眞面目に把持した、そしてそれ以來心情は明らかに成長を續けた——一層非基督教的に。ルウテルと共に人々が物質を心にとり初めた如く、宗教改革のこの階梯の結果は心情も亦基督教的信仰の重荷から減ぜられると云ふことでなければならない。日毎に非基督教的になつて行く心情はそれが自から忙がしくした内容を失ひ、遂に空虚な親切、全く一般な人々の愛、人間の愛、自由の意識、『自意識』以外にはなにものも殘らなくなる。

かくしてのみ基督教は完成される。なぜならそれは禿げて、萎びて、そして内容が空虚になつたから。そこには實際心情が無意識に或は『自意識』なしにそれを滑り落さない限り、心情が反逆を起さないやうな内容は一つもないのである。心情は闖入しようとするすべての物を頑固な無慈悲を以つて死にまで批判する、そして(前のやうに、無意識か或はビックリしない限り)友情も愛もないやうになれる。かれ等が皆等しく『自我主義者』であり、かれ等の何人もかくの如き人間、乃ち精神ばかりの人間でない時に、人間のうちに愛する何物があり得よう?、基督教徒は精神のみを愛する。しかし眞に精神以外に何物でもない人間が何處に見出され得よう?
皮と毛のある具體的人間の容貌を持つと云ふこと、——どうだらう、それ丈で最早『精神的』の

親切だなぞと云ふことはない筈だ。そんなことを云へば『純粋』の親切『理論上の體面』を裏切ることになるのだ。なぜなら純粋な親切は決して萬人に親しい握手を與へる親切のやうなものと思はれてはならない。反對に純粋な親切は何人にも親切でない親切である。それはただ理論的の同情（インテレスト）である、一個人としてではなく、人間が人間に對する懸念である。『Anteil am Menschen als Menschen, nicht als Person）個人は『自我的』であるからそれに對して反撥的である、なぜなら人間と云ふ抽象的存在でないから。純粋な親切或は純粋な理論に對して人々は唯だ批判され、嘲笑されそして全く輕蔑される爲めに存在する。それに對しては、狂信的の坊主に對すると同じく、かれ等は單に『汚物』である、そして他はこのやうに奇麗な物である。

この同感のない親切の極端にまで押されて、我々は遂に基督教徒のみひとり愛する精神なるものは無である、他の言葉で云へば、その精神は――一種の虚僞であると云ふことを自覺するやうにならなければならない。

今粗雑に、かいつまんで斷定されたことは、勿論まだ十分呑み込まれないではあらうが、我々が議論を進めて行くに從つて次第に明瞭になることを希望するのである。

我々をして古代人によつて殘された遺産をとつて、活動する勞働者として、能ふ限りそれを使

用せしめよ――それをすつかり費つちまへ！世界が我々の脚下に、我々と我々の天の下に遙かに侮蔑されて橫たわつてゐる、世界の大きな腕は最早そこに突き込まれない、そしてその昏迷させるやうな呼吸がやつて來ない、それがよし挑發的の姿勢をとるとも、それは我々の感覺以外の何物をも蠱惑することは出來ない。それは精神を迷はすことは出來ない――そして結局我々は實際精神ばかりである。一度物の眞相を捉へたところで、精神はまたそれ等の上に達した、そして解放され、天的になり、自由になつて、かれ等の束縛を脫した。さう『精神的自由』が語る。

永い努力の後、世界を脫却した精神、この無世界な精神にとつて、世界と世界的のことが失なつた後には――精神と精神的なもの以外には何物も殘つてはゐない。

しかし、それは單にこの世の中から去つてそして世界から自由な一存在をそれ自身から作つたけれど、實際はこの世界を絕滅させるこが出來ない　だから、この世界はそれに對して取り去ることの出來ない躓きの種として、不信な存在として殘る。そして、一方、それが精神及び精神的のこと以外に何物をも認識しないから、それは永久にそれと共に世界を靈化せんとする慾望、即ち、それを『墨い名簿』から救濟せんとする慾望を携帶しなければならない。だから、青年のやうに、それは世界の救濟若しくは改善に對する種々なる計畫を抱いて步きまはる。

古代人が自然に、世の中に、世界の自然的秩序に奉仕したのを我々は見た。けれどもかれ等は絶へず、それならかれ等がこの奉仕からかれ等自身を救ふことは出來ないだらうかと訊ねた。そしてかれ等が不斷に改新される叛逆の企てによつて死ぬばかり疲勞しきつた時、かれ等の最後の嘆息から、かれ等に神と云ふ『世界の征服者』が生れた。すべてかれ等の行爲は世界の智慧、世界の裏と上に達しようとする努力以外の何物でもなかつた。そして以後數世紀の智慧はどんなものであるか？　近代人は何を把へようと試みたか？　最早世界の眞相を把へようとしたのではない、なぜなら古代人がそれを完成したから。けれど古代人がかれ等に遺した神の背後に、『精神である』神の眞相を、精神と精神的なあらゆるものの眞相を把へようとした。しかし『神格のもろ〳〵の深さすら探求する』精神の活動は神學である。若し古代人等が世界の智慧以外に示すべき何物をも持たないなら、近代人等は決して神學上にかれ等の道を進みはしなかつたらうし、進みもすまい。我々は後に神に對する最新の謀反すら『神學の最も極端な努力』即ち神學的反逆以外の何物でもないと云ふことを見るであらう。

I　精神

精神の領土は驚くべく廣大である、そこには精神的のものが無限に存在する。しかし我々は古代の精神と云ふこの形見が正しくどんなものか見て見ようではないか。

かれ等の生みの苦しみからそれが出て來た、しかしかれ等自身は精神として自ら發言することは出來なかつた。かれ等はそれを生むことが出來た、それはそれ自身話さなければならない。『生れた神、人の子』が精神、即ち、彼、神、は地上のものとは何等の交渉なく、地上一切の關係を斷つが、ひとり精神と精神的關係と交渉すると云ふ言葉の最初の發言者であつた。

この世のあらゆる打擊の下にあつて不壞である、自分の勇氣、自分の不屈と自分の執拗も、世の中がそれに觸れることが出來ない處から見ても、恐らく十分な意味ですでに精神なのではあるまいか？　どうして？　若しさうならそれは世界と爭ふやうなことはすまい、そしてそしてその行爲は悉く單に世界に服從しないと云ふことに於いて成立するであらう！　否、それがそれ自身に對してのみそれ自身を煩はさない間、それが單に精神的なその世界と交渉しない間は、それは自由精神ではない、しかしただ『この世の精神』、この世に拘束された精神である。その精神は單にそれ自身の世界に於てのみ自由精神乃ち、眞實の精神である。『この』、地上の世界に在て、それは一異邦人である。精神的世界を通じてのみその精神は眞の精神である、なぜなら『この』世界

はそれを理解しない、そして如何にして『異國の處女』(Das Mädchen aus der Fremde ——シルレルの詩題)の離れゆくを止めるべきかを知らない。

しかしそれはどこでこの精神的世界に到達すべきであるか? それ自身から以外の何處で? それはそれ自身を現はされなければならない。そしてそれが物語る言葉、それがそれ自身を示す默示、これ等がその世界である。幻想家が彼自身を創造する夢幻の映像のうちにのみ生き、そして彼の世界を持つ如く、狂人が彼自身の爲めに彼自身の夢の世界を生み出す如く、(それがなければ彼が狂人になれよう筈がない)その精神はそれ自身の爲めにその精神世界を創造しなければならない、そしてそれがそれを創造する迄精神ではない。

かくしてこの創造がそれを精神にする、そしてその創造によつて我々は創造者であるそれを知るのである。それ等のうちにそれが生きる、それ等がこの世界なのである。

さて、その精神とはなにか? それは精神界の創造者である!

汝と私のうちに於てさへ人々は我々が我々自身に精神的なあるものを體現したと云ふ事が解る迄、乃ち、たとへ思想が我々の前に置かれたかも知れないが、少なくとも我々が我々自身の生活にそれ等を齎らしたと云ふことが解る迄は精神を承認しない。なぜなら、我々が子供等である間

は、最も教訓的な思想が我々の前に置かれても、我々はそれ等を慾求し、或は我々自身のうちにそれ等を再現するやうなことはないであらう。だから精神も亦それが精神的な或物を創造する時にのみ存在する。それはその被造者である精神的のものと一緒にゐる時にのみ眞實である。

故に我々はその仕事によつてそれを知るのであるから、問題はこれ等の仕事がなんであるかと云ふことである。しかし精神の仕事或は子供達は精神以外の何物でもない。

若し自分の面前に猶太人、純粹の猶太人がゐるとすれば、自分は此處に立止つてそしてこの神秘の前にかれ等を立たせて置くであらう、かれ等は殆んど二千年の間、信なく智識なくその前に立つてゐたのである。しかし自分の愛する讀者諸君は少なくとも純血な猶太人ではないから、――なぜならそのやうな人間は此處まで迷つて來る氣づかひがない、――我々はもう少し道連れになつて歩かう、自分が君等を嘲笑すると云ふので恐らく君等が又背中を向ける迄。

若し誰れでも君に君は全然精神だと云ふ者があるなら、君は君の身體をつかまへて彼を信じないであらう、だが『自分には勿論一個の精神がある、けれど自分は精神としてのみ存在してゐはしない、身體のある人間だ』と答へるだらう。それから君はなほ『君の精神』から君自身を區別するだらう。『しかし』彼が答へる、『たとへ今君は未だ肉體の桎梏の中を歩きまはつてはゐるが、い

つかは「祝福された精神」になるのは君の運命だ、そしてたとへ君は君の精神の未來の姿を覺り得るかも知れないにしても、死ねば君はこの身體を棄てて君自身を卽ち、君の精神を永遠に保つだらう。だから君の精神は君に在つて永遠で眞實なものである、しかし肉體は地上の假の宿に過ぎない、君はそれを捨てて恐らく他のものと交換することが出來るのであらう』。

今君は彼を信ずる！實際、現在にあつて君は精神ばかりではない。しかし君が肉體から移住する時、いつか君はさうしなくつてはならない、その時君は身體なしに君自身を保護して行かなければならない、そしてだから君の本當の自己の爲めに注意し、準備することが必要である。『若し人が全世界を得ても彼の靈魂に障害を蒙むるなら何の役に立つだらう？』

しかし、時の經過につれて基督教的信仰の教義に對して揚られたさま〴〵な疑惑が君の精神の不滅に對する信仰を君から奪つたと云ふことを許したとしても、君は依然として亂されない一つの教義を殘して、なほ明白に一個の眞に固執してゐる、乃ち精神は君のよりよき部分で、そして精神的なものは他の何物よりも君に對して偉大な要求の權利を持つてゐると云ふことだ。あらゆる君の無神論にも拘らず、自我主義に反對する熱心から君は靈魂不滅の信者等に同意する。

しかし自我主義者の名稱の下に君はどんな人間に就て考へるか？或觀念、――卽ち、精神的

な物に生き——そしてその爲めに自分の個人的利益を犧牲にする代りに、後者に仕へる人、よき愛國者は、即ち、祖國の祭壇に彼の犧牲を備へる。しかし祖國は一種の觀念だと云ふことは議論することが出來ない、なぜなら心の不可能な獸や、未だ無心の子供等にとつては祖國もなければ愛國主義もない。さて、若し誰れかが善良な愛國者として彼自身を是認しないなら、彼は祖國に關して彼の自我主義を洩らす。そしてこのやうな事柄は無數の他の場合に於て起る。人間社會にあつて特權の恩澤に浴す人は平等の觀念に對して利己的な罪を犯す。主權を振ふ人は自由の觀念に反する自我主義者として誹難される、——etc

君は自我主義者が肉身的なことに比べて精神的なことを從屬的な地位に置き、そして彼がある觀念を愛するやうな行爲をとることを君が見たいと欲する場合にも、彼は彼自身の上にのみ眼をつけてゐると云ふので彼を輕蔑する。君等の間の差は彼が彼自身を中心にするのと、君が精神を中心にするのとの差だ。若くは君が君の自己を二分して卑賤な殘物の支配者であると云ふ君の『本來の自己』を高めるにひきかへ、彼はこの二分と云ふやうなことには耳を傾けず、彼の恣ひ儘に精神及び物質的インテレッセを追求するだけの差である。君は、たしかに、君が少しも精神的興味に入りこまない人々を攻擊してゐると考へてゐる、だが實際君は精神的インテレッセを自己の

『眞實にして最高な』インテレッセと思はないすべての人を呪つてゐる。君はこの美人の爲めに君の騎士的役目を極度に進めて君は彼女を世界に於ける唯一の美人だと斷定してゐるのだ。君は君自身に生きないで、君の精神と精神の所屬——乃ち觀念に生きてゐるのだ。

精神が精神的なものの創造に於てのみ存在するとして、我々はその第一の創造に向つて我々の周圍を眺めてみよう。若しそれが先づこれを完成したなら、それから幾多の創造の自然的繁殖が續くだらう、恰かも神話にあるやうに最初の人類が創造されさへすれば、自餘の種族がそれ自身で繁殖するやうに、一方又最初の創造は『無から』出て來なければならない、——乃ち、精神はその實現に向つてはそれ自身以外に何物も持つてゐない、或は寧ろそれ自身すら持つてゐないと云つていい、だからそれ自身を創造しなければならない。從つてその最初の創造は精神それ自身である。これは不思議に聽えるかも知れないが、それでも我々は日常の經驗としてそれを遂行する、君は君が考へる前に一個の思索的存在者であるか？　最初の思想を創造することに於て君は君自身、乃ち思索人を創造する。なぜなら君は或思想を考へる、i、e、或思想を持つ前には考へない。先づ君を唱歌者にするのは君の唱歌ではないか、君を談話家にするのは君の談話ではないか？　だから、このやうに又君を先づ一個の精神にするのは精神的の産物である。

しかし、君が君自身を思索家、唱歌者、談話家から區別するやうに、君は等しく君自身を精神から區別する、そして極めて明白に君が精神以外の或物であることを感ずる。しかし、思索する自我にあつて聽覺と視覺が容易に熱狂せる思想の中に消滅する如く、君は又精神の狂熱によつて囚へられた、そして君は今全力を擧げて全く精神になり、精神の中に溶解されることを望んでゐる。その精神は君の理想であり、彼岸であり、到達し難きものである。精神とは君の神の名である、『神は精神である。』

精神でないあらゆるものに向つて君は熱狂家である。そしてだから君は無神の遺物から脫却することの出來ない君自身に反抗して熱狂家を演ずるのである。『自分は精神以上である』、と云ふかはりに、『自分は精神以下である』と君は痛恨して云ふ、『そして精神、純精神、或は精神以外の何物でもない精神に就てのみ自分は考へることが出來る、しかし自分はさうではない。そして、自分はそれでないから、それは他の者であり、他の者として存在する、それを自分は「神」と呼ぶ』

純精神として存在すべき精神は必然に他界のものでなければならないと云ふことがその場合の性質のうちに横たわつてゐる、なぜなら、自分がそれでないとしたら、それは是非自分以外にのみ存在すると云ふことになる。由來如何なる場合でも人間は『精神』と云ふ概念のうちに十分包含

されてはゐない、だから純精神、かくの如き精神は人間以外、人界を超越した處にのみ存在する、――地のものではなく天のものである。

自分と精神とがそのうちに横たわつてゐるこの分裂からのみ、『自分』と『精神』は同一のものの名稱ではなく、全く異つたものであると云ふことからのみ、自分は精神ではなく、精神は自分ではないと云ふことからのみ、――これからのみ、我々は精神は他界に住む、即ち、神であると云ふ必然なまつたく反復的な説明を得るのである。

しかしこれから押してフォイエルバハ(「基督教の本質」――"Wesen des Christentums,")が我々に與へようと努力しつつある解放が如何に全然神學的であるかがわかる。彼が云つてゐることはかうだ、我々は單に我々自身の本質を思ひ違へた、だからそれを他界に求めたのだ、しかし今、神が我々の唯一の人間的本質であると云ふことが我々に解つた時、我々は再びそれを我々のものとして承認し、そして他界からこの世界にそれを引き戻さなければならない。精神である神に、フォイエルバハは『我々の本質』と云ふ名を與へる。我々は『我々の本質』が我々に對して反對すると云ふことで、――乃ち我々が本質的な自己と非本質的な自己とに切斷されると云ふ、このことで滿足することが出來るだらうか? 我々はそれによつて我々自身から消滅した我々を見るの悲慘に

逆戻りをしはすまいか？

それなら我々が我々以外にある神聖なものを我々自身のうちに移した變化に對して我々は何を得たか？　我々は我々の內にあるところのものであるか？　我々が我々以外にあるものでないと同樣に。私のこの『他の自己』は自分が自分の心でないと同じく自分の戀人でもない。我々は我々のうちに住む精神ではないからと云ふその理由で我々はそれを取つて我々以外にそれを置かなければならない。それは我々ではなかつた、我々と符合もしなかつた、そしてだから我々は我々以外に、我々の向ふの他界に存するものとしてのほかそれに就て考へることが出來なかつた。

絕望の力をもつてフォイエルバハは基督教の全體を把握する、それを投げ棄てる爲めではなく、永らく渴望してゐながら、いつも距つてゐたそれを最期の死力を出して、天上から引きずり下し、永久に彼の傍に引きつけて置かう爲めである。それは最も極端な絕望の把握、生きるか死ぬかの把握ではないか、そしてそれは同時に他界に對する基督教的憧憬渴望ではあるまいか？　英雄は他界に行くことを欲せずして、他界を彼に引きつけ、それを强ひてこの色に變じようとしたのだ！　そしてその後全世界は、多少の自覺をもつて、『この世界』が急所である、だから天は地上に下りて來て、此處に於てすら經驗されなければならないと叫んではゐなかつたらうか？

今、簡單に、フォイエルバハの神學上の見解と我々の矛盾と相互に對照さしてみようではないか？『人間の本質は人間最高の實在である。今宗教によれば最高の實在は、たしかに、神と呼ばれてゐる、そして客觀的本質と見做されてゐる、しかし眞實それは人間自身の本質にすぎない。故に世界歷史の廻轉期は以後最早神は人間に神として現はれず、人間が神として現はれると云ふことである』（Wesen des Christentums, 402, 英譯者は此處で Wesen と云ふ言葉の譯し方に付いて斷つてゐる、乃ち彼は "Das Wesen des Menschen ist des Menschen hochstes Weoen" と云ふ文章に於て、初めの Wesen を essence と譯し、後の hochstes Wesen を supreme being と譯してゐるそして彼はこれからもこの獨逸語での一つの言葉を二樣に譯すと云つて特に斷つてゐる、これは日本譯の場合にも適用されると考へたので、自分も英譯者になつて「本質」「實在」と云ふ風に二樣に譯して置いた――譯者。）

これに對して我々は答へる。最高の存在は實際人間の本質である、しかしそれは彼の本質であつて、彼自身ではないのだから、我々がそれを彼以外に見て『神』としてそれを考察しても、或は彼のうちにそれを發見して、そしてそれを『人間の本質』或は『人間』と呼んでも、それが無形だと云ふことは依然として變らない。自分は神でも人間（人の抽象的概念を指す――譯者）でも、最高

な本質でも自分の本質でもない、だから大體に於て自分がその本質を自分の内にあると考へても外にみると考へてもまつたく同一である。否、我々は實際いつでも最高實在を同時に内外兩樣の他界性として考へる。なぜなら『神の精神』は、基督教的見解によれば、また『我々の精神』である、そして『我々のうちに住んでゐる。』(羅馬書、八章、九節、コリント前書三章、十六節、約翰傳二十章、二十二節その他) それは天にも我々のうちにも住む。哀れなる我々はその『住居』である、そしてフォイエルバハが進んでその天上の住居を破壞しそして悉くそれを我々に移さうとするなら、その時吾々——その地上の室内——は著しく雜沓を極めるであらう。

さてこの枝葉の議論の後(それは、若し吾々が少なくとも一直線に議論を進めて行くと云ふことを提出したとしても、他の頁のためにその反復を避けることはしなくつてはならない)我々は精神の最初の創造、精神それ自身にかへる。

精神は自分以外の或物である。しかしこの他の物と云ふのは何であるか?

2 憑れた人

君は曾て幽靈を見たことがあるか?『イヤ、僕は見ないが、僕のおばあさんが見た。』そら、ど

うですか？　それは又自分にとつても、やはり同じことです。私自身は何も見なかつた、しかし自分のおばあさんが、彼女の足の間にかれ等を色々な風に走らしてゐた。そして我々の祖母の正直に對する確信から、我々は幽靈の存在を信じてゐるのである。

　しかし、それなら、我々は祖父を持たなかつたらうか？　そして、かれ等は我々の祖母がかれ等の幽靈に就て話した時、かれ等の肩をゆすらなかつたか？　さうだ、我々の善良な宗教に多くの害を與へたのはそれ等不信な人々であつた、それ等の唯理論者！　我々はそれを感じるであらう！　この幽靈に對する溫かい信仰の底に、『一般の靈的存在』の信仰が横つてゐないのだとすれば、他に何物が横つてゐるのだ、そしてたとへ無禮な理性的の人間が前者を攪亂するかも知れないにしても、寧ろ著しく動亂させられるものはこの後者それ自身ではあるまいか？　羅曼派の人々は神に對するその信仰が靈魂及び幽靈に對する信仰を取り除くことによつてどのやうな打撃を受けたかをまつたく自覺してゐた、そしてかれ等は再醒したメルヘンの世界によつてのみならず『より高き世界の侵入』、かれ等の夢遊病者、プレヴォルスト（Prevorst）の女豫言者等によつてこの無慘な結果から我々を救ひ出さうと努めた。教會の善良な信者及び教父等は幽靈に對する信仰と共に宗教の根柢が取り除かれ、由來それが空中に浮遊しつつあつたと云ふことを疑はなかつた

最早幽靈を信じない人間は彼の不信を堅く抱いて旅行し、あらゆる物のうしろには別な何物も、幽靈も或は——我々の言葉の使用上に於てさへ單純に同義と見做されてゐる——『精神』も隱れてはゐないのだと云ふことを見れば足りる。

『精神は存在する！』世の中を見まわして、そして汝自身の爲に精神が萬物のうちから汝を眺めてゐないか云つて御覧ん。かわいい小さい花からそれを見事に形造つた創造者の精神が汝に語つてゐる。星はかれ等の秩序を建設した精神を宣言してゐる。山の頂きからは莊嚴の靈が呼吸づいてゐる。水の中からは呻吟の精が唸やいてゐる。そして——人間からは數百萬の精神が話してゐる。山は沒し、花は萎み、星の世界は滅し、人間は死ぬかも知れない——けれどこれらの眼に見ゆる具體の滅落は何であらう！　精神、『見えざる精神』が、永久に留まる！

さうだ、全世界に幽靈が出るのだ！　唯だ出るばかりか？　否、それがひとりでに『歩く』、世界はどこからどこまで不思議である、それはさまよへる精神の眼に見える身體である、それは幽靈である。それなら幽靈は見える體（からだ）と眞の精神である以外になんであらう？　なる程世界は『空』である、『無』である、唯だ僞りの『外貌』である。その眞理はひとり精神のみである。それは精神の眼に見える身體である。

アッチコッチを氣を付けて見よ、幽靈的世界が至る處に君を取りまいてゐる。君は常に『妖怪』やさまぐ\の幻を持つてゐる。君に見えるすべての物はただ內部精神の幻影であり、幽靈的『幻象』である。世界は汝にとつて單に『外觀の世界』である、その背後に精神が步いてゐる。君は『さまぐ\の精神を見てゐる。』

君は恐らく君自身を至る處に神々を見た古代人に比較して考へてゐるのだらう？　神々は、私の親愛な近代人よ、精神ではない。神々は世界を外觀に墮落させもせず、それを幽化しもしない。しかし君にとつては全世界が精神化されてゐる、そして謎のやうな幽靈になつた。だからたとへ君がまた君自身の內にお化け以外の何物をも發見しないとしても怪しむに足りない。君の身體には精神と云ふお化が出るので、そのお化けが眞實なもので、身體はただ『假りで、空なもの』若しくは『外觀』ではないだらうか？　我々はみんな幽靈で、『解脫』——乃ち『精神』を待つて不可思議な存在ではあるまいか？

精神が世界に現はれた以來、『言葉が肉になつた』以來、それ以來世界は精神化され、蠱惑され幽靈になつた。

君は精神を持つてゐる、なぜなら君は思想を持つてゐるから。君の思想とは何か？『精神的實

在。』それなら物ではないのか、『さうだ、物の精神だ、あらゆる物の本體で、最も深い處にある、物の――觀念（Idee）である。』だから君の考へることは單に君の思想ではないか？『反對に、世界で最も實際なものは正當に眞と呼ばるべきものである。それは眞理それ自身である。若し自分がただ眞實に考へるなら、自分は眞理を考へる。自分は、たしかに、眞理に關して誤り、それを認めることに失敗するかも知れない。しかし、若し自分が眞に認めるなら、自分の認識の目的は眞理である。』で、君は始終眞理を認識しようと努力するのだね？『自分にとつて眞理は神聖である。自分が或不完全な眞理を發見した場合、よりよき眞理とそれを交代させることが出來ると云ふやうなことがあるかも知れない、しかしその眞理を自分は廢除することは出來ない。自分は眞理を信ずる、だからそれを探究する。何物もそれを超越しない、それは永遠である。』

眞理は神聖で、永遠である。それは神聖で、永遠である。しかしこの聖物によつて充され導かるる君自身が神聖にされる。更にその神聖なるものは君の官能の爲めではない、――そして君は肉の人として決してその足跡を發見しない、しかし君の信仰、或はモット確かりと云へば、君の精神の爲めである。なぜなら、それ〴〵自身が精神的な物であり、一個の精神であり、――精神の爲めの精神であることを知つてゐる。

現在最早この『不適當な』言葉を口にしない多くの人々が確言するやうに、神聖なものは決してさう容易に廢除されはしない。たとへ自分がこの一點に於てなほ『自我主義者』として**排斥される**としても、そこには自分が自分自身以上に仕へる或他の思想が殘されてゐる、そしてそれは自分にとつてすべてのものよりも一層重大でなければならない。要するに、自分が自分の眞の福祉(Heil)『神聖』(heilig)な或物をそのうちに求められるやうなものでなければならない。その聖な物が如何に人間的に見えるにせよ、またそれが人間(Das Menschliche)そのものであつても、それはその神聖を取り去りはしない、ただ精々それを天上の聖物から地上の聖物に變じ、神的なものから地的なものに變ずる位である。

聖物は唯だ彼自身を認めない**無意識**な自我主義者の爲めに存在する、彼は常に彼自身を探し求めてゐる、而も自身を最高なものと見做しはしない、彼は彼は自身より高い何物をも知らない癖に、なにか一層高いものに昏惑されてゐる。要するに彼は自我主義者たらざるを欲して自からを卑下すると同時に、その卑下は單に彼自身が『高められる』爲であるから結局彼の自我主義を滿足させる自我主義者である。なぜなら彼は自我主義者であることをやめたいが爲めに、身を犧牲にして仕へるべき高き存在者を天地に探し求める。けれど如何に彼自から振ひ自から鞭韃するも、

畢竟彼は悉く彼自身の爲めにするのである、そして不名譽な自我主義は彼から落ちないであらうこの故に自分は彼を無意識な自我主義者と呼ぶ。

彼自身から脱却しようとする彼の努力と煩慮とは自己分離（selbstauflosung）に對する誤解された衝動以外の何物でもない。若し君が君の過去に束縛されるなら、若し君が(一)昨日無駄なオシャベリをしたから今日もしなければならないと云ふなら、若し君が刹那〳〵に君自身を變化させ得ないなら、君は奴隷狀態に拘束され、痲痺した君自身を感ずるであらう。だから君の存在の各瞬間に未來の新しい瞬間が君を招いてゐる、そして君自身を發展さして、君は『君自身から』――乃ち過去の瞬間の自己から脱却する。君は各瞬間に存在するから、君は君自身の被造物である、そしてこの『被造物』中に君は創造者なる君自身を失はふとは願はない。君は君自身が思つてゐるよりは高い存在者である、そして君自身を超越してゐる。しかし君が君よりは高いと云ふこと即ち、君が被造物であるばかりでなく、君の創造者でもあると云ふこと、――この事を、無意識な自我主義者として、君は認めることに失敗する。そしてだから『より高き本質』は君にとつて――或未知（fremd）な本質である。眞理とか人類とか云ふやうなすべてより高き本質は我々以上の本質である。

（註）（1） Wie sie klingeln, die Pfaffen, Wie angelegen sie's machez,
Dasz man komme, nur ja plappre, wie gestern, co heut.
Scheltet mir nicht die Pfaffen ! Sie kennen des Menschen Bedurrnis.
Denn wie iste begluckt, plappert er morgen, wie heut.

大意

坊主達はまあなんと鐘を鳴らすことだらう！ かれ等はまあなんとモツタイらしくそれをやるのだらう、人間共がかれ等の方に來て、昨日のやうに今日もまた空なオシヤベリをする爲めなのだ！

ゲイテ「ヹネチアのエピグラム」より

未知性（Frendhelt）は『神聖』の標準である。神聖なすべての物の中には『不可思議』な、即ち、未知な、我々が親しみを感じて、氣樂になれない或物が横たわつてゐる。自分にとつて神聖なものは自分自身のものではない。そして若し、e、g、他の人々の財産が自分にとつて神聖でないとしたら、自分は自分のものとしてそれを眺め、機會が提供した時に自分自身のものとして取るであらう。或は又、自分が支那の皇帝の顔を神聖だと考へるなら、それはその顔が現はれた

時に閉ぢる自分の眼に不可思議に殘るであらう。

普通の言葉の意義に從つて永遠と呼ぶことが出來るかも知れない或る爭ふべからざる數學的眞理がなぜ神聖ではないのか？　なぜならそれは天啓でないから、或はより高き存在の默示でないからである。若し天啓と云ふことを我々が單に所謂宗教的眞理としてのみ理解するなら、我々は遙かに道を踏み迷つて、全然『より高き存在』と云ふ概念の幅を認めることを誤まる。無神論者等は『至上』或は etre supreme（最高實在）の名稱の下に崇められたより高き存在に對するかれ等の侮蔑を繼續する、そして『彼の存在の證據』を一ッ一ッ塵埃の下に蹂躙する、そしてかれ等自身はより高き存在に對する要求から、單に新しきものを迎へる爲めに舊きものを滅却するのだと云ふことに氣付かないでゐる。『人間』は恐らく個人より高い本質ではないのか、そして人間の概念から出るさま〴〵の眞理、權利、觀念などはこの概念その者の天啓として尊敬され神聖な者と見做されなければならないのではないか？　なぜなら、たとへ我々がこの概念によつて示現されたやうに思はれた多くの眞理を再び廢除するとしても、なほこれはたゞ我々の方の誤解を證明するばかりだらう、そして少しも神聖な概念そのものを傷けたり、或は『正しく』その天啓と見做れなければならないそれ等の眞理からそれ等の神聖を取り去りはしないであらう。人間は各個人以上に

到達する、そしてしかも――たとへ彼が『彼の本質』であるとしても――實際彼の本質ではない(それは寧ろ彼の如く獨一――einzig)な個人彼自身であるであらう、しかし一般なそして『より高い』いかにも無神論者等にとつては『最高な本質』である。そして、天啓が神彼自身の手によつて書き下されたものではなく、『主の器械』を通して公けにされたやうに、新しい最高の本質も亦それ自身でその天啓を書きはしない、しかし『眞人』を通してそれを我々の知識に來らしめる、ただ新しき本質は、實際、舊い神よりも一層精神的な概念の樣式を裏切る、なぜなら後者はなほ一種の具體又は形式の内に現はされてゐた、然るに斯くの如き明白な類性が保存されてゐるにも拘らず、それに對する何等特別な物質的具體が想像されない。そしてこれにも拘らず、それは具體的存在を缺ぎはしない、それは更に誘惑的な外觀をさへとる、なぜならそれがもつと自然に世俗的に見え、あらゆる具體的人間、――いかにも、即刻、『人道(ヒユウマニテイ)』若しくは『萬人』――、以外には成立しないからである。それによつて眼に見え具體の幽性の幻影は又再び固體なポピユラアなものになつた。

それでその最高の本質と、その最高の本質が現はれる若しくはそれ自身を現はすであらう全ての物が神聖である。そしてこの最高の本質をそれ自身の即ちその示現と共に承認する人々は聖別

される。神聖なものがこんどはその崇拜者を神聖にする、彼は彼の崇拜によつて彼自身一個の聖者となる、同樣に彼のすることとなすことが聖者的になる、聖者らしき歩み振り、聖者らしき思想と行動、聖者らしき想像と熱望等がそれである。

最高の本質として尊敬される者に關する鬪爭は最も苦しい反對者すら主要な點——、乃ち、當然崇拜若しくは奉仕が拂はるべき最高の本質が存在すると云ふ、——點で相互に讓步し合ふ間のみ有意義であると云ふことは容易に理解せられる。たとへば或人が、恰かも基督教徒が回教のシアイト派　サンナイト派の人の間の、若しくは婆羅門派と佛教派の人との間の言葉爭ひに對してなすが如く、最高の本質に對する假說は彼の眼には無效に見え、かくの如きを土臺とする鬪爭は無用の戲れに見えるであらう。だから神が唯一であらうと、三位一體であらうと、ルーテル流の神であらうと、etre supreme であらうと、無神であらうと、若しくは『人間』が、最高の本質を代表しようと、最高の本質それ自身を拒否する人にとつては何等の差異もないのである、なぜなら彼の眼には或最高の本質に仕ふるそれ等の從僕は悉く信心家なのである、最も狂暴な無神家でも最も信仰の篤い基督教徒でも。

だから、神聖（heilig）の眞ツ先に最高の本質とこの本質に對する信仰、卽ち我々の『神聖な信

仰』が立つてゐるのである。

幽　靈

幽靈と一緒に我々は靈界、即ち本質の領土に到達する。

宇宙をさまよひ、その穩密な『不可思議』の存在を其處に有する物は確かに我々が最高の本質と呼ぶ、かの神秘な幽靈である。そしてこの幽靈の根柢に到達し、それを會得し、その中に實在を發見し(『神の存在』を證據立てんとすること)――人間は數千年間、この仕事にかれ等自身を役して來た。幽靈を非幽靈に、非現實を現實に、靈を完全具體の人間に變化させよう云ふと恐るべき不可能事と、果しなき無駄骨折り、――かれ等はこれで死ぬ迄かれ等自身を苦しめたのだ。現實の世界の背後にかれ等は『物自爾』、即ち本質を求めたのだ。物の背後にかれ等は非物を求めたのである。

人が或物の底を眺める時に、即ちその本質を索り求める時に、人は屢々それがあるべく見える物より全く異つた物を發見する。蜜の如き言葉に對して虚僞の心を、華やかな言葉に對して貧弱な思想を發見する如き場合がそれである。本質を明らかにすることによつて、人はこれ迄誤解し

てゐた外觀を蹴落して、眞赤な似せ物、欺瞞であることを見破る。今迄見事な、眩惑的であつた世界の本質はそのドン底を發見した人にとつては――空虛である。空虛は――世界の本質（世界の流動）である。しかし、宗教的の人間は虛僞の外貌、空虛外觀を以つて自からを滿足せしめず本質を眺める、そして本質の中に眞理を捉む。

或外觀より推斷せられた本質は禍なる本質である。そして反對に他の物からのは善である。たとへば、人間感情の本質は愛であるとか、人間意志の本質は善であるとか、思想の本質は眞であるとか云ふ如きものである。

最初に存在として見做れた、かくの如き世界等が今は空なる外觀として現はれ、眞に存在するものは寧ろその本質で、その領域は善惡の本質を有するさまざまの神々や、精靈や、惡鬼を以つて充されてゐるのである。唯だこの轉倒せる世界、本質　世界のみが今は眞に存在するのみである。人間の心には愛が無いかも知れない、その本質である『愛なる神』が存在する。人間の思想は迷誤の中にさまよふかも知れない、しかしその本質の眞理が存在する。『神は眞理である』――などがそれである。

單に本質のみを知り、本質以外の何物をも承認しないのが、それで宗教である。その領土はさ

まぐ〜の本質、幽靈、妖怪の領土である。

幽靈を理解させ、若しくは無意味を實現せんとする慾求が具體的の幽靈、眞の肉體を有する幽靈、或は神靈を齎した。最も強く有能な基督教徒等がこの奇怪な幽靈の概念を得んが爲に如何に彼等自身を苦しめたことであらう！　しかし其處にはいつでも神と人間、即ち、幽靈的と肉情的な二個の性質の矛盾が殘存した。其處には最も不可思議な幽靈、即ち物でない物が殘された。この幽靈程人間の心を苦しめたものは嘗てなかつた。幽靈を退散させる爲めに狂暴な怒りと神經を惱ます痙攣に自からを驅る如何なる黄教僧（シャーマン）も基督教徒等がかの最も理解しがたき幽靈から苦んだ如きかくの如き靈魂の苛責に堪へることは出來まい。

しかし基督を通じてその事の眞理が同時に光明に齎された、即ちその眞の精神或は幽靈は――人であると云ふことがわかつた。具體の若しくは體現された精神は正しく人である。彼自身が幽靈的存在で同時に存在の現象であり實在である。故に人は最早、模範的の場合に於て、彼以外の幽靈には驚かず、彼自身に對して戰慄する。彼は彼自身に對して嚇かされてゐるのである。彼の胸奥の深底に罪の精神が住んでゐるのである。最も薄弱な思想すら（そしてこれもそれ自身一個の精神であることは云ふまでもない）一個の惡魔であるかも知れない。――幽靈が肉體を着けた

神が人になつた、しかし今では人が彼自身恐ろしい幽靈である、彼はそれを取り戻し、降伏し、理解し、現實と談話にもち來さんとしてゐる。人は――精神である。精神のみ救はれれば、たとへ肉體が凋むとも何にか？ 全てが精神の上に懸つてゐる、そして精神若しくは『靈魂』の福祉が絶對の目的になる。人は彼自身にとつて一個の幽靈、不思議な怪物になつた、それに對して肉體の中に特種の座席すら與へられた（靈魂の座席に對する論爭、頭の中にあるとかなんとか云ふ）。

君が僕に對してより高い本質でないと同じく、僕は君に對してより高い本質ではない。それにも拘らず、或高い本質が我々各自の中に隱れて、相互の尊敬を呼び起すかも知れないのである。最も一般なものを直ぐにとつて云へば、人間が君と僕との中に住んでゐるのである。若し僕が君の中に人間を見ないなら僕は君を尊敬するどんな場合を持つであらう？ 確かに、君は人間ではない、そしてその眞の適當な形體ではない、だが單に人の假の姿で、それから彼は果しなく自からを引き出すことが出來るのである。しかし現在にあつてはこの一般の高い本質は君の內に閉ぢ込められて、そして、君が僕の前に現はすのは、君の肉體卽ちこの特種な表現の樣式に束縛されないで君の中に現はれる一つの精神としてである（なぜなら不滅の精神が君に可滅の肉體を取らせた、

だから眞實君の形は單に『假りの』物なのである）、——だから一箇の幽靈である。だから僕は君をより高い本質として尊敬はしない、だが單に君の中に『歩いてゐる』かの高い本質を尊敬する許りである。僕は『君の内の人間を尊敬するのである。』古代人等はかれ等の奴隷にこの種の何物をも觀察しなかつた。そして『人間』と云ふ高い本質は未だ何等の共鳴をも發見しなかつた。これを償ふべく、かれ等は各自の内に他種の幽靈を見た。人民は個人よりも高い本質である、そして、人間や人間の精神のやうに、個人をなやます一個の幽靈、——卽ち人民と云ふ幽靈である。この理由から、かれ等はこの精神を尊敬した、そしてこの精神苦しくはそれに關係ある精神（たとへば家族の精神等）に仕へる時にのみ、個人が有意義に見られた。單に人民と云ふ本質の爲めに『人民の各員』に價値が與へられた。君が君につきまとふ『人間』によつて我々にとつて崇敬されるやうに、各時代にあつて人は人民、家族など云ふ或他の高い本質によつて神聖にされた。或る高い本質の爲めにのみ、誰れ人も昔から尊敬された、單に一個の幽靈として彼は神聖な者、卽ち、保護され、認容された人たる光明の姿に於いて敬はれた。僕の心が、君の中に滋養を發見し、僕の要求が滿足を發見する故に、親しく懷かしき者として、君を愛撫するなら、その時それは君が或る高い本質の聖なる具體であるからと云ふのではなく、又君の中に現はれる幽靈、卽ち精神を僕

が見るからと云ふのでもなく、まつたく自我的の悦樂からである。君の本質を持つてゐる君自身が僕にとつて價値があるのである。なぜなら君の本質は君より高くもなく、君より普通なものでもない、それは君自身の如く無二（einzig）である、なぜならそれが君だからである。

けれど『化けて出る』のは單に人間ばかりではない。全ての物がさうである。全ての物の中に歩む高き本質と精神とは同時に何物にも束縛されない。そして單にその中に現はれるのである。薄暗い處には何處でも幽靈だ！

若し幽靈共がエゴイズムの前に消滅するべく、更に再び我々の面前に現はれないなら、かれ等を吟味することを最早止めてもいい時分である。だから單にかれ等の僅少を擧げて詳細に論じ、以つて直にかれ等に對する我々の態度を明らかにしたいと思ふ。

先づ第一に神聖なのは『聖靈』である。眞理が神聖である、權利、法律、善の爲め、マヂエステート、結婚、一般の福祉、秩序、祖國等が神聖である。

頭腦の錯誤

人よ、君の頭はまよはされてゐる。君は君の頭の中に錯迷を持つてゐる！君は大きな物を想像

してゐる、そして君にとつて一個の存在になつてゐる神々の全世界を君自身に描き出す、それは一個の精神界で、君を指し招く一個の理想で、君は自から其處へ召されると想像してゐる。君はある固定の觀念を持つてゐるのだ。

僕が高きものに縋りついてゐる人々を取り扱ふ時に、僕が戯談を云つたり、比喩的な物の云ひ方をしてゐると考へられては困る、そして（なぜなら大多數がこの範疇に屬してゐる）殆んど全世界の人々は瘋狂院内に於ける眞の痴呆である。それなら『固定觀念』と呼ばれてゐるのは何か？ 人間をそれ自身に服從させてゐる一個の觀念である。かくの如き固定觀念に關して、君がそれを愚事であることを認める時に、君はその奴隷を瘋狂院内に閉ぢ籠める。そして我々が疑つてはならないと云ふ信仰の眞理、我々が叛いてはならない人民の皇帝、（かくの如き罪を犯すものは大逆に相當する）、道德が純潔に保たれんが爲めに、檢閲官が一言をもそれに差し挿むことを許さない德など、これ等は悉く『固定觀念』ではないであらうか？ 我々の新聞紙の多數の愚劣な饒舌の全ては道德、法律、基督教などの固定觀念病に罹つてゐる馬鹿者等の妄言で、彼等が歩いてゐる瘋狂院が廣いと云ふだけの理由で自由に歩きまはつてゐるやうに見えるのではないだらうか？ かくの如き馬鹿の固定觀念に觸れて見給へ、君はスグト狂人の内密な毒心に對して君の背中を

守らなければならないやうになるであらう。なぜならこれ等の偉い狂人等は、またこの點で小さい所謂狂人のやうである、——即ちかれ等はかれ等の固定觀念に觸れる人をコッソリと襲擊する。かれ等は先づ彼の武器を奪ふ、彼から自由な言論を盗む、そしてかれ等はかれ等の爪を以つて彼を不意打ちする。今では日毎にこれ等の狂人の臆病と復讐心が露はにされる、そして愚劣な民衆はかれ等の狂的方法を喝采する。人が馬鹿者等と一緖に或家に閉ぢこめられてゐると云ふ恐るべき確心を得るには今の時代の新聞雜誌を讀み、フイリスティの話を聽かなければならないのである、『汝は汝の兄弟を馬鹿者と呼ぶべからず。若し汝が呼ぶならば——』けれど自分は呪詛を恐れない、そして自分の兄弟等が大馬鹿大將だと敢へて云ふ。癲狂院の可哀想な馬鹿が神なる父だとか、〇〇の皇帝だとか、聖靈だとか云ふ妄想に憑かれてゐるにしろ、有福な境遇にゐる或市民が自分の天職を善良な基督教徒であり、信仰の厚いプロテスタントであり、忠良な市民であり、有福な人間になることだと思つてゐるにせよ、——これ等は孰れも同一な『固定觀念』である。嘗て善良な基督教徒であり、篤信な新教徒であり、有德な人間であらうとしてみなかつた、即ち敢へてもしなかつた人は既に信仰、德など云ふものに囚はれて既に〳〵先領されてゐたのである。煩瑣學者等が單に敎會の信仰の內面をフイロソフハイズしたやうに、羅馬法皇ベネディクト十四世が

羅馬敎徒の迷信の內面に關して肥滿な書物を書いたやうに、幾多の著述家等が國家それ自身の固定觀念を不問に附し、國家に關して大部の頁を滿すやうに、我々の新聞紙が人間はZoon politicon（政治的動物）として創造されたと云ふ幻想に蠱惑せられてゐるが故に政治を以て詰め込まれてゐるやうに、――また服從者は服從によつて、德ある人は德によつて、自由主義者は人道によつてそれ〲空しく生きてゐる、そしてこれ等の固定觀念に對して且て鑿穿、批判のナイフを入れない。狂人の妄念のやうに、それ等の思想は堅實な土臺の上に動かし難く立つてゐる、そしてかれ等を疑ふ人は――神聖なものを犯すのである！さうだ、それは眞に神聖な『固定觀念』である――我々と出遇ふものは恐らく單に惡魔に憑かれた人民のみであらうか、或は屢々反對の仕方に於て――『善』、德、道德、法律、或はある『主義』その他によつて憑れた人民に出遇ふのであらうか？憑くものは單に惡魔ばかりではない。神が我々の上に働く、そして惡魔も同樣である。前者は『恩惠の働き』後者は『惡魔の働き』である。憑かれた人民はかれ等の意見に惑溺してゐる。

若し『憑かれた』と云ふ言葉が氣に食はないなら、その時はそれを偏見と呼べばいい。いかにも、精靈が君に憑けば、そしてあらゆる『靈感』がそれから出て來るなら、それを靈感とか熱誠と呼び給へ。――自分はかの完全なる熱心を――何故なら我々は遲鈍な、半端な態度で止めることは出

來ないから、――狂信とか惑溺と云ふものであることを付け加へる。

狂信が遠慮會釋なく這入りこんでゐるのはたしかに教養ある人々の間にである。何故なら人間は精神的な事物に興味を持つ程度に從つて教養される、そして精神的事物に對する興味が、生きる時には、それが狂信であり、またあらねばならない。それは神聖なもの(Fanum――神殿)に對する狂信的興味である。我々の自由黨員を觀察せよ、ザクセンの祖國新聞を覗いて見よ、シユロツセル(Schlosser)の云ふことを聽いて見よ。『ホルバツハの連中が習俗的教義及び現社會制度に反對して正式な策略を構じた、そしてその黨員はかれ等の不信の爲めに坊主や說教者や、ジエジユイト教徒や、ピエテイステンや、メソヂストや宣教師や、聖書協會等が通常、機械的崇拜や正教信奉に對して熱狂するやうに熱狂した。』

今日屢々基督教を既往のものとして投げ棄て、神と終始すると考へてゐる『道德人』が如何に行爲するかを注意せよ。若し君が後に兄妹の交合は血族相姦であり、一夫一婦制は結婚の眞理であり、孝行は神聖な義務であることを疑がつたことがあるかを訊ねて見よ、その時彼の上には人間が自分の姉妹に對し妻同樣に觸れると云ふやうな考へ方に對して道德的戰慄が來るであらう。そしてこの戰慄はどこからか? 何故なら、彼がそれ等の道德的命令を信じてゐるからである。こ

の道徳的信仰は深く彼の胸中に根ざしてゐる。敬虔な基督教徒に對して彼が憤激すればする程、依然として彼は純然たる一個の基督教徒——即ち、道徳的基督教徒であつた。道徳の形式に於て基督教は彼を一個の囚人、信仰の下に於ける一個の囚人として彼を判決する。一夫一婦制は神聖な或物でなければならない、そして重婚の生活をする者は犯罪者として所罰される。血族相姦を犯す者は犯罪者として苦しむのである。宗教は國家にあつては無視せらるべきであり、猶太人は基督教徒と等しく市民たるべしと叫んでゐる人々が自からかくの如きものに共鳴しつつあることを示すのである。この血族相姦及び一夫一婦制なるものは一個の獨斷的信仰ではあるまいか？それに觸れて見よ、さすれば君はこの道徳人も亦クラムマツヘル (Krummacher) 或はフイリツプ二世と同樣、如何に信仰の英雄であるかを經驗によつて學ぶであらう。これ等の人々は教會の信仰に對して戰ひ、彼は國家の信仰、又は國家の道徳的法律に對して戰ふのである。何故なら信仰個條なる物は、いづれもその信仰の許す範圍外に實行する者を罰するのである。『犯罪の烙印が彼の上に押されてある、そして彼は感化院或は牢獄中に憔悴するかも知れない。道徳的信仰は宗教的信仰同樣に熱狂的である！兄妹が、かれ等の『良心』を以て定めた關係の爲めに、牢獄の中に投ぜられたとしたら、かれ等はその時それを『信仰の自由』と呼ぶ。『しかしかれ等は有毒な例を示し

た。』然り、如何にも、他の者等は又國家が何等かれ等の關係に容喙すべき義務がない、故に『道德の純潔』は廢滅するだらうと云ふ觀念を抱いたかも知れない。かくして信仰の宗教的英雄は『神聖な神』に對し、道德的人間は『神聖なる善』の爲めに熱狂する。

神聖な何物かに對して熱狂する人々は、屢々相互に何等の類似をも發見しない。嚴格な正教徒或は舊式の信者等は『眞理、光明、正義』の爲めの戰士、フイラレテス派、光明の友、唯理派等の人々と如何に異なることぞ。しかしこの差異は如何に全然皮相的なことであらう！　若し或者が唯一の傳習的眞理（たとへば、奇蹟、天候の無限力等）に打擊を與ふれば、その時唯理派も亦かれ等を打擊する、そして單に舊式の信者等が慟哭するのである。しかし、若し或者が眞理それ自身に打擊を加へるなら、彼は直に、信者たる兩派を敵手として持つのである。道德の場合に於ても左樣である。嚴格な信者は慘忍である、より賢明な頭腦を有する者はより多く寬大である、しかし道德それ自身を攻擊する者は兩者に敵對しなければならない。『眞理、道德、正義、光明等』はいつまでも『神聖』でなければならないのだ。これ等の唯理派の人の見解に依れば、人が基督教中に發見する非難すべきものは單に『非基督教的』なものと想像されてゐる。そして基督教は依然として『固定物』たるべく、それを攻擊するは暴行であり、『暴虐』であると云ふのである。確かに

純粋信仰に對する異端は最早昔の狂暴な迫害に自からを曝さない、それに反して今ではそれは純粋道德に對する異端の上に遙に多く落ちるものである。

敬虔は一世紀の間多くの打擊を受け、屢々その超人的本質を『不仁』なものとして罵倒する聲を聽かなければならなかつた。そして人は再びそれに對して劍を拔くべき誘惑を感ずることが出來ない程になつた。それにも拘らず、その闘技場に現はれて、他の最高本質の爲めにその最高本質を攻擊すべく現はれたのは殆んど常に道德的反對者のみであつた。かくしてプルウドン(Proudhon)は臆面もなく云ふ、『人間は宗教無く生活すべき運命を有す、然れども道德的法則は永遠にして絕對である。何人か今日敢へて道德を攻擊せんとするものがあるか?』("De la Creation de l' Ordre")道德的人間は宗教から最上の部分を抄ひとつて、自からそれを食べた、そして今ではその結果たる腺病を脫せんが爲めに粘り强い仕事を持ちつつあるのである。だから、宗教は人々がその超人間的本質を以つてのみそれを非難する間は、そして宗教がその最後の信賴を『精神』にのみ訴へる間は、決してその最奥の部分に於て傷けられざるものなることを我々が指摘するなら、その時我々は充分道德とのその最後の調和を示したものである、そして道德とのその不撓の闘爭

を我々の背後に見棄ることが出來る。それは孰れにしても最高本質の問題である、そしてそれが超人間的であるか、人間的であるかは自分にとつて何等の差異をも示さない（何故なら、如何なる場合に於ても自分以上の本質で、謂はば超自己の物だからである）。結局人間的本質、或は『人間』に對する關係は、それが舊い宗教の蛇皮を脱するや否や、又再び宗教的の蛇皮を着けるのである。

故にフォイエルバハは我々に教へて云ふ、『若し人が單に推理的哲學を顚倒するなら、即ち、常に賓辭を主辭にし、主辭を目的にし原理にするなら、彼は純粹明瞭なる赤裸の眞理を持つ』と（Anekdota）。これによつて、確かに我々は狹隘な宗教的立脚地を失ひ、神を失なふ、神はこの立脚地から主辭である。しかし我々はその代りにして宗教的立脚地の向ふ側にある道德的立脚地を取る。たとへば我々は最早『神は愛である』とは云はないが、『愛は神性である』と云ふ。若し我々が更に進んで『神性』と云ふ賓辭の代りに『神聖』と云ふ同等辭を置き代へるなら、その時、その意義に關はる限り、すべての舊物が再び戻つて來る。これに從へば、愛は人間の內にある善であり、彼の神性であるべきである、それは彼に榮譽を齎す、彼の眞の人性である（それは『彼を初めて人間にする』初めて彼から人物を作る）。故にそれはかくして更に精密に云はれるであらう。愛は人

間の内の人性的（メンシュリッヒ）なものである、そして非人性的なものは愛無き自己主義者である。しかし基督教及び推理哲學（卽ち神學）が善であり、絶對であるとして提供するすべてのものは確かに自己所有權にとつては單に善ではない（若しくは、同意義で、それは單なる善である）。故に、主辭を賓辭に變化することによつて、基督教的本質は（そして諸君も知る如く、その本質を含有してゐるのは賓辭である）單に一層强壓的に固定せしめられるであらう。神と神聖とは益々離れ難く自分と共に彼等自身を纏綿させるであらう。神を彼の天から放逐し、そして彼の『超自然』を奪ふことは若しそれによつて神が單に人間の胸奥に追ひ込まれ、削除し難き內在（Immanenz）を賦與されれば、未だ完全な勝利の權利を支へることは出來ない。今かれ等は云ふ、『神聖なるものこそ眞に人間的である！』と。

國家の基礎として基督教に反對する、卽ち所謂基督教的國家に反對する同一人民は道德が『社會的生活及び國家の基本的支柱』であることを繰り返して倦まない。恰かも道德の領域が神聖な『神權政治』の完全な領域ではないかの如くに。

神學者等が信仰のみ宗教的眞理を把持することが出來、信神者にのみ神が彼自身を現はすが故に、心と感情と、信仰する空想のみが宗教的であると云ふ事を永く主張した後に、合理主義者の

運動が『自然の悟性』、人間の理性も亦神を認知することが出來ると云ふ確信をもつて現はれ出たと云ふことを我々は序に揭げることが出來る。しかし、それは理性が同一の幻想家だと云ふ權利を要求したと云ふ以外に何物を意味するのか？　この意味でライマラス（Reimarus）は彼の『自然宗教の重要なる諸眞理』を書いた。そしてその結果人間全體、即ちあらゆる能力を有する全人が宗教的だと云ふことになつて來た。心も愛情も、悟性も理性も、感情も知識も意志も、——要するに、人間の中の悉ゆる物が——宗教的に見えて來た。ヘエゲルは哲學すら宗教的だと云ふことを示した。そして今日では宗教と呼ばれない何物があるだらう？『愛の宗教』『自由の宗教』『政治的宗教』、——要するにあらゆる熱狂は宗教である。そして事實又さうである。

今日迄、我々は『宗教』と云ふロォマンスの言葉を用ゐてゐる、それは束縛されてゐる狀態の概念を現はしてゐる。確かに、宗教が我々の内部を占有してゐる間は、我々は束縛されてゐるのである。けれど、心も亦束縛されてゐるのだらうか？　反對に、それは自由であり、唯一の君主であり、我々の心ではなく、絕對である。だから宗教と云ふ言葉の正しい肯定的な譯語は『心の自由』とでも云つたらよからう！　何人にしろ、心の自由な者は宗教的である。それは恰度、官能が自由な振舞をする人を肉慾人と呼ぶのと同一筆法である。心が前者を縛し、情慾が後者を縛す

る。だから宗教は自分にとつて束縛即ち religio である、――自分が束縛されてゐる。それは心に關する自由である、――心が自由である、若しくは心が心の自由を持つてゐると云ふことである。情慾が奔放自由に我々と共に疾走する時、それが我々にとつて如何程苦しいものであるかは多數の人が經驗によつて知つてゐる。しかし、自由な心、優秀な智力、智的興味に對する熱心、若しくはこの寶玉が如何に種々なる文句によつて呼ばれるにもせよ、最も亂暴な無作法さへよりも遙かに悲しむべき窮迫に我々を落し入れると云ふことを、人々は認めないであらう。或は又かれ等は自我主義者たることを自覺せずにはそれを認め得ないのである。

　我々の理性や心情も亦神に導くことを示したライマラス及びその他の人々は、それによつて我々が徹頭徹尾占有されてゐるものだと云ふことを示したものである。確かにかれ等は神學者等を苦しめた、そしてかれ等から、宗教的優越の特權を取り去つた。しかし、かれ等はそれによつて宗教の爲めに、心の自由の爲めに、更に多くの地盤を贏ち得たに過ぎない。何故なら、心が最早感情や信仰に制限されない時でも、悟性、理性及び思想全體として、それ自身心に從屬する、――だからその時それは悟性その他の形に於て精神的な天上の眞理に關はることが出來る、――故に全心は神靈的事物卽ちそれ自身を以つてのみ占められる、そしてだから自由なのである。そこで

我々は『陪審官』が我々に死刑の宣告を下し、すべての警官が、善良な基督教徒として、『官職の誓』の爲めに我々を拘禁する程に徹頭徹尾宗教的なのである。

時代一般に『秩序』(告示、命令等)らしく見える全ての物に對する強暴な憎惡が革命の叫びをあげ、個人的な『絶對な君主』が嘲笑、迫害された時以後まで、道德は敬虔と衝突することは出來なかつた。故にそれは自由主義を通じてのみ獨立に到達し得る。自由主義なるものの最初の形式は『市民權』として世界史上にその最初の形式を獲得した、そして特種な宗教的諸力を薄弱ならしめた(自由主義參照)。何故なら、道德が單に敬虔と平行して行くばかりでなく、それ自身の上に立脚する時は、その主義は最早神聖なる命令の中にはなく、理性の律法中に伏在する、若しかの神聖な命令なるものが、其處にあつて猶且有効であるとすれば、その有効性に對する保證を先づ其處に待たなければならない。理性の律法にあつて人間は彼自身から彼自身を決定する、何故なら『人間』は理性的な者で、『人間の本質』から必然にそれ等の律法が出て來るからであると。敬虔と道德とは、前者が神を、後者が人間を立法者とする點で道連れになるのである。

或道德の立脚地から、人々は次の如き理屈を云ふ。――人間は肉慾に指導され、それに從ふ事によつて不道德であるか、或は意志に捲き込まれ、道德的情操と呼ばれる善によつて指導されて

(善の爲めになる情操及び預想)自から道德的であることを示すか孰れかであると。この見解からして、たとへばコッエビユウ (Kotzebue) に對するサンド (Sand) の行爲は如何にして不道德であると云はれ得るか? それは確かに普通非利己として通用してゐるもゝであつた、恰度、クリスピン (Crispin) 尊者が貧乏人の爲めに盜みをしたと同程度で。『彼は殺される筈はない、何故なら、汝殺すべからず！と、錄されてゐるから。』それなら、少なくともサンドが企てたやうに、善の爲めや、人民の福祉のために、或はクリスピンの如く貧民の爲めに盡すことは、――道德的である。しかし殺人と竊盜とは不道德である。目的は道德的だが、手段が不道德である。何故?『なぜなら、謀殺や暗殺は絕對に惡いことであるから。』かの獨立小隊が山峽に敵の軍勢をおびきよせ、草叢に隱れてかれ等を銃殺した時に、諸君はそれを暗殺でないと想像するか? 善に奉仕することを我々に命ずる道德の原理に從つて、諸君は實際、殺人が如何なる場合にも善の實現であり得ないかを訊ね、そして、その善事を實現した殺人に、裏書きしなければならないやうな事になるであらう。諸君はサンドの行爲を少しも非難することは出來ない。それは道德的であつた、なぜなら、善の爲めであり、非利己的であつたから。それは一個 懲罰で、執行者の生命を賭して、個人に科せられた死刑執行であつた。結局。彼の計畫は獸力によつて書物を抑壓しようと欲

した以外の何物であつたか？諸君は『合法的』な是認されたものとしての同一行爲を熟知してはゐないか？そして、諸君の道德律から、それに對して如何なることが抗議され得るか？『だがそれは一個の合法的な執行であつた。』かくして、その中の不道德な事は違法で、叛逆であつたらうか？その時、諸君は善が法律以外の何物でもなく、道德が忠義以外の何物でもない事を承認する。そして諸君の道德は、この『忠義』の外面性に、法律完成の務めのこ、僞善とに、沈まなければならない。但し後者は過去の僞善よりも遙かに暴虐であると同時に叛逆的である。何故なら、後者に於ては單に行爲が必要とせられる、しかし諸君は又素質をも要求する。人は彼自身中のに、法律や條例を携へなければならない。そして最も法律的性癖のある者が最も道德的なのである。天主教的生活に於ける快活の最後の痕跡すらこのプロテスタントの合法の中に消滅しなければならない。此處に於て、結局、法律の權勢が初めて完成されるのである。『自分が生きてゐるのではなく法律が自分のうちに生きてゐるのだ。』かくしく自分は眞に唯だ『その光榮の器』になる爲めに、生れて來たやうなものである。『プロシア人は悉く、その胸に彼の憲兵（Gendarme）を携へり』と或るプロシャの高級な將校が云ふ。

何故、或反對黨が盛大になり得ないのか？　それはかれ等が單に道德や合法の道を捨てる事を

拒む理由によるのである。由來、献身や愛など云ふ無數の僞善、――それ等の忌はしきことから、人は日毎に『合法的反對』のこの腐つた僞善的關係に於て最も完全な眩暈に罹るかも知れない。――愛と貞節の道德的關係にあつて、分離された、若しくは反對された意志は存在し得ないのである。若し一方がこれを欲し、他方がその反對を欲するなら、その美しい關係は攪亂される。しかし今、從來の慣習と反對者の舊い偏見に從へば、道德的關係が何よりも保存されなければならない。その時、反對者に對して何が殘されるか？ 若し愛される者がそれを拒む事を適當と見る場合、恐らく自由を持たうとする意志なのか？そんなものは藥にしたくもない！ それは自由を持つ事を意志しないかも知れない、それは單にそれを望み、それを『歎願』し、『どうぞ、どうぞ』と舌打つばかりである！ 若し反對者が眞に意志し、充實せる意志を以つて意志したら、それから何が出るであらうか？否、それは愛に生きる爲めに意志を拒絕し、道德を愛する爲に――自由を拒絕しなければならない、それは『恩惠として嘆願する』ことのみを許されるものを決して『權利として要求』しないかも知れない。愛や献身等は錯誤なき精確を以つて、其處に唯だ一つの意志があり、それに對して他の者等がかれ等自身を献げ、それを愛し、それに從屬することを要求する。この意志の合理たると不合理たるとを問はず、兩者の場合に於て、人はそれに從ふ時に道德

的に行爲し、それから離れ去る時に不道德に行爲する。檢閲官を支配する意志は多數の人にとつて不合理に思はれる。しかし檢閲の國にゐて書物の檢閲を避ける者は不道德的に行爲するものである、檢閲官にそれを委托する者は道德的に行爲するものである。若し或人が彼の道德的判斷を捨て、秘密出版を企てるなら、人は彼を不道德と呼び、若し彼がその爲めに捕へられるなら、更に粗忽と彼を呼ぶであらう。しかしかくの如き人は『道德家』の眼中に或價値を要求するであらうか？ 恐らく！——乃ち、若し彼が『より高き道德』に奉仕してゐると空想したならばである。

今日の僞善の蜘蛛の巣は二ケ國の境界に股がつてかけられてゐる、その間を現代が左右にゆれながら、虚僞と自己欺瞞の精微な絲を吐き出してゐる。現代は最早、疑惑と臆病拔きに道德に奉仕すべく充分な元氣を有してゐない、しかも一方に於て全然エゴイズムに生きる程大膽不敵でもない、それは僞善の蜘蛛の巣の如く前後に震えながらゆれてゐる、そして煮え切らぬ呪咀によつて不具にされて、僅かにみじめな愚劣の蠅を捉えるのみである。若しも或人が一度『自由な』動議を敢へてしたなら、直に他の人が愛の鐵面皮を以つて再びそれに水を濺ぐ、そして——虚僞な放棄(beuchelt Resignation)。又たとへかれ等が確信ある道德的要求を以つて自由の動議を排除すべき厚顏を有するとも、その道德的勇氣も亦滅入つてしまふ、そしてかれ等は如何にかれ等が特別な

悦樂を以つて、その自由なる言葉を聽くかを、その人に確かめる、――それは――虚僞な承認（heuchelt Anerkennung）である。要するに人々は一方を持ちたいのではあるが、他方を無視することは出來ないのである。かれ等は自由意志を持ちたいのではあるが、かれ等の爲に道徳的意志を缺くことを欲しないのである。汝自由黨員よ、先づ卑劣なる勤王黨員に接觸して見よ。汝等は最も忠義者らしき確信をほのめかして自由のあらゆる言葉を緩和するであらう、そして彼は最も阿諛に充ちた自由の言葉を以て彼の卑劣を蓋ひ隱すであらう。その時汝は離れて行く、そして彼も、汝の如く、『俺はチャント知つてるぞ、狐奴！』と考へてゐる。彼が汝の中に惡魔の臭をかぐが如く、汝も彼の中に暗黑な舊い主たる神を嗅ぐのである。

ネロの如き人間は『善人』の眼中にのみ一個の『惡人』である。自分にとつて、彼は一個の憑れた人間以外の何物でもない、善人も亦同樣である。善人は彼の裏に極惡非道な人間を見る、そして地獄に彼を追放する。何故に何物も彼の專横な道程を障げなかつたのか？何故に人民はしかく辛抱したのであるか？諸君はかくの如き一暴君の爲めにかれ等の意志を悉く束縛させて置いた溫順な羅馬人が彼より少しでもまさつてゐたと想像するか？　昔の羅馬ならかれ等は直に彼を死刑に處して、決して彼の奴隷にはならなかつたであらう。しかし當時の羅馬人の中の『善人』は彼に對

して反抗するに單に道德的の要求を以つてした、そしてかれ等の意志を以つては反抗しなかつた。かれ等は皇帝が、かれ等の如く道德に服從しなかつたことを嘆息した。かれ等自身は、遂に或一人が『道德的な、從順な服從』を放棄すべき勇氣を發見した迄、依然『道德的臣民』として留まつてゐた。そしてその時、『道德的臣民』として無意志のあらゆる汚辱を耐へ忍んだその同じ『善良な羅馬人』は叛逆者の凶惡な不道德の行爲を喝采した。それなら革命に對する勇氣、他の者がそれを振ひ起した後に、かれ等が今賞贊した勇氣は『善人』の衷の何處にあつたか？　善人はこの勇氣を持ち得なかつたのである、何故なら、革命と更にその上の叛逆とは常に『不道德』なものである、人は唯だ『善人』であることを止め、『惡人』になるか、若しくは——善惡を無視するやうになる時にのみそれを決することが出來る。ネロは彼の時代以上に醜惡ではなかつた。その時人は善惡二者の孰れかであり得たのみである。彼に對する彼の時代の判斷は彼が惡人であつたと云ふことでなければならなかつた、そして最高の度に於て、即ち懦夫ではなく、大惡漢でなければならなかつた。あらゆる道德的人民は彼に對して唯だこの判斷を發言することが出來る。彼の如き惡漢は今日と雖も猶道德の眞中に於て此處彼處に生存しつつある。）例へば、（Riter von Lang の記錄參照）人は一瞬間たりともその生命の安全を保ち得ないが故に、かれ等の間に生活する事は確かに

便宜ではない。然し諸君は果して道徳家の間に住む事のより以上便宜である事を確言する事が出來るか？人は其處でも彼の生命を安全にし得ない、彼は唯だ『正義の方法』によつて縊られる。然し極めて僅か彼は自己の名譽に就て保護される。そして國民の帽章は汝がジャック・ロビンソンと云ひ得る以前に失はれてゐる。道徳の堅い拳がエゴイズムの高尙な性質を全く同情なしに取り扱ふ。『だが確かに人は惡漢と正直者とを同一のレベルに置く事は出來ない！』さて如何なる人間も汝が道徳家に對して判斷を下す以上には屢々それをやらない。如何にも、それよりも更に、汝は現存の組織、及び神聖にされてゐる制度等に對して公然と發言する正道者を犯罪人として獄に投ずる。そして汝は大臣に信賴し、更に重要な事柄を狡猾な惡漢に委托する。かくして實際に於て汝は私を責めるべき何物をも有してゐない。『然し理論では！』そこで自分は二個の相反せる兩極としてそれ等を同一のレベル——即ち道徳律のレベルの上に置くのである。兩者は唯だ『道徳』の世界に於てのみ意義を有してゐる、それは恰も基督教以前の時代に於て、律法を守つた猶太人と、それを破つた猶太人とが猶太の律法に關してのみ意義を有してゐた、と同一でめる。しかしそれに反して基督の面前に於てはパリサイ人は『罪人と收稅吏』以上の者ではなかつた。かくして自己所有の前には道徳的なパリサイも不道徳な罪人と同一の價値しかないのである。

ネロは彼の憑れたことによつて極めて不便になつた。しかし自己を所有する人間は彼に反抗するに『神聖』を以つてするやうな馬鹿氣たことはやらないであらう、そしてたとへ暴君が神聖を無視しても哀哭するやうなことはしないであらう。彼は彼の意志を以つて反抗するであらう。人間の讓與し難き權利の神聖が如何に屢々かれ等の敵に迄揭げられたか、そして如何に屢々或自由が『人間の神聖な權利』として示され、そして說明されたことであらう！　さうする人々は無遠慮な嘲笑に價する――實際さうではあるが、――若し彼等の實際やる事が、たとへ無意識にせよ、――その目的に導く道を取るとすれば、かれ等は一ッ預覺を持つてゐる、それは若し群衆が一度その自由に向つて說き付けられるなら、それは又自由を意志し、而して後かれ等が意志するものを持つであらうと云ふことである。自由の神聖とこの神聖のあらゆる可能な證據とは決してそれを獲得しないであらう。泣き事と哀願とは唯だ乞食が示すのみである。

道德人は彼が『不道德』人以外の敵を知らないと云ふ點で必然に狹隘である。『道德的でない者は不道德だ！』そしてそれ故に非難すべく、輕蔑すべきであると。故に道德人は決してエゴイストを理解し得ない。結婚しない同棲は不道德ではないだらうか？　道德人は彼が如何に氣儘に變ずるとも、この見解の上に立たなければならないであらう。エミリア・ギアロッテイはこの道德的

眞理的眞理の爲めに彼女の生命を投げ棄てた。そしてそれは事實であり、一個の不道德である。有德の人は恐らく彼が自然の行動を不活潑にした迄、それと戰ふことに彼の時を費やすかも知れない。彼はオリゲン聖者が天の爲めにやつたやうに、德の爲めに彼自身を去勢したかも知れない。彼はそれによつて神聖な婚姻、神聖な貞淑を破ぶるべからざるものとして尊敬する。彼は道德的である。不貞は決して道德的行爲にはなり得ない。道德人が如何に寛大にそれを犯した人間を判決して許すとも、それは依然として背令であり、道德命令に反する犯罪である。其處には消しがたき汚點がからみついてゐる。貞潔が曾て僧侶の誓に屬した如く、今では道德的行爲に從屬する貞潔は一ッの善行である。——それに反してエゴイストにとつては、貞潔すら、それなくしては彼が暮して行くことの出來ない程の善ではない。彼はそれに就て何等顧慮するところがない。今道德人　判斷を以てすればこれからどんな結果が生ずるか？　これだ。——即ち彼はエゴイストを、彼が道德人以外に知つてゐる唯一人の階級——即ち不道德人の中に投げ入れる。彼はそれ以外には行爲し得ないのである。彼はエゴイストが道德を無視する全ての點でエゴイストを不道德であると看做さなければならないのである。若しその道德人が彼をさう看做さないなら、その時、彼は彼自身に對して、それを告白することなくして、既に一個の背敎者になるであらう、彼は最

早、眞　道德人ではないであらう。人はかく　如き現象によつて自から迷路に導かれてはならない。それは現代に在つて最早確かに稀れなるものとして數へられてはゐない、だが、道德の如何なる點をも見逃がす者は、眞に道德的な人の間にあつては信頼されない者だと云ふことを反省しなければならない、それは恰かもレッシングが、かの有名な寓話で、基督敎を、回々敎や猶太敎と同樣『寶物の指環』に比較した時に、敬虔な基督敎徒たることを信じられなかつたと同樣である。屢々人々はかれ等がかれ等自身に敢へて告白するよりも進んでゐるものである。ソクラテスは敎養の點で道德の水準の上に立つてゐたから、彼にとつては、クリトの誘惑的煽動に喜んで從ひ、土牢から逃れたならそれは不道德であつたであらう。そこに止まつてゐること、そのことが唯だ道德的なことであつた。しかしそれはソクラテスがまつたく一個の道德人であつたからであつた。これに反して、佛蘭西革命の『無主義な、瀆神的な』人々はルイ十六世に忠節を誓つて置きながら、彼の處分、さうだ、彼の死を宣告した。しかしその行爲は不道德なものであつた、それに對して道德人は永遠に恐怖戰慄せしめられるであらう。

しかしすべてこれは、多少『市民道德』にのみ適用される、自由民は侮蔑を以つてそれを見下し

てゐる。何故ならそれは(市民たることも、又一般にその郷土も)宗教的の天國から、あまりに屢か自由でもあり、退いてもゐない、そしてそれ自身の獨立的敎養を生ずることの代りに、その領土に對する批判若しくは考察なくして後者の律法を移植することが出來ないからである。道德は、それが、その威嚴の自覺に到達する時には全く異つた姿を現はし、その主義、人間の本質、若しくは『人間』を唯一の統治力として强調する。かくの如く斷乎たる自覺に進んで到達した人々は宗敎とまつたく絕緣する、神は最早かれ等の『人間』の傍に何等の位置をも發見しない、そして、かれ等が國家の船を自から疾走せしむる時に、かれ等も亦國家に於てのみ榮ゆる『道德』を粉碎する、そして論理的には最早進んでその名稱をすら用ゆべき權利を有してはゐない。何故ならこの『批判的な』集團が道德と呼ぶところのものは極めて積極的に所謂『市民的な若しくは政治的道德』と呼ばれてゐるものと異つてゐる、そして市民にとつては『知覺なき、放縱な自由』の如く見えるに相異ない。しかし結局それは唯だ『主義の純潔』、利益のみを有してゐる、それは、宗敎の汚辱から自由にはなつたが、こんどはその淨化せる定着に於て、『人道』としての一般的權力に到達した。だから、人は『道德』と云ふ名稱が、自由、仁愛、自覺等の如き名稱と共に保存され、時々『自由』道德と云ふが如き附加を以つて飾られると云ふことを怪しんではならない、——それは恰かも、

市民的國家が非難されても、國家が再び、『自由國家』として、或は、さうでなくつても、『自由社會』としても勃興すると同樣である。

何故ならこの人道にまで完成した道德は、それが歷史的に發生した宗教と充分に始末を付けたのだから、それがそれ自身の爲めに宗教になることを何物も妨げないのである。何故なら、宗教と道德との間の差異は人間世界との我々の交涉が人間以上の存在に對する我々の關係によつて調整され、聖別されてゐる間、若しくは、我々の行爲が『神の爲め』の行爲である間に於てのみ勢力がある。若し、それに反して、『人間は人間にとつて至上の存在である』と云ふ點に到達すれば、その時、その差異が消滅する、そして道德は、その從屬的な位置から移されて、宗教にまで完成される。何故なら、この時、從來最高な存在に從屬してゐた人間と云ふ高等存在が絕對の高さに登つた、そして我々は人が最高の存在に關係したやうに、宗教的に彼に關係するやうになつた。道德と敬虔とが今や基督教の初期に於けるが如く同義の言葉になつた、そしてそれは單に至上存在が全く異つたものになり、神聖な步行が最早『神聖な』ものとは呼ばれず『人間的な』ものと呼ばれるやうになつて來たからに過ぎない。若し道德が打ち勝つたなら、その時、完全な——支配者の變化が起つて來たことになるのである。

信仰の絶滅の後に、フォイエルバハは愛と云ふ想像された安全な港に這入らうと考へる。『第一の最高な律法は人間に對する人間の愛でなければならない。Homo homini Deus est（人間は人間にとつて神である）――これが至上な實際的な箴言である、これが世界歴史の轉機である。』しか し、適切に云へば、單に神が變化したに過ぎない、――デウスが。だが愛は依然として存してゐた。其處では超人間的な神に對する愛、此處では人間的な神、神としての人間に對する愛が。だから、人間が人間にとつて――神聖である。そして『眞に人間的な』全ての物が自分にとつて神聖である！『結婚はそれ自身神聖である。そしてあらゆる道德關係も亦同一である。友誼は汝にとつて神聖であり、又あらねばならぬ、そして財產、結婚、及び萬人の善は、徹頭徹尾神聖である。』我々は其處に再び牧師を持たないだらうか？　彼の神は誰れであるか？偉なるMを持てる人間！神聖なのは何であるか？人間的なこと！　その時、賓辭は實際唯だ主辭に變化したばかりであり、『神は愛なり』と云ふ文章の代りに、『愛は神聖なり』とかれ等が云ふ許りであり、『神が人間になつた』の代りに、『人間が神になつた』と云ふばかりである。それは新しい宗教以外の何物でもない。『あらゆる道德的關係が倫理的であり、道德的精神を以つて培はれる、唯だ其處ではかれ等自身が（牧師の祝福による宗教的聖別拔きで）宗教的に見做れるのである。』『神學は人類學なり』と

云ふフォイエルバハの命題は單に『宗教は倫理學でなければならず、倫理學のみがひとり宗教でなければならない』と云ふことを意味するのである。

フォエルバハは單に全たく主辭と賓辭との轉換を成就してゐる許りで、後者に對する選擇を與へてゐる。しかし『愛は神の賓辭であることによつて神聖ではなく(そして決して今迄人々によつてさう思ばれてはゐなかつた)、それがそれ自身神聖であるから、神の賓辭である』と彼自身が云つたのだから、彼は賓辭かれ等自身、卽ち愛及びその他の聖物に對する鬪爭が始められなければならないと考へたかも知れないのである。彼が人間を神聖だと云ひながら、どうして人間を神から遠ざけることを望み得たらう? そして、若し、フォイエルバハの云ふ如く、神彼自身が決してかれ等自身にとつて重要なものではなく、單に彼の賓辭に過ぎないものであつたとしたら、その時、彼は進んでかれ等の上に箱を置いたかも知れない、何故なら、兎に角、その眞實の核が殘されてゐたのだから。彼は又自分に對してそれが『單に一個の幻影を絶滅する事に過ぎない』ことを認めてゐる。しかし彼は人間の上に及ぼす幻影の影響は『明白に敗滅的である』と考へてゐる、何故なら、それ自身最も眞實で、最も內的な情操である愛すらも、宗教的を通じて一個の曖昧な、幻影的なものになる、何故なら宗教的の愛は神の爲めにのみ人間を愛する、だから、人間

を愛するのは單に表面的であつて、實は神のみを愛してゐるのである。』これは道德的の愛と異なつてゐるだらうか？それはこの人間の爲めにこの人間を愛すと云ふので人間を愛してゐるのか、或は道德の爲めに、人間の爲めに、そして——homo homini Deus——だから、神の爲めに愛してゐるのであらうか？

頑迷の錯迷は猶ほその他の形式的な外觀の數々を有してゐる。その或物を此處に示すことは必要であるかも知れない。

かくして自己放棄は神聖なものにも、不神聖なものにも、純なものにも不純なものにも共通である。不純な人間はあらゆる『善良な感情』、あらゆる羞恥、自然の臆病すらも放棄する、そして單に彼を支配する嗜慾にのみ從ふ。純潔な人間は世間に對する彼の自然的關係を放棄する、(『世間を放棄する』)そして彼を支配する「慾望」にのみ從ふ。金に對する渴望に驅られて、貪婪な人間は良心のあらゆる勸告、あらゆる名譽の感情、あらゆる溫順とあらゆる憐憫とを放棄する。彼はあらゆる考慮を無視する。嗜慾が彼を引きづりまわす。神聖な人間が同樣に行爲する。彼は頑迷で『嚴格に正しい』そして自からを『世間の笑ひ草』にするのである。何故なら慾望が彼をひきまわ

すからである。不聖な人間が福の神の前に彼自身を放棄するが如く、神聖な人間は神と神聖な法則の前に彼自身を放棄する。我々は今や神聖の破廉恥が日毎に漸次感じられ、露出されると同時に、それによつて、日毎にそれ自身を赤裸々に現はすべく餘儀なくされてゐる時代に生活しつつある。人間が『時代の進歩』に反抗するさまぐの理屈の破廉恥と愚鈍とは永くあらゆる手段と期待とを超越しなかつたらうか？しかしそれはさうなくてはならない。自己放棄者は、神聖な人間としても、不神聖な人間としても、同一の進路を取らなければならない。後者が少しづつ自己棄絶の俗悪と下劣の完全の程度に沈んで行く如く、前者は最も不面目な高尚に昇らなければならない。地上の福の神も、天上の神も兩方とも精密に自己放棄の同一の程度を要求する。下等な人間も、上等な人間と同じく『善』に向つて手を延ばす、——前者は物質的な善に向つて、後者は、理想的な、所謂『至善』に向つて。そして遂に兩者とも再び又相互を完成させる、『物質的な』人間は一個の理想、幻影、彼のヴニテイの爲めに全てを犧牲にし、『精神的な』人間は物質的滿足、享樂の生活の爲めに全てを犧牲にする。

人々に『非利己』を勸告する人々は、かれ等が出過ぎた口を利いてゐると考へる。かれ等はそれによつて何を理解してゐるか？　恐らくかれ等が『自己放棄』によつて理解する如き或もの。しか

しかくして棄絶され、何等の恩惠に與からぬ自己とは誰れであるか？　汝自身がそれであると想像されるやうに思はれる。そして汝にまで推薦された非利己的自己棄絶は何人の爲めであるか？　再びそれは汝の爲めである、唯だ非利己によつて汝は汝の『眞の利益』を獲得しつつある。

汝は汝自身を裨益しなければならない、だが汝は汝の利益を求めてはならない。

人々は非利己の人々をば人間の恩惠者として尊敬する、孤兒院を建設したフランケの如き、斷えず、倦むことなく愛蘭土の人民の爲めに働くオーコンネルの如きがそれである。けれど又ボニフエース聖者（St. Boniface）の如く、異教徒改宗の爲めにその生命を賭する狂信家、或は、ロベスピールの如く、德の爲めに全てを犧牲にする人、――ケルネルの如く、神と、王と、祖國の爲めに死する人の如きもさうである。しかし、多數のうちには、オーコンネルの反對者の如く、彼に對して利己と傭兵根性を揑造せんと試みるものがある。オーコンネルの資金は、それが爲めにかれ等の非難の根據を與へてゐるやうに思はれた。何故なら、若しかれ等が、彼の『非利己』の上に疑ひを投げることに成功したならば、かれ等は容易に彼を彼の與黨から引き放したであらう。

しかし結局かれ等はオーコンネルが表面の目的以外の他の目的の爲めに働いてゐたと云ふこと以上に何を示し得たか？　彼が金を得ることを目的にしたか、或は人民を解放することを目的に

したかは暫時置いて、いづれにしても、彼が一個の目的、即ち彼の目的の爲めに努めつゝあると云ふことは確かである。利己は孰れにしても利己である。唯だ彼の國民的利己は又他の者にとつても爲めになるであらう、故に共通の利益の爲めになる譯である。

さて、諸君は非利己が非現實であり、何處にも存在してゐないと想像するか？――反對に、何物もそれ以上平凡なことはない！人はそれを文明世界の流行の一條件とさへ呼ぶかも知れない、それはかなり缺くべからざるものだと思はれてゐる、それで、若しそれが原料のままではあまりに高價過ぎる場合には、人々は少なくとも贋物の金箔でそれを飾つてごまかすのである。非利己は何處で初まるか？或目的が我々の目的であり、我々の所有でなくなると早速それを我等は、所有人として、勝手に始末することが出來るのである。ところが、其處ではそれが或固定した目的即ち固定した觀念になる、其處でそれは我々を鼓吹し、熱心にし、惑溺させる。要するに、我々の片意地になつて、我々の主人になるのである。人は自分の力の中にその目的を抱えてゐる間は非利己ではない。人がさうなるのは、『此處に俺が立つてゐる、俺は他にどうすることも出來ない』と云ふ時にのみである。それは凡そ憑れた人間の根本的の格言である。人がさうなるのは神聖な目的の場合で、それに應ずる神聖な熱情を通じてである。――

その目的が自分の所有になつてゐる間は、自分は非利己ではない、そして自分は、その目的の成就の盲目的な手段として自分自身を任せる代りに、常にそれを公然の問題として置く。それかと云つて、自分の熱情は最も熱狂的な人間のそれより減少する必要はない、しかし同時に自分はそれに對して霜のやうに冷やかに、不信に、そしてその最も調和しがたい敵にもなることが出來るのである。自分はその判官である、何故なら自分がその所有人であるから。

非利己は憑きものと共に何處までも並んで行く、惡玉と善玉とのいづれを問はない。其處では罪惡と愚行、此處では謙遜と、獻身など。

人は自己拒絶の犠牲に出遇ふことなくしては何處をも見ることが出來ないのか? 自分の向ふに娘が一人座つてゐる、彼女は恐らく既に十餘年の間、彼女の靈魂に對して血まみれの犠牲を捧つて來たのであつた。從順な姿の上には死ぬ程疲れた頭がたれてゐる、そして蒼白い頬は彼女の青春の徐々に去り行くを示してゐる。哀れむべき娘よ、如何に屢々情熱は卿の心臟に脈打ち、豐麗なる青春の力は幾度か、その權利を要求したことであらう! 卿の頭が柔かな枕上に休んだ時、目醒むる自然が如何に卿の四肢に震え、血潮が卿の脈搏に高鳴り、燃ゆるが如き幻想が卿の眼中に歡樂の閃光を注いだことであらう! その時、靈魂とその永遠の祝福の幽靈が出現した。卿は

恐れ慄いた、卿の手は自然に合掌せしめられ、卿の苦悶せる眼は上方を見あげた、——卿は祈つたのである。自然の暴風雨が凪ぎ、沈靜が卿の嗜慾の大洋の上を靜かに過ぎた。疲れた眼瞼は除ろにかれ等の下に消えた生命の上に沈んだ、緊張がいつの間にか知られずに圓らかな四肢から拔け出した、荒れ狂ふ波は心臟の中に干上り、合された手は無抵抗な胸の上に無力な重味となつた、『嗚呼！』と云ふ微かな最後の嘆息がそれ自からを呻いた、そして——靈魂が休安を得た。卿は明朝、新しき戰と新しき祈りに眼醒めるべく、眠りに落ちた。今や棄絶の習慣が卿の慾望の熱を冷ます、そして卿の靑春の薔薇は卿の氣高き萎黄病の中に蒼白くなりつつある。靈魂は救はれた、けれど肉體は滅するかも知れない！　おおレイ（Lais）　おおニノン（Ninon）、卿等はこの蒼白の德を嘲けるが爲めに如何によく努めたかよ！德操の中に老ひ行く千人の處女に對するに一人の自由なる grisette！（快活なる女工の如き娘を意味す——譯者）

固定觀念は又『格言』、『原則』、『標準』等として認められるかも知れない。アルキメデスは地球を動かすべく、地球以外に標準を求めた。人々は絶えずこの標準を求めた、そして各人は自己の能力に從つてそれを捉えた。この外來の標準が心や、觀念や、思想や、概念や、本質等の世界である。それが人である。天が『標準』である、地球はそれによつて動かされる、地上の行爲が檢査

されて、――侮蔑される。かれ等自身に對して天を確かめ、天上の標準を確く永久に把持する爲めに、――人道は如何程苦しんで不斷の努力を續けたことであらう！

基督教は自然によつて定められた生活から我々を解放し、我々を動かす嗜慾から我々を救はうとした。だから人間は彼の嗜慾によつて彼自身の行動を定めてはならないと云ふことを意味したのである。これは人間が嗜慾を持つてはならないと云ふ觀念を含みはしない、だが嗜慾が彼を捕へ、それが固定され、制禦しがたく、破れがたいものになつてはならないと云ふことを意味したのである。今、基督教が嗜慾に對して企てたところのものを、心（思想、概念、觀念、信仰等）が我々を決定しなければならないと云ふそれ自身の教理に對して我々が適用することが出來ないであらうか？　我々は、心や、概念や、觀念が我々を決定してはならず、固定した、『神聖な』、破りがたいものとなつてはならないものだと訊ねることは出來ないものであらうか？　その時、それは心の破滅、あらゆる思想、あらゆる概念の滅却に終るであらう。『我々は實際、嗜慾を持たなければならない、しかし嗜慾が我々を持つてはならない』と云はなければならなかつたやうに『我々は實際心を持たなければならない、しかし心は我々を持つてはならない』と云はなければならない。若し後者が無意味に見えるなら、即ち、或思想が『格言』になり、それによつて彼自身が

その囚人にされてゐるので、格言を持つてゐるのはその人間ではなく、寧ろ格言が彼を持つてゐる事實に照して見よ。そして格言の場合にも彼は又『永久の標準』を持つてゐる。問答敎示法の敎義は我々がそれを發見する前に我々の原則になる、そして最早棄絕を忍ばない。かれ等の思想、或は心が唯一の力を持つ、そして如何なる『肉』の反抗もそれ以上に聽かれない。而も自分が心の暴虐を破り得るのは只だ『肉』によつてのみである。人間が全人としての彼自身を聽く時は、彼の自餘のものと同時に彼の肉に聽く時のみである、そして彼れが一個の傾聽する理性的存在であるのは彼自身の全體に聽く時のみである。基督敎徒は彼の束縛した自然性の苦悶を聽かずして、『人道』に生きてゐる。故に彼は彼の身の上に落ち來る災厄に對して不平を云はない。しかし、若し肉體が一度、發言權を得、そしてその調子が『情熱的』で、『無作法』で、『無整頓』で、『怨恨的』である時には、(そしてそれ以外にはなり得ない)、その時、彼は惡魔の聲、精神に反する聲を聽くと考へる。(何故なら、禮義や、溫順や、親切な性質等は精神である)、そして、かれ等に對して正しく熱心である。若し彼がそれ等に耐へる事を欲しないなら、基督敎徒ではあり得ない。彼は道德にのみ耳傾ける、そして口中にて不道德を打つ。彼は合法にのみ傾聽し、不法の言葉を默殺する。道德と合法との精神が彼を囚人とし、頑迷な主人とする。かれ等はそれを『精神の勝利』と呼

ふ、――それは同時に精神の標準である。

そして今では普通の自由な紳士は誰れを自由にしようと云ふのであるか？　かれ等が叫んで、渇望するのは何人の自由であるか？　精神の！　道徳、合法、敬虔、神の恐怖など云ふ精神の自由。それは又自由反對の紳士の欲するものである、そして二つの間の全體の鬪爭は利益問題の上に回轉する、――後者が唯一の講論者になるか、或は前者が『同一の利益の享樂に分前』を得るか孰れかである。精神は依然として兩者の絶對君主である、そしてかれ等の唯一の鬪爭は、『君主の代理者』に關する教主　玉座を占める人に對してである。最上なことは、その鬪爭を歴史の野獸が自然界のそれ等の如く相互を切々に引きさく有樣に對するが如く靜かに眺め、かれ等の腐敗し行く死屍が、我々の收穫の爲めに土地を豐饒ならしむるものであることを悟るにある。

我々は又他の多くの頭腦の錯迷に歸り來るであらう、――例へば、神命、眞實、愛等の如きものがそれである。

人間自身の所有が彼に與へられたものと對照せしめられる時に、我々は如何なるものも孤立して所有することが出來ず、宇宙的秩序の一部分として、我々の周圍の物の印象を通じてすべてを

受け取るから、從つて、我々は『與へられた』或物としてそれを持つと云ふことに反對する必要はないのである。何故なら他の物によつて自分の裡に起された感情や思想と自分に與へられたそれ等の間には大なる差がある。神、不朽、自由、人道等が我等の内的存在を多少強く動かす思想及び感情として幼年時代から我々に注入されてゐる、それ等は全く不知不識の間に我々を支配することもあれば、時に豐富な諸性質に於て藝術の秩序や作品となつてかれ等自身を現はすことがある。しかしながら、それ等は常に喚起せられたものではなく、與へられた感情である。何故なら我々がかれ等を信じ、そしてかれ等に固執しなければならないからである。或絶對者が存在し、それが我々によつて取り入れられ、感じられ、考へられなければならないと云ふことが、それを認め、そしてそれを飾り立てることにかれ等の精神のあらゆる力を費やした人々の心の中に一つの信仰として礎えられた。絶對者に對する感情は與へられたものとして其處に存在する、故に最も多樣なるそれ自身の示現に於てのみ歸結する。かくしてクロプストック（Klopstock）に於ては宗教的感情が與へられたものであるが、『メシアド』（Messiad）に於ては單に藝術的表現を見出したのみである。若し、一方に於て、彼の相對した宗教が、彼の爲めに、感情及び思想の單なる刺激であつたなら、そして、若し彼がそれに向つて如何にして完全に彼自身の態度を取るべきかを

知つたなら、その時、宗教的靈感の代りに、宗教それ自身の破滅が結果として現はれたであらう。その代りに、彼は單に壯年に於て、少年時代に受け取つた彼の子供らしい感情を繼續し、その少年らしい瑣事を飾るに彼の壯年の力を浪費したのみである。

故に、その差は、感情が自分に與へられたか、或は單に喚び起されたか、孰れかである。喚び起されたものは自分自身の自我的なものである、何故なら、それ等は自分に注入され、自分に口迹され、つめ込まれた感情としてではないからである。けれど、自分に與へられたものを、自分は、腕を延して受け取る、——自分は一個の遺産として自分の中にそれ等を愛撫し、それ等を培ひ、そしてそれ等によつて憑かれてしまふ。

我々の教育全體は我々の中にさまざまの感情を生ずるべく工夫されたものであり、我々の上に生ずる結果が、如何樣にならうとも、そのなるがままに任せる代りに、我々に與へられたものであることを、何人か多少意識して感じなかつたものがあるだらうか？　若し我々が神の名を聽くならば、我々は崇敬の念を感じなければならない。若し我々が皇族の名前を聽く時には、それは尊敬と服從とを以つて受け取らなければならないのである。若し我々が道德の名を聽く時には、破られがたき何物かを聽く如くに考へる。若し我々が惡魔を耳にする時には、我々は戰慄しなけ

ればならない。目的がこれ等の感情に向けられる、そして快樂を以つて『惡』の行爲に耳傾ける人は、訓練の鞭を以つて、『何にが何にだかを敎へられ』なければならないであらう。かくの如く與へられた感情を以つて、我々は群集の入口の前に現はれ、『一人前になつたと宣言される』。我々の裝飾は『高尙な感情、高遠な思想、鼓吹する格言、永遠の原理』など云ふものから成り立つ。靑年はかれ等が老人の如く囀づる時に一人前になる。かれ等は古くさい歌を學ぶ爲めに學校へ追ひやられる、そして、かれ等がそれを暗誦する時に、丁年になつたと宣言される。

我々は我々の前に來る全ての物と全ての名稱に對して、我々が感じたいと思ひ、感ずることの出來ることを感じてはならないのである。例へば、神の名に向つて、我々は笑ふべき何物をも考へてはならず、不敬な何物をも感じてはならないのである。我々がその名稱を聽く時には、我々は何をどう云ふ風に考へ或は感ずべきかと云ふことが、既に指定され、そして與へられてゐるからである。

靈魂をいたわると云ふのはこのことである、――自分の靈魂や心を、自分自身の欲するやうにではなく、他人が正しいと考へるやうに調子を合すことである。少なくともこれか若しくはそれかの名前が口に上される時に、自分自身の感情を遂に自分自身に對して固守し、かれ等の言說に

對して、我々から、神聖な顔と落着いた表情とを期待する多くの人々の面前で哄笑することは、たいして面倒なことでもない。與へられたるものは我々にとつて外的なものであつて、我々自身のものではない、そしてだから『神聖で』ある。そして『その神聖な恐怖』を投棄するは困難な仕事だと云ふのである。

今日では人は再び『眞面目』が稱賛されるのを耳にする。『非常に重大な問題や、議論の面前に於ける眞面目』、『獨逸風の眞面目』などがそれである。この種の眞面目は癲狂と憑きものとが既に如何程古く重大になつたかを明らかに宣言してゐる。何故なら狂人が彼の狂氣の中ばに來た時より以上に眞面目なものはあるまい。その時彼の偉大なる熱誠は彼をして戯談を云ふことを不可能とする。（癲狂院參照）

3　神權政治

茲で自分が挿話的に差しはさみたいと思ふ我々の蒙古主義（モンゴリズム）に關する歴史的回想は完全無缺なものだと宣言する譯にはいかない。又、是認された確實さを以つてゐるものだとさへも云ふことは出來ない、しかし、それは單に自餘を明らかにする爲めに功獻するところがあると自分に思はれ

るばかりである。

世界歴史を形造つてゐるものは多分全くコーカサス種族に屬することであらう。その歴史がこれ迄に二つのコーカサス時代を通過して來たやうに思はれる、その最初に當つて我々は我々の本然である黑人風を漸々除去しなければならなかつた。これが第二に於て蒙古風（支那風）によつて續かれた。それも等しく根本的に絶滅されなければならない。黑人風は古代風を代表してゐる、物に從屬する時代である。（鷄の食べ方、鳥の飛び樣、嚏み、電光、雷鳴、神木のざはめき等）、蒙古風は思想に從屬する時代、即ち基督教的時代である。將來の爲めに保存されてゐるのは、『自分は物質界の所有人であり、心靈界の所有人でもある』と云ふ言葉である。

黑人時代に於ては、セソストリスの戰役や、埃及や、一般に北方阿弗利加の重要事件が起つた。蒙古人時代には匈奴人や、蒙古人が、露西亞に浸入した事件が從屬する。

自己の價値は、非自己の堅い金剛石が、かの神と世界とに對する場合の如く、しかく巨大なる價を持つてゐる間は、恐らく、高くは評價され得まい。非自己は自分によつて消耗され、吸收されるには猶ほ、餘りに堅く制禦しがたい。寧ろ、人々は唯だこの不動なる實體、即ち、この物體の上に異常な騷擾を以つて這ひまわつてゐるそれは恰かもある肉體に寄どる寄生蟲の如く、その

體の汁を吸ふが、決してそれを消滅せしめることはない。それは惡蟲の騷擾であり、蒙古人の勤勉である。支那人の間にあつては、全ての物が、その曾てありしがままに止まつてゐる、そして『本質的』な、若しくは『實體的』な何物も變化を蒙むらない。かれ等は、依然として殘存して、『舊』とか、『祖先』など云ふ名稱を戴くものの爲めに、愈々熱心に働くのである。

故に、我々の蒙古時代に於ては、あらゆる變化が單に改革的、改善的で、決して破壞的でも、衰亡的でも、絕滅的でもない。本質と目的とが、依然としてゐる。悉ゆる我々の勤勉は唯だ蟻の活動、蚤の跳躍、目的の不動の網の上の輕業師の藝當、不變、若しくは『永遠』の監視の下にある勞役であつた。支那人は疑ひもなく、全く規則の中に埋沒してゐるが爲めに、最も着實な國民である。しかし、基督教時代は着實な、即ち『制限された自由』から、『或制限內』の自由からは生れては來ない。最も進歩せる文明の程度にあつて、この活動は、不動の豫想に顚へされざる臆說の上に努力する科學的活動の名稱を得る。

その最初のそして最も不明なる形に於て、道德は習慣として、それ自身を現はしてゐる。或國の風俗、習慣（Morem）に從つて行爲することは――其處では道德的なのである。故に純粹な道德的行動、明瞭な、道德が支那に最も率直に實行されてゐる。かれ等は舊い風俗や習慣に固執す

る、そしてあらゆる革新を死に價する犯罪として憎むのである。何故なら革新は習慣、舊物、不易の恐るべき敵である。實際、又、人間が習慣を通じて、事物や、世界の闖入を防ぎ、彼自身の世界を建設し、その内にのみ、ひとり安息を感じ、彼自身の爲めに天を建てることは疑ひを入れざるところである。何故なら、天はそれが人間の適當な家であると云ふこと以外に他の意義を有してゐない、その中にあつて、何等外來の物が、最早、彼を制限しない、地上の如何なる影響も、最早、彼自身を外的にしない。要するに、その中にあつて、地上の渣が投げ棄てられる、そして世の中に對する戰鬪が或目的を發見した、——故に、その中にあつては、何物も彼に拒まれない。天は棄絶の目的である。それは自由な享樂である。其處で人間は最早、彼自身に何物をも拒まない、何故なら、何物も彼に對して、外的でも、敵對的でもない。しかし今や習慣は『第二の天性』である、それは人間を、彼の最初の本然の狀態から、引き離して自由にし、そのあらゆる災厄から、彼を安全にする。支那人の充分に丹精を凝した習慣はあらゆる急變の爲めに準備されてゐる、そして全ての物が『選擇される』。どんなことが起つても、支那人は常に如何に行爲すべきかを知つてゐる、そして先づ事情に從つて決定するを要さない。如何に豫想せられざる事變も、休息の天から、彼を投げ下さない。道德的に習慣づけられた支那人は驚かされない、そして彼の保護を

取り去られない。彼は全ての物に對し平等（卽ち、同一の精神と氣質）を以つて行爲する、何故なら、彼の傳習の注意によつて保護された氣質はその平衡を失はない。故に、教養と文明の階段に於て、人道は習慣を通じて、最初の階梯を踏む。そして、修養を積むことは、同時に天上に昇ることである。それは修養若しくは第二の天性の領土である。それは實際天上に行く階段の第一階梯を踏むことである。

若し蒙古國が精靈の存在を定めたなら、若しそれが精靈の世界、卽ち天を創造したなら、――カウカサス人は數千年間、これ等の精靈に徹底する爲めに、爭鬪した。その時、かれ等は蒙古的領土に家を建築する以外に何をなしつつあつたか？　かれ等は砂の上に建築せず、空中に建築した。かれ等は蒙古主義と角力つた。蒙古流の天を襲撃した。かれ等は遂にこの天を絶滅するであらうか？かれ等は遂にカウカサス人になり、そしてかれ等自身を發見するであらうか？『後代の思想に於て『心の不死』としてそれ自身を現はしたなら、更により多くの保證をそれ自身に與へつつあつた『靈魂の不滅』は、何時遂に心の死亡に變るであらうか？

カウカサス種族は、天と交渉するかれ等の蒙古主義が完成したので、反對の仕事をし始めた、卽ち習慣と云ふ天を攻擊する仕事、急進的破壞の活動を初めたのは、蒙古種族の產業的鬪爭に於

て、人々が天を建設した時であつた、あらゆる人間の敎義の下に克苦し、淸淨にされた場所に、新しく、よりよきものを建設する爲めに、あらゆる習慣を破壞して、その場所に、新しく、よりよき習慣を置き代へる爲めに、――かれ等の行爲はこれに限られてゐた。しかし、それは、かくして旣に、純粹に、眞實に、熱望するところのものになれるか、そしてその最後の目的に到達するか？　否、この『よりよき』ものの創造に於て、それは蒙古主義に染められてゐる。それは再び天を造る爲めにのみ天を襲擊する、それは新しき力を正しとする爲めにのみ舊き力を顚覆する、それは單に――改善するのみである。それにも拘らず、目差されたる目的は、屢々それがすべての新しき企てに於て、消え失せるかもしれないやうに、天や、習慣の實際の完全な滅亡である、――要するに、世の中に對してのみ保證せられた人間の、人間の孤立と內部性の滅亡である。修養の天を通じて、人間は世界から彼自身を孤立せしめ、その敵對する力を破らんとする。しかしこの天の隔離が同樣に破られなければならない。そして天上襲擊の眞の目的は天の滅落であり、天の絕滅である。改善と改革とはカウカサスの蒙古主義である、なぜなら、それによつて、彼は曾て存在したものを常に再び復興しつつある、――即ち、敎訓と、普遍と、天とをである。彼は天に對して最も和解すべからざる敵意を抱いてゐる、そしてしかも日々新しい天を建設する。天

の上に天を積み重ねて、彼は一つ一つそれを破壞して行くばかりである。猶太人の天が希臘人の天を破壞する。基督教者のそれが猶太人のそれを、プロテスタントのそれが、天主教徒のそれを。――若しカウカサス血統の破壞的人間がかれ等の蒙古的の外皮をぬぎ棄てるなら、かれ等は感動の驚くべき世界の廢墟の下に感動的の人間を埋め、孤立せる人間を孤立せる世界の下に、樂園的の人間を彼の天の下に埋めるであらう。そして天は精靈の領土、精神の自由の領土である。

天の領土、精神及び幽靈の領土は空理的哲學に立ちつつあるその權利を發見した。此處では、それがさまぐ\の思想、概念、及び觀念の領土として記載されてゐた。天はさまぐ\の思想や、觀念を以つて群がつてゐる、そして、この『精神の領土』はその時、眞の現實である。

精神の爲めに自由を得んと欲することは蒙古主義である。精神の自由は蒙古的自由であり、感情の自由、道德的自由である。

我々は『道德』と云ふ言葉は、自發、自己決定と同義にとられることを發見するかも知れない。しかしそれはその中に含まれてはゐない。高加索人は寧ろ彼の蒙古的道德に拘らず、唯だ自發的に彼自身を示した。蒙古的の天や道德が強い城郭として殘存した、そして、この城を斷えず襲擊することによつてのみ、高加索人は彼自身を道德的に表はした。彼にして、若し何等道德と交涉

することがなかつたなら、又彼がその中に制禦し難き持續的の敵を持つてゐなかつたなら、道德に對する關係が止み、從つて、道德が消滅するであらう。故に、彼の自發性が猶ほ道德的自發性であると云ふことは、將に蒙古性だと云ふことである、——そしてそれに於て彼が未だ彼自身に到達してゐない徵しである。『道德的自發性』は全然『宗教的、正統派の哲學』、『組織的王國』、『基督教的國家』、『或制限內の自由』、『制限されたる出版の自由』、若しくは病床に拘束された英雄の姿等に符合する。

人間は、幽靈或は精靈に對する信仰のみならず、又精神に對する信仰をも排除する力を所有する迄は、黃敎 (Schamaentum) とその幽靈とを眞に撲滅し得なかつたのである。

幽靈を信ずる人は、精神を信ずる人と同じく、『より高き世界の輸入』を許容するのである。兩者は官能の世界の背後に超絕的の世界を求める。要するに、かれ等は他界を生じて、それを信ずるのである。そしてかれ等の心の所產であるこの他界は一個の精神界である。何故なら、かれ等の官能は他界に就て何物をも攫まず又知らない、それは非官能的世界である、かれ等の精神のみそれに生きる。精神的事物の存在に對するこの蒙古的信仰から出發して、人間の本能 (Menschen eigentliches Wesen) も亦彼の精神であると云ふ點に到達し、あらゆる心勞が單に『彼の靈魂の安

享』にまる向けられなければならないと云ふことは、困難なことではない。精神上の影響、所謂『道德的影響』はこれによつて確かめられる。

故に蒙古主義が感覺の權能の全き不在、非官能、非自然を代表してゐることが明らかである。そして罪と罪の意識とが數千年間持續した我々の蒙古的苦惱であつた。

しかし、それなら、誰れが精神を虛無に撲滅せしむるであらうか？ 精神を用ひて、自然と、無と有限と刹那に歸する者である。彼のみがひとり又その神を同一の虛無に引き降すことが出來るのである。自分が出來る。汝等の各自が出來る、絕對の自分として彼の意志を行ふ者が、一言にて云へば、エゴイストが出來るのである。

神聖なる者の面前に於いて、人民は權力と確信のあらゆる觀念を失ふ、かれ等はそれに向つて無力な卑下した態度を用ゐる。そしてしかも、何物もそれ自身神聖ではない、だが自分がそれを神聖だと宣言することによつて、自分の宣言、自分の判斷、自分が膝を屈することによつて、要するに——自分の良心によつて神聖にするのである。

エゴイストが自己の力以外にあつて觸れることの出來ない、近づき難い——卽ち彼の上にある

全ての物が神聖なのである。一言で云へば、神聖は、全て良心の事件である。何故なら『これは自分にとつて良心の問題である』と云ふことは、單に『自分はこれを神聖であると主張する』と云ふ意である。

少年にとつては、恰度動物に向つての如く、神聖な何物も存在しない。何故なら、この概念を受け入れるには、人は既に理解に於て、餘程、進んでゐなければならない、そして、『善と悪』、『權利を與へられたる者と與へられざる者』等の差別を爲し得る者でなければならない。かくの如き反省力と叡智の標準に於てのみ、――宗教の適宜の標準――不自然な崇敬(卽ち思索によつて存在に齎された)『神聖な恐怖』が自然の畏怖の位置に踏み込む、この神聖な恐怖に自分以外の物を偉大であり、よりよき權利を與へられたものであると思ひ込むことが屬する。卽ち、外的な物の權力を承認する態度である――それで、單にそれを感ずる許りでなく、明白にそれを承認する卽ち受け入れる、讓步し、降參し、自から、束縛される(獻身、謙讓、卑屈、服從、等)。此處に『基督敎的道德』の幽靈的全軍が步いてゐる。

汝が尊敬や崇敬の念を抱く全ての物は神聖の名稱を價する。汝自身も亦、それに手を觸れることに『神聖な恐怖』を感ずると云ふ。そして汝はこの色彩を不神聖な物(絞架、犯罪等)にすら與

へる。汝はそれに觸れることに恐怖を持つ。その中には何かしら怪しい物、卽ち、親しみのない、汝自身のものでない物が横つてゐる。

『若し何物かが人間の心の中に神聖な物として位しなかつたならば、どうだらう、その時は凡ゆる門が引き抜かれて、自己意志と、無制限な主觀とが飛び出すであらう！』恐怖がなによりも先づ第一である、それから、人は最も粗暴な人間に對してさへ彼自身を恐ろしくすることが出來る。だから、恐怖は既に人間の傲慢に對する一つの牆壁になつてゐる。けれど、恐怖には其處にいつでも恐怖させられるものから、詐僞、欺瞞、狡計等によつて自からを釋放せんとする企てが殘る。これに反して、尊崇（Ehrfurcht）はまつたく趣を異にする。茲では或物が恐怖せられる（sefuerchtet）許りでなく、なほ又尊敬（geehrt）される。恐怖せられた物が一つの內的な力になり、自分が最早、それから、脫しきることが出來なくなる。自分がそれを尊敬し、それに擒とされ、それに歸依し、それに從屬する。自分がそれに拂ふ尊敬によつて、自分は完全にその力の中に捕はれ最早、釋放を企てることさへもしない。今、自分は全力の信仰を以つてそれに附隨する。自分は信ずる。自分と自分の恐怖する物とが一つになる。『自分が生きるのではなく、尊敬される物が自分の裏に生きるのだ！』なぜならば、精靈や、無限者は、或終局にまで來ることを許さない、故

にそれは停止的である。それは死ぬことを恐れる、それはその愛する耶蘇（イエス）を手放すことが出來ない、そして、有限の偉大なことが最早、その盲ひた眼によつて認められなくなる。恐怖の對象物は、今や尊崇にまで高められて、最早、手出しが出來なくなつたのかも知れない。尊崇が永遠になり、尊敬されるものが神と崇められる。かくして人間は最早。創造に從事せず、學ぶこと（知ること、探求すること等）に使役される、即ち或一定の對象に占有され、その深みに自己を沒却し、彼自身に歸らうとしなくなる。この對象に對する人間の關係は知ることと、探ぐることと、基礎を置くこと等のそれで、分解（廢棄、等）のそれではない。『人間は宗教的であるべき筈である』、と云ふことが定められてゐる。それで人々は、これが如何にして到達せらるべきか、宗教的であると云ふことの正しき意義はなにかと云ふ問題にのみ自からコセつきまわる。しかし、人間がその公理それ自からを疑ふべきものとして、それに疑問を差し挾み、それが打ち壞されてもかまはないと云ふ時には、またそれが全然異なつたものになる。道徳と云ふものも亦かくの如き類の神聖な概念である。人は道徳的でなければならない、そして只管正しい『如何にして』を探し求め、さうあるべき正しき道を探し求めなければならないと。人は直に道徳その物に肉迫し、道徳も亦それ自身一個の幻影ではないかと云ふ質問を敢へてなし得ないのである。故に道徳は凡ゆ

る疑念の上に高められ、依然としてなん等變化するところがない。かくして、我々は、神聖なる物と共に、一段一段と『聖』から、『聖の聖』にまで進みゆく。

人間は時として教養者と無教養者の二ツの階級に分たれる。前者は、かれ等がその名に價する限りに於て、自からを思想と心意とに專ら奉仕せしめた、そして（思想が原則であつた基督の時代以後、かれ等が支配者であつた）かれ等によつて認められたさまぐ〜の思想に對する奴隷的尊敬を要求した。國家、皇帝、教會、神、道德、秩序等は心意に對してのみ存在する思想であり、幽靈である。一個の單なる生物、一個の動物は小兒のやうに殆んどそれ等を省みない。けれど無教養者は實際小兒以外の何物でもない、そして自分の生活の諸必要にのみ留意する者はそれ等の精靈に對して沒交涉である。けれど、彼も亦かれ等の前に出れば弱くなるので、かれ等の力に屈し——諸思想に支配せられる。これが神權政治の意義である。

神權政治は思想の領土であり、心意の領土である！

我々は今日までも、諸々の思想によつて支持されてゐる人々によつて抑制されて神權政治的である。思想が神聖である。

しかし以上の二者は常に衝突しつゝある、時に前者が、また時に後者が忿怒を與へながら、そして、この衝突は二人の人間の衝突に於てのみならず、一人の同一人の場合に於ても起るのである。なぜなら、どんな教養人も物質に全然享樂を發見しない程教養を受けてはゐず、また同時に無教養でもない、そして、どんな無教養人でも全然思想のない者はないからである。最も教養ある人間でさへ物質に對してなんと云ふ願望を持つものであるか、また彼がすべての『空虚な原理』に對してなんと云ふ恐懼を抱くものであるかと云ふことがヘエゲルに於て明らかに認められる。ヘエゲルにとつては、現實が、この具象の世界が全然思想に照應すべきである、そして如何なる概念も現實性なしには存在しないのである。これがヘエゲルの哲學系統を最も客觀的なものとして知られるやうにした、まるで、その中で思想と物とがかれ等の結合を祝福してゐるかの如くにだが、これは單に思想方面に於ける、その最高なる專制と獨一なる權威と、心意の勝利と、それに供ふ哲學の勝利の方面に於ける暴虐の極端なる場合である。哲學はこの後それ以上に高き何事をも成就し得ない、なぜなら、その最高なる物が心意の無限力であり、心意の全能だからである。(註――ルソウや、フイランソロピストやその他の人々は教養と慧智とに反抗した、けれどかれ等はこれが基督教型の全ての人々に現在してゐる事實を見逃した、そして學問あり、洗練され

た教養のみを攻撃した）

精神的な人々はかれ等の頭の中に實現せらるべき或物を取り入れた。彼等は愛とか善とか云ふ樣々の概念を持つてゐて、それを實現して見たかつたのである。だから、かれ等は地上に愛の王國を建設しようとする、その國では最早何人も利己心から行動せず、各人が『愛から』行動する。愛が支配するべきである。かれ等がかれ等の頭腦に取り入れたもの、我々はそれを――固定した觀念と云ふ以外になんと呼ぶべきであらうか？　なぜか、『かれ等の頭腦が憑かれてゐるからである。最も抑壓的な幽靈は人間である『破滅に至るの道は諸々のよき志向をもつて舖かれてゐる』と云ふ諺を考へて見よ。自分自身の中に全つたく人道を實現しようとする志向、全つたき人間にならうとする志向はかくの如き破滅に類するのである。玆に善く、高尙に、愛するものとならうとする志向が屬するのである。

"Denkwuerdigkeiten"（思考に價することども）の第六篇、七頁に於て、ブルノオ、バウエルは云つてゐる、『近代の歷史にかくの如く恐ろしき重要なる地位を受け入れなければならなかつた中産階級は、何等の自己犧牲的行動、或觀念に對する熱情、思ひ揚りを爲し得ない。それはその凡庸性の諸利益以外のなに物にもそれ自からを捧げない。卽ち、それは常にそれ自からにのみ限られ

て止まり、遂にその容積を通してのみ打ち勝つ、それをもつて中産階級は情慾、熱心、堅實等の努力を疲れ切らせることに成功した、――その表面、その中に、それが新らしき觀念の一部を吸收するその表面を通して。』そして(六頁)『中産階級は革命的觀念を、(その觀念の爲めに非利己的な若しくは熱情的人々が自からを犧牲とした)それ自身の利益にのみ轉じ、精神を金錢にまで轉化した。――卽ち、確かに、それがそれ等の諸觀念から、その要點と、堅實性と、破壞的眞摯とあらゆる主我主義に反する狂熱とを取り去つた後で。』それなら、これ等の人々は自己犧牲的でも熱情的でも、理想でも、堅實でも、狂熱家でもない。かれ等は普通の意味で利己主義者である、冷靜で、打算的にかれ等の利益を探し求める利己的な人々である。

それなら、何人が『自己犧牲的』であるか? その充分な意味で、確かに、それは一個の物、一ッの對象物、一ッの意志、一ッの情熱等の爲めにその他以外の全ての物を賭ける人である。その父と母とを棄て、自己の目的に達せんとしてあらゆる危險と缺乏をも耐え忍ぶ愛人は犧牲的ではあるまいか? 或は又單一なる情熱に全ての慾求、願望、滿足とを捧げる野心家、財寶を蒐集せんが爲めに全ての物を彼自身に拒否する吝嗇家、或は快樂追求者等も亦さうではあるまいか? 彼は自餘の全てを犧牲とする程に一つの情熱に支配せられてゐるのである。

そして、これ等の自己犧牲的な人々は恐らく利己的で、エゴイストではあるまいか？　かれ等は唯一の支配する情熱を持つてゐるが故に、唯だ一つの滿足の爲めに備へる、そしてこれが爲めに一層强烈である。かれ等は全然その中に沒頭する。かれ等の全的活動は主我的である、けれど片寄つた寛大でない、狹隘なエゴイズムである。それは憑かれたものである。

『なんだ、そんなものはケチな情熱である、人間は、そんな物の爲めに自から奴隷となつてはならない。人間は偉大な觀念、偉大な主義の爲めに犧牲にならなければならない！』一つの『偉大な觀念』、一つの『偉大な主義』とは、恐らく、その爲めに無數の人々が死に出遇つた神の榮譽のことでもあらう。その自から好んでなる殉教者を發見した基督教、貧慾に異端者の犧牲を要求した神聖な天主教會、血醒き斷頭臺（ギロチン）に供なはれた自由と平等。

或偉大な觀念、善き主義、教義、系統、高き天職の爲めに生きる人間は世俗的な慾望や利己的な興味を彼の中に呼び起してはならないのかも知れない。茲に我々は教權主義（クレリカリズム）の概念を持つ、或はそれがまたその教育的活動に於て、學校先生風と呼ばれるかも知れない。なぜなら、理想主義者等は我々の上に學校の先生を演ずるからである。僧侶は特に理想に生き、理想の爲めに働き、眞に善き事の爲めに盡すべきものとされてゐる。それ故に人々は彼が世俗的の傲慢を示し、贅澤

な生活を欲し、舞踏或は賭博の如き快樂に耽けること――要するに『神聖な興味』以外のものを持つことの如何に不相應であるかを感ずるのである。玆にまた疑ひもなく、學校教師の貧弱なる俸給が原因するのである、かれ等はかれ等の天職の神聖なることによつてのみ酬ひられてゐると感じ、その他の享樂物を『拒否す』べきであるとされてゐる。

人間が自己の天職として仰ぎ見る神聖な觀念の教導團すらも缺けてはゐない。家族、祖國、科學等は、その天職に忠實な從僕を私の衷に發見するかも知れない。

玆に我々はこの世の舊い舊い狂氣に邂逅するのである、その時は未だ教權主義なくしてすることを學ばなかつた、――即ち、或理想の爲めに生きて働らくと云ふことが人間の天職で、その完成に忠實な程度によつて、彼の人間價値が計られる。

これが觀念の領土である。他の言葉で云へば教權主義である。即ち、ロベスピールも、聖(セント)ジュストも徹頭徹尾、觀念に皷吹された僧侶であり、熱狂者であり、この觀念の不斷の道具であり、理想を追ふ人々であつた。かくしてセント、ジュストは或演説の中に叫んでゐる、『祖國に對する聖なる愛の中には恐ろしき物がある。それは、慈悲も、恐怖も、考慮もなく公けの利害の爲めに全てを犧牲にする程排他的である。それはマンリウス(Manlius)を斷崖の下に突進せしめる。そ

れは私の意向を悉く犧牲とする。それはレギュラス（Regulus）をカルセージルに導き、一人の羅馬人を深坑に投げ込み、獻身の犧牲としてマラア（Marat）をパンテオンに納める。』

さて、これ等の理想若しくは神聖なインテレッセの代表者に反對して無數の『個人的』な冒瀆的インテレッセが對立してゐる。如何なる觀念も、系統も、神聖な主張もこれ等の個人的インテレッセによつて凌駕されず、また變化を受けない程偉大ではない。たとへそれ等の個人的利害觀念が瞬間的に、狂暴と狂信の時代に於て默することがあつても、かれ等はやがて再び『民衆の健全な理智』を通して頭を擡げて來る。これ等の觀念は、かれ等が最早、敵對する要のないまでに個人的利害觀念を、即ち、かれ等がエゴイズムを滿足させるまでに、完全に征伏することは出來ない。

今、私の窓の前で鯡々と呼び歩いてゐる男は澤山賣りたいと云ふ個人的インテレッセを持つてゐる。そして、若し彼の妻や、その他の者が同一事を欲するなら、これ同じく依然として個人的利害觀念である。けれど、若しこれに反して、一人の竊盜が彼の籠の品物を奪つたとしたならばその時、其處には、直に多數の、全市の、全國の、即ち、一言で云へば盜みを憎惡する全ての人々のインテレッセが起るであらう。その利害觀念の中では鯡賣りの男は沒交渉になり、その代り

に、『盗まれた人間』の範疇が前面に現はれて來るであらう。けれど、茲でさへ全ては個人的インテレッセにそれ自から分解せられるかも知れない、その干與者の各人が反省してその竊盗の刑罰に於て同意しなければならないと考へれば、なぜなら、罰せられない盗みは、やがて一般的になり、彼自身の物をも失なふ恐れが生ずるからである。けれど、かくの如き打算心は多數人の上に着せることが出來ないまでも、少なくとも我々はその竊盗が『犯罪人』であると云ふ叫びを聽くであらう。今、その事柄はかくの如くなる、たとへ或犯罪が自分にとつて、また自分が利害關係を持つてゐる何人かに對して殆んど何等の損害を與へない場合ですら、自分は、それを公然非難しなければならない。なぜか？　なぜなら自分が道徳に對して熱心であり、道徳と云ふ觀念に充されてゐるからである。それに相反するものは處を撰ばず攻撃する。なぜなら、彼の心の中に、竊盗が何等の疑問なしに憎惡すべきものとして位してゐるからである。プルウドンは、『財産は盗みである』と云ふ文章によつて、彼は直に財産の上に烙印を押したと考へてゐる。僧侶風の意味から見ても、竊盗は常に一個の犯罪である、或は少なくとも一ッの不法行爲である。

茲で個人的インテレッセが終りを告げる。籠を盗んだこの特別な人間はまつたく自分には沒交渉である。自分がインテレッセを持つのは竊盗そのもので、その概念を、その男が見本として示

してゐるのである。その竊盜とその人とは自分の中では調和しがたい反對者である。なぜなら、人は竊盜である時眞に人ではない。人は彼が盜みをする時に、彼自身の中の人間または人道を貶しめる。個人的干與から脱却する時に、人は博愛主義に入り込む、人間に對する親しみ、それが通常、人々に對する、各人に對する愛であるかの如く誤解されてゐるが、實のところ人間と云ふ非現實な概念、幽靈以外の何物でもないのである。博愛主義者が彼の心に携へてゐるそれは Τούς ἀνθρώπους 人々ではなく、Τὸν ἄνθρωπον 人間である。確かに、彼は各人に對しても配慮する、けれど、それは彼の懷かしむ理想が隨所に實現せられることを見たいと思ふからである。

であるから、玆では私、汝、我々に對する配慮に就て何事も云はれてはゐない。それは個人的インテレッセで、『世俗的愛』の項目の下に屬するのである。博愛主義は神聖な、靈的な——僧侶風の愛である。人間が我々の中に復歸されなければならない、たとへそれによつて我々哀れな奴共が悲哀に沈むやうなことがあつたとしても。それはあの有名な fiat justitia, pereat mundus（正義をして世界を征服せしめよ）と同一な僧侶的原則である。人間や正義は觀念で、幽靈である、その愛の爲めに全てが犧牲にされる。故に僧侶的精神は『自個犧牲』の精神である。

人間に誑らかされてゐる人はその誑らかされの範圍につれて各人を度外視し、理想の、神聖な

インテレッセの中に漂ふ。人間は、君も知つてゐる通り、一個人ではなく、一個の觀念であり、幽靈である。

さて、出來るだけ異つてゐる物が人間に所屬して、さう見做されることが出來る。若し一人が人間の主要な要求を敬虔の中に見出すならば、其處に宗教的教權主義が起る。若しまた或人が道徳にそれを見出すならば、その時道徳的教權主義がその頭を擡げて來る。この爲めに、今日の僧侶的諸精神が全ての物から『宗教』を造らうと欲してゐる。『自由の宗教』、『平等の宗教』等をそして、かれ等にとつてはすべての觀念が『神聖な干與』になる。e・g・市民權、政治、公開、出版の自由、陪審制度、などさへも。

さて、この意味で、『非利己』と云ふのはなにを意味するのか？　唯だ理想的なインテレッセを持つことで、その前には各人の敬意がなん等役するところないのである！

世俗人の硬い頭がこれに反對する、けれど數世紀は少なくとも、いつでもわがままな首を押さへ、『より高き力を尊敬する』やうに毛絲編みにされて來た。教權主義がそれを押し付けてゐた。世俗的なエゴイストがより高き力（e・g・舊約聖書の律法、羅馬法王等）を振ひ落した時に、直ぐとまたそれより七倍も高い力が彼の上にあつた、即ち法律の代りに信仰が、そして僧侶の制限

された團體の代りに全ての平人が僧侶になつてゐた。彼の經驗は恰かも自から解放されたと考へた憑かれた人間にやがて七ッの惡鬼が乘り移つたやうなものであつた。

上に引照された章句に於ては、すべて理想的なことが中產階級(Burgerklasse)にまで拒まれてゐる。中產階級は確かにロベスピールがそれによつてその主義を實行しようとした理想的主張に向つて畫策した。そのインテレッセの本能はこの主張がその階級の精神の向ふところと少しも調和しないことをそれに告げた。そして若し中產階級がその主義に對する熱心を更に進めようとするならば、その階級自からに叛逆するものであることをそれに告げた。中流階級はその苛酷な理論に勝利を獲す爲めにその悉ゆる目的を棄てる程非利己的に振舞はなければならなかつたか？さうだとすれば、恰かも人々が『全てを投げ棄てて私に從へ』とか『汝の持つてゐる全てを捨てて貧者に與へよ、然らば汝は天國に寶を積むであらう。來て、私に從へ』と云ふやうな說敎に耳傾けてゐる時の僧侶に見事ソックリである。或決定的な理想家等はこの使命に從ふ。けれどたいていはアナニアス(Ananias)やサフィラ(Sapphira)のやうに、振舞ふ、即ち、半ば敎權的な、態度を維持し、半ば世俗的に神とマンモンに兼ね仕へてゐるのである。

私はその持てる目的の全てをロベスピールによつて打ち碎かれたいと欲しないことに對して中

産階級を非難はしない。即ち、そのエゴイズムが、どれ程、革命的觀念に機會を與へることが出來るか？　それに要求することに對して。けれど（若し、少しでも非難が茲にあるとすれば）人はかれ等自身のインテレッセを中産階級のインテレッセの爲めに失なふやうな人々を非難するかも知れない。けれど、かれ等も亦た早晩、何がかれ等の利益になるかを理解することを學ばないであらうか？　アウグストベッカア（August Beeker）は云つてゐる（『現代の民族哲學』二十二頁）『生産者（―Proletarier）を獲得するには從來の權利觀念の否定のみで決して充分ではない。民族は不幸にしてその觀念の理論的勝利を殆んど省みない。人はかれ等に如何にしてこの勝利が實際的に人生に利用せら得るものであるかを ad oculos（明白）に説明しなければならない。』そして（三十二頁『汝等は若し民衆を土臺として働きたいと欲するなら、かれ等の實際の利害關係によつて民族を把持しなければならない。』この後で直ぐと彼は道德の立派な解體が既にどれ程われわれの農民の間に擴がりつつあるかを示してゐる、なぜなら、かれ等は道德の命令よりも寧ろかれ等の實際的利害興味に從ふことを擇んでゐるからである。

なぜなら人間に奉仕した革命的な僧侶や學校敎師等等は、人々の首を刎ねたからである。神聖團體外にゐる革命的平人等は首を刎ねることに對して別段大きな恐怖を感じなかつた。そして人

間の權利よりもかれ等自身の權利を心配した。

だが、個人的インテレッセを肯定し、常にそれを要求してゐる人々のエゴイズムがそれにも拘らず、どうして常に僧侶風な又學校先生風な（即ち、理想的な）インテレッセに服從しつつあるのか？ それはかれ等の人格がかれ等にとつてあまりに小さく、あまりに無意味に見えるからである、――そして、實際さうでもある、――全ての物に對して自分から主張し、それ自身を完全に力強くするには。かれ等が自分自身を二個の人格に、即ち永遠と一時的なものとに分け、常に一方ばかり、又は他方ばかりを、――日曜日には永遠を、その他の日には一時的を、祈禱の時は前者を、勞働の時は後者を――顧慮するのは明らかにこれが爲めである。かれ等自身の裏に僧侶を持つてゐる、故にかれ等は僧侶から脫却することが出來ず、日曜日每に內部的にかれ等自からの說敎を聽くのである。

これ等の二元的本質に關する解決に到達するために人はどれ程、惡戰苦鬪したことであらう！理想が理想に次ぎ、主義が主義に次ぎ、系統が系統に續いた、そして何人も如何にして永久に所謂『エゴイスト』なる『世俗』人の矛盾を抑制すべきかを知らなかつた。これはそれ等の觀念が悉く自己の全意志をその中に取り入れて滿足せしめるにはあまり弱は過ぎたと云ふことを證據立

てゝゐないであらうか？　かれ等は依然として自己に敵對してゐた、たとへ、その敵對が永い間隱されてゐてさへも、それは自己所有と同一事であらうか？　それはまた仲介を試んとする一ツの企てであらうか？自分がどんな主義・方に向つても、それは理性の方向に向ふものであるかも知れない、で、自分をいつでも再びそれに背を向けなければならなかつた。若しくは又、自分が常に合理的で、全ての點で理性に從つて自分の生活を整へることが出來るものか？　勿論、自分は理性を追求することが出來る、自分は、恰かも神やその他の觀念を愛することが出來るやうにそれを愛することが出來る。自分は、自分が神を愛するやうに、哲學者、即ち愛智者であることが出來る。けれど、自分の愛する物、自分の努めて求める物は自分の觀念、自分の概念、自分の思想の中にのみある。それは自分の心と自分の頭との中にある、それは心臟の如く自分の中にある、けれどもそれは自分ではない、自分はそれではない。

　僧侶的心意の活動には特に人が屢々『道德的影響』として呼ばれてゐるのを聽くものが從屬する。

　道德的影響は謙讓の始まるところに出發する。如何にも、それはこの謙讓それ自身、謙遜（Dēmuth）にまで氣質（Muth）を折り曲げること以外の何物でもない。若し私が、巖石が崩れると云

ふので誰れかに逃げろと云つたからと云つて、自分はこの命令によつて道德的影響を振つてはゐない。若し自分が或小供に『若しおまへがテーブルの上の物を食べないなら、餓えるだらう』と云つたからとてこれは道德的影響ではない。けれど、若し、自分が子供に『おまへは御祈りをしなければゐけない、おまへの兩親を敬ひ、十字架を尊敬し、眞實を語らなければゐけない、なぜならこれは人間に屬してゐる人間の務めだから』とか『これは神樣の思し召』だとか云ふならばその時、道德的影響は完全である。その時、人は人間の天職の前に屈み、從順に、謙遜になり、規則或は法則として定められた外部のものの爲めに自分の意志を棄てなければならなくなる。彼はより高き物の前に自から卑下しなければならなくなる。『自から謙遜する者は高めらるべし。』如何にも、如何にも、子供達は夙に敬虔と、神らしきことと、禮儀正しきことを見習はなければならない。教育のある人とは『澤山のよき格言』が、浸み込み、印象せしめられ、漏斗を通して注ぎ込まれ、擇り分けられ、教へ込まれた人のことである。

若し人がこれに對して肩をゆするなら、直に善人は絕望的にかれ等の手を絞つて叫ぶであらう、『けれど、どうぞ、若し子供達にいい教育を與へないなら、どうでせう、この時には子供達は罪の顎との中へ走り込み、仕方のないヤクザ者になるでせう！』靜かに、汝禍ひの豫言者等よ。

かれ等は確かに君の云ふヤクザ者になるであらう。けれど、君の意味するところのものが偶々極めてヤクザな意味になりはしないだらうか。大膽不敵な若者は最早、何物も汝等から喚めかれ、饒舌られることを許さないであらう、そして、汝等が人間の記憶の始つて以來、妄言し、譫語し來つたあらゆる狂愚に對して何等の同情をも持たないであらう。かれ等は遺傳の法則を絶滅するであらう、即ちかれ等は汝等が汝等の祖先から繼承した汝等の痴愚を好んで繼がうとはしないであらう。かれ等は遺傳された罪惡を破壞する。若しも汝等がかれ等に命令して『いと高き者の前に屈め』と云ふなら、かれ等は答へて、『若し彼が我々を屈從せしめたいなら、彼自から來てさうしたらよからう。』と云ふであらう。そして、若し汝が神の怒りと刑罰とを以てかれ等を嚇すならば、かれ等はそれを案山子にでも嚇かされた位にしか思はないであらう。若し汝等が最早、幽靈でかれ等を恐怖がらすことに成功できないとしたら、その時は幽靈の領土が終りを告げて、乳母の話が——信仰を見出さなくなる。

ところが、再びよき教育と教育制度の改善を押し付けるのは誤まりなくかの自由黨員等 (die Liberlen)ではないだらうか? なぜなら、かれ等の自由主義は、かれ等の『法律の範圍内の自由』

は訓練なしにどうして生れて來よう？ たとへ、かれ等は神を恐れることを精確に教育しないとしても、なほかれ等は更らに嚴密に、人間に對する恐怖を要求する、そして訓練によつて『眞に人間の職務に對する熱誠』を呼び醒す。

永い時が經過した、その間、人々はかれ等が眞理を把んでゐたと云ふ想像をもつて滿足してゐた、そして、かれ等は恐らくかれ等自からその眞理を所有する爲めには眞實でなければならないと云ふことを眞面目に考へてはゐなかつた。この時が中世紀の時代であつた。

平凡な意識——即ち、物質と交渉する意識、物質に對してのみ、若しくは感覺的な、感覺を動かすものに對してのみ感受性を持つその意識を以つて——かれ等は物質的でないもの、感覺によつて認められないものを把持しようとした。まことに人がまた遠方を見ようとして彼の眼を見張る如く、或は又指が鍵盤を充分正しく押すことが出來る位に熟練するまで努めて彼の手を働かすやうに、かれ等はかれ等自からの中に全然超感覺を受け入れることが出來るやうになる爲めに最も多樣な仕方に於てかれ等自からを純潔にした。けれど、かれ等が純潔にしたものは、結局、肉慾人に過ぎなかつた、所謂、限られた、客觀的思想と呼ばれてゐる通俗な意識に過ぎなかつた。

しかも、ルウテルが理性の名の下に非難してるこの思想、この悟性は神性を掌握することが不可能であるから、その純潔作用が眞理の理解に寄與したところのものは、恰かも年百年中舞踏に足を練習しながら、遂に横笛を吹くことを習はうと望むが如きものであつた。その人と共に所謂中世紀が終りを告げたルウテルは、若し人が眞理をわが物にしようと欲するならば、彼が嘗てあつたより以上の者にならなければならない、――即ち眞理それ自からの如く眞になければならないことを理解してゐた最初の人であつた。自己の信仰の中に眞理を既に持つてゐる人のみ、それを信ずる人のみがその分與者になることが出來る。即ち、信ずる者のみがそれに接近することが出來、その深さを探ぐることが出來る。笛を吹くことの出來る人の機能のみが更に進んだ笛吹きの技能に到達することが出來る、そして、眞理に對して正しい機能を所有する人のみがその分與者になることが出來る。肉感的な、客觀的な、すべて物質に關係あるもののみを考へることの出來る人は、事實、物質に關係あるもののみを彼自身にまで思ひ浮べる。けれど、眞理は、全然官能によつて認めることの出來ない素材から作られてゐる精靈である『故により高き意識』にのみ適し、『世俗的な心』には不適當である。

それ故、ルウテルと共に、眞理は、(それが一個の思想である故に)、思考する人の爲めにのみ

存在すると云ふ智覺が夜明ける。と云ふのは即ち、だから、人は全然異つた立場を取らなければならない即。ち、高遠な、信仰ある、科學的立場、或はその對象に關する思想の立場、——思想即ち心に對する心の立場を取らなければならない。故に、等しき者のみが等しき者を認識する。

『汝は汝の理解する精靈と等しい』(註——ゲエテの「フアウスト」中の句)

新教主義が中世紀の神權主義を打破したが爲めに、一般の神權主義がその爲めに粉碎されたと云ふ意見が根强くなつた、それと同時に、新教主義は擬ふかたなき『改革』で、かの舊式な神權主義の復活であることが全然見落された。かの中世紀の神權政治は、それが有る限りの神聖でない物の未開主義をその傍に自由に横行せしめた限り、力の薄弱なものであつた。そして、神權政治の力を第一番に堅くしたのはかの宗教改革であつた。『かの宗教改革は主として宗教的原則を藝術や、國家や、科學から抽象的に分裂せしめることであつた如く、その改革から生じて來た神學的な敎權的な諸運動も亦、單にこの宗教的原則を人道の他の諸權力から不斷に抽象化せんとするものに過ぎない』(『"Anekdota"II 152)とブルウノオ・バウエルが考へるならば、私はその全然反對を正しいと考へる。そして、精靈の領土、若しくは心意の自由(それはいづれも同一である)はこ

れまで決してかくの如く抱括的で、また全能的ではなかつた、なぜなら、現在に於ては、宗的的原則を藝術や、國家や、科學から引き離す代りに、反つて、それ等のものを全然現世から引き離して『精靈の領土』に引き上げ、宗教的にしたと自分には思はれるのである。

『信ずる者は神である』また『自分は考へる、故に自分は存在する』(Cogito, ergo sum) と云つたルウテルとデカルトとは兩方とも好一對であつた。人間の天は思想であり、――心意である。思想以外、信仰以外の全ての物を彼から捻き取ることが出來る。特別な、信仰ゼウスや、アスタアテや、エホバやアラに對する信仰の如きは破壞されるかも知れない、しかし、信仰それ自身は破壞することは出來ない、思想の中に自由がある。自分の必要とするところのもの、自分の飢え求むるものは最早、何等の恩惠によつて、――たとへば處女マリア或は聖徒の仲介、又は自由な若しくは嚴格な教會によつて――與へられはしない、だが、自分が自分自身でそれを獲得する。要するに、私の存在(sum)が思想と心意の天に於ける生存者、即ち Cogitare (認識者) である。けれど、私自からは心意、思考する心 (デカルトによれば)、信ずる心 (ルウテルによれば) 以外の何物でもない。私の身體は自分ではない。私の肉體は嗜慾や苦痛から惱むかも知れない。しかも、私は自分の肉體ではなく、自分は心であり、心のみなのである。

この思想が今日まで改革史を通じて流れてゐるのである。

『科學的意識』を唯一の眞の確實なものとして高めることにより、基督教を完全な効果にまで齎らさうとする眞面目な努力が先づデカルト以後に於ける近代的哲學によつてなされてあつた。由來、それは絶對の懷疑(dubitare)をもつて始まる、そして、通俗の意識をアトムに粉碎し、『心意』や、『思想』が認知しない全ての物を見向きもしない、その意識にとつて自然は無に等しい、また人々の意見も、かれ等の『人間的法則』も無價値である。そして、それは全ての物の中に理性を齎し、『眞實なるものは理性であり、理性のみが眞實である』と云ひ得るまでは休まない。かくして、それは遂に心意と理性をば勝利にまで齎した。

そして、全てが心意である。なぜなら、全てが合理的であるから、また、全ての自然が、最も轉倒せる人間の意見すら、なほ理性を含んでゐるからである。かくして、『全ては最善のものにまで奉仕しなければならない』、即ち理性の勝利にまで導かれなければならない。

デカルトの懷疑(dubitare)は、瞑想、思想、精神――のみが存在すると云ふ斷定を含んでゐる眞實性を不合理な物に歸する『通俗』な意識との完全な分離！　合理的なもののみが存在する精神のみが存在する！　これが近代哲學の原則であり、純粹な基督教的原則である。デカルトはそ

の當時既に肉體を嚴密に精神と區別した、そして『肉體を構成するものこそ他ならぬ精神である』とゲエテが云つてゐる。

けれどもこの哲學それ自身、この基督教的哲學は未だその理性から脫却することが出來ず、それが爲め、『單なる主觀』や、『氣まぐれや、思ひ付や、ムラ氣』等を嘲罵してゐる。その哲學の要求するところは神性が全ての物に現はれ、全ての意識が神性の知覺となり、人間が至る處に神を見るやうにならなければならないと云ふことである。しかし、神は決して惡魔なくしては存在しない。

この理由からして、哲學者の名稱は、この世の事物に對して眞に開いた眼を持ち、明析な、眩惑されない凝視を持ち、世の中に對する正しき判斷を有する人、——つまり、世の中を世の中として見、事物を單に、事物として、卽ち、全ての物をそのあるがままに散文的な見方をする人には與へられないのである。しかし、この世の中に天を、地上に超自然を、俗界に神性を見て、それを指摘し或は說明する人のみが哲學者である。前者の如き學者は、永久に賢明であるかも知れない、けれど、これから脫れることは出來ない——Was kein Verstand der Verstandigen sieht, das udert in Einfalt ein kindlich Gemut. (賢明な人々がかれ等の知慧の術によつて見ないものを子供

らしい心によつて簡單に實行される——Schiller, "Die Worte des Glaubens") 哲學者になるにはこの子供らしい心、神性に對するこの眼を必要とする。最初の學者は單に『通俗な』意識を持つてゐる、けれど、神性を知り、それを語るべき方法を知つてゐる人は『科學的な』意識を持つてゐる。この理由によつて、ベエコンは哲學等の領域から除外された。そして確かに英國の哲學と呼ばれてゐるものはベエコンやヒユウムの如き、所謂『明析な頭腦』の發見以上には進まなかつたやうに思はれる。英國人は子供らしい心の單純性を哲學的意義に高める法を知らなかつた。卽ち子供らしい心から哲學者を製造する法を知らなかつた。言ひ換へれば、かれ等の哲學は神學的に或は神學になることが出來なかつた。しかも哲學は神學としてのみ眞にそれ自からを生き盡し、その終りを全うすることが出來るのである。討死するまでの戰爭が神學の中にある。しかるにベエコンは神學的な疑問や、第一義的な諸點に就て自からを煩らはさなかつた。

　認識は生命の中にその對象を有してゐる。獨逸思想は、他の國のそれに比して、生命の源泉に到達しようと努める、そして、認識それ自からの中に始めて生を發見する。デカルトの Cogito, ergo sum は、『人は思考する時にのみ生きる』と云ふ意義を有してゐる。思考する生活が『智的生活』と呼ばれる！　精神のみが生きる、そして精神的生活が眞の生活である。かくの如くして、

自然に於ても『永遠の法則』、自然の精神或は理性のみがその生活である。人間に於ても、自然に於けるが如く、思想のみが生きる。それ以外の全てが死んでゐる！　精神の歴史はこの抽象化、この一般物の、無生物の生命にまで歸着する精神である。神のみがひとり生きる。幽靈以外の何物も生きない。

近代哲學や近代が自由に到達したと云ふことを人は如何にして斷定するべく試みることが出來よう、なぜなら、それ等は我々を客觀性の力から解放しなかつたから。或は又自分は恐らく、個人的な權力者を恐れない時に、暴君から解放されてゐるのではあらうが、果して自分が彼に負ふてゐると想像する敬愛を悉く打破することが出來るであらうか？　近代に對する場合がこれと同一である。かれ等は單に存在する對象を、現實の支配者等を想像の對象、卽ち觀念にまで變化さした、その前にあつては、舊い尊敬が失はれなかつたばかりでなく、更にその密度を增したのである。たとへ、人々は神や惡魔を――以前の如き愚劣な存在として――爪彈きしたとしても、人々は更にそれ以上の注意をかれ等の觀念に對して拂つたのである。『かれ等は惡魔から脫れた、けれど惡は依然として殘つてゐる』(註――「フアウスト」の中に出て來る妖婆の臺所でメフィストの云ふ言葉のパロディ）現存する明白なものによつて最早自から欺かれることがないと云ふ決心が

一度出來上つたので、現存する國家に對して叛逆し、若しくは現存の律法を顚覆することに就て何等の狐疑が感ぜられなくなつた。しかし、國家の觀念に反き、律法の觀念に服從しないと云ふこと、それを何人が敢へてなし得たらう？　かくして、人は依然として『市民』であると同時に『律法を尊敬する』忠實な人間であつた。いかにも、人は彼自身に對して律法を尊敬する者であると思へば思ふ程、更に合理的に、以前の不完全な法律を廢して『法の精神』に服從する者であることを示さうとした。すべてこれは、對象が單にその形式の上に變化を蒙つたことを現はすばかりである。それ等は依然として、卓越せる權力を有してゐた。要するに、人はなほ服從に卷き込まれ、物に憑かれてゐた、そして、反省の中に生きてゐた、反省する對象を有してゐた、それを人は尊敬し、畏敬と恐怖とを感じてゐた。人は事物を事物の概念、即ち思想と觀念にまで變化させる以外に何事をも爲し得なかつた。それによつて、人間の服從性は更に密着して、破りがたいものになつた。かくして、兩親の命令から自からを解放し、叔父や叔母の勸告を度外視し、兄弟姉妹の懇願を無視することは困難なことではない、しかし、その廢除された服從性は容易に人の良心に入り込むのである、そして、人が個々の命令に從ふことが少なくなる程、（なぜなら、彼は自からの理性によつて、それを不合理であると認むるが故に）、それだけ多く意識的に敬虔の念や

家族的愛情に縋り付くと共に、彼が家族的愛や、子たる義務に對して形造つた概念に對して犯す罪を自から許すことが遙かに困難になる。現存する家族に對する服從から解放されると同時に、人は更に束縛的な家族の觀念にまで落ち入る。人は家族の精神に支配される。ジョンやマギイ等から成立せられてゐる家族――その領域が無力になつた――が單に一般の『家族』と見做されて內的化せられる、それに對して人は『我々は人間よりも寧ろ神に服從しなければならない』と云ふ格言を適用するこの場合、その意義を更に敷衍すれば『自分はおまへの無意味な要求に自分を應じさせることは確かに出來ないが、私の「家族」として、おまへはなほ私の愛と配慮の對象となることが出來る』なぜなら『家族』は個人が決して犯してはならない神聖な觀念だからである――そしてこの家族は、一個の思想、概念にまで內化され、精神化されて今では『神聖』視せられてゐる、そして、その暴虐は自分の良心を騷がせるが故に更に十倍も悲しむべきものである。この專制主義は、家族と云ふ概念が自分にとつて無になる時にのみ破られる。『女よ、我は汝との關はりあらんや？』（約翰傳、二章、四節）『自分は人をその父に叛かせ、娘をその母に叛かせるが爲めに來た』（馬太傳、十章、三十五節）と云ふが如き基督敎的格言は天國の若しくは眞の家庭に我々を干與せしめる何物かによつて伴はれる、そして、國家が、家族と衝突する場合に、我々

がその命令に服從するべく命ずる國家と更に變りがない。

道德の場合も家族のそれと等しい。多くの人は色々な道德を拒否する、しかし『道德』と云ふ概念を拒否することは頗ぶる困難であると見える。道德は德行の『觀念』で良心の上にかれ等の振ふ智的權力である。それにひきかへ德行は精神を支配するべくあまりに物質的で『智力的』な人、所謂獨立せる『自由思想家』を束縛は出來ない。

新教徒は彼の意のままに道德を据えるかも知れない、『聖書』や『神の言葉』が依然として彼にとつて神聖なのである。その人にとつてこれが最早『神聖』でなくなれば、彼は――新教徒ではなくなるのである。しかし、これにも拘らずその中に『命令されて』ゐるもの、神やその他のものによつて指命されてゐる公けの諸權力がまた彼にとつて神聖なものになつてゐる。彼にとつてこれ等のものは、破りがたく、近づきがたく、『全ての懷疑を超越してゐる』物である。そして、實際上では一ツの打擊（Rutteln）になる懷疑が大抵の人の所有であるが如く、これ等のものは、彼自身以上に『高められ』てゐる。それ等のものから逃れることの出來ない人間は――信ずるであらう。なぜなら、それ等を信ずることはそれ等のものに束縛されることである。新教にあつて信仰が更に內的な信仰になつたと云ふ事實を通して、奉仕がまた更に內的な奉仕につた。人はそ

れ等の聖物を彼自身の中に取り入れ、悉ゆる彼の思想や努力を以つてそれ等に纒ひ付かせ、それ等を『良心の事件』とし、それ等から、彼自身に對する『聖なる義務』を打ち建てた。故に新教徒の良心が逃れることの出來ないものは彼にとつて神聖である。そして、良心的でなることが最も明白に彼の性格を表明する。

新教主義は實際人間を秘密探偵によつて支配されてゐる國のやうな位置に立たせた。探偵や、立聽きをする『良心』があらゆる心の運動を見張りしてゐる、そして、すべての思想と行動とはそれに對して、『良心の事件』、即ち『警察の仕事である。かくの如く、人間を『自然的衝動』と『良心』(内的平民と内的刑事)とに割き分けることが新教徒を成立せしめてゐる。聖書の理性(天主教的『教會の理性』の代りに)は神聖なものとして位する、そして、聖書の言葉が神聖であると云ふこの感情と意識が——良心と呼ばれてゐる。かくの如くして、その時、神聖が『人の良心の上に置かれ』るのである。人が若し良心、神聖な意識から自からを自由にしないなら、その人は實際、非良心的に行爲してゐるのかも知ない、けれど決して無良心的にではない。

天主教徒は、彼が命令を成就する時に、滿足する彼自身を發見する。新教徒は彼の『最善なる判斷と良心』に從つて行爲する。天主教徒は單なる俗人に過ぎないが、新教徒は彼自身一個の

僧侶(Geistlichr)である。かくの如きものが將に中世紀以後に於ける改革時代の進歩である、——即ち精神人が完成されたのである。

ジエシユイト教の倫理說は赦罪の缺賣以外の何物であつたか？　罪の重荷から救はれた人間が今では罪の免除に對する洞察を得た。そして、自分の罪がどれ程實際彼から取り去られたかを彼自身に確かめた。由來甲或は乙の特別な場合に於て（良心學者等）彼の犯したものは少しも罪ではないことが、しかく明瞭になつた。赦免の販賣は凡ゆる罪惡、破戒を許すべきものとした、そして良心の凡ゆる運動を沈默せしめた。如何なる肉慾も教會から買はれたものであつたなら、許されたかも知れなかつた。この肉慾擁護がジエシユイト教徒によつて繼續された、そして一方では嚴格に道德的な、暗黑な、狂信的な、改悔的な、祈禱する新教徒が（たしかに、基督教の眞の完成者として）智的な精神的な人間をのみ承認した。天主教、特にジユシユイトがかくの如くして利己主義に幇助を與へ、プロテスタンティズムそれ自からの中にさへ、氣まぐれなそして無自覺な追隨者を見出した、そして、肉慾の絕滅から我々を救つた。それにも拘らず、新教的精神が愈々益々その領土を擴張する。そして、その『神性』の傍には、全て神聖なものから分ちがたい『惡魔的』をジユシユイト精神が代表してゐる、しかるに新教主義は決して獨りそれ自からを主張

することが出來ず、佛蘭西では、如何様に、新教主義のフィリスティニズムが勝利を得、精神が支配してゐるかを眺め見なければならないのである。

　新教主義は通例俗事を、即ち、結婚や、國家等を再び名譽あるものに癒した故を以つて讃美されてゐる。けれども、平俗、還俗としての平俗それ自からは、かの俗界を立たしめ、その快樂を味ふ天主教主義に對してよりも寧ろそれ自身に對して更に無頓着である、しかるに、合理的な、整然たるプロテスタントは平俗を全然絶滅しようとする、そして、それは單に平俗を神聖にすることによつてである。かくして、結婚は神聖になつてその自然性を奪はれた、しかもその神聖は單に、教會からその聖別を受理するのみで、根柢に於ては不神聖である天主教的聖誓の意味に於てではなく、それ自身神聖なものにならうとする、即ち神聖な關係と云ふ意味に於てである。かくして國家その他も同一である。以前にあつては、法皇が國家に對して聖別を與へ、祝福を與へまたその君主を與へた。今や、國家は內的に神聖である、帝王は僧侶の祝福を要せずして神聖である。自然の命令、即ち、自然の法則が全然『神の命令』として聖別された。故に、アウグスブルグ信仰告白文の第二條に於てかく云はれてゐる、『男女同棲するは自然の法則である、と民法學者等が正しく賢明に云つたやうに、我々はこの言葉を合理的に守つてゐる。さて、それが自然の

法則であるなら、それは神の命令である、それ故、自然に根ざしてゐる、そして、その故にまた神聖な律法である。』そして、フォイエルバハが、道徳的關係を、實際神の命令としてではなく、その中に棲息する精神の故に神聖であると公言する時に、其處に最新の新教主義以上のなにものがあるだらうか？『然しながら結婚は――勿論、愛の自由は結合として――此處に形ち造られた結合の性質によつて、それ自から神聖である。その結婚のみがひとり宗教的で、愛と云ふ結婚の本質に相應するところの眞の結婚である。かくして、それ等悉ゆる道徳的關係に於てもさうである。それ等は倫理的で、道徳的精神を以つて培はれる、其於に於てのみそれ等自から宗教的なものとして位する。眞の友誼は、友誼の範圍が宗教的良心、信者が神の威嚴を守護するその同一な良心をもつて保存せられる處にのみ存する。友誼は汝等に對して神聖であり、神聖でなければならない、そして、財産も、結婚も、萬人の幸福もひたすらそれ自からに於て神聖でなければならない。

それが極めて根本的な考察である。天主教主教に於ては、俗人がまつたく聖別され、神聖にされ得る、けれど、それはこの僧侶的祝福なしには神聖ではない。新教主義に於てはこれに反して世俗の關係がそれ自からに於て、それ等が單に存在してゐると云ふことによつて神聖である。』目

的は手段を神聖にする』と云ふジエスイトの格言はそれによつて神聖が附與せられる聖別にシックリ附合する。如何なる手段もそれ自ら神聖でも不神聖でもない、しかし教會に對するそれ等の關係、教會に對するそれ等の效用が手段を神聖にする。弑逆はかくの如きものとして認められてゐた。若しそれが教會の爲めに行はれたなら、たしかにそれは教會によつて神聖にせられる、たとへ、その聖別が公然宣言されないとしても。プロテスタントにとつては、陛下は神聖なものとして位する。然るにカトリックにとつては、法皇によつて聖別せられる陛下のみが陛下たる位置を保存する。そして、法皇が、たとへ、特別な條例なしにであつても、一度にこの神聖を附與することによつてのみかくの如きものとなる。若し法皇が彼の聖別を取り消すならば、帝王はカトリックにとつて單なる『世俗又は平人』、即ち『聖別されざる』人として取り殘されるであらう。

若しもプロテスタントが神聖なるものにのみ結び付けられんが爲めに肉慾それ自からの中に神聖を發見しようと求めるものとすれば、カトリックは寧ろ肉慾そのものを彼自身から分離せる領土に放逐しようと努める、其處では肉慾が、他の自と同じく、それ自からに對してその位置を保存する。天主教會は平俗の結婚を神聖な階梯から放逐した、そして、それ自からのものであつたそれ等を通俗な家庭から取り去つた。プロテスタント教會や結婚や家族的結合を神聖なものである

からその僧侶等にとつても不適當なものでないと宣言した。

ジエシユイトは、善き天主教徒として、全ての物を聖別する彼は唯だ彼自身に對してかくの如く云ふ必要がある、『自分は僧侶として、教會に缺くべからざるものである、しかし、自分は自分の慾望を適宜に和らげる時に一層熱心に教會に奉仕することになる。故に、自分はこの娘を誘拐し、自分の敵を彼處で毒殺しよう。自分の目的はそれが僧侶の目的なるが故に神聖である、それが爲めにそれはその手段を神聖する。』と。何故なら、それは、目的に於て、なほ教會の爲めになされてゐる。何故に天主教の僧侶は皇帝ヘンリイ七世に毒菓子を――教會の福祉の爲めに――手渡すことから縮み上るであらうか?

純粹な――教會的なプロテスタント等は、すべての『無邪氣な快樂』を罵詈した、なぜならば神聖な、精神的なもののみが無邪氣であると云ふ理由のみで。プロテスタント等はその中に聖靈を指摘することが出來ない故をもつて、舞踏や、芝居や、虛飾(卽ち教會に於ける)等を排除しなければならなかつた。

この淸教徒的カルギン主義に比較して、ルウテル主義は、宗教的な、卽ち精神的な道程に於て遙かに急進的である。何故なら、前者は大多數の物を直に肉慾的な、世俗的なものとして、排除

し、教會を淨化する。これに反して、ルウテル主義は出來るだけ全ての物の中に精神を携へ來り聖靈を全ての物の中の本質として認め、世俗的な全ての物を聖別しようとする。(『何人も高潔な接吻を禁ずることは出來ない。』名譽の精神がそれを聖別する) そして、觀念を全ての物の中に携へることに完全に成功したのはかのルウテル的ヘエゲルであつた(彼は自から、アチコチで『ルウテランとして止まらんことを欲する』と宣言してゐる。全ての物の中に、理性、即ち、精靈がある、即ち、『現實は合理的である。』なぜなら、現實は、實際に於て、全ての物である、各物、即ち、各虚僞の中に眞理が發見せられ得るが如く。其處に何等絶對的の虚僞、絶對的の禍等は存在しない。

偉大なる『精神の仕事』が殆んどまつたく、プロテスタントによつて創造された、そして、かれ等のみが心の眞の弟子であり、消費者であつた。

人間の支配出來るものはなんと僅かだらう! 彼は太陽をしてその軌道を走らしめ、海をしてその波を逆卷かしめ、山々をして、天に向つて聳えしめなければならない。かくして、彼は支配しがたき者の前に無力で立つ。彼はこの巨大なる世界に對して無力であると云ふ印象を禦ぐこと

が出來るだらうか？　彼が服從しなければならないのは固定せる法則である、それが彼の運命を決定する。さて、基督前派の人道はなんに向つて働らいたか？　さまぐ〵の運命によつて自から煩はさるることなく、それ等の浸入から脫却せんとする方へ。ストイック派の人々は無頓着によつて、これに到達した、自然の攻擊を沒交涉なりとし、自からをしてそれ等の影響を受けしめないと宣言して、ホーレスはかの有名な Nil admirari（なにものにも驚嘆しない）を發言してゐる、彼はそれによつて同時に、世界と云ふ、他の者の無頓着を公言してゐる。それは我々に影響すべくもなく、我々の驚嘆を引き起すべくもない。そして、かの inpavidum ferient ruinae（物の破滅は彼の心を少しも動かさないであらう）は、かの『我々は地球が亡びるとも恐れない』（詩篇、四十六章、三節）と云ふあの同一の沈着を發想してゐる。すべてこの中にはこの世が空虛であると云ふ基督教的命題、卽ちこの世に對する基督教的侮蔑を入れるべき餘地がある。

舊世界が、それによつてその目的を用意せんとして働いた『賢人』の自若たる精神は今や、如何なるアタラキシアも、ストイック的勇氣もそれを禦ぐことが出來ない內的な動搖に遭遇した。この世の凡ゆる影響から安全にされ、その激動に對して無感覺であり、その攻擊の上に毅然として、何物をも感嘆せず、この世の如何なる顚覆にも狼狽せしめられなかつたその精神が、——再

び抑へ難きまでに泡立つた、なぜなら、瓦斯（精神共）がそれ自身の內部に於て進展せしめられた、そして外部から來る機械的の衝動が無效になつた後で、內部に動搖してゐる化學的緊張がその驚くべき演戲を始めた。

事實、古代史は、――自分は自分がこの世に對する自分の所有權を得た迄闘爭した――と云ふことを以つて終りを告げてゐる。『全ての物が私の父によつて私にまで手渡された』（馬太傳、十一章、二十七節）。それは、自分にとつて威壓的な、近づくべからざる、神聖なものであることを止めた。それが不神聖になつた、そして、今、私は、若し自分が欲するならば、ほしいままにその上に凡ゆる奇蹟を行ふ力卽ち心の力を働かすことの出來るまで全體的にそれを取り扱ふ、――卽ち山々を移動せしめ、桑の樹に命じてかれ等自身を裂かしめ、海にまで自からを移し植えしめる（路可傳、十七章、六節）そして、出來得る限りの、卽ち考へられ得る全てのことをする。『全てのことが信ずる者にとつて可能である。』（馬可傳、九章、二十三節）自分はこの世の主である、自分のは『光榮』（Herrlichkeit）である。この世が散文的になつた、なぜなら、神聖がこの世から消え失せた。自分が自分（卽ち、心）の欲するがままに處理するところのものが自分の財產である。

自分が自分自身をこの世の自主であるべく高めた時に、エゴイズムがその最高の完全な勝利を

得、この世を征服し、無世界になり、永年の獲得物を錠と鍵との下に置いた。

最初の財産、最初の『光榮』が獲得された！

けれどこの世の自主は未だ彼の思想や、感情や、意志の君主ではない、なぜなら、精神が依然として神聖である、『聖靈』と『この世のなき』基督者は『神なく』なることは出來ない。若し、古代の奮闘がこの世に對する闘爭であつたならば、中世（基督者）の闘爭は自己、即ち、精神に對する闘爭である、前者は外界に對して、後者は内部世界に對する闘爭である。中世紀の人は『その人の凝視が内に向けられた』、思索し、冥想する人である。

古代人の智慧は悉くこの世の學問であり、近代人の智慧は悉く神の學問である。

異教徒（猶太人をも含めて）はこの世を通過した。けれども今ではその物は自己、即ち精神をも亦通過しなければならなかつた、即ち無精神、若しくは無神にならなければならなかつた。

殆んど二千年の間、我々は聖靈を我々自身に服從させることに努力して來た、そして、少しづつ、我々は神聖の多數の斷片を切斷し、脚下に踏み付けて來た。しかしながら巨大なる反對者が絶えず變化した形と名とによつて新らしく出現して來る。精神は未だその神性と神聖とを失はなかつた。たしかに、それは、鳩として我々の上に羽ばたくことを止めてからかなりにはなる。た

しかに、それは最早、その聖徒等を喜ばさないばかりでなくそれ自からをして俗人に捕へられることを許してはゐる。しかし、人道は精神、人間の精神として、それはなほ私及び汝等にとつて一個の外界の精神として殘り、我々が我々の氣儘に處分することが出來る我々の無制限な財產になることから遙かに距つてゐる。しかしながら、或事が確かに起つた、そして、明らかに後期の基督敎史の進步を指導した。この一事は聖靈を一層人間的に、一層人間にそれを接近させようとする、若しくは人間をそれに接近させようとする努力であつた。これを通して、遂に『それが人道の精神』、若しくは『人道、人類、慈悲、一般の慈善の觀念』等の如き異なる名稱の下に思考せられ、更に牽引的に、更に親しく、更に接近しやすきものの如く見えて來た。

人は今、すべての人間が聖靈を所有することが出來、彼自身の中に人道の觀念を取り入れることが出來、人間そのものの形と存在をば彼自身の中に取り入れることが出來ると考へないであらうか？

否、その靈はその神聖を剝脫されず、その接近しがたきことを奪はれもせず、我々に近づきがたく、我々の所有ではない。なぜなら人道の精神は私の精神ではない。それは自分の理想であるかも知れない、そして、自分は一個の思想として、それを私のものと呼ぶ。人道のその思想が自

分の所有である。そして、自分がこれを充分に證據立てるのは、それをまつたく自分の見解として發議し、今日はかくの如き形に、明日はまた他の形に變へることによつてである。我々は出來るだけ多種多樣の仕方に於てそれを我々自身にまで再現する。しかし、それは同時に、自分が讓り渡すことも脫れることも、出來ない一個の相續財產である。

多くの變化を經て來た間に、聖靈は、いつの間にか『絕對な觀念』になつた、それが再び幾多の屈折を經て、博愛、合理、市民道德等のさまぐな觀念にまで分裂した。

けれど、自分は、若しそれが人道の觀念であるとすれば、それを自分の所有と呼ぶことが出來るであらうか、そして、若し自分がそれに奉仕し、それに對して『自分自身を犧牲にする』ならば、その精神を征服したと考へることが出來るであらうか? 古代は、その終局に於て、それがこの世の威壓を破り、そして『神聖』がこの世の無力と『空虛』とを認識した時にのみこの世に對する所有權を獲得した。

精靈に對する場合も亦それに照應する。自分がそれを幽靈にまで墮落させ、自分に對する制禦を歪んだ觀念にまで貶下さした時に、それがその神性と、神聖とを失つたものとして眺められる、そして、それから、自分は、恰かも、自然を狐疑なく恣いままに使用するが如く、それを使用す

る。

『物象の性質』、『關係の概念』がその場合と交渉するに當つて、若しくはこの關係と矛盾するに當つて私を導くべきである。恰かも物象に對する概念がそれ自からの爲めに存在してでもゐたやうに、さうして、寧ろ、人がその物象に就て形ち造る概念ではないかのやうに！　恰かも我々の這入りこんでゐる關係が、それに這入りこむそれ等の人の無二なことによつて、それ自から無二でなかつたかの如くに！　恰かもそれが他の人々が如何にそれにスタンプを押すかによるものの如く！　しかしながら、人々が『人間の本質』を現實の人間から分ち、前者（本質）によつて後者を判斷するが如く、かれ等はまた彼の行動を彼から分ち、『人間價値』によつてそれを評價する概念が至る處で決定しなければならない、人生を調整する概念、支配する概念。これが宗敎の存在である、それに對してヘエゲルが秩序的な發想を與へ、方法を無意味に齎らし、概念的な條理を迂遠な、基礎の堅いドグマに完成した。全ての物は概念に從つて歌はれる、そして、現實人、卽ち、自分はこれ等の概念的法則に從つて生きるべく餘儀なくされる。これ以上悲しむべき法則の領土があるだらうか、そして、基督敎は、抑も最初に、猶太の法則の領土を一層堅くすることを意味したことを告白しなかつたらうか？（『その法則の一字も失はれてはならない！』）

自由主義（Liberalismus）は單に他の概念を絨氈の上に齎らした、即ち、神の代りに人間を、教權の代りに政治を、教理の代りに『科學』を、更に一般的に云へば、『生硬なドグマ』や、教條の代りに現實の概念や永遠の法則を齎した。

今や、精神以外の何物もこの世に於て支配しない。無數の概念の群生が人々の頭の中にブンブン云つてゐる、そして、それ以上に行かうと努力しつつある人々は何をしてゐるか？ かれ等はこれ等の概念を否定して、それ等の代りに新しき概念を置かうとしてゐるのだ！ かれ等は云つてゐる、『汝等は、權利や、國家や、人間や、自由や、眞理や、結婚や、その他に就て虛僞な概念を形ち造つてゐる。權利、その他に就ての概念は、寧ろ、我々が今揚げるところのものである。』かくして、種々なる概念の混亂が前進する。

世界の歷史は殘酷に我々に交渉した、そして精神が萬能の力を獲得した。汝等は、汝等の裸形の足を保護することが出來る私のみじめないやいやな靴、汝等の馬鈴薯が味よくなる私の鹽、その所有が汝等を直に悉ゆる缺乏から救ふであらう私の御馬車に對して尊敬を持たなければならない。汝等はそれ等に對して手を伸してはならない。人間はこれ等及びその他無數の物の獨立性を認めなければならない。それ等は人間の心に把持せられ、接近せしめられることの出來ない物として位すべ

きである、卽ち人間から離れてゐなければならない。人間はそれを認め、それを尊敬しなければならない。彼の指を伸して、それを欲求する者は禍なるかな。我々はそれを『手癖の惡いもの』と呼ぶ！

如何に貧しき僅かが我々に殘されてゐるか、如何に眞になに物も殘されてゐないだらう！　全てが移送された、我々が、それが我々に與へられるに非ずんば、何物に對しても敢へて手出しをしてはならないのだ。我々は授與者の恩惠によつてのみ生くることを續ける、汝等は、誠にさうする許可を得るまでは、一つのピンをも拾ひ上げてはならない。さうして、それは誰れから得たか？　尊敬からか？　それは唯だこれが汝等をして財産としてそれを持たしめる時にのみ、汝等が財産としてそれを尊敬することが出來る時にのみ、その時にのみ、汝等はそれを取ることが出來る。そして、再び汝等は道德や、理性や、人道からそれを受け取る代りに、汝等にのみひとりその保證を有する一個の思想、一個の綴字、一個の行爲をも抱いてはならない。切望する人間の幸福な無拘束、人々は如何に無慈悲に拘束の祭壇に於て汝等を殺戮しようと試みたことぞ！けれど、その祭壇の周圍に敎會の半圓門（アーチ）が立ち昇る、そして、その壁が次第〳〵に外部へ動くことを續ける。かれ等の圍むところのものは——神聖である。汝等は最早、それに達することが

出來ない、最早それに觸れることが出來ない。汝等を貪り食ふ飢餓をもつて叫びながら、汝等は俗な僅かなものを探してこれ等の壁の周圍をさまよひまわる。そして、汝等の行程の周圍が次第〳〵に擴張されて行く。やがてその教會は全世界を抱擁し、汝等は極端へ放逐されるであらう。もう一歩、そして、神聖の世界が勝利を得た。汝等が深淵に沈落する。故に、まだ時のある間に勇氣を出せ、最早、乾ききつてゐる流俗の中をさまよふな、敢へて飛躍せよ、門を突破して直に聖殿それ自からに肉逼せよ。若し汝等がその神聖を喰ひ盡せば、汝等はそれを汝等の所有にしたのだ！聖餅を消化せよ、さうすれば汝等はそれを脫脚することが出來るのだ！

III——自由人

古代人と近代人とが上の如く、二個の類別に於て現はされた事によつて、茲では自由人が恰かも獨立した、差別ある第三の區分に於て記述せられるかの如く思はれるかも知れない。けれどそれはさうではない。自由人は單に『近代人』の中の更に近代的な最も近代的なものである、そして、單にかれ等が現在に屬するが故に、また、なによりも先づ、現存するものがわれ〳〵の注意を要求するが故に別種の區分中に置かれるのである。自分は『自由人』と云ふ言葉を、單に『自由黨員』(Liberalen)の飜譯としてのみ與へる、けれど、自由の概念に關しては(その先入的輸入を除くことの出來ない多くの他のものに關すると同樣)後に來るものが參照されなければならない。

A　政治的自由主義

所謂絕對君主制の聖杯がその渣をまで飲みほされた後、十八世紀の人々は、かれ等の飲物が人

間らしい味のしないことを氣付き始めた——けれど別な杯を切望し始める程あまりに明瞭に氣付いてはゐない。われ〳〵の祖先は結局『人間』だつたので、かれ等はとう〳〵また人間として見做れたいと思ふやうになつて來た。

我々の中に人間以外の何物かを見る人は誰れでも、皆な一樣に彼の中に一個の人間を見ないで非人間を見、非人間としての彼に出遇ふであらう。これに反して、人間として我々を認め、非人間的に取り扱はれる危險に對して我々を保護する人は誰れでも、彼を我々は我々の眞の保護者であり、守護者として尊敬するであらう。

然らば我々は結束して、御相互にその人間を保護しようではないか。その時我々が一緒に固まることによつて、一緒に固まる我々自身に於て、人間の尊嚴を知り、『人間』として結束することを知つてゐる人々の共同に於て必然の保護を發見する。我々が一緒に固まることが國家であり、一緒に固まる我々が國民である。

國民或は國家として我々が一緒になることに於てのみ我々は人間である。我々がその他の點に於て、個人として如何樣に我々自からを處し、我々がどんな利己的な衝動に從ふかは唯だ〳〵我々の私的生活にまで屬する。我々の公けの卽ち國家的生活は純粹に人間的なものである。我々に

付き纒つてゐるすべて非人間的な『エゴイスティッシュ』なものは『私的な事柄』として貶下される、そして、我々は國家を『エゴイズム』の活動の範圍にある『市民社會』(burgerlichen Gesellschaft)からハッキリと區別する。

眞の人間は國民である、けれど個人は常に一個のエゴイストである。だからその中に不調と利己的不平等とが住んでゐる汝等の個性即ち孤立を剝ぎ取れ、そして汝等自からを全然――人間即ち國民又は國家に奉任せよ。その時、汝等は人間として位し、人間のものである全てを持つであらう。國家と眞人とがそれに附屬してゐるものに對して汝等に資格を與へ、汝等に『人間の諸權利』を與へるであらう。人間が汝等に彼の權利を與へるとよ!

市民 (Das Burgertum) の演說がかくの如く叫ばれる。

市民は、國家が全ての全てであり、眞人であり、個人の人間的價値が國家の市民であることに於て成り立つと云ふ思想以外の何物でもない。善き市民であると云ふことに、彼は彼の最高の榮譽を求める。それ以外に彼は何物をも知らない、若しあつたとしても、それは精々、舊式な『一個のよき基督者(クリスチアン)』であると云ふ位なものである。

市民は特權階級――その階級によつて、傲然と『第三階級』として取り扱はれ、Canaille (細民)

と混同された――に對する闘爭によつてそれ自からを發展さした。他の言葉で云へば、この時まで、國家は階級を認めて來た。貴族の息子は、最も卓越せる平民等が徒に渇仰した地位にまで選擧された。市民的感情がこれに對して叛逆した。差別をなくし、人間の擇り好みをなくし、階級の差異をなくせ！　皆な悉く同一であらしめよ！　最早、各自の利益を追求せず、萬人の一般的利益を追求せよ。國家は自由平等の人々の團體でなければならない、そして、各人は『全體の福祉』の爲めに彼自身を捧げ、國家の中に溶け合ひ、國家を彼の目的、理想としなければならない

國家！　國家！　かくの如く一般の叫びが叫んだ、かくして、人々は『國家の正しき形』最上の組織、つまり、最上の概念に於ける國家を求めた。國家の思想が萬人の心にまで通過し、熱心を呼び醒した。國家と云ふこの世の神に奉仕する事が新しき神聖な服務と崇拜とになつた。將にかくあるべき政治的時代が夜明けた。國家或は國民に奉仕することが最高の理想になり、國家のインテレッセが最高のインテレッセになり、國家の奉仕（その爲めに、人はどんなことをしても一個の官吏になる必要はない）が最高の名譽になつた。

　かくして、各自のインテレッセと個人的問題とが威嚇せられ、國家の爲めの犧牲が合言葉になつた。人は自分自身を棄てて、國家の爲めにのみ生きなければならない。人は『私なく』行動し

なければならない、自からを益しようと思はず、國家を益しようと思はなければいけない。茲に於て國家が眞人間になり、その前に個人的人格が消え失せる。自分が生きるのではなく、國家が自分の中に生きてゐるのである。故に、以前の自己追求と比較して、これは非利己非人格、それ自からであつた。國家と云ふこの神の前に、すべてのエゴイズムが消え失せた。そして、その前に、全てが平等があつた。かれ等にはなん等の差別もなかつた――人間は人間以外のなにものでもなかつた。

革命は財産と云ふ燃え易い材料から發火した。政府は金を必要とした。さて、政府は、それ自からが絶對であり、全財産の主人公であり、唯一の所有主であると云ふ命題を證據立てなければならない。政府はそれ自からに對して、その金を取らなければならない、それは唯だ臣民の所持してゐたもので、かれ等の財産ではなかつた。これの代りに、政府は議會を召集して、政府にまで委託されたこの金を所有する嚴密に論理的な行動から畏縮することが絶對政府の幻影を破壞した。彼にまで『委託された』何物かを持たなければならない人は絶對と見做れることは出來ない。臣民等は、かれ等が眞の所有主であり、そして要求されたのはかれ等の金であつたことを認めた。これまで臣民であつた人々は、かれ等が所有主であると云ふ自覺に到達した。ベイリイ（Bailly）

は數語でこれを描いてゐる。『若し君達が私の承諾なしに私の財産を始末することが出來ないとすれば、況して君達はどうして、私の人格、すべて私の精神的な社會的の地位に關はる全てを處理することが出來よう？ すべてこれは、自分が耕やす一片の土地と等しく私の財産である。そして、自分は、法律を悉く自分自身のものとするべき權判と、利害觀念とを持つてゐる。』ベイリイの言葉は、たしかに、恰かも各人が今では一個の所有主であつたかの如く響く。しかも、政府の代りに、皇族の代りに、——國民が今や、所有主になり、主人公になつた。この時からその理想は、——『一般の自由』——『自由民』等と云はれるやうになつてきた。

一七八九年、七月八日、既にオウタンの僧正及びバアレエルの宣言が立法上に於ける各個人の重要なることの悉ゆる外觀を取り去つた。それは組織者の完全な無力を示した。代表者の大多數が主人公になつた。七月九日に、律法設定の仕事に對する區分の計畫が提言された、ミラボオは『政府は單に權力を持つてはゐるが、何等の權利をも有してはゐない。唯だ人民にのみあらゆる權利の源泉が發見せらるべきである。』と云つた。七月十六日にこの同じミラボオは『人民こそ凡ゆる權力の源泉ではないだらうか？』と叫んである。であるから、悉ゆる權利の源泉と悉ゆる暴力(Gewalt)の源泉！ 從つて、『權利』の本質が明らかになる。それが——暴力である。『力を持つ

者が權利を持つ〴』

庶民は特權階級の後繼者である。事實、『纂奪』として、剝奪された男爵等の諸權利は唯だ庶民階級に移つされたばかりである。なぜなら、庶民は今では『國民』と呼ばれるやうになつた。『國民の手中に』全ての特權が返却された。それによつて、かれ等は『特權者』(Vorrechte)たることを止めた。そしてかれ等は『權利者』(Rechte)になつた。この時以來、國民は十分一稅、卽ち强制的奉仕を要求する。國民は王侯の家庭と、伐木獵獸の諸權と、農奴とを繼承した。八月四日の晩が特權階級卽ち、特權者の死滅の夜であつた(都市や、地方自治體や、奉行所も亦た特權、卽ち王侯の諸權をもつて供給された)、そして『權利』『國家の諸權利』、『國民の諸權利』の新しき曙光と共に終りを告げた。

『國王』の姿をして國王はこの新王國、この『君王的國民』に比較すれば鎖々たる國王であつた。この王國は千倍も嚴格で、鞏固なものであつた。この新しい國王に對しては、最早、其處に何等の權利も、特權もなかつた。これに比較して ancien regime (舊制度)の『絕對君王』は如何に制限されて見ゆることよ! 革命は制限された王國を絕對の王國に變化さした。この時以後、この國王によつて賦與されない權利は悉く一ツの『假定』である。けれどこの國王の與へるすべての

特權階級は『權利』を持つてゐる。光陰が絶對の王者絶對の王國を[illegible]求した。それ故に、かの數千の諸侯によつて制限せられ、如何にせば絶對になるべきかを殆んど理解しなかつた所謂絶對の王國が沒落した。

數千年の間、欲求され、渴望されてきたところのもの、――即ち、その者以外に、彼の權力を削ぐべき、何等の大名、小名も最早存在しない絶對の君主を發見すること、――それをブルウジョアジイがこの世に齎した。それは『正しき尊稱』をひとり授ける君主を實現した、そして、その君主の許可なくては何者も正當と認めないのである。『かくして、今、我々は偶像がこの世に於て何者でもないことを知つてゐる、そして、其處には唯ひとりの他神は存在しない。』(コリント前書、八章、四節)

至上權に對して、人は最早、或る一個の權利に對しての如く、それが『不正』であると云ふ斷定をもつて前進することは出來ない。人は今、それが無意味な一片であり、一個のイリユウジョンであると云ひ得るのみである。若し、人がそれを不正と呼ぶならば、その人々はそれに對して他の權利を樹立し、それによつてこれを量らなければならないであらう。或は又、これに反して人が權利そのものを徹頭徹尾拒絶するならばその時、その人はまた不正の概念をも拒絶し、權利そのものの全概念(それにまで不正の概念が從屬する)を消散せしめることになる。

我々すべてが『政治的權利の平等』を享概すると云ふ教義の意味はなんであるか？　唯だこれのみである。――即ち、國家は私個人に對して、何等の敬意をも持たないと云ふことである、國家に對して自分は、すべての他の人々のやうに、單に一個の人間で、國家の尊敬を命令する何等の意義をも持つてはゐないのである。自分は一個の貴族として、又は貴族の息子として、或は、その役目が相續によつて自分に屬する或官吏の嗣子としてさへ（中世紀に於ける伯爵その他、降つては、絕對君主制の下に、世襲の官職が存在してゐるが如く）國家の敬意を命令はしない。國家は與へるべき無數の權利を有してゐる、卽ち、軍隊や、一團隊を率ゐる權利、大學で講義する權利、そしてその他、國家はそれ等の諸權利がそれ自身のもの、卽ち國家の權利又は『政治的』權利であるが爲めに授與すべきそれ等を持つてゐるのである。かくして、國家がそれ等の諸權を何人に與へても、其處に何等の差異はないのである、若しその受領者が委託された諸權利から生ずるところの諸義務を果しさへすればである、その受領者にしてその事柄を適當に理解してゐさへすれば、何人が軍隊の指揮者になつても、自分にとつてはそれは沒交涉なことであると、主權者國家が云ふ『政權の平等』と云ふことは、であるから、各人が、國家の與へるべき全ての權利を獲得することが出來ると云ふ意義を持つてゐるに他ならない、但し、その人はそれに附與せられ

た條件を果さなければならない、——そのさまざまな條件と云ふのは、特別な權利の性質の上にのみ求められなければならない、そして、その個人(Persona grata)に對する偏愛に於てであつてはならない。士官になるべき權利の性質はそれと同時に、その人間が健全なる四肢と、智識の適宜なる分量とを所有してゐると云ふ必然性を齎らすのである、しかしながら、それは高貴な家柄を條件とはしない。それに反して、若し、最も資格ある平民すら、その位置に到達することが出來ないとしたなら、その時、政權の不平等が存在することになるであらう。今日の國家の間にあつて、人はその平等の格言を多少實行した。

領土王國(Die Standemonarchie)(私は革命以前に於ける、絶對の王國、即ち帝王の時代をさう呼ぶことにする)は個人をば小さき諸王國の一束の上に從屬せしめて置いた。これ等がギルドや貴族階級や、僧侶階級や、市民階級や、都市や、地方自治體等の如き團隊(社會)であつた。何處に於ても、個人はこの小なる社會の一員として先づ自からを考へなければならない。そして、彼の國王としてその精神、即ち esprit de corps (團隊の精神)に無條件の服從をしなければならない。彼にとつては、個人としての貴族彼自身よりも、彼の家族、彼の種族の名譽の方がより多くのものでなければならない。個人は、(korporation)、彼の彼の所屬によつてのみ、國家と云

ふ更に大きな團體に對して關係を持たなければならない、――恰かも天主教に於て、個人が僧侶を通してのみ神と交渉するが如く。これに對して、第三階級（Der dritte Stand）は今や、一個の階級としてのそれ自からを否定するの勇氣を示して一段落を告げた。それは最早、他の階級の傍に存在する一個の階級であると呼ばれないことに決定した、そしてそれ自から『國民』として一般化し光榮あるものとならんとした。これによつてそれは更に遙かに完全な絶對王國を創設したそして、以前諸階級を支配した全體の原則、大王國の內部にある小王國の原則が消滅した。故にその革命は最初の二つの特權階級に對する革命であつたと云はれることは出來ない。それは一般の小王國階級に對する革命であつた。けれど、若しその領地とそれ等の專制が破られたなら（王も亦單に諸領地の王であつて、市民王ではなかつたことを我々は知つてゐる）、階級の不平等から自由になつた個人が殘されたわけである。かれ等は今、眞に領地を所有せず、最早、何等の領地にも束縛されず、『齒車が外づれ』、何等の結合をもしてはゐなかつたか？ 否、なぜなら、第三階級は自から國民であると宣言した、それは他のエステートの傍に在る一個のエステートとして存在しない爲めばかりでなく、唯一のエステートたらんが爲めである。この唯一の階級が國民であり、『國家』である。個人は今、どうなつたか？ 政治上のプロテスタントである、なぜなら、彼

は國家と云ふ彼の神と直接の結合をするやうになつた。彼は最早、一個の貴族として、貴族の王國の中にもゐなかつた。また、一個の職人として、ギルドの王國の中にもゐなかつた。けれども彼は、全てと等しく、國家と云ふ唯一の君主を承認した、そして、その君主の家來としてかれ等は悉く『市民』と云ふ名譽ある平等の稱號を受領した。

ブルジョアジィは功績の貴族（Der Adeldes Verdienstes）である。その格言は『功績をしてその王冠を被らしめよ。』である。ブルジョアジィは『怠惰なる』貴族に對して戰つた。なぜなら、それ（即ち、産業と功績によつて獲得せられた勤勉な貴族）に從へば、自由なる者は『生れた』者でもなければ、また自分でもない、ただ『功績ある』人、正直なる從僕（彼の王の、國家の、組織的國家に於ける民衆の）のみである。奉仕を通して、人は自由を獲得する、即ち『功績』を得る、たとへその人が福の神に仕へてさへもである。人はよくその國家の、即ち國家の主義、その道徳的精神にかなふ者でなければならない。この國家の精神に仕へる人が善き市民である。彼をして、その欲する正直なる産業の如何なる部門にもあれ、生活せしめよ。ブルジョアジィの眼をもつて見れば、革新者等は『パンなき藝術』を實行するものである。そして『店商人』のみが『實際的』である、そして、官廳の尻を逐ふ精神にまたやがて商賣上に於て、自からを肥やすか、然

らざればそれ自身とその他の者に對して有益にならうとする精神である。

けれど、若し功蹟ある者が自由人と思はれるなら、(なんの爲めにかの氣樂な市民と、忠實な役人が、その心の欲する自由を缺いてゐるのか?)、『從僕等』は自由人である。從順な從僕が自由人である! なんと云ふ明々白々なたわごとだらう! しかも、これがブルジョアジィの意義である、そして、その詩人のゲエテも、その哲學者のヘエゲルも共に客觀の上に主觀從屬させること、即ち、客觀的世界、(等)に服從することを光榮化することに成功した。ひたすら主義に奉仕するところの人、即ち『彼等自身を全然その爲に献ずる』人が眞の自由を有するのである。そして、思想家等の間に在つて、その主義は理性であつた、それは、國家や敎會のやうに、一般の法則を與へ、個人を人道の思想(den Gedanken der Menschheit)によつて桎梏の中に置くのである。それは、人間が行爲しなければならない場合に從つて、先づ『眞なる』ものを決定する。國家の從僕として最初に善き市民とよばれてゐるところの正直な從僕以上に『合理的』な人々はゐない。

クレソス(Craesus)のやうに金持にでも、ヨブのやうに貧乏にでも、孰れにでもなり給へ、——庶民の國家はそれを汝等の任意にまかせる。けれど、唯だ『善き心がけ』を持つことを忘れてはならない。その國家はこれを諸君に要求する、そして、全ての中にこれを確立することをその最

も緊急な仕事であると思惟する。故に、國家は『惡しき皷舞』から汝等を禦ぎ『惡傾向』を防壓し、かれ等の煽動的な論議を檢閲官の抹殺する印しや、出版法處罰の下や、牢獄の壁の背後に押し込めて緘默せしめ、一方に於て『善き心懸け』の人々を檢閲官に任命し、悉ゆる手段を盡し『善き傾向あり、善き心懸けある』人々によつて汝等の上に道德的影響をふるふであらう。若しそれが諸君をして惡しき煽動にまで聾ならしめたなら、その時、それは諸君の耳を再び開いて、前よりも熱心に善き煽動にまで傾聽せしめることになるであらう。

ブルジョアジィの時代と同時に、自由主義(Liberalismus)への時代が始まる。人々は『合理的』な『時代に適した』ものが到る處に確立されるのを見んことを要求する。その名譽の爲めに發言せられたと想像されてゐる自由主義に對する左の定義は完全にそれの特性を表はしてゐる。『自由主義は我々の現結する諸關係にまで適用せられた、理性の智識以外の何物でもない(Ein und zwanzig Bogen P. 12) その目的は『合理的秩序』であり、『道德的行爲であり、『制限せられた自由』であつて、無政府でも、無法律でも、自己たることでもない。けれど、若し理性が支配するならその時は個人が屈從するのである。藝術は永い間、醜惡を認めたばかりでなく、醜惡を存在に必要な物と考へ、それ自からの中にそれを取り入れたのである。藝術は惡漢、その他を必要とする

宗教界に於ても亦最も極端な自由主義者等は、最も宗教的な人間を市民として——即ち宗教的な悪漢として見做れん事を要求する位ひにまでも行く。かれ等は最早、異端に對する審問を見ようとは欲しない、しかし『理性的律法』に對して、何人も反逆すべくもない、しからざれば、彼は最も嚴格なる刑罰を以つて威嚇される。要求せられるところのものは個人、即ち自己の自由運動でも實現でもなく、理性のそれ等である、——即ち理性の支配、領土である。自由主義等は信仰神等に對する狂信者では確かにないとしても、かれ等の主人たる理性に對する狂信者であることは疑ひない。かれ等は教育、教養の缺乏を我慢出來ない、同時に自己發展と自己決斷とを忍ぶことが出來ない。かれ等は最も專制な支配者と同一な效力をもつて監視者の役割を演ずる。

『政治的自由』、我々はそれによつて何を理解すべきであるか？　恐らく國家とその法律に對する個人の獨立か？　否、まつたく反對で、國家と、國家の法律に對する個人の服從である。けれど何故に『自由』なのであるか？　なぜならば、人は最早、仲介物によつて國家から分離してはゐず、國家に對して直接な端的な關係に於て立つからである。何故なら、人は一個の市民であつて他の臣下ではない、一個人として王の臣民ですらないばかりでなく、その性質に於ては『國家最高の頭（かしら）』でさへある。政治的自由、即ち自由主義のこの基礎的教義は新教主義の第二の語句以外

の何物でもない、そして、まつたく『宗教的自由』と平行線を走つてゐる。『ルイ、ブラン は宗教改革時代に就て云つてみる、『プロテスタンティズムは觀念(イデー)と性行(ムール)の根底を理解してゐる』と。(“H : stoire des Dix Ais : Ip. 138) 或は恐らく、宗教的自由と云ふ言葉によつて宗教の獨立を理解することが正しくあるであらうか？ それ以外の全てである、仲介物からの獨立と云ふことが表現すべく企てられたるところの全てである、仲介的僧侶からの獨立、『俗家』廢弛である、即ち宗教又は神に對する直接にして端的な關係である。自己が宗教を有してゐると云ふ想像に於てのみ、人は宗教の自由を享樂し得るのである。宗教の自由と云ふことは無宗教であることを意味してはゐない、それは信仰の内部性、神との直接の交渉を意味してゐるのである。『宗教的に自由』であるところの人にとつては、宗教は心情の一事件であり、彼にとつて彼自身の事件である、それは、彼にとつて『神聖に眞面目な事柄』である。かくして又、『政治的に自由』である人にとつては國家が神聖にして眞面目な事柄である。それは彼の心の事件であり、彼の主要な事件であり彼自身の事件である。

　政治的自由　polis 即ち、國家が自由であると云ふことを意味してゐる。宗教の自由と云ふことは、宗教が自由であると云ふこと、良心の自由といふことは、良心が自由であると云ふことを

意味してゐる、であるから、自分が國家から、宗教から、良心から、自由であると云ふことではない、即ち、自分がそれ等のものから脱却してゐると云ふことではない。それは私の自由を意味してゐるのではなく、私を支配し、私を服從させる權力の自由を意味してゐる。それは國家とか宗教とか、良心とか云ふ私の暴君が自由であると云ふことを意味してゐる。國家とか、宗教とか良心とか云ふこれ等の暴君は私を奴隷にする。かれ等の自由は私の奴隷たることである。茲に於て、かれ等は必然に『目的は手段を聖別する』と云ふ原則に從ふことは自明の理である。若しも國家の福祉がその目的であるならば、戰爭は一つの聖別せられたる手段である。若しも、裁判が國家の目的であるなら、殺人は一つの聖別せられたる手段である。そしてその神聖な名によつて『死刑執行』などと呼ばれてゐる。神聖なる國家はそれに役立つ全ての物を神聖にする。

『市民的自由主義が絶えず嫉妬的管視を繼續してゐる『個人的自由』は決して、それによつて行動が全然自分のものとなるところの完全に自由な自己決定を意味してはゐない、それは單に個人の自由を意味してゐるのである。個人的に自由であると云ふことは何人に對しても責任のない人のことである。この意味から云つて――そして我々はそれ以外にそれを理解することを許されてゐない、――支配者が個人的であり、即ち、人民對にして無責任であるばかりでなく（彼

が『神の前』にも自から責任ある者であることを承認してゐることを我々は知つてゐる)、『法律にのみ責任ある』全ての者が個人的に自由なのである。この種の自由はこの世紀の革命的運動を通じて得られてあつた、――即ちそれは專擅的意志から tel est notre plaisir (かくの如きわが好むところなり) からの獨立である。爾來、立憲的な君主は全ての人格、全ての個人的決斷を剝奪されなければならない。それは、彼が人として、一個人として、他の人々の『個人的自由』を侵さざらんが爲めである。支配者の個人的意志が立憲的君主の中に消え失せたのであつた。故に絕對君主等がこれに反抗するのは正しき感情と云はなければならない。しかもこれ等の君主その人等は最善な意味に於ける『基督教的君主』であると宣言してゐる。けれども、かれ等はこれが爲めに純粹に精神的な權力にならなければならない、なぜなら、基督者は精靈(『神は聖靈である』)にのみ從はなければならないからである。純粹に精神的な權力は立憲的君主によつてのみ鞏固に、代表されてゐる、何等個人的意義なき人間が一個の觀念として、純粹に、この世のものでない『精靈』として位し得る程度にまで靈化されて立つてゐる。立憲的帝王が眞に基督教的な王である、純粹で、まちがひなく基督教的な原則を實行するものである。憲立帝國に於て、個人的君權、――即ち、意志する眞實の支配者がその目的を發見した。玆に於てか個人的自由が流行する、悉

ゆる個人的命令者、tel est notre plaisir をもつて私に命令し得る全ての者からの獨立が流行する。それが完全な基督教的國家生活であり、靈化せられたる生活である。

庶民の行爲は徹頭徹尾自由（リベラル）である。他人の圏内に各個人が侵入することが市民的感情に叛逆することになる。何人にもよらず、個人としての人間（即ち『より高き權力』によつてオーソライズドされない）の氣持や、好みや、意志に從屬してゐるのを市民が見る時に、彼は忽ち彼の自由主義を掲げて、『專横』であると叫び出す。事實、市民は命令（ordonnance）と呼ばれてゐるものから彼の自由を肯定してゐる。『何人とも私に――命令を與へるべきビズネスを持つてはゐない！』命令は自分の爲すべき筈のものが他人の意志であると云ふ觀念を與へる、けれども法律は他人の個人的權威を表現してはゐない。庶民の自由は所謂個人的な自由と呼ばれてゐる他人の意志からの自由、若しくは獨立である。何故なら、個人的自由であると云ふことは單に如何なる他人も自分のものを處理することが出來ない程左樣に自由であり、自分のするかも知れないこと、若しくはしないかも知れないことが他人の個人的命令に從屬してゐないと云ふことを意味してゐる。例令へば出版の自由と云ふことは單に個人的なわがままと云ふが如き檢閲官の强迫に對して戰ふところの自由主義（リベラリズム）の自由であつて、實は一方に於て、『出版法』と云ふが如きものによつて出版の上

に極端なる蹂虐をふるつてゐるのである。即ち、市民的自由主義者等はかれ等自身の爲めに書くことの自由を欲してゐるのでゐるのである。なぜなら、かれ等が法律固執者である限りは、かれ等の書く物は法律に抵觸するやうなことはないであらう。自由な事柄、即ち法律的な事柄のみが印刷を許可せらるべきである。然らざれば『出版法』が『出版法處罰』を威嚇する。たとへ、個人的自由が確かめられたのを見たとしても、人は、如何にして（偶々、新らしい爭ひが起つたとしても）最も明白な不自由が蔓こつてゐるかを少しも注意しない。なぜなら、人は實際、命令から脱却した、そして『何人も我々に命令を與へるべき仕事を有してゐない』、けれどもそれだけまた人は一方で法律――と云ふものに服從するやうになつた。人は今、適宜なる法律的形式の中に拘束されてゐる。

市民國家には、其處に唯だ『自由民』が存在してゐる。そしてその人々は數千のことを餘義なくせられてゐる（即ち、從順、信仰の告白と云ふが如きものを）。けれど、それが結局どうだと云ふのか？ どうして？ かれ等を餘儀なくするものは人間ではなくて、唯だ國家と法律とだけではないか！

庶民がすべての個人的命令、即ち、『主義』（Sache）や、『理性』等に根底を置いてゐないすべて

の命令に對して、爭ふことに全體、如何なる意義があるのか？ それは單に『主義』の爲めに、『個人』の領域に對して爭つてゐるのみである！ 兎に角、心のためは合理的で、善で、律法的である。それは『善きため』にである。庶民は非人間的な支配者を要求してゐるのである。

更に一歩を進めて、若し、主義のみが人間を支配すること——即ち道德のため、合法のため等——が原則であるとすれば、その時、各人が相互に無視し合ふと云ふ如きことは公けに禁ぜられるかも知れない（たとへば昔、平民が貴族的な役目から排斥され、貴族が普通の機械的商賣から排斥されたやうに）かくの如くして即ち、自由競爭が存在しなければならない。唯だ物質(Sache)によつてのみ人は他を輕蔑することが出來る（たとへば、富者が金と云ふ物質によつて貧者を輕蔑するが如く）、しかし一個の人間としてはではないのである。故に、唯だ一つの君權、國家の主權が許容される。個人的には何人も他人の支配者ではない。子供達は生まれると直に國家に從屬する、そして國家は殺兒罪を許さざるは勿論、子供達の洗禮をさへ要求する。

けれども、更に國家の子供等は、國家の眼から見て、まつたく同一の價値がある(『市民的若しくは政治的平等』)、そして、かれ等は國家に對して、如何にかれ等が相互にやつてゆくかを示すことが出來る。即ちかれ等は競爭することが出來るのである。

自由競爭と云ふことは各人が彼自身を現はし、自からを肯定し、他と爭ふこと以外の何物をも意味してはゐない、勿論、封建黨は、その存在が競爭の不在の上に基礎を置いてゐるので、この事に反抗した。佛蘭西に於ける王政復古時代に於ける爭鬪はこれ以外に何の實體をも有してはゐなかつた――即ちブルジョアジィが自由競爭の爲めに努力してゐる一方に於て、封建黨がギルド制度を挽回せんとして焦躁つてゐたのである。

さて、自由競爭が成功した、そしてギルド制をば全然征服しなければならなかつた。(更に進んだ論議に就ては以下參照)

若し、佛蘭西革命が一ツの反動に終りを告げたとすれば、これは唯だ革命が眞に如何なるものであるかを示した。なぜなら、すべての努力は、それが思慮ある反省に到達する時に反動作用を起す、そして、それが、醉狂であり、『無差別』である限りに於てのみ、元の行動に嵐の如く突進する。『思慮』はいつでも反動の先き振れになるであらう、なぜならば思慮は制限を置き、眞に要求せられたるものを、即ち、最初の『放肆』と『無拘束』から、原理を解放する。凡ての思慮をかなぐり棄てる亂暴な青年や、威張りチラス學生達が實はフィリスタアなのである。なぜなら、かれ等にあつても、フィリスタアに於ける場合と同じく、思慮がかれ等の行爲の實體を形ち造つてゐ

るのである。かれ等は單に暴慢者としてのみ思慮に對する敵對者であり、その關係に於て消極的ではあるが、後にフィリスタアとして、思慮にまでかれ等自身を捧げ、積極的な關係に於て立つやうになる。兩者の場合に於て、かれ等の行爲と思考とは悉く『思慮』の上に向ふ、けれどフィリスタアは學生との關係に於て反動的である。彼は思慮ある反省に立ち戻つた亂暴人である、恰かも學生が無反省なフィリスタアであるが如く。日常の經驗はこの變轉の事實を確證する、そして、如何にして暴慢者が半白になるに從つてフィリスタアに變はりゆくかを示してゐる。

かくしてまた獨逸に於ける所謂復古は自由の戰鬪的歡喜の單に思慮ある連續に過ぎなかつたことを證據立ててゐる。

佛蘭西革命は既定制度（das Bestehende）そのものに對して企てられたのではなく、問題の制度、即ち或特別な制度に對して企てられたのであつた。それはこの支配者を除いたけれど、支配者その者を除きはしなかつた。——それどころではなく、反對に、佛蘭西人は最も頑固に支配されてゐた。革命は古い惡支配者を殺したけれど、善良な支配者の上に、安全な確立された位置を與へようと欲したのである。即ち、それは單に惡に代へるに善を以つてしたに過ぎなかつた。）惡も善も亦、その差別に於てはフィリスタアと亂暴な青年のそれと何等の差異もないのである。）u. s. w.

今日に至るまで革命の原則は單にこの特別な制度若しくはあの特別な制度を攻撃すると云ふこと、即ち、改造（reformatorisch）以外に殆んど一歩も出なかつた。多くが改善されたかも知れない、『思慮ある進歩』として強く固着されたかも知れない、が兎に角、其處にはいつでも一人の新らしい支配者が古い支配者の代りとして存在する、そして顚覆は——建設なのである。我々は今でも若きフィリスタアを年とつたフィリスタアと區別してゐる。革命は第三階級、即ち、中産階級の勃興と同時にブルジョアの流儀に於て始まつた。そして、ブルジョアの流儀で乾上つた。自由になつたのは個人（それのみが人間である）ではなく、市民（der Burger）であり、シトアイヨン（citoyen）であり、政治人（der politische Mensch）であつた、そしてその理由から人間ではなく人類の一標本であり、更に特別に、自由市民と稱する市民階級の一標本であつた。

革命に於て、世界歴史に影響を及ぼしたのは個人ではなく、一個の人民であつた。國民、至上國民が全ての物を成し遂げようと欲したのであつた。國民と云ふが如き、一個の觀念である、想像せられた自分が働らいてゐるやうに見える。即ち、個人はこの觀念の道具としてかれ等自身を功献し、そして『市民』として行動する。

人民はその權力を有してゐると同時に、その制限を有してゐる、國家の基礎的律法に於て、特

許證に於て、合法的な(rechtlichen)若しくは、『正しき』(gerechten)君主、その人は自から指導されると同時に、『合理的律法』に從つて支配する君主に於て。要するに、合法(Gesetzlichkeit)に於てブルジョアジィの時代は合法の英國的精神によつて支配されてゐる。地方的政治團體の集會は、常に、その認可がどの位の程度まで、許されるかと云ふことを思ひ起させる、そして、それは單に御機嫌によつてのみ召集されるので、不機嫌の場合に於てはいつでも投げ出されるのである。それはいつでもその召集に付てそれ自から氣を揉んでゐるのである。私の父が自分を生んだと云ふことは確かに否定出來ないことである。けれど、自分が一度生れてきた以上は、父が自分を生んだ上の彼の色々な目的は少しも自分とは關はりないのである、そして、彼が必要に應じて、如何に自分を召集することがあつても、自分は自分自身の欲することをやるのみである。故に政治的團體の召集せられたる集會、即ち、革命の初期に於ける佛蘭西の集會に於てすら、それは召集者から獨立すべきものであることをまつたく正當であると認めた。それは存在してゐたのだ、であるから、若し、それが自己の存在の權利を認めず、父に從屬してゐるものであると自から想像したなら、如何に馬鹿らしきことであらう。召集せられた者は最早『召集者は彼が私を創造した時に、どんなことを要求したか？』と問ふ必要はない、しかし『自分が一度召集に應じたからに

は自分は如何なることを要求すべきであるか？』でなければならない。かれ等の集合が召集されたのは、召集者によつてでも、選擧者によつてでも、特許證によつてでもない。彼にとつては何物も神聖な、破りがたい權力ではないであらう。彼は制限的な『認可』を知らないであらう、また忠義であることをも欲しはしないであらう。若しかくの如きことが少なくとも議會から期待され得るとしたなら、それはすべての臍の緒から切斷せられ、考慮することなき完全にエゴイスチックな議會になるであらう。しかしながら、議會は常に敬虔である、そしてそれ故に、人は、たとへ如何に多くの半端な不決斷な、卽ち僞善的な『エゴイズム』がその中に流行しても驚くには當らないのである。

政團の議員達は特許證、王の意志等によつてかれ等の爲めに備へられたる制限內に止まらなければならない。若しかれ等が、それをやらず、若しくはさう爲し得ないとすれば、その時、かれ等は『踏み出さ』なければならない。どんな忠實な人間がそれ以外に行動し得るであらう、卽ち彼自身と、彼の確信と彼の意志をば第一義のものとすることが出來るであらう？　何人が彼自身を肯定せんと欲する程、不道德的であり得よう、團體及び全てが破滅してもかまわないと云ふ程に人々は注意深く、かれ等の認可の範圍內に止まつてゐる。勿論、人は如何にしても、彼の力の

範圍内に止まらなければならない、なぜなら、何人も、それ以上のことを爲し得ないからである『自分の力、若しくは若しそれがさうならば、自分の無力が自分唯一の制限である、けれども認可は單に拘束を與へる命令である。自分はこの全てを顚倒する見解を公言するものであるか？　否自分は一個の律法に拘泥する市民である！』

市民はその本質と最も密接な關係ある道德を公表する。この道德の第一の要求は、人は確實な仕事、譽れある商賣に從事し、道德的生活を送るべきものなることを强調するにある。これに反して、不道德なるは、騙兒であり、曖昧女であり、竊盜であり、强盜であり、殺人者であり、賭博者であり、職業なき無錢者であり、輕浮な人間である。剛健なる市民はこれ等の『不道德なる』人々に對して、『最も深い義憤』の感情を披瀝する。すべてこれ等の人間は安定を缺き、仕事の確實と、堅實にして合宜の生活と、一定の收入(等)とを缺いでゐる。要するに、かれ等の存在は安全なる基礎の上に立つてゐない爲めに、悉く危險なる『個人、若しくは孤立人』或は危險なるプロレタリアに屬する。かれ等は『個人的呼號者』である、そして何等の『保證』(garantien)をも提供しない、從つて、『失ふべき何物』をも有せず、賭すべき何物をも有してはゐない。家族的羈絆の形成は、たとへば、人間を束縛する。束縛せられてゐる人間は安全を提供し、つかまへるこ

とが出來る。しかし、淫賣婦はさうではない、賭博者は賭博の爲めに全てを賭け、彼自身と他人とを破滅させる——何等の保證(ギャランティ)もない。市民に對して、疑はしく、反對に、危險に見ゆるところの全ての者は『浮浪人』と云ふ名稱の下に總括せられるかも知れない。悉ゆる浮浪人的生活振りは彼を不快にする。なぜなら、其處にはまた智的浮浪人 (geistige vagabonden) と呼ばれてゐる人々がゐる、それ等の人々にとつては、かれ等の祖先の傳來の居住地があまりに窮屈で、壓制的に思はれ、最早、その制限せられたる範圍に自から滿足して住むことが出來なくなるのである。穩健なる思索の範圍に止まり、數千の人々の愉快と靜穩とを提供するところのものを破りがたき眞理として固守する代りに、かれ等は凡ゆる習慣の束縛を飛び越え、かれ等の大膽なる批判と懷疑に對する不屈のマニアを以つてこれ等の無法なる浮浪人等が暴れまわるのである。かれ等はプロレタリアの不定にして動搖常なき階級を形ち造るのである。若しかれ等がかれ等の動搖せる性質を叫び出す時に『手に合はぬ奴等』と呼ばれる。

所謂プロレタリア若しくは貧窮狀態 (Pauperismus) にはかくの如き廣き意義がある。若し、何人によらず、市民が極力貧乏を除かんと欲してゐるものであると信ずるならば、その人は如何に誤まつてゐるであらう！ これに反して、善き市民は『よき財寶は不平等に分配される、そして、

神の賢明な命令に從つて、常にさうなるであらうと云ふ事實』を比較にならない樂し氣な確信を以つて信じてゐる。すべての陋巷に於て彼を包圍する貧乏は、精々、施物を投げ與へるか、然らずんば『正直で役に立つ』奴に仕事と食物を見出してやることによつて始末をつける以上には眞の市民を煩はしはしない。けれど、革新的な不滿な貧乏と、最早、靜かに我慢することが出來ず亂暴に動搖し始めるそれ等の貧民に包圍されればされる程、彼は自己の靜かな享樂を感ずるやうになるのである。浮浪人を閉ぢ込めよ、動搖の養成者は、最も暗黑なる牢獄中に投げ込め！　彼は國家に於ける『現存の制度組織に反抗して不滿を勃發せしめ、人民を煽動せんと』欲する者である——彼を石打て、彼を石打て！

しかし、これ等の同一な不滿な者の中から次の如く、稍々合理的な者が出て來る。專制な帝王であらうと、立憲的な君主であらうと、共和的な支配者であらうと、自分達が保護を受けさへすれば、自分達とその主義とを保護する『善良な市民』にとつては其處に何等の差別をする必要はないのである。そして、その保護者をかれ等が常に『愛して』ゐる主義とは抑も／＼どんなものであるか？　それは勞働のそれでなければ、また所産のそれでもない。しかしながら、凡庸（Mittelmässigkeit）のそれである。美しき中庸（Schönen Mitte）のそれである、僅かな生産と僅かな勞

力、卽ち利子を產み出す所有（verzinsender Besitz）である。所有は玆では定められた、與へられた、繼承されたる（所產）である。利子を引き出すことがその努力（勞働）である。であるから勞働する資本である。唯だ〳〵無過度、無極端、無急進である！（nur kein Ubermasz kein ultra, kein Radikalismus！）確かに所產の權利ではあらうけれど、單なる遺產に過ぎない。確かに勞働ではあらうが、自分自身のそれでは少しもない、資本の勞働であり、それに從屬する勞働者等のそれである。

若し或時代が誤謬の中に浸されてゐるとすれば、或者はいつでもこの誤謬から利益を引き出し自餘の者はそれから苦しまなければならない。中世紀に於ては、教會が全權を所有しなければならない、卽ち、地上に於ける至上の君主でなければならないと云ふ誤謬が基督教徒等の間に一般に傳つてゐた。教主も俗人も等しくこの『眞理』を信じてゐた。そして兩者が同一の誤謬の中に魅せられてゐた。しかしながら、それによつて教主等は權力の利益を享け、平人等は服從の苦しみをしなければならなかつた。しかしながら、『人は艱難によつて智慧を學ぶ』と云ふ諺の如く、かくして俗人は遂に智慧を學び、最早、中世紀的の『眞理』をば信じなくなつた。――同樣な關係が市民と勞働階級の間に存在してゐる。市民も勞働者も金と云ふ『眞理』を信じてゐる。金を

所有してゐない者も、それを所有してゐる者と同樣にそれを信じてゐる。つまり、俗人も僧侶も同じくである。

『金がこの世界を支配してゐる』と云ふのが市民時代の主調である。

『飢餓者』(Hungerleider)としての窮乏せる貴族と窮乏せる勞働者は、政治的考慮の及ぶ限りに於て何等の價値をも認められない。所產と勞働とがそれを行ふのではなくて、金が考慮を齎すのである。(das Gold gibft Geltung)所有者等が支配する、國家は窮乏者からその『從僕者』を養成する、そしてそれ等の人々に、かれ等が國家の名に於て支配してゆく割合によつて、金(俸給)を與へる。

私は國家から全ての物を仰いでゐる。自分は國家の許諾なくして如何なる物を所有し得られるか? 自分がその許諾なくして所有するところの物を、國家は、『合法的稱號』の缺乏を發見するや否や、私から取り去つてしまふ。であるから、自分は國家の恩惠とその許諾によつて全てを所有してゐるのではあるまいか?

これのみに、合法的稱號の上にのみ、市民は安定してゐるのである。市民は國家の保護と、國家の恩惠を通してのみ存在する。一度國家の權力が破れたなら、彼は必然に全ての物を失ふこと

を恐怖するであらう。

けれど失ふべき何物をも有してゐない、賤民の場合はどうであらう？ 彼は失ふべき何物をも有してはゐないから、彼の『無一物』に對して國家の保護を必要とはしないのである。反對に、若しその國家の保護が被保護人（protege）から失はれるなら、彼は利益を得るのである。故に、無一物者は、國家をもつて、所有者にのみ特權を與へ、彼即ち無一物者の爲めには何事をもせず、只管、所有者のみを保護し、かれ等の膏血を絞る權力と見做すようになるであらう。國家は市民の國家であり、市民の領土である。國家は人間をその勞働の如何によつて保護するのではなく、その從順（『忠義』）、――即ち、國家によつて彼に委ねられた權利が國家の意志、律法に從つて享樂され、處理されてゐるか否かによつて保護するのである。

市民の政策（regime）の下にあつては、勞働者等は常に、所有人の手中に落ちる、――即ちかれ等の勝手に國家の領土の幾分を所有してゐる（そして、所有せられる物は悉く國家の領土であり、國家に從屬する、そして、僅かに個人の釆地である）、特に金と土地とが、即ち、資本家等の手に落ちる。勞働者は彼の勞働が浪費者に對して有してゐる價値の範圍にまで、その勞働を實現することが出來ない。『勞働はひどく拂はれる！』資本家がそれから最大の利益を占める。――よ

く支拂はれるのは、よく支拂はれる以上の者は單に國家の光輝と領土とを高める人々の勞働である、卽ち高級國家從僕者等の勞働である。國家はその『善き市民』が卽ち。財産家等が危險なしにひどく支拂ふことが出來る爲めにのみよく支拂ふ。國家はよき俸給によつてその從僕等を國家自身の爲めに保證する。そしてそれ等の人々から、保護する權力、卽ち『市政』(Polizei)を『善き市民』の爲めに形ち造くる（軍人、悉ゆる種類の官吏、たとへば法政、敎育等の、――要するに悉く『國家の機械』である）、そして『善き市民』は喜んでそれに高き租稅を支拂ふ、卽ち、かれ等の勞働者等になるべく低き賃金を支拂はんが爲めである。

しかしながら、勞働者等の階級は、その本質に於て保護を受けてゐないので（なぜならかれ等は勞働者として國家の保護を享樂してゐるのではなく、その臣民として、所謂、法律の保護者であるポリスの享樂中に一ッの分前を有してゐるのみである）、いつでもこの國家、卽ち、この所有者の國家、この『市民王政』に敵對する一個の權力になつてゐる。その主義とする勞働はその價値を認められない。それは利用(ausgebeutet)される、それは、その敵なる所有者の掠奪品(Kriegsbeute)である。

勞働者等はかれ等の手中に最も巨大なる力を有してゐる。そして、若しもかれ等が一度それを

完全に自覺して、利用すれば、何物もそれに抵抗することは出來ないであらう。かれ等は單に勞働を中止し、勞働の所産をかれ等のものと見なして、それを享樂するであらう。これが此處彼處にそれ自からを現はしてゐる勞働運動の意義である。

國家は勞働の奴隷狀態の上に安定してゐる。若し勞働が自由になれば、國家は滅亡するのである。

B　社會的自由主義

我々は自由に生れた人間である。ところが何處を眺めても、我々は悉くエゴイスト等の從僕になつてゐる！　故に、我々も亦エゴイストになるべきであらうか？　どうして！　我々は寧ろエゴイストを不可能にしたいものである！　我々はかれ等を悉く『乞食』にしてやりたいと思ふ。『全ての者が持つことが出來る』には、我々の全ては何物をも所有してはならない。

かう社會主義者等は云ふ。

諸君が『全て』と呼ぶこの人は抑も、何人であるか？——それは『社會』だ！——けれどそれなら、それは具體的なものであるのか？——我々がその身體なのだ！——諸君がか？　おや、そ

れなら、諸君は諸君自から一個の身體ではないのか――諸君は夫〻自確かに具體的である、けれど諸君全體を合したものは單に數個の身體であつて、決して一個の身體ではない。故に、結合せられた社會はまことにその奉仕の爲めに數個の身體を持つことは出來るかも知れないが、決して社會自身の一個の身體を持つことは出來ない。政治家等の『國民』の如く、それは一個の『幽靈』以外の何物にもならないであらう、そしてその身體は單なる類似に過ぎないものとなるであらう。

政治的自由主義に於ける人間の自由は、個人からの、個人的領土からの、主人(Herrn)からの自由であつた。各個人を他の個人から安全ならしむることが、即ち人間的自由であつた。

何人も與へるべき何等の命令を有してゐない。法律のみひとり命令を與へるものである。けれど、たとへ個人が平等になつたとしても、かれ等の所有は未だ平等にはならなかつた。そして、しかも、貧乏人は金持を必要とし、金持は貧乏人を必要とする。前者は金持の金を、そして後者は貧乏人の勞働を。かくして、何人も一個人として他人を必要とはしないが、授與者として彼を必要とする。かくして、與へるべき何物かを所有してゐる人、即ち所持者或は所有者として人を見るのである。故に、その人の所有如何によつて、人間が定められる。そして持つこと、即ち『所有物』の點で、人々が不平等になる。

それ故に、社會的自由主義は、何人も所有してはならないと云ふ結論に到達する、恰かも政治的自由主義の場合に於て、何人も命令を與へてはならないと云はれたやうに。即ち、その場合に於て、國家のみが命令を獲得したやうに、こんだは社會のみが所有獲得するやうになつた。

なぜなら、各人とその所有を他に對して保護するところの國家はかれ等を相互に分離する。各自が彼の特別な部分であり、そして彼の特別な部分を持つてゐる。自己のあるがままに、また持つがままをもつて滿足して人はかくの如き物の狀態を有益であると見てゐる。けれども、自己のあるがまま以上になり、それ以上を所有せんと欲する者はこの『以上』を求めて周圍を見廻はす。そして、それを他人の權力内に發見する。玆に於て、彼は矛盾に突き當る。人間としては、何人も他人に劣つてはゐない、しかも、或人間が、他の持たず、しかも持ちたいと欲してゐる物を所有してゐる。かくして、彼は、或人間は、結局、或他の人間よりも以上である、なぜなら、前者は彼の必要とするところの物を所有し、後者はそれを所有してゐない。前者は富者であり、後者は貧者であると云ふ結論に達する。

彼は更に一歩を進めて自から訊ねる、我々は我々が正しく埋めた物を再び復活せしむべきであるか？　或は又この迂回的に復活せられた人間の不平等をこのままに見過すべきであるか？　否

反對に、我々は、これまで唯だ僅かに完成せられたものを全く成就しなければならない。我々の他人からの自由はなほ他人が命令し能ふところのものから、彼が彼の個人的權力中に所有してゐるものから、――要するに『個人的所有』からの自由を缺いでゐる。然らば、我々をして個人的財産を廢除せしめよ。全ての人をして最早何物をも持たざらしめよ、各人をして皆一個の『襤褸人』(Lump)たらしめよ。財産を非人格的ならしめよ、それをして社會に從屬せしめよ。

至上支配者、唯一命令者の前に、我々は悉く平等になつた、平等人、即ち、無用人(Nullen)になつた。

至上所有者の前に、我々が悉く平等な――襤褸人になつた。現在に於て、人はなほ他人の評價に於て『襤褸人』であり、『無一物』である。けれども、その時にはこの評價を止む。我々が悉く一緒に襤褸人になる。そして、共産的社會の集團として、我々は我々自からを『襤褸組合人』(Lumpengesindel)と呼ぶかも知れない。

プロレタリアが、貧富の懸隔の取り除かれた彼の目的とする『社會』を眞に建設した時には、彼は一個の襤褸人になるであらう、なぜなら、その時、彼は襤褸人たることが何等かの價値あるものの如く感ずるであらう、そして、恰も革命が『市民』と云ふ言葉に對してなした如く、『襤褸

人』を名譽ある稱號として高めるに相異ない。權様人たることが彼の理想である。我々は悉く權様人になるべきである。

これが『人道』の立場からした第二の『個人』掠奪である。命令も財産も個人には殘されない國家が前者を奪ひ、社會が後者を奪つた。

なぜなら、社會に於ては最も暴虐的な禍がそれ自からを感じさせる、故に被抑壓者が特にそれを感じる、その結果として、社會の下層に於ける人々が、社會にその過失を發見したと考へ、**正しき社會**を發見せんとすることをかれ等の仕事とする、人が**彼自身**以外の全ての物に先づ過失を發見せんとすること、即ち國家に、または富者の利己心、その他に、しかも、それ等の存在に對して感謝する過失をも亦同時に我々が持つてゐるのである――かくの如きは單に舊くさい現象に過ぎない。

共産主義の反省と結論とは極めて單純に見える。この當時の狀態――即ち、國家の現在に於ける狀態に於て、――或者が、即ち多數者が、他の者、即ち少數者に比較して、不利益な狀態にある。かくの如き物の狀態に於て、多數者が**繁榮**の狀態にあり、少數者は**窮乏**の狀態にある。故にかくの如き現在の狀態が廢除されなければならない。そして、その代りにはなにか？　繁榮の孤

立した狀態の代りに――繁榮の一般狀態、萬人の繁榮である。
革命を通して、ブルジョアジィが全能になつた。そして、すべての不平等は各人が市民の權威にまで高められ、若しくは落されたことによつて、廢除された。市民が――高められ、貴族が――落された。第三階級が唯一の階級になつた、――即ち、國家の市民の階級である。今、共産主義がそれに答へて云ふ、――我々の權威と我々の本質とは、國家と云ふ我々の母の、平等な子供等であり、悉く彼女の愛と保護とに對して平等な要求をもつて生れたと云ふことに於て成立してゐるのではなく、我々全てが相互の爲めに存在してゐると云ふことに於て成立してゐる。これが我々の平等である、即ち、我々が、私も君も、君達も悉く、活動する、即ち各自の爲めに『勞働する』と云ふので我々は平等なのである。その時、我々の各自は悉く一個の勞働者である。我々の要點は我々が國家の爲めに存在してゐる(即ち、市民)と云ふのではない、即ち、我々が、市民たることの爲めに存在してゐるのではない、我々は各自の爲めに存在してゐるのである、――即ち、我々の各自は我々の必要を考慮すると同時に、私によつて彼自身の必要を滿足せしめられる他人を通してのみ存在する。彼は、例へば、我の衣物の爲めに働らく(裁縫師)私は彼の娛樂の爲めに働らく(喜劇作者、輕業師、e・t・c)、彼は私の食物の爲めに、(農夫、その他)、私は彼

の敎育の爲めに(科學者その他)。我々の威嚴と我々の平等とを成立するものは勞働である。

市民たることは我々に如何なる利益を齎すか？　重荷である！　そして、我々の勞働は如何に高く稱贊せられるか？　出來るだけ低くければ低い程！　しかし、勞働は兎に角我々の唯一の價値である。我々が勞働者であると云ふことが我々にとつて最上のことである。これがこの世に於ける我々の意義である、故にそれがまた我々の尊重すべきことであり、また、尊重せらるべきことでなければならない。諸君は我々に何を携げて、出遇ふことが出來るか？　たしかに、また勞働以外のなにものでもあるまい。勞働或は奉仕の爲めにのみ我々は諸君に報償を負ふてゐるので諸君の單なる存在に對してではない。即ち、諸君が諸君自身の爲めに存在してゐることに對してではなく、唯だ諸君が我々の爲めに存在してゐることに對してである。諸君は何によつて我々に對する請求の權利を有してゐるか？　恐らく、諸君の高貴な家柄によつて？　否、諸君が我々の欲するところ、必要とすることを爲すことのみによつてである。然らばかくの如くであらしめよ。我々は、我々が諸君の爲めに働らくことによつてのみ諸君に對して價値ある者とならうと欲してゐる。しかし、諸君も亦同樣に我々によつて抑制せらるべきである。奉仕が評價を決定する——即ち、我々にとつて何等か役に立つところの奉仕、つまり相互の爲めの勞働、共通善の爲めの勞

働である。各人をして、他人の眼中に一個の勞働者として映ぜしめよ。有益なる何事をか成就するところの人は何人に對しても劣つてはゐない、即ち、――凡ての勞働者等は（勿論『共通善』の爲めの勞働者等の意味に於ての勞働者、i・e・共産主義的勞働者）平等である。けれど、勞働者等は彼の賃金を償してゐるが故に、賃金をも亦平等ならしめよ。

信仰が人間の名譽と威嚴とを滿足せしめてゐる間は、如何に困難な勞働であつても、若しそれが、人間としての彼の信仰を妨げない限りに於て何等抗議を持ち出すことは出來なかつた。さてこれに反して、萬人が彼自身を人間として教養すべき時に當つて、機械の如き勞働に人間を貶しめることは、奴隷狀態と全然同樣の結果を齎すものである。若しも或る職工が十二時間以上も働いて死ぬばかりに疲勞したとすれば、彼は人間たることから切り離されてゐるのである。凡ての勞働は人間が滿足せしめらるべき意向を持たなければならない。故に彼は又勞働に於ても一個の主人でなければならない。即ち、全體としてそれをすることが出來なければならない。ピン製造場に於て、頭のみをつけ、針金をのみ延す（等）ところの職工は、まるで機械の如くに働らいてゐるのである。彼は半ば訓練せられるのみで、主人にはならない。彼の勞働は彼を滿足せしめ得ない、それは單に彼を疲らすのみである。彼の勞働はそれを自からのみでは無である、それ自か

らに何等の目的をも有してゐない、それ自からに於て完全してゐない。彼は單に他人の手中に向つて働らく、そしてこの他人によつて用ゐられる（利用される）。これが爲め、他人の爲めの勞働者には其處に教養せられた心の享樂がない、精々生硬な快樂があるばかりである。教養が彼に對して鎖される。善き基督教徒である爲めに人は唯だ信仰すべき必要がある、そして、それは最も抑壓的な事情の下に於てなされ得るのである。由來、基督教的な精神は抑壓された勞働者等の敬虔、かれ等の忍耐、服從（等）をのみかばふ。蹂躙されたる階級が基督教徒であつた限り、かれ等はかれ等の悉ゆる悲慘を耐へることが出來た。なぜなら、基督教はかれ等の不平や憤怒を勃發せしめない。ところが今や、慾望の抑制が最早十分でないのみか、かれらの飽滿が要求されるブルジョアジィは現世の享樂の、物質的享樂の福音を宣言した、そして、今ではこの教義が我々の貧民の間に、追隨者を發見したことを驚いてゐる。それは、人間を祝福したのは信仰や貧乏ではなく、教養と所有であることを明らかにした。我々プロレタリアも亦それを理解してゐる。

市民は個人の命令や專横から我々を解放した。けれども、さまぐ\な位置の機會から生じて來る專横が殘されてゐる。そしてそれは境遇の運と呼ばれるかも知れない。好き運と、『運によつて惠まれた』人々がなほ殘つてゐる。

たとへば、産業の一部門が破産して、數千の勞働者がパンを失ふ時に、人々はその罪を荷はなければならないのは個人ではなく、『その位置の中に秘んでゐる禍』であることを認めるべく充分合理的に考へる。

それなら、我々はその位置を變へようではないか、それを全然改めようではないか、さうすればその運が無力になつて、一ッの法則が出來るだらう！　我々は最早、機會の奴隷であつてはならない！　かくの如き變動に止めを刺す新らしき秩序を創造しようではないか。そして、かの秩序を神聖なるものたらしめよ！

昔、人は何物にかなる爲には君主に迎合しなければならなかつた。革命後に於ては、『運を捉め！』と云ふのがその合言葉であつた。幸福を渉獵り、危險を弄ぶ市民的生活がこの中に含まれてゐた。これと同時に、其處には又、何物かを獲得した者は再びそれを輕々しく賭けてはならないと云ふ要求が含まれてゐた。

奇妙ではあるが、然かも素晴らしい自然的矛盾。競爭、その中にのみひとり市民的な若しくは政治的な生活がそれ自からを展開せしめてゐる競爭は、徹頭徹尾運の遊戯である、上は取引所の相場から下は諸官省の歎願、顧客の渉獵、仕事の探求、昇進と勳章に對する渴仰、小賣商人のケ

チな掛引（等）に至るまで。もし誰れでも彼の競爭者を押し除けて、高價を附けることに成功するならば、その時、『幸福な骰子』が投げられるのである。なぜなら、勝利者が門出に先きだつて、或才能を附與せられてゐる彼自身を見ることは一片の幸福として見られなければならない（たとへその才能が最も注最深い產業によつて發達したものとしても）、そしてそれに對して何人も拮抗出來ないとしたならば、その結果は――それ以上の才能ある者が發見されないと云ふことになる。さて、その内に何等の邪惡をも見ることなく、これ等の變轉極まりなき運命の眞中に於てかれ等の日常生活を孜々として勉めつつある人は、かれ等自からの主義が赤裸にせられ、危險玩弄の『不運發生』としては現はれる時に最も道德的な義憤に捕へられるのである。危險玩弄は、諸君の見る如く、あまりに明白で、あまりに露骨な競爭である、そして、悉ゆる明白な裸形の如く尊敬すべき禮節を憤慨せしめる。

社會主義者等はこの機會の活動に止めを刺し、人々が最早、運命に從屬せず、自由である社會を建設しようと欲する。

世の中の最も自然な段取りに於て、この努力は先づ（不運）が（好運）に對する憎惡の叫びとなつて、それ自からを發現する、即ち、運の何事をも爲なかつた人々が、運が全てをなしてくれた

人々に對する憎惡の叫びとなつて現はれる。

けれど、恐らくその惡感情は好運の人に對して向けられたのではなく、市民制度のこの腐敗した點なる運に對して向けられたのである。

共産者主義が初めて、自由活動を人間の本質であると宣言した時に、かれ等は、凡ての勞働日氣質(かたぎ)と等しく日曜日を必要とした。凡ての物質的努力の如く、かれ等も、かれ等の智慧のない『勞働』の傍に敬神、高揚の念、即ち神を必要とした。

共産主義者が諸君の中に、人間を見、兄弟を見るのは單に共産主義の日曜方面である。勞働方面に從へば、彼は諸君を決して單純に、人間として取り扱はず、人間努力者即ち勞働人と見做すであらう。第一の見解はその中に自由主義を持つてゐる。しかし、第二の中には、不自由が隱されてゐる。もし諸君が『怠惰漢(なまけもの)』であつたとしても、彼はまことに諸君の中に人間を認むることを誤まらないであらう、しかし、同時に、彼は『怠惰人』としてのその人間を純化し、怠惰から勞働は人間の『宿命であり天職』であると云ふ信仰にまで諸君を改宗せんと努めるであらう。

であるから、彼は二重の顏を示してゐる。一方で、彼は精神人が滿足を得るやうに努め、他方に於ては物質的な即ち肉體人の方便の爲めに彼の周圍を見廻はす、彼は人間に二重の立場を與へ

る、——物質的獲得の役目と、精神的のそれとを。

市民は精神、物質兩方面の品物を公開した、さうして、各自の欲するがまゝに手を延ばすことを許した。

共產主義は事實各自の爲めにそれ等を用意し、各自の上にそれ等を押し付け、それ等を獲得することを强ひる。精神物質方面の品物が我々を人間たらしめてゐるのであるから、我々は人間となる爲めに勿論これ等の品物を獲得しなければならないと云ふ觀念を共產主義は眞面目に持つてゐる。市民制は獲得を自由にした。共產主義は獲得を餘儀なくする、そして、商賣を實行する者のみを獲得者として認める。商賣が自由であると云ふことのみでは充分でない、汝等がそれを取り上げなければならない。

かくして、批判すべく殘されたる餘地はこれ等の物品の獲得が未だ決して我々を人間たらしめないと云ふことを證據立てるにある。

各人が彼自身から人間を作るべきである、或は各人は彼自身を人間たらしむべきであると云ふ自由命令には、其處に、各人はこの勞働の人道化の爲めに時を得なければならない、卽ち各人が彼自身の爲めに働らくことが可能にならなければならないと云ふ必然性が置かれてゐた。

市民制は人間に屬する全ての物を競爭にまで手渡したなら、これを實現することが出來ると考へた。そして、個人に與ふるに全ての物に對する權利を以つてした。『各人が全ての物に向つて努力することが出來る！』

社會的自由主義はその事柄が『が出來る』では定まらないと云ふことを發見する、何故ならば『が出來る』は單に『それが何人にも禁ぜられてゐない』と云ふことを意味するのであつて、『それが萬人に對して可能にされる』と云ふのではないからである。故に、市民制は單に、口と言葉の上のみで自由であつて、行爲の上に於ては著しく不自由であることを斷定してゐる。それは、我々自身のために勞働することの出來る手段を我々に與へようと欲してゐるばかりである。

運及び競爭の主義は確かに勞働主義によつて驅逐された。しかしながら、同時に勞働者は、自已の本質は『勞働者』であると云ふ彼の自覺の上に立つてエゴイズムから遙かに高く自からを持し恰かも市民が自已を棄却して競爭に縋つたやうに、勞働社會の至上權に自からを拜跪する『社會的義務』と云ふ美しい夢が依然として夢み續けられる。社會が我々の要求する物を與へる、そして、我々はその爲めに社會に對して義務があり、全ての物を社會に負ふてゐると云ふことを人々は再び考へるやうになる。（ブルウドンはCréation de l'Ordre,, の四一四頁で叫んでゐる、『產業に

於ても、科學に於けるが如く、發明の公表が第一で、悉ゆる義務中の最も神聖なものである』、と。)かれ等は依然として『あらゆるよき物の至上授與者』に奉仕せんとしてゐるのである。與へ授け許すところの社會は、少しも自我ではなく、單に我等が利益を引き出し得る道具、或は手段に過ぎない。我々は何等の社會的義務を有せず、單にインテレッセを持つのみで、それが爲めに社會が我々に奉仕しなければならないと云ふこと。我々は社會に何等の犧牲を拂ふ義務はない、もし我々が何物をか犧牲にするとすれば我々自身の爲めに社會を犧牲にすると云ふこと。——これに就て、社會主義者等は何事をも考へてゐない、なぜなら、かれ等は——自由主義者等として——宗教的教義の中に閉ぢ込められ、從來の國家の如く、狂熱的に神聖な社會を渴仰してゐるからである。

　我々が全ての物を持つことの出來る社會は新しき主人であり、新しき幽靈であり、新しき『至上存在者』である、そして、それは『我々に必ずその奉仕と歸依とを科するものである』！

　政治的並に社會的自由主義に對するより詳細なる評價は更に進んでその所を發見すべく待たなければならない。今、我々は暫時これを看過して、先づ人道的即ち批判的自由主義(humanen oder kritischen Liberalismus)の前にかれ等を呼び出さなければならない。

C　人道的自由主義

自由主義が自己批判の『批評的』自由主義に於て完成を告げた時に、――其處に於ても、批評家は依然として自由主義の原則、即ち人間以上には出ない、――これは明らかに人間に從つて名付けられ、『人道的』(humane)と呼ばれることが至當であるかも知れない。(『批評主義』を非難するに當つて、スティルネルは四十年代に於けるブルウノオバウエルをその主領とする特別な運動に當つてゐるのである。バウエルは當時、聖書に關する彼の見解の爲めにルボンの大學を退き、一八四三年、伯林の近郊に居を構へ、Aelgemine Literature Zeitung を建設し、友人等と共にかれ等の周圍と戰ひ、『純然たる人道の範圍に於ける個人の』『絶對解放』を絶叫し、當時、次第に勃興し來りつつあつた共產的社會主義者及び政治的自由主義の急進的渴望を『衆愚』の名の下に總括し、かれ等を敵として戰つたのである――英譯者註)

勞働者は最も物質的な且つ主我的な人間として見做れる。彼は人道の爲めに何等功献することなく、ひたすら彼自身及び彼の福祉の爲めにのみ全てのことをする。

市民制は人間の自由を單にその生來に關してのみ宣言し、彼をして自餘の人生を人非人（エゴ

イスト）の爪の中に、見捨てしめなければならなかつた。由來、政治的自由主義の政策の下にあつて、エゴイズムは自由利用に對する廣漠たる領域を有してゐる。

勞働者は市民が國家を利用したやうに、彼のエゴイステックな目的の爲めに社會を利用するであらう。汝等は結局唯だ主我的目的を持つてゐるばかりである、汝等の福祉！　は社會主義者にとつての人道的自由主義者の非難である。純粹な人道的インテレッセを取りあげよ、然らば我は汝等の仲間になるであらう。』けれど、これには、其處に一個の勞働者の自覺と云ふよりも更に强く、更に包括的な自覺が從屬してゐる。』『勞働者は何者をも作らない。故に何物をも所有してゐない。しかしそれは、彼の勞働が常に個人的な勞働であり、彼自身の要求にのみ精確に當て嵌められたものであり、その日その日の勞働であるが故に、何物をも造り出さないのである。』（Bauer Lit. Ztg. V. 18）これに反して、人は、たとへば、かのグウテンベルグの勞働が個人的に終始せず、無數の子供等を產出し、依然として今日まで、續いてゐる事實を考へるかも知れない。それは人道の要求の爲めに打算された永遠不朽の勞働であつた。

人道的意識は市民の意識と同時に勞働者の意識をも輕蔑する。なぜなら、市民は唯だ〳〵浮浪人（すべて『一定の職業を持たざる』人々）とかれ等の『不道德』に對して『義憤』してゐる。勞働者

は遊惰漢（『なまけ者』）とその『不德』によつて『胸惡く』されてゐる、なぜなら、寄生的で非社會的な原則からして。これに對して人道的主義者は答へる――多數者の不安動搖は單に君達の所產であるフィリスタアよ！ だが、君達プロレタリアが萬人の刻苦を要求し、賤役を一般的にしようとすることは、依然として今日まで諸君に纏はりついて駄獸的生活の名殘りである。如何にも諸君は、萬人が等しく苦役に從事することによつて苦役その物を輕くし、しかもこの理由によつてのみ、萬人に等しく餘暇を得せしめようと欲してゐる。しかし、かれ等はその餘暇に於て何を爲すべきであるか？ この餘暇が人道的に、過される爲めに、諸君の『社會』は何をするか？ 社會はその獲得されたる餘暇を再び自我的選擇に任かさなければならない。そして、諸君の社會が促進するところの所得はエゴイストの手に落ちる、恰かも市民制の所得が、人間の無主人たることが、人道的要素を以つて國家によつて充されず、それが爲めに專制的な選擇にまで任せられたやうに。

人間が無主人になると云ふことは確かに必要なことである。それだからと云つて、またエゴイストが人間の主人になつてはならない。否、人間がエゴイストを支配すべきである。人間が將に餘暇を發見しなければならない、けれど、若しエゴイストがそれを利用するならば、それは人間

から失なはれるであらう。故に諸君は餘暇に人間的意義を與へるべきである。けれど、諸君勞働者等は君の勞働をすら、自我的の衝動から企てる、なぜなら諸君は、飲み、食ひ、且つ生きんことを欲するからである。諸君は餘暇に於て、どうしてより少なきエゴイストであり得よう？ 諸君は諸君自身に諸君の時を持つこと（卽ちなまけること）が勞働の後にうまくゆくからこそ働らくのである、そして、諸君が如何に諸君の餘暇を過すべきかは機會にまで任せられてゐる。

けれど、若し凡ての戸がエゴイズムに對して鎖されなければならないとすれば、完全に『無私な』行爲、全然無私に向つて努力することは必要になるであらう。これのみが人間的である、なぜなら、人間のみが無私で、エゴイストは常に偏私だからである。

我々が無私をして暫時そのままに任かして置くとして、その時、我々は訊ねる、諸君は何事に對してもインテレストを取らず、何物に對しても、自由に對しても、人道（その他）に對しても熱心にはならないのか？ と。『おお、否、だが、それは利己的なインテレッセではない、偏私ではなく人道的な、卽ち、——理論的なインテレッセで、個人若しくは各人等（「全て」）に對するインテレッセではなく、人間と云ふ觀念に對するそれである！』

ところが諸君も亦、諸君の觀念、諸君の自由に對する觀念に向つてのみ熱心であることを氣付いてはゐないのだ。

そして、更に、諸君の無私も亦、宗教的な無私と同じく、天上の偏私である事を氣付いてはゐないのか？　たしかに、諸君は諸君は個人に對する利益を冷淡に見棄てる、そして抽象的に諸君は fiat libertus, pereat mundus（自由をして世界を征服せしめよ）を叫ぶ事が出來る。諸君は又來るべき日に對しても考へず、個人の要求に對しても眞面目な注意を取らず、諸君自身の快樂、その他に對しても何等の考へをも持たない。諸君はすべてこれ等のものから何物をも造り出さうとしない、なぜなら、諸君が一個の——夢想家に過ぎないからである。

諸君は人道的自由主義者は人間に對して可能な全ての物が人間的だと云ふことを主張する程自由であると想像してゐるのか？　反對に！　彼が賣笑婦に對するフィリスタアの道德的偏見を抱いてゐないことは事實である。けれど、『この女は彼女の肉體を金取り機械にしてゐると云ふこと』(Lit Ztg. V. 26) は彼女を『人間』としての彼にとつて侮蔑すべきものとするのである。賣笑婦は人間に非ずと云ふのが彼の判斷なのである。若しくは女が賣笑婦である限り、彼女は非人間であり、獸的である。更に、猶太人、基督教徒、特權者、神學者、（等）も人間ではない。汝が猶

太人（等）である限り、汝は人間ではない。其處でまた至上命令だ、汝等から全て特別なものを投げ棄てよ、それを批判してしまへ！　猶太人でも基督者（等）でもあるな、一個の人間になれ人間以外の何物にもなるな。全て制限的な明細書に對して、汝のヒユマニテイを肯定せよ、それによつて、汝自身を一個の人間たらしめよ、そしてそれ等の拘束から自由なれ、汝自身を『自由人』にせよ、即ち汝の全てを決定する本質としてヒユウマニテイを承認せよ。

私は云ふ、諸君はたしかに一個の猶太人、一個の基督者等より以上である、けれど諸君はまた一個の人類よりも以上である。それらは悉く觀念であるが、諸君は具體的である。そして、諸君は諸君が『或る定まつた人間(Mensch als solcher)』と云ふやうな者になれると思ふのか？　諸君は我々の後生が、我々の力が充分でない爲めに拭ひ去るべき何等の偏見も制限をも發見しないと想像してゐるのか？　若しくは諸君の四拾代或は五拾代に於て、諸君は最早、諸君の中に消費するべき何物をも有せず、そして諸君一個の人間であると云ふやうな時代が來ると諸君は恐らく考へるのか？　しかも未來の人々は我々の夢にも感じないやうな多くの自由の爲めに戰つてゆくであらう。諸君は何の爲めに後世の自由を必要とするか？　若しも諸君が人間になるまで何物としても諸君自からの價値を認めまいと思ふなら、諸君は、『最後の審判』まで、人間、若しくはヒユマニ

ティが完全な域に到達する日まで待たなければならないであらう。けれど諸君はたしかにその日の來るまでに死ぬだらうからして、一體、その時に勝利に對する褒賞はどうなるであらう？であるから、寧ろ、その場合を轉倒して、自分は一個の人間である！と諸君自身に對して云へ。私は私自身の中に人間を製造することによつて出發し始める必要を認めない、なぜなら、人間は既に、その他の私の諸性質と同樣私に從屬してゐるからである。

ところで、批評家は訊ねる、如何にして、人が猶太人であると同時に人間たり得るかと。第一に私は答へる、人は、たとへ『人』と猶太人と人間とが同一物を意味するとも、決して猶太人であることも出來ない。『人』は常にそれ等の特殊以上に到達する、そして、――イサク等をして常に猶太的であらしめよ、――一個の猶太人は、一個の猶太人以外の何物でもない、彼はそれ以外たり得ないのである、それは、彼が將にこの猶太人たるが故である。第二に、猶太人として、たとへ、人間たることが何等特殊なものでないとしても、人はたしかに人間たり得ないのである。けれど、第三に、――そしてこれがその要點である――自分は、猶太人として、全然、自分の――なり得る者であり得られる。サミユエルでもモオゼでも、又その他の者でも、諸君はかれ等が猶太數以上に出ることを豫期するやうなことはないであらう。たとへ、諸君はかれ等が未だ『人間』

ではないと云はなければならないとしても。かれ等は單にかれ等のなり得る者にしかならない。今日の猶太人等はそれとは異つてゐるであらうか？　なぜなら、諸君がヒユウマニテイの思想を發見したから、そして、その結果、猶太人が悉くその改宗者たり得るであらうか？　若し彼がさう出來たとすれば、彼はさうなることに失敗しなかつたまでで、若し失敗したら、彼がさう出來なかつたまでである。諸君の要求は彼に何の關はりがあらう？　諸君が彼に話しかける人間たるべきの天職は彼になんの關はりがあらう？

人道主義者が約束する『人道的社會』に於ては、一般の原則として、甲もしくは乙が有してゐる『特別』な何物も承認されない、凡そ『私』(Privaten)の性格を帶びてゐる物は何等の價値をも有してゐない。かくして自由主義圏は、人間と人道的自由にその善き原則を持ち、エゴイストと、私の全てにその惡しき原則を持ち、前者にその神を、後者にその惡魔をもちながら、完全にそれ自から囘轉してゐる。そして、もし特別な、即ち、私人が國家に於てその價値を失ふならば(無個人的特權)、もし『勞働人』もしくは『襤褸人』の社會に於て、特別な(私)の財産が最早認められないとすれば、『人道的社會』に於ては、特別な即ち私有的な全ての物は、まつたく省みら

れなくなるであらう。そして、『純粋批判』がその熱心な仕事を完成した時には、我々が私的なものと見做なければならないもの、『我々の無の意味を以て貫いた』物を、我々——が、立往生させなければならないことが明らかになつてくるであらう。

なぜなら、國家と社會とは人道的自由主義を滿足せしめない、それは兩者を否定すると同時に兩者を保留してゐる。かくして、或時にはその日の仕事は『政治的ではなく、社會的である』と叫んで、再び『自由國家』が將來の爲めに約束される。事實『人道的社會』は兩方である、——最も一般的な國家であると同時に最も一般的な社會でもある。制限されたる國家に對してのみ、それが精神的な私的インテレッセ（たとへば人民の宗教的信仰）をあまりに攪き亂すと云ふことが斷定される。そして、それがあまりに物質的な私的インテレッセのみに走ると云ふことは、制限された國家に就てのみ斷定される。兩つながら、私的なインテレッセは個人にまで任せらるべきである、そして、人道的社會としては全然一般的インテレッセにのみ關はるべきである。

政治家等は、個人的意志を自己意志、即ち專横を廢除せんと考へながら、所有（Eigentum）を通してのみ、我々の自己意志（Eige wille）が安全な隱れ家を得てゐることを觀察しなかつた。

社會主義者等も亦、財産を廢除して、これが依然として、自己所有（Eigenheit）にその安全な

存在を繼續してゐることを氣付かなかつた。それなら、所有たるものはひとり金と物品とのみであらうか、若しくは全ての說が何等か自分のもの、自分自身の何物かではないだらうか？

かくして、全ての意見が廢除されなければならない、卽ち、非個人的にされなければならない個人は何等の意見を持つ資格がない。けれど、自己意見が國家に移され、財產が社會に移された如く、意見も亦『人間』と云ふ一般な物に移されなければならない。そして、それによつて一般的な人間の說にならなければならない。

自己意志と所有とが無力になつた如く、自己所有卽ちエゴイズムも一般的なものにならなければならない。

『自由人』のこの至上發展に伴ひ、エゴイズムと自己所有とが主義の上で挑戰される、そして、社會主義者等の社會的『福祉』の如き副目的は高遠なるこの『人道の思想』の前に消え失せる。『一般人間的』實體でない全ての物は分離した何物かであつて、單に甲或は乙を滿足せしめる。若しくは、たとへそれが全てを滿足せしめても、それは、人間としてではなく、個人としてのみかれ等に對してそれを爲すが故に『エゴイステッシエス』と呼ばれる。

社會主義者等にとつては福祉が依然として至上の目的である、自由競爭が政治的自由主義者等

にとつて承認された物であつた如く。さて、福祉も亦自由である、そして、我々は自由に福祉を獲得することが出來る、競爭場裡に加入せんと欲する者が自由にさうすることが出來たやうに。けれど、競爭に加入するに當つて、諸君は唯だ市民となるの必要がある。同じく、福祉に與からんと欲する者は、勞働者たるの必要がある。いづれも『人間』と同義たるの點に、到達しない人間にとつては、彼がまた『智力的に自由』である時にのみ『まことによく』ある！　なぜなら人間は精神である。故に精神である彼以外の凡ての權力、――すべて超人間的な、天上の非人間的諸力、――が顚覆されなければならない、そして『人間』と云ふ名稱が凡ての名稱の上に高められなければならない。

かくして、近代の終りに於て（近代人の時代）、その始めに於て、主要の點であつたところのものが再び主要な點として歸つて來た。それは卽ち『智力的自由』である。

特に共產主義者に對して人道的自由主義者は云ふ、若し社會が諸君に諸君の活動を命ずるならば、その時、個人卽ちエゴイストの影響からまことに自由である、けれど、それが爲めに、なほ純人道的な活動であることを必用としない、なほ又諸君は人道の完全な機關であることを要としない。社會が諸君に要求する活動は如何なる種類のものであつても、依然として偶然的であるこ

とを諸君は知つてゐる。社會は諸君に殿堂を建設する位置、若しくはその種の何物かを與へるかも知れない、或は、さうでないにしてすら、諸君は諸君自身の衝動から、馬鹿らしき何物かの爲めに（故に非人間的）活動するかも知れない。然り、更に、諸君は實際諸君自身を養ふ爲めにのみ勞働する、つまり、生きる爲めに、いとしい生命の爲めに、そして、人道の光榮化の爲めではないのだ。故に、自由活動は諸君が悉ゆる癡愚から、非人間的な凡てから、卽ちエゴイステッシュなものから、（個人にのみ屬し、個人中の人間に屬せざるもの）諸君自身を解放し、人間と人道の觀念とを昧くするすべて眞實ならざる思想を消滅せしめるまでは決して到達されない。要するに諸君が單に諸君の活動に於て妨げられないばかりでなく、諸君の活動の實質がまた人間的でありそして諸君は人道の爲めのみに生き、さうして働らく時に於てのみである。けれど、諸君の努力の目的が單に諸君の福祉並に一般の福祉である間は駄目である。諸君が襤褸人の社會の爲めに盡してゐる間は未だ『人間的社會』の爲めに何事もなされてはゐないのである。

勞働のみでは諸君を人間とすることは出來ない、なぜなら、それは形式的であると同時にその目的が偶然的だからである。問題は、勞働する諸君が誰れであるかと云ふことである。勞働のみに就て云へば、諸君はそれをエゴイスティック（物質的）な衝動から、卽ち單に養ひを得んが爲め

にのみやるかも知れない。それは人道を進歩させる勞働でなければならない、人道の爲めに計り歷史的（人間的）進化に奉仕する、——即ち、人道的勞働でなければならない。これは二ッのことを含んでゐる。一ッは、人道に對して有益であると云ふこと、次にはそれが『人間』の仕事であると云ふこと、である。第一のみでは全ての勞働の場合がさうであるかも知れない、自然の、例へば動物の勞働さへ學問その他の進歩の爲めに人道によつて利用されるからして、第二は、勞働する者が自己の勞働の人間的目的を知らなければならないことを要求する。そして、人は彼が人間として彼自身を知る時にのみこの自覺を、持つことが出來るからして、それを識別する條件は——自覺（Selbstbewusztsein）である。

勿論、諸君が『斷片的勞働者』たることを止める時に既に多くが到達せられる、しかもなほ諸君は、單に諸君の勞働全體に對する見解を得、それに對する意識を獲得するのみであつて、それは未だ遙かに自覺、即ち、諸君の眞の『自己』又は人間たる『本質』に對する自覺から、遠いものである。勞働者はなほ『より高き意識』に對する願望を殘存してゐる、そして、それを、彼は（勞働の活動がそれを鎭めることが出來ないから）餘暇の時間に於て滿足せしめる。由來、餘暇は勞働の傍に立つてゐる、そして、彼は一息で勞働と怠惰なる人間とを宣言することを强ひられて

ゐる彼自身を見る、即ち、彼は、餘暇享樂者である怠惰人に眞の優越を歸すことを餘儀なくされてゐる。彼は勞働から脫脚せんが爲めにのみ勞働する。彼は、彼が勞働から自由にならんが爲めにのみ、勞働を自由にせんと欲してゐる。

事實、彼の仕事は何等滿足を與ふる實體を有してゐない、なぜなら、それは社會から負擔されてゐるばかりだからである、單なる定職（Pensum）、單なる課業（Aufgabe）、單なる職業（Beruf）だからである。そして反對に、彼の社會は滿足しない、なぜなら、それは仕事を與へるばかりだからである。

彼の勞働は人間としての彼を滿足させるべき義務がある。その代りに、勞働は社會を滿足させる。社會は人間として彼を取り扱はなければならない。しかし、社會は彼を賤民勞働者、即ち勞働する艦褸人として彼を待遇する。

勞働と社會とは彼に必要である、しかし、それは彼が人間としてかれ等を必要とするのではなく、唯だ『エゴイスト』としてのみかれ等を必要とするのである。

かくの如きものが勞働に對する批評主義の態度である。それは『精神』を集注して、『衆愚に對する精神の』戰ひを敢へてし、共產的勞働を以つて非智力的勞働なりと宣言するものである。か

れ等は勞働を嫌惡するが故に、群衆はかれ等自身の爲めに勞働を容易にせんことを愛してゐる。今日、群衆に供給されてゐる文學に於ても、勞働に對するこの嫌惡が一般に知られてゐる淺薄皮相を生んでゐる、それは文學から『探求の勞苦』を除かんとするものである。

故に、人道的自由主義は云ふ、諸君が勞働を欲するのは尤もである、我々も亦等しくそれを欲してゐる、しかし、我々はそれを最上の程度に於て要求してゐる。我々は餘暇を得んが爲めにそれを要求してゐるのではなく、勞働それ自からの中に凡ての滿足を發見せんとしてゐるのである我々はそれが我々の自己發展であるが爲めにのみ勞働を要求してゐるのである。

けれど、それなら勞働も亦その目的にまで適用されなければならない！　人間は人間的な自覺的な勞働によつてのみ、即ち、その目的に何等自我的なところなく、單に人間を目差し、人間の自己表現となる勞働によつてのみ尊しとせられる。かくして、その格言は laboro, orgo sum（我勞働す、故に我は人間なり）でなければならない。人道的自由主義者はすべての材料を用ひ盡す精神の勞働を要求する。彼は何物をも安定せしめず、何物をもその現存の狀態に置くことに滿足せず、何物にも甘んぜず、全てを解剖し、獲得せらるるすべての結果を新らしく批判する精神を要求する。この不休の精神が眞の勞働者である。それは偏見を抹殺し、あらゆる制限と狹隘とを

粉砕し、彼を支配せんとする全ての物の上に人間を高める、然るに共産主義者は彼自分の爲めにのみ勞働する、そして、自由ですらなく、必然からのみ勞働する、——要するに、苦役にまで宣告された人間を代表するのみである。

かくの如き型の勞働者は『自我的』ではない、なぜなら、彼は個人の爲めに勞働せず、また、彼自身の爲めにも、他の個人等の爲めにも、即ち、私の人々の爲めに勞働するのではなく、唯だ人道とその進歩の爲めにのみ勞働するからである。彼は個人の苦痛を和らげず、個人の要求を省みない、唯だ、人道が壓迫せられてゐる制限を除き、全時代を支配するすべての偏見を廢除し、萬人の道を妨げるあらゆる障害を取り除き、人間がかれ等自からを惱ましつつある誤謬を消滅し凡ゆる時代の凡ゆる人々の爲めに、彼を通して見出される諸眞理を發見する。要するに——彼は人道の爲めに生き、さうして働らく。

さて、第一に、偉大なる眞理の發見者は勿論、それが凡ての人間に有益であり得ると云ふことを知つてゐる。そして、それを吝んで抑へて置くことが、彼になんの享樂をも與へないので、彼はこれを傳達する。けれど、たとへ、彼は彼の傳達が自餘の人々にとつて著しき價値を有してゐると云ふ意識を有してゐてさへなほ且つ彼は決して、自餘の爲めに彼の眞理を求め、それを發

見したのではなかつた、否、彼自身の爲めに。なぜなら、彼自からがそれを欲したからである、そして、暗黑と妄想とは、彼が最善の努力を盡し彼自身の爲めに光りと智慧とを獲得する迄は彼に安心を與へなかつたからである。

故に、彼は彼自身と彼の要求の滿足の爲めに働らく。これと同時に、彼にまた他の人々、卽ち後生にまで有益となるが故に、彼の勞働は利己的の性質を帶びてはゐない。

第二に、若し彼が、自餘の人々の如く、彼自身の爲めにのみ働らくとすれば、何故、彼の行爲のみが人道的で、自餘の人々のそれが非人道的、卽ち利己的なのであるか？　恐らく、この書物繪畫、シンフォニィ（等）が彼全人の努力であり、彼がその中に彼のベストを盡し、彼自身を全部その中に投げ入れ、それによつて彼の全體を示すことを得たからである。然るに手工者の作品は單に、手工者を、卽ち手工上の技倆を映し出すのみで、『人間』を表現しないからであらう。シラアの詩篇中に、我々はシラア全體を見ることが出來る。然るに、數百のストーブに於ては、唯だ我々の前にストーブ製造者を見るのみで決して『人間』を見ないのである。

けれど、これは『或作品』に於て君達は出來るだけ完全に自己を示し、他の作品に於ては單に自分の技倆を、示すと云ふこと以上を意味してゐるであらうか？』そして、またその行爲の表現

してゐるものは自己ではないだらうか？　そして、或る作品によつて世の中に自分自身を提供し自分自身を表現すると云ふことは、自分の勞働の背後に自分を隱すと云ふことよりも利己的ではないであらうか？　諸君は、確かに、諸君が人間を表現しつゝあると云ふ。けれど、諸君の表現する人間は諸君である。諸君は唯だ、諸君自身を表現するのみである、然かも、手工者とは全然異なる故を以つて、――即ち、手工者は如何にして或る勞作中に彼自身を緊縮すべきかを理解しない、そして、彼自身として知られんが爲めには、人生の他の關係を探し求めなければならない然るに、諸君の要求は、――その要求の滿足を通してのみその[illegible]現される――理論的な要求であると云ふことの。

けれど、諸君はそれに答へて、諸君が全つたく異つた、即ち、より價値ある、より高尙な、より偉大な人間、他よりもより多く人間であるところの者を表現すると云ふであらう、そこで、私は諸君が人間に可能である全てを完成し、諸君が他の成功し得ざりしものを實現するものであることを許すとする。しかも諸君の偉大は、なんによつて成立するか？確かに諸君が他の人々（『群衆』）よりも以上であり、通常の人々、即ち『普通人』よりも以上であると云ふことに於てである確かに、諸君を通常人より高めることに於てである。しかし、諸君が他の人々に卓越してゐるの

は人間であると云ふことによつてではなく、諸君が『唯一』人（einziger）であることによつてである。勿論、諸君は人間が何をなし得るかを示す。けれど、それは、諸君と云ふ人間がするのであつて、他の（やはり人間である）人々が同じくそれをすることが出來ると云ふことが決して示すものではない。諸君はそれを單に唯一者としてのみ成就し、また、それに於て無二である。

諸君の偉大を成すところのものは人間ではなく、諸君がそれを創造するのである。なぜなら、諸君は人間より以上であり、他の人々より偉大だからである。

人間は人間以上であり得ないと云ふことが信じられてゐる。寧ろ、人はそれ以下であり得ない！

更に、人間が成就するものは如何なるものも人間の爲めに善くあると云ふことが信ぜられてゐる。自分がいつでも人間である限りに於て、――卽ち、スワビア人シラアの如き、プロシア人カントの如き或は近視眼人ギユスタヴス、アドルフハスの如く――自分は確かに自分の優れた性質によつて一個の知名な人間、スワビア人で、プロシア人で、また近視人であり得る。けれど、その場合とて、かのフレデリックの爲めのみ有名になつたフレデリック大王の杖より以上であると云ふ譯ではない。

『神に榮光を與へる』と云ふことは近代の『人間に光榮を與へる』と云ふことに照應する。けれど、私は自分自身の爲めにそれを保存したいと思ふ。

人間に『人道的』であれと云ふ說敎を發してゐる批評主義は社交的であることの必然の條件を告白してゐる。なぜなら、人は、人々の間にあつて人間としてのみ仲間たり得る。これによつてそれは『人間社會』の建設と云ふその社會的目的を知らせてゐる。

社會的理論の間にあつては、批評主義は云ふまでもなく、最も完全なものである、なぜなら、それは人間を人間から分離する全ての物の價値を排斥し、奪取するからである、全ての特權、信仰の特權に至るまでも。批評主義に於て、基督敎の愛の敎義、眞の社會的敎義が最も純粹な完成にまで來る、そして、それは人間から排他と反撥とを取り除かんとする最後の能ふ限りの實驗である。そして、その最も單純なる、(故に最も堅固なる)形に於て、卽ち、唯一の、それ自から獨有の形に於てエゴイズムに挑戰する。

『汝等の間に排他がたつた一ッ存在してゐてさへ、汝等は如何にして眞の社會的生活を送り得るか?』

私は反對に訊ねる、諸君の間にたつた一ッの連鎖が存在してゐる限り、諸君は如何にして眞に

は人間であると云ふことによつてではなく、諸君が『唯一』人 (einziger) であることによつてである。勿論、諸君は人間が何をなし得るかを示す。けれど、それは、諸君と云ふ人間がするのであつて、他の(やはり人間である)人々が同じくそれをすることが出來ると云ふことが決して示すものではない。諸君はそれを單に唯一者としてのみ成就し、また、それに於て無二である。

諸君の偉大を成すところのものは人間ではなく、諸君がそれを創造するのである。なぜなら、諸君は人間より以上であり、他の人々より偉大だからである。

人間は人間以上であり得ないと云ふことが信じられてゐる。寧ろ、人はそれ以下であり得ない!

更に、人間が成就するものは如何なるものも人間の爲めに善くあると云ふことが信ぜられてゐる。自分がいつでも人間である限りに於て、——即ち、スワビア人シラアの如き、プロシア人カントの如き或は近視眼人ギユスタヴス、アドルフハスの如く——自分は確かに自分の優れた性質によつて一個の知名な人間、スワビア人で、プロシア人で、また近視人であり得る。けれど、その場合とて、かのフレデリックの爲めのみ有名になつたフレデリック大王の杖より以上であると云ふ譯ではない。

『神に榮光を與へる』と云ふことは近代の『人間に光榮を與へる』と云ふことに照應する。けれど、私は自分自身の爲めにそれを保存したいと思ふ。

人間に『人道的』であれと云ふ説教を發してゐる批評主義は社交的であることの必然の條件を告白してゐる。なぜなら、人は、人々の間にあつて人間としてのみ仲間たり得る。これによつてそれは『人間社會』の建設と云ふその社會的目的を知らせてゐる。

社會的理論の間にあつては、批評主義は云ふまでもなく、最も完全なものである、なぜなら、それは人間を人間から分離する全ての物の價値を排斥し、奪取するからである、全ての特權、信仰の特權に至るまでも。批評主義に於て、基督教の愛の教義、眞の社會的教義が最も純粹な完成にまで來る、そして、それは人間から排他と反撥とを取り除かんとする最後の能ふ限りの實驗である。そして、その最も單純なる、(故に最も堅固なる)形に於て、即ち、唯一の、それ自から獨有の形に於てエゴイズムに挑戰する。

『汝等の間に排他がたつた一ッ存在してゐてさへ、汝等は如何にして眞の社會的生活を送り得るか?』

私は反對に訊ねる、諸君の間にたつた一ッの連鎖が存在してゐる限り、諸君は如何にして眞に

單獨たり得るか？　若し諸君が連結してゐるならば、諸君は相互を放れ去ることは出來ない。若し一ツの『結び目』が諸君をつかむなら、諸君は他人と共にあつてのみ何物かである、そして、諸君の十二人が一ダースになり、諸君の數千が人民になり、諸君の數百萬が人道になる。

『諸君が人間的である時にのみ、諸君は相互に人として仲間たることが出來る、恰かも諸君が愛國的である時にのみ、愛國者として相互を理解することが出來るやうに！』

御尤もである。そこで、私は答へる、諸君が單獨である時にのみ、諸君は、諸君として相互に交際し得るのであると。

自己の主義の呪咀によつて最も激しく打たれる人こそ正に最も鋭敏なる批評家である。自己から一ツ一ツ排他的なものを除き、即ち教會主義、愛國主義（等）を震ひ落しながら、彼は一ツ一ツ彼自身から纒目を解きほごし、教會人、愛國者（等）から彼自身を分離せしめ、遂に凡ゆる束縛が切斷せられる時に、彼は單獨になるのである。彼は凡ての人の中で最も排他的な、私的なものを除かなければならないのである。そして、諸君がそのドン底に到達する時、その排他的な單獨人彼自身以上に何にがより多く排他的であり得るのか！

或は恐らく彼は、若し全てが『人間』になり、そして排他を投げ棄てたならその狀態は更によ

りよきものとなるであらうと考へてゐるのではあるまいか？　ところが、『全て』が『各個人』を意味してゐるその理由から、最も明白な矛盾が依然として主張される、なぜなら『個人』は排他それ自身だからである。たとへ人道的自由主義者が最早、個人に對して何等、私的な排他的なもの、如何なる身勝手な思想、身勝手な愚行を許さないとしても、また、彼が、私的なものに對する彼の憎惡が絶對的な狂熱的な憎惡であるの故を以つて、彼の面前にある全ての物を批評し去るとも、或はまた、全て私的なものが非人間的であるの故を以つて、彼は私的な全ての物に對して何等の容赦をしないとしても、――なほ彼は私的な個人その人を批判し去ることは出來ない、なぜなら、個人の硬心が彼の批評に抵抗する、そして、彼を、この人を『私的な人間』と宣言するのみで、實は、私的な全ての物を再び彼に殘して滿足してゐなければならないからである。

抑も、私的な何物をも省みない社會は如何なることをなすであらうか？　私的なものを不可能とするのか？　否、『社會のインテレッセにそれを從屬せしむるのである、そして、たとへば、祭日を制定すると云ふが如く個人の意志が一般の利害關係と衝突しない限りにおいて、出來るだけその好むがままに任せるのである。』（Bruno Bauer, Judonfrage, p-66）全て私的なものが自由にまかせられる。即ち、それが社會に對して何等のインテレッセを持たないことになる。『教會と宗

敎心とはその障壁を破つて、科學に反抗し、かれ等は依然としてその面目を維持してゐるものであることを宣言した。啻だかれ等が國家の根抵であり、缺くべからざる基礎であると宣言せられた時に他の假面の下に隱されたのであると主張した――それは純粹に私的な事件である。かれ等が國家と結び付けられ、國家を基督敎的にした時でさへ、かれ等は、國家が未だその一般の政治思想を開發せず、單に私的な諸權利を制定しつつあつたと云ふ證據を示すに過ぎなかつた――かれ等は、國家が私的な事件であり、私的な事柄とのみ交渉しなければならなかつた事實に對する最高の表現であるに他ならなかつた。國家が遂にその命運を完成して、自由であるべき勇氣と力を持つであらう時に、國家はまた、自づから、各別のインテレッセと私的交渉にその眞の位置を與へることが出來るやうになるであらう。――その時、宗敎と敎會とは且つて經驗することの出來なかつた自由を與へられるであらう。最も純粹な私的事件でありまた各個人的要求の滿足としてかれ等はかれ等自身にまで任せられるやうになるであらう。そして、各個人、各聚會、各敎會とは、かれ等の欲するがまま、またかれ等が必要と考へるがままにかれ等の靈魂の祝福の爲めに盡すことが出來るであらう。各人は、自己の要求する程度に從つて彼の靈魂の祝福の爲めを計り、彼の要求の滿足の爲めに最上の保證を提供すると思はれる人を靈魂の世話人として受け入れ且つ

禮をするであらう。科學は遂に全然その遊戯から除外される。』(Brnno Baner, "Die gute Sache der Freiheit," PP-6263)

しかし、なにが起るべきであるか？　社會的生活は一ツの終局を持つべきであるか、そして、凡ての交友、凡ての友愛、凡そ愛と社會的原則によつて創造せられる全ての物が消え失せるべきであるか？

恰かも人は常に他人を必要とするのみで彼を求めないであらうかの如くに、また人は他人が彼を必要とする時に彼自身を提供してはならないかの如くに。否、その差別はかくの如きものである、——以前、個人等は或る繩目によつて一緒に束縛されてゐたが、今では個人が眞に他の個人と結合する。子と父とは太多數の面前で結合されてゐた、しかし、今かれ等は獨立して一緒になることが出來る。以前にあつては、かれ等は家族の一員として共に從屬してゐた、今かれ等はエゴイストとして結合してゐる。子たること並に父たることは依然として存してゐる、けれども、父と子とは最早それに拘泥しない。

實際、最後の特權は『人間』である。全てがそれによつて特權を與へられ、敍任される。ブルウノオ　バウエル彼自身も云つてゐる通り『特權はそれが全てに普及された時に於てすら依然と

して存する。』("Judenfrage" P. 60)

かくの如くして、自由主義は左の變化に於てその道程を走る。『第一、個人は人間ではない、故に彼の個性は重んずるに足りない。無個人的意志、無專横、無命令、無勅令！

『第二に、個人は人間的な何物をも所有してはゐない、故に、私のものも、汝のものも、即ち、財産は有効でない。

『第三に、個人は人間でもなく、人間的な何物をも有してゐないから、何等存在の權利を有せざるものである。彼は、彼の利己的附屬を有するエゴイストとして、人間「發見されたての人間」に對する餘地を造るべき批評主義によつて絶滅されなければならない。』

けれど、たとへ個人は人間でないとは云へ、人間は依然として個人の中に現在してゐる、そして、凡ての幽靈、すべての神聖なものと同じく、彼の中にその存在を有してゐる。故に政治的自由主義は『生れながらの人』、即ち生來の人として、個人に屬する全ての物を許可する。その中には、良心の自由、物品の所有等が算へられる、――要するに、『人間の權利』である。社會主義は個人に對して、活動する人間、『勞働する』人間として彼に屬すべきものを許す。最後に、人道的自由主義は、『人間』として彼の有するところのもの、即ち、人道に屬する全ての物を個人に與へ

る。故に單獨人（Einzige）は何物をも所有せず、人道が全てを所有する。そして、基督教に於て說教せられる『更生』の必要が明白に、最も完全な程度に於て要求される。新人になれ、『人間』になれ！

人は主の祈りの終りの部分を思ひ起して自かを考へるかも知れない。人間に主權（『權力』即ちdynamis）が從屬する。敎に如何なる個人も君主たり得ない、しかし、人間は個人の君主である。――王國即ち世界は人間の所有である、故に、個人は所有者たるの權利はない、人間、『全體』が世界を所有として支配する。――名聲と、榮譽即ち全ての『光榮』（doxa）は人間にまで歸せらるべきである。なぜなら、人間即ち人道は個人の目的である、その爲めに彼は働き、考へ、生き、その光榮を現はす爲めに彼は『人間』にならなければならないのである。

これまで、人々が常に發見せんとして努力し來つたちころのものは、程々なる點に於けるかれ等の不平等が『無本質』（unwesentlich）になるやうな共同であつた。かれ等は平等化、即ち平等を求めた、そして、全てを一箇の帽子の下に來らせようと欲した、それは、かれ等が一人の君主、一個の繩、一ッの信仰（『我々全てが信ずるのは獨りの神である。』）を求めつつあつたに他ならない。人々にとつては人間それ自から以上に親しみやすく、またそれ以上に平等な何物も存在し得

ない。そして、この共同中に愛に渴してる人々がその滿足を發見した。かれ等はこの最後の平等化を齎し、全ての不平等を統一し、人間の胸の上に人間を置くまでは安心することが出來なかつた。しかしながら、この共同そのものの下に於て、衰亡と破滅とが最も顯著になつてきた。更に制限せられたる共同の下に、佛蘭西人は依然として獨逸人に對抗し、基督教徒は回教徒(等)に對抗した。今や、反對に、人間が人々に對抗し始めた、卽ち、人々は人間ではないと云ふ理由によつて、人間が非人間(unmenchen)に對抗する。

『神が人間になつた』と云ふ文章が今、『人間が自分になつた。』と云ふ他の文章によつて續かれるこれが人間的な自分である。けれど、吾人はそれを轉倒して、云ふ、自分は自分が人間として自分自身を求めてゐた間は自分自身を發見することが出來なかつた。けれど、今では人間が自分になり、自分の中に具體を獲得せんことを渴望しつつあるやうに思はれる、自分は、結局、全ての物が自己に從屬し、人間も自己が無ければ失はれることを注意する。しかし、自分はこの最も神聖な物の殿堂たらんが爲めに自分自身を捧げようとは別段思つてはゐない、そして、それ故、自分が步るき始める時に、自分が人間であるか、非人間であるかを問題にはしないであらう。この精神をして私の首を守らしめよ!

人道的自由主義は根本的に仕事をしようとする。若し、諸君が一點に於てすら、特別な何物かであり、特別な何物かを持ちたいと思ふならば、そして若し諸君が諸君自身の爲めに他人以上の一ッの特權をすら保留せんと欲するなら、卽ち、『人間の一般的權利』でない一ッの權利をすら主張せんとすらならば、諸君は一個のエゴイストである。

よろしい！　私は他人以上に特別なものを持ちたくもなければ、特別なものになりたくもない私はかれ等に對して何等の特權を主張しようとも思はない、けれど、——私は自分自身を他の人々によつて計られたくはない、と同時に何等の權利をも持ちたいとは思はない。私は自分がなり得られるだけの自分になり、持ち得られるだけの物を持ちたいと思ふ。たとへ、他の人々が同一であり、同一なものを持つてゐても、自分はなんでそれを氣にかけよう？　等しき物、同じ物であり得ないと同時に、決してまたそれを持つことも出來はしない。それによつて、自分はかれ等に對して何等の障害をも與へはしない、恰かも、自分が運動するが故に『巖石の先きに』なることによつて、その巖に何等の障害をも加へないかの如く。若し、かれ等が障害を加へられたいなら、勝手に加へられるがいい。

他人に何等の障害を與へないと云ふことは何等の特權をも所有しないと云ふ要求の要點である

凡て『先きになる』ことを拒絶することは放棄の最も嚴密な理論である。人は『特別な何者』——たとへば猶太人、又は基督教徒の如き者として自からを見做してはならない。如何にも、自分は私の自身を何等特別な者と見做さうとは思はないが、唯だ無二(einzig)である。勿論、私は他の人々と同一なものを所有してゐる。しかもそれは比較するか反省する時にのみ役立つに過ぎない。事實、私は比較出來ない、無二者である。私の肉はかれ等の肉ではない、私の心は彼等の心ではない。若し、諸君がそれ等を『肉心』と云ふが如き總括の下に齎すなら、それ等は單に諸君の思想であつて、その實、私の肉私の心とは何等交渉なきものである。從つて、少しも、私に對して『召勅』を發することは出來ないのである。

私は諸君の中に何物をも認めようともせず、何等、尊敬すべきものを發見しようとはしない、即ち、所有者でも襤褸人でも、人間でもなんでもかまわない、私は唯だ諸君を使用(verbrauchen)しさへすればいいのである。たとへば、鹽は、それが私に味よき食物を作るが故に、自分がそれを消費するのである。魚に於て、私は一種の滋養を認める、故に自分はそれを食べる。諸君に於て、私は私の生活を快くする賜物を發見する、故に私は諸君を仲間として撰擇する。若しくは、鹽に於て、自分は結晶體を、魚に於て、動物性を、諸君に於て、人間を研究する。けれど、自分

にとつて、諸君は、私の爲めに存在してゐる諸君——即ち私の對象たるに過ぎない。そして、私の對象たるが故に、私の所有品である。

人道的自由主義に於て、襤褸人が完成された。我々は、若し我々が Eigenheit に到達しようと欲するならば先づ最も襤褸人的な、最も貧困の狀態にまで降らなければならない。なぜなら、我々外的な全ての物を剝ぎ棄てなければならない。しかし、赤裸な人間以上に襤褸人の如く見える何者も存在しない。

しかし、私が更にまた人間そのものをも投げ棄てる時に、なぜなら、自分は人間も亦自分にとつて外的な者であり、同時に自分はそれを土臺として何等の口實をも作り得ないが故に、それを投げ棄てる、その時、それは襤褸狀態より更に以上なものである。これは最早、單なる襤褸狀態ではない。なぜなら、最後の襤褸すら振り落され、此處に全て外的なものから赤裸にされた眞の裸形人が立つからである。襤褸人が襤褸そのものをも剝ぎ去つた、玆に於て、彼は最早襤褸人たることを止めたのである。

自分は最早襤褸人ではない、嘗つてはさうであつたけれど。

今日に至るまで、不調和は未だ破裂するまでには至らなかつた、なぜなら、恐らく、其處には近代的自由主義者と、舊式な自由主義者の爭鬪が流れてゐた、即ち、小規範に於ける『自由』を理解してゐる人々と『大規範』に於てそれを要求する人々、即ち穩和派と無限派との爭鬪が存在してゐるからである。凡ては、人間はどれだけ自由でなければならないかと云ふ問題に向つてゐる。人間は自由ならざるべからず、――これは凡ての人が信じてゐる。故に、凡ての人々はまた自由主義者である。けれど、各個人の何處かに人非人が存在してゐる、如何にせば彼を閉塞せしめ得るか？　如何にせば人間と同時に人非人を自由ならしめざる方法を講じ得られるか？

自由主義全體が不倶戴天の敵、破りがたき反對者を持つてゐる、恰かも神が惡魔を持つてゐるやうに。人間の傍には常に人非人であり、個人であるエゴイストが立つてゐる。國家と、社會と人道とはこの惡魔を征伏することが出來ない。

人道的自由主義は他の自由主義者等に對して、かれ等が未だ『自由』を要求してゐない者であることを明らかにしようとする骨折りを企てた。

若し、他の自由主義者等がかれ等の目前に單に孤立してゐるエゴイズムを有しながら、大方、盲目であるとすれば、急進的自由主義は、『群衆に於ける』エゴイズムをその敵とし、かれ等と等

しく自由を主義とせざる全てを群衆の中に投げこんでゐるのである、かくして、今や、人間と人非人とは嚴密に分離して、相互に敵として立つてゐる、即ち、『群衆』と『批評主義』である。更に言葉を換へて云へば、所謂『自由、人道的批評主義』("Judenfrage" p. 114) が淺薄未熟な、たとへば宗教的な批評主義に對抗してゐるのである。

批評主義は全ての群衆の上に勝利を得、『かれ等に破産の一般的證明書を與へんとする』("Lit. Ztg." V.15) 希望を發表してゐる。かくして、批評主義は遂にそれ自身を最も正しきものとして現はし、『小心にして臆病なる』全ての鬪爭をエゴイステックな頑迷、狹隘、卑劣なるものと見做さうと云ふのである。凡ての論爭がその意義を失ひ、ケチ臭き軌轢が投げ棄てられる、なぜなら、批評主義に於て、始めて、共通の敵が戰場に入り込むからである。『汝等は悉く熟れ劣らぬエゴイストである！』今、エゴイストが批評主義に對抗して立つ。

かれ等は眞にエゴイストなのであらうか？　否、かれ等、は批評主義がエゴイズムとしてかれ等を非難するが故にのみ批評主義に對して戰ふのである。故に批評主義と群衆とは同一の基督の上に立つてゐる。兩者がエゴイズムを敵として戰つてゐる。兩者がかれ自身の爲めにそれを排斥しそして、相互にそれを塗り付けてゐる。

批評主義と群衆とは同一の目的、即ちエゴイズムからの自由を追求してゐる、そして、かれ等の孰れがその目的に最も近づいてゐるか或はそれに到達してゐるかを單に爭つてゐるのである。猶太人、基督教徒、專制主義者、暗黑の人々、光明の人々、政治家、共產主義者――、全ては要するに、――かれ等から遠いエゴイズムの非難を把持してゐるのである。そして、批評主義がかれ等に對し、最も明白な言葉と、最も廣き意義において、この非難を齎す時に、全てがエゴイズムの非難に對してかれ等自からを正しとして戰ふ――即ち、批評主義が挑戰する同一のエゴイズムを敵としてである。

批評主義も群衆も兩方ともエゴイストの敵である。そして兩者は、各自、反對黨にエゴイズムを塗り付け、自から清潔であると同時に、頻りにエゴイズムからかれ等自身を解放せんと欲してゐる。

批評家は眞の『群衆の代言者』である、そして群衆にエゴイズムの單純な概念と言葉』とを與へる、然るに、"LitZig." 24 に於て、その勝利を拒まれてゐる代言者等は單なる拙工であつた。批評家は自由の爲めに、エゴイズムと戰ふ戰爭に於て、群衆の君主であり、將軍である。彼が敵とするところのものを、群衆も亦敵として戰ふ。けれど、同時に、彼も亦かれ等の敵である。か

れ等に對して單なる敵であるばかりでなく、臆病なる群衆の背後に於て、笞を揮ふ友情ある敵である。

これによつて、批評主義と群との對抗は、左の矛盾にまで要約される。『汝等はエゴイストだ』!『否、我々はさうではない』!『己は汝等にそれを證據立てて見せてやらう』!『汝こそ我々の證明を受けるだらう』!

それなら、我々はかれ等が自から公言するところのもの、即ち、非エゴイストと見做さうではないか、そしてまたかれ等が相互に、さうであると考へてゐるもの、即ちエゴイストであるとも見做さうではないか。さうすればかれ等はエゴイストであり、またエゴイストでないことになる。

多分批評主義は云ふ諸君の自我が、人間的自我(menchliches Ich)になる程全然凡ゆる制限から それを解放しなければならないと。私は云ふ、諸君が出來るだけ諸君自身を解放し給へ、そらして、諸君は諸君だけの事をすますことになる。凡ゆる制限を破ると云ふやうな事は、誰れにも出來ないことである、もつと、解かりやすく云へば、大多數に制限であると思はれてゐるものは必ずしも各自にとつての制限ではない。であるから、他人の制限を破る爲めに骨折つて、諸君自からを疲勞せしめ給ふな。諸君は諸君自からのを破り棄れば、それで充分ではあるまいか。誰れが

これ迄に萬人の制限を、一ッでも破ることに成功したか？　あらゆる時代に於けるが如く、今日と雖も、なほ無數の人々は、『人道の制限』を悉く背負つて、走りまわつてゐるのではあるまいか？　自分の制限の一ッを顚覆する人は、他の人々にその方法手段を示すことは出來るかも知れない。かれ等の制限を顚覆することは、かれ等の事件に屬する。何人もまたそれ以外の何事をも爲し得ない。人々に對し、かれ等が全然人間になることを要求することは、かれ等に對して、凡ゆる人間的制限を投げ棄てよと命ずる事である。それは不可能事である。なぜなら、人間は何等の制限をも有してはゐないからである。自分は、いかにも或制限を有してゐる、けれど、凡そ自分に關係あるものは單に自分のものに過ぎない、そして、それ等の制限は唯だ私によつて征伏され得るばかりである。人間的自我と云ふやうなものに、自分はなり得ない、なぜなら、自分は自分で、單なる人間ではないからである。

けれど、我々はなほ批評主義が我々の心に、銘じ得る何物かを敎へなかつたか否かを見ようではないか！　自分は、自分が無私でない限り自由ではない、また無私でない限り人間でもないが？　さて、自由であることと、人間であることが私にとつて、何等の差異がないとしても、しかも、自分は私自身を實現し、若しくは私自身を重くするべき如何なる機會をも、そのまま用ゐ

ずに棄てて置くやうなことはしたくない。批評主義は、若し何によらず、私の中に固くそれ自からを根ざし、牢乎として抜きがたいものになるなら、自分はその囚人であり從僕であり、即ち憑かれた人間になると云ふことを、教へることによつてこの機會を私に提供する。それが如何なるインテレツセにせよ、若し自分がそれから脫脚出來ない場合には、そのインテレツセは私の中に一個の奴隷を發見したのである。そしてそれは最早、私の所有ではなく、私がその所有にされるのである。故に我々の、所有の如何なるものをも、固定せしむるな、それによつて常に快感を感じてゐたいなら、——唯だそれを消費するにあるのみ、と云ふ批評主義の教訓を受け入れようではないか。

かくして、若し批評主義が、諸君が絶へず批判し、絶へず分解しつゝある時のみ人間である！と云ふならば、その時、我々は云ふ、自分はさうしないでも人間である、そして、同じく、自分は自分である。故に、自分は唯だ私の所有を私自身に對して、完全にする世話を焼かうと思ふ。そして、それを安全にする爲めには、自分はたえずそれを私自身に取り戻し、獨立に向つて各剎那をその中に絶滅し、それがそれ自身を固定して『固定觀念』若しくは『マニア』になることの出來る前にそれを噬みこんでしまふ。

けれど、私は自分の『人間的天職』の爲めに、それをするのではない、自分が自分自身をそれにまで召すのみである。自分は、人間にとつて、消散することが可能である故を以つて、全ての物を傲然として、消散しつつ歩るこうとも思はない、そして、たとへば自分が未だ拾歳未滿の時に、自分は十誠の無意義なことを批評しはしない、しかも、自分の人間であることに變りはない、そして、自分がまだそれを批評せず、そのままにして置くと云ふ、そのことによつて充分人間的に行爲してゐるのである。要するに、自分は何等の天職をも持たず、何物にも、卽ち、人間であると云ふそのことにすら、追隨しようとはしない。

私は今、自由主義がさまぐな努力を盡して、獲得したものを拒絕してゐるのであらうか?一端獲得されたものが、失はれなければならないと云ふやうな日は遙か向ふへ行つてもらひたい自分は、唯だ『人間』が自由主義を通して自由になつた後に、自分の凝視を自分自身の上に轉じそして、公然と自分に對して告白する。人間がを獲得したやうに思つてゐるものを、自分のみが獲得した、と。

人間は『人間が人間に對して、至上存在者である』時に自由である。かくしてすべてその他の至上存在が、絕滅されると云ふこと、卽ち、神學が人類學によつて顚覆され、神とその恩惠とが

一般の『無神論』によつて一笑に付せられると云ふことは、すべて自由主義の完成範圍に屬することである。

所有のエゴイズムは、『わが神』すら無意味になつた時に、與へるべき筈である最後のものを投げ棄てた。なぜなら、神は、彼が個人の福祉を念頭に置く時にのみ存在する。恰かも個人が神の中に彼の福祉を求めるやうに。

政治的自由主義は、主人と從僕との不平等を絶滅した。それは人民を無主人に、無政府的にした。主人は今『エゴイスト』である個人から移されて、法律又は國家と云ふ幽靈になつた。社會的自由主義は所有の不平等、即ち貧富の不平等を絶滅し、人々を無所持、無所有にする。財産が個人から取り去られ、幽靈的社會にまで還附される。人道的自由主義は人々を無神に、atheistisch にする。故に、個人の神『わが神』が絶滅されなければならない。さて、無主人と云ふことは實際同時に、奉仕からの自由であり、無所有と云ふことは、同時に管理からの自由であり、無神と云ふことは、同時に偏見からの自由である。なぜなら、主人と共に從僕が失せ、所有と共に、管理が失せ、固く根ざした神と共に、偏見がなくなるからである。けれど、爾後、主人が再び國家となつて現はれ、從僕は再び臣民として現はれる。また所有が社會の財産となる時に、管理は再

び新しく勞働となつて生れて來る。そして、神が人間としての偏見となる時、其處に新しき信仰即ち人道及び自由に對する信仰が起つて來る。なぜなら、個人の神、萬人の神即ち、『人間』が今高められてゐる。『即ち、人間たることが我々全てにとつて、最高のことであるが故である。』けれど、何人も『人間』と云ふ觀念の移入するところのものに、全然なることが不可能であるが爲めに、人間は個人にとつて、依然として高遠な他界であり、到達し得べからざる至上存在であり、神である。けれど、同時にこれは『眞の神』である、なぜなら、彼は我々にまで充分適はしいからである、——即ち、我々自からの『自己』(Selbst)だからである。我々自から、しかも、それは我々から離れ、我々以上に高められてゐるものである。

追録

『自由人道批評主義』に對する如上の批判は、問題の書物が現はれた以後、直に斷片的に書かれたものであつた、勿論、この種の傾向を帶びてゐる他の諸說に對し、この書以外に於て批評を加へはしたが、自分は玆に、それ等の斷片を僅かに蒐集したに過ぎなかつた。けれども、批評主義

は絶えず突進しつゝある、故に、私に今一度、それに戻る必要を餘儀なくされて居る、そこで、私の書物は終りを告げたにも拘らず、この結局的註解を差し挿む所以である。

私は今、自分の前に、ブルウノオバウエルの "Allgemeine Literatur-Zeitung" 最近號(第八號)を持つてゐる。

其處では再び『社會一般のインテレッセ』と云ふことが頂上に立つてゐる。けれど、その後、批評主義は反省した。そして、この『社會』と云ふものに一つの明細書を附し、それによつて、以前、なほその社會と混同せられてゐた形式と明らかな區別を立ててゐる。以前、『自由國家』としてなほ推稱されてゐた『國家』は全然放棄されてゐる、なぜならそれが決して『人間的社會』の仕事を成就し得ないからである。批評主義は一八四二年に於て、僅かに『一時、人間的な事件と政治的な事件を、同一視すべく强ひられたそれ自身を見た。』けれど、今、それは、『自由國家』としての國家すら、人間的社會でないことを發見した。若しくは、等しくさう云ひ得る如く、人民も『人間』ではないと云ふことを發見した。我々は批評主義が如何に神學を突破し、如何に神が人間の前に塵芥の如く沒落したかを、明らかに示したかを見た。我々は今、またそれが政治に對しても同一な態度を現はし、人間の前には、人民も國民も悉く跡なく消え失せるものであるかを

明らかに示して來た。かくして、我々はそれが敎會と國家とを兩つながら、非人間的であると宣言して、如何に兩者を說明し去つたかを見る。そして、我々は更に——批評主義は旣にこれを我々に示してゐる——それがまた『精神的存在』と叫んでゐる『群衆』が人間の前に如何に無價値に見えるかを、證據立てるのを見るであらう。そして、その他の劣弱なる『精神的存在』がこの至上精神の面前に於て、如何にかれ等自からを維持することが出來るであらう？『人間』が虛僞の偶像を悉く投げ棄てる。

かくして、批評主義者が現在抱いてゐる見解は『群衆』に對する檢討である。彼は『人間』の面前に『群衆』を引きづり出し、人間の立場からそれと挑戰せんとしてゐる。『今、批評主義の對象としてゐるものは何物であるか？』『群衆と云ふ、一精神的存在である！』批評主義者はこれ等のものを『學んで知る』であらう、そして、かれ等が人間と矛盾してゐるものであることを發見するであらう。彼は、群衆が非人間であることを說明するであらう、そして、この證明に於ても以前のそれと同じく、神聖なものも、國民的なものも、卽ち、敎會と國家の干與するものは悉く非人間的であることを述べることに成功するであらう。

群衆は『革命の最も意義ある產物であり、政治的啓蒙のイリユウジョンと、十八世紀の啓蒙運

動全體とが、無限の絶望にまで、投げ込んだ欺かれたる群衆として』定義されてゐる。佛蘭西革命はその結果として、或者を滿足せしめたが、同時に他の者をも滿足にさした。滿足せしめられた者は市民（ブルジアジイ、その他）であり、不滿足なのは――群衆である。かくして、批評家彼自身は『群衆』にまで屬してはゐないだらうか？

けれど不滿足者は依然として、大なる迷霧の中をさまよつてゐる。そして、かれ等の不滿は『無限の絶望』に於てのみ、自からを發言してゐる。等しく不滿な批評家は今、これを支配せんと欲してゐる。彼は群衆なる『精神的存在者』をこの絶望から救ひ出し、單に絶望にのみ落ち入つてゐるそれ等の人々を『高揚』し、かれ等に正しき態度を與へて、當然征伏せらるべき革命のそれ等の結果に、向はしめんとするより、以上のことを望むことも亦、遂げることも出來ないのである。――彼は群衆の頭領となり、かれ等の斷乎たる代辯者になることが出來る。故に彼はまた『群衆から彼を分離してゐる深き溝渠を沒却せんと』欲してゐる。彼は『人民の低劣なる階級を高めん』と欲してゐる人々から、單にそれ等の人々のみならず、また彼自身をも、その『絶望』から救ひ出さんと欲してゐることによつて、明らかに區別されてゐる。

しかし、彼が群衆を以つて『理論の自然なる反對者』であると考へ、『この理論がそれ自身を發

展せしめればせしめる程、それだけ群衆を堅實なものとならしめるであらう』と云ふことを、先見する時に、彼の良心はまた確かに彼を欺いてはゐない。なぜなら、批評主義者は人間と云ふ彼の假想を以て、群衆を啓發することが出來なければ、滿足させることも出來ないからである。若し、かれ等が市民に對して、單なる『人民の低劣階級』であり、政治的にツマラヌ群衆であつたとすれば、『人間』に對しては、なほ更に單なる『群衆』、人間的に無意味な群衆でなければならない――しかも非人間的な――群衆、卽ち人非人の集合である。

批評家は人間的なものを一切除去する。そして、人間的なものが眞であると云ふ假想から出發し、今迄に見出されたところのものを全て否定しながら、彼自身に反して進んで行く。彼は單に人間的なものは、彼の頭腦以外何處にも發見せられず、自餘のものは悉く、非人間であることを證據立てるのみである。非人間は現實であり、至る處に現在してゐる、そして、それが『人間的でない』と云ふ證明によつて、批評家は單に、それが非人間的であると云ふ重復的な文章を明らかに說明するのみである。

けれど、若し非人間が決斷心を以つて、それ自からに背を向けると同時に、紛亂せる批評家からも振り向いて、彼の說明によつて少しも動かされず、そのまま彼を立往生せしめたならどうで

あらう？『諸君は私を非人間と呼ぶ』とそれは批評家に對して云ふかも知れない、『いかにも自分は――諸君に對してさうである。しかし、私は諸君が私を、人間的に相反せしめるが故にのみさうなのである、そして、私は、自分自身をこの反對中に、催眠せしめてゐる間は、私自身を輕蔑することが出來る。私は侮蔑に價する者であつた。なぜなら私が自分以外に私の『よりよき自己』を求めてゐたからである。私は自分が『人間的』に就て夢見てゐたばかりで非人間であつた。私はかれ等の『眞の自己』を渇望し、常に「哀れむべき罪人」として生活した信神者に似通つてゐた。私は他に比較してのみ私自身を考へてゐた。充分、私は全てに於ける全て、即ち、無二(einzig)ではなかつた。けれど、今私は、自分自身に對し、非人間であると思ふことを止める、私自身を計り、他人によつて、私自身を計らせることを止める、私以上の何處をも認めることを止める。であるから、さよなら、人道的批評家さん！　私は唯だこれ迄非人間であつたが、最早、今はさうではない。けれど、無二だ、諸君の嫌ひなエゴイストである。けれど、人間や、人道的や非利己によつて、それ自からを計らせるやうなエゴイストではなく、無二『なるが故にの』エゴイストである。』

我々は更に同じ號の他の文章、即ち『批評主義は何等の獨斷をも揭げざると同時に事物以外に

よつて、何物をも學び知らうとは思はない。』と云ふ文章に注意を拂はなければならない。

批評家は『獨斷的』になり、獨斷を掲げることを恐れてゐる。勿論である。なぜか、それによつて彼は、獨斷主義者と云ふ批評家の反對な者になるからである。その時、彼は批評家として善であつたにひきかへ、惡になるであらう。卽ち、無私な人間からエゴイスト（等）になるであらう。『凡ての物に關して、決して獨斷であるな！』これが、彼の獨斷である。なぜなら、批評家は常に獨斷主義者と同一の立場に立つてゐるからである。――卽ち思想と云ふ立場である。獨斷主義者と同じく、彼は或思想から出發する、けれど彼は思索の過程に於て決して主想を保留することを止めないと云ふ點で異つてゐる。そして、それを鞏固なものとせしめない。彼は單に思想信仰に反對して、思想過程を肯定する。思想に於ける停滯に反して。思索の進歩を肯定する。批評主義の立場からは、如何なる思想も安全ではない、なぜなら批評主義は思想であり、思索する精神それ自身であるからである。

故に、私は宗教的世界――そしてこれが思想の世界である――が批評主義に於て、その完成の域に到達したりと繰り返して云ふ。其處では思索が凡ゆる思想の中に闖入して、如何なる思想も、『自我的』にそれ自からを建設することは出來ない。若し唯だ一ッの思想すら、思索の過程を逃

れたなら、何處に『批評の純粹』と思索の純粹とが殘されるだらう？　これは、批評家が既に此處彼處に於て、人間の思想、人道及び慈愛の思想を、穩やかに嘲笑し始めたと云ふ事實を說明してゐる、なぜなら、彼は、此處で一ッの思想が獨斷的固定にまで近づきつつあることを疑ひ始めたからである。けれども、然し彼は、彼が、その中にその思想が溶解する『より高きもの』を發見する迄は、この思想を分解することは出來ない。なぜなら、彼は單に――思想の中にのみ動いてゐるからである。このより高き思想が思索それ自身の運動、或は過程のそれとして、即ち、思索する思想、批評の思想として說明されるかも知れない。

思索の自由が、事實これによつて完成された、精神の自由がその勝利を頌賛する。なぜなら個人的な『エゴイステツク』な思想がかれ等の獨斷的兇暴性を失つたからである。其處には、自由思索即ち批評主義の獨斷以外に、何物も存在してはゐない。

思想界に屬する全ての物に對して、批評主義は正義の上に、即ち、權力の上に立つてゐる。それは勝利者である。批評主義、そして批評主義のみが『最新』である。思想の立場からして、批評主義を征伏することの出來る何等の權力も存在しない。そして、この龍が如何に安々と、如何に遊戯に他の思想の小蛇を呑み下すかを見ることは、愉快なことである。蛇は悉くうねりもがく

けれども批評主義はそれを悉く、その『回轉』に任かせて打ち碎く。

私は批評主義の反對者ではない、即ち、私は如何なる獨斷主義者でもない。そして、批評家が獨斷主義者を寸斷する齒に自分自身を觸れさしてゐるとも感じてゐない。若し、私が『獨斷主義者』ならば、私は眞先きに、或ドクマ、即ち、或思想、觀念、主義を立てるであらう、そして、それを或系統、即ち、思想の組織にまで、紡ぎながら、『系統家（システイマテイケル）』として、これを完成するであらう。或は又、若し私が批評主義者、即ち獨斷主義者の反對者であつたならば、私は束縛する思想に對して自由思索の戰ひを繼續するであらう。そして、思索された物に對して、思索を禦ぎ守るであらう。しかし、私は思想の遺手でもなければ、思索の選手でもない。私が出發するところの『自分』は思想ではない、なほ又、私は思想から出來上つてもしない。私に向つては、名付けられざる物、思想の領土、思索、精神は悉く粉微塵にされる。

批評主義はかくの如き憑き物、全ての物に對する憑かれた人の戰ひである。その戰ひは、到る處に憑き物（と批評家はそれを呼んでゐる）即ち、宗教的な神學的な態度が彌漫してゐると云ふ意識をその根柢としてゐる。彼が人々が、神に對してのみならず、權利、國家、法律等の如き他の諸觀念に對して宗教的な、信仰的な態度を持してゐることを知つてゐる。即ち、彼は隨處に憑

き物を認める。かくして、彼は思索によつて思想を打破せんと欲する。けれど、私は云ふ、眞に自分を思想から、脱却せしむるものは無思想のみであると。自分をあらゆる憑き物から、解放するところのものは思索ではなく、私の無思想である。即ち、考へられない、理解出來ない自分である。

ドキッとすることが、自分に對して最も、心配な思索の役に立つ、四肢を延ばすことが、思想の懊惱を振ひ落す、上に飛び跳ねることが、私の胸から宗教的世界の夢魔を追ひ出す、そして、勇躍するフープラが永年の重荷を投げ棄てる。だが、その無考へな歡喜の奇怪な意義は、思索と信仰の長夜に於て認められることが出來なかつた。

『この最も困難を解決せんとするに當つて、それを破棄することによつて、最も理解力を要する仕事から、汝自からを脫脚しようと云ふのは、なんと拙劣でしかも浮薄なことだらう!』けれど、諸君は諸君自身に、それを宛てがはないでも、仕事を持つと云ふのか? いかにも諸君がそれを傍に据え付けてゐる間は、放棄するやうなことはないであらう、そして、私はたしかに諸君が考へ、考へて、無數の思想を創造しても一向氣に留めないであらう。けれど、仕事をやり始めた諸君は、またそれを覆がすことは出來ないものであらうか? 諸君はこれ等の仕事に、

束縛されなければならないのか、そして、それ等は絕對の仕事にならなければならないのか？

一例を擧げて見れば、政府はこれまで、檢閱と云ふ警察力によつて出版に干涉し、または文學上の爭鬪を人身的爭鬪と變じ、種々なる思想に對し、暴力に訴ふるの故を以つて、侮蔑されて來た。恰かもそれがまつたく思想上の事件であるかの如く、そして、思想に對する人間の態度は無私で、自己否定的で、自己犧牲的でなければならぬものであるが如く、——けれどそれ等の思想は政府黨側を攻擊し、大にエゴイズムを絕叫してゐるのではあるまいか？ そして、思想家等は被攻擊者の面前に、思想の權力、觀念の權力を尊崇せよと云ふ宗敎的要求を提出してゐるのではあるまいか？ そして、被攻擊者は、思想の神權ミネルが、かれ等の敵側について戰つてゐるが故に自から進んで、從順に降伏すべきであらうか、どうして、それは憑れた行爲であり、宗敎的犧牲の行爲に過ぎないものとなるであらう。たしかに、政府黨かれ等自からも、宗敎的偏見で固まりきつてゐる、そして或る思想、信仰の主權に追隨してゐるのである。けれど、かれ等は同時に自白しないエゴイストである、そして、あやまたず、敵に對して、かれ等の閉ぢ込められてゐるエゴイズムが、破れ出るのである。かれ等は、自からの信仰には囚はれてゐるが、同時にかれ等の反對者の信仰には囚はれない。卽ちかれ等はそれに對しては、エゴイストなのである。若し、

かれ等がかれ等の觀念に囚はれてゐると云ふ非難を加へる人があれば、それが單なる逆定理となり得るのみである。

思想に對しては、何等エゴイステツクな權力、警察權の如きものは現はるべきではない。かくの如く、思索の信仰者は信じてゐる。けれど、思索や、その思想は私にとつて神聖なものではない。そして、私は他のものに對するが如く、かれ等に對しても自分の皮膚を防禦する。それは不合理な防禦であるかも知れない。けれど、若し自分が義務として、理性に束縛されてゐれば、遂には、アブラハムのやうに、自分の最愛な者を犧牲としなければならない！

思想の王國に於ても、信仰の王國に於けるが如く、等しくそれは天國である。故に、何人によらず無考への暴力を使用するものは、確かに誤つてゐる。恰かも愛の王國に於て、冷酷な行爲をなす者の如く、或は又基督教徒として、愛の王國に住みながら、なほ且つ非基督教的な行爲をする者の誤まれるが如く、これ等の諸王國に自から罪屬する者と考へながら、なほ且つ、諸法則を破る者は、『罪人』であり、『エゴイスト』である。しかし、彼がこれ等の諸王國に對して犯罪者となる時にのみ、彼はかれ等の領土を、投げすてることが出來るのである。

茲でまたその結果がかうなる、政府に對する思想家の挑戰は、それが政府の思想に對して、戰

はれてゐる限り、正義の上に立ち、また權力を有してゐる。『政府は啞で、それを反駁する文筆上の應答者を得ることに成功しないとする』けれど、他方に於て、個人的權力に對し、思想以外のものを戰場に齎すことに成功しない限り、不正であり、即ち、無力である(エゴイスティシュな權力が思想家の口を鉗する)。理論的な戰爭は、その勝利を完成しない、そして思想の神聖な權力はエゴイズムの實力の下に屈從する。唯だ、兩者に於けるエゴイスティシュな鬪爭のみが、萬事を解決する。

さて、この最後のもの、思索を自我的隨意の事件とし、單獨の事柄となし、まるで、單なる暇潰しか、道德となし、それから『最後の決斷力たる』權威の取り去ること。思索のこの侮蔑と汚辱、無思想と思想的自我のこの平等化、拙劣ではあるが眞實のこの『平等』、――これを批評主義は產み出すことが出來なかつたのである。なぜなら、批評主義それ自からは、單なる思索の僧侶であり、思索の圈外に於て、大洪水以外の何物をも見ることが出來ないからである。

批評主義は、例へば、自由批評は國家を征服し得ると云ふことを、斷定してゐる、けれど、同時にそれは國家政府によつて、向けられる、『わがままであり、厚顏である』と云ふ非難に對して自からを辯護してゐる。然らば、批評主義は『わがままと厚顏』とは國家を征服し得ないが、批

評主義のみがひとりそれをよくすると考へるのであらうか。事實はまつたくその正反對である。國家は厚顔な我儘によつてのみ、眞によく征服される。

今、これを結ぶに當つて、批評主義者が新に、變貌したと云ふことは、彼自身を變化したのではなく、單に『見落しを改め』、『或問題を解決した』に過ぎないと云ふことが明かにされたと云はるべきである。そして、彼が『自からを批判する批評主義』であると云ふ時に、彼は少しく云ひ過ぎてゐる嫌ひがある。彼は寧ろ、單にその『見落し』を批判し、その『矛盾』を一掃したに過ぎない。若し彼が批評主義を批評しようと欲するなら、彼は先づ、その假想の中に如何なる物が在るかを探見すべきである。

予に於ては、自分自身を假想する假想から出發する。けれど予の假想は『自己の完成の爲めに努力する人間』の如く、その完成の爲めに努力はしない、けれど、唯だ、それを享樂し、費消する點で予に役立つ。予は予の假想を費消する。それ以外の何者でもない、單にそれを費消することに於て存在する。故に、その假想は畢に何等の假想でもない、なぜなら、予が無二であるが故に、予は假想するものと、假想せらるる自我の二元性に就て知らない（『不完全』そして『完全な』自我或は、人間）。けれど、唯だこれのみ、予は予自身を費消する、即ち、予は單に存在するのみで

ある。予は予自身を假想しない、なぜなら、予は將に刹那に予自身を据えながら、即ち創造しながら存在するのみである。そして、予は、單に、假想されることによつてではなく、据えられることによつてのみ存在する、そして、また、予が予自身を据え付ける刹那に於てのみ据えられるi・e予は創造者であると同時に被造者である。

若しこれまで流行し來つた種々なる假想が、全然解散分離すべきであるとすれば、かれ等を再びより高き假想、——即ち、或思想、又は思索それ自身、批評主義——の中に溶け込ませてはならない。なぜなら、その解散は自分の爲め(gute)でなければならないからである。然らざれば、それは再び、他のものの爲めに(例へば、この人間、神、國家、純粹道德、等)舊き眞理を不眞理であると宣言し、永い間育てられて來たさま〴〵の假想を廢除した無數の解滅の連續の中に從屬するものに過ぎなくなるであらう。

II

自我篇

近代の入口には「神人」が立つてゐる。その出口では神人の神のみが蒸發するだらうか？　そして、その神人は若し彼の中にゐる神が死にさへすれば實際死ぬことが出來るだらうか？　かれ等はこの疑問に就て考へなかつた、そして、かれ等は我々の時代に於て、神の絶滅、即ち、啓蒙の仕事（das werk der Aufklärung）が凱戰する時に、かれ等が完成されると考へた。かれ等は人間が今――「高さに位する唯一神」とならんが爲めに神を殺したのだと云ふことは氣付かなかつた。我々以外の他界は實際掃蕩せしめられた。そして啓蒙派の偉大な企圖が完成された。しかし我々の內の他界が新なる天になつて、再新された天上騷ぎ（Himmelsturmen）に我々を召集してゐる。神は位を讓らなければならなかつた。しかし、我々にか、否――人間にだ。諸君は神以外に又彼の中の人間が死なない限り、どうして神人の死を信ずることが出來るか？

Ｉ　所　有

精神は自由を渴望しないだらうか？　嗚呼、僕の精神ばかりぢやない、僕の肉體も亦時々刻々それを渴望してゐるのだ！　あのいゝ香りがプン〳〵する御城の臺處の前で僕の鼻がその內で用意されてゐる御馳走を僕の口に告げる時に、それは干枯びたパンを食べてゐるものだから、恐ろしいあこがれを感じる。それから僕の眼がコツ〳〵して藁床よりズツト愉快に眠ることが出來る柔かいわた毛の寢床のことを堅くなつた背中に告げる時に、壓しつけられた怒りがそれを捉へる。そして、――だがもうそれ等の苦痛を進んで跡づけることはやるまい。――それで君はそれを自由に對するあこがれと呼ぶのか？　それで君は何から全體自由にならうと云ふのだ？　君のカタパンと藁床からか？　それならそんな物を投り出してしまひ給へ！　――だがそれだけでは君の役には立たない樣に思はれる。君は寧ろそのうまい御馳走と柔かい寢床を樂しむ自由を持ちたいと思つてゐるのだらう。人間がこの『自由』を君に與へて吳れるだらうか、――かれ等は君にそれを許すだらうか？　君はまさかかれ等の慈善からそれを希望するやうなことはあるまい、君もかれ等がみんな君のやうに考へてゐると云ふことを知つてゐる筈だから。各自が彼自身に一番

近いのだ！　それで、君はどういふ手段でそれ等の食べ物や寢床を享樂しようと云ふのだ？　明らかにそれ等を君の所有物にする以外には駄目なのだ！

君がそのことを正しく考へるなら、君はすべてこれ等の立派な物を持つ自由を欲してはゐないのだと云ふことが解つて來る。なぜなら自由丈けではまだ君はそれ等を所有してはゐないのだ。實際君は實際それ等を所持し、君のだとそれを呼び、君の所有物としてそれ等を持ちたいのだ。實際君に何物も齎らさない自由など云ふものは君のためには何の役に立つのだ？　そして、若し君がすべての物から自由になるなら、君は何にも持たないことになるだらう。何故なら自由は實質を缺いてゐるから。誰れに限らずその使用法を知らない人にとつて、それは無價値である、この無用な許可よ。しかしどうして自分がそれを利用するかと云ふことはその人の個性(Eigenheit)の問題である。

僕は自由に對して抗議を申し込む者ではない、けれど僕は君の爲めに自由以上の物を欲してゐる。君は單に君の欲しない物から脫するばかりでなく、更に君は君の欲する物を所有しなければいけない。君は單に『自由人』である許りでなく、又一個の『所有人』にならなければいけない。

自由！　何にから？　おゝ！　其處に振り落し得ない何物があるだらう？　農奴の、帝王の、

貴族の、皇族の軛、欲望と肉情の領域。さうだ、自分自身の意志の領域からさへ、なぜなら、完全な自己否定は自由以外の何物でもない――、即ち、自己肯定、自分自身からの自由である。なにかしら絶對の物に對するかの如く、あらゆる稱賛に價するその自由の熱望は僕等から所有を奪つてしまつた。それは自己否定を創造した。しかし、僕が自由になればなる程、僕の眼の前に愈々壓迫が積み上られるのだ。そして僕は愈々自分の無力を感ずるやうになるのだ。荒野の中にゐる不自由な息子は文明人をとり卷くあらゆる制限の何物をも未だ感じずにゐる。だが彼は彼自身に對して文明人よりは自由らしい。僕が自分の爲めに自由を贏ち得るその程度に從つて、僕は自分の爲めに新しい羈絆や仕事を創造してゐる。若し僕が鐵道を發明したなら、こんだは鳥のやうに自由に空を翔けることが出來ないと云ふので自分の弱さを感じるだらう。また僕は自分の心を惱ました或る難問を解決した處で、直ぐと後から無數の難問が續々と自分を待つてゐるだらう。それらの困難が僕の進歩を妨害し、僕の自由な眼を曇らし、僕の自由の制限を痛ましいまで僕に感じさせる。『さあ、おまへは罪から自由になつた、おまへは正義の奴僕になつた』。これだ。廣大な自由を得てゐる共和主義等、かれ等は法律の奴僕にはならないだらうか? 眞實のクリスチアンの心が始終どんなに『自由になる』ことを望み、どれ程かれ等は『この地上生活の羈絆』から脫

したかれ等を見ることを冀ひ願ふたらう！　かれ等は自由の土地を待ち望んでゐた（『高きに在るエルサレムは自由の女である。彼女はわれ等すべての母である。』ガラデヤ書、四、二六、）

或物から自由になると云ふことは――それから脫却すると云ふことだ。『彼は頭痛から自由になつた』と云へば『彼はそれを免かれた』と云ふことに等しい。『彼はこの偏見から自由である』と云ふことは『彼は甞てその偏見を抱かなかつた』若しくは『彼はこの偏見を脫した』と云ふことと同一である。『から免がれる』と云ふことで僕等は基督敎によつて推薦された自由を完成することが出來る。たとへば罪から免かれる、神から免れる、道德から免かれる等がそれだ。

自由は基督敎の敎義である。『親しき兄弟よ、汝等は自由に召されてゐる』されば自由の律法によつて定められたる人々の如く言動せよ。』そこで、僕等は、自由が基督敎の理想としてそれ自身の正體を現はしたから、自由を棄てなければならないと云ふのか？　否、何物も失はれてはならない。自由だつて何だつて。みんなそれが僕等の所有にならなければならないのだ。自由の形では未だ駄目なのだ。

自由と所有との間には何んと云ふ差異があるのだ！　人間はかなり色々な物から脫却することが出來る、だがあらゆる物から脫却する譯にはいかない。人は多くの物から自由にはなるが、全

ての物から自由にはなれない。人は奴隷の狀態にゐても內的には色々な物から自由になることが出來るかも知れない、だが全てから自由にはなれない、奴隷では主人の權柄な氣質や、鞭から自由にはなれない。『自由は夢の領土にのみ住む！』それに反して、所有は僕の全體、全存在であるそれは自分自身だ。僕は僕が脫却するものから自由である、僕の力の中にあるもの、若しくは僕の征服するものの所有人である。僕は、若し自分が如何に自身を所有するかを知り、自身を他人の上に投げかけないなら、いづこ如何なる處にあつても、自分自身(Mein Eigen)である。自由になると云ふことは眞に自分が意志することの出來ないものである。なぜなら自分はそれを製造することも創造することも出來ないからだ。僕は單に、それを欲し、それに憧憬することが出來るばかりだ、なぜなら、それはいつでも理想で、幽靈だからだ。現實の足械が刻々に僕の肉體に最も銳どい斑痕を食ひこませてゐる。しかし僕は依然として自分自身である。或る主人の奴隷として身を任せたところで、僕は自分のことと自分の利益のみを考へる。如何にも自分は彼に毆打される。僕は彼の打擊から自由にはなり得ない。けれど僕は自分の爲めにのみそれを忍ぶ、恐らく彼を欺き、忍耐の外觀によつて彼に安心を與へる爲めに、若しくは意に逆つて愈々禍を自分の上に招くやうなことをしない爲めに、しかし、僕が自分自身と自分の利益とに眼をつけてゐる間は、

いつかしら第一の好機會を逃さず、その主人を踏み倒すことが出來る。その時僕は彼から自由になる、そして彼の鞭は單に僕の先行のエゴイズムの結果に過ぎなくなる。此處で人は恐らく僕が奴隷の狀態に於てすら『自由』だつたと云ふかも知れない、即ち『內實的に』或は『內部的に』。けれど『內實的に自由である』と云ふことは『實際の自由では』ない、そして『內部的』は『外部的』ではない、翻つて僕はまつたく內部的にも外部的にも自分自身であつた。殘酷な主人の領域の下にあつて僕の肉體は苛責や鞭韃から『自由』ではない。だがその苦痛の下に呻めくのは僕の骨である、打擊の下に悶ゆるのは僕の筋肉である、そして僕は僕の肉體が悶へるから悶へるのである。僕が嘆息したり震へるのは僕が未だ自分自身を失はないと云ふ證據である、即ち僕が未だ自分を所有してゐるのである。僕の脚は主人の鞭から『自由』ではない。だがそれは僕の脚であつて、離すことは出來ない。彼をしてその脚を僕から切斷して、なほ彼が僕の脚を所有し得るか否かを見よ！彼はその手に僕の脚の屍以外の何物をも持つてはゐない。それは死んだ犬が未だ犬だと云ふ程度で僕の脚たるに過ぎない。犬と云ふものは皷動する心臟を持つてゐるものである。しかし所謂死んだ犬にはそんなものはありはしない。だから最早犬でもなんでもない。

若しも奴隷がなほ內的に自由であり得るかも知れないと考へる人があれば、彼は實際單に最も

平凡明白なことを云つてゐるに過ぎない。なぜなら、何人か全然自由のない人間があるなどと云ふことを肯定しようとしてゐるのか？　若し僕が眼先ばかりの奉公人だとしても、それだからと云つて無數な物、例へばゼウス神に對する信仰、名譽に對する慾望など云ふものから自由になることは出來ないであらうか？　それなら何故鞭打たれる奴隷も今非基督教的感情、彼の敵の憎惡などから內的に自由になることが出來ないのか？　その時彼は『基督教的自由』を有し非基督教的なものから脫してゐると云ふ、だが彼は果して絕對の自由、あらゆる物からの自由、たとへば基督教的蠱惑、肉體の苦痛などから脫してゐるのであらうか？

それは兎に角、すべてこれは物そのものに對してよりも寧ろ名稱に對してより多く云はれてゐるやうに思はれる。だがその名稱は沒交涉で、人間を常に皷吹し――愚にした言葉、若しくは符牒を持つてはゐないだらうか？　だが自由と所有との間にはなほ單なる言葉の相異以上に深い裂目が橫つてゐる。

全世界が自由を欲してゐる、すべてがその來るべき時代を渴望してゐる。花咲き亂れる『自由の御代』『自由な人類』、おお如何に魅力ある美しい夢だらう！――何人かそれを夢見なかつたらう？　かくして人々は自由になり、全く自由になり、あらゆる束縛から、眞にすべてからか？

かれ等は最早決してかれ等自身の上に拘束を置かないだらうか？『如何にも、勿論、何等の束縛もないのが、君には見えないのか？』なる程、その時は少なくともかれ等は宗教的信仰から、道徳の嚴格な義務から、法律の酷薄から、『なんと云ふ恐ろしい誤解！』から自由になるであらう。それでかれ等は何から自由になり、何から自由にはなれないのか？

美しい夢は消え失せてしまつた。人は醒めて、彼の半開の眼をこすりながら、その殺風景な質問者を凝視める。『人間は何から自由になれるのか？』——盲目な輕信からと、一人が叫ぶ。『それがなんだ？』と他の一人が叫ぶ、『信仰はそんな盲目の輕信ぢやないか。人間はあらゆる信仰から自由にならなきやならないのだ』。否々、神の爲めに、——また最初の人間が罵る、——信仰を悉く汝等から棄ててはならない、棄てれば獸性の力が闖入して來る。すると三番目の人間が聞えよがしに云ふ、我々は共和國を持たなければならない、そして支配するあらゆる王侯から自由にならなければならない。そんなことをしたつて駄目だ、——と四番目の人間が云ふ、——さうすれば俺達は唯だ『主權を握る民衆』と云ふ新しい殿樣を持つやうになる許りだ。俺達は寧ろこの恐しい不平等から俺達を解放しなければならない。——おお不幸な平等よ、また俺はおまへの平民的咆吼を聞かされるのか！　自分は今迄どんなに美しく自由の樂園を夢見てゐたらう、そしてどう

だ——破廉恥と放縱が今その野蠻な怒號をあげてゐるのではないか！　かくして第一番目の人間が歎いて、『この無茶な自由』に反抗して劍を握るべく進む。やがて我々は不同な自由の夢想の劍戟が相擊つ音以外に何物をも耳にしなくなる。

自由に對する慾求はいつでも或特別な自由に對する慾求となつて現はれた。たとへば信仰の自由卽ち信ずる人間が自由と獨立とを欲した。何からか？　多分信仰からか？　否！　信仰の審問者等からだ。そして今では『政治若しくは民權の『自由。市民は市民たることから自由になりたい許りでなく、官僚政治、皇族の專壇など云ふものから自由になりたがつてゐる。……

或特別な自由に對する欲求は常に新しい所有權の目的を含蓄してゐる。……

君等は悉く自由を欲してゐる。君等は自由を欲してゐる。それなのになぜ君等はその多少を云々してゐるのか？　自由と云ふものは唯だ自由の全體を指して云はるべきものだ。自由の切れッ端は自由ではない。君等は自由全體を獲得することの不可能によつて絕望するのか、——さうだ君等はそれを欲すると云ふそのことが旣に氣狂ひじみてゐると考へてゐるのだらう？——よし、それならそんな幻影を追ふことをやめてしまひ給へ、そして、そんな不屆きなものより、もッと上等なものを求めることに苦心し給へ。

『嗚呼、けれど自由よりいいものはなんにもない！』

それなら君がその自由――僕は此處では君等の切れッ端のやうな自由に就ては云はないことにする――乃ち完全な自由を得た時、君は何物を持つだらう！　その時君を障げるすべての物から脱却する、すべての物から、そして恐らく君の生活の中で一度でも君を煩はし、君に不便を引き起させるやうなものはあるまい。そして誰れの爲めに、それなら、君はそれから脫しようと欲したのか？　勿論君の爲に、なぜならそれが君の道程に横つてゐたからだ！　だが、若し何にかが君にとつて不便でないとしたら、若し、反對に、それがまつたく君の心に協つてゐたなら（たとへば君の愛人の靜かなしかもどうにも出來ない支配する容貌）――その時君はそれを脫れて自由にならうとは思はないだらう。なぜさうならないのか？　それも君の爲めだ！　かくして君は君自身をあらゆる物の尺度ともすれば判官ともするのである。君は『戀愛のうれしい務め』と云ふ不自由が君に適する時には喜んで自由を手放してしまふのだ。そして君は自由がよくよく君に適し始める場合に再び君の自由を取るのである。……

何故君は今勇氣を出して眞に君自身を全然中心にし主要なものとしようとはしないのか？　何故君は君の夢である自由をめがけて空を捉むのか？　君は君の夢か？　君の夢や、君の觀念や、

君の思想などを詮議立てすることから始めてはいけない、それはみんな『空理』である。君自身に訊ね、君自身に求め給へ――それは實際的だ、そして君は極めて『實際的』でありたいと欲してゐることがよくわかる。けれど或人は其處に彼の神（勿論彼が神と云ふ名で考へてゐるものは彼の神である）それに對して云はふとしてゐるかも知れないことを聽くかもわからない、そして他の人は彼の道德的感情や、彼の良心や、彼の義務の感情がそれに就て判斷するかも知れないものを聽くかも知れない。そして三番目の人間は民衆がそれにて就て考へる結論を自分の判斷と定めるかも知れない。――そしてかくの如く各自が彼の神に相談する時に、（民衆も一箇の神である。否他界の想像神よりはモット堅實な神でさへある。vox populi, vox dei――人民の聲は神の聲なり）その時各自は彼の主の意志に傾聽すべく自からを調整して、少しも彼自身が云はんと欲し、決斷せんと欲してゐることに傾聽しない。

だから君の神々や偶像に向ふよりも寧ろ君自身に向ひ給へ。君自身から君の內にあるものを引き出してそれを光明に齎し給へ君自身を天啓に持ち來し給へ。

如何に人間が彼自身からのみ行動し、それ以上の何物にも賴らないかと云ふことを、基督教徒等は『神』と云ふ觀念の中に實現した。神は、『神の欲しいままに』行動する。そして同樣なことが

出來る馬鹿な人間は、その代り『神樣を喜ばせる』やうに行動しなければならないと云ふた。――若し神でさへ永遠の律法に從つて進行するのだと云はれるなら、それは又自分にも應用出來るわけだ、なぜと云ふと僕も亦僕の皮膚の外に飛び出すことは出來ない、そして僕の全性格、即ち僕自身の裡に僕の律法を所有してゐるからである。

だが人はただ君等自身に就て君に忠告し、直に君を絶望させる必要があるばかりである。『俺はなんだ?』と君等は各自に訊ねる。不法にして無制限な衝動、慾望、願望、情熱の深淵、光明もなく行途を照す星辰もなき渾沌! 若し神の命令や道德が與へる義務を無視し、或は歷史の過程中にある、さまぐの苦い經驗の後、最善にして最も合理的なものを法律に仕立て上げた理性の聲に傾聽せず、單に自分自身に訴へる時に、どうして自分は正確な答を得ることが出來よう? 自分の情慾は出來るだけ馬鹿らしいことをしろと自分に忠告する。かうして各自は彼自身を――惡魔だと考へる。若し彼が彼自身を單に一個の獸と考へて、宗教等には無關心であるなら、彼が獸が單にその衝動(恰もその忠告に從ふが如く)にのみ從つて『最も馬鹿らしい』ことをしろとそれ自身に忠告もせず、强ひもせず、極めて正しい道を踏むものだと云ふことを容易に發見するであらう。けれども、物を宗教的に考へる習慣が僕等の心を曲げて悲しむべき結果を生み、僕等は自

然な裸形の姿を見ることを恐れるやうになつた。そしてそれは僕等が自分等な自然によつて腐敗せしめられた生れながらの悪魔だと思ふ程、僕等を墮落せしめた。勿論君の頭には、君の天職が善と道德と正義とを君に要求してゐると云ふことが直に浮んで來る。さて若し君が何かなさなければならないかと云ふことを君自身に訊ねるなら、その善と正と眞など云ふものの道を指示する正しい聲が如何にして君から鳴り響いて來るか？　神と悪魔との間には、どんな一致があるのか？

しかし若し誰れかが『人間が神や、良心や、義務や、法律等に傾聽しなければならないと云ふのは一種の欺瞞で民衆がそれを君の頭や心に詰め込んで君を氣狂ひにさせたに過ぎないのだ』と君に答へたら、君はなんと考へる？　そして若し彼がまたどうして君は自然の聲が誘惑者だと云ふことを確かに知ることが出來たのだと訊ねたら、どうするか？　又更に進んで神や良心の聲を悪魔の所作に過ぎないと見做し、君に全く反對の態度を要求したなら、どうするか？　世にはこのやうな不敬な人々がゐる。君はそれ等の人々をどう處置しようとするのか？　君は君の牧師や兩親や、善人連に訴へることは出來ない、なぜならこれ等の人々はかれ等によつて、君の誘惑者だと稱せられてゐる、また、自己侮蔑と神に對する尊敬のハグサを急がしく撒く青年の眞の誘惑

者であり、腐敗者であり、若き心に泥土をつめ、若き頭に愚鈍を滿す者と稱せられてゐる。

さてそれ等の人々は進んで訊ねる。一體君は誰れの爲めに神や、その他の命令に頭を惱ますのだ？　君は確かにこれが單に神に對する慇懃からのみなされると想像しはすまい？　否、君はまた君の爲めにそれをしてゐるのだ。――だから、此處でも亦君が主たるものである、そして各自は彼自身に對して、自分は自分自身にとつて全ての物だ、そして自分は悉ゆることを自分の爲めにすると云はなければならない。若し神や、命令等が君を傷けるのみで、かれ等が君を貶し、君を亡すと云ふことが明らかになつたなら、確かに君は嘗て基督教徒等がボロやミネルヷや異教の道德を無用と宣言したやうに、それ等をふり棄てるであらう。基督教徒等は實際これ等の代りに基督やマリアや、基督教道德を置き代へたのである。しかしかれ等はこれをも亦かれ等の靈魂の爲めにしたのである、だからエゴイズム若しくは所有からである。

そしてこのエゴイズム、この所有によつてかれ等は神々の舊き世界を脫却して、それから自由になつたのであつた。所有は新しき自由を創造した。なぜなら所有は萬物の創造者である、恰かも常に獨創である天才(定まつて所有)が永い間既に世界歷史に一個の位置を有する新しき所產の創造者と見做された如きものである。

若し君の努力がいつでも『自由』をその目的とするなら、自由の要求を悉く汲み盡せ。自由になるのは一體誰れなのか？　君か、僕か、我々か。何にから自由になるのか？　君でも、僕でも、我々でもない全ての物なら。故に自分こそ悉ゆる外衣から解放され――あらゆる抑制の外殼から自由にされなければならない核である。自分が自分でない悉ゆる物から自由にされた時、何が殘されるのか？　單に自分、自分以外の何物でもない。しかし自由はこの自分自身に對して何物をも提供しない。自分が自由になつた以後、更に起り來るものに就て、自由はまつたく沈默する、――恰かも僕等の政府が、滿期になつた囚人を單に放免して、彼を突き出したまま放棄するが如きものである。

若し自由なるものが結局自己に對する愛から求められるなら、――何故に自分自身を、始めであり、眞中であり、終りであるとして撰擇しないのか？　自分は自由よりも價値のない者なのであらうか？　自分を自由にするのは自分ではないのか、自分が第一ではないのか？　たとへ不自由であり、無數の桎梏中に置かれても、やはり自分は存在してゐる。そして自分は、自由のやうに、單に未來や希望の中にのみ存在するものではない、たとへ如何程卑劣な奴隷狀態に有つても自分は現存してゐるのである。

それをよく〳〵考へて見よ、そして君が君の旗幟を『自由』の夢に揚げるか、或に『自我主義』と所有の確信の上に揚げるかを決し給へ。『自由』は君でない全ての物に對して君の憤りを呼び醒す。『自我主義』は君等自身に對して喜べと君に告げる、即ち自己享樂を命ずる。『自由』は憧憬に始つて憧憬に終る、それはロマンテックな繰り言であり、他界と未來に對する基督教的希望である。『所有』は現實である、それはそれ自身で君自身の行途を鎖して君を障げる多くの不自由を除く。君を障げないものを、君は拒絶しようとは欲しないであらう。そして、若しそれが君を妨げ始めたらどうだ、君は『君が人々よりは寧ろ君等自身に從はなければならない！』と云ふことがわかる。

自由は單に――あらゆる荷厄介から君自身を脱せよ！　そして君自身を救へとばかり教へる。それは君自身が誰だかを君に敎へない。脱れよ、脱れよ！　とその皷舞する叫びが鳴り渡る。そして君は、熱心にその招きに應じて、君自身からすら脱却して、君自身を否定するやうになる。けれど所有は君を君自身に呼び戻す、それは『君自身に來れ！』と云ふ。自由の保護の下に君は多くの物から脱れる、けれど新しい或物が再び君を苦しめる。"den Bosen seid Ihr los, das Bose ist geblieben."（君は惡魔から脱したが、禍は殘されてゐる）所有として君は眞に全ての物から脱脚

する、そして君に纒はる物を君は受け入れた。それは君の撰擇であり、君の快樂である。所有人は生れながら自由であり、元來の自由人である。これに反して自由人は單に慢性自由病者であり、夢想者であり、熱狂家である。

前者は根本的に自由である、何故なら彼は彼自身以外に何物をも認めない。彼は先づ自から自由になる必要がない、何故なら、眞先きに彼は彼自身以外の全ての物を拒絕する、何故なら彼は彼自身以外の何物をも尊ばない、彼以外の何物をも尊ばない、彼以外の何物をも高く評價しない、要するに、彼は彼自身から出發して『彼自身に歸つて來る。』それにも拘らず子供らしい尊敬に抑制されて、彼は既にこの抑制から彼自身を『自由にすること』に努力しつつある。所有が小さいエゴイストの中に働いて、彼に囑望された自由を得させる。

數千年の文明が君の何物であるかを君の隱した、君をして君がエゴイストでなく、理想家(『善人』)であると君を信じさせた。それを振り落し給へ！　『自己否定』に於て君を君自身から確かに奪ふ自由などを求めずに、君自身を求め給へ、エゴイストになり給へ、各自が全能のエゴになり給へ。或はもつと明白に云へば、先づ再び君自身を認め、君が眞に何であるかを認め、君が君以外のものにならうと云ふ君の僞善的の努力や、君のバカ氣たマニアを棄て給へ。僕はそれ等を僞

善だと云ふ、なぜなら君等はこの數千年間、依然としてエゴイストであつた。しかも自からを欺いて、睡りこけてゐる、キ印のエゴイストであつた、汝ヘウトンテイモラメノスよ、汝自己苛責者等よ。宗教はそれが天國やこの世の幸福（長命）などに對するものにせよ、未だ嘗て我々に對して『約束』を棄てたことはなかつた。なぜなら人間と云ふ者は傭人で『ロハ』では何事もしないものだからである。しかし報償の期待なしに『善の爲めに善をすること』とはなんであるか？ 此處でも亦報酬がそれを與へると云ふ滿足がその中に含まれてはゐなかつたらうか？ だから、宗教すら我々のエゴイズムを土臺として――それを利用してゐる。我々の慾望から打算して、それは一ツの爲めに他の多くのものを禁じてゐる。その時、これが欺かれたエゴイズムの現象を呈する。そこで自分の滿足するものは自分自身ではなく、自分の慾望の一ツ、卽ち祝福に對する衝動である。宗教は僕に――『至善』を約束する。これを得る爲めに自分は最早他の慾望を考へてはならない、しかしそれ等を消滅させることは出來ない。――君等のすべての行爲が白狀されない、秘密で、隱蔽されたエゴイズムである。なぜならそれ等は君が自身に白狀することを欲しないエゴイズムである、そして君自身から秘密にして、そのエゴイズムを公表しない、從つて無意識なエゴイズムである、故にそれ等はエゴイズムではなく奴隷狀態で、服從で、自己放棄である。君等はエ

ゴイストでありながら同時にさうではない。なぜなら君がエゴイズムを拒否するからである。君が最も多くかくあるべく見ゆる場合にも、君は『エゴイスト』と云ふ言葉の上に侮蔑と嫌惡とを與へた。

僕はこの世に關する自分の自由を、僕がこの世を自分のとして、即ち僕自身の爲めに『それを獲得所有する』程度に從つて、安全にする。如何なる力によつても、勸誘、歎願、至上命令、然り、僞善や、欺瞞によつてさへも、自分がそれに對して用ゐる手段は自分がなんであるかによつて定まる。若し自分が弱ければ、自分は單に前に云つたやうな弱い方法を持つ。それとても世の中の大半にとつては充分善である。加之、欺瞞や、僞善や虛言は實際よりも惡く見える。警官や法律を誰れが瞞さなかつたか？　犯されたかも知れない不法を隱す爲に、彼に出遇ふ政府の役人の前に忠義者振らない人間があるだらうか？　さうしない人間は單に自分の身に暴行を招くばかりだ。彼は良心に對する弱蟲であつた。僕は自分の意志を他の物例へば巖石の如く意志なき物、或は政府若しくは個人の如き有志な者の上に撒ぶことが出來ないことによつてさへ自分の自由の縮少されることを知つてゐる。他人の面前に於て自分自身を投げ出す時、即ち負けて服從する時に、自分は自分の所有を拒む。だからそれが忠義と服從になるのである。例へば自分の從來の進

路が目的に導かれず、誤つた道に轉ずるが故にそれを棄てる時がさうである。また自分が囚人として自分自身を許す時がさうである。自分は自分の道程に横はる厳を爆發せしめる力を充分持ち得る迄は、その厳を迂回して行かなければならない。自分は自分が一國民の法律を顚覆するべき力を凝集するまではそれを迂回しなければならない。なせなら僕は月を捉むことは出來ない、と云つてそれは自分にとつて『神聖』な Astarte であらうか？　若し僕が君をシッカリ捉むことが出來さへすれば、そして若し僕が君に勝つべき手段を發見しさへすれば、君は僕を怖れさせること は出來ないであらう！　汝理解しがたき者よ、君は僕が理解に對する力を得て、そして君を自分の所有と呼ぶことが出來る迄は依然として理解し難き人であらう。僕は君の前に自分自身を投げ出さない、唯だ自分の時節を忍ぶばかりである。たとへ現在僕は君に觸れるべき自分の未能力を辛抱するとも、依然として君に反抗することを忘れはしない。

強き人々は常にかくの如く振舞つた。『忠義』が征服しがたき權力をかれ等の主人と祟め、それを畏敬した時に、そして萬人から崇敬を要求した時に、忠實に服從しない自然の子が現はれて、その崇拜された權力を近づき難きオリンポスから追ひ出してしまつた。彼は轉回する太陽に『止まれ』と叫んで、地球を回轉せしめた。忠義は全力を盡さなければならなかつた。彼は神聖な榭

僕の斧をあてた、そして『忠義』は如何なる天火も彼を燒き亡すことの出來ないのに驚いた。彼は羅馬法皇をピータアの椅子から引きづり下した。そして『忠義』はそれを妨げる道がなかつた。彼は神權の商賣をヅタ〱にする、そして『忠義』は徒に呻吟く、そして遂に沈默してしまふ。彼の自由はそれが僕の力となつた時にのみ完成される。だが僕はこれによつて單なる自由人であることを止め、一個の所有人になる。人民の自由は何故『空言』なのであるか？　なぜなら人民には力を持たないからである！　生ける自我の呼吸で自分は人民を吹き飛ばす、それがネロ帝の息にせよ、支那皇帝若くは貧乏文士の息にせよ。獨逸の國會議員等が徒に自由を慕ひ內閣の大臣等によりてそれに對する講釋をきかされるのは何故であるか？　なぜならかれ等は『有力』でないからだ！　力はよい物である、そして多くの目的に向つて有益である。なぜなら『人は正義の一抱をもつてよりも、權力の一握みをもつて更に遙か進むことが出來る』からである。君は自由を欲してゐるか？　汝馬鹿者等よ！　若し君が力を握れば、自由は自から現れるであらう。見よ、力を有する者は『律法の上に立つ。』この光景は君等にどんな味がするか、汝『法律に拘泥する』人民よ？　だが君等は味覺を持たないのだ！

『自由』を望む叫びが至る處で高く鳴り響く。しかしその寄附された、若しくは免許になつた自

由と云ふものがどんなものであるかと云ふことが感じられ、知られてゐるのであらうか？　恐らく、あらゆる自由は根本的に自己解放、——即ち、自分は自分の所有によつて自分自身の爲めに獲得されることが出來る丈の自由を持ち得るのみであると云ふ言葉の充分な内容は認められてはゐないのである。羊にとつて何人もかれ等の言論の自由を束縛しないと云ふことは何の役に立つのだ？　かれ等は依然として咩くばかりである。内的に囘々敎徒であり、猶太人であり、基督敎徒である人間の彼の欲するままを語るの許可を與へて見よ。彼は依然として狹量な妄言を發するのみであらう。若しそれに反して或他の人々が君から話すことと、聽くことの自由を奪ふとすれば、かれ等はかれ等の一時的の利益が何處に横つてゐるかを知ると共に君が云つたり聽いたりすることが恐らくその『或る』人々の信用を失墜せしめるであらうと云ふことを承認してゐるのである。

若しそれにも拘らず、かれ等が君に自由を與へるなら、かれ等はかれ等の所有以上のものを與へる單なる惡漢である。なぜならその時かれ等は君にかれ等自身の何物をも與へはしない、だが、それは盜品である。かれ等は君に君自身の自由を與へるのである。それは君が君自身の爲めに取らなければならないものである。そしてかれ等は君がそれを奪つて、更にかれ等をドロボー

詐僞師と呼ばない爲めにのみ君にそれを與へるのである、かれ等は狡猾だから與へられた(寄贈)の自由のみが充分に帆を上げて走ることが出來るのである。許された自由は嵐が起るか、全く凪ぐかすれば忽ちその帆を下してしまふ。それは常に靜穩な微風を要するのである。

此處に自己解脫と釋放(奴隷狀態よりの解放)との間の差異が橫はるのである。今日『反對に立つてゐる』人々は『自由にされることを』渴望し叫んでゐる。貴族等は『かれ等の人民に丁年を宣言し』、かれ等を解放しなければならない！　君が丁年になつたやうに振舞へ、さうすれば君は丁年の宣言を要せずしてさうなることが出來る。若し君がそのやうに振舞はなければ、君はそれに價へしないのである、そしていくら丁年の宣言があつても決して丁年にはならないであらう。希臘人が丁年になつた時、かれ等はかれ等の暴君を追ひ出してしまつた。そして息子が丁年になると、彼は彼の父から彼自身を獨立させる。若し希臘人にしてかれ等の暴君等が親切にもかれ等に丁年を許可する迄待つてゐたなら、かれ等はかなり永く待たなければならなかつたであらう。賢明な父は丁年にならない息子の頭を押へ付けて、彼自身に家を處理する。阿呆な息子の當然受くべき運命である。

自由にされた人間は奴隷狀態をやうやく釋放された一個の libertinus であり、彼と共に鎖をひ

きづりつつある一匹の犬に過ぎない、彼は自由の衣を纏ふ不自由人である。獅子の皮を着た驢馬である。解放された猶太人はかれ等自身にとつて何等よりよくせられはしない、單に猶太人として解放されたのみである。勿論かれ等の境遇を救ふ人は確かに教會的の基督教徒よりも以上ではある、なぜならかれ等は矛盾なしにこれをすることさへ出來ないからである。しかし解放されると否とに拘らず、猶太人は依然として猶太人である。自から自由にならない人間は單に一個の解放された人間に過ぎない。プロテスタントの國家は天主敎徒を解放することは確かに出來よう、しかし、かれ等は自からを自由にすることは出來ない、なぜならかれ等は依然として天主敎徒だからである。

利已と非利己と云ふことが既に云はれた。自由の友は自己に對して憤る、なぜならかれ等の自由を求むる宗教的の努力に於て、かれ等はかの『自己放棄』と云ふ莊重な物からかれ等自身を脱ることが出來ないのである。自由主義者の怒りが自我主義者に向けられる、なぜなら、君達も知つての通り、自我主義者は彼の爲めにこそすれ、物その物に對しては無頓着である。物が彼に奉仕しなければならないのである。如何なるものにもそれ自身の價値、即ち絶對的の價値を置かず、自身の内にその價値を求めるのがエゴイストである。人はよく金儲けの爲めの學問と云ふこ

とを聽く、そしてそれが利己的行爲の最も非難すべき特性の中に算へられてゐる、なぜならそれは最も恥づべき學問の汚辱を顯はすからだと云ふのである。しかし學問は利用されないとすれば全體何の爲めであるか？　若し學問を金儲け以上に利用することを知らない人があるなら、その時彼のエゴイズムなるものは實際氣の毒なものである、なぜならこのエゴイストの力は制限されてゐる力だからである。しかし學問の汚辱だなどと云つて、その内にある自我的な要素を非難するのは、囚はれた人のみである。

なぜなら基督教は個人をエゴとして見ることを許すことが出來ないで、彼を單に一個の從屬者として考へた。そしてそれは全く一個の社會的理論以外の何物でもなかつた、――それは神と人間と、人間と人間とが共同生活をすると云ふ一教義である――だからその中にある所有と云ふ悉ゆる物は最も痛ましい論爭に落ち入らなければならない。利己、自己意志、所有、自己愛などがそれである。基督教的の物の觀方はあらゆる方面に於て次第に敬語を不敬語に打ち替へた。だからそれ等を再び轉倒させ得ない理由はない。故に Schimpf（侮辱）はその元の意味では戲談と同一であつた。けれども基督教的の眞面目にとつては遊戲が不敬になつた。なぜなら眞面目は戲談を許すことが出來ないからである。又 frech（厚顏）は以前單に大膽とか、勇敢とか云ふことを意味

した。Frevel（亂暴）は單に勇敢であつた。『理性』と云ふ言葉が永い間如何に蔑視されたかと云ふことはよく知られてゐる。

我々の言葉は可成よく基督教的標準にそれ自身を適合さした。而して一般の意識は猶餘りに基督教的で恰かも不完全若くは禍な物ででもあるかの如く凡ゆる非基督教的な者から畏縮するのである。だから『利己』も亦惡意に解せられてゐるのだ。

利己は、基督教的の意味で、このやうなことを意味する。――自分は單に或物が肉慾人として自分に役立つか否かと云ふことのみを考へる。――しかしそれなら肉慾が自分の所有の全體であらうか？　自分が肉慾に全部を委せた時に、自分は自己全體を所有してゐるだらうか？　自分がそれに從ふ時、自分自身の確乎たる意志に從つてゐるであらうか？　自分は自分が肉慾その他の何物（神、人間、權威、法律、國家、教會等）によつても支配せられず、自分自身の主人である時にのみ自分自身である。この自己に所有され、自己に從屬する自分に役立つ物のみを自分の利己が追求するのである。

若し自分が物それ自身に關係せず、それ自身の爲めにそれを欲しないなら、その時自分はそれ

を全然目的に對する手段として欲する、その必用の爲めに、他の目的の爲めに、例へばうまい風味の爲めに牡蠣を用ゐるが如きものである。さて物その物の最後の目的が彼自身である全ての物はエゴイストには手段としては仕へないであらうか？　そして彼自身の爲めに何の役にも立たない物を彼は保護しなければならないだらうか、――例へば平民が國家を保護すると云ふやうなことが？

所有はそれ自身の内にそれ自からの全てを含んでゐる。そして基督教的言語が汚したものを再び名譽に持ち來す。しかし所有は何等外來の標準をも持たない。なぜなら、それは如何なる意味に於ても自由、道德、人道等の如き單なる觀念ではないからである。それは唯だ所有人の如何なる者かを詳述することによつてのみ明らかにせられた。

II　所有人

自分――自分は自由主義を通して自分自身と自分のものになるだらうか？

自由人は何人を自己の平等者と見做すのか？　人間！　唯だ人間であれ、――さうして、諸君は如何なる手段をめぐらしてもいい――さうすれば自由人は諸君を彼の兄弟と呼ぶ。彼は諸君の

裏に『人間』を嗅ぎつけることが出來さへすれば、諸君の個人的意見や、個人的愚行は不問に附して省みないのである。

さて、彼は諸君が Privatim (私的) であることに何等の注意をも拂はないが、――否、彼の主義を嚴守すればそれに對して何等の價値をも認めないのである、――彼は諸君の裏に唯だ(Generatim(一般的)であるもののみを見る。換言すれば、彼は諸君に汝を見ず、種族は見るのである。トム或はジムではなく、人間を、眞實の若しくは唯一の者ではなく、諸君の本質若しくは諸君の概念を、肉體人ではなく精神を見るのである。

トムとして諸君は彼の平等人ではないから、なぜなら彼はジムで、從つてトムではないからである。人間として諸君は彼と同一である。そしてトムとして諸君は實際彼に對して少しも存在してはゐないから(即ち、彼が自由人で、自覺せるエゴイストでない限り)、彼は實際『同胞愛』を自分自からのために極めて容易に造り得る。彼は諸君の裏のトム――それに就て彼は何事をも知らず、また知らうとも欲しない――を愛するのではなく、人間を愛するのである。

諸君と私の裏に『人間』以上のなにものをも見ないと云ふこと、それは基督教的な物の見方――それによれば人は一個の概念(例へば救濟(等)に召された人間)以外のなにものでもない――を一

眉拙劣にしたものである。

所謂基督教は吾人をそれよりも少しは氣の利いた一般概念の下に集合する。其處では我々が『神の子等』であり、『神の躾によつて導かれる。』しかし全ての神の子等であることを誇ることは出來ない、そればかりでなく『我々が神の子等であることを我々の精神に證しするところのその同じ精神がまた何人が惡魔の子等であるかを示すのである。』故に、神の子なるために人は惡魔の子であつてはならない。神の子たることが或る人々を除外した。然しながら、人々の子等、――即ち人間――であるために、我々は人間の種族に屬する以外にはなにものをも必要としない、唯だ同じ種族の見本たることを必要とするのみである。この自分として存在する自分は一人の善き自由人としての汝の存在にはなん等の關係もなく、單に自分一個の事柄である。我々は兩人とも一人の同一な母の息子、即ち人類であることだけで充分なのである。『人の子』として自分は汝の同等者である。

自分は今汝に對してなんであるか？　恐らく自分が步行し直立するこの肉體的自分であらうか？　否、それ以外の全て。それ自からの思想と、決心と、情慾とをもてるこの肉體的自己は君の眼には一個の『私的事件』で君にはなん等の交涉もない。それは『それ自からの事件』である。『君の

事件』としては唯だ私の概念、私の一般的概念、即ち人間のみが存在する、そしてそれはトムと呼ばれてゐる如く、またジョォとでもディックとでも呼ばれる。君は僕の裏に肉體人たる僕を見ず、非實在的物象、幽靈、即ち人間を見るのである。

基督教的世紀の過程に於て我々はかなり異つた色々な人々を『我々の同等者』として宣言した、しかしながら、その時々我々がかれ等から期待するその精神の尺度に從つて、——例へばその人の內に罪の贖ひを必要とする精神が取り入れられるかも知れない各人、それから以後には潔白な精神を有する各人、遂には人間的精神と人間的容貌を示す各人等の程度に從つて、かくの如くして『平等』の根本的標準が相異した。

平等が今や人間的精神の平等として思惟されたところで、其處には萬人を抱含する平等が發見された。なぜなら吾々人間が人間的精神を有すると云ふこと、即ち人間以外のなにものでもないと云ふことを何人が拒み得よう！

けれども我々はその爲めに今では基督教の當初に於けるより遙かに進んでゐるのであらうか？その時に吾人は神聖な精神を持たなければならなかつた、さうして今では人間的精神を。けれど若しその神聖な精神が我々を汲み盡すことが出來なかつたとすれば、どうしてその人間的精神が

我々全體を發想し得よう？　たとへばフォイエルバハは、若し彼がその神聖な精神を人間化しさへすれば、眞理を發見したのだと考へてゐる。否、若し神が吾人に苦痛を與へたとすれば、『人間』は更にそれ以上我々を苦しめ惱ますことが出來るのである。それは要するにかうなのだ、我々が人間であると云ふことは我々にとつては最もツマラナイことなのである、そしてそれが我々の性質（Eigenshaften）、即ち我々の所有（Eigentum）の一つである限りに於てのみ意義を有してゐる。自分は實際、自分が（例へば）生き物であり、であるから動物であり、或は歐羅巴人であり、伯林人（等）であるやうに、また一人の人間でもある。けれど私を、人間としてのみ見做さうとする人は、自分にとつて極めて不必要な考慮を拂ふことになるであらう。そしてそれは何故か？なぜなら彼は私ではなく、私の性質の一つに對してのみ敬意を拂ふからである。

　それはまた精神の場合に於ても將に同一である。基督教的精神、正しき精神など云ふものは如何にも自分の獲得せられた性質、即ち自分の所有であるかも知れない、けれど自分はその精神ではない。それは自分のものではあるが、自分はそれのものではない。

　故に我々は自由主義に於て、自分と云ふ肉體的トムに對する舊式な基督教的蔑視の繼續を依然として有してゐる。あるがままの自分として自分を見做す代りに、人は單に自分の所有、自分の

と結婚するので、あるがままの自分とは結婚しない。基督者は私の精神を捉へ、自由黨員は私の人道を捉へる。

けれど、肉體我の所有として見做れずそれ自から固有の自我として見做れる精神は一個の幽靈である、自分の性質としてではなく、固有の自分として認められる人間も亦一個の幽靈、一個の思想、一個の概念以外のなにものでもない。

故に自由黨員も亦基督者と同一な圏内を廻轉してゐる。なぜなら人類の精神、卽ち人間が諸君の裏に棲息してゐる、諸君は、基督の精神が諸君の裏に住む時に諸君が基督者であるやうに、諸君が人間になる。けれど、たとへそれが諸君の本來の若しくは『よりよき』自我であるとしてもそれは單に第二義の自我としてのみ諸君の裏に棲息するが故に、それは依然として諸君の他界に存在するが故に、諸君は全然人間になる爲めに努力しなければならない。それは全然祝福された精神になる爲めに基督者の行ふところのものと同じく無結果に終る努力なのだ!

自由主義が人間を宣言した後に、人は今、これによつてのみ基督教が堅實に完成されたと公言する、そして事實、基督教はその當初から『人間』、『眞人間』を實現せんとする以外に何等の仕事

をもしなかつたのであると公言する。であるから、基督教が無限の價値を自我（e・g・靈魂不滅の教義に於て、靈魂の救濟（等）に於て）に歸するイリユウジヨンが明らかにされる。否、それはひとり人間にのみこの價値を與へる。人間のみが不死である、そして自分が人間である故にのみ自分も亦不死である。事實、基督教は何人も失はれないと云ふことを教へなければならなかつたのである、それと同樣に自由主義も亦人間としての平等を萬人の上に與へる。けれどその永性は、この平等の如く、自分にではなく、自分の裏の人間にのみ適用される。人間の携帶者、避難所としてのみ自分は死なないのである。『王は決して死なない』と云ふ有名な文句のやうに。ルイは死ぬが、王は依然として存在してゐる。自分は死ぬが、自分の精神と人間が殘つてゐる。今や自分を全然人間と同一化せんが爲めにその要求が發明された、そして、自分が『眞の一般的存在』にならなければならない。』（"Deutsch-fraugoesiches Jahrbuecher" P. 197 の Marx 參照）

人間宗は單に基督教の最後の變形に過ぎない。なぜなら自由主義は一個の宗教である、それは自分の本質を自分から分離し、自分以上にそれを置くからである、それは『人間』を他の宗教がその神と偶像とを高めると同じ程度に高めるからである、それは自分の所有を他界のなにものかに變ずるからである、それが一般に自分のものから、自分の性質や、自分の所有から、外的な何物

かを、——即ち一個の『本質』を作り出すからである。要するに、それが私を人間以下に置くからである、そしてそれによつて自分の爲めに一個の『使命』を創造するからである。けれど自由主義も人間と云ふこの至上存在に對して、熱心な信仰、『いつかは遂にまたその火の如き熱心、征服しがたき熱心を證據立てるでもあらう信仰』(Br. Bauer, "Judenfrage," P.61) を要求する時自から宗教の形式を宣言するのである。けれど、自由主義は人間的宗教である故に、その教授はその他の(天主教、猶太教等)教授に對して寛大な態度を取る、恰かもフレデリック大王が臣下としてその義務を盡す各人に對し、たとへ彼が祝福される如何なる流儀に傾くともそれを許したと同じやうに。この宗教は今や一般の習慣的等級に列せられ、單なる『私的愚行』として他のものから分たれなければならない、加之、人ははそれ等に對してそれ等の非本質的なるために著しく自由な態度を取る。

人はそれを國家宗教、『自由國家』の宗教と呼ぶかもしれない、それは從來流行してゐた國家によつて愛護され、特權を授けられたものとしての意味ではなく、『自由國家』がそれに屬する各人——それが個人としての猶太人、基督教徒、又はそれ以外の何人にせよ——から要求する權利を有するばかりでなく、それを强ひられるのである。なぜならそれは孝道が家族に對してすると同樣

な奉仕を國家に對してなすからである。若し家族が、その現存狀態に於て、それに從屬する各自によつて承認され維持されてゐるとすれば、その時、血緣は彼にとつて神聖でなければならない、そして血緣に對する彼の感情は敬虔の、血緣に對する尊敬の、それでなければならない、それによつて悉ゆる血族關係が彼にとつて聖別人になるのである。かくしてまた國家社會（Staatsgemeinde）の各員にとつてはこの社會が神聖でなければならない、そして、國家にとつて最高な概念は等しく彼にとつて最高なものでなければならない。

けれどどんな概念が國家にとつて最高なものであるか？　勿論、眞に人間的な社會であることのそれである、即ち、眞に一個の人間である各人——即ち非人間でない——が一員としての許可を得ることの出來る社會である。國家の忍容を行くところまで行かしめよ、それは非人間と非人情に近づくに從つて止むのである。そしてしかもこの『非人間』は一個の人間である、しかも『非人情』それ自からも人情的なにものかである、さうだ、獸にとつてはさうではないが唯だ人間にのみ可能であるところの。それは實際『人間にまで可能な』なにものかである。しかし、たとへすべての非人間が人間であらうとも、しかも國家は彼を排斥する。即ち國家は彼を禁錮する。若しくは彼を國家の一奴僕から牢獄の一奴僕に變化させる（社會に從へば癲狂院か病院の奴

僕に）

非人間が如何なるものであるかをムキダシな言葉で云ふことは特別にむづかしいことではない。それは人間と云ふ概念に相應しない人間のことである、恰かも不人情な人間が人情的であると云ふ概念に相應しない人情的な或人間であるかのやうに。論理はこれを『自己矛盾の判斷』と呼んでゐる。若し人が、人間の概念が實在より分離され得るものであり、本質が現象から分離され得るものであると云ふ臆說を認容しないとすれば、人が人間たらずして猶ほ且つ人間であり得ると云ふこの判斷を公言することが許さるべきであらうか？　かれ等は云ふ、彼はまことに人間らしく見える、しかも人間ではないと。

人々は永き世紀の連續を通してこの『自己矛盾の判斷』を經た！　否、更にまた、この永き期間に於て其處には唯だ――非人間等が存在してゐた。如何なる個人が果して彼の概念に相應し得たのであらうか？　基督教は唯一の人間を知つてゐる、そしてこの人――基督――こそまた忽ち反對な意味で非人間である、卽ち、一個の超人、または『神』である。非人間のみが眞の人間である。

人間でない人間、それ等は果して幽靈以外の何者であらうか？　すべての眞人間は、彼が『人

間』と云ふ概念に相應せず、又『一般的人間』にあらざるが故に、幽靈である。けれど若し自分が人間（それは自分以上に聳え立ち、唯だ〳〵自分の理想、自分の仕事、自分の本質若しくは概念としてのみ自分以外の世界に存在してゐた）を自分の性質として引き下ろし、自分に固有な自分のものとしてさへなほ且つ自分は依然として非人間であらうか。さうすれば人間は自分の人間性自分の人間的存在以外のなにものでもなく、自分の行ふ全ては自分がそれをなすと云ふことだけでまつたく人間的であり、それが『人間』と云ふ概念に相應するとしないは問題ではないのではあるまいか？　自分は眞實人間であると共に非人間でもあるのだ。なぜなら、自分は人間であると同時に人間よりより多くのものである。卽ち自分はこの自分の單なる性質を所有する自我である。

我々が單に基督者であることを要求せられるばかりでなく、人間になることを要求されるやうにとう〳〵なつて來た。と云ふのは、たとへ我々が決して眞に基督者にすらなれず、いつでも『哀れな罪人』でありながら（なぜなら基督者はまた到達不可能な理想であつたから）、しかもその矛盾は我々の意識に現はれて來なかつたのであつた、そしてその妄想は、人間であり、人間的に行爲する（さうだ、かくの如くであり、かくの如く行爲する他にしようがないのである）我々に對

して人間、『眞の人間』であれと云ふ要求が持ち出される時よりも、遙かに容易であつたのである。

今日のわれわれの諸國家は、かれ等の教會的な母の手元を離れてはゐるが、なほそれに付き纏ふ種々なる物を有するが故に、かれ等に所屬する人々に種々なる責任を負擔させる、(例へば教會的宗教)そして恐らくそれは少しも國家とは關係のないものなのである。しかも全體に於て國家はその意義を拒否しないのである、なぜならかれ等は人間的社會として見做れたいからである、その社會では、人は、たとへ彼が他の人々より少ない特權を與へられてゐてさへ、人間としてその社會の一員であり得るのである。かれ等はたいてい悉ゆる宗教の信徒を認容する、そして種族と國民の差別なしに人民を受け入れる。猶太人でも、土其古人でも、ムーア人でも佛蘭西の市民になることが出來る。であるから、人民に對する態度に於て、國家は唯だそれが一個の人間であるか否かを問題にするのみである。信徒の一社會としての教會は彼女の懐に萬人を抱擁することが出來なかつた、しかし、人間の社會としての國家はそれをなし得る。しかし、國家がその組織者に人間以外のなにものをも豫想しないその原則を徹底的に實行した時に(北亞米利加すらなほ且つかれ等が宗教を少なくとも、純潔な、尊敬に價する宗教を有することを豫想してゐる)國家

はその墳墓を發いたのである。國家は自からの所有する人々が悉く例外なしに人間であると想像してゐる間にそれ等の人間は例外なしにエゴイストになつて、かれ等の各人は自己の主我的な力と目的に從つて國家を利用するのである。エゴイストにブッカル時に『人間社會』が難破するのである。なぜならかれ等は最早、人間として各自に交渉する必要がない、唯だ一個の自分が自分とは全然異なり、自分とは反對な一個の汝に對して主我的に現はれるのである。

若し國家が我々の人道（Menschichkeit）に重きを置かなければならないと云ふなら、それは我々の道德に重きを置かなければならないと云ふのと同じことである。相互に人間を認め、相互に人間として行爲することが道德的行爲と呼ばれてゐる。これは徹頭徹尾基督敎の『精神的愛』である。なぜなら、若し自分が自分自身の中に人間を見、人間以外の何者をも見ないやうに、汝の中に人間を見るならば、その時自分は自分をかまふやうに汝をかまふであらう。なぜなら我々は、A＝C で B＝Cである、故にA＝B であると云ふ數字的方程式以外のなにものをも現はしてはゐないのである、即ち、自分は人間以外の何者でもなく、汝も人間以外の何者でもない、故に自分と汝とは同一である。道德とエゴイズムとは兩立しない、なぜなら前者は自分の效力を認めず、自分の中の人間の效力のみを認容するからである。しかし、若し國家が人間の社會であつて、各自

が自己の目前に彼自身のみを有する自我の結合でないなら、それは道徳なしには存續し得ない、そしてまた道徳を固執しなければならない。

故に、國家と自分と云ふ我等二人は敵である。エゴイストである自分はこの『人間的社會』の福祉を心の底で考へてはゐない、自分はそれに對してなにものをも犧牲としない、自分は唯だ國家を利用するのみである。しかしそれを完全に利用する爲めに自分はそれを寧ろ自分の財産と自分の被造物に變化させる、—即ち自分は國家を絶滅して)その代りにエゴイストの結合を形ち造る。

かくして國家は自分に人であれと云ふことを要求することによつて自分にその敵意を示すのである。それは自分もまた人間ではなく、『非人間』として國家に對する者であるかも知れないことを豫想してゐる。國家は義務として自分の上に人間であることを負擔させる。更に、國家はそれが存續し得ないやうな何事にも干與しないことを自分に對して望むのである。かくしてその永存が自分にとつて神聖でなければならなくなる。その時、自分はエゴイストであつてはならない、そして『對面ある、正直な』即ち道徳的な人間でなければならない。充分、國家とその永存の前に自分は無力で、愼み深くあらねばならない。

この國家は、實際、現存のものではなく、なは創造せられる必要に逼られてゐるこの國家は進み

つつある自由主義の理想である。すべての『人間』が餘裕を發見する眞の『人間社會』が實現されなければならない。自由主義は『人間』を實現する、即ち人間のための世界を創造することを意味してゐる。そしてそれは人間的世界、即ち人々の一般的(共存的)社會でなければならない。『教會は單に精靈をのみ認めた、國家は全人を認めなければならない』と云ふことが云はれた。(Hess "Triarchie" P.76) だが『人間』は『精靈』ではないだらうか』? 國家の核心は單に『人間』と云ふこの非現實である、そして、それ自から單に『人間の社會』である。信者(信ずる精神)が創造する世界が教會と呼ばれてゐる、そして人間(人間的な若しくはヒユウメンな精神)が創造する世界が國家と呼ばれてゐる。けれどもそれは自分の世界ではない。自分は決して抽象な人間的な何事をも遂行しない、しかしいつでも自分自身の事柄を遂行する。即ち自分の人間的行爲は悉ゆる他の人間的行爲とは異つてゐる、そしてこの異なることに於てのみそれは自分に屬する眞實の行爲である。その中の人間的は一個の抽象である、そしてそれ故に、精神であり、抽象せられた本質である。

ブルノオバウエルは批評主義の眞理が最終の眞理であり、事實に於て基督教それ自身によつて求められた眞理、――即ち『人間』であると云つてゐる(e. g. "Judenfrage" P.84)『基督教世界の歴史は眞理のための至上戰鬪の歴史である、なぜならそれに於て――そしてそれに於てのみ!

――獲得せられた物が最終の又は最初の眞理の發見――卽ち人間と自由――である。』と彼は云つてゐる。

いかにも御尤もである、我々はこの收獲を受け入れよう、そして人間を基督教世界の最後に發見された結果であり、一般人の宗教的な又は理想的な努力の最終の結果として認めよう。だが、全體、誰れが人間なのだ? 自分がさうだ! 基督教の目的であり、所産である人間は、自分としては、新歷史の始めであり、生の材料である、そしてその歷史は犧牲の後に來る享樂の歷史で人間や人道の歷史ではなく、自分の歷史なのである。人間は一般なものとして位してゐる。さて今、自分と自我的とは眞に一般的である、なぜなら萬人は悉くエゴイストであり、彼自身に最も重きを置くからである。猶太人は純自我的ではない、なぜなら猶太人は未だエホヴに彼自身を献げてゐるからである。基督者も純自我的ではない、なぜなら基督者は神の恩惠の下に生活し、神にまで彼自身を奉仕させてゐるからである。猶太人としてまた基督者として人は等しく自からの慾望の一部をのみ滿足させてゐる、それは單に一部の要求で、彼自身の全部ではない。それは半エゴイズムである、なぜなら半人のエゴイズムだからである。彼は半ば自分であり、半ば猶太人である、若しくは半ば彼自身の自主であり、半ば奴隷である。それ故にまた、猶太人と基督者は

常に半端に相互を排斥する、即ち、かれ等は人間として相互を認めるが、奴隷として相互を排斥してゐる、なぜならかれ等は二個の異なる主人の奴僕であるからである。若しかれ等が全然エゴイストであるなら、かれ等は全然相互を排斥するか、或は反對に全然堅く抱擁し合ふであらう。かれ等の恥辱はかれ等が相互を排斥すると云ふことではなく、それが單に半端になされると云ふことに存してゐる。バウエルは、これとは反對に、猶太人と基督者とは、かれ等がかれ等を分つ別個の本質を棄て、永遠の分離にまでかれ等を餘儀なくせしめ、『人間』の一般的本質を認め、これをかれ等の『眞の本質』と見做すまでは、『人間』として相互を尊敬し、取り扱ふことが出來ないと考へてゐる。

彼の陳述に從へば、猶太人と基督教徒の缺點は、かれ等は單に人間であり、人間的なもの——即ち『人間の一般的權利』——を求めることに努める代りに、『特別』ななに物であり、なに物かを持ちたいと欲するところに等しく存してゐるのである。彼の考へによればかれ等の根本的の誤謬はかれ等が『特權づけられ』、『先主權』(Vonrecht)を有してゐると云ふ、つまり特權の信仰に存してゐるのである。彼はこれに對して人間の一般的權利と云ふものをかれ等の前に提出してゐる。人間の權利(Das Menschenrecht)！

人間は一般に人間である。そしてその點で凡ての人は人間である。さて凡ての人は人間としての永遠の權利を持つべきである、そして、共產主義者の意見に從へば、完全な『民主政體』に於て、若しくは、更に精確に、人間政治と呼ばれる政體に於て、その權利を享樂すべきである。けれど、自分が自分自身の爲めに獲得する全てを所有するのは自分ひとりである。人間として、自分は無一物である。人民は全ての人に、彼が『人間』と云ふ稱號を有するばかりで、全てのよき物を充分與へることを好むであらう。けれど自分は、自分が人間であると云ふことではなく、自分だけを强調する。

人間は、例へばそれが男性若しくは女性と云ふ如く、自分の性質(Eigeuschaft)所有(Eigentum)としてのみ意義がある。古代人等は完全な意味で男であることにかれ等の理想を發見した。かれ等の德は Virtus と arete —— 卽ち男らしきことであつた。女が完全に『女』であることのみを欲する云ふことは全體どう云ふことなのか? それは全ての女性に與へられてゐない、そこで多くの女性は彼女自からの爲めに到達しがたい目的をその中に定めてゐるのでもあらう。だが、一方、彼女は生來、どんなことをしても女性なのである。女性は彼女の性質である、そして彼女は『眞の女性』を必要とはしないのである。自分は地球が一個の星であるやうに一個の人間である。地

球に向つて『完全無缺の星』になれと云ふ仕事を課することが滑稽事であるやうに、自分に『完全無缺の人間』になれと云ふ天職を負はすことも等しく滑稽な事である。

フイヒテ(Fichte)が『自我は萬事である。』と云ふ時に、これは自分の題目と完全に調和するやうに思はれる。けれど、自我が全てであると云ふだけでは盡くさない、自我は全てを破壞する、そして自己費消の自我、刹那に移りゆく自我、有限の自我のみが眞の自分である。フイヒテは『絶對』の自我に就て語り、予は移り變る自我、即ち自分に就て語る。

人間と自我とが同一物を意味すると云ふ想像は如何に自然なことよ！ しかも人は（例へばフオイエルバハの如き）『人間』なる發想は絶對の自我、または種族(Gattung)を表明すべきで、刹那に移り行く個人的自我を表指すべきではないと云ふ風に考へる。自我道と人道(人情あること)とは同一物を意味すべきである、然るにフオイエルバハに從へば、個人は『唯だ彼の個性の制限以上に彼自身を高め得るが、自からの種族の法則や、その積極的命令以上に高め得ることは出來ない。』のである。(Wesen d. Christenth, zweite Auflage. S.401) しかしながら、種族は何物でもない、そして若しも個人が彼の個性の範圍以上に彼自からを高めるなら、これは寧ろ個人としての彼それ自身である。彼は彼自身を高めることに於てのみ存在する、彼は彼のあるがままの狀態に止ま

らないからこそ存在するのである。然らざれば彼は駄目になり、死んでしまふであらう。偉大なMを有する人間は單に一個の理想であり、種族と云ふも唯だ思考せられる或物に過ぎない。一個の人間であると云ふことは人間の理想を實現することではない、けれど個人を、自分自からを表現することであるそれは如何にして自分が自分の必然の仕事である。一般的人間を實現することではなく、如何にして自己が自分自身を滿足せしめ得るかである。自分は自分の種族である、規範や、法律や、模範などと云ふものが存在しないでも自分は自分である。自分は自分自身から極めて僅かを造り出すことが出來る。而もこの僅かが萬事である、そして、自分が他人の力や、習慣、宗教、法律、國家等の訓練によつて自分から造り出されることを許すところのものよりも遙かにましなのである。若しその話が少なくともいいとかわるいとか云ふことであれば――若き肩の上に乘つてゐる老人の首よりも禮儀作法を心得ない子供の方がましであり、全てに迎合する人間よりも、片意地の人間の方がましなのである。不作法で片意地な奴はなほ彼自身の意志に從つて自からを形造らうとしてゐるのである。早熟な物知りや、迎合的人間は『種族』や、一般的要求によつて決定される、――種族が彼に對する法則である。彼はそれによつて決定(bestimmt)されろ。なぜなら、彼にとつて自分の『定命』(Bestimmung)、自分の『天職』以外に種族と云ふものがあ

るであらうか？　自分がこの理想に到達せんが爲めに『人道』や種族を目差すにせよ、或は同じ努力を盡して神や基督を眺めるにせよ、何處に本質的の相異があるのか？　若しあるにせよ、精々前者が後者より以上に洗ひ落されるのである。個人が自然の全體である如く、また種族の全體でもある。

自分が行ひ、考へたりする全て、——要するに自分の發想又は表現——は實際自分がなんであるかによつて決められる。例へば猶太人は唯だかくかくの如く意味することが出來、唯だかくかくの如く『自からを現はす』ことが出來る。基督者は唯だ基督者風に自からを表現することが出來る。若し諸君が猶太人であり、若しくは基督者になり得るなら、諸君は實際、猶太的な若しくは基督教的なもののみを持ち出すであらう。けれどそれは不可能である。最も嚴密な行狀に於て諸君は依然として一個のエゴイストであり、その概念に反する罪人である——即ち諸君は嚴密に猶太人と同一者ではないのである。さて、エゴイストが不斷に覗き見をしてゐると云ふので、人々は眞にまつたく諸君にありのままを發想するやうな前よりも更に完全な概念を求めた、そして、それは、諸君の眞の性質であるが故に、諸君の活動の凡ゆる法則を含蓄すべきものでなければならない。その種の最も完全な物が『人間』によつて到達された。猶太人として諸君はあまりにつま

らない猶太的は諸君の天職ではない。希臘人又は獨逸人であることも充分ではない。だが人間であれ、その時諸君は全てを所有する。人間になることを諸君の天職と心得よ。

さて自分は自分から期待されるものを知つてゐる。そして新規な初學問答が書かれる。主辭が再び賓辭に從屬し、個人が一般的な何物かに從屬する。領土が再びある觀念に定著し、新しき宗敎の基礎が置かれる。これが宗敎の領土に向ふ一歩である、そして特に基督敎の方へ。そしてそれを超越する一歩ではないのである。

それを踏み越えた一歩は不可言に敎導する自分にとつて、價値なき國語はなんの言葉をも持たない、そして『ことば』、ロゴスは自分にとつて『單なる言葉』である。

自分の本質が探求される。たとへ猶太人でも、希臘人でもないにせよ、少なくともそれは――人間である。『人間が自分の本質である。』

自分は自分自身に對して反撥する、若しくは嫌惡する。自分は自分自身に對して恐怖と憎惡の念を抱く、自分は自分自身に對して一つの恐怖である、若しくは、自分は決して自分自身に對して充分でなく、決して自分自身を滿足させるやうなことをしない。かくの如き感情から自己分解卽ち自己批評が生じて來る。宗敎性は克己をもつて始まり、完成された批評に終る。

自分は憑かれてゐる、そして『惡靈』から脫却したいと願ふ。自分は如何にしてそれを始めやうか？ 自分は少しも臆せず基督者にとつて最も恐ろしく思はれてゐる罪惡、聖靈に對する罪と謂瀆とを犯す。『聖靈を瀆がす人は永久に宥さるることなく、永遠の審判を受けるべきである！』自分は何等の赦罪を欲しない、審判を恐れない。

人間は最後の惡靈卽ち幽靈である、最も欺瞞的で最も親密で、正直な容子をした最も巧妙な虛言者で、虛僞の父でもある。

現在のあらゆる要求や概念に叛くエゴイストは無慈悲にも最も限りなき――冒瀆（Entheiligung）を犯す。彼にとつては何物も神聖ではない！

自分以上に何等の權力をも承認しないことは愚かなことでもあらう。自分がそれに對する唯一の態度は宗教時代のそれとは全然異つたものであらう。自分は凡ゆる權力の敵となるであらう、然るに宗教はそれをわれ等の友とし、それに向つて謙遜なれと我等に教へる。

冒瀆者は神に對する凡ゆる恐怖に反して彼の力を奮ふ、なぜなら神に對する恐怖は彼が神聖なものとしての立場を棄てた全ての物に彼を定着させるからである。神人の中にあつて聖なる力を奮ふ者が神であれ又は人間であれ、――それ故に、神聖にされる物が神の爲めであれ、或は人間

（人道）の爲めであれ、——それは神に對する恐怖を變化させない、なぜなら人間が『至上の本質』として尊敬されるから、恰かも皮相な宗教的立場から神が『至上の本質』として我々の恐怖と尊崇を呼び起すが如く、兩者が我々を威嚇する。

本來の意味で云ふ神の恐怖は既に昔に振ひ落された筈である、そして、多少自覺せる『無神論』が、外的に一般に『非教會主義』として認められて、自然とその形をとるやうになつた。けれど神から取られた物が人間にまで付け加へられた、そして人道の力は敬虔の力が重さを失ふに從つて大きくなつて行つた。『人間』が今日の神である、そして人間に對する恐怖が神に對する舊式な恐怖に取つて代つた。

けれど、人間が他の至上存在者を代表してゐるばかりであるから、事實、其處には至上存在者の變化以外に何事も起らなかつた、そして人間に對する恐怖は單に神に對する恐怖の變形に過ぎない。

我々の無神論者は敬虔な人々である。

若し所謂封權時代に於て我々が神からの知行として全ての物を保持したとすれば、自由時代に於ては、同一な封權的關係が人間に對して存在する。昔は神が主君(der Herr)であつた、今では

人間が主君である。昔は神が仲介者であり、今では人間が主君である。昔は神が聖靈であり、今では人間が聖靈である。この三重の着眼から封權的關係が一つの變化を經驗した。今では、先づ我々は全然ある人間から我々の力を一個の知行として受け取つてゐる、然しそれはより高き者から來るが故に、力又は權力と呼ばれず、『權利』、『人間の權利』と呼ばれてゐる。我々は更に進んで、彼からの知行として世界に於ける我々の位置を得てゐる、なぜなら、仲介者としての彼が他の人々との我々の交際を仲介する、そしてそれはそれ故『人間』以外のものではないかも知れない。最後に、我々は自分自からを彼からの知行として保持してゐる、——即ち我々自からの價値、又は我々の價打する全て、——故に、人間が我々の裏に住はない時に、そして我々が『人間』でない時と場合に於ては我々は三文の價打もないのである。その權力も人間のものであり、自分も人間のものである。

けれど自分はなほ自分自身を、資格賦與者であり、仲介人であり、所有自己であると宣言することから束縛されてゐるのであるか？　その時それはかく云ふ。

自己の力が自己の所有である。

自己の力が自己に所有を與へる。

自己の力が自己自身である、そしてそれを通じて自己が自己の所有となる。

自分の力

權利(Das Recht)は社會の精神である。若し社會が一個の意味を有するなら、この意志が單に權利である。社會は權利によつてのみ存在する。けれど、權利は個人の上に主權(Herrshaft)を奮ふことによつてのみ存續するが故に、權利はその主上意志(Herrschewrille)である。正義は社會の便宜であるとアリストートルが云ふ。

凡そ存在する權利は――外來的法則(fremdes Recht)である。何人かが自己をその權利の中に生活するやうに製造する、『自己によつて正しくする。』けれども、全世界が自分をそのやうに造り上げれば自分はその權利に從つて生きなければならないものであらうか? そして、しかも自分が國家や社會から獲得する權利は自分にとつて外的なものに對する權利以外のなにものであるのか? 愚人が自分に權利を附與する時に、自分は自己の權利を信じなくなる。自分は彼からそれを受け取ることを好まない。しかし、賢人が自分に權利を附與する時すら、自分は決してそれが爲

めに權利を有する者ではない。自分の權利を所有するの如何は愚人がそれを附與すると、賢人がそれを附與すると、その孰れからも全然獨立してゐるのである。

いつでも同じやうに、我々は今迄この權利を切望して來た。我々は權利を求めて、その目的の爲めに法廷に訴へる。どんな？ 帝王の、法王の、若しくは民衆の法廷(等)へ。土其耳帝の法廷は土其耳帝が命じた以外の權利を果してよく宣言し得るか？ 若し自分がサルタンの法律と一致しない權利を求める時、それは果してその權利を自分に與へてくれるであらうか？ サルタンの心に從へばそれは確かに權利ではない、例令へば叛逆を權利として自分に讓與し得るであらうか？ 或は又サルタンがこの自分の權利に就て何事をも聽かないものであることがわかつてゐながら、檢閲官の法庭として意見の自由發言を權利として自己に許可することが出來るであらうか？ それなら自分はこの法廷に果して何を求めつつあるのか？ 自分はサルタンの權利を求めてゐるので、自己の權利を求めてゐるのではないのだ。自分は外的な權利を――求めてゐるのである。この外的の權利が自己のそれと調和する限り、確かに、自分はこの中にまた自己のものを發見することであらう。

國家は人間が相互に攻撃し合ふことを許さない。國家は決鬪に反對する。角鬪者の孰れもが警

察官の手を煩はさないにも拘らず、普通の毆り合ですらが禁じられてゐる。但し、汝を毆ぐる者が一個人としての自分でない場合、例令へば家長が子供に對する場合の如きは例外である。家族にはその特權がある、そして父と云ふその名稱によつて、しかし自我としての自分にはそれが與へられないのである。

"Vossische Zeitung" は我々に『權利の共和政體』を提供する。其處では全ての事が判官と法廷とによつて決定されなければならない。それは『權利が宣言せられる』『法廷』として檢閲官の至上法廷を置く。それは如何なる種類の權利なのか？　檢閲官の權利である。その法廷の宣告を權利として承認する爲めに、人は檢閲官の權利を尊敬しなければならない。しかし、それにも拘らず、この法廷が保護を提供するものとして考へられてゐる。如何にも、個人の檢閲官の誤謬に對する保護を。それは檢閲立法官を彼の意志の誤まれる解釋に陷らざらんが爲めにのみ保護すると同時に、『權利の神聖な力』によつて著作者等に對する彼の法令を愈々强固ならしめるのである。

自分が權利を有すると否とに拘らず、この世には自分自身以外に何等判官は存在しないのである。他人は唯だかれ等が自分の權利を裁可するか、若しくはそれがまたかれ等にとつても權利として存在するか否かを判じ得るのみである。

それはそれとして、我々はまたその事柄を他方面から觀察してみよう。自分は土其耳帝國に在つては土耳其帝の法律を尊敬し、共和國に在つては民衆の法律を尊敬し、天主教共和國に在つては宗門の法律を尊敬しなければならない。これ等の法律にまで自分は自分自身を從屬しなければならない。自分はそれ等のものを神聖として尊敬しなければならない。この種の『權利の觀念』と『法律固守の精神』とは民衆の頭腦に堅く根ざしてゐるが爲めに、今日に於ける最も革命的な人々すら我々を新規な『聖法』『社會の法則』『人類の法則』『萬人の權利』(等)に從屬せしめようとする。『萬人』の權利が自己の權利に先き立たなければならない。萬人の權利として、それは實際自餘の人々の間にあつての自分の權利であるであらう、なぜなら、自分が、自餘の人々と共に、萬人の中に含まれてゐるから。しかしながら、それが同時に、他の人々の權利であり、全ての他の人々の權利であることを如何に主張されてもそれは自分を動かさない。自分はそれを萬人の權利として辯護するのではなく、自己の權利として防禦するのである。然る後に他の全ての人々がまた如何に彼自からの爲めにそれを維持するかを見得るのである。萬人の權利(例へば食ふことの)は各個人の權利である。各人をして彼自身の爲めにこの權利を削除なしに維持せしめよ、その時全ての人々はそれを恣ひままに行使する。彼をして全ての人々の世話を燒かさしむる勿れ、——彼

そして萬人の權利に對して熱心ならしむる勿れ。

而も社會改革者等は我々に『社會の法則』を說敎する。其處で個人が社會の奴隷になる、そして、社會が彼に權利を與へる時にのみ權利がある、卽ち、彼が社會の法令に順して生活する時に、かくしてそれが――忠義(loyal)である。自分が專制政體の下にあつて忠義であらうが、若しはワイトリング(Weitling)風の『社會』の下にあつて忠義であらうが、その兩者の場合に於て、自分が自己の權利を有せずして、外來の權利を有する限り、依然として權利の不在なることは同一である。

權利を考察するに當つて常に訊ねらるゝ質問は『その權利を何者が何人が自分に與へるのか』?である。その答へとして、神、愛、理性、自然、人道等が出て來る。否、唯だ汝の權力(Gewalt)汝の力(Macht)のみが汝にその權利を與へる(例へば汝の理性がそれを汝に與へるかも知れない。)

人間が『生れながら平等の權利を有する』ものと假定する共產主義は、同時に人間が生來何等の權利をも有せざる者であると云ふ結論に到達する迄はそれ自身の命題に矛盾することになる。なぜなら、それは(例へば)兩親が『生れながら』かれ等の子供等に對して權利を有すること、若し

くは子供等が兩親に對して權利を有することを認めることを欲しない。それは家庭を廢止する。自然は兩親、兄弟(等)に何等の權利をも與へない。まつたく、全體の革命的な又はバボイッシエ(Babeusshe)な主義 ("Die Kommunisten in der Schweig," Kommission al-bericht, s.3) は宗教的な卽ち、誤つた物の見方を根柢としてゐる。若し自から宗教的見地を持さないならば、何人かよく『權利』を求める者あらんや? だ。『權利』は宗教的概念、卽ち神聖な何物かではあるまいか? 佛蘭西革命の說明する『權利の平等』とは『基督教的平等』、『同胞の平等』『神の子供等の』、『基督教徒の』平等、要するに Fraternité に對する別名に過ぎないのではあるまいか。權利に對する要求は悉くシルレンの言葉を以つて鞭韃せられる價打がある。

Yahrelang schon bebien'ich mich meiner Nase Zum Riechen;
habi ch denn wirklich an sie auch eiu euweisliches Recht?

多年自分は葱や薔薇を臭ぐために自分の鼻を用ひた、
その同じ鼻に對して自分が權利を有すると云す證據を示すものが何處にかあるだらうか?

佛蘭西革命が平等を一個の『權利』として捺印した時、それは宗教的領土へ、神聖な、理想の領土へ飛び去つたのである。爾來、『人間の神聖な、讓與し難い權利』に對する闘爭が始まつたのである。『人間の永遠の權利』に對して、『既成秩序の獲得された權利』がまつたく自然に、同一の權利をもつて對抗する。權利に對する權利、其處では勿論甲が乙によつて『不正』として誹謗される。これが佛蘭西革命以來の諸權利（rechtsstreit）の闘爭であつた。

諸君は自餘の者に對して『權利に』あることを欲する。しかも諸君はその權利を獲得し得ない。かれ等に對して諸君は氷久に『不正』である。なぜなら、若しかれ等がまた『かれ等の權利』を有してゐないなら諸君の敵にはならないであらう。かれ等は常に諸君を『不正』に置くであらう。しかしながら、自餘の人々の權利に對して、諸君のそれがより高く、より偉大な、より力強き利權なのではあるまいか？　そんなことはない！　諸君の權利は諸君がより力強くないなら、より力強くないのである。支那の臣民は自由に對する權利を有してゐるのか？　先づかれ等にそれを與へて後、諸君がその企てに於て如何程誤つたかを眺めて見よ。なぜならかれ等は如何にして自由を行使すべきかを知らないが故に、それに對する權利を有してゐないのである。若しくは更に明白な言葉に換へれば、かれ等が自由を有せざるが故に、それに對する權利を所有しないのであ

る。子供等は丁年の狀態に對して何の權利をも所有しない、なぜならかれ等が未丁年で、卽ちかれ等が子供であるからである。自から未丁年の狀態の繼續を許す人々は丁年の狀態に對する權利を有さない。若しかれ等が未丁年者たることを止めるなら、その時にのみかれ等は丁年の權利を持つやうになるであらう。これは『汝がそれに對する力を有する物に對して汝は權利を持つ。』と云ふ以外のなに物をも意味しない。自己が凡ゆる權利を誘致する、そして凡てが自己から許可される。自分は自分の權力範圍に於ける全てに對する權利を附與される。自分には、出來さへすればゼウスでもエホヴでも神(等)でもを顚覆する資格がある。若し自分にそれが出來ないなら、その時これ等の神々は權利を有し、自己に對していつまでも權力を振ふであらう。そして自分の爲すことは無力な『神に對する恐怖』に於てかれ等の權利と力とを畏れることであらう、そして、かれ等の命令を遵奉し、自分がかれ等の權利に從つてすることの全てには權利があると信ずるでもあらう、それは例令へば露西亞の國境にゐる番兵が當然逃走する怪しき人間を銃殺する權利があると考へるやうに、なぜなら、かれ等は『優越な權威』、卽ち『權利をもつて』殺戮するからである。しかし自分は、自分が自分自身に對してそれを禁じないなら、そして若し自分が自から殺戮を『不正』として恐怖しないなら自分自からその殺戮を實行する資格があるのである。この物の見方

はシヤツミソオ(chamisso)の『殺人の谷』と題する詩の根柢に横つてゐる、その詩では灰色の毛髮をした印度人の殺人者がその人の同胞を自分で殺して置きながらその白人から尊敬を强ひてゐる。自分がやる資格のない唯一の事は自分が自由な喜びをもつて出來ないことである、卽ち、自分自からやるだけの資格のないものである。

自分に在つてそれが正當の權利であるか否かは自分が決するのである。自分以外には何等の權利もない。若しそれが自分に正しくありさへすれば、それが正しいのである。恐らくこれは自分以外の人々にもそれを充分正しくすることは出來ないかも知れない。それはかれ等の問題で、自分のことではない。かれ等をしてかれ等自からを防禦せしめよ。たとへ或事が全世界にとつて正しくないとしても、若しそれが自分にとつて、正しければ卽ち自分がそれを欲するならば、その時自分は全世界を少しも問題にはしないであらう。かくして自からの價打を計ることを知るところの人のみが、彼がエゴイストであるそれぞれの程度に從つて行爲する。なぜなら力は權利より先きに行く、そして完全な權利をもつて進む。

自分は『生れ付き』(Von Natur)人間であるが故に、自分は全ての幸福を享樂する平等の權利を有すと、バブーフが云ふ。彼はまた自分が『生れ付き』第一の王子であるが故に王位に對する權利

を有すと云つてはならないのか？　人間の諸權利と『よく獲得された權利』とは結局同一の物、卽ち自然にまで來るのである、そしてそれが自分に家柄（更にまた世襲等の）に對する權利を與へるのである。『自分が人間として生れた』と云ふことは『自分が王子として生れた』と云ふことと同一である。自然人が唯だ自然の權利と自然の要求とを持つ（なぜなら彼が唯だ自然の力を持つが故に）。彼は家柄と身分に對する要求を持つ。けれど自然は自分を資格づけることは出來ない、卽ち自分に能力若しくは權力を與へて、自分の行爲のみが自分に資格を與へるところのものに自分を資格付けることは出來ない。王の息子が自からを他の子供等以上に置くこと、これすら彼の行爲であり、それが彼に優越を獲得せしめるのである。そして他の子供等がこの行爲をかれ等の行爲であると承認することが、かれ等をして臣下たるに順應せしめるのである。

自然が自分に權利を與へようが、若しくは神が、或は民衆の撰擇がそれを與へようが、それは悉く同一な外來の權利であり、自己が自分自身に與へ、若しくは自分に取るの權利である。

かくしてまた共產主義者等は平等の勞働が人間に平等の享樂を附與すると云ふ。昔者『德ある』人はこの世に於て『幸福』であつてはならないかと云ふやうな質問が發せられた。猶太人等は實際『汝がこの世に於て幸福に暮さんことを』と云ふ推論を引き出した。否、平等の勞働が諸君にそ

の資格を與へはしない。平等の享樂のみがひとり諸君を平等の享樂にまで資格付ける。享樂せよ、然らば諸君は享樂の資格を得たのである。しかし、たとへ諸君が勞働しても、享樂を諸君から取り去らるるに任かせるなら、その時――『それは自業自得である』("geschieht Dir recht")

若し諸君がその享樂をとるとすれば、それは諸君の權利である。若し、それに反して、諸君がそれに手を付けることなく徒らにそれに憧憬するならば、それは依然として享樂の特權を有する人々の『よく獲得された權利』として殘る。それはかれ等の權利である、それに手を觸れることによつてそれが諸君の權利になるであらう如く。

『所有權』に對する鬪爭が激しき擾亂をたへず卷き起してゐる。共產主義者等は『土地はそれを耕やす人にまで正當に所屬する。そしてその生產はそれを齎らす人々にまで當然所屬する』と斷定してゐる。(A. Becker, "Volks-philosophie," P. 22f)自分はそれが如何にしてそれを取るべきかを知つてゐる人、若しくはそれを自分の手から放さない人、自からそれを略奪されない人にまで所屬すると考へる。若し彼がそれを自己の所有とするなら、その時は唯に地球のみならず、それに對する權利もまた彼に所屬する。これが自我の權利である。卽ちそれは自分の權利である、故にそれが權利である。

これを他にしては、權利は『蠟細工の鼻』(eine wächserne Nase)を持つのみである。自分を襲撃する處には權利がある、そして彼を打ち倒す自分にも亦權利がある。自分が彼に對して自分の權利を防禦するのではなく自分自身を防禦するのである。

人間の權利と云ふものはいつでも他から與へられる物であるが故に、それは常に事實に於て人々が附與する、卽ち相互に『承認する』ところの權利にまで割引きされる。若し生存權が新しく生れた子供等に對して承認せられるならば、その時かれ等はその權利を持つ。けれど若しそれが、スパルタや古代羅馬人の場合に於けるが如く、かれ等に對して承認されなければ、その時かれ等はそれを持たないのである。なぜなら社會のみがそれをかれ等に與へ、若しくは承認するからである。かれ等自からはそれを取ることも出來なければ、それを自からに與ふることも出來ないのである。人はそれに反對するかもしれない、それにも拘らず、子供等は『生れ付き』生存の權利を有してゐたのだ。唯だスパルタ人がこの權利を承認することを拒んだのである。けれどその時かれ等は單にこれを承認する權利を有してゐなかつたのである、――これはかれ等がその中に投げ込まれた野獸の群の間にあつてかれ等の生命の承認を持たなかつたと同樣である。

人々は屢々生得の權利(angebornen Recht)を口にして不平を云ふ。

Vom Rechte, das mit uns gebornen ist,
Von dem ist leider nicht die Frage.

嗚呼！　われ等と共に生れたる權利はなん等問題にされないのである。

けれど自分と一緒に生れた權利とは抑もそも如何なる種類の權利なのであるか？　遺産を相續し、王位を繼承し、皇族若しくは貴族的教育を受ける權利なのか、若しくはまた、貧乏な兩親が自分を生んだが爲めに、自由教育を受け、慈善の寄附によつて着物を着、最後には炭坑或は織場で自分のパンと餅とを儲ける權利のことなのか？　これが生得の權利、自分の兩親から生れると同時に授けられた權利なのではあるまいか？　諸君は否と考へる。これ等は唯だ不適當にさう呼ばれた權利であつて、同時にまた諸君が眞の生得權によつて廢除せんと志してゐる權利であると諸君は考へる。この理屈に根柢を與へる爲めに、諸君は最も單純な物に後戻り、そして各人が生れながら他と、――即ち、ある人間――と平等であることを肯定する。各人が人として生れたことを自分は諸君に許さう、故に新に生れた者は生れて來たと云ふ點で相互に平等である。何故に

かれ等はさうなのか？　それはかれ等が未だむき出しの人の子等、裸形の小人間以外の何者としてもかれ等自からを示し、また振る舞はないからばかりである。しかしそれによつてかれ等は同時にかれ等自からなに物かを造り出した者等、――それは最早ありのままの『人の子等』ではなく、かれ等自からの創造の子等である――から異なつてゐる。後者は單なる生得權よりも以上を所有してゐる。かれ等は獲得した權利を持つてゐる。なんと云ふ相反、なんと云ふ戰場！　人間の生得權とうまく獲得された權利との舊い戰爭。諸君の生得權をふり翳して猛進して見給へ。既得權を有する人々は必ず諸君に反對するであらう。兩者が『權利の基礎』の上に立つ。なぜなら兩者の各自が他に對して『權利』を有してゐる。一方は生得權即ち自然の權利を、他方は獲得された即ち『うまく獲得された』權利を有してゐる。

若し諸君が權利の土臺の上に踏み止まつてゐるなら、諸君はいつまでも Rechthaberei（常に自己の權利を主張する人）である。『賴む、ゆつくり呼吸をさせてくれ！　自己の正しきことを證明せんと主張する者は、若し彼にして否と呼ばれる物を一つさへ持つならば、世の凡ゆる輕侮をも省みず彼自身の權利を保つことが出來る！』（メフイストに向つてフアウストの云つた言葉）」他人は諸君に諸君の權利を與へることは出來ない。彼は諸君に『權利を分配する』ことは出來ない。

力を持つ者が權利を持つ。若し諸君に前者がなければ、從つて後者もない。この智慧は到達するに左程困難であらうか？　まづ偉大な權力者とかれ等のやり方とを見給へ！　我々は玆では勿論唯だ支那と土耳其に就てのみ語つてゐるのである。諸君支那と土耳古の人々よ、まづ試みにかれ等の不正を證據立てて見給へ、そして如何にかれ等が諸君を獄中に投ずるかを經驗して學び給へ。（だがこれを支那や土耳古で許されてゐる『善意の議會』（Wohlmeinenden Ratschläge）と混同してはならない。なぜならばかれ等は偉大なる者を妨げず、多分彼を補助するからである。）かれ等を不正の位置に落さうと欲する者にとつては、其處に唯だ一つの道、卽ち力の道が開らかれてゐるのみである。若し彼がかれ等の權力を剝奪するならば、その時彼は眞にかれ等を不正の位置に落し、かれ等の權利を剝奪したことになる。それ以外の場合に於ては、彼は彼のポケットに小さい拳骨を握ぎるか、跳ね上りの愚人として犧牲になるかその孰れかの以外にはどうすることも出來ない。

要するに、若し諸君支那人、土耳古人諸君にして權利を求めず、特に『諸君と同時に生れた』諸權利を要求しないならば、その時諸君はまたうまく獲得された權利に對して何等要求する必要がなくなるであらう。

諸君は他の面前でおぢけて屁ごみをする、なぜなら諸君はかれ等の傍に權力か、幽靈があると思ふからである、その幽靈は恰かもホーマア時代の戰場に於けるが如く、かれ等の傍に女神として戰ひかれ等を助けてゐるやうに見えるのである。諸君はどうするか？　諸君は槍を投げるか？否、諸君は幽靈を諸君自身の上に奉り、それが諸君の味方としてでも戰ふやうに這ひまわる。諸君は幽靈の恩寵を懇願する。他の人間は單にかくの如く訊ねるであらう、自分は自分の敵の欲するところの物を欲したらいいのか？　と。『否！』そこで、無數の惡魔や神が彼に味方して戰ふかもしれない、しかもなほ自分は彼をやつつけるのだ！

中にも "Vossische Zeitung" の如きがそれを代表してゐる『權利の共和國』(Reehtsstaat)は官吏を免職させるのは裁判官によつてのみ處理さるべきで、行政によるべからずと云ふ。無駄なイリユウジョンだ！　たとへば一度醉つ拂つてゐるところを見られた官吏はその職を失なふべしと云ふやうな法律があるとして、彼を罰する裁判官はそれを證人、(等)の言葉によつて行ふのであらう。要するに、法官は唯だ官位の失墜を惹起するに足る凡ゆる條件を出來るだけ精密に記述さへすればいいのである、たとへそれ等が如何に嗤ふべきものであつてもだ(たとへば、上官の面前で嗤ふ者、日曜毎に教會へ行かぬ者、四週間毎に聖餐式に列しない者、借金をする者、不名譽な

交友を有する者、決然たる態度を示さぬ者等は免職せらるべし。律法者はこれ等のことを頭に入れて、たとへば名譽ある法廷の爲めに法律を制定するのでもあらう）そして判官は唯だ被告がそれ等の『罪過』によつて『犯罪に該當』するかを調査すればよいのである。そして證據を表示し、『法律の名によつて』免職の判決を彼に宣告すればよいのである。

裁判官は彼が機械的であることを止める時、彼が『證明の規則によつて拒否される』時に失なはれる。その時彼は最早彼以外の萬人と同一な意見以外に何物をも持たない。そして若し彼がこの意見に從つて判決を與へるなら、彼の行爲は最早官職的行爲ではない。法官としての彼は法律に準據してのみ判決を下さなければならない。寧ろ舊い佛蘭西の議會制度を推擧せしめよ、其處では議員達は何にが正しき權利であるかをかれ等自身の爲めに驗べそして、かれ等自からの承認を經てのみそれを登記しようと欲したのである。かれ等は少なくともかれ等自身の權利に從つて判決を下した、そしてかれ等自身を律法者の機械たらしめることを欲しなかつた、たとへ判官としてかれ等は、たしかにかれ等自身の機械になつてはゐたけれども。

罰は犯罪者の當然受けるべき物であると云ふことが云はれてゐる。しかし無罪たることも亦等しく彼の權利である。若し彼の了解が成功すれば、それが彼の當然になる、そして若しそれが成

功しないならば、それも亦彼にとつて等しく當然になる。諸君は諸君の床をとつてその中に寢るとする。若し何人かが無謀にも危險の中に飛び込んで、その中で滅びたとする、我々は『それは自業自得だ、それは彼にとつて當然のことだ』と得て云ひたがる。けれど若し彼がその危險に打ち勝つたなら、即ち彼の力が勝利を得たならば、その時彼はまた當然であると云はれるであらう。若し子供がナイフを弄んで怪我をしたとする、それは當然だ、しかし若し怪我をしないとしても、それも亦當然になるのである。故に犯罪者を生むものは勿論權利なのである、その時、彼は彼の賭した物の爲めに苦痛を受けるのである。彼はその當然の結果を知つてゐながら、何故に、なんの爲めにかくの如き危險を冒したのであるか？　しかし我々が彼に對して宣告する處罰は單に我々の權利であつて、彼のではない。我々の權利が彼に對して反應するのである、そして、彼は『遂に不正に』なる、なぜなら――我々が上手に出るからである。

けれど正しき事、社會に於て正しき事柄がまた法令中に（im Gesetze）聲明されてゐる。その法令が如何なるものであつても、それは忠義な市民によつて尊敬されなければならない。かくして舊い英國の法律に縋りつく心意が稱贊される。これとかのエウリピデス流の感情（Orestes 412）

が全然附合する――『神々が如何なるものなりとも、我等は神々に仕ひまつる。』かくの如き法、律かくの如き神、かくして我々は今日まで生きて來た。

人民は專擅な命令や勅令と法律とを區別するに苦しんでゐる。法律は正しき資格あるオーソリテイから來る。けれども人間の行爲を左右する法律（倫理的法則、國法等）はいつでも意志の宣告であり、かくして一個の命令である。さうだ、若し自分がその法則を自分自身に對して與へたとしてさへ、次の瞬間に自分が服從を拒むことが出來たとしても、それはなほ且つ自分に對する命令となるであらう。人は自分が我慢しなければならないやうなことでも平氣で宣言が出來る、そして法律によつて反對者を凹ませ、それに反對した場合にはその背令者を彼の敵と見做すぞと云ふことを知らしめることが出來る。しかし何人にも自分の行動を指揮するやうな義務はない、たとへば自分がどんな道程を追求しようか、そしてそれを支配するどんな法典を拵らへようかと云ふやうなことを。自分は彼が自分を彼の敵として取り扱ふことを我慢しなければならないとしても、彼が彼の被造者として自分を玩弄することや、彼が彼の道理、若しくは非理をすら自分の垂鉛とすることを我慢は出來ない。

國家は支配する意志がある間だけ繼續する、そしてこの支配する意志が自己の意志と同一なも

のと見做れてゐる。君主の意志が――法律である。若し何人もそれに服從しないとすれば諸君の法律はどうなるか？　若し何人も自から命令されることを欲しないなら、諸君の命令はどうなるか？　これを考察し、思惟する時、國家は個人の意志を決定する宣言に耐えることは出來ない。國家にとつて缺くべからざることは何人も自己の意志を持たざることである。若しそれを持つ者があれば、國家は、國家はこの人間を排除（閉ぢ込めるか、亡ぼすか、等）しなければならないであらう。若し萬人が持つならば、かれ等は國家を消滅せしめるであらう。國家は君主と奉仕（服從）を除いては考へ得られない。なぜなら國家はそれが抱擁する全部の君主であることを意志しなければならない、そしてこの意志が『國家の意志』と呼ばれてゐる。

彼れ自身の意志を支持する者は、主人が從僕によつて造られた者である如く他の者の意志の不在がすべてこれ等の人々によつて送られる物であると見做なければならない。若し服從が止めば君主制度が同時に滅亡することになるであらう。

自分の自己意志は國家の破壞者である。故にそれは國家によつて『利己意志』として烙印を押されてゐる。自己意志と國家とは相互に不倶戴天の仇敵である、兩者の間には『永遠の平和』は不可能である。國家がそれ自からを確立してゐる間は、自己意志を、その不斷の仇敵を、不合理な、

騙(等)として代表させてゐる。そして自己意志はこれを信ずるやうに自からを說伏させてゐる、否、それは實際、これ以上に何等の理由もなく、依然としてかくの如き信仰に自からを說伏させてゐる。それはまたそれ自身に歸へり、その威嚴を自覺しない、故にそれは依然として不完全であり、美しい言葉(等)に誤魔化されてゐる。

國家はすべて專制である、たとへ專制者が一人でも又は多數でも、若しくは(共和制體を想像して見てもいい)全てが君主であつても、相互を壓制するものである。なぜならばある時に造られた法律が(たとへば)それが民衆會議の表明された意志であつたとしても、個人に對する法律にならなければならない、そしてそれに對する服從が個人の義務として要求される、若しくは、それに對して個人が服從の義務を持たなければならなくなる。若し民衆の各個人が同一の意志を發想したとした場合を思惟するとしてからが、そしてだから完全な『集合意志』が存在するとして見ても、その事柄は依然として同一であるであらう。自分は今日以後昨日の意志に束縛されないだらうか? 自分の意志はこの場合凍りついてしまふであらう。慘めな固定! 自分の被造物——即ち、特別な意志の發想——が自分の支配者になるであらう——それに反して、意志する自己、創造者たる自分は自分の流動と溶解とを妨害されることになるであらう。自分が昨日一個の馬鹿

者であつたが爲めに自分の終生を馬鹿者で通さなければならなくなる。かくして國家生活に於て自分は最上――また同時に最悪とも云へる――のところ自分自身の奴隷である。なぜなら昨日一個の意志者であつた者が、今日は無意志者である。昨日、自發的であつた者が、今日はわが身知らずになる。

どうしたらそれを變へ得るか？　唯だなん等の義務をも認めないことによつて、即ち自分自身を束縛せず自分自身を束縛させないことによつて。若し自分がなんの義務をも持たなければ、その時自分は又なんの法則をも知らないのである。

『けれどかれ等が私を束縛するであらう！』自分の意志を何人も束縛することは出來ない、そして自分のわがままは依然として自由である。

『でも、若し各人が自分の欲するがままに振舞ふことが出來れば、一切が顛覆されなければならなくなる！』なる程、だが凡ての者が一切をなし得ると誰れが云つてゐるのですか？　全てに對して我慢する必要のない諸君は、全體なんの爲めに存在してゐるのか？　諸君自身を防禦し給へ、さうすれば何人も諸君に對してどうすることも出來ないだらう！　諸君の意志を破らうとする者は諸君を亡ぼさうとする者だ、そして諸君の敵である。その時諸君は彼を敵として遇すればいい。若

し諸君の背後に諸君を保護する數百萬人が存在するなら、その時諸君は立派な權力者であり、從つて容易に勝利を得るであらう。しかしたとへ一個の力としても諸君は諸君の敵を威嚇することが出來る、しかしそれだからと云つて彼が一個の愚人でない限り諸君は彼に對して神聖な權威者ではない。彼は例令諸君の强力を思惟しなければならないとしても、諸君を尊敬するの義務はない。

我々には『至上權力』が分配される色々な方法に從つて國家を區別する習慣が存してゐる。若しある個人がそれを有する場合には、それは君主政體である、若し多數がそれを有する場合なればそれは民主政體(等)である。その時至上權力だ！　何人に對する權力か？　個人と彼の『自己意志』に對して、國家が『暴虐』を振ふ、個人はそれをしてはならない。國家の態度は暴虐である、そして國家はこの暴虐を『法律』と稱してゐる。そして個人のそれを『犯罪』と稱してゐる。いかにも犯罪(Verbrechen)とさう個人の亂暴が呼ばれてゐる。そして個人は國家が自己以上ではなく、自己が國家以上であると考へる時唯だその亂暴によつてのみ國家の亂暴に打勝つのである。

さて、若し自分がへマなことをやらうと思ふなら、善意を抱く一個人として、自分の自己發展自己活動、自己創造を妨害する法律を作らないやうな警告を諸君に與へるかも知れない。だが自分はこのやうな忠告はしない。なぜなら、若し諸君がその忠告に從ふことがあるにしろ、諸君は賢

明でないかも知れない、そして自分は自分の利益全體もやはり誤魔化されるやうなことになるであらう。僕は諸君に全然なんにも要求しない。なぜなら、たとへ自分がどんなことを要求してみたところで、諸君は依然として専制的な律法者であるであらう、そしてまたさうなければならない、なぜなら大鴉は歌ひたいにも歌ふことは出來ず、盗賊はドロボーをしないでは生活が出來ないから。自分は寧ろ、エゴイストたらうとする人々に、かれ等が更に主我的だと考へてゐることをしてもらひたいと思ふ、――即ち諸君によつてそれ等の人々に與へられた法律を許し、與へられたるものを尊敬するか、若しくは我儘（Widerspenstigkeit）さうだ、完全な非服從を實行することをだ。御心よしの人達は法令をば唯だ民衆の感情に正しく適當なものとして受け入れられてゐる物のみを命ずべきものであると考へてゐる。けれど國民の中に又國民によつて受け入れられることなぞは全體自分とはなんの關係があるのだ？　國民は恐らくその冒瀆者に反對するであらう。それ故冒瀆に對する法律が出來る。自分はその爲めに冒瀆してはならないのか？　この法律は自分にとつて『命令』以上のものにならなければならないのか？　と自分はその質問を提出する。

凡ての權利と凡てのオーソリテイが人民の集合(der Gesamtheit des Volkes)に屬すると云ふ原則

からのみ政府の全ての形式が起つて來る。なぜなら政府の如何なるものも集合國體に對するこの訴へを缺きはしない、そして專制君主が、大統領若しくはその他の貴族等と同樣『國家の名儀に於て』行動し、支配する。かれ等は『國家の權力』を掌握してゐる、そして、人民が（若しそれが可能であるとして）集合體（個人全體）としてこの國家權力を振ふか、若しくはそれが單にこの集合體の代表者であるか（貴族政治の場合には多數であり、君主政體の場合には一人であらう）は全然無關係である。いつでも集合體が個人の上に位してゐる、そして合法と呼ばれてゐる力を握つてゐる。即ちそれが法律である。

國家の神聖に反抗する個人は不敬の器物となるばかりである、彼が國家と云ふ尊敬の對象を認める價値ありと思惟しなくなるや、否や、その器物の中には『倨傲や、惡意や、嘲笑、讒誹、輕浮（等）に對するマニヤ』が殘される。國家の從僕や臣民の精神的僞傲は非精神的『贅澤』（übermut）の上に立派な刑罰を受ける。

政府が國家に反する心の凡ゆる發揚を所罰すべきものとして指定する時、溫和なる自由黨員が來て、戲談や、諷刺や、頓智や、諧謔（等）は多少自由に振舞ふ餘地を與へられなければならない、そして天才は自由を享樂しなければならないと考へる。だがそれにしても自由であるべき者

は實際各個人ではなく、天才だと云ふのである。玆で國家は、若しくは政府は、完全な權利を持つて、自分の味方でない者は自分の敵であると云ふ。たとへ戲談でも機智（等）でも、――要するに國家の事件を喜劇にしてしまふものは、――昔から國家を顚覆した。かれ等は『無邪氣』ではない。そして、更に、如何なる境界線が罪惡になる頓智（等）と無邪氣なそれとの間に引かれるだらう？　この質問に對して穩和派は非常に困惑する、そして萬事は國家（政府）が願はくはしかく神經過敏（empfindlich）に、しかく不安（kitjlich）になつて、直に『無害な』物に惡意を嗅ぎつけたり、一體に『もう少し寛容』になつて欲しいと云ふ祈禱にまでそれ自からを畏縮させる。誇張された神經過敏はたしかに一種の薄弱である、それを避けることは恐らく賞賛に價する德であらう。しかし、戰時に於て、人は容赦され得ない、そして平和な狀態の下で許容されるものも宣戰が布告されると忽ち禁ぜられる。善意ある自由黨員はこれをハッキリ感じてゐるが故に、かれ等は『人民の献身』を考慮して、確かに恐るべき危險がないと云ふことを急いで宣言しようとする。けれど政府はもつと悧巧である、そしてその種のなに物をも信じようとはしないであらう。それは人民が如何に美言をもつて人を瞞着するかをあまりによく知つてゐる、そしてこの空虛な御馳走をもつて自から滿足せしめられるやうなことはしないであらう。

しかしかれ等はかれ等の運動場を持つことは許される、なぜなら、諸君の知る如くかれ等は子供だからである、そして老人のやうには落ち着いてゐることは出來ない。子供は子供である。單にこの運動場の爲めにのみ、唯だ數時間を愉快に走りまわる爲めにのみ、かれ等は取り引きをする。かれ等は唯だ國家が氣むづかしい親爺のやうにあまり意地惡くしないやうにと賴むばかりだ。國家は中世紀の教會がかれ等に許したやうに驢馬の行列と馬鹿の遊戯とを許可するであらう。だが國家が危險なしにこの遊戯を許すことの出來る時代は過ぎた。子供等は今では一度野外に(ins Freie)出て、一時間でも訓練の鞭なしに生活すれば最早再び小部屋に(in die Klause)行くことを欲しなくなる。なぜなら野外は今では最早、小部屋の補充ではなく、また氣補養でもなく、その反對である、だから aut-aut(あれかこれか)である。要するに國家は最早何物に對しても、若しくは全ての物をば我慢してはならない、そして滅びてはならない。それは徹頭徹尾敏感であるか、若しくは死人の如く無感覺でなければならない。寛容は打ち切りにされた。若し國家が指一本でも與へれば、かれ等は直に手全體を取る。其處には最早『たわむれ』と凡ての戲談とは存在しない、滑稽、機智、諧謔(等)の如きものは苛酷な眞面目になる。

言論の自由に對する自由黨員の喧囂はかれ等自身の原則、かれ等の適當な意志に逆戻りする。

かれ等は自分の意志しないものを意志する。即ちかれ等は欲し、かれ等が好むやうなふりをする。故に一度所謂言論の自由が現はれる時にかれ等も亦容易に敗北する。その時かれ等は檢閲官を欲するであらう。極めて自然のことである。國家はかれ等にとつてすら神聖である。等しく道徳その他のものも、かれ等は唯だ國家に對して馴けの惡い子供のやうに振舞ふばかりである、また狡猾な兒童がかれ等の兩親の弱點を利用せんとするが如くに振舞ふのみである、國家親爺は彼の氣に食はない多くの事を云ふことをかれ等に許すかも知れない、けれど親爺は、シカメ面をしてかれ等の無遠慮な饒舌を抹殺するの權利を有してゐる。若しかれ等が彼をかれ等の父として認めるならば、かれ等は彼の面前に於ては、すべての子供のやうに言語の檢閲を忍ばなければならない。

若し諸君が諸君自身を他の者から正しくせられることを許してゐるなら、諸君はまた彼によつて不正にさせられることをも許さなければならない。若し義とせられる事と報賞とが彼から諸君に來るものであるとすれば、同時に又彼の起訴と所罰とを豫期しなければならない。正に並んで不正が歩るき、合法と並んで犯罪が歩るく。諸君はなにか？ 諸君は――犯罪者（Verbrecher）であ

る。

『犯罪者はその最上の度に於て國家自身の犯罪である！』とベチィナが云つてゐる。（Bettina : Dies Buch gehört dem König "P. 376）人はこの心持を看過するかも知れない、そしてベティナ彼女自身すらそれを精確に理解してはゐない。なぜなら、國家の下にあつては、この不羈な自己——自分自身にまで屬する自己——は自分の成就と實現に到達することは出來ない。すべての自我は生れながら、初發からして人民や、國家に對しては犯罪者である。故に國家は實際すべてを監視してゐるのである。國家が各人中に一個のエゴイストを見てゐる。そしてエゴイストを恐れてゐる。國家は各人に就てその最惡を豫想する、そして『なん等の害が國家に對して起らない』（ne quidinrespublica detrimenti capiat）やうに注意し、警察する。不羈な自我は——そして吾人は性來これである、そして我々の秘かな内部に於て常にさうである——國家中に在つては絶え間なき犯罪者である。自からの大膽と、彼の意志と、彼の無分別と無謀とに指導される人間は國家や、人民のスパイによつて圍繞される。自分は人民によつてと云ふ！（善良な民衆諸君、諸君が民衆中に有してゐるものを驚くべきものと思ひ給へ）——民衆は徹頭徹尾警察的感情に充ちてゐる。自分の自我を拒否し、『自己放棄』を實行する者のみ民衆にまで受け入れられる。

上に引用した書物の中でベティナは全然性善良で國家を唯だ病人扱ひにしてその快復を希望してゐる、そして彼女は民主黨(demagogue)によつてその快復を計らうとしてゐる。けれど國家は病氣ではない。國家は個人、『全體』の爲めになにものかを獲得しようと欲する民主黨をそれから出す時に、寧ろ元氣が横溢してゐる。國家はその信者によつて最上の民主黨を具備される。(人民の首領)。ベティナに從へば、國家は『人間の自由の芽を發展させなければならない。然らざればそれは大鴉の母(殘酷な母の意——譯者)である。そして詞のことばかり氣にしてゐる!』國家はそれ以外のことをすることは出來ない、なぜなら『人類』の世話を燒くことによつて(加之、國家は先づ『慈悲ある』、若しくは『自由な』國家でなければなるまい)、個人はその餌にされる。市長は一方に於て如何に正しく話してゐるか。『なに? 國家は單に癒らない病人の附添人たること以外になんの義務をも持つてゐないと云ふか?——それは當つてはゐない。昔から健康な國家は病的な事柄からそれ自からを救つてゐた、そして自からそれと混じらなかつた。國家はその樹液をさう倹約する必要はない。他の者が花咲く爲めには、躊躇せずに泥棒的枝葉を切り去れよ。——國家の道徳や、その政治や宗教の苛酷なことに對して戰慄するな、國家をその方へ指導せよ。感情が缺乏してゐない點で國家を非難せよ。その同情はこれに對して反抗するけれど、その經驗はこの苛酷

に於てのみ安全を發見する！　其處には劇藥のみが癒やすことの出來る疾患がある。かくの如き疾患を認めて猶且つ臆病にも姑息な手段を取る醫者は決してその疾患を癒やすことは出來ないであらう。それればかりでなく、遲かれ早かれその患者をしてその病氣に屈服せしめるであらう！』

『若し諸君が劇藥療法として死を適用するならば、如何にしてその救濟が行はれるだらう？』と云ふフラウラット(Frau Rat)の疑問は當つてはゐない。なぜと云ふと、國家は死をそれ自からに對して適用はしない、だが、それに逆らふ人民に對して適用する。國家はその機嫌に逆らふ眼をくりぬく。

『病的な國家を救濟する唯一の道はその中に人間を繁殖せしめるにある』若しこの場合、ベティナのやうに、人間を『人間』と云ふ概念として理解するならば、彼女は正しい。『病身の』國家は『人間』の繁榮によつて快復するであらう、なぜなら、個人が『人間』によつて愚化されればされる程、それだけ國家の爲めになるのである。けれど若し何人かがそれを各個人、『すべて』としてそれを解するなら(そしてその女著者はまた半ばさう云ふやうにも解してゐる、なぜなら『人間』に就て彼女はなほ五里霧中に徘徊してゐるのである)、その時それは稍や次の如き意にとられるでもあらう。――盜賊の病的團體を救濟する唯一の道はその中に忠義な市民を繁榮せしめるにある！

なぜか、それによつて盗賊の團體は單に盗賊の團體として滅亡に赴くであらう。そしてそれはこれを認めるが故に、何人によらず『堅固な人間』にならうとする傾向ある人々を銃殺せんとする。

この書物の中でベティナは愛國者である、若しくは、更にそれ以上の博愛家である、人類の幸福の爲めに働らく人である。彼女はその書物の幽靈的標題と全然同一な態度で現制度に不滿を抱いてゐる、そして善良なる舊信仰とそれに伴なふものを復歸せんと欲する人々と同列にゐる。それ等の人々が國家を惡意ある『人民の誘拐者』の入口に置くに引き換へて彼女は唯だ政治家や、支配者や外交官が國家を腐敗させたと考へてゐる。

普通犯罪者と云はれる人は彼自身の物を求める代はりに人民の物を慾求したと云ふ致命的誤謬を犯した人間以外の何者であるか? 彼は輕蔑に價する外的な物品を求めた、神のものを追求する信者等がすることをしたのだ。犯罪者を訓戒する教戒師はなにをするか? 彼は犯罪者の前に國家によつて聖別された物、その財產(その中には勿論、國家に從屬する人々の生命すら含まれてゐなければならない)を彼の行爲によつて汚辱されたと云ふ大きな惡事を見せつける。こんなことをやる代りに、彼は寧ろ犯罪者が外的な物を輕蔑せず、それを盗むの價値ありと考へて自からを愚にしたと云ふ事實を彼に示してやればいいのだ。若し彼が牧師でなければそれが出來るの

だ。所謂犯罪者をエゴイストと見做して話して見給へ、さうすれば彼は諸君の法律や物品に對して亂暴を働らいたと云ふことではなく、諸君の法律を逃れようと考へ、諸君の物品を慾求する價値ありと考へたことに對して恥ぢるであらう。彼は彼が諸君と諸君の物と全然輕蔑しない、あまりにケチなエゴイストであつたことを恥ぢるであらう。けれど諸君は彼と主我的に話すことは出來ない、なぜなら諸君は犯罪者のやうに偉大ではないから――諸君はなんの犯罪をも犯さない！諸君は彼自らである自我(ein eigenes Ich)は犯罪者たらざるを得ず、犯罪が彼の生命であることを知らないのである。そしてしかも諸君は、諸君が『我々は悉く哀れなる罪人』であることを信ずるが故に、それを知らなければならない。けれど諸君は竊かに罪を超越しようと考へてゐる、諸君は――惡魔を恐怖してゐるが故に――罪惡が人間の價値であることを理解しないのである。おお、若し諸君が罪を犯しさへしたなら！　けれど今、諸君は『正しく』(Gerechte)ある。さて、――そこで諸君の主人の爲めにすべての物を奇麗に正しく置く！　(Macht Alles huebsch gerecht)

基督教的良心、若しくは基督教者が刑罰の法典を編む時に、單に無情（Herjlosigkeit）以外に其處にどんな犯罪の概念があるだらう？　心情關係(herjlichen Verhältnisses)を判き、傷けること、神聖な物に對する無情な態度が犯罪である。その關係が心を動かすものと思はれれば思はれる程、

それを愚弄することが愈々誹謗に價する。そしてそれだけ刑罰が重くなる　である。君主の臣下たる者は何人も彼を愛さなければならない。この愛を拒む者は死に價する重罪犯である。姦淫は無情な行爲であるが故に刑罰に價する。彼は心情なく、熱誠なく、結婚の神聖に對してなん等敬虔的感情を有してゐない。心情若しくは靈魂が律法を命ずる間は、心情に充ち、靈魂に充ちた人のみが律法の保護を享樂する。靈魂の人が律法を造ると云ふことは單に道德人がそれを適宜に造ると云ふことである。これ等の人々の『道德感情』に相反するもの、これをかれ等が刑罰に處するのである。だから例へば不忠、脫黨、誓約の破棄、——要するに、凡ゆる根本的破壞、尊敬すべき羈絆の破棄、——がどうしてかれ等の眼に無賴で犯罪的なものに見えないでゐよう？　靈魂のこれ等の命令を破る人はすべての道德人と、靈魂人とを敵として持つことになる。唯だクランマッヘル(Krammacher)と彼の伴侶のみが一致して心情の刑法を設立すべき權利ある人々であることは、ある法案が充分に證據立ててゐる。基督敎的國家の合宜的立法は全然僧侶の手中に置かれなければならない。そしてそれがいつでも單に半僧侶である代理僧(Pfaffen-dienern)によつてのみ仕事されてゐる間は純粹でもなく、聯絡もとれないであらう。その時のみ、凡ゆる靈魂の缺乏、凡ゆる無情が許さるべからざる罪惡として例證せられるであらう、その時のみ、凡ゆる靈魂の動

掄が誹謗されるであらう、そして批判の懷疑の凡ゆる反抗が呪咀されるであらう。その時にのみ自分人は、基督教的良心の前に、先づ宣告を與へられる犯罪人となるであらう。

佛蘭西革命 人々は屢々その『權利』として人民の『正義の復讐』に就て語つた。茲に於て復讐と權利とが一致する。これが自我に對する自我の態度であるか？ 人民は反對黨が自分に對して『罪惡』を犯したと叫んでゐる。他人が自分の適當と思ふやうに行爲しなければならないものと思ひ込まない限り、人が自分に對して罪惡を犯すと云ふことを自分で定めてかかることが出來るだらうか？ そして自分は甲の行爲を正義、善(等)と呼び、その反對な行爲を犯罪と呼ぶ。かくして自分は他人が自分と同一な目的を目差さなければならないと考へる、即ち、自分は他人をかれ等自からの法則を保ち、それに從つて生きる獨一存在(Einzige)として取り扱はず、ある『合理的』法則に從ふべき存在として取扱つてゐることになる。自分は『人間』とはどんな者か、『眞に人間らしい』道とは如何に行爲することであるかなどと云ふことを定める、そして萬人に對してこの法則が規範になり、理想になることを要求する。然らざれば彼は自からを『罪人又犯人』として示すことになる。そして『罪ある者』の上には『法律の刑罰』が落ちる！

人は茲でも亦如何に『人間』が正義の觀念と同時に犯罪や罪惡の觀念の足跡をすら印するもので

あるかを見る。自分でその人に『人間』を認めない者は『罪人であり、犯人』である。
神聖な物に對してのみ其處に犯罪者が存在する。諸君は私に對して決して犯罪者たり得ない、單に反對者たり得る。しかし神聖な物を犯す人間を憎まないと云ふことが既に一個の罪惡である、たとへば聖ジユスト(St. Just)がダントン(Danton)に對して『君は祖國の敵を憎まなかつたことに對して責任はないか、君は犯罪者ではないか?』と叫んだやうに。
若しも、佛蘭西革命に於けるが如く、『人間』が『善良な市民』として思考されるならば、その時はこの『人間』の概念から我々はよく知られてゐる『政治的犯罪や、罪過』を持つことになる。
茲に於て個人は、各個人は個人は屑同様に見做されるにひきかへて、一般人、『人間』が敬められる。さて、この幽靈が如何に命名されるかによつて、――基督者、猶太人、回教徒、善良な市民、忠臣、自由民、愛國者(等)――兎に角、それ等に相反する觀念を抱きたがる人々や、徹頭徹尾かれ等自からを貫徹させようとする人々は勝利を占めてゐる『人間』の前に倒れる。
そして法律や、至尊人民や神(等)の名によつて屠殺がなんと云ふ熱心を以つて行はれることよ!
さて、若しも被迫害者が狡猾にもその苛酷な僧侶的判官から自からを隱し、自からを保護する

ならば、人々はかれ等を『僞善者』として烙印する、例へば聖ジユストがその演說中にダントンを非難するが如く。人は馬鹿にならなければならない、そして自からをかれ等のモオロク神(Moloch)に引き渡さなければならない。

凡ゆる罪惡は固定觀念から湧き出して來る。結婚の神聖は固定觀念である。神聖なるが故に不貞は罪惡だと云ふ結果が生じる、だからある結婚法はその上に多少の刑罰を科するのである。けれど『神聖としての自由』を宣言する人々によつてこの刑罰は自由に對する罪惡として見做れなければならない、そしてこの意味に於てのみ輿論は實際結婚法に烙印を押したのである。

社會は實際各人をしてその權利をふるはしめるのであらう、しかしそれは社會によつて聖別された社會權利のことであつて實際は彼の權利ではない。けれど自分は自分自身からの十全な力からその權利を自分自身に與へ若しくは取る、そして自分以外の凡ゆる優れたる權力に對して自分は最も強情な犯罪者である。自己の權利の所有人であり、創造者である自分は自分――以外になん等の權利の源泉を認めない、神も國家も自然も又は『人間の永遠の權利』を有する人間彼自身をも神の權利も人類の權利をも。

『それ自身でありそれ自身の爲めの』權利。(Recht „an und für sich“)それ故自分には關係がな

い！『絶對の權利』、それ故、自分からは離れてゐる！　それ自身でそれ自身の爲めに存在してゐる物！　一個の絶對！　永遠の眞理の如き永遠の權利！

自由人の考へ方に從へば、權利は自分にとつて義務的でなければならない、なぜならそれが人間の理性（die menschliche Vernunft）によつて建設されたからである、そしてそれに對して自分の道理が『無理』になるのである。昔は神聖な道理の名を楯にして人々は弱い人間の道理を罵詈した。今では強い人間の道理を口實として自我的道理を攻撃して、これが『無理』として排斥されてゐる。そしてしかもこの『無理』そのものより眞實なにものもありはしないのである。神聖な道理でも又人間の道理でもない、唯だ與へられた時に存在する君の道理と僕の道理とが眞實のものだ、なぜなら君と僕とが眞實だから。

權利の思想は元來自分の思想である。若しくは、それが自分にその起原を有してゐる。けれどそれが自分から湧き出した時に、その『言葉』が出た時に、これが『肉になり』、それが固定觀念になつた。さて自分は最早その思想から脫け出すことが出來ない。自分がどんなにふり向いても、それが自分の前に立つてゐる。かくして人々はかれ等自身が創造した思想『權利』の主人に再びなり得なかつた。かれ等の被造物がかれ等と一緖に駈け出してゐるのだ。これが自分から解脫し解除

された絕對の權利である。我々は、それを絕對として尊敬して、再びそれを呑み込むことが出來ない、そしてこれが我々から創造力を奪ふ。被造物が創造者以上になる、それが『それ自からでそれ自からの爲め』になる。

諸君が一度諸君の周圍に權利をして跳梁せしむることを止め、諸君が一度その本源に、諸君の中にそれを引き戻すなら、それが諸君の權利になる、そしてそれこそ諸君にふさわしい權利である。

權利はそれ自からの中に、卽ち權利の標準から攻擊を受けなければならなかつた。宣戰が自由主義の方から『特權』(Vorrecht)に對して布告された。

特權を與へられてゐるのと平等の權利を賦與されたいのと——この二ツの概念の上に頑迷な戰が行はれる。排除されても又は許容されても——結局同一なのではあるまいか。けれど何處にそんな權力があるだらうか——たとへそれが神や、法律のやうな想像的なものであるにしろ、或は僕や君のやうな實際的のものであるにしろ——その前にすべてが『平等の利權を賦與され』るやうな、或は又依估最負のないやうな權力と云ふものが。何人も若し彼が神樣を崇敬するなら神にと

つてそれは平等に愛せらるべきである、若し又彼が法律を固守する人であるなら等しく法律にとつて快よき人である。神や法律を愛する者が佝僂であらうが跛者であらうが、貧乏であらうが、金持だらうが(等)、それは神や法律にとつては全然關係のないことである。恰かも諸君が溺れようとする際に、諸君を救助する者があれば、諸君はその黑人であると最も優れたコウカサス人であるとは問はないであらう、――さうだ、この場合諸君は犬と人間とを同等に見做すであらう。けれど、またこれに反して各人はある人間に對して好ましき人ともなり、無視さるべき人間ともなるのである。神は彼の怒りをもつて惡人を罰する、法律は無法者を懲戒する、諸君は甲の訪問を刹那に許し、乙の訪問を刹那に拒絶するのである。

『權利の平等』は幻影である、なぜなら權利は許可以上のものでも以下のものでもないから、卽ち、恩惠の一種(eine Gnadensache)でそれは又人が各人の功蹟によつて得られるものと云つてもいい。なぜなら功蹟と恩惠とは矛盾しない、恩惠すら『價打される』ことを欲してゐる、そしてわれわれの恩惠的微笑は我々から如何にしてそれを强取するかを知つてゐる人にのみ落ちる、

かくして人々は『國家の凡ゆる市民が平等の權利を以つて並び立つこと』を夢みてゐる。國家の市民として、かれ等は確かに國家に對しては悉く平等である。けれど國家はかれ等を分つであ

らう、そして、たとへ他の理由からでないとしても、その特別な目的に從つてかれ等を前進せしか或は退却せしめるであらう。そして更に國家はかれ等を善と惡との市民として區別しなければならない。

ブルウノォバウエルは猶太人の問題を『特權』がジャスティフハイされないと云ふ立場から見限ぎつてゐる。なぜなら猶太人も基督教徒も各自が他に對して都合よき點を有してゐる、そしてこの有利な點を持つことで排他的である、故に批評家の眼にはかれ等が虛無にまで粉粹されるのである。かれ等にとつて國家は同一の非難の下に横はつてゐる、なぜなら國家がかれ等の有利を保證し、それに『特權』又は先主權の烙印を押してゐる、しかしそれによつて『自由國家』にならんとすることを妨げてゐる。

けれど各人は相互になん等か優越性を有してゐる、——卽ち彼自身若しくは彼の個性である。この點で各人は永久に排他的である。

そして又各人は第三者の前に特異性を出來るだけ價打付けようとする、そして（若し彼が少しでも彼を獲得しようと欲するなら）それを彼の前に牽引的に見せかけようと試みる。

さて、第三者は相互の差異に對して無感覺たるべきであるか？ 人々は自由國家若しくは人道

を要求するのか？　その時これ等は孰れも絶對的な態度を取つてはならないのであらう、そして如何なる者に對してもインテレツセを感ずることが出來ないのであらう。神（彼自からの人民と惡人とを區別する）も國家（それは善良な市民と惡市民とを區別することを知つてゐる）もしかく沒交渉とは考へられてはゐなかつた。

しかしかれ等は最早『特權』を與へないその第三者を探し求めてゐるのである。その時それは恐らく自由國家、若しくは人道、或はそれ以外の名稱によつて呼ばれるのでもあらう。

基督教徒も猶太人もかれ等が特權を肯定するが故にブルノオバウエルによつて低級であると見做れたから、かれ等は自己棄絶若しくは非利己によつてかれ等の狹隘な立場からかれ等自身を解放しなければならないと云ふことになる。若しかれ等がかれ等の『エゴイズム』を投げ棄てるなら、相互の不正が止むであらう、それと同時に基督教徒と猶太人の一般の宗教性もなくなるであらう。唯だかれ等の孰れもが最早特異なにものにもならうと欲しないことが必要になるであらう。

しかし、たとへかれ等がこの排他性を棄てたとしても、それと同時にかれ等の鬪爭が行はれた根據は實際に於て未だ放棄されはしないであらう。必要の場合に於て、かれ等は實際かれ等の結合出來る第三者、即ち『一般の宗教』若しくは『人道の宗教』と云ふやうなものを發見するであら

う。要するに、一種の平等化で、それは全ての猶太人が基督教徒になる結果以上を必要とはしない、その場合には等しく甲の乙に對する『特權』が止むであらうから。張り合(Spannung)は實際失なはれるであらう、けれど兩者の本質はそれによつて成り立つてゐるのではなかつた、唯だそれはかれ等の近隣のみであつた。相互に相異してゐるものとして、かれ等は必然に抵抗しなければならない、そして依然として不同が常に存在する。まことに諸君が諸君自身を僕に對して緊張せしめ、諸君の相異と特異性とを肯定することは諸君の失錯ではない。諸君は諸君自身を讓歩する必要も放棄する必要もない。

人々は反對の意義をあまりに形式的にそして薄弱に思惟してゐる、故にかれ等はかれ等を『結合する』第三者を受け入れる爲めにそれを『溶解』せんとのみ欲してゐる。その反對は寧ろ鋭どくされなければならないのである。猶太人及び基督教徒として諸君はあまりに輕少に反對してゐる、そして恰かも皇帝の髯若しくは提琴の弓の先に就て爭ふ如く、宗教に就てのみ爭つてゐる。實際宗教上では敵であるが、それ以外で諸君は依然としてよき友達であり、また例令へば人間として平等である。それにも拘はらず、それ以外に於ても亦各自が異つてゐる。そして諸君が最早單に諸君の相互を誤魔化さない時こそ諸君がまつたくそれを認めることになるであらう、そして

各人は頭の先から爪先まで無二(einzig)として彼自身を肯定するのである。その時以前の反對は確かに溶解されるであらう、しかしそれはより强き者がそれ自からの中にそれを取りあげたからばかりである。

我々の薄弱なことは我々が他人に向つて反對してゐると云ふことではなく、我々が完全にさうでないことの點から成り立つてゐるのである。即ち我々が全然かれ等から裂かれてゐず、若しくは我々が『會友』(Gemeinschaft)や、『羈絆』(Band)を求めてゐるからである、そして會友の中に我々は一個の理想を有してゐる。萬人の爲めに一ッの信仰、一ッの神、一つの觀念、一つの帽子！若しすべての人々が一つの帽子の下に集められたなら、確かに何人も最早他人の前に彼の帽子を脫ぐ必要はなくなるであらう。

無二對無二の最後の最も斷乎たる反對は根柢に於て反對と呼ばれてゐるものを超越してゐる、しかし決して『一致』や調和に沒落はしない。無二として諸君は最早他となん等共通のものを持つてゐない、そしてそれ故に又分離的で敵對的でもない。諸君は第三者の前に他人に對する權利を主張しようとはしない、そして『正義の土臺の上』にも又何等共通の立場にも立つてはゐない。その反對は完全な――分離(Geschiedenheit)若しくは獨一(Einzigkeit)中に消滅する。これは

實際新らしき共通點、若しくは新らしき均等と見做れるかも知れない、しかし玆ではその均等は正にその不同に於て成り立つてゐる、そしてそれ自から不同、不同の同等以外のなにものでもない、そしてそれは唯だ『比較』を設ける人に對してのみである。

特權に對する爭論者は自由主義の特徴を形造つてゐる、それは『特權』に反抗する、なぜならそれ自から『權利』に訴へてゐるからである。それに對して憤怒することより更に一歩を進めればそれはかくの如き行爲には出ない。なぜならすべての特權は元來權利の諸相に過ぎないから、權利が倒れるまでは倒れはしない。けれど權利はそれが權力によつて呑み込まれる時に虛無の中に倒れる、卽ちその時人は『力は權利より前に進む』のなんであるかを理解するのである。凡ゆる權利はその時それ自からを特權として說明する、そして特權自からは力として、――優越せる力(übermacht)として自からを明らかにする。

けれど優越權力に對する偉大なる鬪爭は特權に對する温和なる鬪爭――それは審判者の心に從つて『權利』と云ふ第一の判官の面前で戰はれなければならない――以外の態度を示してはならないのであるか?

さて、終りに、私は、なほ未熟な發想の形を改めなければならない、――それは自分が未だ權利　内部に根ざして、少なくともその言葉に立場を許してゐた間　み使用することを首肯してゐたも　であつた。けれど、事實、その概念と同時にその言葉も亦その意義を失ふのである。私が『自分の權利』と呼んだものは最早、少しも『權利』ではない、なぜなら權利は精靈によつて與へられるからである――それは自然の精靈であることも又は種屬や人間の精靈、神の精靈(等)であることもある。自分が資格を與へてくれる精靈ぬきで所有する物は自分が無權利で所有するものである。自分は唯だ自分の力を通してのみそれを所有する。

自分は何等の權利をも要求しない、故に又自分は何等の權利をも認めない。自分は力によつて獲得出來る物を力によつて獲得する、そして自分が力によつて獲得出來ないものは自分の權利がない物なのである、なほ又自分は自分自身に時效にかからない權利などをもつて體裁を作つたり、慰藉を與へようとは思はない。

絕對の權利と共に、權利それ自からが消え失せる。『權利の概念』の領域が同時に抹殺される。なぜならこれまでさまぐ\の概念や觀念や、主義が我々を支配したと云ふことが忘れられてはならない、そしてこれ等の支配者の間にも權利や、正義の概念が最も重大な役目の一つを務めたと

云ふことが忘れられてはならない。

資格があるとか資格がないとか——それは自分には關はりのないことである。若し自分さへ實力があれば、自分は自分に權力を與へる、そして他の權力や資格を毫も必用としない。

權利——は幽靈によつて置かれた頭腦の錯迷である。力——それこれ自分自身のものである、自分は充分力ある者で又力の所有者である。權利は自分以上の存在で絕對である、そして自分以上の者に存在する、その者の恩惠として權利が自分の方に流れて來る。權利は判官から賜はる恩惠の一種である。力と權力とは力强き偉大なる自己にのみ存在する。

II——自分の交態

社會では精々のところで人間的要求が滿足させられるとしても、自我的要求はいつでもそれを滿たすことは出來ない。

なぜなら、現在に於ては、如何なる問題でも、『社會』と名の付く問題のやうな生々したインテレッセを伴ふことは出來ないから、人は特に社會に對して彼の注意を向けなければならない。否

若し社會に對して感じられる興味がその情熱を減じ、その光彩を失ふ程、人々は社會を眺めるに當つて、その中に存在する個人の姿を見失ふことが少なくなるであらう、そして社會はそれを成立してゐる人々が舊い間は決して新らしくならないと云ふことを認めるであらう。例へば若しも猶太民族の間に新信仰を皷吹する一つの社會が勃興するならば、これ等の使徒は如何なる場合にもパリサイの徒としては止まらないであらう。

諸君が存在するが故に、諸君はその如く諸君自身を表現する、そして諸君は人々に對して、僞善者は僞善者として、基督敎徒は基督敎徒として行爲する。故に社會の性格はその成員の性格によつて決定される。かれ等はその創造者である。かくして人はたとへ社會そのものを吟味することを欲しないにしても、少なくとも『社會』と云ふ概念を認めなければならない。

人々は從來かれ等自からをその充分なる發展と結果に來らしめることはさて置き、かれ等の社會をかれ等自身の上に礎きあげることが出來なかつたのである、或は寧ろ、かれ等は單に『社會』を建設し、社會の中に生活することが出來たばかりであつた。それ等の社會はいつでも人格者、力強き人格者、所謂『道德人』(moralische Personen)であつた、卽ち、それ等は幽靈人で、その前に個人は頭腦の適宜なる錯迷、幽靈に對する恐怖を持たなければならなかつた。かくの如き幽靈

としてかれ等はそれぞれ適宜な名稱によつて呼ばれる、『人民』(Volk)とか、『小國民』(Volkchea)とか、家長政治の人民、ヘラスの國民(等)とか遂には——人々の、人間の國民(アナカルシス、クルウツ(Anacharsis Cloots)は人類の『國民』(des „ Nation " der Menscheit)に對して熱心であつた)などと云ふに至るまで。それからこの『人民』の小分けが始まる、それは西班牙の人民とか、佛蘭西の人民(等)など云ふ特別な社會を持たなければならない。更に再びその中にさまぐ\の階級と都市と、要するに凡百の團體が存在しなければならない。最後に、最も微妙な點にまで尖つて、家族の小國民と云ふことになる。由來、凡ゆる社會に於て幽靈として歩行した人間が今迄は人民であつたと云ふことの代りに、其處には又二個の極端——即ち『人間』若しくは『家族』と云ふ名稱によつてそれが呼ばれることになるかも知れない、そしてそれは兩つながら、最も『自然に生れた單位』であつた。我々は『人民』と云ふ言葉を擇する、なぜなら、その語原が希臘語のPolloi 即ち『多數』若しくは『團體』に關聯して出て來たからである、しかし更にそれ以上『國民的努力』が現在に於ては今日の秩序であるからである、そして、最も新らしい叛逆者すら未だにこの虚僞な人物を振ひ落すことが出來なかつたからである、たとへ他方に於て後世の思考が『人類』と云ふ發想に選擇を與へなければならないと雖も、なぜなら、凡ゆる方面に於て人々は『人類』に

對する熱望に驅られてゐるからである。

であるから、人民――人間若しくは家族――がこれまで、歴史を造つて來たかの如くに思はれる。なん等の自我的利害觀念がこれ等の社會に頭を擡げなかつた、唯だ〳〵一般の、國民的、俗衆的インテレッセ、階級的家族的インテレッセ、そして『一般の人間インテレッセ』そして一般の人間的インテレッセのみである。けれど歴史が物語るそれ等の人民の滅亡を全體何人が齎らしたのか? 自からの滿足を求めつつあつたエゴイストを除いて果して誰れか! 若し一度自我的インテレッセが忍びこめば、社會は『腐敗せしめ』られ、その崩壞の方に動き進んだ。例令へば羅馬が個人權力の最も發達せる組織をもつて、若しくは基督教が不斷に侵入する『合理的自己決定』、『自意識』、『精神の自治』(等)をもつて證據立ててゐるが如く。

基督教的人民は二個の社會を生み出した、その存續は人民の不易と同一の步調を保つであらう。これ等が國家と敎會と名付けられる社會である。かれ等はエゴイスの結合と呼ばれることが出來るか? 我々はかれ等の間にあつて、自我的な、個人的な、自己的インテレッセを追求するのか、若しくは一般的な(卽ち、基督教的人民の利害觀念)、若しくは國家及び敎會のインテレッセを追求するのか? 自分はかれ等の間にあつて自分自身であり得るだらうか? 自分は自己

の欲する如く思索し、行爲することが出來るか、自分は自分自身を表現することが出來るか、自分自身を生きぬき、自分自身を多忙ならしめることが出來るか？　自分は國家の尊嚴や、教會の神聖に觸れずにゐてはならないのか？

さて、自分は自己の欲するままに行爲してはいけないかも知れない。だが、自分は凡そ社會と名付けられる中にあつてなし得られる無限の自由を見出すであらうか？　確かに否！　それ故我々は滿足しなければならないのか？　少しも！　自分が跳ね返へるのが自我からであるか、若しくは人民からか、普遍からであるかは別な事である。其處では自分は平等に生れた自分の敵者の敵である、玆では保護者の下に束縛される侮蔑された敵手である。其處では自分は人間として人間に對し玆では自分の仲間に對して何事をも實行し得ない學童である、なぜなら仲間が父母の助けを借りて、前掛の下に隱れたからである、然るに自分は躾の惡い腕白として小言を食ひ、自分は『議論する』ことはならないのである。其處では自分が肉體を有する敵と戰ふ、玆では、人類や普遍や、『尊嚴』や、幽靈に對して戰ふのである。けれど自分にとつては如何なる尊嚴も、如何なる神聖も制限ではない、自分が如何に征伏すべきかを知つてゐる物は何物でも。自分の征伏し得ない物のみが依然として自分の力を制限する。そして制限された力の自分が一時的に制限された自分

である、それは自分以外の力によつて制限されたものではなく、自分自からのなほ不完全な力、自分自身の無力によつて制限されたのである。けれど『守備兵は死んだが、降伏はしない！』結局、唯だ一個の肉身を有する敵手！ (Allein, "die Garde stirbt, doch sie ergiebt sich nicht!" Vor Allem nur einen leibhastigen Gegner!)

Mit jedem Gegner wag' ich's
Den ich kann ehen und ins aug'e fassen,
Der, selbst voll Mut, auch mir den Mut entflammt u.s.w.

自分は敢へてどんな敵にも向ふ
その敵を自分は自分の眼で見、そして計ることが出來る
その敵の血氣が戦の爲めに自分の血氣に點火する

多くの特權が實際時と共に削除された、けれど單にそれは一般の幸福、國家と國家の福祉の爲めであつて、決して自分を强調する爲めではなかつた。例へば臣下たることが除かれたとする、しかしそれは單に單獨の君主、人民の君主、帝王の權力が强調されんが爲めであつた。一人の下

に於ける臣屬がいや更にそれによつて强められた。單に帝王――それは『親王』と呼ばれ、或は『律法』と呼ばれるにせよ――の爲めにのみ種々なる特權が失はれたのである。佛蘭西に於て、市民等は實際、帝王の臣下ではない、がその代り『法律』(der Charte)の臣下である。服從は依然として保留されてゐる、唯だ基督敎的國家のみが人は二人の主(莊園の君主、親王等)に仕へることが出來ないことを認めた。それ故一人が凡ゆる特權を獲得した。さて彼は再び一人を他の者の上に置くことが出來る、彼は『高き場所にゐる人々』を造ることが出來る。

だが、萬人の幸福は果して自分になんの關はりがあるのか? かくの如き萬人の幸福は自分の幸福ではない、しかし唯だ自己否定の最極端である。恐らく萬人の幸福は自分が『凹まされる』(kuschen)間に高らかに萬歲を唱へるでもあらう。國家は自分が餓死する間に輝やくでもあらう。政治的自由主義者の愚はかれ等が人民を政府に反對せしめ、人民の權利に就て語ること以外になにがあるか? 其處で丁年にならんとする(等)人民が出來る。恰かも口のない人間が mündig(自分の口ずから物を云ふ)になれるとでも云ふかのやうに! 唯だ個人のみが mündig たり得るのである。かくして言論の自由に關する問題全體はそれが『人民の權利』として宣言される時にまつたく顚倒せしめられるのである。それは唯だ個人の權利であり、若しくは更にその力である。

若し人民が言論の自由を有するなら、その時、自分は、たとへその人民の間に存在してゐても、それを持つてはゐない、人民の自由は自分の自由ではない、そして人民の自由としての言論の自由はその傍に自分に向けられる出版法を持たなければならない。

これが今日に於ける自由に對する努力に對して凡ての方面から主張されなければならない。人民の自由は自分の自由ではない！

我々をして人民の自由若しくは人民の權利——たとへば萬人が兵役に服し得ると云ふ人民の權利——と云ふが如き範疇を承認せしめよ。人はかくの如き權利を失はないであらうか？人は彼自身の權利を失ふことは出來ない、けれど自分に屬さない人民の權利を失ふことは出來る、自分は人民の自由の爲めに監禁されるかも知れない、自分は、宣告を受けて兵役に服する權利を失ふかも知れない。

自由主義は人民の自由、地方自治體の自由、『社會』の、一般の、人類の自由を創造せんとする最後の企てであるかのやうにみえる。人道の、人民の、コンミユウンの『社會』の、凡てが丁年になると云ふ夢想。

人民は個人の浪費に待つ他自由にはなり得ない。なぜならこの自由の主要なる點は個人ではな

く、人民だからである。人民が自由であればある程、個人はそれだけ束縛されるのである。雅典の人民は、將にその最も自由なる時に於て貝殼追放を創出し、無神論者を罰し、最も正直な思想家を毒殺した。

人々は何故に土牢から逃れよと云ふ忠告に反抗せしめた良心の故にソクラテスを稱贊するのか！　雅典の人民に彼を罰する權利を與へた彼は愚人である。故にそれは確かに自業自得である。何故彼はその時ダヅ／＼と雅典人と同一の立場に立つてゐたのか？　何故、彼はかれ等と絕緣しなかつたのか？　若し彼が自分のなんであるかを知つてゐたら、若しくは知ることが出來たなら彼はかくの如き判官に對して、なんの宣言をも、權利をも讓步しはしなかつたであらう。彼が逃がれ得なかつたことは將に彼の弱點で、なほ雅典人と共通な何物かを有してゐたと考へた彼の妄想であつた、若しくは彼がその人民の單なる一員であると云ふ意見の然らしめたものであつた。だが彼は寧ろこの人民それ自身が人格化したものであつた、そして唯だ彼自身の判官であり得た。彼は自から實際、彼自身の上に公けの宣告を下した、そして公會堂（プリタニウム）に出席する資格ありと自からを評價したのであるから彼以上には何人も彼の判官ではあり得なかつた。彼は徹頭徹尾それに固執すればよかつたのである、若し彼が自分自身に對して死刑の宣告を與へなかつたならば、また

雅典人の宣告をも蔑視して、それを逃れることが出來たでもあらう。しかし彼は彼自身を服從せしめた、そして人民に彼の判官を認めた。彼は人民の莊嚴の前には自からをとるに足りないものであると見た。『權利』が彼自身に對する叛逆ででもあるかのやうに權力（それにのみ彼は屈服することが出來た）に自からを服從せしめたこと――それが道德であつた。基督は彼の天上の軍勢の上に權力を振ふことを忍んだが爲めに、同一の狐疑が説話者によつてなすりつけられてゐる。ルウテルは極めて巧妙な處置をとつた、そして賢明にもウォームスへの旅行をやつた、ソクラテスにしても雅典人が彼の敵であり、彼のみが彼の判官であることを知ればよかつたのである。『法律の御代』（等）の自己欺瞞が破れて、關係は唯だ力の關係であると云ふ洞察にまで到達しなければならない。

希臘の自由が終りを告げたのは三百代言や陰謀の爲めであつた。なぜか？　それは普通の希臘人等が依然としてかれ等の思想の英雄ソクラテスすら引き出すことの出來なかつた論理的歸結に到達することが出來なかつたからである。それなら三百代言主義とはなにか？　それは既成のなに物かを廢止せずにそれを利用する一種の方法以外のなにものでもない。私は更に『自分自からの利益の爲めに』と云ふ言葉を附け加へてみよう、それは、諸君も明らかに見る如く、『利用』に

存してる。かくの如き三百代言人等は神の言葉を『扭ぢ曲げ』て『無理强ひ』する神學者連である。若し『既成の』神の言葉など云ふものがなかつたらかれ等は果してなにを扭ぢ曲げるであらうか？かくしてかの自由主義者等も唯だ『既成の秩序』を搖り動かし、扭ぢ曲げるのみである。かれ等は悉くかの律法の惡用者の如き惡改者である。ソクラテスは法律と權利とを認めた。希臘人等は常に權利と法律の威嚴を保留した。若しかれ等がこれを認めて、なほ且つかれ等の利益を、各人が彼自身のそれを、肯定しようと欲するなら、その時かれ等はそれを法律の惡用、若しくは陰謀によつて求めるよりほかはなかつた。天才的陰謀者アルキビアデス（Alcibiades）が雅典の『頽廢』期を輸入する。スパルタのリサンダア及びその他の者等が陰謀が一般的希臘になつたことを示す。希臘の諸國家が安住してゐた希臘法がこれ等の國家に存在したエゴイスト等によつて惡用され、顚覆されなければならなかつた、そしてそれ等の國家は個人が自由になる爲めに崩壞した、希臘の人民が亡びた、なぜなら個人が人民に對してよりもかれ等自身の世話をやくやうになつたからである。概して、すべての國家と、組織と、教會（等）とは個人の脫離（Austritt）によつて滅びた。なぜなら個人は凡ゆる一般性（Allgemeinheit）凡ゆる羈絆、即ち凡ゆる足械の和解すべからざる敵だからである。しかも人々は今日迄、人間が『神聖な羈絆』を要求すると想像してゐる。彼こそ凡ゆる

『羈絆』の最もヒドイ敵なのである。世界の歴史は未だ如何なる羈絆も依然として裂かれずにゐることを示してゐる、そして人間が性懲りもなく凡ゆる種類の羈絆に對して自から防禦してゐることを示してゐる。そしてしかも、盲目にされて、人々は幾度も幾度も新らしい羈絆を考へ出す、そして、例令へば或人間が所謂自由な組織の羈絆、美しい、組織的な羈絆をかれ等の上に置く時にかれ等は正しいものに到達したと考へる。裝飾ソリボン、『――――』の間の信頼の羈絆は次第に稍や薄弱になつたやうに思はれる、けれども人々は前掛の紐から精々靴下留やカラアに進歩したばかりで、それ以上には出なかつた。

凡そ神聖なものは悉くある羈絆であり、足械である。

神聖なものは悉く律法の悪用者によつて顚倒される、そして顚倒されなければならない。故に我々の現代は凡ゆる方面にかくの如き悪用者の多數を有してゐる。かれ等は律法の破壞、紊亂に對する道を準備しつつある。

三百代言語や詭辯の爲めに非難された哀れな雅典人よ！　陰謀の哀れなアルキビアデスよ！　どうしてか、それが將に諸君の最上の點であり、自由に走る諸君の第一歩であつた。諸君のエスキラスや、ヘロドタス（等）は唯だ自由な希臘人民を持ちたいと望んだばかりであつた。諸君の自

由に就てなん等かを推察するのは先づ諸君が第一である。

人民はその權威の上に超越する人々を壓迫する、あまりに力强い市民に對しては貝殼追放を用ゐる、教會の異端者や、國家の叛逆者(等)に對しては審問所をもうけて抑制する。なぜなら人民はその自己肯定をもつてのみ闘はつてゐる。それは總ての人々から『愛國的自己犧牲』を要求する。それ故、人民に對しては、彼自身に於ける各人は沒交渉であり、無である、そして人民は、個人彼のみか爲なければならないこと、――即ち、彼を物にすること――をすることが出來ないばかりでなく、許すことさへ出來ないのである。凡ての人民凡ての國家はエゴイストに對して不正である。

個人は脫離し得ないやうな制度が一つでも存在してゐる間は、自我の所有(Eigenheit)と自己附屬(Selbst-angehörigkeit)はなほ極めて遼遠である。自分が(例令へば)誓を立ててある制度や、法典や、律法に自分自身を縛り付け、若しくは自分の人民に『肉と靈とを捧げ』なければならない時、如何にして自分は自由であり得よう？ 自分の諸々の才幹が『社會の調和を亂さない』(Weitling)程度にのみ發展してゐる時に、どうして自分は自分自からたり得よう？

人民や人類の倒壞は自分を自分の勃興にまで招來するであらう。

聽け、私が今これを書いてゐる時ですら、鐘が鳴り始める、その鐘は我々の親愛な獨逸の千年祭を祝する明日の爲めに鳴つてゐるのである。鳴らせ、その鐘を鳴らせ！　おまへ達は充分莊嚴に鳴り響いてゐる、恰かもおまへ達の舌が死屍を護送する覺悟によつて動かされてゐるかのやうに。獨逸國民と獨逸の人民等はかれ等の背後に千年の歷史を有してゐる。なんと云ふ永い生活だらう！　おお、決して再び眼醒めぬように、休息せよ、――それは今迄の永い年月を汝等が束縛してゐたすべての者が自由になり得る爲めだ。――人民は死んだ。――起てよ、自分！

おお汝、私のいたく苦しめられた獨逸人民よ――汝等の苦悶はなんであつたか？　それはそれ自からの爲めに肉體を創造することの出來ない思想の苦悶であつた、鷄鳴と同時に無に歸する彷徨の幽靈の苦悶であつた、そしてしかもそれは解脫と完成の爲めに喘いでゐるのあある。私の裏にも亦汝は永く生きてゐた、汝親愛なる――思想、汝親愛なる――幽靈よ。私は殆んど既に自分が汝の解脫の言葉を發見し、彷徨ふ幽靈の爲めに肉と骨とを發見したと思つた。その時、自分は鐘の鳴るのを耳にした、その鐘はおまへを永遠な休息に導びく鐘である。その時、最後の希望が消え失せる、その時、最後の愛の調べが消え失せる、その時自分は今死んだ人々の荒寥たる家から離れて――生ける者の戶口に入る。

Denn allein der Lebende hat Recht

唯だ生ける者にのみ權利がある。

さようなら、おまへは數百萬人の夢を見る。さようなら、千年の間おまへの子供達を壓制した汝よ！

明日かれ等がおまへを墓場へ搬ぶ。やがておまへの姉妹や、人民がおまへに續くであらう。けれど、かれ等がみんな續いた時に、その時……人類が埋められる、そして自分は自分自からである、自分が哄笑する後繼者である！

Gesellschaft(社會) と云ふ言葉は Sal(會場)と云ふ言葉にその起原を有してゐる。若しある會場が多人數を包轄する場合には、その時、會場はこれ等の人々を社會の中に入れることになる。かれ等は社會の中に存在する。そして、少なくとも會場演説の傳説的形式に從つて云へば會場社會を成立してゐる。それが眞實の交態となつて現はれると、社會から獨立したものと見做れなければならない。それは所謂社會と名付けられたものの性質を變更せずに起るかも知れず、或は缺如するかも知れない。會場にゐる人々は、かれ等が沈默人であつても、若しくは空しい虚禮の挨拶

を相互に交換して單に敬遠し合つてゐてもなほ一個の社會たるを免かれない。交態は相互關係である、それは個人同志の行動であり、交通(Commercium)である。社會は單に會場に於ける共有である、博物館内に於けるさまぐ〵の立像すら社會をなしてゐる、かれ等は『群集されて』ゐる。人々は『かれ等がこの會場を共同で haben inne(占領して)ゐる』と習慣的に云ふ、しかしその場合、それは寧ろ、會場が我々を inne(占有して)ゐるのである。先づ社會と云ふ言葉の自然的意義は略々かくの如きものである。玆に於て明らかにされるのは社會が僕と君とによつて產み出されるのではなく、我々兩者から社交を造り出す第三の要素から生れて來るものであると云ふことだ、そして、その創造者となるのはこの第三の要素で、それが社會を創造するのである。

これこそ將に牢獄社會であり、若しくは牢獄仲間である(同一の牢獄を享樂する人々)。玆に於て我々は會場と稱するその單なる局部的なものよりも一層意義の深い第三の要素に突き當るのである。牢獄は最早、單なる空地を意味してはゐない、それはその住民に影響を及ぼす空地である。なぜならそれは唯だ囚人の爲めに定められた牢獄である、若し囚人がゐなければそれは單なる建物に過ぎないであらう。その中に集められてゐる者等に對してなにが普通のスタンプを押すのか? それは明かにその牢獄である、なぜなら、その牢獄を通してのみかれ等が囚人であるからで

ある。それならばその牢獄社會の生活樣式をなにが決定するのか！　牢獄だ！　かれ等の交態をなにが決定するのか？　恐らくそれも亦牢獄であらう。たしかにかれ等は唯だ囚人としてのみ交態に入り込むことが出來る、即ち、その牢獄の法則の許可する範圍に於てのみである。しかし、かれ等自からが交態を生ずること、即ち、君と僕とが交はることをその牢獄は許すことが出來ないのである。これに反して、これは絶えずかくの如き純粹な、自我的、個的交態（そして唯だかくの如くしてのみ君と僕との眞の交はりが成り立つ）に對して監視しなければならないのである。我々が共同してある仕事を成就し、機械を運轉し、一般的な事を果すこと、――牢獄は實際これを供給するであらう。しかしながら、自分が一個の囚人であることを忘れ、同樣にそれを無視する君と交際を結ぶことは牢獄に危險を齎らすことである、そして唯だにそれによつて事が起されてはならないばかりでなく、それが許されることさへならないのである。この理由によつて聖にして、德義ある佛蘭西の議會（französische Kammer）は獨房の組織を決定する、そしてその他の聖徒等が『敗德の交態』を切斷せんが爲めに同一事をなすであらう。監禁は既成の而して――神聖な條件である、それを害ふ爲めにはなん等の企ても爲されてはならないのである。それを最も僅か押すことさへ罰すべきである、凡そ神聖なる物に對して叛逆することが等しく處罰に價すると同

様――そして人はその聖なる物に蠱惑せられ、鎖付けられるのである。

會場と同樣、牢獄は一個の社會、仲間、同盟(例令へば勞働同盟)を形造る、しかし、なん等の交態、なん等の對益、なん等の結合をも形造らない。(keinen Verker, keine Gegenseitigkeit keinen Venein) 反對に、牢獄內に於ける凡ゆる結合はその中に『陰謀』の危險な種子を醱酵する、それが都合よき條件の下に發生して菓實を結ぶ恐れがある。

しかしながら、人は通常、故意に入獄するものではない、また故意にいつまでもその中にゐるものでもない、そして絶えず自由に對する自我的慾求を抱いてゐるのである。それ故、茲ではやがて、その個人的交態がこの牢獄的社會に對して敵對關係にあり、この社會、この共同牢獄の崩壞を來すものであることが明らかになる。

故に、我々をして恰かも我々が故意に喜んで住み、我々の自我的衝動によつてそれを危くせんと欲するが如き事なき、共同生活を眺めしめよ。

この種の共同生活として先づ第一に我々の頭には家族が浮んで來る。兩親、夫妻、子供、兄弟姉妹等が全家族を代表し、形成する。そして更にその範圍を延長すれば、その傍系的親屬がまた考慮の中に取り入れられる。家族は家族の律法、孝順若しくは家庭的愛がその各員によつて遵法

せられる時に眞の共棲を形造る。兩親や、兄弟や姉妹が沒交渉になつた息子は最早息子ではない。なぜなら息子たることが最早それ自からの效力を示さないからである、それは臍の緒による母子の遙か昔の關係以上に重大な意義を有してはゐない。人が嘗てこの肉體的接合に於て生きて來たと云ふことは事實として消滅せられ得ない。そしてその點で人は必然にこの母の息子であり、彼女の自餘の子供達の兄弟である。しかし、この家族の精神は唯だ存續する敬虔によつてのみ存續的關係を形造るであらう。個人はかれ等が家族の存續をかれ等の仕事とする時に於てのみ完全な意味で家族の一員たる資格を生ずるのである。唯だ保守者としてのみかれ等は、家族と稱するかれ等の根柢を疑ふことから超然たる態度を取り得るのである。家族の各員にとつて一つの事が固定せられ、そして神聖でなければならない、——即ち、家族それ自身、若しくは更に明らかに云へば敬虔それである。家族が存續すべきであると云ふことは、その各員にとつて——彼がその家族に敵對するエゴイズムから自から離れてゐる間は——攻撃すべからざる眞理である。一言で云へば。——若しこの家族が神聖ならば、その家族に屬する何人もそれから分離してはならないのである。然らざれば彼は家族に對して『犯罪者』となるのである。彼は決して家族に反對するやうなインテレッセ、(例へば、身分の賤しい者との結婚)を追求してはならないのである。

かくの如き行爲に出ずる者は『家族に不名譽を齎し』『恥辱を與へる』(等)人間なのである。

然しながら、若しこれに反して自我的な血液が充分激しく彼の脈膊に流動するならば、彼は家族に對して『犯罪者』たることを撰擇し、その法則を蹂躙するであらう。

家族の爲めと自分の爲めと、その孰れが自分の心に近く横つてゐるのか? 多くの場合に於て兩者は平和に並存する、家族の利益が同時に又自分の利益でもある。そして vice versa その時、自分は利己的に考へてゐるのか、又は共通の利益に就て考へてゐるかを決定することは困難である、そして恐らく、自分は滿足して自分の非利己的なことによつて自己に媚びる。しかしやがて撰擇の必然が自分を震憾させる日が來る、その時、自分は自分の家族の大本を侮蔑し、兩親、兄弟及びその他の親屬を怨らすべく決心する。その時どんなことが起るか? 今や、自分が心の底に於て如何なる傾向をとつてゐたかが明からにされるであらう、そして、敬虔が甞て自己にとつて果してエゴイズム以上に位してゐたかが明らかになるであらう、そして今や利己が最早非利己の外貌の背後に潜んではゐられなくなるのである。ある慾求が自分の靈魂の中に起る、そしてそれが時々刻々生長して一ツの情熱になる。結局家族の精神(敬虔)に叛逆するやうな最も些細な思想がその中に違法を含んでゐることを何人が先づ赤面して感づくのであるか? 否、何人が最初

の刹那に於て完全にその事柄を自覺するのか？ かくしてそれが偶々『ロメオとジユリエツト』中のジユリエツトに起るのである、わがままな情熱が最早遂に馴らされ得ない、そして敬虔の建築を顚覆する。まことに諸君は云ふであらう、家族がその懷から敬虔に對してよりも更にかれ等の情慾に耳傾けることを自からに許すわがまま者を投げ出すのは自己意志からであると。善良な新教徒等は舊教徒に對して遙かに成功した時に同一の辯解を用ゐた、そしてかれ等自からそれを信じた。けれど、それは自からその過失を云ひくるめる遁辭以上のなにものでもない。天主教徒は教會の共同束轉に對して尊敬を拂つてゐた、そしてかれ等の中の異端者を排斥した、それはこれ等の異端者等が教會に對してかれ等の確信を犧牲にする程に教會の羈絆に對して尊敬を持つてゐなかつたからばかりにである。故に、前者はその羈絆を堅く握んでゐた、なぜなら、その羈絆、天主教(卽ち、共通にして結合された)教會がかれ等にとつて神聖だつたからである。後者は、それに反してその羈絆を無視した。敬虔の念を缺く者も亦かくの如きものである、かれ等は突き出されない、けれどかれ等の情熱や、かれ等のわがままを家族の羈絆よりも高く價打ちしてかれ等自からを突き出すのである。

けれどまた時にジユリエツトより劣つた情熱とわがままな心にある願望が閃めく。その溫順な

娘は家庭の平和の爲めに彼女自身を犧牲とする。人は玆にも亦利己性が働らいてゐると云ふかも知れない、なぜならその判斷はその溫順な娘が彼女の願望の成就によつてよりも家族の結合によつて自からより多くの滿足を感じたにちがひないと云ふ感じから來てゐるのである。恐らくそれはさうであるかも知れない。だが若し其處にエゴイズムが敬虔の爲めに犧牲にされたと云ふ確かな證據が殘つてゐたらばどうであるか？　若し、家族の平和に反して向けられた願望が犧牲にされた後にさへ、それが少なくとも神聖な羈絆に齎らされた『犧牲』の記念として殘されたならばどうか？　そして若しその溫順な娘が彼女の自己意志を不滿足のままに殘して、自からより高き力の前に服從したと云ふことを自覺してゐたならばどうであるか？　服從させられて、犧牲にされた、なぜなら敬虔の迷信が彼女の上にその主權をふるつたからである！　其處ではエゴイズムが勝つた、玆では敬虔が勝つて、自我的な心が血を流す。其處ではエゴイズムが强かつた、此處ではそれが弱つた。けれど、我々の長い間の經驗によれば弱者は――非利己的である。かれ等の爲めにこれ等の弱き家族共の爲めに、家族が世話を燒く、なぜならかれ等は家族に從屬する、そしてかれ等自からに從屬してかれ等自身の世話を燒かないからである。例令へば彼が兩親の撰擇に任せられた結婚をしようとする時にこの弱さをへエゲルが稱賛するのである。

個人が服從、義務ある神聖な組合として、家族は餘りに司法的職能を授けられ過ぎてゐる。かくの如き『家族的法廷』は（たとへば）ヰリボールド　レキシス（Wilibald Alexis）の『カバニス』（Cabanis）中に記載されてゐる。其處では父が、『家族的會議』の名に於て不孝なる息子を軍籍に入れて、家庭から放逐する、それはこの罰則によつて汚辱された家庭を再び潔めんが爲めである。――家族的責任の最も合理的な發達が支那の法律の中に含まれてゐる、それに從へば全家族が個人の過失を贖はなければならない。

しかし、今日では家族的權力の腕は背教者の刑罰を眞面目に實行する程行き屆くことは少ない（大抵の場合に國家は勘當をすら保護する）。家族に背く犯罪者（家族犯罪人）が國家の領域に逃れる、そして自由になる、恰かも國事犯人が亞米利加に逃れれば最早その國家の刑罰が及びかねるかのやうに。自分の家族を侮蔑した悖德な息子が家族の刑罰から保護せられる、なぜなら國家と云ふこの保護君主が家族的刑罰からその『神聖』を剝奪し、そしてそれを冒瀆し、それが單に『復讐』に過ぎないことを宣言したからである。それは刑罰と云ふこの神聖な家族權利を抑制する、なぜなら、その國家の『神聖』の前に、家族の從屬的神聖が色を失ひ、このより高き神聖と衝突するや否や直にその威嚴を失ふのである。衝突しない場合に於て、國家は自分より劣つた家族の神

聖を默許する、しかしその反對の場合に於ては、國家は家族に對する犯罪をすら命令する、そしてたとへば兩親が息子を唆かして國家に叛かせんと欲するや否や彼の兩親に對する服從を拒むことを命令するのである。

さて、エゴイストが家庭の羈絆を破り、家族の慘ましくも怒らされた精神から彼をかばふ君主を國家に發見した。だが、彼は、何處に駈け出したか？ 蓦地らに新らしい社會へ、その中では彼のエゴイズムがたつた今逃れたばかりの同一の陷穽と網とによつて待たれてゐる。なぜなら、國家は同樣に一個の社會であつて、組合ではない(eine Gesellschaft, nicht ein Verein)それは擴張された家庭である(『國の父――國の母――國の子等』)

國家と呼ばれてゐるのは從屬と附著との纖緯であり叢である。それは共屬であり、共著である、その中で一緖に置かれた者共が相互にかれ等自身を合はすやうにする、若しくは要するに相互に依賴しあふ。それがこの從屬の秩序である。たとへば區々たる俗吏の上にまで權威を與ふる帝王が消滅すると想像して見給へ。それでもなほ秩序に對する意志がその心に眼醒める人々が獸性の紊亂に對して秩序を敷くであらう。若し無秩序が勝利を獲るなら、その國家は滅亡するであらう。

けれどこの愛の思想、我々自からを相互に適合させ、相互に附隨させ、相互に依屬させること

これに從へば國家は愛が實現せられたものでが事實我々を獲得することが出來るであらうか？　相互の爲めの、すべて相互の爲めに生きてゐる存在と云ふことになるであらう。我々が秩序に對する意志に随件してゐる間に自己意志は失はれないであらうか？　秩序が强權によつて保護される時、即ち强權が何人も他人『の領分を侵し』てはならないと命ずる時、群衆(die Herde)が司法的に區分され、整頓された時、人民は滿足してはゐないであらうか？　如何にも、その時凡てが『最善の秩序』に置かれる、そしてこの最善の秩序が――國家と呼ばれるのだ！

我々の社會や、國家は我々がそれ等を造らずに存在してゐる、我々がそれを結合することなくして結合されてゐる、既に豫定され、制定せられてかれ等自からの獨立せる存立(Bestand)を有し、我々エゴイストに對して到底解除出來ないまでに確立されてゐる。今日に於ける人生の爭鬪は『既成されたもの』に對して向けられてゐると云はれてゐる、しかも人々はそれが唯だ今日の組織を更に優れたる制度組織に變更することのみであるかの如く誤解するやうに習慣づけられてゐる。けれど戰爭は寧ろ組織即ち國家そのものに對して宣言せらるべきである、それはある特別な國家、ある時代の單なる國家的事情と云ふが如きものを指すのではない。それはまた人々が目的とする他の國家(『人民の國家』と云ふが如きもの)でもない、けれどそれはかれ等の組合、すべて存立す

るもののこの不斷に流動する結合の謂である——國家は自分の協力を要せずしてさへ存在する。自分が其處で生れ、其處で育てられ、其處の義務を背負せられ、『それに服從(huldigen)をしなければ』ならない。國家は自分をその『御蔭』(Huld)の中に引き入れる、そして自分はその『恩惠』によつて棲息する。かくして國家の獨立せる制定は自己の獨立の缺乏に基礎を置く。『自然發生』としてのその事情、その組織は自分の性情が自由に生長してはならず、國家に適合して切斷されなければならないことを要求する。國家が自然の生長發育をする爲めに、それは『文明』と云ふ鋏を私に適用する。それはそれに適應した教育と教養とを私に授ける、そして(たとへば法律を尊敬し、國家の財産(卽ち、私有財産)に害を加へず、神聖な地上の高位を尊敬する(等)ことを自分に教へる。要するに、それは私に——刑罰を受けてはならないこと、自分の所有を『神聖』(出來るだけすべての物が神聖だ、e・g・財産、他人の生命等)にまで『犧牲とすること』を教へる。國家が自分に與へることが出來る文明や教養が此處で成立する。國家は自分を『役に立つ道具』『社會の有益な一員』として育てあげる。

凡ての國家がこれをやらなければならない、民衆の國家でも亦絶對な立憲的な國家でも。國家が一ツの自己であると云ふ誤謬に安住してゐる間はさうやらなければならないのである、國家はそ

の時それとして『道徳的、神秘的、若しくは政治的人格者』の名稱をそれ自身に適用する。自分——實在としての自分——はこの獅子の皮の自己を忍び足であるく、Distelfresser（食薊人）から脱がれなければならない。自分は世界歴史の當初から如何に多種多様な掠奪を忍ばなければならなかつたらう！　其處では、太陽や月や、星や猫や鰐魚を自分と同等の位置にひきあげて尊敬が拂はれた。其處ではエホヴや、アラや、我々の父なる神が降臨してその自分の位を授けられた。其處では多くの家族や、種族や、人民、遂には實際人類までが出て來て自分として尊敬された。其處では教會や、國家が自分だと云ふ詭辯を以つてやつて來た、——そして自分は平氣な顏をしてそれ等のすべてを眺めた、だが若しも又其處にいつでもその仲間に結び付いた現實の自分が存在して、自分の面前でそれは私の汝ではなく、私の實在の自己であることを肯定したならなんと云ふ驚異だらう。どうだ、あの優れた人の子が同一事を實行したのである。なぜ我々人の子たる者が又それをしないでゐられよう？かくして自分は、私の自分が常に自分以上、自分以外にゐることを見てゐた、そして決して眞實の自分自身にまで來ることは出來なかつた。

自分は今迄決して自分自身を信じなかつた。自分は決して自分の現在を信じなかつた。自分は自分自身を未來に於てのみ見た。少年は彼が大人になつた時にのみ、ほんとうの自分、ほんとう

の人間（ein rechtes Ich, ein crehtel Kerl）になるだらうと信じてゐる。成人は又他界に於てのみ彼が正しいなに者かになるであらうと考へてゐる。そして、更に、直に現實に肉迫して考へると、今日では最上の人間すら依然として人が眞の自分、『自由なブルゲル』、一個の『市民』、一個の『自由な又は眞人』になる爲めには彼自身の中に國家や、彼の人民や、人類を受け入れなければならないと云ふことを相互に勸告しつゝある。かれ等も亦外的な自分の受領と、それに對する献身とに自己の眞實と現實とを見てゐる。そしてそれは如何なる自己の種類であるか？　それは一人の自分でも又汝でもない、空想された自分であり、一個の幽靈である。

中世紀に於て、教會はその中に結合されて棲息してゐる多くの國家をうまく利用することが出來たが、諸國家は宗教改革以後、特に三十年戰爭以後、數多の教會（色々な懺悔）を、一つの王冠の下に集合せしめること學んだ。だが大抵の國家は宗教的である、特に『基督教的國家』の場合に於てさうである。そして馴致しがたい『エゴイスト』を不自然な羈絆の上に押し込め、即ちかれ等を基督教化することをその仕事とする。基督教的國家の凡ての設備は、人民を基督教化する目的を有してゐる。かくして法庭は人民に正義を押し付ける目的を有し、學校はかれ等に精神的修養を押し付ける目的を有してゐる、――要するに、非基督教的に行爲する人々から基督教的に行爲

する人々から基督教的に行爲する人々を保護し、基督教的行動に支配權を與へ、それを權力あるものとする目的を有してゐる。國家はこれ等の强制的手段の中に教會をも算入した。教會が萬人から――特別な宗教を要求した、デュパン（Dupin）は最近僧侶に對して『教授と教育とは國家に從屬す』と云つた。

たしかに道德の原則に關するすべてのことは國家の事件である。だからこそ支那の國家は家族の事柄にそんなにひどく干渉するのである、其處では先づ第一に人は自分の兩親に對して善き子供でないならばなに者でもないのである。我々にとつても亦家族の利害關係は全然國家の利害關係である――唯だ我々の國家は家族に信賴して、あまり苛酷な管視をやらない。國家は結婚によつて家族を束縛する、そしてこの羈絆は國家の干渉を經ずしては破り得ないのである。

けれど、國家が私の原則に對して責任を持たせ、私からある原則を要求すると云ふことは自分をして恐らく、國家は全體『自分の頭腦の錯迷』（原則）となんの關係があるのか？と訊ねさせるであらう。それはずいぶん尤もである、なぜなら國家は――支配する原則だからである。離婚事件に於て、一般の結婚法に於て、問題は教會と國家の間の權利の比例から來ると想像されてゐる。寧ろ、その問題は、それが信仰にせよ、或は倫理的法則（道德）にせよ、神聖な物が人間を支配すべき

であるか否かと云ふにある。國家は嘗て敎會がさうであつたやうに同一な支配者として行爲してゐる。敎會は神性の上に、國家は道德の上に定住してゐる。

人々は文明の諸國家が寛容や、反對の傾向を默許すること(等)に於て卓越してゐると云ふことを物語る。たしかにある國家は最も不羈な會合をさへ滿足して傍觀する程强力である、しかしまた一方ではタバコのパイプをさへ氣にして涉獵することを犬に命じる國家もある。しかしいづれの國家にとつても個人のかれ等自からの間に於ける遊戲や、かれ等の紛々たる雜音や、かれ等の日常生活は、國家が滿足してかれ等自からに任せるべき出來事である。なぜならそれはこれとは全然沒交涉だからである。實際、多くは依然として蚊を引き出して、駱駝を呑んでゐる(小事に齷齪して大事を怠る意——譯者)、そして一方はそれよりも更に陰險である。個人は後者の場合に於て『より自由』である、なぜなら、うるさく付き纏はれないからである。けれど自我は如何なる國家に於ても自由ではない。國家の讃美された寛容は單に『無害の』『危險ならざる』ものに對する寛容である。それは唯だケチ臭い了簡が少し高められたばかりである、唯だより價打あり、より立派で傲慢な——專制主義である。ある國家は一時文字上の爭鬪 (die litterarischen Kämpfe) 以上にかなり高められてゐたやうに見えた、そしてその爭鬪もかなりな熱情をもつて行はれてゐたら

しかつた。英國は通俗的紛擾と――煙草の煙り以上に高められてゐた。けれど國家それ自からに向つて攻撃を加へる文學は禍なるかな、國家が『危くする』暴徒は禍なるかな。そのある國家では、人々が『自由科學』を夢みてゐる、英國では、かれ等が『自由民衆生活』を夢みてゐる。

國家は個人をして出來るだけ自由に遊戲せしめる、唯だかれ等は眞劍になつてはならない、國家を忘れてはならない、人は人と勝手氣儘に交際してはならない、『優れた管視と仲介』なしに交通してはならない。自分は自分の出來ることを悉く遂行してはならない、だが、唯だ國家の許す範圍内でそれをやらなければいけない。自分は自分の思想でも、又は自分の仕事でも、何事によらず、それを自分のものとしてはならない。

國家はいつでも個人を制限し、馴致し、從屬させる――即ち彼をある一般性その他に服從させる――唯一の目的を持つてゐる。國家は個人が全ての全て（Alles in Allem）でない間のみ繼續する、そして、それは極めて明らかに自己の抑制（Beschränktheit Meiner）、自分の制限、自分の奴隷である。國家は決して個人の自由活動を招來することを目的としない、しかしいつでも國家の目的に縛られたものを目的とする。國家を通して又なん等共通なにものも起らない、それは人が一片の衣をある機械の個々の部分の共同制作と呼ぶことが出來ないと同一である。それは寧ろ機

械全體を一個の單位と見なしての制作である、機械的作物 (Maschinen arbeit) である。同樣に、全ての物がまた國家機械によつて作られる。なぜならそれが個人の心の時計機械を動かす、その孰れもがかれ等自からの衝動に從ふことは出來ないのである。國家は凡ゆる自由活動をその檢閲と、その管視と、その警察によつて防げようとする、そしてその防害をその義務であるとして保持する、なぜなら、それが事實自己保存の義務だからである。國家は人間から何物かを造り出さうと欲する、故に、國家には唯だ製造された人間のみが生活する。何人によらず彼自身たらんと欲する者はこの反對者で、何者でもない。『彼はなんでもない』(Er ist nichts) と云ふことは、國家が彼を利用出來ず、彼になんの位置も、役目も、商賣(等)をも授けないと云ふことと同義である。

バウエルは "Liberale Bestrebugen" II,50. (『自由の努力』二篇、五十頁)中に、なほ『民衆から出發する政府は決して民衆と相反する立場には立たない』と云ふ夢を見てゐる。彼は實際、『政府』と云ふ言葉を彼自身に取りかへしてゐる(P.69)『共和政體に於ては、如何なる政府も成立しない、唯だ行政的オーソリテイあるのみである。純粹に民衆からのみ出發する官憲は民衆に對して獨立的權力や、獨立原則や、獨立的官吏を有してはゐない。それは單に、國家の至上權威たる

民衆の中にのみその根柢と、その權力、その原則の源泉を有してゐる。故に、政府と云ふ概念は少しも民衆の國家には當て穿まらない』しかし、それは依然として同一である。『その源泉から出發し、礎かれ、飛び出した』ものは『獨立的』ななに物にかなる。そして、子宮から分娩された子供のやうに直に反對するやうになる。若しそれが獨立もせず、反對もしないとしたら、その政府はなにものでもないであらう。

『自由國家には政府は存在せず』、等（D.94）これは確かに、民衆が至尊である時には、それ以上の權力によつて自からを指導させることを許さないと云ふ意味にちがひない。だがそれは絶對君主國と異つてゐるであらうか？　恐らく其處にはその至尊の爲めに、彼の上に立つてゐる政府があるだらうか？　否、それが君主にせよ、民衆にせよ、至尊以上には決して何等の政府も存在しない。それがそれ自からで了解される。けれど、自分の上には、如何なる『國家』の場合でも必ず政府があるであらう、絶對でも、共和でも、『自由』でもなんでも。自我はそのいづれの場合に於ても割りがわるい。

共和國は——絶對君主國以外のなにものでもない。なぜならその君主が君主でも民衆でも少しも變りはない、兩者ともいつでも "Majestät" だからである。立憲政府それ自からは何人も單な

る機械であることが出來ず、又それを欲してはならないことを證明してゐる。大臣はかれ等の主人たる君主を支配し、代議士はかれ等の主人民衆を支配してゐる。その時、玆では少なくとも黨派が既に自由である、——即ち官僚の黨派が(所謂民衆の黨派)。君主は大臣の意志に妥協しなければならない。民衆は内閣の笛に合はせて踊らなければならない。立憲政府は共和政體以上である。なぜならそれは國家の最初の崩解だからである。

バウエルは民衆が立憲國家では『人格者』であることを否定してゐる。(P.56)それなら共和政體ではその反對(Per contra)であるか? なる程、立憲的國家では民衆は——ある黨派である、そして黨派は確かに、若し少しでも『政治的』(P.76)道德人に就て語ることを決心するならば、『人格者』である。事實、道德人は、それが民衆の黨派若しくは民衆、或は『主』とさへ呼ばれても決して一個人ではなく、單なる幽靈に過ぎないのである。

更に、バウエルは進んで『守護することが政府の特徴である』と云つてゐる(P.69)。實際、人民や『人民の國家』の場合に於ては猶更のことであらう。それはあらゆる支配の特徴である。『それ自身に權力の凡ゆる完全さを結合する』、『絕對の主人』民衆國家は私をして權力ある者とすることを許さない。そしてかれ等が『民衆の自由な、合理的な法律意志を遂行する』(P.73)の故に、最早、

『民衆の官吏』『奴僕、器械』などと稱することを欲しないとはなんと云ふ妖怪だらう！（Welche Chimäre！）『唯だすべての官僚團體がそれ自からを政府の意見にまで從屬せしめることによつてのみ統一が國家に齎される』（P.74）と彼は考へてゐる。けれど彼の『民衆の國家』は又『統一』を持たなければならない。如何にして服從の缺乏が其處で許されるだらうか？ 人民の意志への服從の。

『立憲國家では最後に政府の組織全體が安住するのはその統治者と彼の專制主義の上にである。』（P.130）『民衆の國家』でもそれ以外に果してどんなことがあるだらう？ 自分はまた民衆の專制主義によつて支配されないだらうか、そして自分が君主の專制によつて從屬させられる自分自身を見るのと所謂、『輿論』と稱する民衆の專制によつて從屬せしめられる自分自身を見るのと、其處に自分にとつて何等かの差があるだらうか？ 若し從屬がバウエルが正しく論じてゐるやうに『宗教的關係』と同じであるとすれば、民衆の國家に於ても、依然として民衆は自分にとつて優越な權力であり、『至尊』である。（なぜなら神と君主とはかれ等の本性を『至尊』に有してゐる）、それに對して自分は宗教的關係に立つてゐるのである。――至尊統治者と等しく、至尊人民も亦何等の法律によつて到達されないであらう。バウエルの企圖全體は結局、主人の變化に過ぎない。

人民を自由にせんと欲する代りに、彼は唯一の實現せらるべき自由を彼自からのものとすべきことを心懸けるべきである。

立憲的國家に於ては專制主義それ自からが遂にそれ自からと爭ふやうになつた、そしてそれが二元に分割された。政府が絕對であることを欲し、民衆が絕對であることを欲する。これ等の二つの絕對が相互に戰ひ疲れるであらう。

バウエルは生得や、機會による統治者の決定に對して挑戰する。けれど『民衆』が『國家の唯一の權力』になつた時に(P.132)、我々はその時、機會の主人を有たないだらうか？　そこで抑も民衆とはなにか？　民衆はいつでも單に政府の身體であつた。それは一つの帽子(君主の帽子)の下に於ける多數であり、一つの憲法の下に於ける多數である。そしてその憲法は――君主である。君主と民衆とは兩者が崩潰しない限り、即ち一緖に倒れない限りは相互に固執するであらう。若し一つの制度の下に多數の『民衆』がゐるならば、――例へば昔のペルシャ王國や、今日に於けるが如く、――その時、これ等の『民衆』は單に『地方』として行列する。自分にとつては、民衆は如何なる場合に於てもある――偶然の權力であり、自然の力であり、自分が征伏しなければならない仇敵である。

『組織された』人民(P.132)の名稱の下に人はなにを考へるべきであるか？『最早政府を持たない』民衆は、それ自身を支配する。であるから、其處では如何なる自我も明らかには直立しない。それは貝殻追放によつて組織された人民である。自我の放逐、貝殻追放は人民を獨裁君主とする。

若し諸君が人民に就て話すならば、諸君は君主に就て話さなければならない。なぜなら、民衆は、若しそれが主格で、歴史を造るものであるとすれば、すべて行爲する物の如く、あの頭、その『至上主腦』を持たなければならない。ワイトリング(Weitling)はこれを"Tric"の中にこれを發表してゐる、そして、プルウドン(Proudhon)は"une société, pour ainsi dire acéphale, ne peut vivre" ("Création de l'Ordre, P.485)(主腦を有せざる社會は生きることを得ず)と宣言してゐる。人民の聲(Vox populi)は今では、いつでも我々の眼前に突きつけられる、そして『輿論』が我々の君主を支配すべきである。とたしかに Vox populi は同時に Vox dei (神の聲)である、けれどそれは孰れもなん等かの役に立つてゐるか、そして Vox principis(人民の法則)はやがて Vox dei ではあるまいか？

この點で、『國民』が心に浮んで來るかも知れない。獨逸の三十八ケ國に對して、それ等が一國民として行爲すべきことを要求することは、三十八匹の女皇蜂によつて率ひられた蜜蜂の三十八

群が自づから一群に結合すべきであると云ふ無茶な要求と同列に置くことが出來る。かれ等のすべては依然として蜂々である。けれど一緒に集合して、自からを一緒に結合させるのは個々の蜂としての蜂ではない、それは唯だ臣下たる蜂が支配する女皇に結び付けられてゐると云ふばかりである。蜂と人民とは意志を缺いてゐる、そしてかれ等の女皇の本能がかれ等を指導するのである。

若し人がそれ等の蜂をかれ等の蜂自態(Bienentum)にまで指導しようとするなら、——其處では少なくともかれ等はすべて相互に平等である——かれ等は獨逸人等をその獨逸自態(Deutschtum)に導かうとして嵐のやうに戰つてゐるのと同一事を爲さなければならないであらう。なぜと云へば、獨逸自態はこの點で將に蜂自態である、それはそれ自からの中に分裂と分離の必要を胚胎してゐる、しかも、最後の分離にまでは押し進まない、もし、その分離の過程を完全に押し進めてゆくならば、その最後は人間と人間の分離になると自分は思ふ。獨逸自態は實際種々なる人民と種族とに自から分れてゐる、即ち幾多の蜜房にである。しかし一人の獨逸人たることの性質を有してゐる個人はなほ孤立せる蜂の如く無力である。そしてしかも各個人のみが相互に結合することが出來るのである、そして民衆の凡ての聯盟と同盟とは依然として機械的混合である、なぜな

ら、一緒に塊まる人々、少なくとも『民衆』が一緒に塊まる者として見做れてゐる限り、それは意志を缺いてゐるからである。唯だ最後の分離と共に分離それ自からが終つて、統一に變化するのである。

さて、國民黨は蜂自態の抽象的な無生命な、統一を築きあげようとしてかれ等自からを働らかしてゐる。しかし自己所有者はかれ等自身の意志によつて意志された統一、結合の爲めに戰はうとしてゐる。これは凡ゆる反動的願望の證左である――かれ等が一般的な、抽象的な、空虛な、無生命な既念を築きあげようとするに全然反對して、自己所有者はヤクザな一般性の重荷から、頑健な溌々した特殊を救ひ出さうと渇仰するのである。反動派は人民や、國民をこの地上から撃退することを喜ぶであらう。自己所有者はかれ等の眼前に唯だかれ等自からを有してゐるのみである。現代の指圖である二つの努力――即ち地方權と、舊い種族的區分の復興（フランク、ババリヤ（等）、リユサテイヤ（等））並に國民性全體の復興は孰れもその根本義に於て一致してゐる、けれど獨逸人は、かれ等が凡ゆる蜜房と同樣かれ等の蜂自態を破壞する時に於てのみ、協和するであらう、即ち、かれ等自からを結合させるに至るであらう。言葉を換へて云へば、かれ等が獨逸人以上である時に於てのみ、その時にのみかれ等は『獨逸組合』(Deutschen Verein) を形造ること

が出來る。かれ等はかれ等の國民性を振り返へる必要はない、つまり再生する爲めに子宮に逆戻る必要はないのだ、唯だ各人をして彼自身を省みさせればよいのである。ある獨逸人が他の獨逸人の手を握つて、『彼も亦一人の獨逸人』なるが故に神聖な畏怖を以つてそれを押し付ける時に、それは如何に滑稽にもセンチメンタルなことであらう！　それでもつて、彼はなにかしら偉大だと云ふことなのか！　だが、これは人民が『同胞性』に對して熱心な間は、卽ち、かれ等が『家族的性向』を有してゐる間は確かに依然として感動的なことと考へられるであらう。『敬虔』や、『同胞性』や、『子供らしさ』の迷信から、或は又柔さしい心の敬虔的文句の並べられる如何なるものからでも、――つまり家族的精神から――獨逸人の大家族を有したいと欲する國民派はかれ等自身を解放することが出來ないのである。

　これは別として、所謂國民黨はお人よしのチユウトン狂との結合からかれ等自身を高める爲めに自からを正しく理解することが必要であらう。なぜなら、かれ等が獨逸人に要求する物質的な目的や、利害關係からの結合は自發的結合以外のなにものでもないからである。『鐵道はより深き洞察者にとつては人民の生活にまでの道であつて、かくの如き意義に於ては未だ嘗て何處にも現はれたことのなかつたものである』("Koener Dom", P.4)とインスパイアされたカアリエル(Car-

nere）が叫んでゐる。如何にも、それは未だ何處にも現はれなかつた人民の生活であらう、——なぜならそれは人民の生活ではないからである——かくしてカアリエルは彼自身をやつつけてゐるのである。(P.10)『純粹な人道又は成人は自家の天職を完成する人民によつてより以上に代表され得ない。』なぜか、これによつてのみ國民性が代表されるからである。『洗ひ落された一般性はそれ自から完全な形體よりも下等である、その形體それ自から一個の全體で、眞に一般な組織されたものの生ける一員として生活するからである。』なぜか、人民はこの『洗ひ落された一般性』である、そして『それ自から完全な形體』は唯だ一人の人のみである。

かれ等が所謂『人民、國民』と呼ぶものの無性格は又これからも明らかである、即ち、その自己を最上の權力にまで引きあげんと欲する人民はその頭に無意志の支配者を置くと云ふことからでも。國民は彼自身のみを實現する、即ち彼の個人的快樂を實現する君主に從屬するか、——その場合——國民は『絶對君主』を認めるが故に、それ自身の意志、所謂、人民の意志を認めないことになる——若しくは彼れ自身の意志になん等の功果をも與へない單に帝位にある君主に服從するか、——その場合、國民は無意志の君主を持つことになる、そしてその君主の位置は恐らく精巧な時計機械がその役目を果すであらう——孰れかである。——それ故、洞察は更に一歩を進めれ

ばいい、その時人民の自己なるものが、無性格で、『精神的』權力で、法律であることが自づから明らかになる。それ故、人民の自己は一種の——幽靈であつて、一個の自分ではない。自分は、自分が自分自身を造る點のみで自分である。即ち、それは他人に造られる自分ではなく、自分が自分自からの作物にならなければならないと云ふことである。だがこの人民の自分と云ふのはどんなものであるか？　機會がそれを人民の手中に投げ入れる、機會が人民にA若しくはBの生れながらの君主を與へる、偶然がそれに撰まれた者を與へる。彼は、自分が自分の所產であるやうなその(『至尊』人民の)所產ではない。人が諸君に君は君の自己ではない、トムヤジヤツクが君の自己だと云ふやうなことを信じさせようとして話したと假定して見給へ！　人民の場合でも、將にそれと同一である。なぜならその人民は一緒に與へられた十一の遊星がたとへ共通な中心を同轉しても一個の自己を持たないのと同樣である。

ペイリイ(Bailly)の發言は民衆が(君主の面前に於てするが如く)至尊人民の前に表現する奴隷根性を代表してゐる。『私は最早、一般の理由がそれ自からを發言した時、なん等それ以前の理由を持たない。自分の第一の法則は國民の意志であつた。それが集合したや否や、自分はその至上意志以上になにものをも知らなかつた。』と彼は云つてゐる。彼は『別段の理由』を持ちたくはなか

つたのであらう。しかもこの別段の理由のみが萬事を成就するのである。かくしてミラボォ(Mirabeau)は『地上の如何なる權力も國民の代表者に向つて、それは己の意志だ！と云ふ權利はないのである』と云ふ言葉で罵倒してゐる。

希臘人の場合には又人間を Zoou politicon(政治的動物)、卽ち國家の市民又は政治的人間にしようと云ふ願望がある。かくして、彼は永い間『天の市民』として位した。けれども希臘人は彼の國家と共に汚辱にまで沈んだ、天の市民は等しく天と共に倒れる。しかるに我々は、人民國民及び國民性と共に沒落し、單に政治的人間や政治家になることを欲してはゐないのである。佛蘭西革命以來かれ等は『人民を幸福にしよう』と努力した、そして人民を幸福に偉大(等)にすることに於て、かれ等は我々を不幸にする。人民の幸福は――僕の不幸である。

政治的自由主義者等がなんと云ふ空虚なムダ口を例々と力瘤を入れて發言してゐるかは又ナウエルク(Nauwerk)の"über die Teilnahme am Staate"を見るとよくわかる。其處では國家に對して沒交渉な、干與しない、つまり充分な意味で市民ではない人々に對して不平が述べられてゐる。そして著者は國家の事件に活躍しない、つまり政治家に非ざる人間は人に非ずと云ふやうな口扮を洩してゐる。この點で彼は正しい、なぜなら、若し國家が『ヒユウマン』なすべてのものの守護者

として位するならば、我々は國家に干與せずしては人間的な何物をも持つことは出來ない。だがこれはエゴイストに對してどんな結果を齎すか？　まるでなんにも、なぜならエゴイストは彼自身に對して、人間性の守護者である、そして、國家に對して、『僕の日光からどいてくれ』と云ふ以外になんにも云ふことがないのである。國家が彼の所有と接觸する時にのみ、エゴイストはそれに對して能動的インテレッセをとる。若しも國家の狀態が室內哲學者の上に敵意を抱かない、しても、彼はそれが彼の『最も神聖な義務』なるが故にそれに彼自身を沒頭せしめなければならないと云ふのか？　國家が彼の願望に從つてやつてゐる間は、なんの必要あつて彼は自分の研究から振り向くことがあらう？　彼自身の興味から他の狀態を持ちたいと欲するそれ等の人々をして自からを多忙ならしめよ。今でも、いつでも、『神聖な義務』は民衆をして國家に關して反省せしめないであらう、――それはかれ等が『神聖な義務』から、學問の使徒にも、藝術家(等)にもならないと同樣である。エゴイズムのみがかれ等をそれに驅ることが出來る。そして種々なる事情が遙かに惡るくなつたや否やさうなるであらう。若し諸君が民衆にかれ等のエゴイズムはかれ等が國事に對して自からを煩忙ならしめることを要求したことを示すならば、諸君はかれ等を永い間訪問してゐる必要はないであらう。若し、一方に於て、諸君がかれ等の祖國(等)に對する愛に對

して訴へるならば、諸君は永い間、この『愛の奉仕』の爲めに啞の心に說敎するであらう。たしかに、諸君の意味で、エゴイストは少しも國事に干與しないであらう。

ナウエルク(Nauwerk)は十六頁で純粹な自由主義者らしい文句を發言してゐる。『人は彼自身を人道の一員として感じ、知り又かくの如き者として行爲する時に於てのみ彼の天職を完うする。個人は若し彼が彼自身を凡ゆる人道の上に置かないならば、そしてアンテウス(Anteus)のやうに、それから彼の力を引き出さないならば、一人前の觀念を實現することが出來ないのである。』同一の場所に於てまたかう云はれてゐる、『res publica (公事)に對する人間の關係は神學的見解によつて純粹な私事にまで貶下される。故に、否定によつて除去されるのである。』恰かも政治的見解が宗敎とは異なつたやり方でもしてゐるかのやうに! 其處では宗敎が一個の『私事』である。

若し、『神聖な義務』、『人間の運命』、『充分な成熟に對する天職』、及び同一の命令の代りに、人民が國家に於ける一切をそのあるがままの狀態に於て許容する時に、かれ等の自利が犯されると云ふことが主張されたならば、その時、宣言なしに、かれ等は、或人が自分の目的を達しようと欲する決斷の場合にかれ等に話しかけられるやうに話しかけられるであらう。この代りに、神學

を嫌惡する著者は云ふ、『若し國家が彼女のものである一切に對して權利を要求するやうな時が來たなら、かくの如き時代こそ我々のものである。——その思想家は國家の理論と實際に干與することに一個の義務を見てゐる、——そしてそれは彼に托された最も神聖な義務の一つである』——そして、更に緻密な考察の下に『萬人が國家に干與する無條件の必要』を取り入れる。

その人の頭若しくは心に、又は兩方に國家が座つてゐる人、國家に憑かれてゐる人又は國家を信ずる人、は一個の政治家で、永遠に政治家として終始する人である。

『國家は人類の完全な發展に對する最も必然な手段である。』我々が人類を發展させようと欲する間、それは確かにさうであつた、けれど、若し我々が我々自身を發展させようと欲するならば、それは單に我々にとつて防害の手段たるのみである。

國家と人民とは今なほ改造せられ、改善され得るにや？ それは、貴族と僧侶と教會(等)の場合と同一である。かれ等は除去せられ、絶滅せられ、片付けられても、改善はされない。自分は一片の無意味(ナンセンス)を改善することによつて有意義になし得るだらうか、又自分は即刻それを除かなければならないだらうか？

故に爲されなければならないことは最早國家(國家の形式等)に就てではなく、自分に就てであ

る。これを以つて君主の權力、立憲政體(等)に關する凡ゆる問題はそれ等の眞の深淵とその眞の虛無に沈んでしまふ。この虛無なる自己が自分自身から自己の創造を花咲かせるであらう。

社會の章に迄又『黨派』が從屬する、その讃美が近頃謳歌された。

・國家では黨派が流行してゐる。『黨派、黨派、黨派に結び付かない者が一人としてあるだらうか！』けれど、個人は無二(einzig)であつて、黨派の一員ではない。彼は自由に結び付き、再び自由に分離する。その黨派なるものは國家に於ける國家以外の何者でもない、そして、この小さい蜜房的國家に於て『平和が又より大なる蜜房の場合に於けるが如く支配しなければならないのである。國家には桔抗が存在しなければならないと聲高く叫ぶ人々は黨派中の凡ゆる不調和を罵詈する。それはかれ等も亦一個の國家を要求してゐると云ふ證據である。凡ゆる黨派は國家に對して打ち碎かれはしない、しかし自我に對して粉碎されるのである。

吾人は現在に於て、自己の黨派に忠實なれと云ふ勸告を屢々耳にする。黨派人種は黨派に屬してゐながら獨立の運動をする人間を甚だしく輕蔑する。黨派人は水火を通して自己の黨派と運命を終始しなければならない、そして、無條件にその主なる原則を承認し、代表する。だがそれは

實際閉ぢ込められた社會に於けるが如く玆ではしかく非道くはない、なぜなら、社會はかれ等の住民等を固定せる法則や、法令(例令ば基督の命令、基督の社會、等)に結び付けるからである。しかもなほその黨派は、それが束縛する何等かの原則を造り、さま〴〵の攻撃に對してそれ等を確保しようとすると同時に結合たることを止めるのである。だがこの瞬間こそ黨派の出生そのものなのである。黨派として、それは既に生れながらの社會であり、死せる結合であり、固定された觀念である。專制主義の黨派としてそれは、その黨員等がこの原則の非難すべからざる眞理を疑ふべしと云ふことを意志することは出來ない。若しかれ等にして更にかれ等の黨派以外のなに物かでありたい(即ち、無黨派)と欲する程充分エゴイスティックである時にのみこの疑惑を懷くことが出來る。黨派人としてのかれ等は決して無黨派人たり得ない。唯だエゴイストとしてのみそれが出來る。若し諸君がプロテスタントであつて、その黨派に屬するならば、諸君は只管プロテスタンティズムを辯明しなければならない、精々それを『雪寃』し、決してそれを拒否することは出來ない。若し諸君が基督者であつて基督教的黨派に從屬するならば、諸君はこの黨派の一員としてそれ以上に行くことは出來ない、唯だ諸君のエゴイズム、即ち無黨派性が諸君にそれを强ひる時にのみそれで出來るのである。基督教徒等は、ヘエゲル及び共產黨員に至るまで、かれ等

の黨派を强固にする爲めになんと云ふ努力を費やしたことぞ！　かれ等は基督教が永遠の眞理を含まねばならず、人は唯だそれに到達することを要し、それを確實にし、それを辯明する爲めに黨派に固執した。

要するに、黨派は無黨派性を入れることは出來ない、そしてこれにのみエゴイズムが現はれるのである。その黨派は自分にとつて全體なんであるか？　自分はどうかして自分の旗幟に服從を誓はずして自分と結合する人間を充分見付け出すに難くはないであらう。

或る黨派を脫して他の黨派に赴く者は直に『背信者』(über-läufer) として非難される。確かに道德の要求するところは人が彼の黨派に忠實であるべきことである。そして、それから叛くことは『背信』(untreue) の汚點を以つて自からを汚がすことである。けれど所有我は『忠實、固執』等のなん等の命令を知らない。所有我は一切を、――背信、脫離、等すら――許容する。道德人かれ等自からさへ、無意識に自からをこの原則によつて指導されることを許してゐる、たとへばかれ等がかれ等の黨派に移り來る者を批判するが如き場合がそれである。――否、かれ等は新加入者を喜んで造らうとさへしてゐるのである。かれ等は唯だ同時に人は彼自身の爲めに行爲するには不德なる行動を犯さなければならないと云ふ事實の意識を獲得すべきである。――即ち、その場

合に於て、人はさまぐ＼なる道德的考察に煩らはされず自からを決斷すべく彼の誓約をすら破棄しなければならない、嚴酷な道德的判斷を有する人々の眼には、背信者はいつでも曖昧な色彩の中に閃めく、そして容易にかれ等の信任を得ることが出來ないであらう。なぜなら、彼には『背信』即ち不德の汚點が纏はり付いてゐるからである。低級な人間の場合に於てはこの見解は殆んど一般に發見される。進步した思想家も亦通常不安と困惑に落ち入る、そして、必然に道德の原則に根抵を置いた矛盾は、かれ等の概念の混亂の爲めに、かれ等の意識にハッキリと登つては來ない。かれ等は背信者を言下に不道德と呼ぶことを敢へてしない、なぜならかれ等自からが背信を、一つの宗教から他の宗教への脫離（等）を誘惑するからである。しかも、かれ等は又同時に道德の立場を見棄ることが出來ない。そしてしかも玆ではその機會が道德の圏外に踏み出すべく捉まへられなければならなかつた。

自我若しくは無二(die Eigen order Einzigen)は幾分黨派であらうか？　若しかれ等が黨派に從屬するとしたなら、かれ等は如何にして、自分我であり得よう？

若しくは、人は何等の黨派に屬してはならないのか？　かれ等に結合し、かれ等の圏内に入り込む行爲そのことに於て、人はかれ等と結合を形造る、そしてそれは黨派と自分とが同一の目的

を追求する間は持續する。けれど今日自分は依然として黨派の傾向に預かるとしても、明日は必ずしも最早さうすることが出來ないかも知れない、そして自分はそれに對して『不眞』になる。その黨派は自分にとつて束縛する（義務を負擔する）なにものをも有してはゐない、そして自分はそれに對して何等の尊敬をも有してはゐない。若しそれが最早自分を喜ばさないなら、自分はその敵になる。

それ自からとその存續との爲めに齷齪する凡ゆる黨派に於ては、その黨員等はかれ等がその黨派の慾望に奉仕する程度に應じて不自由（若しくは非我）であり、エゴイズムを缺如してゐる。その黨派の獨立は黨員の獨立の缺如を條件とする。

その如何なる種類たるを問はず、黨派は信仰の告白ぬきには決して何事をもなし得ない。なぜなら、黨派に所屬する者はその主義を信じなければならない、それはかれ等によつて疑はれてはならず、又は疑問をかけられてはならないのである。それは黨員にとつて確かな、疑ふべからざるものでなければならない。即ち、人は黨派にその肉體と靈魂とを所屬させなければならない。然らざればその人は眞に黨派人とは云はれない、否、彼は多少――エゴイストである。基督教に對して疑惑を抱いて見給へ、その時、諸君は既に最早、眞の基督者ではない、諸君はそれ以上の

疑問を發する『厚顔』にまで諸君自身を高め、諸君の自我的判斷の前に基督教を拉して來た。諸君は基督教——卽ちこの黨派根性に對して——罪を犯した、(なぜならそれは確かにまた他の黨派である猶太人の爲めでもない)だが、諸君が諸君自からを恐怖せしめられないならばそれでいいのである。諸君の厚顏は諸君を助けて自我にまで赴かしめる。

それならばエゴイストは決して黨派を抱くこともなければ、又は黨派に干與するやうなことはないのか? いかにもさうだ、若し彼が自からを黨派によつて抱擁され、干與せしめないならば彼にとつては黨派はいつでも一個の集合以外のなにものでもない。彼はその黨派の一人であり、彼はそれに干與する。

最上の國家とは最も忠義な市民を有するそれであることは明らかなことであらう。そして、合法に對する獻身性が失はれれば失はれる程、この道德制度である國家、この道德的生活それ自からは力と性質に於て縮少せられるであらう。『善良な市民』と共に、善良な國家がまた滅亡して無政府と無法律の狀態に崩解する、『律法を尊敬せよ!』このセメントによつて國家の全體が固め付けられる。『律法が神聖である、そして、それを侮辱する者は犯罪者である。』犯罪なしには、國家な

し。その道德世界——そして國家はこれである——は惡漢や、欺騙(かたり)や、虛言者や、盜賊等で一杯になつてゐる。由來、國家は『律法の支配者』であり、その教權政治なるが故に從つてエゴイストの利益はその凡ゆる場合に於て國家と牴觸する、そして彼は犯罪によつてのみ彼自身を滿足させることが出來る。

國家はその律法と布告とが神聖(hreilig)であると云ふ宣言を擲げ打つことは出來ない。茲に於て個人は國家に對し不神聖な者（野蠻人、自然人、『エゴイスト』）として位する、それは彼が嘗て一度教會によつてしか見做されたと全然同一である。個人の前に國家は聖者の後光を射してゐる。かくして國家は決鬪を取り締まる法律を發布する。茲に二人の人間があつてある事（それはなんでも）の爲めかれ等の生命を賭けんと欲することを同意するとしても、これは許可せられない、なぜなら國家がそれを許さないからである。國家はそれに刑罰を科す。その時自己決定の自由は何處にあるか？　例令へば、北亞米利加に於けるが如く、若し社會が決鬪者をして、かれ等の行爲から生れる惡結果（たとへば從來享樂せられた名聲の除去）を忍ばしめることを決定するならば、それは直にまつたく異なつた立場である。名聲を拒否することは各人の事柄である、そして若し社會が甲或は乙の理由によつてそれを除去しようと欲するなら、それに適合する者はそれ故

彼の自由の蠶食に就て不平を云ふことは出來ない。社會は單にそれ自からの自由によつてそれ自身を益しつつあるのである。それは罪に對する刑罰でもなく、犯罪に對する刑罰でもない。決鬪は其處では犯罪ではない、それは唯だ一個の行爲であつて、それに對して社會が反對な尺度を適用し、防禦を決定するに止まるのである。國家はこれに反して決鬪を犯罪として烙印する、卽ちその神聖な律法に對する傷害であると見做す。國家はそれを犯罪事件とする。社會はそれを個人の決斷に任せて、彼が彼の行爲の方法に從つて惡結果を自からの上に招くか、不便を感ずるかを省みない、そしてそれ故彼の自由決斷を承認することになる。國家はそれとは全然反對な態度に出て、個人の決斷による凡ゆる權利を否定する、そして、その代りに唯一の權利をそれ自身の決斷卽ち國家の法律にまで歸着せしめる、故に國家の命令に叛く者は恰かも彼が神の命令に反して行爲しつつある者であるかの如く見做れる、——それは嘗て敎會によつて同樣に維持せられた見解であつた。其處では、神は彼自身の一切に於て神聖である、そして、敎會の命令は、國家のそれの如く、この唯一神聖者の命令である、それを彼が彼の油を塗られた神の恩惠による君主を通して傳播する。若し敎會が極重の罪惡を有するならば、國家は素晴らしい犯罪を有してゐる。若し一方が異端者を有するなら、他方は謀反者を有してゐる。一方に敎會的刑罰があれば、他方に

司法的刑罰がある。一方に異端者審問の課程があれば、他方に檢事の審問がある。要するに、其處に諸々の罪惡があり、此處に諸々の犯罪があり、其處に幾多の罪人あり、此處に幾多の犯人あり、其處に審問あり、此處に訊問がある。國家の神聖は教會のそれのやうに滅びないであらうか？　その律法の威怖、その高貴に對する尊敬、その『臣民』の謙譲、これが依然として存續するであらうか？　『聖者の』顏はその裝飾が引き剝らされないであらうか？

國家の主權者に對し、個人と立派な戰ひをやることを懇願し、またかれ等が言論の自由に關して自から發想する時、太陽と風とを平等に分つことを懇願することはなんと云ふ愚かなことであらう！　若しこの思想の國家が眞實の(de facto)權力でなければならないとすれば、それは單に個人に對する優越權力でなければならない。國家は『神聖』である、そして個人の『厚顏なる攻撃』に對してそれ自からを曝してはならない。若し國家が神聖であるなら、其處には檢閲官が存在しなければならない。政治的自由主義者は前者を承認して、推理を論じてゐる。けれど如何なる場合に於ても、かれ等はそれに對する禁制的尺度を承認してゐる、なぜなら——かれ等は、國家が個人以上であり、刑罰と呼ばれる立派な復讐を行ふと云ふことに固執してゐるからである。

刑罰は神聖な物の損害に對して報償を與へるべき時にのみ意義を有してゐる。若し何物かが誰

かに對して神聖であるなら、彼は確かに彼がその敵として行爲する時に刑罰に價するのである、人間の生命がその人にとつて神聖であるが爲めにのみ、他人の生命の存續を許して置くものがあるならば、そして彼がそれに觸れることを恐怖してゐるとすれば、それは單に――一個の宗教人である。

ワイトリング（Weitlug）は『社會的混亂』の入口に犯罪を置いてゐる、そして、共産的組織の下に於て犯罪が不可能になるであらうと云ふ期待を抱いて生活してゐる。なぜそれが不可能かと云へば、犯罪に對する誘惑、即ち金が失なるからであると云ふのである。しかしながら、彼の組織された社會が又神聖にして破ぶるべからざるものにまで高められてゐるが故に、彼はその性善良な說の中に誤算をしてゐる。共産的社會に對する歸依をその口に公言しながらも、密かにその滅亡を促進してゐるかくの如き手合は缺乏を來すやうなことはないであらう。加之、ワイトリングは『人間の疾病と弱點の自然の殘物に對する治療法』を繼續しなければならない、そして『治療法』は常に先づ個人が特別な『救濟』にまで『召される』ものと見傚れなければならないことを宣言する、故にこの『人間的天職』の要求に從つて取り扱はれなければならない。救濟法又は治療法は單に刑罰の反面である。治療の理論は刑罰の理論と平行に走つてゐる。若し後者がある

行爲の中に權利に對する罪を見るならば、前者はそれを人間の彼自身に對する罪、たとへば健康の頽廢――であると見做すのである。けれど、自分がそれを自分に適する行爲、若しくは自分に適せざる行爲、即ち、自分に敵對するか親しむか孰れかにそれを見做す方が正しいのである。即ち、自分がそれを自分の所有として取り扱ひ、自由にそれを懷かしみ或は破毀するのである。『犯罪』若しくは『疾病』は孰れもそれを自我的の見解から考察したものではない、即ち、自分から出發した判斷ではなく他から出發したものである、――即ち、それが權利を、一般の權利を害するか、若しくは半ば個人（病人）の健康を害するか、半ば全體（社會）の健康を害するかである。『犯罪』は酷薄に取り扱はれ、『疾病』は『慈悲、愛憐』（等）をもつて取り扱はれる。

刑罰は犯罰に續く。若し神聖なるものが消滅するが故に、犯罪がなくなるなら、刑罰は少しもその滅亡に近づかせてはならない。なぜなら、それが又神聖な物に反對することによつてのみ意義を持つてゐる。教權的刑罰が絕滅された。なぜか？　なぜなら、人が如何に『神聖な神』に對して振舞ふかが彼自身の事柄だからである。けれど、教權的刑罰と云ふこの一つの刑罰が亡びた如くに、凡ゆる刑罰も亦亡びなければならないのである。所謂神に對する罪が人間自身の事件であるやうに、所謂神聖な凡ゆる物に對する罪も亦同樣である。我々の刑法の理論――それを『時

代に適合すべく改善しようと』人々は徒らに自からを苦しめてゐる――に從へば、かれ等はこれか又あれかの『非人道』の故に、人々を罰せんと欲してゐる。その點でかれ等はこれ等の理論の愚劣さを特にその合宜によつて明らかにせんと欲し、小賊を罰して、大賊を逃がすやうなことをやつてゐる。財産の損害に對して、かれ等は懲治の家を持つてゐる、『思想の冒瀆』に對しては『人間の自然的權利』の壓迫を持つてゐる、唯だ――幾多の提言と懇願とのみ。

刑法は神聖な物を通してのみその存在を繼續した、そして、刑罰が消滅する時に自から亡びるのである。さてかれ等は、刑罰それ自からに對する疑惑に耽けることなくして新らしい刑法を到る處に創造せんと欲してゐる。けれど滿足の爲めに餘地を作らなければならないのは將に刑罰である。それは再び權利と正義とを滿足させることを目的とすることは出來ない、唯だ我々に滿足な結果を齎すことを目的とするのである。若し人が我々に對して我々の我慢出來ないことをするならば、我々は彼の權力を破つて、我々自からの力を滿足させるやうにするだけである。我々は彼によつて我々自からを滿足させるので、決して權利(幽靈)を滿足させんと欲するが如き愚に落ちるやうなことはやらないのである。人間に對してそれ自からを防禦しようとするのは神聖なものではなく、人間が人間に對してそれをやるのである、恰かも、神がまた最早人間に對して自か

ら、防禦しないやうに、そして神に對しては以前(そして、實際、今でも未だ幾分)凡ゆる『神の從僕』が冒瀆者を罰しようとしてかれ等の保護を捧げた、そしてかれ等は今日に於ても依然として神聖な物の爲めにかれ等の手を借してゐる。神聖なる物に對するこの獻身は、人が自分自からに活潑に干與することなく、唯だそれ等の犯罪者を警官と法廷の手にまで引き渡すことになるのである。それは『勿論、最もよく神聖な事件を支配する』オーソリテイに委任する無干渉である人民は自己に對して不道德(それは又屢々不適合)であると思はれる凡ての物に對して警官を使嗾することに熱狂してゐる、そして道德に對するこの流俗的憤怒は政府が何等かの仕方でそれを保護すること以上に警察制度を保護してゐる。

エゴイストはこれまで犯罪によつて彼自身を肯定し、神聖な物を嘲笑した。神聖な物との分離若しくは寧ろ神聖の破棄が恐らく一般的になるであらう。革命は再び來ないかもしれない、だが偉大な、向ふ見ずな、無恥な無良心な、傲慢な——犯罪、それが遠雷の如くに轟いてはゐないであらうか、そして諸君はそれを豫知して天空が靜かに憂鬱になるのを見ないであらうか?

家族、黨派、國民の如き制限された社會の爲めに自からの力を費やすことを拒否する人もなほ

常により價値ある社會を待ち望んでゐる、そして、恐らく彼は愛の眞の對象を『人間的社會』若しくは人類に發見したと考へてゐる、そして彼の名譽を成立してゐる物に彼自身を献げようとする。これから彼は『人類の爲めに生きて奉仕』することになる。

人民は從來自分を抑壓した支配人の肉體の名であり、國家はその精神の名である。或者は人民や國家を更に敷衍して『人類』や、『一般理由』にまで變形させようと欲した、けれど奉仕はこの擴張と同時に更に熱烈になつてゆくばかりであらう。そして慈善家と人道主義者とは政治家や外交官と同樣に絕對な主人公である。

近代の批評家等は宗教が神や、神聖なものや、道德（等）を人間以外に置くが故に、若しくはそれ等を客觀的なものとするが故に、宗教に對して挑戰する。批評家等はそれに反してこれ等の主題を寧ろ人間の內部に移さうとするのである。けれどそれ等の批評家等も亦等しく宗教通有の謬謬に陷つて、人間に『定命』を與へようとする、その點でかれ等は又彼を神聖に、人道的（等）にしようと欲するのである。道德、自由、人道（等）が彼の要素である。そして、宗教の如く、政治も亦人間を『教育』し、人間をして彼の『本質』、彼の『定命』を實現せしめ、彼を何物かにしようと欲した、――卽ち『眞の人間』にしようとしたのである。宗教は『眞の信者』の形に、

政治は『眞の市民或は臣民』の形に於て實際、人がその定命を神聖と呼んでも人道と呼んでもその結果は同一である。

宗教と政治の下に於て人間は『ねばならない』立場に彼自身を發見する。彼はこれであり、あれであり、かうであり、ああでなければならない。この規定と、この命令の下に、各人は他人の面前ばかりでなく、彼自身の面前をも歩かなければならない。それ等の批評家等は云ふ、諸君は全自由人たるべしと。かくしてかれ等は又新しき宗教を宣言し、新しき絶對、一個の理想、――即ち、自由を建設せんとする誘惑に落ち入る。人々は自由でなければならない。その時、其處には嘗て基督教が、萬人悉く基督教徒たるべき使命ありとの確信の下に信仰の傳道者を送り出したやうに、自由の傳道者さへ起つて來るかも知れないのである。その時、自由は(從來の教會の信仰、國家の道德の如く)新らしき組合としてそれ自からを建設し、それから、同一の『宣傳』を實行するであらう。たしかに、なん等の反對も集合に對して擧げることは出來ない。だが、それだけ又人は、我々に對する舊き御世話燒の再新、――或目的に向けられた教養の、要するに何物かを我々から搾らへ出さうとする主義――たとへそれが基督教徒でも、臣民でも自由人でも、人間でもなんであつても――の改革に對して反抗しなければならない。

人はフォイエルバハ及びその他の者と共に宗教が人間性を人間から除去して、それを到達すべからざる他界に移したと云ふことが出來るかも知れない。其處で人間性は『神』と云ふ如きそれ自からに於て人格的なものとしてそれ自身の存在を繼續することになつた。だが、宗教の誤謬は決してこれをもつて盡きはしない。人はずいぶん除去された人間性の人格を貶しめ、神を神聖な物に變形し、依然として宗教的になつてゐるであらう。なぜなら宗教的なことは現在人に對する不滿に於て成り立つ、卽ち、努力の對象たる『完全』の建設、『自己の完成の爲めに奮闘する人間』(B. Bauer "Lit. Ztg." 8.22) から成り立つ。(『故に汝等は天に在ます汝等の父が完全なる如くに完全なれ』馬太傳、五章、四十八節) それは一個の理想、一個の絕對の固定に於て成り立つ。完全が『至上善』であり、(finis bonorum) である。各人の理想が完全人であり、眞人であり、自由人 (等) である。

近代の努力は『自由人』の理想を建設することを目的とする。若し人がそれを發見し得たら、其處には新らしき理想の故をもつて新らしき宗教が生れて來るであらう。其處には新らしき憧憬、新らしき苦惱、新らしき献身、新らしき神明、新らしき悔恨が生れるであらう。

『絕對自由』の理想と共に、同一の苦惱か凡ゆる絕對なものの場合に於けるが如く醸される、へ

ス（Hess）に從へばe、g、それは『絶對な人間社會に於て實現せらるべく』云はれて居る。否、この實現は忽ち『天職』として命名される。かくして彼は自由を『道德』として定義する。『正義』（卽ち平等）の王國と『道德』（卽ち、自由）が始まる。

自己の種族や、家族や、國民（等）の同胞が高位を占めてゐる間に、自分のみは同胞の功蹟を通じて『脹れあがる』以外に能がないとしたら甚だ滑稽である。けれど『人間』になることのみを欲してゐる人も亦盲目である。かれ等の孰れもは自己の價値を排他に置かずして、關聯に置いてゐる、卽ち彼と他と結び付ける『羈絆』に、血緣、國民性、人道の諸羈絆に置くのである。今日の『國民黨』を通じて、その鬪爭が再び自分達が單に人間的血緣、血の人間的羈絆を持つてゐると考へてゐる人々と、自から特別な血を持ち、特別な血緣に誇りを感じてゐる人々との間に惹き起されたのである。

若し吾人が誇りが自負を意味し得ると云ふ事實を無視し、それを單に自覺の意味に取るとしたなら、一國民『に從屬する』誇り、そしてそれ故にその所有たることと、國民性そのものを自己の所有と稱することとの間には大なる差異の存することが發見せられる。國民性が自己の性質である、けれど國民は自分の所有人で、自分の主婦である。若し諸君が體力を有するならば、諸君は

それを適當な場所に用ゐて、それに對する自覺と誇りとを持つであらう。だが、若しそれに反して、諸君の强健な肉體が諸君を所有するとすれば、その時、それは至る處に於て諸君を惱ます、そして最も不都合な場所に於てその力を示すであらう、諸君は何人に對しても彼の手を締め付けることなくして諸君の手を彼に揮ふことは出來ない。

人がある家族の成員以上であり、種族の一員以上であり、民衆中の一個人（等）以上であると云ふ悟りは遂に、人は自己が人間であるが故に、卽ち猶太人、獨逸人（等）以上であるが故にこれ等の凡てより以上であると云ふに至らしめた。『だから各人を全然まつたく――人間たらしめよ！』或は又寧ろ、我々はこれ迄叙べられたもの一切以上であるが故に、我々は又『それ以上』であると同時にこれでもあると云ふことは出來ないであらうか？　人間であると同時に獨逸人、それなら又人間であると同時にゲルフ（等）？　國民黨の所說は正しい。人は自己の國民性を否定することは出來ない。人道主義者等の所說も正しい。人は國民性の狹隘中に止まつてはならない。その矛盾は唯一性（Einzig-keit）に於て解決される。國民性は自分の性質である。けれど自分は自分の性質中に呑み込まれはしない――人間性も亦自分の性質である、自分は先づ自分の唯一性を通じてのみ人間にその存在を與へるのである。

歴史は人間を求めてゐる。けれど彼は予であり、汝であり、我々である。最初に神として、それから人間（人道、人間らしきこと、人類）として、神秘的な本質、神聖なものとして探求された彼は又個人として、有限な者、唯一者として發見される。

自分は人道の所有人であり、人道である、そして他の人道の爲めに何事をもしない。愚人よ無二の人道である癖に、諸君以外の爲めに生きることに價値を見出さんとするとは。

これまで考へられて來た人間世界に對する自分の關係は、それが他の場合に於て幾度かとりあげられなければならない程に豊富な現象を提供してゐる、けれど、その主たる輪廓が眼にまで明らかにされなければならない。この場合に於ては、それが放射する他の二方面の理解に席を讓づるべく破られなければならない。なぜなら、自分が『人間』と云ふ概念をかれ等自身に現はしてゐる、即ち人間の子供等（神の子供等と云はれるやうに人間の子供等）である人々に對してのみならず、なほ又人間を所有し、それをかれ等自からのものと稱するものに對する關係に於て自分自身を發見する如く、即ち、自分が人間を通じて存在するかれ等に對してのみならず、かれ等の人間的所有物に自からを關係させるが故に、人間の世界のみならず、官能と觀念の世界が我々の監視の下に含まれなければならないであらう。そして幾分人々が精神的なものと同時に肉體的な幸福と呼

ぶところのものに就て云はされなければならないであらう。

人間の概念が發展させて、それを明らかに把んだと云ふ者の言によれば、彼は我々にそれを與へて、これか又はあれかの人物（Respekt-person）を尊敬させようとしたのである、そしてこの概念の最も廣い理解から、遂に『各人中の人間を尊敬せよ』と云ふ命令が生じて來た。けれど、若し自分が人間を尊敬するとすれば、僕の尊敬は同時に人間的な、若しくは人間に所屬するものにまで擴げられなければならない。

人々は幾分かかれ等自からのもの（Eignes）を持つてゐる、そして自分はこの自分を認めてそれを神聖なものとして把まなければならない。かれ等自からのものは半ば外面の、半ば内面の所有から成立する。前者は物質で、後者は精神性、思想、確信、高貴な感情（等）である。だが、自分はいつでも唯だ正しき若しくは人間的な所有物を尊敬して、不正な、非人間的なものを用捨する必要がないと云ふのだ、なぜなら、人間自からのもののみ人々の眞の所有だからである。この種の内的所有物はたとへば宗教である。なぜなら宗教は自由である、即ち人間のものである、自分はそれを攻撃してはならない。かくして又名譽も内的所有物である。それは自由である、そして自分によつて攻撃されてはならない、（侮蔑、漫畫（等）の行爲）宗教と名譽とは『精神的財

産』である。所有し得られる財産中では人格が第一に位する。自分の人格が自分の第一の財産である。故に、人格の自由。けれど正しき或は人間的人格のみが自由であつて、その他は幽閉される。諸君の生命は諸君の財産である、けれどそれはそれが非人間的怪物ならざる限りに於てのみ人々にとつて神聖なものである。

かくの如き者としての人間が肉體的所有品に關して防禦し得ないものを、我々は彼から取ることが出來る。これが競爭と、職業の自由の意義である。彼が防害し得ない精神的所有品も亦我々の餌食になる。かくの如くして言論、科學、批評の自由が起る。

けれど神聖にせられた所有品は破ぶるべからざるものである。だがそれは何人によつて聖別され、保護されたのであるか？　恐らくは國家や、社會によつて、然らざれば人間若しくはその『概念』によつて、卽ち『その物の概念』によつて。なぜなら聖別された物品の概念は、それ等が眞に人間的のものであること、或は寧ろ所有者が人間として（非人間としてではなく）それ等を所有してゐると云ふことである。

精神的方面に於けるかくの如き所有品は、曰く人間の信仰、その名譽、その道徳的感情、——怒り、儀容、慇懃（等）の感情である。名譽に牴觸する行動（言論、書き物）は罰せられるべきであ

有する一切に對する攻擊も亦同樣に罰せらるべきである。

批評的自由主義がどの位な點まで物品の神聖を擴張するか、――この點に關してそれは未だ何等の宣言をやらなかつた、そして勿論、凡ゆる神聖に對して惡しく傾いてゐると自から想像してゐる。けれど、それがエゴイズムに挑戰する時、それはエゴイズムに制限を與へなければならない、そして非人間を人間に飛びかからせてはならない『多數』に對するその理論的侮蔑は、若しそれが實力を有するに至れば實際的な輕蔑を伴はなければならない。

『人間』と云ふ概念が如何なる範圍を包括するか、その概念を通して個人に如何なることが起るか、――故に、人間と人間的なこととはなんであるか、――この點に關して、自由主義の種々なる段階は異なつてゐる、そして、政治人と社會人と、人間人とは各自にいつでも『人間』の爲めに何等かを主張しつつある。一番よくこの概念を把んだ者が一番何にが『人間のもの』だかを知る。國家は依然としてこの概念を政治的制限に於て把握し、社會は社會的制限に於て把握する。人類は先づ第一にそれを全的に了解すべきであると云はれてゐる、若しくは『人類の歷史がそれを發展させる。』だが、若し『人間が發見された、』なら、その時、我々は又彼自身のものとして、人間の

所有として、ヒユウマンとして人間に所屬するところのものを知るのである。

だが、個人をして人間若しくは概念人が『資格を與へる』と云ふ澤山の權利を主張させるがいい、つまり彼が人間だからそれが出來ると云ふのだ。自分はなんで彼の權利や要求にかまつてゐられるものか？　若し彼が人間からのみ彼の權利を有して、私からそれを持たないなら、その時、私に對して彼はなんの權利をも持たないのである。たとへば彼の生命は、それが私にとつて價値あるが故にのみ自分に對して重きをなすのである。自分は所謂、財産の權利（若しくは觸れること の出來る物品）を尊敬せず、なほ又『彼の內性の聖殿』（若しくは精神的所有品と神性並に彼の諸神が犯されずにすむ彼の權利）をも尊敬しない。彼の所有品は、その物質的なると精神的なるとに關せず、悉く自分のものである、そして、自分は自分の力の程度に從つて所有主としてそれ等を始末する。

財産の問題にはその問題の制限された敍述が許されるよりも一層廣い意義が橫つてゐる。人々が單に我々の所有品と稱するところのものに關しては、何等の解決も不可能である。その結論は『その人から我々が一切を持つことの出來る』人に於てのみ見出されなければならない。財産は所有人に所屬する。

佛蘭西革命は『神の恩惠から』來た一切に對してその兵器を向けた、例令へば神權に對して、そしてその代りとして人權が肯定された。神の恩惠によつて與へられたものに對して、『人間の本質から』汲み出されたものが反抗するのである。

さて、人間の相互に對する關係は、『神の爲めに相互を愛せよ』と命ずる宗教的獨斷に反對して『人間の爲めに相互を愛せよ』と云ふ人間的位置を受け入れなければならなかつた。かくして革命の教義は、先づ、この世の物品に關する人間の關係に就て從來神の命令によつて整頓されたこの世を『人間』に所屬せしめようとした以外にはなにもやらなかつた。

この世は『人間』に從屬する、そして人間の財產として私から尊敬されなければならない。

自分のものが財產である！

市民的意義に於ける財產は、神聖な財產を意味してゐる、卽ち予は汝の財產に敬意を表せざるべからずである。『財產に對する尊敬！』由來、政治家達は各人が彼の些少な財產を所有することを好んでゐる。そしてかれ等は幾分この努力によつて信じがたい程の小量を齎した。各人は自から嚙ぢれる位な骨を持たなければならない。

しかし自我的な意味に於ては事態はまつたく異なつてくる。自分は臆病に諸君の財產から尻込

みをしないばかりか、それを常に自分の財産と見做してゐる、その點で自分は何物をも『尊敬する』必要を認めない。どうか、諸君が僕の財産と呼んでゐる物に對して同じ態度をとつてくれ！

この見解から、我々は最も容易に相互の了解に入り込むことが出來るであらう。

政治的自由主義者等は、ならば一切の奉仕が解除され、各人が自からの土地の自由地主になることを念頭にかけてゐる、たとへその土地が一人の人間の肥料によつて充分その要求を充たす位な僅少な地面であつてもいいのだ。(物語の中の百姓は『彼は妻君の糞尿によつて利益を獲んが爲めに』に老年になつて結婚したと云ふことだ）それがどんなに僅かでもいい、若し人が唯だ彼自からの、——即ち、尊敬される財産の幾分をでも所有すればいいのだ！　かくの如き所有人と、小作人とがふえればふえる程、國家は『自由民と善良愛國者』を持つことになるのだ。

政治的自由主義は、宗教的なすべての物と等しく、尊敬、人情、愛の德などに重きを置く。それ故にそれは不斷の煩瑣に於て生活する。なぜなら、實際に於て人民はなに物をも尊敬しない、そして毎日小なる所有が再びより大なる所有者によつて購はれ、『自由民』が日傭勞働者に化ける。けれど、若しこれに反して、『小所有者』が反省して大財産をも亦かれ等のものであることに氣付いたならば、かれ等は恭しくかれ等自からをそれから拒否しないであらうし、又拒否されない

でもあらう。

市民的自由主義者の理解してゐるやうな財産は共産黨員とプルウドンの攻撃に價する。それは防ぎがたいものである。なぜなら市民的所有者は事實に於て無産人に異ならないからである。即ち至る處で閉め出しを食ふ人である。彼が恣に世界を所有する代りに、彼は自分の身の周圍の些少な點すらも所有してはゐないのである。

プルウドンは所有者(Proprietaire)を欲してはゐない、けれど Possesseur(占有者)若しくは usufruitier(用益者)とを欲してゐる。("Qu'est-ce-que la Propriete," P. 83)それはなにを意味してゐるか? 彼は何人も土地を所有することを望まない。けれどそれからあがる利益——たとへ人がその利益の僅かに百分の一を許されてゐたとしても、この結果は——少なくとも自からが意の儘に處分することの出來る財産である。單にある耕地の利益のみを有する人は確かにその所有主ではない。又、プルウドンの云ふやうな、自分の要求以外の利益の大部分を投げ打たなければならない者は更にそれ以下である。彼は彼にまで殘された分前の所有主である。故に、プルウドンの否定するところは唯だこれかあれかの財産で、財産それ自身ではないのである。若し我々が最早、土地を地主に任かすことを欲せず、我々自からの私有とせんと欲するなら、我々はこの目的の爲めに我

々自からを結合させ、ユニオンを造り、一個のsociétéを造つてそれ自からを所有主とすればいい。若し我々がこの點で幸運を持つならば、その時それ等の人々は地主たることを止めるのである。そして、土地の場合に於けると同樣、かくして我々は、それを我々の財産とする爲めに、即ち勝者の――財産とする爲めになほその他の多くの財産からかれ等を驅逐することが出來る。勝利者は社會を形成して、遂にはそれが全人道を包括すと想像せられる程、漸次その範圍を擴張する。けれど所謂、人道も亦唯だかくの如き一個の思想（幽靈）に過ぎない。個人がその現實である。そして集團としてのこれ等の個人達は孤立せる個人即ち所謂所有主（プロプリエテエル）と同樣、專制的に土地や地面を取り扱ふであらう。故に、その場合に於てすら、財産は依然として不動の形をとり、人道なる、この大社會に於て又『排他的』になり、個人をその所有から排斥する（恐らく唯だ彼に借し與へるのみである、一個の采邑又はその一片として彼に與へるのである）、それはかりでなく人道的でない一切を排斥する。例令ば動物には所有を許可しない。――かくして又それが同樣の狀態を續けて、生長することであらう。全てが分前に與からうと欲することは自からひとりそれを所有せんと欲する個人からそれを奪ふことである。それが共通の財産（Gemeingut）にされる。共有財産として各人がその分前を持つ、そしてこの分前が彼の財産である。どうだらう、我々の舊式な關係

分の一が各自の財産である。プルウドンは若し彼がかう云ふ風に云つたなら彼の冗長な泣言を節約し得たかも知れない。――『この世には少數者にのみ所屬する物がある、我々は今からそれに對して權利を宣言しようではないか――即ちそれを把握しようではないか。人はそれを奪ふことによつてのみ財産を所有し得る故に、我々はそれ等を奪はうではないか、そして、現在に於て我々は依然として剝奪されてゐる財産は等しく奪ふことによつてのみかれ等所有者の物となつたのである。若しかの少數者の支配下にある物が我々すべての手に落ちるならば一層よく利用され得るのである。故に我々はこの盜奪(vol)の目的の爲めに結束しようではないか。』かう云ふ代りに彼は我々をして社會が明白な權利の創生の所有者で、唯一の債權者であることを信ぜしめようとする。それに對して所謂財産家は盜賊になつた。(La propriété c-est le vol)たとへ、それが現在の財産家から彼の財産を奪つたとしても、それが自から明白な權利によつてそれ自身を利用してゐる時に、彼から食物をも奪ふことは出來ない。――その程度に於て、人は社會の幽靈を道德人と見做すことになる。これに反して、人の所有は彼の獲得し得るところのものである。世界は私に所屬する。諸君はその反對の『世界は萬人に所屬する』と云ふ命題によつてなにか他のことを

云はうとするのか？　全ては自分である、そして再び自分は――等である。けれど諸君は『全て』から一個の幽靈を造り出して、それを神聖にする、かくして、その時に『全て』が個人の恐るべき主人になる。その時『正義』の幽靈が自からかれ等の味方として現はれる。

プルウドンは、共産黨員の如く、エゴイズムに挑戰する。故に、かれ等は基督教主義の繼續であり、不斷の實行である、それは愛の教義であり、一般的な、外面的な物に對する犧牲の教義である。かれ等は財産の點に就ては永い間事實として存在し來たつたところのもの、――即ち、個人の無所有を完成させる。法律が、Ad reges potestas omnium pertinet, ad singulos proprietas ; omnia rex imperio possidet, singuli dominio と云ふ時、これは、帝王が所有であり、彼のみがひとり『一切』を制馭し、始末することが出來る、彼はそれに對する potestas(權力)であり、imperium (命令)である。――と云ふことを意味してゐる。共産黨員等はこの imperium を更に『一般の社會』に移すことによつて一層これを明瞭にしてゐる。それが爲めに、エゴイズムの敵であるが故に、かれ等は――基督教徒なのである、若しくは更に一般的に云へば、宗教人なのである、幽靈の信仰者であり、一般…(神、社會、等)の從屬者であり、奴僕である。この點に於ても亦プルウドンは基督教徒の如くである、即ち彼は彼が人間として拒否してゐるところのものを神にまで歸してゐる。

彼は神を地上の所有主(プロプリエテール)と名付けてゐる。これによつて彼はかくの如き所有主を抹殺することが出來ないことを證據立ててゐる。彼は遂にある所有主に到着したが、彼はそれを他界に移してゐる。神も人間も(『人間社會』)所有主ではない、だが個人がさうである。

プルウドンは(ワイトリングも亦)彼が財産を盗奪(vol)と呼ぶ時に、それに就て最悪事でも語つてゐるかの如くに考へてゐる。盗奪に對して充分根柢のある反對説が惹き起す煩瑣な疑問を全然超越して、我々は單に、若し人が『財産』と云ふ概念に妥當性を許可するに非ざる限り『盗奪』と云ふ概念は果して可能であるか、と訊ねる。若し財産が當初から現存してゐないなら、人は如何にして盗むことが出來よう? 何人にも所屬しない物は盗まれやうがないのである、海から人が汲み出す水は、盗むのではない。故に、財産は盗奪ではない、唯だ財産の承認によつてのみ盗奪が可能になるのである。ワイトリングも亦、彼が一切を萬人の所有と見做す時に同一の結論に落ち入るのである。若し或物か『萬人の財産』であるなら、その時、實際、それを彼自身の物とする個人は盗むことになるのである。

私有財産は法律の恩惠によつて生きる。律法に於てのみそれはその保證を有してゐる。――な

ぜなら獲得は未だ財産ではない、それは法律の許諾によつてのみ『自分のもの』になる――。それはプルウドンの考へるやうな事實でもなく、又 un fait でもなく、單なる物語であり、一個の思想である。これは法律上の財産であり、合法的財産であり、保證された財産である。それは自分を通して自分のものになるのではない――法律によつて自分のものになるのである。

それにも拘らず、財産は『自分が自分によしと思ふやうに判斷し、始末し得る何物(物、獸、人)かに對する無制限な領土 (unumsch ränkt, Herschaft) を發想する言葉である。羅馬法に從へば jus utendi et abutendi re sua, quatenus juriratio patitur で、獨占的な無制限な權利なのである。けれど財産は實力によつて決定されるのである。自分が自分の實力中に所有するところのもの、それが自分自からのものである。自分が占有者として自分自身を肯定してゐる間、自分はその物の所有主である。若しそれが再び自分から逃がれ去れば、――如何なる力によつてでも、例へばその物に對する他人の所有權を自分が承認するとしても、――その時、その財産は消滅するのである。かくして財産と占有とが一致するのである。自分を正當なりとするところのものは自分の力以外に横はる權利ではなく、全然自分の力である。若し自分がこれを持たなくなれば、その物は自分から消滅するのである。羅馬人が獨逸人に對する最早何等の力をも持たなくなつた時に、

羅馬の世界帝國は獨逸人に從屬した、そしてそれにも拘らず、羅馬人が依然として妥當の所有主であると主張することは滑稽に響くであらう。その物を如何にして取り、如何にして守るかを知る者にのみ、それが再び彼から取り去られるまで從屬する、同樣に自由もそれを取るところの者に從屬する。――

財產を決定するものは唯だ實力のみである、そして、國家(それは富有な市民の國家でも又は貧乏人のそれでも、或は專制者の國家でも)が唯一權力者であるが故に、それのみが所有者である。無二なる予は何物をも所有せず、唯だ采地を與へられ、臣下であり、奉仕者である。國家の領土の下には、自分の財產は皆無である。

自分は自分自身の價値を高め、獨自の價値を高めようと欲する、そしてこれは自分が財產を安つぽくすることであらうか? 否、自分がこれ迄人民、人類、及びその他無數の一般性がより高く置かれてゐたために尊敬されなかつたやうに、かくして財產も亦今日に至る迄その充分な價値を認められなかつた。財產も亦單に幽靈の如き財產であつた、例令へば人民の財產である、自分の全存在が『祖國に從屬してゐた。』自分は祖國と、人民と、國家とに從屬してゐた、そしてそれ故にまた自分が自分自からのものと呼ぶ一切も其處に從屬してゐた。人々は貧困を絕滅することを

國家に要求してゐる。これに國家が自からその頸を刎ねてその脚下にそれを置くことを要求してゐるかのやうに自分には思はれる。なぜなら、國家が自我である間は、個人我は貧弱な悪魔、無我として存在しなければならない。國家はそれ自からを富ますことのみを計つてゐる。ミカエルが金持であり、ピイタアが貧乏であることは國家にとつては同樣である。ピイタアが或は金持になり、ミカエルが貧乏になるかも知れない。國家は甲が貧乏になり、乙が金持になつても、この變化には少しも無頓着に自若として眺めてゐる。個人としてかれ等は實際國家の面前では平等である、この點でそれは正しい。その前にかれ等は兩方とも——無である、恰かも我々が『みんな神の前に罪人である』やうに。そして、一方では、國家は國家をかれ等の自我とする個人達がその富の分前に預かる點に於て極めて重大なインテレッセを持つてゐる。國家はかれ等をその財産の分與者とする。國家が個人に酬ひる財産によつて、國家がかれ等を馴致する。けれどそれは依然として國家の財産である、そして各人は彼が彼自身の裏に國家の自我を擔ひ、『社會の忠良な成員』である間のみ、その用益權を持つのである。その反對の場合に於ては、財産が沒收され、煩雜なる訴訟によつて消滅せしめられる。その時、財産は依然として國家の財産であつて、自我の財産ではない。個人が國家によつて所有するところの物を專制的に剝奪しないと云ふことは單に

國家がそれ自からを奪はないと云ふことに過ぎない。國家我である彼、卽ち善良なる市民、若しくは臣民が自からの釆地を安全に所有するのはかくの如き自我としてであつて彼自からの自我としてではないのである。法典によれば、財產とは『神と法律の擁護の下に』自分が自分のものと呼ぶところのものである。けれど、それは國家がそれに反對しない間のみ、神と法律の力によつて自分のものなのである。

沒收や、武裝解除、その他に於て（たとへば、國庫は若し相續者が時期に遲れて出廷しないとその遺產を沒收するが如き場合）、如何に人民や、『國家』が所有主で、個人が宛がひ扶持であるかと云ふ蓋はれたる原則が明からに眼に映ることであらう！

つまり、國家では何人も彼自身の爲めに財產を持ち、若しくは實際、金持になり、有福にはなり得ないと云ふことを自分は云ひたいのである。それは私としての自分に對して、何物をも承認せず、何物をも讓與し、何物をも許可しないのである。國家は貧困を止め得ないのである、なぜなら、占有の貧弱は自分の貧弱だからである。なにかの機會若しくはその他——卽ち、國家——が彼から造り出す以前の何物でもない彼は又正しく他人が彼に與ふる物以外になに物をも所有しない。そしてその他人は彼の價打だけの物、卽ち彼の奉仕だけの物を單に彼に與へるばかりであらう。

彼自身から價値を實現させるところのものは彼ではない。國家が彼の價値を實現するのである。

國民經濟はこの問題をもつて自からを多忙ならしめてゐる。だが、それは『國民的』を超へて遙か向ふに、國家の概念と地平線外に橫つてゐる、それは唯だ國家的財産を知つて自餘の何物をも分配し得ない。この理由によつて、これは財産の占有を條件にまで束縛する、――これが一切を條件に束縛するやうに、例へば結婚の場合に於ては、それによつて聖別された結婚にのみ保證を與へて、自分の力からそれを捥ぎ取つてしまふ。けれど、財産は自分がそれを無條件に握る時にのみ、自分の財産である。無條件な自我としての自分のみが財産を所有し、愛の關係に入り込み、自由貿易を實行することが出來る。

國家は私と私のことに就て毫も懸念しない、だがそれ自からとそれ自からのものとに就て懸念する。自分はその子供として、『その國の息子』としてのみ、幾分國家のことを考へる。自我としての自分は國家に對しては何物でもない。國家の理解によれば、自我としての私に落ちるところのものは偶發的なものである、私の富でも又私の貧乏でも。けれど、若し自分のものである一切を有する自分が國家の眼に一偶然事として映ずるとすれば、これは國家が私を了解出來ないことを證據立ててゐる。自分は國家の概念以外に出る、若しくはその理解は私を了解すべくあまりに制限

されてゐる。故に、それは又私に對して何事をもなし得ないわけである。

貧困は自分の無價値である、自我が自分自身から價値を實現し得ない現象である。この理由から國家と貧困とは同一である。國家は自分をして自分の價値を生ぜしめない、そして自己の無價値を通してのみその存在を繼續する。國家は永久に私から利益を得ることを企てゐる、即ち、私を利用し、私を價値あるものとし、私を使用し盡すことを企てゐる、たとへ、私から得る利益が單にProles (Proletariat) を供給することから成り立つてゐても、畢竟、それは私を『その被造物』にすることを欲してゐるのである。

貧困態は自分が自我とし私自身から價値を實現する時に、私が自分自己に價値を與へる時に、私の價値を自から造り出す時にのみ除去されるのである。自分はこの世に立つべく叛逆を起さなければならない。

自分が地上から勞苦して獲得する麥粉でも、リンネンでも、鐵でも石炭(等)でも、それから自分が價値を實現しようと欲する自分の仕事である。だが、その時、自分は永い間、自分の仕事がその價値だけに支拂はれないことを喰やくかも知れない。支拂者は私に耳を傾けないかも知れない、そして國家も同様に私が自分の恐れられてゐる力をもつて破裂しない爲めにそれが私を

『なだめ』なければならないと考へないうちは冷淡な態度を維持するのであらう。けれどこの『鎭撫』が全てであるだらう。そして、若しそれ以上を要求する考へが頭に浮べば、國家はその獅子と鷲の爪の凡ゆる力をもつて自分に向つて來る、若しそれが鳥獸の王であるなら、それは獅子か鷲である。若し自分が自分の品物と勞働に對して國家が定める價格に對して滿足することを拒むならば、若し自分が更に自身に自己の品物の價格を決定すべく、卽ち、『自から支拂ふべく』奮起するなら、先第一自分は物品の購買者と爭鬪しなければならない。若しこれが相互の了解によつて納まるなら、國家はあわてて抗議を申し込むやうなことはないであらう。なぜなら、個人が如何に相互に鬪爭するにしても、かれ等が國家の邪魔にさへならなければ、國家は少しも困りはしないからである。その損害と危險とはかれ等が折り合はない時にのみ始まる、しかし落付きがないところから相互に毛髪を捉かみ合ふのである。國家は人間が相互に直接の關係に立つことを我慢することは出來ない。それは仲裁人(Mitter)として、介在(intervenieren)しなければならない。嘗て、基督や、聖徒や、敎會のありしところのものに國家がなつた、——卽ち『仲介者』になつたのである。國家はかれ等の間に『聖靈』として介在する爲めに人を人から割くのである。より高き賃金を要求する勞働者等はかれ等がそれを強ふるや直に犯罪者として取り扱はれるので

ある。かれ等はどうしたらいいのか？　强迫をせずにかれ等はそれを取ることは出來ない。そして强迫は自助であり、自我による價格の決定であり、自己の所有からの純粹な價格の自由實現で、國家はそれを許容しがたいものであることを覺るのである。その時、勞働者等は如何になすべきであるか？　自からを眺めて、國家にはなんにも要求をするな？――

さて、自分の物質的勞作に關する境遇は又やがて智的勞作の場合にも共通するのである。國家は凡ゆる自分の思想から價値を實現することを許し、それ等に對して顧客を見出すことを許してはゐる（自分はそれ等から價値を實現する、たとへば、それ等が私に聽者（その他）からの名譽を齎すと云ふ行爲に於て）けれど、それは自分の思想が――國家の思想である間だけの話である。若し、これに反して、自分が國家の承認出來ない思想を抱くなら（即ちそれ自からのものを實現するなら）、その時、國家はそれ等の思想から價値を實現し、それを交換し、商賈とすることを許さない。自分の思想はそれが國家の恩惠によつて自分に與へられてゐる時に、即ちそれ等が國家の思想である時にのみ自由である。國家は自分が自分自身を『國家の哲學者』として承認してゐる間だけ自由に理屈をこねることを許して置く。自分が國家の『缺點』を補助し、國家を『促進させる』ことを國家は喜んで許容するが、自分は國家に反して理屈を云つてはならないのである。

——であるから、最もありがたく、國家の御許しを受け、國家の合法と警察御免の保證とを準備された自我としてのみ行動することは出來るけれど、自分のものから價値を實現することは許されないのである、尤もそれが國家から與へられてゐる采邑として自分の持つてゐるものである場合にはその限りではない。

私の價値以上に國家が恐れるものはない、そして、國家は私自身から價値を實現することを私に提供する凡ゆる機會を最も注意して防禦しなければならない。自己は國家の仇敵である、そして常に、それか自分か、あれかこれかの間に彷徨つてゐる。故にそれは嚴密に自分に立場を持たせないやうに固守するばかりでなく。なほ且つ自分のものを壓伏することを心懸けてゐる、國家には——財產、卽ち個人の財產と云ふものはない、唯だ國家の財產があるばかりである。國家を通してのみ自分は自分の持ち物を持つてゐる。自分は唯だ國家を通してのみ始めて自分の存在を保つてゐる。自分の私有財產は國家が他人のものを切り割いて（それを掠奪して、私有して）自分に分けてくれるばかりである。それは國家の財產である。

けれど國家に反して、自分は其處にまだ偉大な力が自分に殘されてゐることを次第〳〵に明らかに感じさせられる、それは自分自身卽ち自分にのみ與かる一切の上の力で、それは唯だ私自身

であることによつてのみ存在する力である。

若し自分の道が最早國家の道でなく、自分の思想が最早、國家の思想でないとすれば、その時、自分はなにをやるか？ 自分は自分自身を眺めて、國家に何等の註文をもしない！ 自分がなん等の許諾、是認、恩惠によつて裁可されない自分の思想に於てのみ、自分は自分の眞の財産を持つ、そしてその財産によつて自分が取引することが出來る。なぜなら、それ等は自分の所有として自分の被造物である、そして自分は他の思想と交換する爲めにそれ等を與へるべき位置にゐる。自分はそれ等を投げ與へてその代りに他のものを取り入れる、その時、それは自分の新らしく購入れた財産である。

それなら自分の財産とはなにか？ 自分の力の中にあるところの物以外の何物でもない！ 自分はどんな財産に對して資格があるのか？ 自分が自から權力を與ふる(ermächtige)凡ての財産に對しで。自分は自分自身に財産を取ることに於て、又は自分自身に所有主の力、充分な力、權力を與ふることに於て財産の權利を私自身に與へる。

自分がそれに對して力を有してゐる一切、自分から切り離すことの出來ない一切が自分の所有として殘る。だから、力に財産を決定させよう、そして自分は自分の力から一切を期待しよう。

自分が他に委ねる外的な力は自分を所有される奴隷とする。だから自分自からの力によつて自分を所有人となさしめよ。その時、自分をして、自分自からの力を尊敬し、無智から他人に讓與した力を引き出さしめよ！　自分の力の到達する範圍が自分の財産であると自分自身に對して云はしめよ。そして自分をして自から充分到達し得る力を感じ得る一切を自己財産として宣言せしめよ、そして私をして自分の實際の財産を自分の資格ある限り、卽ち――取るだけの力を自分に與へる限り擴張せしめよ。

玆に於てエゴイズムと、利己とが決定されなければならない。それは愛の原則ではない、慈悲温和、善良の如き愛の動機からでも、若しくは正義と公平でさへもない(なぜならjustitia は又愛の一現象であり、愛の所産だからである。)愛は唯だ犧牲を知り、『自己犧牲』を要求する。

エゴイズムは何物をも犧牲とすることを考へない、自己の欲する如何なる物をも與へることを欲しない。それは單に、自分の欲する物を自分は持たなければならず、そして獲得しようと云ふことを決定するのみである。

財産に關して合理的律法を制定しようとする凡ゆる企ては愛の港灣から荒寥たる法則の海にまで押し出した。社會主義及び共産主義すらこれから期待され得ない。各人は相應な生活資料を供

給されなければならない、それに對して、人が依然として社會主義的に私有財産を發見するか、若しくは物品の共有から共産主義的にそれ等を引き出すかは問題ではない。これに對する個人の心は同一である。それは依然として、從屬の精神である。分配する公平局(Billigkeitsbehörde)は單に公平の觀念、萬人に對するその愛の懸念が指定するものを持たしめる。個人としての自分にとつては個々の他人の財産の場合に於ても亦集合財産の場合に於ても同様に妨止が横つてゐる。孰れもそれは自分のものではない。その富が集團に從屬しても、(それは一部分を私に賦與する)或は個人的所有者に屬しても、自分にとつては同一の抑制である、自分はその孰れに就ても決定し得ないから。これに反して、共産主義は、凡ゆる私有財産の剝奪によつて單に自分をより多く他に、卽ち一般性、若しくは集團に從屬せしめる。そしてそれは常に大聲で『國家』を攻撃してはゐるが、それの企圖することはそれ自から一個の國家であり、status であり、自分の自由運動を妨げる狀態であり、自分の上の至上權力である。共産主義は正しく自分が個人的所有者から經驗する壓迫に對して叛逆する。しかしそれが集團の手中に自分を置く力は更にそれ以上恐ろしいものである。

エゴイズムは無産の賤民を根絶するべく他の方法を取る。それは公平局が集團の名に於て諸君

に賦與するところのものを待てとは云はない（なぜならかくの如き惠與は最も古い時代から『國家』に起つたのである、そして各人は『彼の功蹟に從つて』受け取り、各人がそれに價する程度に從ひ、奉仕によつてそれを獲得してゐた）、だが、汝の要求する物を手當り次第に掠奪せよ！玆に於て萬人の萬人に對する爭鬪が宣言される。自分のみが自分の所有する物を決定する。『さて、それは實際、何等新らしい智識ではない、なぜなら自己探求者は凡ゆる時代に於てかくの如く行爲した！』だが、それが新らしいと云ふことでは又少しも必要なことはない、唯だその自覺が現在してゐるか否かが重大である。だが、これは、恐らく埃及やスパルタの法律を承認するに非ずんば、偉大なる時代の宣言をすることは出來かねるであらう。なぜなら、如何にそれが流行しないかと云ふことは『自己探求者』を侮蔑をもつて語る如上の非難からさへ覗はれる。人は正にこれを知るべきである、即ち掠奪の行爲は侮蔑すべきではなく、彼自からと一致するエゴイストの純粹行爲を示現するものである。

　自分が個人からも亦集團からも、自分が自分自身に與へ得るものを期待しない時にのみ、その時にのみ、自分は――愛の係蹄（わな）から滑べり出る。賤民はそれが掴かむ時にのみ賤民たることをやめる。掴かむことの恐怖と、それに相應する刑罰のみがそれを賤民にする。掴かむことのみが

罪であり、犯罪である、――この信條のみが賤民を創造する。なぜなら、賤民が依然としてそのあるがままの狀態に止まると云ふ事實は（なぜならそれがその信條に證據を與へるが故に）『自己探求的に』（かれ等にその御好みの言葉を與へれば）信條が尊敬せらるべきことを要求する人々と同樣に非難せらるべきである。要するに、その『新らしき智慧』の自覺の缺乏、舊き罪惡の自覺はその非難を擔ふのである。

若し人々が財產に對する尊敬を失ふ點に到達するなら、各人が財產を持つであらう、それはすべての奴隷が最早、主人として主人を尊敬しなくなるや否や自由人になると同一である。その時結合が、この場合に於ても個人の資料を增加し、彼の襲擊された財產を安全にするであらう。

共產主義者の說に從へば、自治體が所有主にならなければならない。これに反して、自分が所有主である、そして自分は唯だ自分の財產に於て他人とある了解を仕合ふことが出來るばかりである。若しその集團が自分に相應することをやらないなら、自分はそれに叛逆して、自分の財產を防禦する。自分が所有者である、けれど財產は神聖ではない。自分は單なる所持者で甘んずべきであらうか？　否、これ迄、人は唯だ所持者であつた、それは僅かに一小部分を他人に與へて自己の一小部分の所有を安全ならしめたのである。けれど今、一切は自分に所屬する、自分は自

分の要求する一切の所有者である。若しそれが社會的に云はれるなら、社會は自分の要求するところの物を自分に與へる、——その時エゴイストは、自分は自分の要求する物を取る、と云ふ。若し共産黨員が自からを襤褸人として指導するなら、エゴイストは所有人として行爲する。

愛の原則から出發する一切の友愛團體（Pöbelbeglückungsversuche）と賤民を幸福にせんとする企圖は失敗しなければならない。エゴイズムからのみ賤民は助けられる、そしてこの救助はそれがそれ自身に與へなければならない、そして——それ自からに與へるであらう。若しそれが自からに恐怖を强ゆることを許さないなら、それは一個の力である。『民衆は若し何人かがかれ等を恐怖に强ひなかつたなら凡ゆる尊敬を失なふであらう、』と妖怪法律が "Der gestiefelte Kater" 中に云つてゐる。

故に、財産は廢除せられもしなければ、されることも出來ない。それは寧ろ妖怪的手中から掠ぎ離されて、自分の財産にならなければならない。その時、自分は自分の要求するだけの物を所有する資格がないと云ふ誤まつた意識が消滅するであらう。——

『だが人間の要求出來ないものはなにか！』さて、何人によらず、多くを要求し、如何にそれを獲得するかを理解してゐる人は、いつでも、彼自身をそれに供給した、ナポレオンが大陸に對し

てやつた如く、佛蘭西がアルジエ(Algiers)に對してなせし如く。故に、精確な要點は尊き『賤民』が自からの要求する物に自からを持つて行くことを學ばなければならないと云ふことである。若しそれが諸君にとつてあまり出過ぎるならば、その時、諸君自身を防禦せよ。諸君は少しも性善良になる必要はない――その上に何物をでも提供せよ。そして、それがそれ自からを知ることを學ぶ時に、――或は寧ろ、賤民の何人かが自からを知ることを學ぶ時に、彼は諸君の惠與を感謝をもつて拒むことによつて賤民性をぬぎ棄てる。しかし、若し賤民がそれ自からの爲めに何事をかすることが出來るが故に諸君の恩惠によつて生活することを喜ばないからと云つて、かれ等を『罪ある犯人』であると宣言することは滑稽である。諸君の惠與はそれを欺き、それを誤魔化す。諸君の財産を防禦せよ、その時、諸君は強くなるであらう。若しそれに反して、諸君が諸君の惠與する才能を保存しようと思ふなら、――そして恐らく實際、諸君が施與(貧民稅)を與へることが出來れば出來るだけ、より多くの政權を持つに至るであらう、――これは受領者が諸君にそれを行はせてゐる間繼續するであらう。

要するに、財産の問題は、社會主義者、否共産主義者等の夢のやうにすら穩やかに解決されることは出來ない。それは萬人か萬人に對する戰ひによつてのみ解決される。貧乏人はかれ等が―

―立つ時にのみ自由になり、所有者になる。かれ等の上に多くを與へて見よ、かれ等は更にそれ以上を要求するであらう。なぜなら、かれ等は――遂に、最早、これ以上與へられる物がないと云ふまで要求するのである。

けれど若し持たない者が振ひ起るとすればその時、どんな結果が起るであらう、と云ふ質問が發せられるであらう。その納まりはどんな風に付くか？　これはどんな風に自分が子供の無邪氣さを拔ぎ棄てるかと問ふのと同じである。奴隷が彼の桎梏を破棄すると同時にどんなことをするか、人は――待たなければならない。

内容も形式も整はざる無價値なカイゼルのパンフレットの中に(『社會主義及び共産主義に關する所有者の人格』)、彼は財産の平等を國家に希望してゐる。いつでも國家だ！　いつでも親爺だ！(Immer der Staat! der Herr Papa!)教會が信者の『母』と宣言され、仰がれたやうに、國家は全然謹直な父の面影を持つてゐる。

競爭は市民主義と最も嚴密に關聯してそれ自からを示してゐる。それは平等(égalité)以外のなんであらう？　そして平等は中流階級の民衆によつて齎されたあの同一革命の所産ではないか？

何人も國家内に於ける全ての者と競爭することから妨げられず（但し君主は例外である、彼は國家それ自からを代表するが故である）自から最高の位置に攀じ登り、さうだ、彼自身の利益の爲めにかれ等を顚覆し、或は利用し、かれ等の上に遙か舞ひ上り、强烈な努力によつてかれ等を都合よき境遇から剝奪するが故に、――これは各人が國家の法庭の前に『單なる個人』の價値しかなく、そして何等の偏愛主義に預からないことを明らかに證據立ててゐるのである。諸君は相互に自分の好むがままにエラクなり、高く買ふがいい、それは、國家と云ふ私の邪魔にはならないだらう！　諸君は諸君自身の間に勝手に競爭するがいい、諸君は競爭者だ。

それが諸君の社會的位置である。けれど、國家と云ふ自分の前に、諸君は『單なる個人』以外の何物でもない。（Hinrichs, "Politische Vorlesungen," I.280）

原則又は理論の形に於て萬人の平等として陳述された物が玆では競爭によつてその實現と實際的運行を發見した。なぜなら平等（エガリテ）は――自由競爭だからである。萬人は、國家の前には、――單なる個人である。社會に於て、又は相互の關係に於て、――競爭者である。

君主と彼の家族とを除外した他の全ての人々と競爭することが出來る爲めには單なる個人以外の者になる必要はない。それは以前、各人がそれぞれの集團内に於てのみ努力の自由を享樂して

ゐたと云ふ事實によつて不可能になつてゐた自由である。

ギルド並に封權制度に於ては、國家はさま〲な特權を氣むづかしい狹量な態度で許してゐた。競爭主義と自由主義に於ては、寛大な放恣な態度に於て、特許（商賣が自由に公然と出來ると云ふことを條文が請求者に確かめてゐる。）若しくは『免許』を許してゐる。さて、國家がかくの如くすべてを請求者に許すなら、すべてはその爲めに鬪爭しなければならない、なぜなら各人すべてが請求をする資格があるからである。國家は『襲擊される』であらう、そしてこの暴風雨の中に沒落するであらう。

『自由競爭』はそれなら眞に『自由』であるか？　否、それは眞に『競爭』であらうか？　それは人々が一切の人間的規約がら自由になることにその根底を置いた。けれど、國家が、市民主義のこの支配者が無數の墻壁によつて包圍する時に競爭は果して『自由』であらうか？　たとへば玆に素晴らしい商賣を營んでゐる金持の製造業者があるとする。そして自分は彼と競爭したいと思ふ。『どん〲やれ、』と國家が云ふ、『私は競爭者としての君の人格に對して何等の抗議をも申し込まない。』なる程、自分は答へる、だが、それにしても自分は建築の空地と金が入るのである！『それは困る。だが君に金がないなら君は競爭することは出來ない。君は何人から何物をも奪つ

てはならない、なぜなら、自分は財産を保護してそれに特權を與へてゐるから。』自由競爭は『自由』ではない、なぜなら自分が競爭た要する物品（Sache）を缺いてゐるから。自分一身に對して何の反對もされない、けれど自分が物品を持たないから、自分は又後方に退却しなければならない。そして誰れがその必要な物を持つてゐるのか？ 恐らくその製造業者か？ どうだ、自分は彼からそれを奪つては！ 否、國家が財産としてそれを持つてゐる、製造業者は單に分前としてそれを所持するばかりである。

けれど、製造業者に對してそれを試みることは何の役にも立たないから、自分は法理學の教授と爭はう。その男は愚物である、そして、彼より百倍以上も知つてゐる自分は彼の教室を空虚にしよう。『君は勉强して、卒業したか、友達よ？』否、だがそれがどうしたのか？ 自分はその方面の智育に必用なことを澤山に理解してゐる。『御氣の毒ですが、競爭は玆では『自由』ではありません。あなた御自身に就てはなにも申上ることはありませんが、肝要の品物、博士號が缺けてゐます。そして、國家はこの免許狀を要求します。先づ恭々しくそれを私に請求なさい。その時、私共は相應なことをいたしませう。』

であるから、これは競爭の『自由』ではない。自分の君主の國家が先づ私に競爭する資格を與へ

るのである。

けれど人々は眞に競爭するのか？　否、それは唯だ品物ばかりである！　先づ第一に金(等)である。

競爭に於ては、甲は常に乙の背後に殘される（たとへば、へボ詩人は詩人の背後に）けれど、不幸な競爭者の缺如してゐる方法が人格的であるか物質的であるかの差異が其處に生ずるのである、そして又物質的手段が個人的精力によつて獲得されるか、若しくは恩惠によつてのみ、贈り物としてのみ獲得されるかの相異がある。たとへば貧乏人が金持にその財寶を任かせ(即ち捧呈)なければならないやうに。だが、若し自分が如何なる場合にも（たとへば卒業の場合に於て）その方法手段を獲得し又使用する爲めに國家の承認を待たなければならないならば、自分は國家の恩惠によつてその手段を得るのである。(註――專門學校や大學(等)で、貧乏人が金持と競爭をする。けれど大低の場合かれ等は官費生としてのみそれが出來るのである――これは重要な點で――自由競爭が未だ勢力ある原則とならない時代から我々に繼承されたのである。競爭の原則は官費制度を認めない、唯だ諸君自身を助けよ、即ち諸君自身にその手段を講ぜよと云ふばかりである。そして又國家がかくの如き目的から與へたにしても、それは功利的動機から仕拂

ふので、單にそれ自からの爲めの『奴僕』を養成せんが爲めである）

故に自由競爭は左の如き意味を有してゐる。國家た對して萬人は悉く平等な子供たるの資格を有してゐる、そして各人は國家の品物と贈り物とを儲けんが爲めに、東奔西走することが出來る。故に萬人は（たとへば金、地位、爵位等）なんに限らず品物を持つこと、掴むこと、所有することに躍起する。

市民の精神では、各人が所得人であり、若しくは『所有人』である。さて、大抵の人間が有るか無きかの物を持つてゐると云ふことはどこから來てゐるか？　これからだ、即ち大抵の人々が既に少なくとも所得人であることを喜んでゐるからである、たとへその所得が若干のボロであるにしても、恰かも子供達が始めて着けるズボンや、始めてもらふ一ペニイを喜んでゐるやうに嬉しがつてゐるからである。しかし、更に精確に云へば事情は次のやうなことになる。自由主義は人間の本質が所有ではなく、所有者たることに存すると云ふ宣言をもつて現はれて來た。けれど、その考察は『人間』に關することで、個人に關してではないから、（個人の特別なインテレッセの點になつてゐる）どれ程と云ふことが個人に殘された。故に個人のエゴイズムはこのどれ程の中で最も自由な活躍をすることが出來、それによつて倦くことを知らない競爭を持續した。

しかしながら、幸運なエゴイズムはより不運な者の道程の障害物にならなければならなかつた。そして後者は、依然として人道主義の上にその立脚地を定めて所得の幾千と云ふ問題を進め、『人間は自からの要求するだけの物を持たなければならない』と云ふ結果にまでそれを回答した。

自分のエゴイズムは果してよくそれに滿足せしめられるであらうか？『人間』が要求する物は決して自分や自分の要求を定める標準を供給はしない。なぜなら自分はその多少を使用することが出來るばかりだからである。自分は寧ろ自分が充足して恣に使用することが出來るだけを持たなければならない。

競爭は競爭すべき手段が各人の意のままにならないと云ふ不都合な狀態から苦しむ、なぜならそれ等の手段は人格から取り出されるのではなく、偶然から取り出されるからである。大抵の人々は資本を持たない(unb mittelt)だから品物を持たない(uubegütert)ことになる。

由來、社會主義者等は萬人の資料(Mittel)を要求する、そして、資料を供給する社會を目的とする。諸君の金錢の價値を、我々は最早、諸君の『資格』(Vermrögen)として承認しないとかれ等は云ふ。諸君は他の資格、——即ち諸君の勞働力(Arbeitskräfte)を示さなければならない。財產

の所有に於て即ち『所持者』として、人はたしかに人としての彼自身を示してゐる。この理由からして我々が『所有主』と呼んでゐる所持者をして彼の位置を永く保留せしめたのである。けれど諸君は諸君が『この財産から除外』されない限りその品物を所持するのである。

所持者には權能がある、けれどそれは唯だ彼以外の者が無能力な間だけである。諸君の品物が諸君の權能を形造るのは諸君がそれを防禦する力がある間だけである（即ち、我々にそれをどうする力もないからである）、諸君の周圍にある他の權能を警戒し給へ、我々は今、我々の力によつて諸君の確立された權能を優越するのである。所持者として尊敬される點が貫徹された時には其處に異常な大收獲が行はれた。その爲めに奴隷奉仕が廢除された、そして從來君主の奉仕に束縛され、多少に拘らず彼の財産であつた各人が今や『君主』になつた。けれど今後は諸君の持つこと、諸君の所持品は最早充分でなく、そして承認せられない。それに反して諸君の働らくことと諸君の勞作とが價値を生ずる。我々は今、以前に諸君が品物を所持したことを尊敬したやうに、諸君が品物を征伏することを尊敬する。諸君の勞作が諸君の權能である！　諸君は勞作によつて産み出す物のみの君主であり、又所持者である、そして繼承によらない。けれど凡ての物が相續によつて得られ、諸君の所持する貨幣が悉く勞作のスタンプを押されず、相續スタンプを押された時

代に於けるが如く、一切が混同されなければならない。

けれど、その時、自分の勞作は、かの共産主義者が想像する如く、眞に自分の唯一の權能であらうか？　若しくはこれが寧ろ自分の權能の範圍に於ける一切に於て成立されてゐるのではないだらうか？　そして勞働者の社會それ自からが——たとへば病者や、子供達や、老人——即ち働くことの出來ない人々を扶養することを——許容しなければならないのではあるまいか？　かれ等が自からの生命を取ることの代りにそれを保存する力が其處になほ存在してゐるのである。若しかれ等にしてその存在を繼承せしむる願望を諸君に起させるだけの力があるなら、かれ等は諸君に對して力があるのである。諸君に對して全然無力な者に對して、諸君は何事をも許しはしないであらう。彼は自滅するかも知れない。

だから、諸君がそれに對して力を持つことの出來るものが諸君の權能である！　若し諸君にして數千人に對して快樂を供給する能力があるなら、その時數千人はその爲めに諸君に謝禮金を仕拂ふであらう。かれ等にそれを忍んで爲さしめるのは諸君の能力の仕業である。なぜならかれ等は諸君の行爲を買はなければならないからである。若しも諸君が何人をも捕へる力がないならば諸君は單に飢死するかも知れないのである。

さて、多量の力ある自分が、恐らくより無力な者に對して何の利徳をも得てはならないのであるか？

我々は皆んなふんだんの眞中(たゞなか)にゐる、そして自分は自分が出來るだけ自分自身にそれを取り入れてはならないのか、そして唯だく平等な分配に於て自分に宛てがわれるものを傍觀して待つてゐなければならないだらうか？

競爭制度に反對して貧乏社會の原則、——即ち分配が勃興する。

社會の單なる一部分として見做れることを個人は我慢出來ない——なぜなら彼はそれ以上だからである。彼の唯一性はこの制限された概念を反撥する。

故に、彼は他人の分配から彼の充足を期待はしない、そして勞働者の社會に於てさへ、平等の分配と云ふことから强者が弱者によつて利用されるだらうと云ふ疑惑が起る。彼は寧ろ彼自身から彼の充足を期待してゐる、そして、今や、自分の權能によつて所有することの出來る物、それが自分の充足であると云ふ。子供はその微笑や、遊戲や、叫喚によつてどんな權能を持たないと云へるだらう！　つまり、その單なる存在によつて！　諸君は子供の慾望に抵抗することが出來るか？　若しくは、諸君は、母として諸君の胸を子供に差し出さないでゐられるか、又父として

子供の要求するだけを諸君の所有から切り離さないでゐられるか？　子供は諸君を强迫する、故に、子供は諸君が諸君のものと呼ぶところのものを所有することになる。若し諸君自身が自分に必要であるなら、諸君は諸君の存在その物によつて自分に仕拂つてゐるのである。若し自分が諸君の性分の一つのみに關はつてゐるなら、その時、諸君の同意、恐らく又諸君の補助が自分に對して一個の價値（金錢價値）を持つてゐる、そして私はそれを買ふ。

若し諸君が私を評價するに當つて金の價値以外の物を諸君自身に與へることを知らないなら、其處には祖國の子等なる獨逸人等が亞米利加に賣られたと云ふやうな歷史が我々に語つてゐる場合が起るかも知れない。自から賣買されることを許す者は賣り手にとつて價値ありと思はせることが出來るだらうか？　賣り手は彼に對して自からを如何に貴くすべきかを知らなかつたこの生ける物品よりも現金の方を擇んだのである。彼がその中により多くの價値を發見出來なかつたことは確かに彼の權能の缺點ではあつた、けれど自分の持つ以上の物を與へるには惡漢を必要とする。

諸君は諸君が相互に對し所持者としても、貧乏人としても又は勞働者としても尊敬を拂はず、唯だ諸君の充足の一部として『必用な品物』として見做す時に自我的に行爲するのである。その時

諸君はその所有の爲めに所持者に對して何物をも與へることなく、又その勞働の故に勞働者に對して何物をも與ふることなく、單に諸君の要求する人に對してのみ何物かを與へるであらう。北米人は、我々は帝王を必要とするか？　とかれ等自身に訊ぬる、そして、彼と彼の勞働とは我等によつて一文をも價せずと答へる。

競爭制は一切を萬人に公然と投げ與へると云ふことが云はれるなら、その發想は精確ではない、そしてそれは競爭制は一切を賣り物とすると云ふやうに改めらるべきである、一切を萬人に委せることによつて、競爭はかれ等の値段即ち評價にそれを任かせ、それに對する金錢價値を要求する。

けれど所謂購買者は大抵自からを購買者たらしめる資格を缺いてゐる。かれ等には金がない。その時、買はるべき物は實際、金によつてのみ交換される『金によつて一切が所持されるべきである！』）、けれど實際、缺乏してゐるのは金である。だが、人はこの流通する財産たる金を何處に求むべきであるか？　その時、諸君は諸君の——力だけの金を持つことが出來ることを知れ。なぜなら諸君は諸君自身の權能を增加するだけ諸君を價値あるものとすることが出來る。

人は金を持つて仕拂はない、金は缺乏することがあるかも知れない、けれど彼の實力を持つて

する、それによつてのみ我々にその『資格』が出來る。なぜなら人は我々の權力の到達する範圍内に於てのみ所有主であるから。

ワイトリングは仕拂の新方法を案出した、——即ちそれは勞働である。けれど、支拂の眞の方法は依然として常に實力である。諸君は『諸君の實力の範圍』をもつて仕拂ふ。故に、諸君の實力の擴大を考へるがいい。

これが許容されてゐるにも拘らず、人々は再び『各人はその實力に從つて！』と云ふ標語に捉へられてゐる。自分の實力に從つて何人が自分に與へてくれるのか？　社會か？　その時、自分は社會の評價を甘んじて忍ぶべきであらうか。寧ろ、自分は自分の實力に從つて取るであらう。

『一切は萬人に所屬する！』(Allen gehört Alles) この命題は同一の抽象的な理論から湧き出して來る。各人には唯だ彼がそれに對して權力を有する物のみが所屬する。若し自分が、この世は自分に所屬すると云ふなら、それも亦多分空言であり、それは自分が何等外的な財産に敬意を拂はない限りに於てのみ意義がある。けれど、自分には唯だ自分に資格ある物のみ、即ち自分の實力の範圍内に於て所有することの出來る物のみが所屬する。

人は自分の弱さから人に取られる物を持つ資格はない。人は自分の能力のない物を持つだけの

資格はない。

人々は富者が貧者に對して行つた『數千年の惡業』に對して怒號する。恰かも金持が貧乏の存在の爲めに非難され、そして貧乏人は同樣に金持に對して無責任であるかのやうに！　其處に兩者の間には能力と無能力と、實力者と無能力者以外になん等の差があるのだらう？　まあ、金持の犯罪はなんによつて成り立つのか？『かれ等の無情冷酷に於て。』けれど誰れが貧乏人を支へて來たか？　誰れがかれ等の扶養を顧慮して來たか？　誰れが施物を與へたか、慈善（eleemosyne）と云ふ名稱を冠するそれ等の施物を？　金持はいつでも『慈悲深く』なかつたであらうか？　かれ等は今日迄、貧民税や、慈善病院や、あらゆる種類の基本金（等）が證明してゐるやうに、『やさしい心根』を持つてはゐなかつたらうか？

だが、すべてこれか諸君を滿足させない！　勿論、それならかれ等は貧民と共に分配するべきであるか？　さて、諸君はかれ等が貧乏を絶滅すべきことを要求しつつある。諸君の中にはそのやうな行爲をする者は一人もないかも知れない、そして若しあつたにしろ、それは馬鹿かも知れないと云ふやうなことから離れて、諸君自身に訊ね給へ、なぜ、金持はかれ等の羊毛を手放してかれ等自からを、投げ與へ、それによつてかれ等自からのよりも寧ろ貧民の利益を追求するのか？

と。日々諸君のタラアを持つ諸君は、四グロッシエンで生活する數千人以上に金持である。數千人と共に分配し合ふことは諸君のインテレッセの爲めであるか、或は又寧ろかれ等のインテレッセの爲めなのであるか？——

競爭制にはなんによらず物事を最上にしようとする意向よりも、それ等を出來るだけ、有益に、生產的にしようと云ふ意向の方が多い故に、人々は市民的奉仕に入り込まふとして勉强する（壺中煮沸勉强）、それは縋がり付きと、御世辭と、手續きと、『實務の熟知』と『見てくれ』の爲めの仕事である。故に、それは一見『よき奉仕』をすることであるが、實は唯だ『よき仕事』で、金儲けと云ふことばかりが專心になる。仕事は上部では仕事の爲めにされてゐるが、その實、その仕事の生み出す所得の爲めなのである。人は別段、好んで檢閲官になりたがりはしないかも知れない、けれどなにしろ昇進がしたいのである。人は自分の最善の確信に從つて裁判官たり、行政官になりたいであらう、しかし左遷や免職を恐れてゐる。人は、先づ第一に、——生きなければならない。

かくしてこれ等の行爲は悉くいとしい生活の爲めの戰ひである、そして漸次、上の方の多少に拘らず『よき生活』をしたいが爲めなのである。

そして、しかもそれに拘らず、かれ等の努力と煩慮の全廻轉は精々唯だ『苦い生活』と『苦い貧乏』とを齎らすのみである。一切が唯だ苦い辛勞である！

不斷の獲得は我々に息を吐かせず、穩やかな享樂を取らしめない。我々の所有の快樂を得ることが出來ない。

けれど勞働の組織は單に他の人々が我々の爲めにすることが出來るやうな勞働――たとへば屠殺、耕作等――に觸れるのみである。自餘は依然として自我的である、なぜなら、たとへば何人も諸君の代りに諸君の音樂上の作曲を彫琢することが出來ず、諸君の繪畫の構想を案出することは出來ない。何人もラフハエルの勞働に代はることは出來ない。後者は唯一者の勞働である、それは唯だ彼のみが成就し得る能力を持つてゐる、しかし前者は『人間的』と稱せられる價値がある、なぜならそれ等の場合に於ては何人の自我も殆んど省みられない、そして殆んど『何人』もそれに熟練され得るのである。

さて、社會は唯だ共通の利益と、人間的勞働のみを承認する、無二なことをする者は依然として社會からかまわれない、否、彼は社會の干渉によつて自から迷惑を蒙るかも知れない。無二な人間は自から社會を脫け出してもよからう、けれど社會は決して無二な人間を產み出しはしない。

故に、少なくとも我々は人間的勞働が、競爭制の下に於けるが如く、我々の時間と勞力とを宣言しないやうな約束を結ぶと云ふことが必要である。その點で共產主義はその結果を生み出すのである。なぜなら、民衆の領土にあつては、たとへ萬人が資格を與へられてもこれは僅少なものに結び付けられ、自餘のものから拒まれるからである。それが特權であつた。民衆にとつては各『人』の爲めに存在してゐるやうに見ゆる一切を自由に任かすことが公平に思はれた、けれど、自由に放擲されてゐることは、それが未だ何人にも與へられてゐないことである、しかし寧ろ各人の人間的力によつて把持すべく放任されたのである。これによつて精神が人間的の獲得に向けられた、それは由來各人を差しまねいた。そして、其處には人が『物質主義』の名の下に聲高く呻吟する運動が起つた。

共產主義はその道程を阻まふとする、そして人間的は左程に多くの苦痛に慣するものではなく明敏な組織の下に、これ迄要求せられた多大な時間と勞力の消費を要せずして獲得せられ得ると云ふ信仰を宣傳した。

けれど、何人の爲めに時間が獲得されるべきであるか？　人間はなんの爲めに自己の疲勞せる勞力を慰安するに必要以上の時間を要求するのか？　茲で共產主義は沈默してしまふ。

なんの爲めに？　彼が人間としての自己の務めを果した後に、唯一者として自からの慰安を取る爲めに！

人間的な一切な物の方にかれ等の手を延すことを許された第一の歡喜の爲めに、人々はその他の一切を要求することを忘れた。そしてかれ等は、恰かも人間的の獲得が我々の願望一切の目的ででもあるかのやうに烈しく競爭した。

けれどかれ等は焦りすぎて自からを疲勞させた、そして次第に『獲得は幸福を與へない』ことを氣付き出した。それ故にかれ等はより容易な取引によつて必要品を得、單に缺くべからざる時間と勞力を費やすことを考へるやうになつた。金持の價値が下落して、滿足する貧乏と、世話の燒けない襤褸人とが誘惑の理想になる。

各人がそれに向つて自己の才能を確信する如き人間的諸活動は、高き報給を仕拂ひ、生活力全部の勞力と消費をもつて求めらるべきであらうか？　『若し自分が大臣に、若しくは……になれば、その時、それは全然變化するであらう』と云ふやうな日常の演説中に於ても、その確信は、——人は誰れでもかくの如き高官の位置にその職責を果すことが出來ると云ふことを發想してゐる、また人はその中で、この種の物には唯一性が從屬しないことを洞察する、唯だ其處には教養

が必要なばかりであるが、それとてもたとへ萬人によつてそれが得られないまでも、少なくとも、多數によつて到達せられる、——即ちかくの如き物に對して人は單に平凡人であることを必要とする。

秩序が國家の本質に從屬する如く、服從も亦その性質の根柢をなしてゐると我々が假定するならば、その時、我々は、服從者、卽ち昇進を受ける人々が、自分の下級にゐる人々に不釣合な難題を持ちかけて、かれ等を欺く、しかし下級者は勇氣を振ひ起す、(最初は社會主義的見地から、しかし後には確かに自我的な意識をもつて、——故に、我々は直にかれ等の言說にある色彩を與へることになる)そして、それなら汝等の財産はどうして安全なのか、汝、高位高官にある汝等よ? と質問する、——そして、我々が干涉を抑制してゐるから! と云ふ答へを自からに對して與へてゐる。そしてだから、我々の保護によつてである! そして、汝等はその代りとして我々になにを與へるのか? 足蹴けと侮辱とを汝等は『平民』に與へてゐる。警察の管理と、『汝等のものでない物、他人に屬する物を尊敬せよ! 他人を尊敬せよ、特に汝等の眼上の人々を尊敬せよ!』と云ふ重なる文章の書かれてある問答敎示法を與へる。けれど、我々はそれに答へて、『若しお前達が我々の尊敬を要求するなら、我々に納得のゆく値段でそれを買ふがいい。若し汝等が

我々のかくの如き放任に對して適當なものを與へるなら、汝等の財産を汝等に任かせて置くであらう。』實際、將軍は、平和時に於て、彼の數千の收入に比較するどんな物を與へてゐるか、又他の者は數百萬圓の歳入に對してどれだけの物を與へてゐるか？　汝等が蝿を呑み込んでゐる間に芋を嚙つて、おとなしく眺めてゐる我々に對して汝等はどんな物を與へてゐるか？　唯だ我々が汝等　芋を買はなければならないだけ我々の蝿をそれだけ高く買へ、それなら汝等はそれを食べ續けてもいいのだ。若しくは汝等が蝿は汝等に屬して、我々に屬するものではないと想像するのか？　若し我々の手を延ばして、それを勝手に消費すれば、汝等は强奪だと叫ぶであらう、如何にも尤もである。强奪をやらなければ我々はそれを取ることは出來ないのだ、それは汝等が我々から强奪してそれを持つのと同一である。

けれど蝿は蝿として、我々は一層近い我々の所有たる勞働を考へてみよう。なぜなら、勞働こそ唯一の所有だからである。我々は額に汗して十二時間自からを苦しめてゐる、そして、汝等はそれに對して我々に數グロッシエンを提供するばかりである。それなら、汝等の勞働に對しても亦同一を取れ。汝等はそれを欲してはゐないのか？　我々の勞働がその賃銀をもつて豐かに支拂はれ、一方で、汝等のそれが數千タラァの賃銀に價してゐると想像してゐる。けれど若し汝等が

汝等をしかく高く價打付けず、我々の價値をよりよく實現すべき機會を與へたならば、その時、我々は、若しその場合がそれを要求するものとして、汝等が數千タラアの爲めにするよりも更により重要な物を生產するかも知れない。そして、若し汝等が我々同様の賃銀しか取らないとすれば、汝等はやがてより多くを受け取る爲めにより多く勤勉になるかも知れない、けれど、若し汝等が我々自からの勞働より數萬倍我々に價打あるやうに思はれる仕事をするとしたなら、その時汝等はまたそれに對して更に數百倍を取るであらう。一方に於て、我々は又汝等の爲めに種々なる物を生產しようと考へる、そして汝等ならばそれに對して日常の賃銀以上に高い賃銀を要求ずるであらう。我々は相互にうまく暮らして行かうと欲してゐる、けれど我々は先づこのことを約束しよう、——孰れも最早——何物をも他に對して贈呈する必要がないと云ふことを。その時、恐らく我々は實際、片輪や、病人や老人にすら支拂ふやうなことをするかも知れない、即ちかれ等が飢餓や缺乏によつて我々から離れない爲めに適當な賃銀を仕拂ふのである。なぜなら、若し我々がかれ等を生かして置かうと思ふならば、我々が——我々の意志の成就を買ふことが當然になる。私は『買ふ』と云ふ、だからそれは慘めな『施與』を意味してはない。なぜならかれ等の生命は働らくことの出來ない人々さへ持つてゐる財產である。若し我々が(その理由はなんでも)この生

命を我々から離さないことをかれ等に要求するならば、我々はこれを唯だ購ふことによつて實現することが出來る。否、我々は恐らく（多分我々が我々の周圍に親し氣な顔を持つことを好むが故に）かれ等の爲めに安樂な生活をすら欲するであらう。要するに、我々は汝等から何物をももらひたくないと同様、又我々も汝等になに物をもやらないであらう。數世紀の間、我々はおひとよし――即ち愚鈍から汝等に施與を與へた、貧乏人の些少を分配して、主人に主人の物でない物を與へた。さて先づ汝等の財布を開け、なぜなら我々の品物は價格が恐ろしく騰貴してゐる。我々は汝等から何物をも取らうとは思はない、唯だの少しでも、だから汝等が持ちたいと思ふものに對してよりよく拂へばいいのである。それなら汝等は何を持つてゐるか？　『私はチエイクルの屋敷を持つてゐる。』そこで、自分は汝の小作人である、だからたつた一日一弗の賃銀で汝の畑へ出なければならないと云ふのか。『それなら私は他の人間を傭はう。』ところで、誰れも見付からない、なぜなら我々小作人等は最早それ以外ではなにもやらないから、そして若し誰れかがそれ以下で働らくやうな額付をするなら、その時、彼は我々を警戒するがいい。玆に又下婢がゐる、彼女も亦同様な要求をする、そして汝は最早、この賃銀以下では誰れも見出し得ないであらう。『どうして、それなら、もう自分は萬事休すだ。』さう早合點しなくともいい！　汝は勿論、我々

と同じだけを取ればいい、若しさうならない時は、我々は汝等がそれによつて我々と同様に生活するだけの物を取り去るであらう』けれど、自分はよりよき生活に慣らされてゐる。』我々はそれに就て何の反對もしないけれどそれは我々の闘するところではない。若し汝がもつと乘り越すことが出來るなら、前進せよ。汝等がよき生活をする爲めに、我々は低廉な賃銀で傭はれなければならないと云ふのか？ 金持はいつでも『お前達の困るのをなんで己が知るものか？ 先づお前達が如何にして世の中に處して行くか考へるがいい、それはお前達の事柄で、私のことではない』と云ふ言葉でもつて貧乏人を退ける。よろしい、それを又我々の事柄にしようではないか、そして、我々が、我々から價値を實現すべき手段として金持から掠奪されないようにしようではないか。』だが汝等無教養な人間は實際、そんなに多くは入らないであらう。』なる程、それだからこそ我々は自分の必要とする教養を獲得する爲めに一層それを取り入れなければならない。』けれど、若し汝等がかくの如く金持をこき下したなら、今後、何人が藝術や學問を支へて行くべきであるか？』なる程我々は數によつてそれを造りあげなければならない。我々は一緒に集まる、それがかなりな集合體になる、――加之、汝等金持は今では單に最も無趣味な書物や、最も哀れむべきマドンナや、若しくは活潑な踊り子の脚の一對などを買つてゐるではないか。』おお、不運な平等

!』否　わが善良な舊い御主人よ、少しも平等などではありませんよ。我々は唯だ我々の價値に重きを加へようと思ふのである、そして若し汝等にそれ以上の價値があれば、汝等は更にそれに重きを置けばいいではないか。我々は唯だ我々の値段に相當することを欲する。そして汝等の仕拂ふ値段相當な我々自からを示さうと思ふ。

國家はかくの如き安全なる氣質と、かくの如く力强き自覺を奴僕の中に呼び醒ますことが出來るであらうか？　國家は人間に彼自からを感じさせることが出來るか？　否、それはそれ自からの爲めにこの目標を置かないことさへも出來るのか？　國家は個人が自己の價値を承認して、彼自身からその價値を實現することを欲することが出來るか？　我々は先づ二重の疑問を別々にして、始めに、國家がかくの如きことを齎すことが出來るかを見て見よう。小作人等の協同一致が要求せられた時に、この協同のみが、それを實現することが出來る、そして、國家の法律は、競爭や、秘密によつて無數に逃がれられるであらう。けれど國家はそれを我慢することが出來るであらうか？　國家は多分それ以外から人民が强迫を蒙むることを我慢し得ない。故に國家は低廉な賃銀によつて働らく者に反對する協同小作人の自助を許可することは出來ない。しかし、國家がその法律を作つたと假定せよ、そして、全ての小作人がそれに一致したと假定せよ。その時國

家はそれに滿足することが出來るであらうか？

さうだ――孤立した場合に於て。しかし、孤立した場合はそれ以上である、それは主義の場合である。その中の疑問は自我の自己實現の全般に亙つてゐる、故に又國家に反する彼の自覺の問題でもある。かくして共產主義者等が集合する。けれど、自我からの價値の自己實現は必然に國家に反抗する如く、それは又社會にも反對する、そしてそれによつて、自我主義から――組合と共產主義から遙か向ふに到達する。

共產主義は各人が所得者(『所有者』)であると云ふ民衆の格言を爭ふべからざる眞理、一個の現實にする、故に今、獲得に對する分配が止んで、各人は始めから自己の要求する物を持つ。彼は自己の勞働力中に彼の權能を所有する、そして、若し彼がそれを使用しないなら、それは彼の過失である。把握と涉獲とが終りを告げる、そして、如何なる角逐も(今では屢々さうであるが)結果なしにそのままには見棄てられない、なぜなら、勞働の一擊每に需用者に相當した供給が家の中に齎されるからである。さて、始めて、人は眞の所有者である、なぜなら、人が彼の勞働力中に所有する物は、競爭制度の下に於けるが如く、絕えず彼から逃れようと威嚇するやうなことがないからである。人は世話を燒かれずそして確立された所得者である。そして、人は彼の權能を

最早、物品に求めず、彼自身の勞働に卽ち、勞働に對する彼の權能に求める時に、精確にさうなる。そして、それ故に、一個の襤褸人になることであり、單なる理想的富裕の人間たることである。けれど、自分は、自分が勞働に對する自分の能力によつて自分の掻き集める少量をもつて自分を滿足させることは出來ない。なぜなら、自分の權能は單に自分の勞働によつてのみ成立しないからである。

勞働によつて、自分は大統領や、大臣(等)の官職を務めることが出來る。これ等の官職は單に一般的敎養、――卽ち、一般的に到達されるやうな敎養を要求する(なぜなら、一般的敎養は單に各人が到達したところのものばかりでなく、更に廣義に各人の到達し得るところのものである。故に、悉ゆる專門的敎養例へば、醫學、軍學、言語學、など、凡そ『敎養人』が自分の能力を他人々に劣つてゐると信ずることの出來ないところのものである)、若しくは廣義に、單に萬人に可能な技能を要求するのである。

けれど、たとへこれ等の官職が各人に所得の權利を得させるとしても、所謂、それ等に生命と意義とを與へるものは、唯だ彼にのみ特有なる個人の唯一力に他ならない。彼が『常人』のやうに彼の役目を處理せず、役の唯一性の能力とを振ふ云ふこと、この場合、彼は一般的に一個の官

更若しくは大臣としてのみ仕拂はれたとしても、未だ彼は充分に拂はれたとは云へない。若し彼が諸君の感謝を受けるやうにその役目を果したとして、そして諸君がその唯一者の感謝に與する力を保存しようと欲するなら、諸君は單に人間的なことをやつた簡單人として彼れに仕拂つてはならない、けれど無二なことを仕遂げる人間として彼に拂はなければならない。諸君の勞働に對しても同様な態度をとれ！

自分が人間としてやることに對しては一般の通り相場があるが、自分の唯一性に對しては何等一定の價格はないのである。唯だ一般人としてのみ定價が附せられるのである。

それなら、進んで人間的勞働に對する一般の評價を定めるがいい、だが諸君の唯一性からその價値を剝奪せしむる勿れ。

人間的若しくは一般的要求は社會を通して滿足せしめられる。唯一的要求の滿足に對して諸君は何等かの追求をしなければならない。友人や友誼的奉仕、若しくは個人的奉仕すら社會はそれを齎らすことは出來ない。しかも諸君は刻々にかかる奉仕の必要を感じるであらう、そして最も些細な場合に於ても諸君を助ける何人かを要求する。故に社會に依頼する勿れ、唯だ何處に諸君の慾望の滿足を購ひ得るかを見まわすがいい。

エゴイストの間に金が保留せらるべきであるか？――繼承された所得は舊式な型に固執する。若し諸君が自からそれによつて仕拂はれることを肯んじないなら、そ　金は滅亡する。若し諸君がこの金の爲めに何事をもしないなら、それは萬能力を失つてしまふ。相續權を抹殺せよ、その時、諸君は遺言執行人の法的捺印を破つたのである。なぜなら、今では一切が相續である、それが既に、相續されたにせよ、若しくはその繼承者を待つにせよ。若しそれが諸君のであるなら、何故に諸君はそれに捺印されることを許すのか？　何故、諸君はその捺印を尊敬するのか？

だが、何故に諸君は新しい金を創造しないのか？　その時、諸君は繼承的捺印をそれから取り去ることによつてそ　品物を絶滅させるのか？　さて、金は物品である、そして重要な手段若しくは能力である。なぜなら金は財源の硬化を防ぎ、絶えずそれを流動せしめ、かれ等の交換を促がすからである。若し諸君が更によりよき交換の仲介物を知つてゐるなら、前進せよ、しかもそれが再び『金』になるであらう。諸君に損害を與へるのは金ではなく、それを取り得ない諸君の無能力である。諸君の能力を有效ならしめよ、諸君自身を集合せしめよ、さうすれば金に缺乏はしないであらう、――諸君の金の、諸君のスタンプを押した金の。けれど、働らくことを、自分は『諸君の能力を有效ならしめる』ことであるとは云はない。唯だ〳〵『仕事を探し求め』そして『一

生懸命に働かうと欲してゐる』人々はかれ等自身の爲めに確實なる結果――即ち失業を準備しつつあるのである。

幸運と惡運とは金に從屬する。この理由からブルジョアの時代には金が力である、金は何人の手にも決して落ちない處女のやうに八方から求婚される。愛人に向つて求婚する凡ゆるローマンスと騎士的精神が競爭に於て再び復活する。慾求の目的物たる金が大膽な『實業の騎士』(詐僞漢)によつて攫はれる。

幸運兒がその花嫁を家に連れ歸る。貧乏人が幸福を持つ。彼は彼女を『社會』と云ふ彼の家に連れ歸つて、處女を破る。彼の家によつて、彼女は最早花嫁ではなく、妻である。そして彼女の處女性と共に彼女の苗字も亦失はれる。主婦として、處女なる金が『勞働』と呼ばれる、なぜなら『勞働』が彼女の所夫の名前だからである。彼女は彼女の所夫の所有である。

この姿を消滅させる爲めに、勞働と金の子供が再び娘になり、未婚者になる、故にそれは金ではあるが、勞働と云ふ彼女の父からの遺傳を受けてゐる。その顔の形、即ち『容貌』には別のスタンプが押されてゐる。

最後に、もう一度、競爭に就て云へば、それは萬人がかれ等の事件に出しや張らず、それに關

して相互に了解すると云ふ方法によつてその存在を繼續して來た。たとへば、パンは市民一般の必要品である。故にかれ等は公衆的パン製造所を建設することを容易に同意することが出來るかも知れない。しかるに、かれ等は、この必要品の準備をパン製造所の競爭に任せて置く。かくの如く又肉は肉屋に、酒は酒屋に(等)

競爭制を發すると云ふことはギルドに味方することと同一ではない。その區別はかうだ。——ギルドではパンを燒くこと(等)はギルド兄弟等の事件である。競爭制の下に於て、それは偶然競爭者の事件である。ユニオンに於ては、燒かれた品物を要求する人々の事件である、故に、それは私の事柄であり、君達の事柄であつてギルド的パン屋の事件でも、讓步的パン屋の仕事でもなく、結合者連の事件である。

若し自分が自分の事柄に關して自分自身を煩はさないとすれば、自分は他人が自分に讓與する物をもつて滿足しなければならない。パンを所有したいと云ふのは自分の事柄、自分の願望、自分の慾求である、そしてしかも人々はパン屋にそれをまかせ、精々かれ等の口論、かれ等の相互のせり合ひ、かれ等の啀み合ひを通じて、——要する、かれ等の競爭を通じて、——パン燒き特權の所有權にのみ全然限られてゐたギルド兄弟の場合に於て思惟することが出來なかつた好都合

を獲得しようと希望してゐる。——各人の要求する物は、各人が又その物を獲得、生産に與かるべきである。それは彼の事件であり、彼の所有であつて、ギルドの所有でもなく讓步的主人の所有でもない。

我々はもう一度ふり返つて見よう。世界はこの世の子供等、人間の子供達に屬する。それは最早、神の世界ではなく、人間の世界である。各人がこの世から獲得出來るだけの物を、彼の物であると呼ばしめよ。唯だ、眞の人、國家、人間社會若しくは人類が、各人に注目して、各人が人間として、即ち、人間らしく、自己を自足する以外に何事をもやらせまいとする。非人間的自足は人間によつて許容されないところのものである、即ち、それは『犯罪的』自足である、その反對の人間的自足が『正しい』もので『法律の道』によつて獲得されたものである。

かくの如くかれ等は佛蘭西革命以來話し合つてゐる。

けれど自分の所有は物品ではない、なぜなら、物品は自分から獨立した存在である。自分の力のみが自分自からのものである、この樹がさうではなく、それを制馭する自分の力が自分のものなのである。

さて、この力がどうしてヘンテコに表現されてゐるか？　自分がこの樹に對して權利を有して

ゐる、若しくはそれが自分の正當な所有物であると人々は云ふ。かくして自分はそれを力によつて獲得した。その樹が又保留されるために力が存續しなければならないと云ふこと、――若しくは更に、力はそれ自身から離れて存在する物ではなく、單に偉大なる自我、偉大な自分の中に存在してゐる――と云ふことが忘れられてゐる。力は、自分の諸性質(e、g、人道、威嚴(等))と等しくそれ自身から離れて存在する物にまで高められる、かくしてそれは自分の力であることをやめた後までも永く存在するやうになる。かくの如く、幽靈に變形せられた力は――權利である。この永遠化された力は自分が死んでからでさへ消滅しない、それが移傳され、『讓り渡され』る。

物品が今や實際、自分には屬さずして、權利に從屬する。

だが、これは一方から見れば幻覺以外の何物でもない。なぜなら個人の力が不朽になる、そして、他人の力を彼の力に結び付けることによつてのみ權利 なる。その妄想はかれ等がかれ等の力を徹回し得ないと信ずることから成り立つてゐる。同一の現象が幾度か繰り返へされる。力が自分から區別される。自分は自分がその所有者に與へた力を取りかへすことが出來ない。人は『代議士の權利を許容し』て、自分の力を投げうち、すぐれた心持になることを拒絕した。

所有主は物品に對する自分の力と權利とをその物を讓り渡すことによつて、若しくはそれを消

費することによつて、見棄てることが出來る。かくして、我々が同様に我々が彼に貸與して置く力を放棄することは出來ないものであらうか？

正しい人間、正義人は彼が『正しく』若しくは權利を持つてゐる物以外の何物をも自分のものであると呼ぶことを欲しない、そしてそれ故に、彼の所有は單に正當な所有のみである。さて、何人が判官になつて、彼にその權利を賦與するのであるか？　遂に確かに、彼に人々に諸權利を授ける人間である。その時彼はテレンスの humani nihil a me alienum puto（凡そ人間的なる物にして自からの無關係なるものは一つもなし）以上に無限な廣義に於て、人間的なものは自分の所有であると云ふことが出來る。彼が如何程それを揑ねかへしても、彼がこの立場を占めてゐる間、彼は裁判官から脫却することは出來ない。そして我々の時代に於ては、撰擇された色々な判官が二個の不倶戴天の敵意、――卽ち、神と人間の姿をとつて相互に相爭つた。一方は神權に訴へ、他方は人權に訴へた。

孰れの場合に於ても個人が自からに權利を與へないことだけは極めて明瞭である。

先づ私に今日權利の蹂躪でない行爲を指摘してみよ！　時々刻々人間の諸權利が一方で脚下に蹂躪されてゐる、しかるにかれ等の反對者は神權に對する冒瀆を吐き散らすことなくしてかれ等

の口を開くことは出來ない。施與をやつて見給へ、諸君は人間の權利を嘲笑することになる、なぜなら乞食と慈善者の關係は非人間的な關係である。懷疑を口にして見給へ、諸君は神權に對して罪を犯すことになる。乾干びたパンを滿足して食べて見給へ、諸君は諸君の平靜によつて人間の權利を破壞する。不滿をもつてそれを食べて見給へ、諸君は諸君の不平によつて神權を罵詈することになる。諸君の中に時々刻々罪を犯さない者は一人もゐないことになる。諸君の言說は悉く犯罪である、そして諸君の言論の自由に對する妨害も亦等しく犯罪である。諸君はみんな犯罪者である！

しかも諸君は悉く權利の立場に立つてゐると云ふことに於てのみさうである、卽ち、諸君は其處にゐて、諸君が犯罪者であると云ふ事實を知りもしなければ、又如何にそれを評價するべきかをさへ理解しない。

破りがたい卽ち神聖な所有がこの根柢の上に根を生やした。それが法理的觀念である。

一匹の犬が他の犬の權力範圍にある骨を見る、そして自からの弱さを感じる時にのみヂット立つて見てゐる。けれど人間は彼の骨に於ける他人の權利を尊敬する。故に、後者の行爲は人間として位し、前者の行爲は獸的な若しくは『自我的』なものとして位する。

そして、この場合に於けるが如く、又一般的にも、人がすべてに何等か精神的な（この場合では權利）ものを見る時に、それが『人間的』と呼ばれる、卽ち一切を幽靈にして、幽靈に對する如き態度を取るのである、人は實際、幽靈の出た時に威嚇することは出來るが、殺すことは出來ない。個人を個人としてではなく、一般なものとして眺めるのが人間的なのである。

かくの如き性情の下に於て、自分は最早何物をも尊敬しない、だが、それに反して、一切に對して權利あるものとして自分を知るのである。それに反して、かの庭園內の樹に自分は外部性（Fremdheit）を尊敬しなければならない（かれ等は一方に偏したやり方で『財産』と云つてゐる）、自分は自分の手をそれに觸れてはならない。自分が自分の杖（その他）を他にまで放任して置く如く、その樹を他に任かせて、進んで自分以外の物として、卽ち神聖なものとして尊敬しない時のみそれがおしまいになる。寧ろ、自分はたとへそれを欲してもそれを倒すやうな罪を自分自身に對してやらないなら、たとへどれ程永い間、自分がそれを他の人々に任かせて置いても、それは依然として自分の財産である。それが自分のものとして殘る。銀行家の財産に對して、自分はナポレオンが諸帝王の領土に對してやつたやうに何等外部的なものを見ない。我々はそれを『征服することを』恐れてはゐない、そして又我々はその手段を探しまわる、それで我々は我々が從來恐れ

てゐた外部的な精神をそれから剝奪する。

故に自分は人間としては何物をも請求しない、けれど自分、この自分として一切を要求する、そしてそれ故に何等人間的なものに對してではなく、自分のもの、即ち人間としての自分に關はる物ではなく、――自分の欲する物にで、そしてそれを自分が欲するが故である。

他人の正しい、合法的な財産は唯だ諸君がかくの如きものとして滿足して承認するところのものである。若し諸君の滿足がなくなれば、その時、この財産は諸君に對して合法性を失つたことになる、そして諸君はそれに對する絕對的權利を嗤ふであらう。

制限された意味でこれまで論じられた財産以外に、其處には我々の敬虔な心に對して他の財産が揭げられる、我々はそれに對して更に『罪を犯し』てはならないのである。この財産は精神的な物品、『內部性の聖所』に於て成り立つてゐる。人間が神聖にして置く物を、他人は嘲笑してはならないのである。なぜなら、たとへそれが眞實でないにしろ、又熱心に何人かが『愛に充ちた溫和な態度』でそれに固執し、それを信ずる人間の神聖を確認しようとしたとしても、兎に角、神聖それ自からが常に尊敬されなければならないのである。誤まられた人間は神聖を信ずる、その不正な本質をすら信ずる、そして少なくとも神聖を信ずる彼の信仰が尊敬されなければならない

のである。

我々の時代より更にガサツな時代に於て、特別な信仰、特に神聖な本質に對する献身を要求することが流行した、そして人々は反對な信仰を持つ人々に對して穩やかな態度をとることが出來なかつた。しかし、爾來、『信仰の自由』が次第〳〵にそれ自からを擴げ、『妬みの神と唯一主神』が漸次一般的な『至上存在』にまで同化して、そして各人が『神聖な何物』かを尊敬しさへすればそれが人間的寛容を滿足せしめた。

最も人間的な發想に壓縮された時に、この神聖な本質は『人間彼自身』であり、『人間的』である。恰かも人間的なことが全然我々自からのものであり、神聖に色付けられてゐる一切の他界性から自由であるかの如き虛僞な外貌をもつて、――さうだ、恰かも人間が僕や君であるかのやうに、――最早、それが『神聖な本質』の話ではないかのやうな傲慢な空想をすら起す、そして、我々は今や自から隨所に於て安堵し神聖な畏怖を感じなくなる。『人間が遂に發見された』と云ふ法悅の中に自我的な苦痛の叫びが聽かれずに過ぎる、そしてかくの如く親しくなつた幽靈が我々の眞の自我と見誤まられる。

けれど『人間が聖書の名前である』("Humanus heiszt der Heilige")(ゲエテを見よ)、そして、人

間的が唯だ最も深められた聖殿である。

エゴイストはこれと反對な宣言をする。諸君が神聖な何物かを把持してゐると云ふこの理由から、僕は君を輕蔑する。そして、たとへ自分が諸君の一切を尊敬したにしても、諸君の神聖は全然自分の尊敬出來ないものである。

これ等の相反せる見解と共に、其處に又精神的な物品に對する矛盾せる關係が擅にされなければならない。エゴイストはそれ等の物を侮蔑する、宗教人（即ち、自からの『本質』を彼自身の上に置く人）は一致してそれ等の物を保護しなければならない。けれど精神的物品の如何なる種類が保護せられ、如何なる種類が保護されずともいいかは全然各人が『至上存在』に就て形成する觀念によるのである。たとへば神を恐れる人は、人間を恐れる人（自由人）よりもより多く庇護すべき物を持つ。

精神的物品に於て、我々は（官能的なものから區別されて）精神的な方法で害される、そして、それ等の物に對する罪惡は直接な冒瀆に於て成り立つ、一方、官能的な物に對しては竊盜若しくは讓與が起る。物品それ自からが取り去られるばかりでなく、その價値と神聖とを剝奪される。神聖が直に危くされる。凡そ精神的物品即ち我々にとつて神聖な一切に對する犯罪として行はれ

る全てに『不敬』とか、『輕浮』とか云ふ言葉が冠せられる。そして、嘲笑、罵詈、侮蔑、懷疑(等)は單に犯罪的輕浮の異なれる蔭である。

冒瀆が最も多種多様な方法で實行されると云ふことは玆では略して置く、唯だその冒瀆が無制限な言論の自由を通じて神聖なものを威嚇するものであることを先づ第一に揭げて置く。

尊敬が一つの精神的本質に對してさへ要求せられてゐる間、言論と出版とはこの本質の名稱の中に拘束されなければならない。かくしてエゴイストは、彼の發言によつてそれを『侵害する』かも知れない、その發言から彼は少なくとも『相當な刑罰』によつて妨げられなければならない、若し彼がそれに對して更に正しい方法、例へば警察權若しくは檢閱官の妨止的慣用を撰擇しないならば。

出版の自由に對するなんと云ふ嘆息よ！　それなら出版はなにから自由にされるべきであるか？　たしかに信賴、從屬、奉仕に對する責任から！　けれどそれから彼自身を解放することは各人の事件である、そして、諸君が奉仕に對する責任から諸君自身を解放した時に、諸君が作り、諸君の書くところのものが又或る權力の奉仕の下に思考され、述作される代りに諸君自からのものとして諸君に從屬するであらう。基督信者は基督に對する信仰から自由になる爲めに、なんで

發言したり出版をしたりすることが出來よう？　若し自分がなにか書くことが出來ず、書けないとすれば、恐らくその第一の誤謬は自分にある。これは少しも要點に當つてゐないやうに見えるとしても、その着意はあまり遠くはないのである。出版法によつて、自分は自分の出版に對して境界線を引く、若しくは引かれることを許すとする、それを越えると罪とその刑罰が生じる。自分自からが自分自身を制限する。

若し出版が自由でなければならないとすれば、法律の名の下にその上に置かれる凡ゆる壓迫からの解放程重大なものはないことになるであらう。そして、私自分自身が法律に對する服從から私自からを解除しなければならないと云ふことになるであらう。

たしかに、出版の絶對自由は凡ゆる絶對自由と等しく空無である。出版は色々な物から自由になることが出來る、けれどいつでも唯だ自分がまたそれから自由でなければならない。若し我々が神聖な物から我々自からを自由にするならば、若し我々が無恩惠に無法になるならば、我々の言葉が又さうなるであらう。

我々がこの世の凡ゆる壓迫から脫却することを宣言出來ない間は、我々の書く物も亦それから脫かれることは出來ない。けれど、我々が自由になればなる程、我々は又それを自由にすること

が出來る。

故に、それは從來の如く幽靈に奉仕する代りに、我々自からのものにならなければならない。

人々はまだかれ等が出版の自由を叫ぶことの意義を知らない。かれ等が表はに要求してゐることは國家が出版を自由にせよと云ふことである。けれど、かれ等が實際求めてゐることは、かれ等自からそれを知らずに、出版が國家から自由になることである、若しくは國家から解放されることである。前者は國家に對する懇願であり、後者は國家に對する叛逆である。『權利の懇願』として、出版の自由に對する權利の眞面目な要求としてざへ、それは授與者としての國家を豫想し、單に贈與品と許容と、特許とを希望することが出來るのみである。勿論、恐らく、國家は要求せられた贈品を無意味に許容するやうな行爲をやるかも知れない。しかしその贈物を受け取る人々はかれ等が眞理として國家を尊敬してゐる限り、如何にそれを使用するべきかを知らぬであらう。かれ等はこの『神聖な物』に對して叛逆しないであらう、そしてこれを敢へてする各人に向つて刑事出版法に訴へるであらう。

要するに、出版はそれから自分の自由になり得ないものからは自由にはならない。

自分は恐らくこれによつて出版の自由に反對する者として私自身を示すことになるのである

か？　反對に、自分は唯だ人が出版の自由を欲するばかりでは、即ち人が無制限な許容を欲するのみでは決してそれを獲得することが出來ないものであることを斷定するのである。この許容に對する權利のみを請求して見給へ、諸君は永久にそれを待つのみである。なぜなら、それを諸君に與へることの出來る者はこの世には一人もゐないのである。諸君が許可による出版の便宜、即ち自由の『資格』を與へられたいと思つてゐる間は、諸君は徒らな希望と不平とを抱いて生活しなければならない。

『馬鹿な！　なんだつて、君の書物の中にあるやうなこんな思想を抱いてゐる君自身が不幸にも僅かな好機會又は schleichwegen によつて辛うじて公けにすることが出來るのぢやないか。それだのに君は人が國家に對して拒まれた出版の許しを與へるまで國家に肉迫してそれを强請することに反對しようとするのか？』たがかくの如く話しかけられた著者は恐らく――かくの如き人々の厚顏の程度につれて――左の如き答へを與へる。『諸君の云ふことをよく考へて見給へ！　それなら自分は自分の書物に對する出版の自由を自分自身に獲得する爲めになにをするか？　自分は許可を乞ふか、若しくは寧ろ、法律の問題に觸れず、都合よき機會を求めて、國家や、その願望に全然無頓着でそれを把持しはすまいか？　自分は―― es muz das schreckenerregende Wort aus-

gesprochen werden——Ich betrüge den Staat. 諸君は無意識に同一事をやつてゐるのである。諸君の講壇から、諸君は國家がその神聖にして犯すべからざることを投げ棄てなければならず、毫も危險を恐るることなく、著者の攻撃に赤裸な姿を現はさなければならないと云つてゐる。しかし諸君はそれを欺いてゐるのである。なぜなら、その存在はそれがその非接近性を失ふや否やお終ひになる。諸君にとつては實際それは、英國のやつたやうに物を書く自由とよく一致するかも知れない。諸君は國家の信仰者である、そして、たとへ諸君が如何にそれを改善し、「その缺點を癒やし」たいと思つても、國家に反して書くことが出來ないのである。けれども、若し國家の反對者等が自から自由發言を利用して、教會、國家、道德、及び「神聖な」一切に、不屆な理由をもつて突撃したならばどうであるか？ その時、恐ろしき苦悶を抱いてかの九月法律を再び復活させようと第一に焦躁るのは必ず諸君であらう。諸君はその時、夙に諸君をして國家、若しくは政府を愚弄して服從せしめようと用意せしめた愚を悲しんで——それはあまりに遲いであらう。——けれど、自分は自分の行爲によつて唯だ二つの物を證據立てる。その一つは、出版の自由が常に「都合よき機會」に束縛される、それ故に決して絕對の自由を得られないであらうと云ふこと、しかし、第二は、その自由を享樂したいと欲する人は、都合よき機會を探し求め、出來得べくんば、

それを創造し、國家に對しては彼自身の利益を獲得し、自からの價値を造り出さなければならない、そして、彼の價値は國と凡ゆる「優越な」權力以上になるであらうと云ふことである。國家の權内に於てではなく、それに反してのみ、出版の自由が實施される。若しそれが確立されなければならないとすれば、それは懇願の結果として獲得されるのではなく、叛逆の仕事として獲得されるのである。出版の自由に對する凡ゆる懇願と運動とは、それが意識的でも無意識的でも、既に一種の叛逆である。それは半端な俗人のみが、自からに對して告白することの出來ないものでそれがハッキリと辯駁しがたい迄に明らかな結果となつて現はれる時、かれ等は畏怖戰慄するのである。なぜなら要求せられた出版の自由は實際、その始めに於ては親し氣な尤もらしい顏付をする、そして「出版の傲慢」などを少しも流行させるやうな氣ぶりを見せない。けれど少しづつその心が堅くされてゆく、そして眞の自由は、それが、國家や、道徳や、法律の奉仕をやつてゐる間は、決して自由ではないと云ふ推論に進んでゆく。實際、檢閲の强迫から獲られた自由は、未だ法律の强迫を脱した自由とは云へない。一度自由に對する慾望に捉へられた出版はいつでも更に自由になりたいと欲する、そして、遂に著者は彼自身に對して、自分が何物をも要求しないやうになる迄は、實際、自分は全的に自由ではないと、自分自身に向つて云ふやうになる。そして、

書く物はそれが、何等の權力、權威、信仰、恐怖によつて左右されなくなり、自分自からの物となる時に始めて自由になる。出版は自由であつてはならない――それはあまりにつまらない――それは自分のものにならなければならない。――出版の自己有、即ち出版の所有、――自分の云ひたいのはそれなのである。

「なぜと云へば、出版の自由は單に出版の許可である、そして國家は決して自から進んで出版によつてそれを無にまで廢滅させるやうなことをやりもしなければ、やることも出來ない。

「さて、結論として「「出版の自由」と云ふ文句の爲めに、未だ漠然としてゐる以上の言葉を修正する爲めに、寧ろ、次のやうに云ひ直して見よう。出版の自由と云ふ、自由黨員の聲高い要求は確かに國家に在つて可能である。さうだ、それは唯だ國家に於てのみ可能である、なぜならそれが許可だからである、そして、それ故に許容者(國家)が缺けてはならない。けれど、許可として、それはこの國家に於てその制限を有してゐる、そして國家は確かにそれ自身とその安寧に適はしいこと以外には決して許しはしないであらう。國家は自己の爲めにその存在とその擴張の法律としてこの制限を定める。或る國家が他の國家よりもよけいに我慢すると云ふことは單に量の差である、それは、それにも拘らず、政治的自由主義者等の心底にも横つてゐるのである。かれ等は

たとへば獨逸に於て、單に「自由發言の更に擴張された妥協を要求する。要求せられる出版の自由は民衆の事件である、そして民衆(國家)がそれを所有するまでは自分がそれを使用することは恐らく出來ないのである。出版の所有と云ふ見地から見て、その立場が異つて來る。自分の民衆に出版の自由がないなら、それでもいい、自分は力と企によつて印刷する手段をめぐらすであらう。自分は唯だ——自分自身と自分の力からのみ印刷するべき自分の許可を得る。

『若し出版が自分の所有であるなら、自分は鼻をかむ爲めに國家の許可を必要としないと同樣、それを實行する爲めに國家の許可を必要としない。自分自身以上の何物もなくなる瞬間から出版は自分の所有になる。なぜなら、その刹那から、國家、教會、民衆、社會(等)がなくなる、なぜならかれ等は私が自分自身に對する侮蔑からのみかれ等の有する存在に對して感謝しなければならない身分だからである、そして、この自己卑下の消滅と同時に、かれ等自からが消滅するのである。かれ等はかれ等が自分以上として存在する時にのみ、權力及び權力把持者として存在する時にのみ存在する。若しくは、諸君はその市民が一人殘らずその存在を考へない國家を想像することが出來るか? それは將に夢の如き「結び付けられた獨逸」と云ふが如き、外見だけの存在であるであらう。

「出版は自分自身が自分の所有になる時に、自分が自己所有人になる時に直に自分のものになる。世界はエゴイストに所屬する、何故なら彼はこの世の何の權力にも從屬しないからである。

「これをもつて自分の出版は依然として、この瞬間に於ても、極めて不自由であるかも知れない。けれど世界は廣い、そして人は出來るだけ彼自身を饗應する。若し自分が自分の出版の所有を斷念しようと思へば、自分は容易に至る處で自分の書くだけの物を印刷するやうになれるかも知れない。けれど、自分が自分の所有を肯定しようと欲するなら、自分は必然に自分の敵を騙らなければならない。「君はたとへそれが君に與へられても、かれ等の許可を受け入れないつもりなのか？」どうして、喜んで受けますよ。なぜなら、かれ等の許可は自分がかれ等を愚弄し、かれ等をして滅亡の道程に出發させた證據を自分に示してくれるから。自分はかれ等の許可に拘泥してはゐない、況んや、かれ等の愚劣と顚覆とに於ておやである。自分は（政治的自由主義者等のやうに）自分自からに媚びて、かれ等と自分とが兩つながら平和に並び進んで恐らく相互に煽てあげることの出來る爲めにかれ等の許可を懇望しはしない。だが、自分は、それによつてかれ等を一敗血に塗みれさせる爲めに、許容者自からが遂に存在しなくなる爲めにそれを懇望するのである。自分は自覺せる敵として行爲する、そしてかれ等を把持して、かれ等の不注意を利用する。

『自分が自分以外にその利用の上に何等の審判者をも認識しない時、即ち、自分の書く物が最早何等の道徳、宗教、又は國法の尊敬（等）によつて決定されず、自分と自分のエゴイズムによつて決定せられる時、その出版が始めて自分のものになる！』——

さて、諸君はかくの如き厚顔な答へを諸君に與へる人に對してどう云ふか？——我々は恐らくそれを左の如く敷衍することによつてその質疑を極めて著しくすることが出來るであらう。その出版は誰れのか、人民（國家）のか、自分のか？　政治家連は出版を權力の所有者の個人的な、專制的な干渉から解放しようとする以上に何事をも企てない、そして眞に萬人に對して自由になるには法律、即ち人民（國家の）の意志からも亦自由にならなければならないと云ふ點を考へないのである。かれ等はそれを『民衆の事件』にしようと欲するのである。

しかし、民衆の財產になつても、それは自分のものからは依然として遠いのである。寧ろ、それは自分の爲めに許可の從屬的意義を保留する。民衆は自分の思想の上に裁判官の眞似をする。民衆はかれ等を重く見るべく自分を召喚する權利を有してゐる、若しくは、自分がかれ等に對して責任を持つことになる。陪審官等さへ、かれ等の固定觀念が攻撃される時に、最も頑迷な專制君主及びかれ等の奴隷官吏と同樣な堅い頭と心とを持つ。

"Liberale Bestrebungen" の中で、バウエルは出版の自由が絶對な立憲國家では不可能ではあるが、『自由國家』にはその立場を見出すと云ふ斷定を下してゐる。『玆では、』とそれが叙述してゐる、『個人が最早、個人ではなく、眞の合理的全體の一員であるから、彼の意志を發言する權利を有することが承認されてゐる。』かくして、出版の自由を有するのは個人ではなく、その『成員』なのである。けれど、若し出版の自由を目的として、個人が先づ民衆と云ふ一般人に對する彼の信仰に關して自分自身を證據立てなければならないとすれば、若し彼がこの自由を彼自身の力を通して、持たないならば、――その時、それは民衆の自由であり、彼が自己の信仰の爲めに授けられる自由であり、彼の『成員たること』の爲めに與へられる自由である。その反對の場合はかうである。各人が自己の心を披瀝するの自由を持つのは精確に個人としてである。だが、彼は『權利』を持つのではない。その自由は確かに彼の『神聖な權利』ではない。彼は唯だ力を持つ。その力のみが彼を所有人とする。自分は出版の自由に對して何等の讓歩をも必要としない、又それに對する人民の同意をも必要としない、それに對する『權利』をも又何等の『辯明』をも必要としない、出版の自由も亦、その他の自由の如く、自分でそれを『取ら』なければならない。民衆は、『唯一の審判官であつても』、自分にそれを與へることは出來ない。民衆は私の取る自由を忍ぶことが出來る、

若しくはそれに對して自己防衛をやる。與へ、授け、許す等のことをそれは爲し得ない。自分は純粋に個人として、民衆に拘泥せずそれを振舞ふ。即ち、自分は自分の――敵である、民衆と戰ふことによつてそれを得る、自分が眞にかくの如き戰ひによつてそれを得る時にのみそれを獲得する。なぜなら、それが自分の財産であるが故に自分はそれを取るのである。

サンダア、その人にバウエルは當つてゐるが、彼は(九九頁)出版の自由を『國家の市民の權利と自由として』宣言してゐる。バウエルはそれ以外になにをやらうと云ふのか? 彼にとつても亦それは唯だ自由市民の權利である。

出版の自由は又『一般的人權』の名稱の下に要求される。これに對する反對說として、各人は如何にそれを正しく使用すべきかを知らない、なぜなら各個人は眞に人間ではないからと云ふ說がかなり根抵を有してゐる。政府は未だ嘗てかくの如き人間にそれを拒んだことはないのださうである。だが人間は何も書きはしない、なぜなら彼は幽靈だからである。政府はいつでも唯だそれを個人に對してのみ拒んで、その他の、即ち、その機關にのみ與へて來た、それなら、若し何人かがそれを全部自己のものとしたいと欲するなら、彼はそれが個人たる自分に相當すべきで、人間や、人間としての個人には不相當であることを明瞭に肯定しなければならない。加之、人間以

外の者(例へば獸物)はそれを使用することが出來ないのである。佛蘭西の政府は出版の自由を人間の權利として論じはしない、しかし、個人から彼の眞に人間であることの保證を要求してゐる。なぜなら、それは出版の自由を個人に對してではなく、人間に指定してゐるからである。それは人間らしくないと云ふ口實の下に、自分のものが自分から取り去られたのである！　人間的な物が少しも減少せずに自分にまで殘された。

出版の自由は單に責任ある出版のみを齎すことが出來る。無責任な出版は唯だ出版の所有からのみ生ずる。

人々の交際に對してはある明白な法律（人は時としてそれに合致することを敢へて忘れるやうな罪を犯すかも知れない、しかし、如何なる時に於ても、その絕對價値を敢へて否定する者はない）が眞先に宗教的に生活してゐる萬人の間に置かれてゐる。これが愛の――律法である、それに對しては、その原則に反抗するが如く見える人々すら、そして、その名稱を憎む人々すら、未だそれに對して不忠實にはなり得なかつた。なぜならかれ等も亦依然として愛を持つてゐる、然り、かれ等はより深く、更に崇高な愛をもつて、「人　人類」とを愛してゐる。

若し我々がこの法則の意義を明確にするならば、それは左の如きものとなるであらう。各人は彼自身以上の何物かを持たなければならない。諸君はそれが他人の福祉の問題、祖國や、社會の幸福、萬人の、人類の幸福、至善の爲め(等)の問題にぶつかる時に、諸君の個人的『利益(インテレッセ)』を背後に引つ込めなければならない！祖國、社會、人類（等）が諸君にとつて諸君自身以上のものでなければならない、そしてかれ等のインテレッセを向ふへまわした時に、諸君の『一身上の利益』は尻込みしなければならない。なぜなら、諸君は――エゴイストであつてはならないからである。

愛はかなり廣汎な宗敎的要求である、それは神や人間に對する愛に制限されてはゐない、そして、全ての點で眞先きに立つてゐる。我々が行ひ、考へ、意志することの一切の根抵は常に愛でなければならない。かくして、我々は實際、判斷することは許されるが、しかしそれは唯だ『愛をもつて』である。バイブルは確かに批判される、その書の全體を通じて批判される、けれど批判者は何によりも先づそれを愛さなければならない、そして、神聖な書物として、それを見做なければならない。これは、批判者がそれに亂暴な批評を加へてはならず、彼はそれを敬遠しなければならず、顚覆することの出來ない聖物と見做なければならないと云ふこと以外のなにものであらうか？――我々の人間に對する批評に於ても亦愛がその不變な基調でなければならないのであ

る。たしかに憎惡の鼓吹する判斷は少なくとも我々自からの判斷ではなく、我々を支配する憎惡の判斷、『怨恨的判斷』(gehüenge Uarteise)である。けれど愛が我々に鼓吹する判斷は果して我々自からのものであらうか？それ等は我々を支配する愛の判斷である、それ等は『愛する、寛大な』判斷である、それ等は我々自からのものではない。それ故に、少しも眞の判斷ではない。正義に對する愛をもつて燒かれる人は"fiat justitia, pereat mundus!"(正義をして萬人を支配せしめよ)と叫ぶ、彼は勿論正義は本來如何なるものであり、何を要求し、それがなにから成り立つてゐるかを尋ね究めることが出來る、しかし、何故にそれがさうであるかを尋ねることは出來ない。

『愛に固執する者は神に生きる者であり、神は又彼の中に生きる。』神が彼に固執する、彼は神から脱却することが出來ない、無神になり得ない。そして彼は神に縋つて、彼自身に歸へり、彼自身の家に歸へることが出來ない、神の愛に固執するが故に、無愛にはなれない。

『神は愛である！　凡ゆる時代と凡ゆる人種はこの言葉の中に基督教の中心を認める。』愛なる神は世話燒きの神である。彼はこの世を平和にして置くことが出來ず、この世を祝福しようと欲するのである。『神は人間を神聖ならしめんが爲めに人になつた。』(Athanasius)　彼は至る處の畫策に手を出す、そして神の手を借らずしては何事も出來ない。至る處に於て彼は彼の『最善の目的』、

彼の『わけのわからない計畫と命令』とを持つてゐる。彼自身である理性が全世界に送達されて實現されなければならないのである。彼の親父らしいオセッカイが我々の獨立を悉く剝奪する。我々は神がさうしたのだと云はれないやうなことは何にも出來ないのである、又、我々の上に落ちて來る災難でも必ず、神がそれを命じたのであると云ふ言葉を聽かないことはない。我々は神からもらはない物を一つも持たない、彼は一切を我々に『與へた。』だが神がさうであるやうに人間も亦さうである。神は强ひてもこの世に祝福を下さうとする、そして人間はこの世を、全人類を幸福にしようとする。故に各『人』は萬人に、彼自身が持つてゐると想象する理性を呼び醒さうとする。一切が悉く合理的でなければならない、神は惡魔によつて自からを苦しめる、そして哲學者は非合理と偶然とを以つて同一事をやる。神は一切の存在をしてそれ自からの步き方をすることを許さない、そして人間も亦我々を唯だ人間らしくばかり步かせようとする。

けれど何人に限らず神聖(宗敎、道德、人道)で一杯になつてゐる人は單に幽靈、『眞人』をのみ愛する、そして鈍な無慈悲をもつて、『非人間』に對する計量の遲鈍な法律的稱號の下に、個人と現實人とを迫害する、彼は最も冷酷な態度で無慈悲を行ふことを必然で、稱賛すべきであると考へてゐる。なぜなら、幽靈若しくは一般性に對する愛は幽靈的でない人間、即ちエゴイスト若

しくは個人を憎むことを命令する。かくの如きものが『正義』と呼ばれてゐる名高き愛の現象の意義である。

犯人として起訴された人間は何の寛容をも期待することが出來ない、そして何人も彼の不幸な赤裸の上に親しい衣をひろげはしない。嚴酷な裁判官は何の容赦もなく哀れな犯人の身體から辯明の最後の襤褸を引き剝がす。獄卒は、何の慈悲もなく彼の濕つた住家に彼をひきずつて行く。刑期が終つた時に、彼は冷酷にその烙印を押された人間を、彼の善良な、基督教的な、忠義な兄弟の間に突き出す！　すると、かれ等が侮蔑して彼に唾する。さうだ『死に價した』犯人は何等の恩惠なしに絞首臺に導かれる、そして歡喜する群集の面前で、慰安された道德法律がその崇高な――復讐を稱贊する。そして、孰れが唯だ一つが生き得る、道德法か若しくは犯罪人か、犯罪人が所罰されないで生存すれば、道德法が廢れたのである。そしてそれが繁盛すれば、犯罪人は滅びなければならない。かれ等の確執は到底破りがたい。

基督教時代は將に、慈悲と愛との時代である、人々をしてかれ等に適はしいものを受け入れさせようとする懸念、さうだかれ等をしてかれ等の人間的（神聖な）天職を成就せしめんと心配する時代である。それ故に、その原則は交際に於ても眞先きに置かれた、これ若しくはそれが人間

の本質である、故に彼の天職である、それに迄、神が彼を召したのである、若しくは（今日の觀念に從へば）彼の人間たること（種屬性）が彼を召すのである、そこで改宗に對する熱心が起る。共產主義者と人道主義者とが人間から基督教徒以上の期待をすると云ふことはその立場を少しも變へない。人間は人間的なものを獲得すべきである！　敬虔なる人々にとつて、神聖なものが彼の持物になると云ふことが充分な滿足であるなら、人間的な人は彼が人間的なことから寸分も缺けてゐないことを要求する。兩者とも自我的なものに反抗的な態度をとる。勿論。なぜならエゴイスティックなものは彼に與へられもせず、授けられもしない。彼は彼自身の爲めにそれを獲得しなければならない。愛は前者を授ける、後者はひとり自分自身によつて自分にまで與へられる。

交際はこれ迄愛の上に、相互に對する尊敬の態度の上にその土臺を置いてゐた。人は自から祝福されることを彼自身に負ひ、至上本質を彼自身に取りあげ、それを Vérité（眞理と眞實）に齎すことの祝福を彼自身に負ふたやうに、又他の人々をしてかれ等の本質と天職とを實現せしむるの責任をそれ等の人々に負はせた。孰れの場合に於ても、人はその實現に寄與することを人間の本質にまで歸せしめた。

けれど、人は彼自身以外のことをする爲めに彼自身に何等責任がないやうに、他人以外のこと

をする爲めに他人にその責任を持たせることはない。なぜなら人は自からの本質に對しても亦他人の本質に對しても何等負ふところはない。本質に基礎を置く交際は、何等現實との交渉なき幽靈との交際である。若し自分が至上本質と交際を保つなら、自分は自分自身とは沒交渉になる、そして、若し自分が人間の本質と交際を保つなら、自分は人々と交際しないことになる。

自然人の愛は教養を通じて一個の命令(Gebot)になる。けれど、命令として、それはかくある人間に屬するので、自分に屬するのではない。それは、自分の本質――その爲めに多くの煩勞が生ずる――で、自分の所有ではない。人間、卽ち人道が、自分に對してその要求を呈出する。愛が要求される、それが自分の義務である。故に、それは實際、自分の爲めに獲られる代りに、一般人、人間の爲めに、彼の財産若しくは特性として獲られたのであつた。「愛することが、人間、卽ち各人になる。愛が人間の義務であり、天職である」(等)

故に、自分は再び自分自身に對する愛の眞相を明らかにし、それを偉大なMを有する人間の力から解放しなければならない。

本來自分のものであるが又時に偶然に自分の物であり、本能的に自分のものであるところのものが、人間の所有として自分に投げられた。自分は愛すことに於て借地人になり、人類の家來にな

り、單にこの種屬の見本になり、自分としてではなく、人間として、人間的な人間の見本として、行爲し又愛した。文明の全狀態は封權制度で、財產が人間若しくは人類のもので、自分のではない。奇怪な封權制度が建設された、個人が一切から略奪され、一切が『人間』に渡された、個人は遂に『徹頭徹尾の罪人』として現はれなければならなかつた。

それなら、恐らく自分は他人に對して何等活々した興味を持つてはならないのか、彼の喜びと、彼の幸福とが、自分の心に横つてはゐないのか、自分が彼に供給する享樂は自分自からの享樂に比してつまらないものなのであらうか？　反對に、自分は喜んで彼に無數の享樂を献げることが出來る、自分は彼の愉樂の擴大に對して無數の物を自分自身に拒否することが出來る、そして自分は彼がゐなければ自分にとつて、自分の生活、自分の幸福、自分の自由にとつて最も親愛なものを彼の爲めに賭することが出來る。なぜか、彼の幸福と彼の快樂をもつて自分自身を爽快にすることが自分の快樂と自分の幸福を成立するからである。けれど、自分自身、自分自己を、自分は彼の爲めに犧牲にはしない、依然としてエゴイストであつて——彼を享樂する。たとへ、自分は彼に對して一切を犧牲に供するとしても、彼に對する自分の愛以外の物を自分は保留するであらう。それは極めて單純だ、そして、それは思つたより人生に於ては不斷のことなのである。けれど、

それは、この一つの熱情が自餘のすべてよりも自分にあつて更に力强いものであると云ふ以上の何物をも證據立てない。基督教は又この爲めに凡ゆる他の熱情を犧牲にせよと教へる。けれど、若し一つの情熱に自分が他の一切を犧牲にするとしても、自分はその爲めに、自分自身を犧牲にするやうなことはしない、なほ又それによつて、自分が眞に自分自からである何物をも犧牲にはしない。自分は自分の特別な價値、自分の所有性を犧牲とはしない。若しこの惡い場合が起るとすれば、愛は自分が盲目的にそれに服從する他の情熱以上に立派な役割を演じはしない。野心によつて有頂天になつてゐる、野心家、穩やかな瞬間が彼に與ふる凡ゆる警告に對して聾である野心家は、この情熱を專制君主に生長させる、それに對して、彼は流動の凡ゆる力を投げ打つのである。彼は彼自身を放棄したのである。なぜなら、彼は彼自身を溶解することが出來ない、それ故に自からをその情熱から脫却せしめ得ない。彼は囚はれてゐるのである。

自分は又人々を愛する、――單に個人ではなく、すべての人を、けれど、自分は自我主義の自覺をもつてかれ等を愛する。自分は愛が私を幸福にするが故にかれ等を愛する、自分は愛することが自分にとつて自然であるが故に、それが自分を喜ばすが故に愛する。自分は『愛の命令』を知らない。自分は凡ての感情動物に對して同胞感情を持つてゐる、そしてかれ等の苦悶が自分を

苦しめ、かれ等の元氣が又自分を元氣づける。自分はかれ等を殺すことが出來る、しかしかれ等を苛めることは出來ない。それどころではない、『巴里の秘密』の中に出てくる靈魂の高潔な、徳行あるフイリスティン　ルドルフ公は、惡人が彼の『憤怒』を喚び起したので、かれ等を拷問にかけようと計畫する。その同感は唯だそれを感ずる人々の感情も亦自分のもので、自分の所有であると云ふことのみを證據立ててゐる。それに反して、『正義の』人の無慈悲なやり方(たとへば書記フエルランドに對する)は彼の囚人の脚を切斷して若しくは彼の寢臺の長さに應じてそれを引き延ばす盜人の無感覺と等しい。ルドルフの寢臺、それに合せて彼は人間を切斷する、しかし、それが『善』の觀念からなのである。正義及び德操(等)に對する感情は人々をして冷酷に、容赦なくさせる、ルドルフは書記のやうには感じない、全然反對である、彼は『それが惡人相應だ』と感じてゐる。それは少しも同情ではない。

故に、諸君は人間を愛して、エゴイストである個人を苦しめる。諸君の博愛(人間愛)は個人を苛めることである。

若し自分が愛人の苦しむのを見れば、自分は彼と一緒に苦しむ、そして自分は彼を慰さめ、撫はるべく出來るだけのことを盡すまでは安心出來ないのである。若し自分が彼の喜ぶのを見るな

ら、自分も亦彼の歡喜によつて喜ばしくなる。しかし、これによつて、この結果を彼の上に齎す同一事によつて苦痛若しくは喜びが自分に引き起されるとは限らない。それは一切の肉體の苦痛によつて證據立ててゐるやうに、自分は彼のやうには感じないのである。彼の齒が彼を苦しめる、そして彼の苦痛が自分を苦しめるのである。

しかし、自分はその理由によつて愛人の顏の摺痕を我慢出來ない故に、これ故に、自分の爲めに、それを接吻するのである。若し自分がその人を愛さないなら、彼はいくらでも勝手に摺痕をこしらへるがいい、それは私を煩はさないであらう。自分は單に自分の煩惱を拂ひ去るのみである。

さて何人によらず、何物によらず、自分の愛さない人又は物が何故に、自分によつて愛されなければならない權利を持つのであるか？　兩親、親戚、祖國、國民、故鄕（等）遂には一般の同胞（「兄弟、友愛」）は悉く自分の愛に對する權利を有してゐる、そして有無を云はせずその權利を要求する。かれ等はそれをかれ等の財産と見做してゐる、そして若し自分がこれを尊敬しない時にはかれ等から、かれ等に所屬するところのものを取り去る盜賊と見做してゐるのである。自分が愛さなければならないのである。若し愛が命令であり、法律であるなら、その時、自分はそのや

うに教育され、培養されなければならない、そして、若し自分がそれに戻れば所罰されるのである、故に人々は自分をして無理に愛させようとして、自分の上に出來るだけ強い『道德的影響』を與ふるであらう。しかし、勿論、何人も他人を他の感情たとへば憎み——に誘致することの出來ないやうに、愛を喚び起し、無理にそれにまで誘致することは出來ないのである。憎惡は單に一方の祖先がゲルフ族に屬し、他がギベル族に屬するが爲めにのみ全種族を通じて流れるのである。

しかし、愛は命令ではない、自分の他の感情のすべての如く、自分の所有である。私の所有を獲得せよ、卽ち購へよ、その時、自分はそれを汝に渡すであらう、敎會、國民、祖國、家族(等)は如何にして私の愛を獲得すべきかを知らない、そして、自分はそれ等を愛する必要を感じない、そして、自分は自分の愛の價段をまつたく自分の好むがままに定める。

利己的愛は非利己的な、神秘的な、若しくは羅曼的な愛からはかなり距つてゐる。人は出來るだけ全てのものを愛することが出來る、單に、人間ばかりでなく、一般の『物』(酒、祖國等)、をも愛は自分の力以外のものを取らなければならないことによつて盲目になり、狂的になる(昏迷)、又それに入り込まなければならない、卽ち、『對象物』が自分にとつて神聖になり、自分が、義務、良心、誓

約によつてそれに束縛されることによつてロマンティックになる。その時、最早、對象は自分の爲めに存在はしない、自分がその爲めに存在する。

愛は憑き物である、それは自分の感情――とする時に自分はそれを財産として自分の所有とする――としてではなく、對象の外部性を通してである。なぜなら宗教的愛は愛人の中の『聖者』を愛せよ、若しくは神聖な者に固執せよと云ふ命令から成り立つてゐる。非利己的な愛の爲めには、その爲めに自分の心臟が鼓動しなければならない絶對に愛すべき對象が無數である、――たとへば、同胞、若しくは自分の結婚者、親戚(等)。聖愛は愛人中の聖なる物を愛する、それ故に愛人を愈々益々聖なる人(たとへば『人間』)にしようと努力する。

愛人は自分によつて愛されなければならない對象である。彼は自分が彼を愛するが爲めに、又愛することによつてさうである自分の愛の對象ではない、彼は彼自身に於て、徹頭徹尾愛せらるべき物なのである、自分が彼を愛の對象とするのではなく、彼が始からさうなのである。であるから、この場合、彼が私の選擇によつてさうなつたと云ふことは不適當なのである、また、たとへ彼がどんな場合に於ても(許嫁、若しくは妻、夫(等)たるが如き)一度、選擇された人として、『自分の愛に對する彼自からの權利』を獲得したのである、そして、自分は、一度自分が彼を

愛したが爲めに永久に彼を愛さなければならない義務の下に束縛される。故に、彼は自分の愛の對象ではなく、一般的な愛の對象である。愛せられなければならない目的物である。愛が彼に從屬し、彼に歸せられる、卽ち、愛が彼の權利である、そして、自分が彼を愛さなければならない義務の下にゐる、自分の愛、卽ち、自分が彼に仕拂ふ愛の課税は、實際、彼の愛なのである、それを彼は唯だ税として私から徵收するのである。

如何なる愛にもせよ、其處に最も些少な義務の觀念が付き纏つてゐる愛は非利己的な愛であるこの黑點がある限り、それは囚はれた物なのである。彼の愛の對象に對して何物をか負ふてゐると信ずる人は羅曼的に、若しくは宗教的に愛する人である。

たとへば通常『敬虔』として理解されてゐる家族的愛は宗教的な愛である。『愛國主義』として說敎されてゐる祖國の愛も同一である。至る處で、僞善、卽ち寧ろ『非利己的な愛』の自己欺瞞が跋扈してゐる、それは目的の爲めの目的に對するインテレッセで、自分の爲めでも亦、自分のものでもない。

宗敎的な又羅曼的な愛は實際、對象の差によつて官能的な愛から區別されてゐる、けれどそれに對する關係の從屬性によつてではない。從屬性を離れた立場から見て、兩者はいづれも憑れた

ものである。しかし、從屬的な立場から見ると、一方は汚れ、他方は神聖である。しかし、對象が自分を支配してゐることは孰れの場合に於ても同一である。唯だそれが時に官能的であり、時に精神的（幽靈的）なものである。自分の愛はそれが全然、利己的な、自我的な興味から成り立つてゐる時にのみ、自分自身のものである。故に自分の愛の對象が實際、自分の對象であり、自分の所有である。自分は自分の所有に對し何等負ふところがない、又何等の義務もない、それは、自分が自分の眼に對して何等の義務もないと同一である。それにも拘らず、自分がそれを非常に大切にするとすれば、それは唯だ自分の爲めにのみさうするのである。

古代は基督教時代と同樣、愛を缺如してはゐなかつた、愛神は愛なる神よりも舊い。しかし神秘的な憑き物は近代人に從屬する。

愛の憑き物は外部性に、若しくはその外部性と、優れた力とに對する自分の無力とに横つてゐる。エゴイストにとつては、彼が自から卑下してその前に跪坐くやうな物は一つもないのである、又彼がそれを愛する爲めに生きなければならない程何物も獨立してはゐないのである、又何物も彼がその爲めに犧牲にならなければならない程神聖ではないのである。エゴイストの愛は利己に始まり、利己性の河床を流れ、再び利己性の中に沒入する。

かくの如き物が果して愛と呼ばるべきであらうか？　若し諸君がそれに代るべき他の言葉を見出すなら、進んで、それを選擇せよ。その時、愛と云ふ懷かしい言葉は過ぎ去りたる世界と共に萎むかも知れない。現在に於て自分は少なくとも、我々の基督教的國語の中には何等の言葉をも見出さない、故に、舊音に固執して、自分の對象、自分の――財産を『愛する』のである。

單に自分の感情の一つとして、自分は愛を庇護する。しかし自己以上の力として、神聖な力（フォイエルバハ）として、自分が脫却してはならない情熱として、宗教的な道德的な義務として、自分は――それを侮蔑する。自分の感情として、それは自分のものである、自分が聖別し、自分の靈魂を『誓ふ』原則として、それは支配者であり、神聖である、恰かも。憎惡が原則として惡魔的であるやうに。一方は他方より優れてはゐないのである。要するに、自我的な愛、卽ち自分の愛は、淸潔でもなく、汚れてもゐず、神聖でも惡魔的でもない。

『信仰によつて制限せられてゐる愛は眞實の愛ではない。愛の本質に矛盾しない唯一の制限は理性と、智慧による愛の自己制限である。慧智の嚴酷な律法を侮蔑する愛は理論的には虛僞の愛であり、實際には破滅的な愛である。』（フォイエルバハ『基督敎の本質』三九四頁）かくの如くして、愛はその本質に於て合理的である！　さうフォイエルバハが考へてゐる。これに反して、信者

は、愛がその本質に於て信ずることであると考へてゐる。一方は不合理な愛を罵倒し、他は不信の愛を罵倒する。兩者に對して、それは精々 splendidum vitium（立派な謬念）として位する。かれ等は、不合理と不信の形に於てさへ、愛をそのままにして置くことが出來ないのであらうか？かれ等は、不合理な不信な愛がナンセンスであり、愛ではないとまでは大膽に云ふことが出來ないのである、それはかれ等が不合理な不信な涙が涙ではないと云ひ得ないやうに。けれど、若し不合理な愛（等）が愛として見做れなければならないとすれば、そしてしかも人間の持つに慣しないものであるなら、その結果は單にかう云ふことになる。愛は最高なものではない、しかし理性若しくは信仰である。不合理な者と不信な者すら愛することは出來る。けれど愛はそれが合理的な人間又は信仰の人の愛としてのみ始めて價値を生ずる。フォイエルバハが愛の合理性をその『自己制限』と名付ける時にそれは一種の幻覺（イリユウジョン）である。信仰者は同一の權利をもつて信仰をその『自己制限』と呼ぶかも知れない。不合理な愛は『虚僞』でも『破滅』でもない。それは愛としての役目を果してゐる。

この世の中に對して、特に人々に對して、自分は始めから、特別な感情を抱き、愛の感情をもつて、『愛をもつてかれ等を遇さなければ』ならないのである。たしかに、この中には、自分が自

分自身をこの世の常としてありつたけの感情に襲撃され、最も交錯した最も偶然な印象に曝されてゐる時よりもズット以上な自由意志と自己決定とが現はされてゐる。自分は、恰かもそれが偏見であり、先入の意見であるかの如き、豫想せられた感情をもつて世の中に行く。自分は世の中に對する自分の態度を豫め自分自身に對して命じて置き、その凡ゆる誘惑にも拘らず、自分が一度、決定したやうにばかり、感じたり考へたりすることになる、この世の主權に對して、自分は愛の原理によつて自分自身を安全にする。なぜなら、なにが來ても、自分は――愛する。たとへば、醜惡な者が自分の上に反撥的な印象を與へる。けれど、一度愛さうと決心した自分は、自分がその他の反感に對するが如く、この印象を壓服する。

けれど、自分がそれに定めた感情、そして――當初から自分自身に宣告した感情は狹隘な感情である、なぜなら、それが豫定せられた感情で、それに對して自分自身は煩はされず、それからきれいに脱却してゐると宣言することは出來ないのである。なぜなら、先入されたものは、偏見である。自分は最早この世に向つて私自身を示しはしない、けれど自分の愛がそれ自からを示すのである。この世は實際私を支配はしない、けれどもそれだけ一層必然に愛の精神が自分を支配する。自分がこの精神の奴隷になる爲めにこの世に打ち勝つたのだ。

若し自分が最初に、自分はこの世を愛すと云つたとすれば、自分は今、また、自分はそれを愛さずと云ふ付け加へをすることが出來る、なぜなら、自分が自分を絶滅するやうにそれを絶滅するが故に。自分はそれを解體する。自分は人々に對して自分自身を一ッつの感情にまで制限しない。しかし、自分の出來るだけすべてに對して自由に振舞ふ。自分は何故敢へて一切の感情を奔放に潑剌に發揮することが出來ないのであらうか？　さうだ、自分はこの世とこの世の人々を利用するのだ！　であるから、自分は凡ゆる印象に對して自分自身を開放する、そして決してそれ等の一つによつて自分自身を搬び去られない。自分は充實した心を抱いて心一杯に愛することが出來る。そして、最も熱烈な情火を自分の心に焰やさせる、しかも愛人は自分の情熱の滋養以外のなに物でもない、その滋養によつて情熱はたえず自からを新らしく燃燒せしめる。彼に對する自分の一切。懸念は唯だ自分の愛の對象にのみ限られる、唯だ自分の愛が要求する人に對してのみ、唯だ「暖かに愛される」人にのみ。若しこの——自分の愛がなかつたなら、彼は自分に對して如何に沒交渉なことであらう！　自分は唯だ彼によつてのみ自分の愛を育てる、自分はこれのみによつて彼を利用する。自分は彼を享樂する。

今、もつと便宜な例を選んでみよう。自分は如何に人々が幽靈の群になやまされ、暗黑な迷信

に囚はれてゐるかを見る。若し自分の力の範圍内で、自分がたとへ僅かでも日光をその夜陰の幽鬼の上にふりそそぐとしたら、それは恐らく諸君に對する愛がこれを自分に皷吹するからなのであらうか？　自分は人々に對する愛から物を書くのか？　否、自分は自分の思想の爲めにこの世に存在を獲得せんが爲めに書くのである、たとへば自分はこれ等の思想が諸君の安心と平和とを奪ふことを豫想したとしても、またたとへ自分がこの思想の種子から最も慘憺たる戰爭と多くの時代の沒落を生ずることを先見したにしても、——自分はそれにも拘らずその思想をまき散らすであらう。諸君はそれに對して諸君の欲するがままに振舞へよ、それは諸君の事件であつて、自分を煩はしはしない。諸君は恐らくそれから單に困惑と、爭鬪と死とを持つであらう、しかし極めて少數がそれから歡喜を引き出すであらう。若し諸君の幸福が自分の心底にあるなら、自分は嘗て教會が聖書を俗人に讀ませなかつたやうに、若しくは基督教政府が『惡書籍から人民を保護する』ことを自からの神聖な義務と心得た如くに行爲するであらう。

けれど、自分は、諸君の爲めにばかりでなく、又眞理の爲めにすら、自分の思ふことを表現するのではない。否——

Ich singe, wie der Vogel singt,
Der in den Zweigen whonet;
Das Lieb, das aus der Kehle bringt,
Ist Lohn, der reichlich lohnet.

自分は鳥が唄ふやうにうたふ
あの樹の枝にとまつてゐる。
自分から流れ出す歌は
そのまま充分に仕拂はれる報酬だ。

自分は唄ふ、なぜなら、――自分は唱歌者だから。けれど自分はその爲めに諸君を使ふ(gebrauche)なぜなら――自分は耳が入用(brauche)だからである。

この世が自分の道程に横つてゐる――そして隨處にそれが自分の道に横つてゐる――自分は自分のエゴイズムの飢餓を鎭める爲めにそれを消費する。自分にとつて「諸君は――自分の食物以

外の何物でもない、私とても亦諸君の爲めに用ゐられて、喰はれるのである。我々は唯だ相互に對して唯一の關係、――即ち使用され、利用され、役に立つことの――を持つのみである。我々は相互に對して何の責任もない、なぜなら自分が諸君に負ふところある如く見えるものは、精々自分自身に對して負ふところのものである。若しも自分が諸君を喜ばさんが爲めに嬉しさうな風を諸君に見せるなら、その時、諸君の嬉しさが自分に大切だからである、そして自分の様子が自分の願望に役立つ。自分が喜ばさうと思はない他の數千の人々に對して、自分はそれを示しはしない。

人は「人間の本質」に基礎を置く愛、若しくは、宗派及び道徳時代に於て「命令」として我々の上に課せられる愛にまで教育されなければならない。我々の教育の根本的要素たる道徳的影響がどんな風に人間の交際を制裁せんと欲するかは自我的な眼光をもつて、少なくともある例を眺めることによつて明らかにせられるであらう。

我々を教育する人々は夙に我々から虚言の習慣を打破し、人々が常に眞實を語らなければならないと云ふ原理を諄々と敎へ込まふとする。若し利己性がこの法則の根柢にされてゐるとすれば、

各人は、如何に僞はることによつて彼が他人の中に呼び醒さうと希望する彼に對する信頼を愚弄すべきかを容易に理解するであらう、そして、虚言者はたとへ彼が眞實を語るとも、信ずる者なし、と云ふ格言が如何に正しきかを證明するであらう。しかし、同時に彼は又、眞實を聽くと認めた者にのみ眞實をもつて對さなければならないと感ずるであらう。若し密偵が變裝して敵の陣營を歩いてゐるとする、そして誰何されたとすれば、尋問者はたしかに彼の名を訊ねる權利がある、けれど變裝者は彼から眞實を學ぶべき權利をかれ等に與へはしない。彼は唯だかれ等に好きなことを云ふ、但し事實は云はない。そしてしかも道徳は『汝等僞はりを語るべからず！』と命令する。かれ等は道徳によつて眞實を期待する權利を授けられる。けれど、かれ等は自分によつてその權利を授けられてはゐない、そして自分は唯だ自分が與へる權利をのみ認める。革命家等の集會に於て、警官は突入して、演説者の名を訊ねる。何人も警官がしかする權利を有してゐることを知つてゐる、けれどかれ等は革命家からその權利を持ちはしない、なぜなら彼はかれ等の敵だからである。彼はかれ等に虚僞な名を告け——かれ等を欺く。警官も亦かれ等の敵の眞實に對する愛を認めるやうな馬鹿な眞似はしない。反對に、かれ等はそれ以上の禮儀を盡して信じようとはしない、出來るだけ、その注意人物を『明らかに』しようとする。否、國家は至る處に個

人に對して疑惑を投げかける、なぜならかれ等のエゴイズムの中に國家はその自然の敵を認めるからである。それは必然に「證人」を要求する、そして證人を示すことの出來ない者はその探求的審問に對する餌食となる。國家は個人を信じもしなければ、信頼もしない、であるから、虚言の習俗の點で自からを個人と同一位に置く。國家は唯だ私の敍述の眞實を自から確認した時にのみ自分を信頼する、それに對しては屢々誓言以外に他の何等の手段もない。これは、國家が我々の信頼するに足るべきことや、眞實の愛を無視し、我々の利害觀念や、我々の利己性を如何に重視してゐるかを明らかに證據立ててゐる。國家は我々が僞誓によつて神と爭ふことを欲しないことに信頼するのである。

……………………………………

シギスムンド(Sigismund)は彼が彼の君主らしい言葉を破つたが爲めに哀れな卑劣漢ではないたが、彼が卑劣漢であつたが故にその言葉を破棄したのである。彼は彼の言葉を守つたかも知れない、しかも依然として卑劣漢であることに、坊主に左右された人間であることに變りはなかつたであらう。ルウテルは、より高き力に驅られて、彼の僧侶らしき誓に對して不信になつた。彼は神の爲めにさうなつたのであつた。兩者は憑かれた人間としてかれ等の誓を破つた。シギスム

ンドは、彼が神聖な眞理の眞面目な教授として、卽ち眞に、純粹な天主教的信仰の人と見せかけたいと思つたからである。ルウテルは、眞率に全眞理と、全靈肉をもつて福音の爲めに證據を與へようとしたのであつた。兩者は『より高き眞理』に忠實ならんが爲めに誓を破つたのであつた。唯だ、僧侶が一方を許し、他は彼自身を免るしたのであつた。兩者は『汝は人々を僞はらざりしも、神を僞はりたり』と云ふそれ等の使徒らしき言葉に含まれてゐるもの以外の何を遵守したのであるか？　かれ等は人々を僞はり、公衆環視の面前でかれ等の誓を破つた、それは神を僞はらず、彼に奉仕せんが爲めであつた。かくして、かれ等は我々に眞理に對する態度を示したのである。神の榮光の爲めに、神の爲めに、――誓約を破り、虛言を吐き、君主の言葉を破つたのである！

若し我々がそれを少しく變へて、自分の爲め――の僞誓と虛言を書いたなら、それはどうなるであらうか？　それは凡ゆる卑劣を辯護するものではないであらうか？　それは、この點で又全然『神の爲め』と同一であるやうに思はれるのである。なぜなら、凡ゆる卑劣が神の爲めに實行されなかつたであらうか、凡ゆる斷頭臺が彼の爲めに汚されなかつたか、凡ゆる auto-da-fes（宗教裁判による火刑）が彼の爲めに備へられなかつたか、凡ゆる昏迷が彼の爲めに引き入れられなかつた

らうか？　そして、今日も依然として柔しき子供等の心が神の名の下に與へられる宗教教育によつて束縛されなかつたらうか？　又、神聖な誓の爲めに破られなかつたであらうか、そして、多くの傳道者や、僧侶は依然として日毎に、猶太人や、異教徒や、新教徒や天主教徒(等)を（神の爲に）かれ等の祖先の信仰から叛かせようとしてはゐないであらうか？　そして、それは自分の爲めよりも更にわるいことではないであらうか？　其處で、人々は直に『不潔な利益』と云ふことを考へる、けれど不潔な利益に對する愛の爲めに行爲する者は實際彼自身の爲めにするのである、さう云へば彼自身の爲めにやらないものは一つもないことになる、――先づ神の光榮の爲めにされる一切の事柄と雖もさうである。けれど、その不潔な利益を自分以上に求めてゐる者は利得の奴隷で、自己はそれ以上に高められない。それは利得に、財布に從屬する人で、彼自身に屬する人ではない。婪貪な情熱が支配する人間はこの主人の命令に從つてはならないのか？　そして、若し薄弱な善性が一度彼を欺けば、これは單に敬虔な信者が時としてかれ等の主なる神の指導によつて見棄てられ『惡魔』の諸術によつて惑はされると正に同種類の例外として見えないであらうか？　かくして、貪婪な人間は自己の所有人ではなく、一個の奴僕である。そして、彼は彼自身の爲めに何事をもしないと同時に彼の君主の爲めにもそれをやらないのである、――將に神に仕

へる人としても。

フランシス第二世が皇帝チヤアレス五世に對してやつた誓約の破棄は有名なものである。彼が充分彼の約束を熟考した時、即ち彼がその誓を立てた時、直にフランシス王はその心の中に於ても亦彼の內閣に對して記名した秘密文書に於てもそれを徹回してゐたのである。彼は僞誓の後想を發言したのであつた。フランシスは彼の釋放を贖ふことを拒むやうな樣子を示しはしなかつた。けれどチヤアレスがそれに對して要求した價段はあまり高價であり、不合理に思はれた。たとへチヤアレスが出來るだけ多額を絞らうとしたのは賤劣なやり方ではあるが、又フランシスがそれ以下の價段で彼の自由を贖はうと欲することもみすぼらしい話であつた。そして、彼のその後のやり方、――その中には彼の第二の誓言の破棄がある――は如何に小商人的精神が彼を囚へたか、そして彼を哀れむべき騙人にしたかを充分に證據立ててゐる。しかし、我々は彼に對する僞誓の非難に對してどう云つたらいいのか? それは先づ第一に、その僞誓ではなく、彼の賤劣が彼を恥かしめたのであつた。彼は彼の僞誓に對して恥辱を價したのではなく、彼が輕蔑せらるべき人間であつたが爲めに自から僞誓の罪を負はなければならなかつたのである。けれど、フランシスの僞誓は、それ自からの立場から見て、他の判斷を要求するのである。フランシスはチヤアレス

が彼を自由にするべく彼に與へた信頼を裏切つたと人は云ふかも知れない。けれど、若しチャアレスが眞に彼を信頼したとすれば、彼は彼が釋放に價したと考へた價格を彼に指定し、それから、彼を自由にし、その倍償を拂ふことをフランシスに期待したであらう。チャアレスは勿論かくの如き信頼を抱いてはゐなかつた、しかし單にフランシスの無力と輕信を信じてゐた、けれどフランシスは唯だこの――輕信的劃策を欺いたのである。チャアレスが誓約によつて彼の敵を征伏したと信じた時に、直に彼は凡ゆる責任から彼を解除しつつあつたのである。チャアレスは狹隘な良心と云ふ一片の癡愚の爲めに王に信頼を與へたのである。これはフランシスを信頼したのではなく、單にフランシスの愚鈍、卽ち良心に重きを置いたのであつた。彼がフランシスをマドリッドの牢獄から放つたのは、更に良心と云ふより安全な牢獄中に彼を囚へようとしたのである、それは宗教によつて人心を圍むだ大牢獄なのである。彼はフランシスを眼に見えぬ鐵鎖で堅く縛して佛蘭西へ彼を送りかへした。フランシスがその鎖りを切斷して逃れようとしたのに別段なんの不思義もない。たとへ彼が窃かにマドリッドから逃れたとしても、何人もそれを惡くとるやうなことはあるまい、なぜなら、彼は敵の手中にゐたのだから。しかも、善良なる基督教徒は異口同音に、彼が又自からを神の束縛から脫しようと欲したのであるとわめき叫ぶ。(羅馬法皇が彼の誓

約から彼を免じたのはそれから後のことである）

我々が自から進んで招いた信任を欺くことは輕蔑すべきことである。しかし、誓約によつて我々を彼の權力內に囚へようと欲する者を彼の信賴されない統計の不成功によつて血塗れにせることはエゴイズムにとつて恥づべきことではない。若し諸君が私を縛さうと思ふなら、その時、私が如何にして諸君の束縛を切斷するかを知つてゐるものであることを心得よ。

要點は、自分が信賴者に信賴する權利を與へるか否かと云ふことである。若し自分の友達の追跡者が、何處に彼が逃れたかを私に訊ねるなら、私は確かにその人に出鱈目な方向を敎へるであらう。彼は何故に、追跡されてゐる男の友達である自分にそんなことを尋ねるのか？ 自分は友達を裏切らない爲めに、寧ろ敵を裏切ることを撰むのである。自分は勇氣ある自覺をもつて、恐らく『自分は云ひたくない』と答へることが出來るかも知れない（フイヒテならその場合にそれを斷行する）。それによつて自分は眞理に對する自分の愛を癒やし、自分の友達に對してはどうもしないことになる、なぜなら、若し自分が敵を他の方向に導かないとすれば、彼は偶々その友達の逃れた方へ進むかも知れない、そして、自分の眞理に對する愛は自分の友達を犧牲にするかも知れない、なぜなら、それが虛言に對する勇氣から自分を妨げたからである。眞實に偶像と靈物とを

認めるものは、その前に自からを卑下しなければならない、その要求を拒んではならない。大膽に反抗してはならない。要するに彼は虚言の俠氣（Heldemut der Lüge）を棄絕しなければならない。なぜなら虚言に對しても、眞實に對すると同樣な勇氣が入るのである。この勇氣こそ青年諸君が最も缺くところのものである。……かれ等にとつて眞實は『神聖』である、そして神聖はいつでも盲目的な崇敬や、服從や、自己犧牲を要求する。若し諸君が厚顏でもなく、神聖の嘲笑者でもないなら、諸君は從順で、その奴僕なのである。何人かが、諸君の爲めに眞理の一粒を係蹄の中へ落したとする、諸君はたしかにそれを啄む、そして馬鹿が捕へられる。汝、僞はるべからず？　さて、それなら、眞理に對する犧牲になつて——殉教者になれ！　殉教者！　なんの爲めの？　諸君自身の爲めに、自己所有の爲めにか？　否、諸君の女神！　眞理の爲めに。諸君は唯だ二種の奉仕、唯だ二種の奴隸を知つてゐる。眞理の奴僕と虚僞の奴僕、それなら神の名によつて眞理に奉仕せよ！……

ある領土では、愛の原則が永い間エゴイズムによつて壓服されてゐたやうに見える、そして、恰かも善良な良心による勝利を必要とするかの如く、確然たる自覺からそれを必要としてゐるかの

如く見える。この領土がヤマである。それが思索と商賣によつて二重に表現されてゐる。ある者は、その結果が如何になるかをも省みず、ある意志をもつて考へる。又、ある者は、如何程、多數の人々がその投機的事實の下に苦しむかを省みずして、實行する。けれど、それが遂に眞劍になつた時に、宗教性の最後の遺物たるローマンスや『人道』すら滅却されなければならない時に、宗教的良心の脈膊が鼓動して、人は少くとも人道を公言する、貪慾な投機者が幾千の銅貨を賽錢箱の中へ投げ入れて『善行をやる』』大膽な思想家は彼が人類の進歩の爲めに働いてゐると云ふ事實をもつて自からを慰さめる、そして彼のデシャバリが人類の爲めになる、』又、他の場合に於ては、彼が『觀念に奉仕しつつ』ある。人類と云ふ觀念は、少なくとも、彼がそれに對して、自分自身以上のものであると云はなければならないものなのである。

今日まで、思索と商賣とは――神の爲めになされて來た。六日の間、自からの利己的目的によつて一切を蹂躪して來た人々は七日目を主なる神の爲めに捧げた。そしてかれ等の向ふ見ずな思索によつて無數の『よき主義』(gute Sachen)を破壞した人々は又これを他の『よき主義』の爲めにしたのである、そして更に又――かれ等自身以外に――かれ等の自己惑溺の目的となるなん等かのよき爲めを考へなければならないのである。(たとへば、民衆、人類、等)けれど、これはかれ

等以上の存在で、より高き、至上存在である。故に私は、かれ等が神の爲めに努力して來たと云ふのである。

故に私は又かれ等の行爲の最後の根柢が——愛であると云ふことが出來る。けれど、それは自發的なかれ等自身のではなく、從屬的な愛、即ち、より高き者の所有(即ち、彼自身愛である神の)である。要するに自我的ではなく、宗教的な愛である。かれ等が愛の貢を放射しなければならない、即ち、かれ等が『エゴイスト』であつてはならないと云ふ幻想から生れて來る愛である。

若し我々がさまざまの不自由からこの世界を解放しようと欲するならば、我々はこれを世の中の爲めにするのではなく、我々の爲めに欲するのである。なぜなら、我等は世界解放を職業とするものでもなく、又、『愛』からそれをやるのでもない、我々は唯だ他の者からそれを獲得しようと欲するのである。我々はそれを我等自からのものとしようと欲するのである。それは最早神(教會)又は法律(國家)の奴隷として所有されてはならない、それは我等自からのものとならなければならない。故に、我々はそれを、『獲得』し、『捕獲』しようとする、そして、半途でそれに出遇ひ、それが我々に從屬するや否や我々自身に對する如く自からをそれに『捧げ』て、我々に反

抗する力を完成させ、不用にしようとする。若し、この世が我々のものであるなら、それは最早我々に對して何等の反抗もせず、唯だ我々と一致する。自分の利己性は、この世が――自分の所有物になる爲めにのみ、この世の解放に對して興味を持つのである。

孤獨、卽ち獨りであることは人間本來の狀態ではなく、社會が人間本來の狀態なのである。我々の存在は、我々が呼吸する以前母胎に於て我々の母と共棲してゐる時から既に最も親密な關係をもつて始まる。我々がこの世の光りを見る時に、我々は直に又人間の胸に抱かれる、彼女の愛が我々をその膝の上で搖すり、乳母車に我々を乘せ、その他無數の羈絆をもつて彼女の身體に我々を束縛する。社會は我々の自然狀態である。そして、これはなぜだらう、我々が自からを感ずることを學べば學ぶ程、以前最も親密であつた關係が次第に弛緩する、そして、本來の社會の解體が次第に確かになつて來る。母が子供を再び曾て彼女の胸に抱かれてゐた狀態に齎す爲めには再び彼女は街上の遊び仲間から子供を連れ戾さなければならない。子供はその生み付けられて、未だ入り込まなかつた社會の仲間に這入つて交際しようとするのである。

だが、社會の解除は交際若しくは結合である。社會が又たしかに結合によつて起つて來る、しかしそれは唯だ固定觀念がある思想によつて起つて來る如くにである、――卽ち、思想から思想の

エネルギイ（思索それ自身、これが自から固定しようとする一切の思想を不斷にとり戻す）を消滅せしめることによつて起つて來るやうに。若し、ある結合（Verein）が結晶して社會になれば、それは聯合（Vereinigung）であることを止めたのである。なぜなら聯合は不斷の自己結合である。それが結合狀態になり、停止態となり、固定狀態に墮落したとする。それは――結合として死んだのである、それは結合若しくは聯合の死屍である、即ちそれが――社會であり、組合である。この種の著しい例は黨派によつて供せられてゐる。

社會（たとへば、國家の社會）が私の自由を減少すると云ふことは殆んど自分を怒らせはしない。どうして、自分は自分の自由を凡ゆる種類の權力によつて制限せしめなければならない、自分以上の凡ゆる强者によつて否、すべての同胞によつて。そして、たとへ自分が羅馬全體の獨裁君主であつても……、自分はなほ且つ絕對の自由を享樂することは出來ないであらう。けれど、自分は自分自身を自分から取らせはしないであらう。そしてその自己所有こそ凡ゆる社會が計畫をめぐらして、その權力に屈從せしめんと欲するものである。

自分から結び付く社會は實際自分から多くの自由を取り去る、しかしその代りとして又他の多くの自由を提供する。若し自分が自分自から、甲又は乙の自由を剝奪するなら（たとへば契約に

よつて）それは何等の痛痒を感じないのである。しかし、一方自分は自分の自己所有を執拗に把持しようと思ふ。どんな組合（Gemeinschaft）でも、その權力には多少の强弱があるが、必ずその成員に對してオウソリテイになり、かれ等に制限を加へようとする傾向を有してゐる。それは『服從の制限された理』を要求する、又要求しなければならない。それはそれに屬する人をその『服從者』とすることを要求する。それは服從によつてのみ存在する。そしてある程度の寛容は必ずしも排斥されはしない。反つて、社會はさまぐの改善、訂正、非難等を歡迎するであらう。少なくともそれ等が社會の利益であると見做れる限りに於て。しかし、その非難は『善意』でなければならない、それは『傲慢不敬』であつてはならない——言葉を換へて云へば、人は社會の本質を何處までも神聖であると考へそれを傷けてはならないのである。社會は、それに屬する人が社會以上になり、自からを超越せしめるやうなことをせず、『合法の制限内』に止まり、社會と法の律がかれ等に許す範圍に於て行動することを要求するのである。

自分の自由が社會の爲めに束縛されるのと自分の自己所有が束縛されるのとでは其處に差異がある。若しそれが前者の場合であるなら、それは聯合であり、契約であり、結合である。しかし、若し自己所有の破滅が威嚇される時には、それはそれ自からの權力であり自分以上の權力であり

自分の到達し得ない物であつて、自分は唯だ〳〵それを讃嘆崇敬しなければならない、そして決してそれを服従せしめ、消滅させることは出來ない、この理由から、自分は服従させられてゐるのである。それは自分の忍從、自分の自己棄却、卑下（Demuth）と呼ばれたる自分の無氣力（Muthlo·sigkeit）によつて存在する。自分の卑下がその勇氣を造る、自分の服從性がそれにその支配力を與へる。

けれど、自由に關しては、國家も結合も何等の本質的差異に左右されない。結合と雖も國家が側り知りがたい自由と適合する如く、種々なる方面に於て自由を制限せられずには存在することも出來ず、又それを繼續することも出來ない。自由の制限は隨處に於て必然である、なぜなら、人はすべての物から脫却することは出來ない。人は單にさう思つたばかりでは鳥のやうに飛ぶことは出來ない。なぜなら人は自分自身の重量から自由にはなり得ないからである。人はまたそれを望んでも魚の如く水底に生活することは出來ない、なぜなら、人は空氣なくして生活は出來ないそしてこの缺くべからざる必要品から自由にはなり得ない（等）。宗教が、そして最も決定的に基督教が、不自然な自己矛盾を實現すべき要求をもつて人間を苦しめた如く、遂には自由それ自身絶對の自由が理想にまで高められたことが過度なる宗教的努力と緊張の眞の論理的結果と見做れ

るやうになつた、かくして、無意味な不可能が光彩陸離として出現するに至つた。――結合は確かにより大なる自由を提供するであらう、そして同時に（そして特にそれによつて人は國家と社會的生活に特有である一切の強迫を逃れるから）『新しき自由』と考へられることを承認するであらう。しかし、それにも拘はらず、それは依然としてかなりな不自由と不本意とを含有することであらう。なぜなら、その目的はこの――自由ではなく（自由は反對に自己所有を犧牲とする）單に自己所有だからである。この點に關して、國家と結合の間の差異は非常に大きい。前者は自己所有の敵であり、殺戮者であるが、後者はその息子であり、協力者である。前者は精神と眞理に於て尊敬される精神であるが、後者は自分の仕事であり、自分の所產である。國家は自分の精神の君主である、それは信仰を要求し、信仰箇條と合法の教義とを自分に押し付ける。それは道德的影響を振つて、自己の精神を支配し、自分の自我を放逐して、その代りに『自分の眞の自我』を入れようとする。――要するに、國家は神聖である、そして、個人たる自分に反抗して、それが眞人であり、精神であり、幽靈となる。しかし結合は自分自からの創造であり、自分の被造物である。それは神聖ではなく、自分の精神以上の權力でもなく、それ等には絕えて關聯せざるものである。自分が自分の格言の奴隷たることを欲せず、何等の權威なしに自己の不斷の批判にそれを

暴らし、それ等の主張に對し何等の保證をも與へることを欲しないやうに、自分は結合に對しても、自分の將來をそれに托し、自分の靈魂をそれに質入しようとは思はない、それは惡魔に對する場合に云はれることだが、實は國家や、あらゆる精神的權威の場合に於てもさうである）。否、自分は國家、教會、神（等）に對してよりも自分自身に對して重きを置くのである。故に、勿論、又結合に對してよりも遙かにズット。

共產主義が建設せんと欲する社會は聯合に最も相似してゐるやうに思はれる。なぜならそれは『一般の幸福』を目的としてゐるからである、如何にもワイトリングが幾度となく叫んでゐるやうに、全體の、萬人のである！ それは、實際、恰かもその社會では何人も遲れをとる必要がないかのやうに見える。けれどそれならこの幸福はどうなるであらうか？ すべてが同一の幸福を持つとする、その時、すべては平等に同一の物をもつて幸福に暮らせるであらうか？ 若しそれがさうならば、問題は『眞の幸福』と云ふことになる。玆に於て我々は眞に宗教が暴行の主權をふるひ始めると云ふ點に氣付かないであらうか？ 基督教は云ふ、地上の玩具を欲しがるな、汝の眞の幸福を求めて、――敬虔な基督教徒になれ、基督教徒たることが眞の幸福である。それが『萬人』の眞の幸福である、なぜならそれはかくの如き（この幽靈）ものとしての人間の幸福である。

さて、一般人の幸福はたしかに又汝のと私の幸福でなければならないのか？　けれど、若し汝のと私がその幸福を我々の幸福と見做さないならば、その時、我々がよしと感じるものに對して注意が拂はれるであらうか？　反對に、社會は『眞の幸福』としての幸福を命じてゐるのである。そして、若しこの幸福が、たとへば『正直に働らいて得られた享樂』と呼ばれるなら、しかも、諸君は、それに反して喜ばしき怠惰、勞働ぬきの享樂を撰むとすれば、その時、『萬人の幸福』の爲めに世話を燒く社會は賢明にも諸君がそれによつて幸福を感ずる物に對する世話を避けるであらう。萬人の幸福を宣言する共産主義は從來金利の收入で生活し、一見、ワイトリングの正確な勞働時間の期望に於けるものよりよく感じてゐた人々の安寧を直に無效にする。故に、共産主義者は數百萬人の幸福は數千人の幸福と一緒に存在は出來ないと斷定する、そして前者は『一般の幸福の爲めに』かれ等の特別な幸福を擲打たなければならない。否人々をして一般の爲めにかれ等の特別な幸福を犧牲にすべく召喚されることはながらしめよ。なぜなら、この基督教的勸告は諸君を搬び去らないであらう。かれ等は寧ろ、かれ等自身の幸福を何人によつても掠奪せしめず、それに確固不動の基礎を置けと云ふ反對の勸告をよりよく理　するであらう。その時、かれ等は若しかれ等がこの目的の爲めに他の人々と結合するならば、即ち『かれ等の自由の一部を犧牲に

する」ならば、かれ等の幸福の爲めに最もよく注意することが出來るのであると云ふ點にまで自然、導かれる、しかもそれは他人の幸福の爲めではなく、かれ等自身の爲めなのである。人々の自己犧牲的性情及び自己棄絶的愛に對する訴へは、數千年間の活動の後に、それが今日の misera（悲慘）――以外の何物をも殘さなかつた時に、遂にその尤もらしき誘惑の力を失ふのは無理もないのである。それにも拘らず、何故に依然としてよりよき時代を徒らに自己犧牲に期待するのであるか？　何故に寧ろ纂奪によつてそれを希望しないのであるか？　救濟は最早授與者や、愛する者からは來ない、唯だ取る者、私用人（纂奪者）、所有人からのみ來る。共產主義、エゴイズム罵倒人道主義は、意識的に或は無意識的に、依然として愛に重きを置くのである。

たとへ社會が一度は人間の必要に應じて出來たにせよ、そして、人間はそれによつて自分の目的を促進されたにせよ、忽ち、それが彼の主義になつて、社會は人間に又その法則、即ち社會の法則を押し付けるのである。人間の主義がそれ自からを高めて至上權力になり、かれ等の至上本質になり、かれ等の神になり、そして、――立法者となる。共產主義はこの原則に最も嚴密な結果を與へる、そして基督教が社會の宗教である、なぜなら、フオイエルバハが正しく云つてゐるやうに、（勿論、ハツキリその意味で云つてゐるのではないが）愛が人間の本質だからである。即ち、

愛が社會或は社會的（共產的）人間の本質である。凡ての宗教は社會の尊崇するところである。この原則によつて社會的（敎養を受けた）人間が支配されるのである。又如何なる神も單獨の自我的な神ではなく、いつでも社會又は公共の神である、それは社會『家族』の（Lar, Pnatis）又は『人民』の（『國民的神』）或は『萬人』の（『彼は萬人の父である』）神である。

故に、人は社會とその原則から流れ出づる一切を豫想する時にのみ宗教を根絕する希望を抱くしかし、この原則が成就せられることを求めるのが正に共產狀態なのである 其處では一切が『平等』の建設の爲めに共通にならなければならない。若しこの『平等』が獲得されるなら『自由』も亦缺けてはゐない筈である。しかし何人の自由であるか？　社會の！　社會がその時全ての全てである。そして人々は唯だ『御相互』である。それは——愛の國家の光榮であるであらう。

けれど私は人間の『親切』や、かれ等の慈悲や、憐憫（等）よりも寧ろかれ等の利己性に訴へたいのである。利己性は相互の利益（汝が私に對する如く、私も亦汝に）を要求する。そして『ただ』（umsonst）ではなんにもしない。そして、得られ——買はれる。けれど、なにを以つて自分はその親切を獲得するであらうか？　自分がその場合に『愛のある』人間と交涉するか否かは機會の問題である。慈悲のある人の奉仕は——唯だ——乞ふことによつてのみ得られる。それが自分の

悲し氣な容貌でも、自分の救はれる必要からでも、自分のみすぼらしさ、自分の――困りやうからでもなにからでも。自分は彼を助ける爲めに何を提供し得るか？ なんにもない！ 自分はそれを――贈り物として受けとらなければならない。愛は金で仕拂ふことは出來ない、否、愛は唯だそれに對する愛によつてのみ確かに仕拂はれる。（『一方の好意は他の好意を償する』）それ等の贈物が規則正しく、たとへば哀れなその日稼ぎの勞働者から徵收せられる時、年中それに對する返禮をせずに受けとることは卑賤であり乞食根性ではないだらうか？ それの受領者は彼の富がそれによつて成立する彼と彼の與へられたペニィに對してなにをすることが出來るか？ 日傭人は若しかの受領者（彼は色々な法律や、制度を所持してゐる、そしてそれ等の爲めに日傭人は仕拂はされるのである）が全然存在してゐなかつたら實際より多くの享樂を持つことが出來るのであらう。そして、かくの如き狀態にも拘らず、哀れな人間が彼の主人を愛するのである。

否、從來の歷史の『目的』たる社會制度は不可能である。我々は寧ろその制度の一切の僞善を拒絕し、そして、若し我々が人間として平等であるならば、又一方我々は人間ではないと云ふ理由で平等ではない。我々は唯だ思想に於て平等である、『我々』が思想である時にのみ平等であつて現實的な肉體的な我々としては平等ではない。私は自我である、そして汝が自我である、けれど

自分はこの思想の自我ではない。我々がその點で平等であると云ふこの自我は單に自分の思想である。私は人間であり、汝は人間である。しかし『人間』は單に一箇の思想であり、一般性である。君も私も云ふことは出來ない、我々は言葉で表現は出來ない、なぜなら、思想のみが物を云ふ、そして表現することに於て成り立つてゐる。

故に、我々は社會制度に憧憬することはやめよう、そして偏頗（Einseitigkeit）にならう。我々は最も拘轄的な自治體、『人間社會』を求めることはやめて、他人の中に我々の所有として用ゐ得る手段と機關をのみ求めやう！　我々が樹や、獸に我々の同等者を見ないやうに、他の人々が我々と同等者であると云ふ豫想は僞善から生じるのである。何人も自分と同等ではない。けれど、自分は、他の存在と等しく彼を自分の所有と見做すのである。これに反して、自分は自分が『同胞』の間にあつて一箇の人でなければならないと云はれる。（"Judenfrage," P60）自分はかれ等の中にある同胞を『尊敬』しなければならない。自分にとつては何人も尊敬に價する人間ではない、否、同胞でさへない、單に他の存在と等しく、一箇の對象で、自分がそれにインテレッセを持つか否かである、それが自分に興味のある物であるか否か、使用出來る物であるか否か、その孰れかである。

そして、若し自分が彼を使用し得るなら、自分は勿論相互の理解に入り、自からを彼と一ッにし、ある約束の下に、自分の力を強め、協力によつて個人的な力が生ずるよりも以上の事柄を成就することが出來る。この結合に於て、自分は自分の力の倍加以外のなにものをも見ない。そして、自分はそれが自分の倍加力である間のみそれを保留する。かくしてそれが――一ッの結合(ユニオン)になる。

その結合を把持するものは自然的羈絆でも又精神的のそれでもない。そしてそれは自然的な同盟でも、精神的なそれでもない、それは同一の血緣によつて出來上るのでも、同一の信仰(精神)によつて出來上るのでもない。自然同盟に於ては――家族、種族、國民、然り、人類の如き――個人は唯だ同種、同屬の見本としてのみの價値あるのみである。精神的同盟に於ては――自治體教會等の如き――個人は唯だ同一精神の成員を意味する。孰れの場合に於ても、唯一者としての諸君は――壓縮されなければならない。唯だ結合に於てのみ諸君はユニイクとして諸君自身を肯定し得る、なぜなら、結合は諸君を所有せず、諸君がそれを所有して、諸君の用に供するからである。

財產が結合に於て承認される。そして、それは唯だ結合に於てのみである。なぜなら、何人も自己の物を他からの拜領として持たないからである。共產主義者等は宗教的進化の間、特に國家

に於て現在してゐたものを更に立派に完成しようとしてゐるばかりである。即ち、それは、無財産、即ち、封權制度である。

國家は慾望ある人間を馴致しようと努めてゐる。言葉を換へて云へば、それは、彼の慾望を只管國家にのみ傾け、國家の供する物をもつてその慾望の滿足を計らうと努める。慾望人の爲めにその慾望を滿さうと云ふ考へは少しもその心持には入つて來ないのである。反對に、國家は放肆な慾望を呼吸する人間に『主我人』と云ふ烙印を押す、そして『主我人』はその敵である。彼は如何にもさうである、なぜなら、彼と同意せんとする能力が國家に缺けてゐるからである。エゴイストは正に國家の『抱含』することの出來ない者なのである。由來、國家はそれから自らのことのみを懸念するが故に、如何にして私を亡ぼし、私から他の自我、即ち善良な市民を造り出さうかと云ふことのみを念頭に置く。それは『道德の改善』の爲めに種々なる方法を講ずる――そして國家はなにをもつて個人を捕獲しようとするか? それ自から、即ち、國家の財產をもつて。それは絶えず『よき教育』を萬人に供給し、一切の干與者を悉くその『よきもの』に與からしめんが爲めに活動しつつある。國家はかれ等にその教育を提供する。かれ等をしてこの教養の制度一切に接近せしめ、かれ等をして實業その他の方法によつて財產(即ち、采邑)を獲得する

能力を投げる。すべてこれ等の釆邑に對して、國家はそれに相應した感謝と云ふ地代を絶えず要求する。しかし、『思知らず』はこれ等の感謝を拂ふことを忘れる。――さて、『社會』も本質的には國家以外のことをすることは出來ない。

諸君は結合に諸君の全力諸君の能力を注入して、諸君自身に重きを置くことが出來る、社會では、諸君が諸君の勞働力を供して傭はれるのである。前者では諸君が自我的に生活し、後者では人間的に、卽ち、宗教的に『この君主の團體の成員』として生活する。社會に對して、諸君は諸君の所有を負ふてゐる、そして、義務によつてそれに束縛され、――『社會的義務』に憑かれてゐる。結合を諸君は利用出來る、そして諸君が最早それを利用するに足りないと思つた時には無責任に勝手にそれを擲げ打つことが出來る。若し社會が汝以上であるなら、その時、それは汝自身に對してよりも汝に對して以上なものである。結合は單に諸君の道具であり、若しくは諸君が諸君の自然力を鋭くし、增加する劍である。結合は諸君の爲めに、諸君を通じてのみ存在する、社會はそれに反して諸君に對してそれ自からの權利を主張し、諸君を不用としてすら存在する。要するに、社會は神聖であり、結合は諸君自からのものである。社會は諸君を消費し、諸君は結合を消費する。

それにも拘らず、人々は一度締結された契約が凡び我々の重荷になつて我々の自由を制限するかも知れないと云ふ抗議に對して辟易しないであらう。かれ等はかう云ふであらう、我々は又遂に『各人は全體の爲めに彼の自由の一部を犧牲にしなければならない』と云ふ結論に達するであらうと。自分が『全體の』爲めの契約を締結しない限り、全體の爲めに、又何等他人の爲めに少しも自分を犧牲にする必要はないであらう。寧ろ自分は、利己性から、自分自身の爲めにのみさうするのである。しかし、犧牲に關しては、確かに自分は自分の力に餘まる物のみを『犧牲にする、』即ち、自分は何物をも『犧牲』にはしないのである。

財産の問題に歸へれば、君主が所有主である。それなら諸君は自から君主たることを欲するか、或は社會を君主とするかその孰れかを撰擇せよ！　諸君が所有人になるか襤褸人になるかは玆に懸つてゐる！　エゴイストは所有人であり、社會主義は襤褸人である。しかし襤褸狀態と無產狀態とは封權制度の意義である、それを前世紀が單にその主宰者として『人間』を神の代りに置いたのである。そして以前に神の恩惠から采邑として受領したものを人間から受領したまでである。共産主義の貧困狀態が人間主義によつて絕對の最も貧乏くさい貧困狀態にまで齎らされたと云ふことは以上に示されたのである。舊式な封建制度は佛蘭西革命によつて全く蹂躙されてしま

つた。それ以來一切の反動的な狡計は悉く功を奏さなかつた、またこれからも勿論、實を結ぶやうなことはないであらう。なぜなら、死んだのである。しかし、基督教の歴史では復活と云ふことが眞理として自からを證據立てなければならない。かくして他の世界に、再び封建制度が旭日の勢で昇つて來た、それは『人間』を主權とする新らしい封建制である。

基督教は絶滅されてはゐない、そして、熱心な信仰者は基教に對する凡ゆる爭鬪が單に基督教を愈々純化し、堅固なるものとするのみであると確く信じてゐたのは全く當を得てゐる。なぜなら、それは實際、光榮化された、そして『曝露された基督教』は――人道的基督教である。我々はなほ依然として全く基督教時代に棲息してゐるのである、そしてそれに對して最も反感を抱いてゐる人々こそ實はそれを『完成』する爲めに熱心に功献しつゝあるのである。人間的になればなる程、封建制は我々に親しいものになつた。我々がそれを封建制であると信ずることが少なくなる程、我々はそれを自己のものであると確信し、我々が『人間』を發見した時に『最も絶對な我々自から』を發見したと考へてゐるのである。

自由主義は自分のものであるところのものを自分に與へようとしてくれる、しかし、自由主義はそれを自分の名義ではなく『人間』と云ふ名義の下に獲得してくれようと考へてゐる。恰かも

それがその假面の下に獲得出來るかのやうに！　佛蘭西革命の貴重な働らきであつた人間の權利は自分の中の人間が自分に對してアレ又はコレの權利を得させるのである。個人として、卽ちこの人間としての自分に權利があるのではなく、人間が自分に對して權利を持つてゐるのである。そして、若し自分が人間以上で、卽ち特別な人間であるなら、その權利はこの自分、特別人に對して、拒まれるかも知れないのである。若し、諸君が一方に於て諸君の天賦の價値を主張し、かれ等の價段を排斥し、諸君自からを安價に賣ることなく、諸君の品物が價段に相當しないと云ふ觀念に閉口させられず『馬鹿らしい價段』で諸君自身を馬鹿にされるやうなことなく、已は已の生命（財產）を高く賣るのだ、已の敵には決して安價では渡さないぞと云ふ勇敢人を模倣するならば、その時、諸君は共產主義の反對を正しき物として承認したことになる、そして、その時、標語は『諸君の所有を擲げ打て！』（Gebt euer Eigentum auf!）ではなく『汝の所有から價値を獲得せよ！』（Verwertet euer Eigeetum!）である。

我々の時代の門扉にはアポロの『汝自からを知れ』ではなく、『汝自身から價値を獲得せよ！』が書かれてゐる。

プルウドンは財產を『盜奪』（le vol）と呼んでゐる。けれど外部的財產――そして彼はこれのみ

に就て語つてゐる――は放棄、讓與及び人道によつて少なからず存在してゐる。それは贈呈である。人が將に憶病で、馬鹿な贈與者である時に、何故に盜奪された哀れな犧牲者のやうに感傷的な聲を出して同情を呼ぶのであるか？　我々自身が他人の略奪に任かせて置く過失を他にして、何故その過誤を他人に塗りつけようとばかりするのか？　貧乏人は金持を存在させてゐることに對して非難されなければならない。

一般に、何人も彼自からの財產に對しては憤慨せず、外部的財產に對して憤慨する。かれ等は眞に財產を攻擊してゐるのではなく、財產の外部性を攻擊してゐるのである。かれ等は自分達の物を、もつとよけいにしたがつてゐるのである。かれ等は一切の物を自分達の物と呼びたいのである。であるから、かれ等は外部性に對して、卽ち、財產に等しい言葉を形造るべく、外部性に向つて挑戰してゐるのである。そして、かれ等は其處でどんな風に自分達の爲めに盡してゐるか？　外部を所有に變化させる代りに、かれ等は公平な顏付をする、そして、一切の財產が唯だ第三者（e、o、s人間社會）に委託されることを要求する。かれ等はその外部性をかれ等自身の名に於てではなく第三者の名の下に取り戾さうとする。かくして『自我的』な色彩が拭ひ去られ、一切がまことに淸潔で、――人間的になる！

無財産、卽ち襤褸狀態、これが凡ゆる宗教性（卽ち、神性、道德、人道）の本質である如く『基督教の本質』である、そして、只管それ自からを最も鮮明に公表し、やがて喜ばしき報告でもあるやうに、『絶對宗教』の形をとつて發達の可能性ある福音になつた。我々は目前にそれが最も著しく發達して現在の如き財産に對する鬪爭となつて現はれた姿を見るのである、それは卽ち『人間』に勝利を得せしめ、無財産を完成せしめようとする戰ひである。この勝誇る人道こそ――基督教の勝利である。しかし『曝露された基督教』はかくして封建制度の完成されたもので、一切を抱含する封建制度、卽ち襤褸狀態である。

故に、勿論、改めてこの封建制に對する『革命』が齎らされるべきであるか？――

革命（Revolution）と叛逆（Empörung, insurrection）とは同義語と見做れてはならない。前者は種々なる狀態、旣成狀態、若しくは status, 國家或は社會の顚覆である、そしてそれ故に政治的若しくは社會的行爲である。後者は實際、その避けがたき結果としての境遇狀態の變移である。しかもその狀態から出發するのではなく、人間がかれ等自からに對する不滿から起るのである、故に武裝せる蜂起ではなく、個人の勃興、眼醒めであつて、それから生ずる組織にはなん等の關係がないのである。革命は新規の組織を目的にして起る。叛逆は最早何等我々自からをして組織に

齎らさないのである。唯だ我々自からを配列して、『制度』に對して何等の希望光明を置かないのである。それは既成制度に對する排斥ではないのである、故に、若しそれが一般に榮えるなら、既成制度はそれ自から崩解するのである。それは單に自分がその制度以外に働き出すことである。若し自分がその制度を去れば、それは自から死んで腐ち果てる。さて、私の目的は既成秩序の顚覆ではなく、自分をそれ以上に高めることである、自分の目的と行爲は政治的若しくは社會的のそれではなく（自分自身と自分の所有のみに向けられた）自我的な目的と行爲とである。

革命は人に組織を命ずる。叛逆は人が勃興して彼自身を高めること（sich auf-order empoigurqchten）を要求する。如何なる制度が撰擇せらるべきであるか、この問題が革命的な頭腦を煩はせた、そして政治的時代は全部制度的鬪爭と制度的問題をもつて沸騰してゐる、恰かも又社會的才能が社會的組織（共産生活、等）に關して異常に發明的である如く。叛逆者は無制度になることに努力する。（玆で原著者は"Empoerung"と云ふ文字の使用に對して註釋してゐる、即ち、彼はその字を、その語原的の意に用ゐてゐるので、最も廣義に解釋してもらはなければ困ると云つてゐる、なぜならかくの如き不穩な言葉は一見、誤解を招き易いからと云ふのである。思ふに、ステイルネルが暴力に訴へる革命を全然蔑視してゐたらしいのはこれによつても明らかに覗はれる、

そして、譯者もその文字を『叛逆』に譯したが、これは他に適當な譯語を見出すことが出來ないので、暫時、その言葉を用ゐたに過ぎない、讀者は宜しく原著者の意を諒せられたい――譯者)

これを更に一層明らかにする爲め、自分は比較すべきものを考へてゐたら、基督敎の創始が期せずして自分の心に浮んで來た。原始基督敎徒等が既成の異敎的行政に對する服從を說敎し、異敎の權威の承認を命じ、『皇帝には皇帝の物を與へよ』と云ふ命令を確然として與へたと云ふことが自由派側から見て大なる缺點であるとして指摘された。しかしそれと同時に如何に多くの紛擾が羅馬の至上權に反して起つたか、猶太人及び羅馬人すら如何に當時の政府に對して叛逆的な態度を示したか！ 要するに『政治的不備』が如何に流行してゐたことか！ しかしかれ等基督敎徒等は少しもそれに耳を藉さなかつた。又『自由的傾向』に味方することさへしなかつた。その時代は、福音書中に述べられてゐる如く、政治的に著しく動搖してゐた、故に人々は基督敎の建設者を非難するに『政治的陰謀』の主魁として彼を起訴するより以上にどうも出來なかつたのである、しかも、同一福音書は、彼がそれ等の政治運動に何等關係のなかつた人間であることを傳へてゐる。しかし、何故、彼は、當時の猶太人が秘かにそれに擬せんことを欲した革命家でも又民主黨の首領でもなかつたのか？ 何故に彼は自由黨員ではなかつたのか？ なぜなら、彼は政治狀態

の變化から何等の救濟をも豫期しなかつた、かくの如き仕事は全然彼にとつて沒交渉であつた。彼はたとへばカイゼルの如き革命家ではなく、叛逆者だつたのである。彼は國家の顚覆者ではなく、彼自身を緊張さしたのである。その理由によつて、彼にとつては『汝等蛇の如く慧くあれ』と云ふ事はやがて、特別な場合に於て『皇帝の物は皇帝に與へよ』と云ふ言葉と同一の意義を現はしてゐたのである、なぜなら、彼は既成の權威者に對して何等自由的な若しくは政治的な挑戰を企てはしなかつた、唯だ彼は何等の權威にも煩はされず、彼自身の道を歩かうと欲したのである。彼にとつては政府がその敵であると云ふことも彼には無干渉な事柄であつた、また彼は政府に彼の意志の理解をも要求しなかつた、彼は唯だ蛇の智慧をもつてそれを敬遠すればよかつたのであつた。しかし、たとへ彼は民衆謀反の指導者でもなく、民黨の主領でも革命家でもなかつたが彼は（そして原始基督教徒のすべて）は又それだけ一方に於て遙か以上の叛逆者であつた、そして、政府及びその反抗者にとつて崇高に見えた一切の上に自からを超越せしめた、そしてかれ等が束縛されてゐる一切から彼自身を解除し、同時に全異教世界の生命の源泉を切斷した、それによつて既成國家は勿論の結果として萎微しなければならなかつた。勿論、彼は既成制度の顚覆の發起人なるが故に、彼はその制度の著しき敵であり、眞實の絶滅者である。なぜなら、彼はそれ

を包圍し、自信をもつて、向ふ見ずに、何等その牢獄に生活する人々の苦痛を省みずして、その上に高くの彼の殿堂を建設したのである。

さて、それが異敎の世界に起つた如く、又基督敎の秩序も同様に過ぎ去るであらうか？　先づ叛逆が成就されない限り、革命は到底それを終結せしむることは覺束ないであらう！　自分のこの世に對する交態、それは抑もなにを目的とするか？　自分はそれを享樂せんと欲するのである、故にそれは自分の所有でなければならない、そしてそれ故に自分はそれを獲得せんと欲する。自分は人々の自由も、又かれ等の平等をも欲しない。自分は唯だかれ等に對する自分の力を欲する、自分はかれ等を自分の所有、卽ち享樂の材料にしようと欲する。そして、たとへ自分がそれに成功しないでも、よろしい、その時、自分は、敎會や國家がかれ等自からに保存してゐる――生死の權力をすら自分のものと呼ばう。露西亜の戰爭で、彼女の片脚を砲彈の爲めにもぎ取られた爲めに、カアタア勳章をもらつた士官の寡婦は、それでもつて彼女の子供を絞殺し、それから自分もその死屍の傍で血塗れになつて死んだ、――その女に嬰兒殺しの記念を烙印せよ。だが『若しその子供が生きてゐたとして、どれ程『世の中の役に立つ』ものだかそれを誰れが知らう！　母は子供を殺した、なぜなら彼女は滿足していて、安心して死にたかつたからだ。恐らく、この場合にはな

諸君の感傷性に訴へるところが多いであらう、そして諸君はその事件からそれ以上のことを讀むことが出來ないかも知れない。それでもかまはない。自分は唯だ自分の都合でこれを例に用ひたばかりだ。即ち自分の滿足が人々に對する自分の關係を決定する、そして、自分は謙讓の發作から生死に對する權力すらも棄てはしない。

一般の『社會的義務』に關して、自分以外の者は自分の他人に對する位置を與へはしない、故に神も人道も人々に對する自分の關係を自分に宛がひはしない、自分が自分自身にこの位置へ與へるのである。これは更にハッキリと強く次の如く云はれる、――自分は他人に對して何等の義務も持たない、恰かも自分が自分自身から自分自身を區別してゐる間(自分の地上の存在と自分の永遠の靈魂、等)だけ自分自身に對してすら義務(たとへば、自己保存の義務、故に自殺ではない)を持つてゐるやうに。

自分は最早何等の權力の前にも自分自身を卑下しない、そして自分は一切の權力は唯だ自分の權力であることを承認する、そして、自分はそれ等が自分に反抗し又は自分以上の權力にならうと威嚇する時に直にそれを服從させなければならない。かれ等のすべては單に自分の目的を實行する自分の手段の一ッでなければならない、獵犬は獲物に對する我々の力であるか、それが我々

自身に飛びかかつてくれば、我々に殺されるまでである、自分を支配する一切の權力を自分は自分に服從させてしまふ。一切の偶像は自分を通してのみ存在する。自分はかれ等を新に創造しないやうに用心する必要がある。その時、かれ等は最早絕對に存在しなくなる、『より高き權力』は唯だ自分がかれ等を高め、自からを卑下することによつてのみ存在する。

故に、世の中に對する自分の關係はかうである。――自分は最早、この世の爲めに何事をもしない、又『神の爲め』にも『人間の爲め』にも、なにもしない、唯だ自分は『自分の爲めに』のみ自分のことをする。かくしてのみ始めて世界は自分を滿足させる、ところで、自分がその中に道德や人道を押し込むのが、凡て宗敎的見解の特徵である、それで一切が敬虔な願望（Pium desiderium）、卽ち他界の事件、到達すべからざる何物かになる。かくして、人々の一般的救濟、一般的愛の道德世界、永遠の平和、エゴイズムの停止（等）。『この世にては完全なる物一ッだもなし』この慘めな言葉と共に、善人はこの世に別れ、神と云ふかれ等の部屋に逃げ込み、かれ等の傲慢な『自覺』にまで引つ込む。しかし我々はこの『不完全な』世界に止まる、なぜなら、たとへ如何にそれが不完全であつてもなほ我々はそれを我々の――自己享樂の爲めに使用することが出來る。自分の世界との交通は自分がそれを享樂し自分の自己享樂の爲めにそれを費消することによつ

つて成り立つ。交態はこの世の享樂である、そして、自分の——自己享樂 屬する。

III　自分の自己享樂

我々は時代の境界に立つてゐる。これ迄の世界は生活の獲得以外になにも考へては來なかつた、生命（Leben）——をのみ懸念して來た。なぜなら一切の活動はこの世の生活、又は他界の生活の爲めに、一時的な又は永遠な生活の爲めに捧げられてゐる。人が『日常の糧』（『我々にわれ等の日毎のパンを與へ給へ』）の爲めに、若しくは『聖なる糧』（『天からの眞實のパン』『天から投げられる神のパン、そしてこの世に生命を與へるパン』、『生命のパン』、）の爲めに齷齪するにせよ、或は、『いとしい生活』又は『永遠の生命』の爲めに煩はされるにせよ、——これは少しもその活動の緊張と煩惱の目的を變へはしない、それは孰れの場合に於ても——生命であることを現はしてゐる。近代の傾向はそれならそれ以外のことを聲明してゐるのであらうか？　人々は今、何人も生活に最も缺くべからざる必要品の爲めに何人も煩はさるることなく、萬人が悉く安住して生きてゆかれることを欲してゐる。そして、同時に一方では人は、この世に服し、自からをこの現實の世界に適合せしめ、徒らに他人のことなぞに煩はされるなと敎へてゐる。

我々は同じ事を他の方面から觀察してみよう。人が生きることのみを心配すれば、彼はこの心勞の爲めに、容易に生活の享樂を忘れるのである。若し人が唯だ生活をのみ懸念し、『若し自分に自分の貴い生命さへあれば、』と考へるなら、彼は全力を擧げて生活を使用、即ち享樂することが出來なくなる。けれど、人は如何にして生命を使用することが出來るか？ 蠟燭のやうに、それを燃燒することによつて使ひきるのだ。人は生命を使用する、故に彼は生きてゐるのだ、生命と彼自身を費消するのである、生活の享樂は――生命を用ひ盡くすことである。

さて、――我々は生活の享樂を探がし求めてゐる！ そして宗教的世界は何をやつたか？ それは生命を探しに出かけた。『眞の生活、惠まれた生活等)はなんによつて成り立つか？ 眞に生ける人になる爲めに人は何を爲し、何にならなければならないか？ 彼は如何にしてこの天職を完うすべきか？』これ等の同一な疑問は問者が依然としてかれ等自身――即ち、眞の意味に於ける眞の生活の意義に於けるかれ等自身を探がし廻はつてゐることを示してゐるのである。『現在の自分は泡沫の如く影の如きものである。將來の自分が自分の眞實の自己である。この自己を追求し、それを生み出し、それを實現することが人間の勞苦を成立する、それ等の人間は唯だ生きかへる爲めに死ぬ、死ぬためにのみ生きる、眞の生活を見出さんが爲めにのみ生きる。

自分が自分自身を確かり把むまでは、最早自分自からを追求しないやうにならない限り、自分は實際自分の所有ではない。自分が自分自身を所有する、故に自分は自分自身を使用し、享樂する。それに反して、自分が未た自分の眞の自己を見出し、それにならなければならないと考へてゐる間卽ち、自分ではなく基督か若しくはその他の精神的な、幽靈的な自己（たとへば、眞人、人間の本質、（等）が自分の中に生きることを求めてゐる間は、自身に對して決して愉樂を感じられない。

この二ツの見解には大きな距離がある。舊式な見解では自分が自分自身を求めて進み、新式な見解では、自分が自分自身から出發する。前者では、自分が自身を渇望し、後者では、自分が自分を所有し、その他の所有に對するが如く自分自身を使用する。自分は自分の勝手氣儘に自分自身を享樂する。自分は最早、自分の生命を恐れずそれを『蕩盡する』。

故に、問題は人が如何にして生命を獲得出來るかではなく、如何にして人はそれを浪費し、それを享樂し得るやである。若しくは、如何にして人は彼自身の中に眞の自己を生むべきかではなく、如何にして人は彼自身を溶解し、彼自身を生きぬくかである。

理想は常に求められ、永久に距つた自己以外の何物であらう？　人は彼自身を求める、故に未だ彼自身を所有しない。人は將にかくあるべきところのものを渇望する、故に彼はそれではない。

人は希望によつて生きてゐる、そして、その希望によつて數千年來生きて來た。生きることはこれとは全然異つたものである——卽ち享樂することだ。

これは恐らく唯だ所謂、敬虔な人にのみ適用さるべきであるか？　否、それは過去の歷史全體に從屬する人々、快樂人にすら適用される。かれ等にとつても亦勞働日が日曜によつて續かれ、この世の驀進がよりよき世界、人間の一般的幸福の夢によつて續かれたのである。しかし、哲學者等は特に敬虔者といい對照を造つてゐる。さて、かれ等は理想以外になにを考へて居たか、そして絕對的自己以外に何を企ててゐたらうか？　至る處に於て期待と希望のみで、これ等以外に何も存在はしなかつた。自分はそれをロマンティシズムと呼ぶ。

若し生の享樂が生命に對する期望、若しくは人生の希望を征服して勝利を得るべきであるならそれはシルレルが彼の『理想と人生』の中で紹介してゐる、その二重の意義でこれを撲滅しなければならない。それは精神と肉體の貧乏を打滅挫き、理想と——日常の體の缺乏とを根絕しなければならない。生命を引き延すが爲めに彼の生命を使用するならばそれを享樂することは出來ない。そして、彼の生命を探し求めてゐる者も、それを所有せず、從つてそれをを享樂は出來ない。而者は貧しい、そして『貧しき者は幸ひである』。

眞の生活を渇望しつつある人々はかれ等の現在の生活に對して何等の力もない、しかもその力を眞生活を獲得する目的の爲めに適用しなければならない、そして、それを全然この渇望と仕事との爲めに犠牲にしなければならない。若しも他界に於ける生活を希望し、この世の生活を單にその準備であると見做すそれ等の敬神家の場合に於て、かれ等が希望する天上の存在にのみ現世の一切が捧げられてゐることが極めて明白であるとして、若しその理由から、人が最も合理的で智識あることがその犠牲を減少するものであるやうに考へるならば、その人は更に以上の誤謬に落ち入るであらう。おお、其處には、その『眞生活』に『天上生活』が現はしてゐるよりも更に遙かに廣汎な意義が見出されなければならない。さて、――それに對する自由人の觀念を直に引用すれば――『人間的』な、そして、『眞に人間的』な生活が眞の生活なのではあるまいか？ そして、各人は當初から既にこの眞の人間生活を送つてゐるのであるか、若しくは彼は先づ克苦して自からをその生活にまで引き上げなければならないのであるか？ 彼が彼の現在生活として既にそれを持つてゐるのであるか、或は彼が彼の將來の生活としてその爲めに努力しなければならないのか、そしてそれは彼が『最早、何等のエゴイズムによつても染められない』時にのみ彼の一部となるべきであらうか？ この見解からすれば、人生は單に生命を獲得する爲めに存在する、

そして人は唯だ人間の本質を彼自身の中に生かす爲めに、即ちこの本質の爲めに生きてゐる。人はそれを手段として、一切のエゴイズムから弑はれて『眞の』生活を獲得する爲めにのみ彼の生活を持續する。故に、人は彼の生活を自から欲するがまゝに使用することを恐れてゐる。それは唯だ『正しき使用』の爲めに奉仕されなければならない。

要するに人は人生に於ける天職（Lebensberuf）、人生に於ける仕事（Lebensaufgabe）を持つ。人は彼の生活によつて何物かを實現し、產み出さなければならない、その何物かの爲めに我々の生活が唯だ手段であり、道具である、それにこの人生以上の價値がある、人は彼の生活をその何物かの爲めに負ふてゐるのである。人は彼に生贄を要求する神を持つ。唯だ人體犧牲の無躾が時と共に失はれた。人間犧牲は依然として止まない、そして罪人が刻々正義の犧牲になる、そして我等『哀れなる罪人』が『人間本質』『人類の理想』『人道』その他、幾多の偶像や神々の爲めの犧牲として我々自からを殺す。

しかしながら、我々が自分の生活をその何物かに負ふが故に――これが第二の要點だ――我々それを我等から取り去る權利を持たない。

基督教の保守的傾向は死を以つて人生の刺を取り去り、自分自からを立派に生かし、保存する

ものであると云ふ以外の考へを許さない。基督者は若し彼が——狡猾な猶太人——彼自身を巧みに天國へ密輸入させることさへ出來れば、彼の上に如何なることが起つてもかまわないのである。彼は自からを殺してはならない、彼は只管彼自身を保存し、『將來の住家の準備』の爲めに働らかなければならない。保守主義、即ち『死の勝利』が彼の心底に横はる。『取り除かれなければならない最後の敵は死である。』『基督は死から力を奪ひ、福音によつて生命と不滅な存在を齎らした。』『不滅性』と安定と。

道德人は善と正義とを欲する。そして、若し彼がこの目的の爲めにさまぐの手段をめぐらすとすれば、その時、これ等の手段は彼の手段ではなく、善、正義(等)それ自からの手段である。これ等の手段は決して不道德ではない、なぜなら善なる目的それ自身がそれ等を通じて和解するからである。目的が手段を聖別する。かれ等はこの格言をジエズイト教的と呼ぶ、しかしこれは徹頭徹尾『道德』である。道德人はある目的又は觀念に奉仕して行爲する。彼は自からを善の觀念の道具とする。敬虔者が神の道具又は機械となることを自己の光榮と思惟するやうに。死を待つことは道德律が善として定めるところのものである。自からに死を與へることは不道德であり、惡である、自殺は道德の法廷では何等の辯解をも發見しない。若し宗教人が『汝が汝自身に生命を

與へたのではなく、それを再び汝から取り得る神がそれを與へたのである』（この觀念に從へば、屋根から落ちた瓦や、敵の彈丸が自分を倒した時も、やはり自分の自殺と同樣に神が自分から生命を取つたのではないことになる。なぜなら、彼は又自分に自殺の決心を起させるかも知れないからだ！）の故にそれを禁ずると、道德人は自分の生命は祖國（等）に負ふところあるが故にそれを禁ずるのである。『なぜなら、自分が自分の生涯によつて善行を成就するかもわからないからである。』勿論、私に在つては善は道具を失つてゐる、神が機械を失つてゐるやうに。若し自分が不道德なら、善は私の矯正に役立てられる。若し自分が『無神』ならば、神が自分の改悔に喜びを持つ。自殺は、それ故に無神的であると同樣、地獄的である。若し宗教の立場にある人が彼自身の生命を取れば、彼の行爲は神を忘却したものである、しかし、若し自殺の立場が道德であるなら、彼の行爲は不德で義務を忘却したものである。人々はエミイリア・ギヤロッティの死が道德の前に辯明され得るか否かと云ふ問題をもつて自からを惱ませた（人々はそれを恰かも自殺であるかの如く見做してゐる）（悲劇の最後の場合參照）彼女は貞操と云ふこの道德的善をもつて昏迷されてゐた爲めに遂に彼女の生命を棄てるやうになつたのである、そしてそれは確かに道德的である。だが又彼女は彼女の肉體の弱さが不道德であることを恐れてゐるのである。かくの如き矛盾が道

徳的之居の悲劇的爭鬪を一般に形造つてゐる。そして人はそれに興味を持つ爲めには道徳的に考へたり、感じたりしなければならない。

敬虔や道徳に對する辯明は又必然に人道にも適用されるであらう、なぜなら人は彼の生活を等しく人と人類と種屬にまで負ふてゐるからである。自分が何等の存在に義務を感ぜざる時にのみ——自分の事件である生活を維持することが出來る。『この橋からの一躍が私を自由にする！』

けれど、若し我々が我々の生活の維持を我々自身の中に生かさなければならない存在に負ふならば我々の氣儘にこの生活を送らないことが、即ち、その存在に適合するやうに我々の生活を形造ることが我々の義務になる。私の感情、思索、意志、自分の行爲、計畫の一切が——彼に從屬する。

その存在に適合することが彼の概念から推理されなければならない。そしてこの概念は如何に色々に考へられて來たか！　又その存在は如何に色々に想像されて來たことか！　なんと云ふ色々な要求を至上存在が囘々教徒に對してしたか、なんと云ふ樣々な要求を又基督教徒はその存在から聽いて考へたことか。それ故に、如何にまつたく異つた二個の生活の形成が廻轉しなければ

ならないかよ！　かくの如き狀態が持續する限り、その至上存在は我々の生活を裁かなければならない。

けれど、敬虔者等は神をかれ等の裁判官とし、神の言葉をかれ等の生活の指導者とする、そして自己は至る處に於て單に回想的に通り過ぎる、なぜなら、かれ等は今迄生活して來た發展の時代に從屬するから、そしてかれ等は化石としていつまでもかれ等の固定した場所に止まつてゐるかも知れない。我々の時代では土臺を持つてゐるのは最早敬虔者ではなく、自由派の人々である、そして、敬虔それ自身はその蒼い顏を自由な色彩で赤く染ずにはゐられないのである。しかし自由黨員等はかれ等の審判者を神に仰がず、かれ等の生活を神聖な言葉の指導によつて開きもしない、だが人間によつてかれ等自からを束縛する。かれ等は『神聖』なることを欲せず、『人間』として生きんことを欲する。

人間は自由人の至上存在であり、彼の生活の裁判官である、そして人道が彼の指導者であり、問答教示法である。神は精神である、しかし、人間は『最も完全な精神』であり、精神を永い間追ひ求めた、即ち、『神格の深さに於て探求し、』精神の深かさに於て追ひ求めた最後の結果である。

諸君の擧止が悉く人間的にならなければならない。諸君自からが頭から爪先まで、內側からも

外側からもさうならなければならない。人道が諸君の天職である。

天職――定命――仕事！　(Beruf, Bestimmung, Aufgabe!)

人は彼のなることの出來る者になる。生れながらの詩人でも色々な不利な事情に妨げられて彼の時代の最高水準に立つことが出來ないやうなことがあるかも知れない。そして、偉い詩人になり、完璧な藝術品を生み出すに缺くべからざる勉强をする機會を得ない場合があるかも知れない。しかし、兎に角、たとへ彼が幸運兒でワイマアの宮廷で生活するにしても、或は一人の百姓にしても詩を作るであらう。天成の音樂家は音樂を奏でるであらう、たとへその樂器がなんであらうと、よしそれが麥笛であらうとも。生れ付きの哲學的頭腦は大學の敎授であらうと、村落哲人であらうとそれ自からを證據立てるであらう。最後に生れながらの愚人は、――一方またそれに似合の狡兒でもあらう、――（恐らく學校生活を送つた人達は色々な學友の例からそれを證明する位置に自分を置いたことであらう）いつでも馬鹿にちがひない、彼がたとへ役所の課長に出世するやうに訓練されたにしろ、若しくは靴磨きとしてそんな課長に仕へるにしろ。否、生れながらの淺薄な頭が人間の最大多數を占めてゐることは云はずもがなである。そして實際、この同一傾向はひとり人間ばかりでなく獸の各種類にも誤りなく現はれてゐるのである。有能と無能とは隨

所に發見される。

人がさま〴〵の思想を注入出來ない程精神の薄弱な者は極めて少數である。故に、人々はいつでも萬人が宗教を持つことが出來ると考へてゐる。かれ等は又或る程度までたとへば音樂的智識又は哲學的思索(等)にまですら、訓練され得る。玆に於て宗教、道德、教養、科學(等)の僧職が始まる。そして共產主義者(e. g.)は一切の智識をかれ等の『公立學校』によつて萬人に接近せしめようとする。この『大民衆』は無宗教では暮せないと云ふ斷定が普通に聽かれる。共產主義者等はそれを更に擴張して『大民衆』のみならず、絕對に萬人が一切の物に與かるべきであると云ふ命題を拵らへる。

大民衆が宗教にまで訓練されるばかりでは未だ充分であるとは云へない、今、それは實際、『人間的なすべて』にそれ自からを干與させなければならない。訓練がかくして次第〳〵に包括的になりつつある。

哀れむべき諸君は、若しも諸君の意のままに跳ねてゐるなら幸福に生活が出來るかも知れないのに、諸君は學校の先生や、熊香具師の笛につれて、諸君自身には役にも立たない藝をやらせられるのである。そして、諸君は遂に諸君自身に與へんと欲するもの以外に導かれる傾向を脫却す

ることさへ出來なくなるのである。否、諸君は機械的に說き聽かせられる疑問、卽ち『自分はなにを天職とすべきであるか？ 自分の果すべき義務とは抑もなにか？』を諸君自身にまで繰り返すのである。諸君がかくの如きことを訊ねれば、唯だ諸君がなにを爲すべきかを語られ、それを遂行することを命ぜられ、諸君の天職を諸君の爲めに標記される、或は又諸君自身が自からに命令し、精神の處方書に從つて諸君自身の上にそれを科するのみである。その時、意志に向つて云ふ言葉は、「自分が自分の將に爲すべきことを爲さんと欲する」である。

人間はなににも『召され』はしない、つまり『天職』も『定命』もないのである、それは草木や獸に『天職』がないと同樣である。花は自分自からを完成させる天職に從ひはしない、それは自分の持つてゐるだけのエネルギイを費やして、出來るだけ自からとこの世とを享樂するのみである、――卽ち、花は出來るだけ地面の汁や、空や太陽の光線を吸收して、生きるのみである。鳥もなんの天職を持たない、唯だ出來るだけ有益にそのエネルギイを費消して、色々な蟲を捕へて、心のままに唱ふのである。けれど勿論、花や鳥の生命力は人間のそれに較べれば少ない、そして、人間は花や鳥よりも彼のエネルギイを使ふことによつてこの世に影響を與へることが大きい。彼は天職を持たない、しかし、彼が存在する限り、かれ等自からを表現する力を持つてゐる、かれ等

の存在は唯だかれ等の表現から成り立つ、そして生命として無活動でゐることは出來ない、若しそれが一秒時と雖も停止すれば、最早生命でもなんでもないことになる。さて、人は『諸君の力を使用せよ』と他人に命ずることが出來るかも知れない。しかし、この命令は人間の仕事は彼の力を使用することであると云ふ意味になるであらうか？ さうではない。寧ろ各人は實際これを最初に自分の天職などとは考へずにやつてゐるのである。始終人間は自分の持つてゐる程の力を用ひてゐるのである。人は敗かされた人間に、もつと力を奮發せよと云ふ、しかし、さう云ふ人は、敗けた人間が、屈服した刹那にも、奮ひ起す力を持つてゐたなら（e. g. 體力）、彼が必ずそれを出したに相異ないと云ふことを忘れてゐるのである。たとへそれがホンの一瞬間の沮喪であつても、これはその刹那の間の力の缺乏である。エネルギイは確かに鋭どくせられ又倍加される、特に抗抵又は友人の補助によつて。しかし人がその適用を見失ふ處では又確かにその不在を見出す然るのれない。人は石から火を撃ち出すことが出來る、しかし撃たなければ火は出ない。同樣に人も亦『衝動』を必要とする。

さて、エネルギイが常に自から活躍すると云ふこの理由から、それを使用せよと命令するなら、それは無意味であると同時に餘計なことでもある。自分のエネルギイを使ふことは人間の天職で

も仕事でもない、唯だ彼の行動でいつでも現實的に存在してゐるのである。力とは單に力の表現を簡單にした言葉である。

さて、この薔薇は始めからほんとうの薔薇である如く、この鶯もいつでもほんとうの鶯である如く、自分も自分の天職を完了し、自分の運命に生き得た時始めて眞の人間になるのではなく、抑も出發點から「眞の人間」なのである。自分の最初の片言が「眞人」の生活の標號であり、自分の生活に對する爭闘が自分の力の表現であり、自分の最後の呼吸が「人間」の力の最後の蒸發である。

眞人は將來に存在してゐるのでも、期望すべき對照でもなく、現に實際、現在してゐるのである。自分がなんであらうと、たれであらうと、喜ばふと、悲しまふと、小兒でも老人でも、信じても疑つても、寢ても醒めても、自分はそれだ、その眞人である。

けれど、若し自分が人間であるならば、そして眞に自分自身の裡に宗教的人道主義が遠隔な目的とした命名した物を發見したとして、その時「眞に人間的」な一切が又私自分のものである。人道主義の概念に歸せられたものが自分に從屬する。たとへば人道が未だ到達しない貿易の自由、――そして、それは、魅力ある夢の如く人々が人道の黄金時代に追ひやつてゐる――を自分は自

分の所有として豫想する、そして暫時密輸入の形で實行する。其處には實際、自からの行爲に對し自分自身に辯護することの出來る程充分な理解を持つた人々は極めて少數であるかも知れない。しかしエゴイズムの本能はかれ等の自覺を取り戻すのである。先きに自分は出版の自由に就て同一事を示して置いた。

一切は私自からのものである、故に自分は自分から取り去られる物を自分自身に取り還へす。しかし、自分がいつでも自分自身を取り戻すのは自分が凡ゆる從屬から脱却した時である。しかしこれとしても又自分の天職ではなく、自分の自然行爲なのである。

自分が自分自身を出發點とするか又は目的とするか否かに就ては其處にまつたく大きな差異がある。後者の場合に於ては自分は自分自身を所有してはゐない、故に依然として自分自身に對して外部的なものであり、自分の本質であり、自分の『眞の本質』である、そしてこの自分にとつて外部的な『眞の本質』は無數に異つた名稱の幽靈として自分を嘲笑するであらう。なぜなら自分は未だ自分ではない、他の物(神、眞人、眞に敬虔な人、合理人、自由人、等)が自分であり、自分の自我である。

自分自身からは依然として遠く離れて、自分は自分自身を二分する、そして到達されない、完

成せらるべきものが、眞の自分である。そして眞實でない方はその犠牲にならなければならない。卽ち、非精神的な物である。他の眞なる物が全人に卽ち、精神にならなければならない。その時、『精神が人間の本來の面目』であり、又は『人間は唯だ精神的にのみ人間として存在する』と云はれる。さて其處で人はそれさへ出來れば彼自身を捕へることでも出來るやうに、精神を把まふとして貪慾に猛進する。かくの如く、彼自身を追ひ馳けることによつて、彼自身の姿を見失つてしまふ。

そして、かくの如く人が嵐のやうに、決して到達されない彼自身を追求すると同時に、又人間をあるがままに考へる銳敏な人々のやり方を侮蔑し、かれ等をして將になるべき者としようとする。そして、この理由から、萬人をして彼のならざるべからざる自己を追求せしめ、『悉く平等に資格ある者、尊敬に値する者、道德的に又合理的ならしめんと努力する。』(Der Kommunismus in der Schweig," P. 24)

さうだ、『若し人々がかれ等の將にならざるべからざる者、なり得べき者となり、人々が悉く合理的になり、凡てが兄弟として相互に相愛したなら、』その時天國の如き生活が實現出來るであらう。――いかにも、人々はかれ等がなるべき者、なり得る者であらう。かれ等はなにになり得べ

きであるか？　たしかにかれ等のなり得る者以外ではない！　そしてかれ等はなにになり得るか？　それはかれ等が――なり得るもの、即ちかれ等の能力と精力との範圍外を出ない。しかしこれは實際、かれ等の現在あるがままのかれ等で、若しかれ等がさうでないなら、存在することが不可能だと云ふことになる。なぜならなり得ると云ふことは――現に在り得ると云ふことだ。人は彼が現に在り得ないなに者にもなり得ない。白障眼で見えなくなつてゐる者は見ることが出來るだらうか？　おお、如何にも、若し彼はうまくその眼疾をとり除くことさへ出來たなら。つまり彼は見えないから見ることが出來ないのである。可能性と現實とはいつでも符合する。人はやらないことは出來る筈がない、また出來ないことをやりもしない。

　この斷定の不可思議は『至々が可能であると云ふ言葉が自分は……を想像することが出來る』（たとへば、合理的に生活することが萬人に可能である、は『自分が……を想像することが出來る』と云ふに過ぎない）と云ふ以外の意味を決して含んではゐない。さて、――自分の考へが萬人を合理的に生活させることが出來ない（だから生活してもゐない）が、しかしこれは更に人々かれ等自身に任かせられなければならない、――一般理性は自分にとつて唯だ考へらるべき物である、しかし、事實又可能であると云はれる現實ではあるが、自分は他人の合理性を實現することは出

來ないのである。諸君の方からのみ見れば、萬人は悉く合理的であるかも知れない、なぜなら諸君はそれに反對する何物をも持たないから。否、諸君の思索の範圍内に於て、諸君は恐らく何等の妨害をも發見することは出來まい、故に、諸君の思索の道程には何の障害物も横つてはゐないのである。それは諸君にとつて唯だ考へられることとである。

人々が悉く合理的でないと云ふことは、恐らく又さうなり得ないと云ふことにもなる。若し人が容易に可能であると想像する何物かが存在せず、起りもしないなら、その時、人は何物かがそれを妨げてゐると斷定するかも知れない、そして、事實、それは不可能なのである。我々の時代はその時代の藝術學問(等)を持つてゐる。その藝術は一般の良心に照して悪いものであるかも知れない、けれど、我々はもつと優れたものを持ちたいと思つたのだ、そして我々はそれを欲しさへすれば持つことが「出來る」と人は云ひ得るであらうか? 我々は唯だ我々の持ち得るだけの藝術を持つことが出來るばかりである。今日の我々の藝術は唯一可能の藝術である、そして、それ故にその時代に於て眞である。

「可能」と云ふ言葉を「未來」を意味することに用ゐる場合にも、それは充分「現實」の力を含んでゐる。例へば、若し人が「太陽が明日出ると云ふことは可能である、」と云へば、――これは唯だ

『今日にとつて明日が實際の將來である』と云ふことを意味してゐる。なぜなら自分の想像するところによれば、未來はそれが現はれない時にのみ眞の『未來』であると云ふことは暗示の必要すらないことである。

しかし、この言葉に尊嚴を與へることは何處から來てゐるのか？ 若し數千年來の最も多産的な誤解がその背後に隱れてゐないならば、若し『可能』と云ふこの小さな言葉のたつた一つの概念が隱れた人々の幽靈に迷はされないなら、それを思惟することは少しも我々を煩はさないですむであらう。

それが今示されたやうに、思想が囚はれた世界を支配してゐるのである。さて、そこで可能は考へられると云ふ以外の何物でもない、そして無數の犧牲がこれまで醜惡なこの考へられるの爲めに捧げられた。人々が合理的になり得ることは考へられることであつた、人々が基督を知ることも考へられることであつた。人々が道徳的になり、善の爲めに熱心になることも考へられることであつた。かれ等が悉く敎會の膝下に隱れることも考へられることであつた。かれ等が國家に對して何等危險でないことを瞑想し、口にし、行に現はすことが考へられることであつた。かれ等が從順な臣民になることも考へられることであつた。だが、それが考へられるから、それが可

能だ——と云ふやうな推理になつて來た。そして、更に、それが人々にとつて可能であるが故に(これが將に誤謬の點である、それが自分にとつて考へ得られるから、人々にとつて可能であると云ふのだ)、人々はそれを爲すべきである、それがかれ等の天職である。そして、最後に——人はこの天職に從つてのみ、人々に對さなければならない、即ち、只管、召された人として、『ありのままのかれ等ではなく、將にしかあるべき人々として』取り扱はれなければならないと云ふのである。

そして推理は更に進んで? 人間は個人でなく、一個の思想になり、一個の觀念になる、それに對する個人の關係は子供が大人に對するよりはもつと甚だしく、白墨の尖頭が考へ得られる尖頭に對する如く、若しくは、有限の被造物が、無限の創造者に對するが如く、若しくは近代の見解に從へば、見本が種屬に對するが如きものである。茲に於て『人道』及び『永遠、不死』の光榮化が輝き出すのである、その光榮の爲めに(in majorem humanitatis glorium)個人は彼自身を捧げなければならない、そして『人道の精神』の爲めに何事をか爲し得たことに彼の『不朽の名聲』を見出さなければならない。

かくして、思想家等は僧侶や學校教師の時代の續く限りこの世を支配する、そしてかれ等の思

考することは可能であり、可能なことは實現されなければならない。かれ等は人間に就てある理想を考へる、それは暫時の間、かれ等の思想内に於てのみ眞實である。しかしかれ等は又それを實現する可能性を考へる、そして其處に議論の機會がない、實現することは眞に——考へられるべきで、それは——一個の觀念に過ぎない。

だが、諸君と私、つまり我々は實際、クラムマッヘルの如き男が考へるやうに、未だ善良な基督教徒になれる人間であるかも知れない。けれど、若し彼が我々と『一緒に働かうと』欲するなら、我々はやがて我々の基督教も考へられる許りで、その他の點では不可能であると云ふことを彼に明らかにしなければならない。若し彼が彼の執拗な思想、彼の『善良な信仰』をもつて我々に食つてかかるならば、彼は我々が我々のなりたくないものに少しもなる必要がないと云ふことを學ばなければならないであらう。

かくしてそれは最も徹底なる者をも飛び超えて前進する。『若し萬人が合理的ならば、若し全ての人々が正しかつたなら、若しすべての人々が慈悲(等)によつて指導されるならば!』合理、正義、博愛(等)が人々の天職として、かれ等の向上の目的として眼前に置かれるのである。そして合理的であると云ふことは抑も〳〵如何なる意味であるか？ 自分自身に聽き分けを與へること

か？　否、理性はエゴイズムに對して執行される律法に充ちた書物である。

歷史は從來心智的人間の歷史である。肉慾の時代の後に、本來の歷史が始まる、即ち、智力Geistigheit）精神（Geistlichkeit）非肉慾、超肉慾、無官能の時代である。人は今何物かであり、何物かになりたいと欲する。なにに？　善く、美しく、眞に、更に精確に云へば、道德的に、敬虔に、氣持よく（等）。彼は彼自身から『本來の人間』、『本當の何者』かを作り出さうとする。人間が彼の目的、彼の義務、彼の天職、彼の仕事、彼の――理想である。彼は彼自身にとつて、未來の、他界の彼である。そして、彼の『本來の奴』はなになのか？　眞であり、善であり、道德的である（等）。さて、彼はかくして、同一の“Was”を認めず、同一の道德を求めず、同一の信仰を持たぬ人々を白眼視する。彼は『脫宗派、異端者、分離派』（等）を排斥する。

どんな羊でも犬でも自分達が『本來の羊や、本來の犬』にならうと努力するものはあるまい。どんな獸もその本質を現はすことを仕事とするものはない、即ち、實現せざるべからざる觀念としてそれを抱くものはあるまい。動物は自から生きることによつて、即ち、自己の生命を費消し、消散することによつてそれ自からを實現する。それはありのままの自分以外のなにものにもならうとは欲しないのである。

かう云ふ自分は諸君に獸の如くなれと忠告してゐるのであらうか？　諸君は獸類の如くならなければならないと云ふことは、自分の到底諸君に與ふることの不可能な忠告で、それは又一種の仕事になり、理想となるのである。（『小さい蜂は如何に時を浪費せずしてそれを利用するか……るから』）。また人が獸に對してかれ等の人間になることを欲することも同じである。諸君の性質は、おしなべて、人間的なものである。諸君は人間的性質を有してゐる、即ち人間である。諸君が既にさうであるが故に、諸君はそれ以上さうなる必要はないのである。獸も又『訓練され』る、そして訓練された獸は多くの不自然なことを行ふ。しかし、訓練された犬は犬自からにとつて自然な犬に優るものではない、そして、それがたとへ我々にとつてよりよき伴侶となり易いにしても犬にとつて何等益のないことである。

萬人を道德的な、合理的な、敬虔な、人間的な（等）『存在』（即ち、訓練）に『形造らう』とする努力が昔から流行してゐた。それ等は制禦しがたい自我の性質、所有性、エゴイズムに打つかつて難破するのである。訓練されてゐる人々は決してかれ等の理想に到達しない、そして、單にかれ等の口をもつて嵩高な主義を揚言し、或は信仰を職業とする。この職業の面前に於て、かれ等は

この人生で『自からを罪人として承認』しなければならない、そして、かれ等は事實かれ等の理想に遠い『弱い人間』である、そして、かれ等は『人間の弱さ』と云ふ自覺を擔いで歩るく。

若し諸君が諸君の『天職』として理想を追求せず、時が萬物を解體するが如く、諸君自からを解體するならそれは異つてゐる。解體は諸君の『天職』ではない、なぜならそれが現在だからである。しかも人々の教養、宗教性はたしかにかれ等を自由にした、しかしそれは唯だ一方の君主から解放して他の君主にかれ等を導いたに過ぎない。自分は宗教によつて自分の嗜慾を馴らすことを學んだ、自分は科學によつて自分の手中に置かれる狡猾によつてこの世の抵抗を破る。自分は何人にも仕へない。『自分は何人の從僕でもない。』しかし、その時に汝等は人間よりも一層神に從はなければならないと云ふことになる。そのやうに自分は實際、自分の衝動によつて不合理な斷定からは自由であるが、理性と云ふ主人に從順でなければならない。自分は『精神的自由』『精神の自由』を獲得した。しかし、それと同時に自分はその精神そのものの奴隷になつた、その精神が自分に種々なる命令を與へ、理性が自分を指導する、かれ等が自分の指導者であり、命令者である。『合理』と『精神の奴僕』が支配する。しかし、若し自分が肉でないとしても、自分は又靈ばかりでもない、精神の自由は自我の服從である、なぜなら、自分は靈肉以上だからである。

勿論、教養は自分を力強くした。それは一切の動機、自分の性情の衝動並にこの世の强奪、亂暴に對抗する力を自分に與へた。自分は教養によつてその力を獲得したことを知つてゐる、自分は自分の嗜慾や、快樂や、動機の如何なるものによつても强迫されるやうなことはない。自分はそれ等の——主人である。同樣に、自分は、諸科學や藝術を通して、わがままな世界の主人になる、その人に海や土地が從ひ、星辰すらもそれ自からの說明を與へなければならないのである。精神は自分を主人にした。——しかし自分は精神それ自からに對しては何の力をも持たない。宗教(教養)から、自分は『この世を征伏する』手段を學ぶ、しかし、如何にして自分は又神を征伏し、彼の主人になるべきかを學ぶことは出來ない。なぜなら神は『精神である。』そして、自分がその主人になり得ない同一精神は最も多種多樣な形をとる。それは神又は國民的精神、國家、家族、理性、又は——自由、人道、人間などと呼ばれるのである。

自分は教養の數世紀が自分の爲めに獲得してくれたものを感謝して受け取る。自分はそのどれをも投げ出したり、棄てたりしようとは思はない。自分は徒らに生きては來なかつた。自分が自分の性情を統御する力を持ち、自分の嗜慾の奴隷たる必要のない經驗は自分から失はれてはならない。自分が教養の手段によつてこの世を征伏し得た經驗はそれを忘れることが出來るにしては

あまりに高く買はれてゐる。だが自分はなほそれ以上を欲するのである。

人々は、人間がなにをなし得るか？　人間はなにを成就し得るか？　如何なる善きものを獲得し得るか？　と訊ねる、そしてすべての最高なる物を天職として定める。恰かも一切が自分にとつて可能であるやうに！

若し何人かがなにかのマニヤ又は熱情に(たとへば劣情、嫉妬、憑れてゐるのを見ると、その人をそれから救ひ出し、彼に「克己」を促がさうと云ふ慾望が起つて來る。「我々は彼を人間にしたいと思ふ！」若し前者に引き續いて直に他の物に憑れないなら、それは甚だ結構なことであらう。けれど、人は金の奴隷になつてゐる人間をその執着から解放するのはいいが、それは唯だ彼を敬虔や、人道、若しくはその他の主義に引き渡し、彼を新に固定した立場に移すだけである。

狹隘な立場から崇高な立場に代はるこの推移が次のやうな言葉で宣言される、感覺が必滅の事物に向けられず、不滅な物にのみ向けられなければならない、一時的の物にではなく、永遠、絕對、神聖、純人間的な物(等)に、――即ち精神的なものに向けられなければならないと。

人々はやがて自分が愛着を感ずるもの、若しくはその爲めに自分を從事せしめたものに差別のあることを知るやうになつた。かれ等はその對象の重要性を認めたのである。事物の個性の

上に高められた對象は事物の本質である。さうだ、その本質のみが考へられるものなのである、それが考へる人間の爲めに存在するのである。故に、最早、汝の感覺を事物に向けず、汝の思想をその本質に向けよと云ふことになる。『見ずしてしかも信ずる者は幸ひである』、卽ち、思想家が幸ひなのである、なぜなら、かれ等は不可見の物と交渉して、それを信ずるからである。しかし、數世紀以前に滿足を與へた最も重要な思想の對象が遂に『最早云ふに價しない』物とさへなるのである。これが見極められたのである、それにも拘らず、人々は常にかれ等の眼前にその對象自からの重要性、その絶對價値を置いた、恰かも人形が子供にとつて、又經典コーランが土耳古人にとつて最も重要なものでないかのやうに。自分が自分自身にとつて唯一の重要物にならない間は、自分が如何なる對象に『重きを置く』かは殆んど問題ではないのである、そして、それに對する自分の多少の無視が價値を生ずるのである。自分の執着若しくは献身の度が奉仕に傾く自分の立場を定め、自分の犯罪の度が自分の所有我の度を示すのである。

しかし、最後に、そして一般に、人は如何にして『全ての物を彼の心から放逐するべき』かを知らなければならない、それが出來て、始めて安眠を貪ることが出來るのである。我々が我々自からを從事させない何物も我々を占有するやうなことはあるまい。野望の犧牲者は彼の野心ある計

臺から逃れることが出來ず、神を恐れる人は神の思想から逃れることは出來ない。惑溺と憑れることとは常に一致するのである。

自己の本實を實現し、自己の概念に適合して生活せんと欲することは（神を信ずる者は『敬虔』ならんとし、人道を信ずる者は『人道的』に生きんことを欲する）肉慾的な、罪人が彼自身に提出するところのもので、かくの如き人は常に、官能の幸福と靈魂の平和との間の撰擇に迷ひ、『哀れな罪人』として生活するのである。基督教徒は肉慾人以外の何物でもないのである、唯だ、彼は神聖を認め、それを冒すことを意識し、自からを哀れな罪人と思ふのである。肉慾が『罪深きもの』として認めるのが基督教的意識で、クリスチアン彼自身である。そして、たとへ『罪』とか『罪深い』とか云ふことが最早、近代人の口にのぼらないとしても、その代りに『主我主義』とか、『自己追求』『利己』などと云ふことが問題になる。若し惡魔が『人非人』若しくは『自我人』と云ふ言葉に翻譯されるならば、——依然として基督教徒の存在は明らかではないか？　舊式な善惡の爭鬪、人間と云ふ判官、人間になれと云ふ天職から放れることは出來ないのである。若しもかれ等が最早、それを天職と呼ばず、『仕事』若しくは『義務』と呼んでも、その名稱の變化に差支はない。『人間』は神のやうに、我々を『召す』ことの出來る存在ではないから。しかし、名稱を度外すれば

態は依然たるものである。

各人はそれぞれ外物に對して關係を有してゐる、そして、更に、各人のそれ等の事物に對する關係は各自に異つてゐる。今、その例として數百萬人の人々が二千有餘年の間關係を持つて來た書物、即ち聖書を擧げてみる。その本は各人にとつてなんであるか、又なんであつたか? 絶對に、唯だ各人がそれをそれから何を造り出すかによるのである! 彼自身にとつてそれを全然無視する人には、それは全然無きに等しいものである。それを御呪符として使用する人には魔法の手段として意義があり、價値がある。小兒の如くそれを弄ぶ者にとつてはそれは玩具以外のなに物でもない、(等)。

さて、基督教はそれが萬人にとつて同一であるべきことを要求する。それが神聖なる本文は『聖なる文書』でなければならないのである。これは即ち、基督教徒の見解が又他の人々のそれでなければならず、何人もその物に對してそれ以外の關係に置かれてはならないと云ふことを意味するのである。そして、これと同時に、その關係の所有我が破壊され、同一の心と、同一の性情が『眞の』『唯だ眞の』ものとして定められるのである。聖書を自分の欲するがままにする自由を制限される

ことはやがて、廣く考へる自由が制限されることになるのである。そして、ある見解若しくは判斷の强迫がその代りに置かれるのである。聖書は永年の人類の誤謬であつたと云ふ判斷を通過する人は——犯罪的な判斷を下す人である。

實際、聖書を寸斷〱に引き裂いて、それをおもちやにする子供、それに耳をあてて、それが啞のやうに默つてゐると云ふので、輕蔑してそれを投げ出したインカアタウアルパ（Inca Atahualpa）は聖書を『神の言葉』として稱贊する僧侶、若しくはそれを人間の一寸した仕業と見做す批評家達と同一に置かれるべきである。なぜなら、我々が如何にその物をいぢりまわすかは我々の任意であり、我々の自由意志の問題である。我々はそれ等を我々の心ゆくままに用ゐる、或はもつとハッキリ云へば我々は出來るだけそれを用ゐるのである。どうだ、坊生共はヘエゲルや、推理的神學者等が聖書の內容から推理的思想を造りあげるのを見る時にどんな風に叫びまわるか？これは將に、かれ等がかれ等の心ゆくままにそれを取り扱ひ、若しくは『恣ひままにそれを處置する』のである。

だが、我々すべてが對象を取り扱ふ上に、氣儘に我々を現はすが故に、即ち我々が我々の好みに從つて一番好きなやうにそれ等を取り扱ふが故に（哲學者は一切の事物に『觀念』を跡づけるこ

ことを最も好み、神を恐れる人は一切に對して神を彼の友とすることを愛する、例へば聖書を神聖なものと見做すが如く）、我々はこの我々自からの自由意志の領土に於けるが如き、悲しむべき氣儘、かくの如く恐るべき亂暴の傾向、かくの如く愚かなる强迫に出遇ふことはないのである。若し我々が神聖な事物をかくの如く氣儘に取り扱ふ時に、若し僧侶的精神を有するかれ等が同様にかれ等の流儀で勝手に我々に對し、我々を異教徒の火焙りに、若しくは他の刑罰――恐らく檢閲の――に相當するものと見做す時に我々がそれを惡意にとらうとすることはどうであらう？

　人は各自の存在によつて、その見るところを異にする。『諸君がこの世をどう眺めるかに從つて世の中も亦諸君を眺めかへすのである。』その時に賢明なる忠告が直に再び聽かれるのである、汝等はこの世を只管『正しく、公平に』（等）眺めればよいのである。と、聖書を玩具として弄ぶ子供が、恰かもそれを『正しく公平に』眺めなかつたとでも云ふやうに。かくの如き辛辣なる教訓が、たとへばフオイエルバハによつて與へられてゐる。人は唯だ自から欲するままに對象を己れがものとする時にのみ正しくそれを眺めるのである（その對象がなんでも、たとへば神にせよ、同胞にせよ、愛人にせよ、書物にせよ、獸にせよ。）それ故に、事物と、それを眺めることが第一ではなく、自分がなんであるか、自分がなにを欲するかが第一である。人は對象から種々なる思想を獲

し、この世に理性を發見せんと欲し、その中に神聖を把握せんと欲する、故に人はそれ等の物を發見するであらう。『求めよ、さらば汝等は見出さん。』自分の求めるところのものを、自分は決定する。たとへば、自分は聖書から教訓を得んと欲する。それが發見されなければならない。自分は聖書を讀んで、それを徹底的に吟味せんと欲する。自分の生み出す結果が――自分の力量の範圍で――完全な教訓になり、批評になるであらう。自分は自分自身の爲めに、自分の氣の向くやうな物を確立する、そして、確立することはやがて、隨意に、自分自身を表現することである。

　これと關聯して、自分が對象の上に與へる凡ての判斷が自分の意志の被造物であると云ふ識別が付く。そして、この識別は又更に自分を導いて、その被造物たる判斷に自分自身を沒却せしめず、常に新に創造する、創造者であり、判斷者であると云ふ自覺に到達せしめるのである。對象に對する一切の賓辭は自分の記述であり、判斷であり、自己の――被造物である。若しそれ等のものが私から解放され、かれ等自身に對して何物かであらんと欲し、事實自分を威嚇しようと欲するならば、その時、自分はそれ等をかれ等の虛無に、即ち創造者たる自分の中に取り戻すより急務はないのである。神、基督、三位一體、道德、善(等)はかくの如き被造物である、それを自分が單に眞理であると云ふことを自分自身に許すばかりでなく、又それ等が迷妄であると云ふこ

とをも許さなければならない。自分が嘗てかれ等の存在を意志し、命令した如く、又自分はかれ等の虚無をも意志する自由を持ちたいと欲する。自分はかれ等を自分の頭腦の中に生長させてはならない、かれ等をして『絶對な』何物かにならしめる弱點を握らせてはならない。若しさうなれば、かれ等は永遠化されて、自分の力と決斷から脫却するであらう。それと同時に、自分は宗教特有な主義、卽ち固定の原則の餌になるであらう、それは『觸れてはならない諸々の聖所』『永遠の眞理』、――要するに『神聖な』ものを創造することに忙がはしく、遂に諸君から諸君自からのものを略奪するであらう。

　對象はその神聖な形に於ても亦卑俗な形に於ても我々を憑れた人間にする、卽ち、超官能的な對象としても亦官能的な對象としても。嗜慾と狂念とは兩者に共通する、そして貪慾と天を渇望することが同一水準に立つ。合理主義者が人々を官能世界に引き入れようとした時に、ラヴタアは不可見世界に對する憧憬を說明した。一方は情緒を引き出さうと欲し、他方は運動、活動を引き出さうとした。

　對象の概念は、たとへば神、基督、世界等の如くまつたく多様である、そして、最も色々な風に意想されて來た。この點で各人は悉く一個の『異論者』である、そして、同一の對象に關する

相異の見解が死に價する異端として非難されないやうになる迄には幾多の流血的鬪爭が幾度か行はれたのであつた。『異論者』が相互に和解する。けれど、何故に自分は唯だある物に就て異論（即ち考へを異にする）を立てるのか？　何故に思索それ自からをその最極端に押し詰めないのか、即ち、最早、物その物の存在に對して何等の注意をも拂はず、その虛無を考へ、それを粉碎するまでに至らないのか？　その時に、概念それ自からが終りを告げる、なぜなら其處に何等思惟すべきものが存在しないからである。何故に、自分は、たとへば、『神はアラに非ず、ブラマに非ずエホヴに非ず、――神なり』と云はなければならないのか？　そして、何故『神は虛妄以外の何物でもない』と云つてはならないのか？　若し自分が無神論者なら、人々は何故に自分に烙印を押すのか？　なぜなら人々は被造物を創造者以上に置くから（『かれ等は創造者以上に被造物を敬してそれに仕へる』）そして、主人が正しく從順であるべき支配する對象を要求するからである。自分は絕對の下に跪坐すべきである、自分には正にしかするの義務がある。

『思想の領土』によつて基督教はそれ自からを完成させた。思想はこの世の一切の光りがその中に消え失せる內部性である、凡ゆる存在が無存在になる、內部人（心と頭）が全ての全てである。この思想の領土がその解放を期待する、スフィンクスの如く、その謎を解くエディポスの鍵言を

待つてゐる、卽ち、遂にその死の領土に入りこまんが爲めである。自分はその繼續の絕滅者である、なぜなら、創造者の領土に於て、それは最早それ自からの領土を形造らない、それは國家の中の國家ではなく自分の創造的な——無思想から生れた被造物である。この痲痺した思索の世界と同時に基督教徒の世界、基督教と宗教それ自からが沒落するのである。思想が枯渴する時にのみ、信者がなくなるのである。思想家にとつては、彼の思索は『崇高な勞働、神聖な活動である。』そして、その根柢には堅固な信仰、眞理の信仰が橫つてゐる。先づ祈禱が神聖な活動である、それからこの神聖な『献身』が合理的な、推理的な『思索』に移動する、しかし、それは等しくその『神聖な眞理』の中にその不動な信仰の根柢を置く、そして、それは單に眞理の精神がその奉仕の爲めに廻轉する驚くべき機械である。自由思想と自由科學とが自分を忙がしくさせる——なぜなら自由なのは自分ではない、又自分自身を忙がしくさせるのも自分ではない、唯だ思索が自由なのである、そして天と天上若しくは『神聖』をもつて自分を忙がしくさせる。恐らくそれは世界と世界的なことかも知れないが、この世界ではなく『他の』世界のことである。それは唯だこの世を轉倒し、混亂させることであり、この世の本質をもつて忙殺されることである、故に、錯亂である。思想家は對象の直接性に對して盲目である、そしてそれ等を統御することが出來ない

のである。彼は食べもせず、飲みもせず、享樂もしない。なぜなら飲食者は決して思想家ではない、否、思想家は飲食を忘却する、彼の暮し、養ひの煩ひを忘れる。彼は又祈禱者が失念する如く失念するのである。これが爲めに彼は力强い自然の息子に、變な男、つまり一個の愚人に見えるのである、――たとへ、彼が神聖な者に見られないとしても、少なくとも狂人が古代人の眼に映つた如くに見えるのである。自由思索は狂氣である、なぜなら、それは内部性の純粹な運動、單なる内部人の運動で、それが自餘の人間を指導し、束縛するからである。黃道僧と冥想的哲學者とは、蒙古人――と云ふ内部人の階梯の頭上と脚下とを標し付けてゐる。黃道僧と哲學者とは無數の幽靈、惡鬼、精靈、神などと戰つてゐる。

この自由思索から全然異つたものに所有思索、自分の思索がある、それは自分が指導する思索ではなく、自分の勝手氣儘に自分によつて指導され、繼續され、切斷されるところのものである。この所有思索と自由思索との差は、又自分が氣儘に滿足させる所有肉慾と、自分がそれに曳きづられる自由放恣な肉慾との差に等しい。

フォイエルバハは『將來の哲學の諸原則』中に、いつでも存在を反復してゐる。これは、ヘエゲルとその絕對哲學に對する凡ゆる彼の反抗を以つてして、なほ抽象にピッタリ固定してゐるのであ

る。なぜなら『存在』(Das Sein)は『私』(Das Ich)と殆んど同樣に抽象である。自分だけが抽象ではない。自分は全ての全てである。故に抽象でも又虛無でさへある。自分は一切で又虛無である。自分は單なる思想ではない、しかし同時に自分は凡ゆる思想、思想界で一杯になつてゐる。ヘエゲルは自分自から(das Meinige)——の『意見』(die Meinung)と云ふものを非難してゐる。『絕對思索』はそれが自分の思索であることを、即ち、自分が考へ、そして自分を通してのみそれが存在すると云ふことを忘却する思索である。しかし、自分は、自分として再び自分のものを呑み込んでその主人となる。それは單に說に過ぎない、自分はどんな場合にもそれを變化し、絕滅し、自分自身に取り戾して消費することが出來るのである。フォイエルバハはヘエゲルの『絕對思索』を征伏されざる存在をもつて打破らうと欲してゐる。しかし、自分にとつてはその存在も思索と等しく容易に征伏されるところのものである。それは、前者が自分の思索であると同樣自分の存在である。

勿論、これと同時に、フォイエルバハは自分は一切に對して官能を要求する、即ち、自分はこれ等の官能なくしては何事をも爲し得ないと云ふそれ自からに於て瑣末である證明以上に進みはしなかつた。自分が感覺的に存在しないなら自分は思索し得ないと云ふのは確かなことである。

けれど、思索するにも、感じるにも、抽象に對しても、肉感に對しても、自分は先づ第一に自分自身、このまつたく特別な自分自身、この無二な自分自身を必要とするのである。若しも自分がかくの如き人間（たとへばヘエゲル）でなかつたなら、自分は自分の眺めるやうにこの世界を眺めないかも知れない、又自分はその世界から、ヘエゲルとしての自分がやるやうなそんな哲學的大系を拾ひあげないかも知れない。自分は實際、他の人々と同樣な官能を持つてはゐるが、自分の行爲する時にそれ等を利用しないかも知れないのである。

かくして、フオイエルバハのヘエゲルに對する批難はヘエゲルが多くの言葉を用ゐて、自然意識の感ずる物とは全然別箇の物を意味する言葉の誤用と云ふ點である。しかも、さう云ふ彼も亦彼が異常に優秀な意味を『官能』に與へる時に同一の誤謬を犯してゐるのである。かくして『官能は卑俗ではなく、思想の缺乏でもなく、それ自からによつて理解せられる明白なものである。』と云ふことが云はれるのである。けれど、若しそれが神聖で思想に充ちて、仲介を通してのみ理解されるやうな穩密なものであるならば——それは最早、人々の呼ぶところの官能的なものではないのである。官能的なものは唯だ感覺に對して存在するところのものである。しかし、感覺以上なものをもつて享樂する人々——それは官能享樂、又は感覺受入以上にゆく人々——にのみ享樂

され得るものは、少なくとも官能の仲介によつて引き出されるところのものである、即ち、官能はそれを獲得する爲めの條件を成立してゐる、しかしそれは最早官能的ななに物でもない。官能的なものは、それがなんであれ、自分の中に取り入れられる時には非官能的な物になる、しかし、それは再び官能的な功果をたとへば、自分の情緒や自分の血液の攪拌によつて、――持ち得ないとは限らないのである。

フォイエルバハが官能的なことを尊敬することはわるくはない、しかし、彼がそれによつて爲し得る唯一のことは彼の『新哲學』の唯物主義を從來の理想主義『絶對哲學』の財產であつたところのものをもつて包むだけである。人がパンなくして唯だ『精神的』にのみ生き得ると云ふ說が肯じられないやうに、人々は又官能的な存在として、人は既に一切であり、精神的であり、思想に充ち溢れてゐる(等)と云ふ彼の言葉を信じはしないであらう。

存在によつては何物も辯證されはしないのである。思考されるものは同時に又思考されないものである。街上の石が存在する、そしてそれに就ての自分の觀念が又存在する。兩者は唯だ空間を異にして存在する、前者は空間に、後者は自分の頭に、自分の中に存在する。なぜなら自分は街上と等しく空間である。

專門家、特權者は何等思想の自由を、即ち『一切善の受與者』(それが神であれ、法皇であれ、教會であれ、等)から來ないやうなどんな思想をも抱懷しない。若し何人に限らずかくの如き不規則な思想を抱くならば、彼はそれを彼の聽悔者に囁やかなければならない、そして、鞭が自由思想に對して耐え難くなるまで彼によつて懲戒されなければならない。他の方法に於ても亦職業的精神に自由思想が少しも生れないやうに注意する、先づ第一に賢明な教育によつて。道德の原理が相應に敎へ込まれた人は決して再び道德的な思想から自由にはなり得ない、そして、盜奪や、僞誓や、欺瞞(等)は彼にまで依然たる固定觀念である、それに對して何等の自由思想も彼を保護しない。彼は『上から』彼の思想を受けて、それ以上に進まないのである。

けれど讓步や特許の支持者の場合は異つてゐる。各人は各自の欲するが如き思想を持つことが出來なければならない。若し彼が思考すべき能力の特許又は讓步を持つならば、彼は何等特別な特權を必要とはしない。けれど『萬人が合理的である』如く、各自が自己の頭腦に出來るだけの思想を入れることも自由である、即ち、各自の天賦の特許の範圍内に於て、それぞれの思想の財寶を持つことは自由である。さて、人は『凡ゆる意見や確信を尊敬すべきである』とか、『一切の確信は權威あり、』とか、人は『他人の意見に對して寬容で』なければならないと云ふやうな色々な

勸告を耳にする。

しかし、『汝等の思想は私の思想ではなく、汝等の仕方は私の仕方ではない。』或は寧ろ自分はその正反對であると云ひたい、即ち汝等の思想は私の思想である、それを自分は自分の意の如くに片付け、それを自分は無慈悲に打破する。それ等は自分の所有である、それを自分は自分の好むがままに絶滅する。自分は諸君の思想を解體し、吹き飛ばすにあたつて、先づ諸君の許可を期待しはしない。諸君がそれ等の思想を又諸君のものであると呼ぶことに何等差支へはない、それにも拘らずそれ等は依然として自分のものである。そして、自分が如何にそれ等を取り扱ふかは自分の事柄であつて、簒奪ではない。諸君を諸君の思想の中に殘して置くことが自分を喜ばすかも知れない、その時、自分はヂツトしてゐる。諸君は思想が鳥のやうに自由に飛びまわり、各人がそれを彼の侵すべからざる財産として私から豫防することが出來るものと信じますか？ 自分の周圍に飛びまわつてゐる一切が——自分のものである。

諸君は諸君の思想を諸君自身の爲めにのみ抱き、それ等の思想に呼應する何人をも必要としないと信じてゐるか、即ち、諸君が又云ふ如く、諸君は神にのみそれ等の報告を與へなければならないと信ずるか？ 否、諸君の大小さまざまな思想は悉く私に從屬する、そして、自分は自分の

意のままにこれ等を取り扱ふ。

自分が刻々にその死滅の危險を疑惧しない時にのみその思想は始めて自分のものとなるのである、その時、自分はその損失を自分に對する損失、若しくは自分の損失として恐れる必要がなくなるのである。自分がまつたくそれを征服し得る時にのみその思想が私自分のものとなる、けれど思想をして自分を征服せしめ、自分を熱狂せしめ、自分をその實現の道具にせしめるやうなことを決して許してはならないのである。

かくして、思想の自由は自分が出來るだけ一切の思想を持ち得る時に存在する。しかしそれ等の思想が主人になり得ないことによつてのみ所有となる。自由思想の時代に於ては思想（觀念）が支配する。しかし、若し自分が思想の所有にまで到達するならば、それ等は自分の被造物として立つてゐる。

若し神權政治が人々の胸奥に深く浸透して一切の自由思想（即ち恐らく神に對して申譯なき思想）を追求する勇氣を悉くかれ等から奪ひ去らなかつたなら、人は思想の自由と云ふ言葉を恰かも消化の自由と云ふ如く、無意味な言葉として考へるやうになつたであらう。

專問家の說に從へば、思想が私に與へられるのである。自由思想家に從へば、自分がその思想

を追求するのである。前者の場合に於ては眞理が既に發見されて、存在する、自分が唯だそれを恩惠によつてその受與者から受け取らなければならない。後者の場合では、眞理が追求されなければならない、それが將來に橫つてゐる自分の目的である、その方向に自分が走り進まなければならないのである。

　孰れの場合に於ても、眞理（眞の思想）が自分以外に橫つてゐる、そして自分はそれを得ようとして熱望する、それが贈呈（恩惠）からにせよ或は又獲得（自分自身の手柄）によるにせよ。（1）眞理が一個の特權である。（2）否、眞理への道程は萬人に許可されてゐる、聖書でも、神父でも敎會でも或はその他の何人でも眞理を獨占はしない。人は唯だ——推理冥想することによつてそれを體得することが出來る。

　兩者は眞理に對する關係に於て孰れも無所有であることがわかる。かれ等はそれを采邑として（なぜなら『聖なる父』は唯一者ではない、唯一者としての彼はこのシキスタスであり、クレメント（等）である、けれど彼はその眞理をシキスタス若しくはクレメントとして持つのではなく、『聖なる父』、即ち精靈として持つのである）或は又理想として持つのである。采邑としては、唯だ數人（特權者）の爲めに有し、理想としては、萬人（被特許者）の爲めに存する。

故に、思想の自由は我々が實際、悉く暗黑な、誤謬の道程を歩いてゐると云ふ意義を示してゐる、そして各人はこの道を歩いて眞理に到達することが出來る、故に正しい道を歩いてゐるのだと云ふことになる(『すべての道は羅馬に、世界の端までも續く』)。故に思想の自由は、眞の思想は私自身の物ではないと云ふ意義を多分に示してゐる。なぜなら若しさうであるなら、何故に人々は自分をそれから放逐しようと欲するのであらうか？

思索がまつたく自由になつた、そして、自分が自分自身をそれに妥當せしめなければならない若干の眞理を礎え付けた。それは自からを一個の體系に完成せしめ、絕對の『組織』に齎らさんことを求める。たとへば、國家に於て、それは『合理的國家』を出現するまでその觀念を追求する。人間(人類學)の場合に於ては『人間を發見した』迄それを追求する。

思想家が信仰者と異なる點は唯だ前者が後者よりも更により多く信ずると云ふことだけである。信仰者は彼の信仰(信條)によつて指定されてゐるだけ考へることが少ない。思想家は信仰者に比べて無數の信仰箇條を持つてゐる。思想家は彼の幾多の教說を粘着せしめて、その粘着を順次に計つてそれ等の價値を評價する。若しそのどれかが彼の豫算案に該當しない場合には、彼はそれを投げ出すのである。

思想家等はかれ等の宣言に於て信仰者と同一水準を走つてゐる。『若しそれが神からのであるなら、汝等はそれを根絶してはならない、』の代りに、その言葉は『若しそれが眞理からのであるなら、眞である、(等)』又『神に榮光を與へよ、』の代りに――『眞理に榮光を與へよ。』である。しかし、自分にとつてはその勝利者が神であると、眞理であると何等の相異はないのである。なによりも先づ第一に自分が勝利を得たいのである。

これを他にして、國家や社會の內部で、どうして『無制限の自由』が考へらるべきであるか？國家はよく個人の相互を保護するかも知れない、しかしそれは無制限な自由、所謂放縱によつて自から危險を招くやうなことをやつてはならはい。かくして『敎育の自由』に於て、國家は唯だかくの如く宣言する、――それは國家（若しくは、更にハッキリ云へば政權）の役に立つやうな敎育を各人に施すことである。競爭者等の心得べき重要な點は『國家がそれを役立てるやうな』である。若しも、たとへば僧敎が國家の意志に反する敎育を與へた場合、國家は直にそれを競爭場裡から驅逐する（佛蘭西參照）。一切の競爭に對して必然的に國家によつて敷かれる制限が『國家の監督若しくば管理』と呼ばれてゐる。敎育の自由を適宜な範圍內に置くことを命ずると同時に思想家の自由は國限の、界をも定めるのである。なぜなら、通則として、人々はかれ等の敎師

達の考へ以上にこれ等の考へを進めないからである。

今日の最大困難は精神の指導と統治である。往時は教會がこの天職を成就した。今では、それが不適當になつた。この重大な役目が大學から期待されなければならない。そして大學はそれを誤りなく遂行するであらう。玆に於て、我々政府はそれを維持するの義務を有す。本院は思想の自由と良心の自由とを宣言する。』（一八四四年、四月二十五日、貴族院）と云つた大臣ギゾォの言葉を聽け。かくして、思想と良心の自由の爲めに、大臣は『精神の指導と統治』とを要求するのである。

天主教は宗教裁判の法庭に、新教は聖書的基督教の法庭の前に被告を曳き出した。若したとへばルゲ（Ruge）の欲する如く、理性の面前に彼を拉し來るとしても、それには少しも變りはないのである。その神聖な權威が教會にしろ、聖書にしろ、理性にしろ（ルウテルとフスとは既にそれに訴へた）本質に於て何等の差異はないのである。

『我々の時代の問題』は人が、是認せらるべきは一般性のものか、或は又單に個人のみであるか？　一般性(國家、法律、習慣、道德等)が權利を與へられるのか、それとも又個人性か？——と云ふ質問をしても解決されはしないのである。人が最早少しも何等の『權利是認』を求めず、

『特權』に對して挑戰することを止める時にのみ始めてそれが解決される。――『合理的』な教育の自由は、『唯だ理性の良心を認める』のみで我々を目的地に到達せしめはしない。我々は寧ろ自我的な教育の自由を要求する、それは一切の所有自我に對する教育の自由で、其處で自分が始めて聽かれるやうになり、何等の束縛なくして自分自身を宣言することが出來る。自分が自分自身を『聽かれる』(Vernehmber)やうにすると云ふこと、これのみが『合理』(Vernunft)である、たとへ自分が如何程、非合理であらうとも。自分が自分自身を聽かれるやうにすることは、そして自分自身を聽くことは他人も亦自分自身と同樣に自分を享樂することになり、同時に自分を消費することである。

若し、昔のやうに正教的自分、忠良な自分、道德的な自分(等)が自由になつても、又今のやうに合理的な自分が自由になつたとしても、それは果して如何程の得があるだらう? これが果して自分の自由であらうか?

若し自分が『合理的な自分』として自由であるなら、それは自分の中の合理人、若しくは理性が自由なのである。そして、この理性の自由、若しくは思想の自由が昔の基督教世界の理想であつた。かれ等は思索を――前にも云つたやうに、信仰も亦思索である、思索が信仰であるが如く、

――自由にしようと欲した。思想家、卽ち合理人と同樣に信仰者も自由にならなければならなかつた。それを他にして自由は不可能であつた。しかし、思想家の自由は『神の子供等の自由』である、そして同時に最も無慈悲なものである――それは思想の神權政治若しくは領土である。なぜなら、自分がその思想に吸ひ込まれるからである。若し思想が自由であるなら、自分はかれ等の奴隷である、自分はかれ等に對して何の權力も有せず、かれ等によつて支配されることになる。しかし、若し自分が思想を所有し、思想に充ち溢れたいと思ふならば、自分は同時に無思想にならなければならない、思想の自由の代りに、自分は自分自身の爲めに無思想を保存しなければならない。

若し自分自身を理解させて、交通をさせたいことが要點であるなら、その時、自分は確かに自分の支配し得る人間的手段のみを使用することが出來る、なぜなら自分は同時に人間だからである。そして、實際、自分は人間としてのみ色々な思想を持つと同時に、自分として無思想である。思想から脫却し得ない人間はその點では單に人間で言語の、この人間制度の、この人間的思想の寶庫の奴隷である。言語、卽ち『言葉』が最も苛酷に我々を壓制する、それが我々に向つて固定觀念の全軍を派遣する。たとへば、反省の行爲に於ける汝自身を觀察せよ、そして、諸君は如何

に刻々無想になり、無言になることによつてのみ進歩するかを見出すであらう。諸君は單に睡眠に於て無思想、無言であるばかりでなく、最も深い反省に於てさへ同樣である。さうだ、その時こそ最も無想無言である。そしてこの無想。この認められざる『思想の自由』、若しくは思想からの解放によつてのみ諸君は諸君自からになるのである。それからのみ、諸君は言語を諸君の所有として使用する域に到達するのである。

若し思索が自分の思索でないならば、それは單に綴り合された思想である。それは奴隷の仕事である、若しくは『その言葉に從ふ奴僕』の仕事である。自分の思索の出發點は思想ではなく、自分である。故に又自分がその目標である、そしてその過程全部すら單に自分の自己享樂の過程に過ぎない。しかし、絶對な自由な思索にとつては、思索それ自からが出發點である、そして、それはこの出發點を最も極端な『抽象』(たとへば、存在)として發議することによつて自からを惱ますのである、この抽象、若しくはこの思想が、それから更に紡ぎ出されるのである。

絶對な思索は人間的精神の事件である、そしてこれが聖靈である。故に、この思索は、『この感覺』――『人類の最高インテレッセ』『精神』に對する感覺――を持つ僧侶の仕事である。

信仰者にとつては、眞理は既定の物であり、一個の事實である。自由思想家にとつてはこれか

ら定められるべき物である。絶對の思索をして永久にしかく不信なものたらしめよ、その不信は自からの制限を有してゐる、そして其處に眞理と、精神と、觀念とそしてその最後の勝利に對する信念が殘る。この思索は聖靈に對して罪を犯さない。しかしその聖靈に對して罰を犯さない凡ゆる思索こそ精靈や、幽靈に對する信仰である。

自分は考へることも、感じることも、即ち精神の活動も、官能の活動も兩方とも少しも拒否することは出來ない。感じることが物象に對する我々の感覺であるやうに、考へることは本質（思想）に對する我々の感覺である。本質はすべて感覺的な物の中に、特に言葉の中にかれ等の存在を有してゐる。言葉の權力は物質のそれに續く。言葉の力が笞によつて强ひられ、後には確信によつて强ひられる。物體の力が我々の勇氣や、我々の精神を壓倒する。確信の力、即ち又言葉の力に對しては拷問や劍すらもそれ等の壓服力を失なふ。確信の人々は僧侶的人間である、かれ等は惡魔（サタン）のあらゆる誘惑に抵抗する。

基督敎はこの世の事物から唯だかれ等の抵抗しがたいものばかりを取り去つて、我々をそれ等のものから獨立させた。同樣に、自分は眞理やその力の上に自分自身を高める。自分が超感覺的であるやうに又自分は超眞理である。自分の前には、眞理は物象のやうに平凡でもあり、沒交渉

である。かれ等は私を搬び去りもせず、又私に狂熱を鼓吹もしない。この世には自分の前に確立性を有し、それに自分が自分自身を服從させるものは、眞理にせよ、正義にせよ、自由にせよ、人道にせよ一ッも存在はしないのである。かれ等は言葉である、言葉以外の何物でもない、恰かも、すべての物質的存在が基督教徒にとつて『空な物』以外の何物でもないやうに、言葉や眞理の中には（言葉は悉く一個の眞理である、人は虚僞を語り得ないとヘエゲルが斷定したやうに）自分にとつて何等の救ひもない、恰度、基督教徒にとつては物質や空な物の中に救ひがないと同様に。この世の財寳が自分を幸福にしないやうに、又その眞理も同じく自分を幸福にはしない。誘惑の物語を弄するのは最早サタンではなくて、精神である。そして彼はこの世の物質によつて誘惑するのではなく、その思想や『觀念の閃めき』によつて誘惑する。

世俗的な品物と同様に、神聖な品物も亦一切無價値な物として排斥されなければならない。諸々の眞理は文句であり、物の云ひ方であり、言葉である。それ等が連結され、脈絡ある連續に造り上げられると、論理や、科學や哲學になるのである。

考へたり、話したりする爲めに、自分は眞理や言葉を必要とする、恰度、食べるのに食物を必要とするやうに。それ等がなければ、自分は考へることも、話すことも出來ないのである。眞理

は言葉で羅列された人々の思想である、それ故に他の物と同様に現存してゐる、しかし勿論、心や思索に對してのみ存在してゐるのである。それ等は人間の諸制度であり、人間の被造物である、そして、たとへそれ等が神聖な啓示によつて與へられたとしても、それ等の中には依然として自分にとつて外存的な性質が横つてゐる。さうだ、私自身の被造物として、かれ等は既に創造の行爲以後に於て私から緣遠くなつてゐる。

基督教者は思索を信仰する人である、彼は思想の至上統治を信じ、思想を、所謂『主義』を支配者にしたがつてゐるのである。多くの人々は實際思想を吟味するが、それ等の孰れをも批評なしに自分の主人として撰擇するやうなことはやらない、然るに彼は『彼の主人』を嗅ぎ出さうとして人々を嗅ぎまわる犬のやうである。彼はいつでも支配する思想を目指してゐる。基督者は無限に改革し、叛逆し、數世紀の支配概念を破滅させるかも知れない。彼はいつでも新らしい『主義』即ち新らしい主人に憧憬がれ、いつでも又より高き或は『より深き』眞理を樹立し、常に一派を立て、常に統治する精神を宣言し、萬人の爲めに法則を遣かうとするであらう。

若し人が人間であるが故に、彼の一生と力とを捧げなければならない眞理が一ッでも存在してゐたとすれば、その時、彼は規則や、統治や、法律(等)に服從させられるのである。彼は奉仕人

である。人間や、人道や、自由(等)は e. g. かくの如き眞理であると想像せられてゐる。

しかし人は又一方でかくの如く云ふことが出來る。諸君が更に進んで思索に耽けるか否かは諸君次第である。唯だ心得べきことは、若し諸君の思索によつて諸君が何等か注目に價する物を生み出さうと欲するなら、多くの困難な問題が解決されなければならない、それを征伏しないでは諸君は前進することが出來ないのである。故に、諸君にとつては思想(觀念、眞理)と交渉すべき何等の義務も天職も存在しないのである。しかし、若し諸君がそれをやりたければ、諸君はこれ等の困難な問題を解決せんとして從來努力して來た他人の力の結果を利用しさへすればよいのである。

それ故に、考へたいと欲する人には確かに仕事がある、それを彼は意識的に或は無意識的にそれを意志することによつて彼自身の爲めに置くのである。しかし、何人にも考へたり信じたりする仕事はないのである。――前者の場合に於て、これはかう云はれるかも知れない、――君はまだ充分な處まで達してはゐない、君は偏狹な興味を持つてゐる、君は物の底まで達してはゐない、要するに、君は完全にそれを征伏してゐない。けれど、また一方では諸君が何時如何なる處まで行くも、諸君はいつでも終點まで達してゐるのである、諸君にはそれ以上に進む義務はないの

である、諸君は諸君の欲するだけ、即ち諸君の能力の許す限りそれを持ち得るのである。それはどんな他の仕事の場合でも又同一である、諸君はそれに對する興味が失せたなら何時でもそれを放棄することが出來るのである。であるから、若し諸君は最早、ある物を信ずることが出來なくなつたなら、諸君は無理にも諸君自からをその信仰に强ひたり、或は、神學者や哲學者のするやうに、恰かも神聖な信仰の眞理に對する如くいつまでも諸君自からを多忙ならしめる必要はないのである、そして、諸君は靜かに諸君の興味をそれから取り戻して、それを勝手氣儘に歩かせるがいいのである。僧侶的精神は實際、諸君のこの興味の消失を『怠惰、無思想、冷淡、自己欺瞞』(等)として説明するであらう。けれど、諸君はそんなことに無頓着にその浮誇を打ち棄てるがいい。どんな物(Sache)も、所謂『人間の最高興味』も、どんな『神聖なため』も、諸君がそれに奉仕し、その爲めに諸君自身を占有させる價値はないのである。諸君はその價値は唯だこれのみに、即ち、それが諸君の爲めに諸君に價値あるものであるかを求めればよいのである。子供のやうになれば、聖書の格言が我々に敎訓を與へるのである。しかし、子供達は何等神聖な興味を持つてはゐない、そして『善の爲め』に就て何にも知らないのである。かれ等はそれよりもズット精確にかれ等が何に對して好奇心を抱いてゐるかを知つてゐる。そして、かれ等は、かれ等の

全力を擧げて、如何にしてそれに到達すべきかを考へるのである。

考へることも感じることもどちらも止みはしないであらう。けれど、凡ゆる思想や觀念の力、色々な理論や原理の領域、精神の至上權、要するに——神權政治は坊主達、卽ち、神學者、哲學者、政治家、フィリスタア、自由黨員、學校教師、奴僕、兩親、子供等、夫婦、プルウドン、ジヨウジサンド、ブランチユリ(等々)が地位を占めてゐる限り存續する。神權政治は人々がそれ等の諸原理を信じたり、考へたり、或は批評したりさへしてゐる間は繼續するであらう。なぜなら、凡ゆる現代の諸原則を顚覆する最も辛辣な批評すら、な最後には主義を信じてゐるのである。

各人が批判する、しかしその批判の標準が異つてゐる。人々は『正しい』標準を追ひ(かけてゐる。正しい批判の標準と云ふことが第一の豫想である。批評家はある命題、眞理、信仰から出發する。これは批評家の創造ではなく、獨斷家のそれである。否、普通にそれが實際、時代の敎養から(たとへば『自由』『人道』等)極めて無遠慮に取りあげられてゐる。批評家は『人間を發見』しなかつた。しかしこの眞理は獨斷家によつて『人間』として建設された、そして、批評家(その人はなほ彼と同人であり得る)はこの眞理、この信仰箇條を信じてゐる。この信仰を土臺として、卽ちこの信仰に憑かれて彼は批判するのである。

批評の秘訣はある『眞理』若しくは他の『眞理』である。これがいつまでもその力ある秘密として殘存するのである。

けれど、自分は奴隷批評と自主批評とを區別する。若し自分が至上存在の豫想の下に批評するならば、自分の批評はその存在に奉仕して、その爲めに行はれることになる。若し自分が『自由國家』の信仰に取り憑かれてゐるならば、その時、それに關係を有する一切を、それがこの國家に適當するものであるか否かと云ふ見地から批評する、なぜなら自分がこの國家を愛するからである。若し自分が敬虔人として批評するならば、その時、自分にとつて一切は神的か或は惡魔的か孰れかの階級に區別される、そして、自分の批判の前に、自然が神の足跡又は惡魔の足跡から成立される(それで、神の賜物、神の山、惡魔の祭壇、等云ふ言葉が生れる)、そして人々は信者と不信者に分けられる。若しも自分が人間を『眞の本質』と信じて批判するならば、その時、自分にとつて一切は先づ人間と非人間(等)の階級に分たれる。

批評は今日迄依然として愛の仕事としてのみ終始した。なぜなら、凡ゆる時代に於て、我々は或る存在に對する愛の爲めにそれを行つた。凡ゆる奴隷批評は愛の所産であり、憑かれた物である、そして『一切を吟味して、善を固守せよ』と云ふ新約聖書の教訓に從つて履行する。『善』が

試金石であり、標準である。善は無數の名稱と形式の下に繰り返されて常に豫想となり、この批評の爲めの獨斷的固定出發點となり——固定觀念となる。

批評家は、仕事に取りかかるに當つて、公平に『眞理』を豫想する、そしてそれが發見せられなければならないと云ふ信仰を抱いて眞理を追求する。彼は眞理を確かめ、その中にその『善』を把持せんとする。

豫想は以前に思想を置くと云ふ以外の何物をも意味しない、即ち一切の以前に何物かを考へてその考へられた物を出發點として自餘のものを考へ、批評し、計量する。換言すれば、その思索が既に考へられた物を出發點として始められると云ふことである。若し、思索が始められる代りに、少なくとも始まるなら、若し思索それ自からが主であるなら、植物さへもさうであるが如く、それ自からの行爲人格であるなら、その時は實際、思索がそれ自からをもつて始められなければならないと云ふ原則が棄てられるやうなことはないであらう。けれどそれ等の無數な誤謬を生ずるのは將に思索の人格化である。へエゲル風の體系に於ては、人々はいつも恰かも思索が、即ち『思索精神』(即ち人格化された思索、幽靈の如き思索)が思考し、行爲したかの如くに物語つてゐる。批評的自由主義に於てはいつでも『批評』がこれをやるとかあれをやるとか、若しくは

その『自覺』がこれを發見するとかあれを見出すとか云はれてゐる。けれど、若し思索が人格的行爲者と見做れるなら、思索それ自からが豫想されなければならない。若し又批評がかくの如き物として伍するなら、思想が等しく前に立たなければならない。かれ等自身から出發する時にのみ活動する思索と批評とは、かれ等自から、かれ等の活動の豫想とならなければならないであらう、恰かもそれ無くしては活動が不可能ででもあるかのやうに。しかし、豫想された物としての思索は固定觀念であり、獨斷である。故に、思索と批評とは獨斷からのみ出發し得る、即ち、ある思想、固定觀念、豫想から。

これと共に我々は再び上に説明されてゐるものに戻つて來る、——即ち基督教は思想の世界の發展に於て成立するものである、若しくはそれが本來の『思想の自由』、『自由思想』、『自由精神』であると。私が『奴隷的』と呼んだ『眞の』批評はそれ故に又『自由』批評と同一である、なぜならそれが自分の所有ではないからである。

けれど、諸君の物が、それ自からで立つ何物かにならなければ、即ち人格化されず、それ自からにとつて一個の、獨立せる『精神』とさへならなければその場合はまつたく異つてゐる。諸君の思索が『思索』を豫想せず、諸君が思索を所有するのである。けれどかくして諸君は結局諸君自身

を豫想するのであるか？　さうだ、けれど自分自からの爲めではなく、自分の思索の爲めに。自分の思索以前に、其處に――自己が存在してゐる。であるから、自分の思索は思想によつて先立たれはしない、若しくは自分の思索に『豫想』がないと云ふことになる。なぜなら自分が自分の思索に對して存在してゐると云ふ豫想はそれが思索によつて造られたものでも、それに就て思考されたものでもなく、思索それ自からが据ゑ置かれたので、それが思想の所有人になるのである、そして思索は――所有以外の何物でもないと云ふことを證據立ててゐる、卽ち『獨立的』思索、『思索精神』が少しも存在しないと云ふことである。

この普通の物の見方の正反對は抽象に對する空虛な遊戲に相似するかも知れない、そしてこの攻擊を受ける人々すら、若し實際の結果がそれと關聯しないなら、私のそれに與へる無害な有樣に同意を表するであらう。

これ等をもつて精確な發想に換へれば、今なされた斷定は人間が一切の尺度ではなく、自分がその尺度であると云ふことである。奴隷批評は彼の眼前に他の存在、一個の觀念を有して、それに仕へようと云ふのである。それ故に、彼は唯だ彼の神の爲めに虛僞の偶像を殺すだけである。この神の存在の愛の爲めになされること、それは、愛の仕事――以外のなにものであらうか？

けれど自分は、自分が批評する時に、自分の眼前に自分自からをさへ置かない、唯だ自分自身に對して快樂を與へるだけである、自分の趣好に從つて自分自身を慰さめ喜ばすだけである。自分の樣々な必要に應じて自分はそれを咀嚼し、その香りを吸ふだけである。

奴隷批評は、愛が彼を導くが故に、彼がその物(爲め)自からに奉仕すると想像するのであることを人が反省するなら、その二つの態度の差は更に益々明らかにせられるであらう。

眞理、若しくは『一般の眞理』を人々は放棄することどころではなく、是非とも追求しなければならないやうに束縛されて居る。それは être suprême(至上存在)、最高本質以外のない物であらうか? 『眞の批評』すら若しそれが眞理に對する信仰を失へば失望しなければならないであらう。そしてしかも、眞理は唯だ一つの——思想である。だが、それは單に一個の思想であるばかりでなく、凡ゆる思想を超越する、爭ふべからざる思想である。それは思想それ自らで凡ゆる他の思想に對して最初の聖別を與へるものである。それは萬想の聖化であり『絕對』『神聖な』思想である。眞理はその他の神々よりも永く着られるのである。なぜなら、人々がさまぐな神を顚覆し、遂には唯一神彼自身をさへ投げ棄てたのは悉く、眞理の奉仕と眞理に對する愛の爲めであつた。『眞理』は神々の世界の滅亡以後に存續する、なぜならそれは神々の轉變極りなき世界の不朽の靈

魂であり、神明それ自からだからである。

自分は、眞理とは何ぞや？と尋ねたピラトの質問に答へよう。眞理は自由思想であり、自由觀念であり、自由精神である。眞理は汝から自由なものであり、汝自からの所有ではなく、汝の權力以外に存在するものである。しかし、眞理は又同時に完全に非獨立、非人格、非現實、非具體的なものである。眞理は諸君のやうに前進することも、動くことも、變化することも、發展することも出來ない。眞理は諸君から一切を期待し、受け入れる、そして、それ自からは諸君を通してのみ存在する。なぜならそれは唯だ――諸君の頭腦中にのみ存在する。諸君は眞理が思想であることを許す、しかし、一切の思想が眞實なものではないと云ふ、或は、諸君が又好んで云ふやうに、すべての思想が眞に實の思想ではないと云ふ。それで、諸君は何によつてその思想を計り或は認めるのか？　即ち、諸君の無力によつて、諸君が最早、その上に何等有功な襲擊を加へることが出來ないことによつてである！　それが諸君を壓服し、諸君を鼓吹し、諸君を搬び去る時に諸君はそれを眞實な思想として把持する。諸君の上にそれが統治することが諸君にその眞理を保證する。そして、それが諸君を所有する時、諸君はそれに憑かれ、そして諸君はそれに好感を抱くのである、なぜならその時、諸君は諸君の――君主と主人とを見出したからである。諸君が眞理

を求めてゐた時に、諸君の心は何に向つて憧憬れてゐたか？　諸君の主人に！　諸君は諸君の力を渴望せず、偉大なる者を渇望し、偉大なる者を高めたいと欲したのである。（『汝等主なるわれ等の神を崇め高めよ！』）わが親愛なピラトよ、眞理とは——主である、そして眞理を求むる全ての人々は主を求めて、彼を讃美せんとしつゝあるのである。主なる神は何處に存在するか？　諸君の頭腦以外の何處にか？　彼は唯だ精神である、そして、諸君の信ずる場合には、諸君は實際、彼を見るのである、なぜなら、彼は——幽靈だからである。なぜなら主なる神は單に思考せられる或る物である、そして、見えざる物を見えるやうに、精神的を具體的にしようとするのは唯だ基督教的な苦痛と惱みである、それが幽靈を生み出して、幽靈に對する信仰の恐ろしい悲慘を現出せしめたのである。

　諸君が眞理を信じてゐる間は、諸君は諸君自身を信じないのである、そして諸君は——奴僕であり、宗教人である。諸君のみが眞理である、或は寧ろ、諸君は眞理以上である、眞理は諸君の前には何物でもないのである。諸君は又確かに眞理に就て尋ねる、諸君は又確かに『批判する』しかし諸君は『より高き眞理』を欲しがりはしないのである、——即ち諸君以上の眞理を、——そして又かくの如き眞理の標準に從つて批評もしない。諸君はさま〴〵の思想や觀念に諸君自身

歴史（又一個の概念）が勝利を獲得する』と云ふやうなことが云はれなくなる。眞理は嘗て勝利を得なかつた、しかし、常に、劍の如く、勝利を得る自己の手段であつた（『眞理の劍』）眞理は死んだ、それは自分の勝手に使用し得る文字であり、言葉であり、材料である。一切の眞理はそれ自身では死んでゐる、形骸に過ぎない。それは唯だ自分の肺が生きると同樣の仕方に於てのみ生きる、――即ち私自からの生活力の程度に應じて。眞理は野菜や雜草の如き材料である。それが野菜になるか雜草になるかその斷定は自己にある。

物象は自分にとつては單に自分が使用する材料である。自分が自分の手を置く何れの處でも、自分は眞理を把持する、それを自分は自分に都合よく拵へるのである。眞理は自分にとつて確かなことである、そして自分はそれを追求する必要はないのである。眞理に奉仕することは如何なる場合に於ても自分の意向ではない。それは唯だ自分の思索する頭の滋養である、馬鈴薯が自分の消化する胃の腑に於けるが如く、或は又友達が自分の社會的心情に對する如きものである。自分が思索に對する興味と能力とを持つてゐる間、凡ゆる眞理は自分にのみ奉仕して、自分の力に從つてそれを働らかしてゆく。現實又は世俗が基督教徒にとつて『空であり、無意味な物である』如く、眞理も自分にとつては空なものである。それは將にこの世の事物が如何程基督敎徒が

を話しかける、諸君が色々な現象に對して話しかけるやうに、そして、その目的は唯だかれ等をして諸君にまで話しかけ、諸君を面白がらせ、諸君自からのものとなるにある。諸君は唯だかれ等を征伏して、かれ等の自主となることを欲する、諸君は諸君自からを確立し、かれ等の中に安息を感じようと欲する、その時、諸君はかれ等の眞實を見出し、かれ等の眞相を見るのである、その時かれ等は最早、諸君から逃げ去らず、最早、把持すべからざる、若しくは理解出來ないものではなくなるのである。卽ちその時こそかれ等が諸君にとつて正しく、その時、かれ等が諸君の所有となる。若しその以後にかれ等が再び重くなり、再び諸君の權力外に藻搔き出ようとするならば、その時こそ將にそれがかれ等の不眞實で、——卽ち諸君の無力である。諸君の無力がかれ等の力であり、諸君の卑下がかれ等の高揚である。故に、かれ等の眞實は諸君である、若しくはそれが虛無である、諸君がかれ等の爲めに存在する、その中にかれ等が溶解する。かれ等の眞理はかれ等の虛無性である。

唯だ私の所有として、それ等の精靈や眞理が安息を得るのである。そしてその時にのみ始めてかれ等が眞實に存在する、その時、かれ等はかれ等の哀れむべき存在から免かれて自分の所有とせられるのである、その時、最早、『眞理はそれ自身を發展させ、支配し、それ自からを肯定する。

その空虚を證據立てても存在するやうに、存在するのである、けれどそれが空であると云ふのは、それ自身に價値を有せず、唯だ自己に於てのみ價値を生ずるが故である。それはそれ自からでは無價値である。眞理は――一個の被造物である。

諸君は諸君の活動によつて無數の物を生産する、さうだ地球の表面を新しく形造り、至る處に人間の仕事を造り出すと同時に又、諸君は諸君の思索によつて依然として無數の眞理を肯定しようとする、そして、我々はそれ等を喜んで享樂するであらう。ではあるが、私は諸君の新しく發見された機械に機械的に仕へる爲めに私自身を手渡すことを欲せず、唯だ自分の爲めにそれを動かす手傳をするやうに、自分は又單に諸君の眞理を使用するであらう、そして私自身をかれ等の要求の爲めに使用させるやうなことはしないであらう。

自分以下の眞理は悉く自分の氣に入るであらう。自分以上の眞理、自分が自分自身をその方に向けなければならない眞理は、自分の與かり知らないものである。自分にとつては眞理は不在である、なぜなら何物も自分以上ではないから！　自分の本質すら、人間の本質すら、自分以上ではない！　この『バケツの中の一滴』この『つまらない人間』である自分以上ではないのだ！

諸君が、すべての時にはその時に相應した眞理が存在する、世に『絶對の眞理』と云ふが如きも

のはない、と大膽な肯定をした時に諸君は最上事をやつたかの如く信ずる。だがこれとても亦諸君がその各時に存する眞理を認めるのであるから、やがて純粹に『絕對な眞理』を創造することになる、如何なる時にも、缺かさず眞理が存在する、その眞理が如何なるものなるかを問はず、各時が依然として一個の『眞理』を所有する。

如何なる時にも人々は考へてゐた、であるからさまぐな思想や眞理を持つてゐた、そして、次々の時代に於てそれ等は前のものとは異なつてゐると云ふだけのそれは意味であらうか？ 否その言葉は各時代がその『信仰の眞理』を持つと云ふことでなければならない。そして、實際、その次に『より高い眞理』が認められない程の眞理は未だ嘗て現はれたことはない。そしてつまり、それは人々が『高きもの、尊きもの』として自からを服從させなければならないと信じた眞理なのである。

ある時代のある眞理と云ふのは悉くその時代の固定觀念である、そして、若し人々がその後他の眞理を發見したなら、これはいつでもかれ等が他のものを求めたからさうなつたに過ぎない。かれ等は唯だその愚を改めて、それに近代の服裝をさせたばかりである。なぜなら、かれ等が欲したからである——これに對する辯明を何人が敢へて疑ふであらう？ ——かれ等は『ある觀念

によつて鼓吹され』たかつたのである。かれ等はある思想によつて支配され、――憑かれたかつたのである！　この種の最も近代的な支配者は『我々の本質』であり、若しくは『人間』である。

一切の自由批評にとつては、思想が標準であつた。所有批評の標準は自己である、無言の、故に單に考へられるばかりではない自分である。なぜなら、單に思考されるものは常に口にせられるものである、なぜなら言葉と思想とは一致するものである。自分のものが眞である、自分がその物の所有である時が非眞である。たとへば結合は眞であるが、國家や社會は非眞である。『自由にして眞なる』批評はある思想、觀念、精神の統一ある支配を懸念する。『自主』批評は自分の自己享樂以外の何物でもない。そして、後者の場合は事實である、――しかも、我々はそれを本能の動物的批評と云ふが如き『侮辱』をそれに與へることを許しはしないであらう。自分は、批判する動物の如く、唯だ自分自からにのみ拘泥してゐる、そして『主義の爲め』にそれをやるのではない。自分が眞理の標準である、けれど、自分は觀念ではない、觀念以上である、即ち不可說である。自分の批評は『自由』批評ではない、自分から自由でもなく、ある觀念に奉仕する『奴隷的』でもなく、自主批評なのである。

眞の又は人間的な批評は唯だ何物かが人間に、眞人に嘗て欲まるか否かを吟味する。しかし自

主批評の場合に於て、諸君はそれが諸君に當て篏まるか否かを斷定すればよいのである。

自由批評はさまぐ〵の觀念に忙殺される、故にそれはいつでも理論的である。如何にそれが諸觀念に向つて荒れまわつても、依然としてかれ等から脫却することは出來ない。それは幽靈に對じて陣を張るのである、しかし、それはかれ等を幽靈として認める時にのみ、かくの如く行爲し得るのである。自由批評が交涉しなければならない諸觀念はまつたく消え失せはしないのである。新しき日の朝風はかれ等をかき消しはしないのである。

批評家は實際諸觀念の前に無頓着になり得るかも知れない、しかし彼は決してかれ等から脫却し得ないのである、即ち、彼れこの肉體人以上にはより高い何物、——即ち、自由、人道等——も存在しないと云ふことを決して理解し得ないであらう。彼は常に人間に殘された『天職』『人道』を把持してゐる。そしてこの人道の觀念はいつまでも實現されはしないのである、なぜなら、それは『觀念』で、觀念はいつまで經つても觀念なのである。

しかし、若し自分がその觀念を自分の觀念として把持するなら、その時それは旣に實現されたものである、何故なら、自分がその現實性だからである。その現實は、肉體を有する自己がそれを持つと云ふ事實から成り立つてゐる。

自由の觀念が世界の歴史に於てそれ自からを實現すると人々は云ふ。しかし場合はまつたく反對である。この觀念は人がさう考へる時に事實である、そして、それが觀念であると云ふ程度で眞實である、即ち、その中で、自分がそれを考へ、又はそれを持つのである。それ自からを發展させるのは自由の觀念ではなく、人々がかれ等自からを發展させるのである、そして、勿論、この自己發展に於て、かれ等の思索をも發展させるのである。

要するに、批評家は未だ所有人ではない、なぜなら、彼は未だ力强き外界の存在として諸觀念と戰つてゐるからである、――恰かも、基督教徒が『惡念』と戰はなければならない間は彼の『惡念』の所有人ではないと同一である、惡と戰ふ人にとつて、惡が存在するのである。

批評主義は『智議の自由』、『精神の自由』に固執して離れようとしない、そして精神はそれが純粹な眞の觀念をもつて充される時にのみその本來の自由を獲得するのである。これは思考の自由である、そして思想ぬきでは存在し得ない。

批評主義はある觀念を攻擊するに唯だ他の觀念をもつてするに過ぎない、例令へば特權の觀念を人間性のそれによつて攻擊し、或は自我主義のそれを非利己性の觀念によつて攻擊するが如きである。

一般に、基督教の始めがその批評の慾りに於て再び舞臺に登場する、そしてエゴイズムがいつでも攻擊される。自分は自分自身(個人)を重視してはならないのである、觀念と一般性が尊敬されなければならない。

なぜと云へば、坊主主義とエゴイズムと、精神性と俗人性との闘爭が基督教史全體の材料を形成してゐるのである。最新な批評主義に於ても、この戰ひが一切を包括する完全な狂信の姿となつて現はれてゐる。實際、それは、その生命とその亂舞を悉く消耗するに非ずんば消え失せはしないであらう。

自分の考へたり、やつたりすることが基督教徒的であらうとなからうと、自分はなんでそんなことに頓着するものか? また、それが人間的で、自由で、人情的であらうと、若しくは非人間的で、非自由で、非人情的であらうと、自分はなんでそんなことを氣にかけるものか? 若し、それが自分の欲することを成就し、若しそれによつて自分が自分自身を滿足させることが出來さへすれば、その時諸君の好きなやうな賓辭をもつてそれを粉飾するがいい。それはどつちでも自分にとつては同じことである。

恐らく、自分は又、その次の瞬間に、自分の以前の思想に對して私自身を防禦するでもあらう。自分は又突如として自分の行動を變化させるでもあらう。けれど、それはそれが基督教に合致しないからでも、人間の永遠の權利に相反するが爲めでもなく、又それが、人類や、人道や、人道主義の觀念に衝突する爲めでもない、――唯だ、自分が最早、その全てでなくなり、それが最早自分に何等充分な享樂を供給しないからであり、又自分が以前の思想を疑ひ、若しくは今迄やつて來た行爲の樣式をもつて自からを喜ばすことが出來なくなつたが爲めである。

この現世が所有として、自分の意志の欲するままの材料になつたやうに、精神も亦所有として材料にまで下落しなければならない、それに對して、自分は最早何等神聖な恐怖を抱かないのである。その時、自分は始めて、思想が如何程、無遠慮に『惡魔的』に見えても、その面前で戰慄するやうなことはないであらう。なぜなら、若しそれが自分にとつて、あまりに不便に、不滿足にならうとして威嚇するなら、その終局は自分の權力内にある。そして、自分は又かの聖者ボニフエスが宗教的狐疑から異教徒の聖なる槲を切ることを喜んで止めたやうに、その中に無神や不德や、惡の精神が宿つてゐるの理由をもつて如何なる行爲からも畏縮するやうなことはしないであらう。若しもこの世の諸物が一度空になつたなら、精神の諸思想も亦空にならなければならない。

如何なる思想も神聖ではない、どんな思想も『献身的信仰』(Andacht) の位に登らせてはならない、又如何なる感情も神聖ではない(友誼や、母の感情等も少しも神聖ではない)、如何なる信仰も神聖ではない。かれ等は悉く外部的である、自分の外的な所有である、そして、それ等の物が自己によつて創造された如く、又自己によつて絶滅せしめられる。

基督教徒は一切の事物及び對象を、即ち、最も愛した人々、彼の愛の『對象』を、彼自身(即ち、基督教的に云へば、彼の精神、彼の靈魂)を失はずに、失ふことが出來る。所有人は彼の心に親しかつた、そして彼の情熱を燃やした凡ゆる思想を彼から投げ棄てることが出來る、そして同時に『又數千倍を獲得する』であらう、なぜなら、創造者としての彼が存在してゐるからである。

無意識に又無心に、我々のすべては所有を目差して努力してゐる、そして、我々の中に一人として神聖な感情、神聖な思想、神聖な信仰を投げ棄てなかつた者は殆んどないであらう。否、我々は恐らく自己の神聖な思想のある物から脱却したことのない人間に出遇ふことはないのである。一切の確信に對する我々の挑戰は我々の反對者を彼の思想の城塞から驅逐することが出來ると云ふ意見から出發してゐる。しかし、自分の無意識にやることは、自分が半端なことをやると云ふことである、故にある信仰に對する勝利を得た後で、自分は再び他の信仰の囚入(憑かれた

者）になる、それがまた自分の全自己を新に奉仕させて、自分が聖書に對する狂信を止めた後に理性に對する狂信家とし、自分が基督教の觀念に對して永い間戰つた後に再び人道の觀念の狂信家と自分をするのである。

勿論、思想の所有人として、自分は自分の楯をもつて自分の財産を防ぐであらう、恰かも自分が、物品の所有人として、何人をもその好むがままにそれ等に手を觸れることを許さないやうに。しかしに楯を載せ、自分が敗北した時に微笑して凱戰するであらう。それがその事の面白味そのものである。『より崇高な感悃』を持つてゐる人は人間の瑣末なことに對して彼の謳謔を吐露することが出來る。しかし、一切の『偉大な思想、崇高な感情、高貴な靈感、神聖な信仰』を弄ぶことは自分が一切の所有人であることを豫想させる。

若し宗教が我々が悉く罪人であると云ふ命題を掲げるならば、自分はそれと反對に、我々は悉く完全であると云ふ命題を掲げる！　なぜなら、我々は、刹那〳〵に、我々がありうるところのすべてである。そして我々は決してそれ以上たるを要さない。何の缺點も我々に粘着しないから罪と云ふことは無意義になる。若し何人も自分以上の者に氣に入るやうなことをする必要がなく

なる時に、それでも未だこの世に罪人がゐるかどうか私に見せてもらひたいものだ！　若し自分が唯だ自分自身に適することをさへやつてゐるなら、たとへ自分が自分自身に適合するやうなことをしないでも、自分が自分の中の『聖なる者』を傷けないやうに、罪人ではないのである。しかし、若し自分が敬虔的でなければならないなら、その時、自分が神の氣に入ることをしなければならない。若し自分が人間的に行爲しなければならないなら、自分は人間の本質、人類の觀念(等)に適することをしなければならない。宗教が『罪人』と呼ぶものを、人道主義は『エゴイスト』と呼ぶ。けれど、更に、——若し自分が自分以外の者に適するやうなことをやる必要がないと云ふなら、所謂人道主義が新式の惡魔であるが如く見做す『エゴイスト』はまるで無意味な片々となりはしないだらうか？　人道主義が戰慄するエゴイストは惡魔と同樣な一種の幽靈に過ぎない。彼は單に妖怪變化としてかれ等の頭腦中に存在するのである。若しもかれ等が、それに對して『人間的』と『自我的』の近代的名稱を與へた善惡相對の洪水以前の觀念の中に不純粹にも漂流しつつあるならば、かれ等は白髮な『罪人』を『エゴイスト』に若返へらせ、新しき綴布を舊い衣に當てることが出來ないであらう。しかしかれ等はそれ以外に出ることが出來なかつたのである。なぜならかれ等は『人間』であることをかれ等の仕事として把持してゐるから。かれ等は善神から脫却した。

しかし、善そのものが殘されてゐる！

我々は悉く完全である。そして全世界に罪人は一人も存在しないのである！　しかし、この世には自からを父なる神、又は神の子、或は月世界人などと想像する氣狂染みた人間がゐる、かくして又この世は自からを罪人であると思ひ込む愚人をもつて滿々てゐる。しかし、月世界人がこの世に存在しないやうに、罪人も存在はしないのである。かれ等の罪惡は想像的である。

しかも、それが逆に、かれ等の狂氣又はかれ等の憑かれてゐることが少なくともかれ等の罪惡ではないかと云ふ抗議が成り立つかも知れない。だがかれ等の憑かれてゐることはかれ等の成就し得た、即ちかれ等の發展の結果以外の何物でもない、たとへば聖書に對するルウテルの信仰が彼が成し遂げ得た全てであつたやうに。人は自からの發展の結果、癲狂院に入り込むこともある、又或者はその結果としてパンテオンに行き、或者はワルハラに行き損ふのである。

世には罪人もなければ罪あるエゴイズムもないのである！

諸君の『博愛』をもつて私から去り給へ！　汝博愛家よ、『罪惡の巣窟』に忍び込み給へ！　大都會の雜踏中に暫時足を止めて見給へ！　諸君は隨處に、罪又罪を見出ないであらうか？　諸君は腐敗した人道を歎き、恐るべきエゴイズムを慨嘆しないであらうか？　諸君は無慈悲にして『利

己的』な金持を見出さないであらうか？　恐らく、諸君は既に諸君自身を無神論者と稱してゐる、しかし諸君は依然として金持が『人非人』にならないのは駱駄が針の穴を通るよりもむづかしいと云ふ基督教的感情に忠實である。諸君が恐らく『主我的集團』の中に投げ込み得ない人間は果してどれ程ゐるだらうか？　だから、諸君の博愛（人間に對する愛）はなにを發見したか？　愛し得ざる人々以外のなにものでもない！　そして、それ等は悉く何處から來てゐるのか？　諸君から、諸君の博愛からだ！　諸君は罪人を諸君の頭の中に入れてゐるのである、だから、諸君は彼を發見したのだ、だから、諸君は至る處に彼を當て嵌めたのである。人々を罪人と呼ぶことをやめ給へ、その時、かれ等は罪人でなくなる。諸君がひとり罪人の創造者である。人々を愛してゐると想像してゐる諸君こそ、人々を罪惡の溝の中に投げ入れる人々である。そして、かれ等を惡人と善人と、人非人と人間とに區別し。諸君の憑かれてゐる涎れをもつてかれ等を汚す人々である。なぜなら諸君は人々を愛するのではなく、人間を愛するからである。けれど、私は諸君に斷言する、諸君は決して罪人を見たことはない、唯だ――彼を夢見たばかりである。

自己享樂は自分が他人に奉仕しなければならないと自分が考へることによつて、即ち、彼に對して義務を負ふと自からを想像することによつて、又『自己犧牲』、『忍從』、『熱狂』に自分自身を

捧げなければならないと想像することによつて苦がくされる。よろしい。若し自分が最早、何等の觀念にも、『より高き本質』にも奉仕しないならば、その時、自分は——如何なる場合にも——自分自身以外の如何なる人間にも奉仕しないと云ふことが自から明らかになる。しかし、かくして、自分は事實に於て、或は現存に於てばかりでなく、又自分の自覺に於て——無二(Einzige)である。

茲に於て、神聖や、人間(等)以上のものが諸君に交渉する。汝自からのものが汝に交渉する。かれ等が諸君に授けるよりもより力强きものと諸君を見做し給へ、そして諸君はより强き力を持つのである。更に又もつと力强きものと思へば、諸君はより多くを持つのである。

その時、諸君は神聖な一切の物に召されないばかりでなく、人間的な一切な物に與かる必用がなくなるのである、そして、諸君は唯だ、諸君が諸君自からのものとする力を持つだけの一切の物の所有人になるのである、即ち、諸君は固有(eigen)になり、諸君自からの一切に對する能力者となるのである。

人々は常にかれ等が自分自身以外に存在する天職を自分に與へなければならないと想像した、故にかれ等の要求するところは、私——人間であるが故に、人間的な權利と自分が宣言しなけれ

ばならないと云ふのである。これが基督教的な魔法である。フイヒテの自我も亦私以外の同様な本質である。なぜなら、各人が自我であるから。そして若しこの自我のみが凡ゆる權利を持つならば、その時、それが『その自我』であつて、自分ではなくなるのである。しかし、自分は他の人々と同一の自我ではない、だが、唯一の自我である。自分は無二である。故に自分の欲求も亦無二である。そして、自分の行爲も、要するに、自分の一切が無二である。そして、この無二な自分としてのみ、自分は一切を自分のものとするのである、又同時に、自分はかくの如き者としてのみ自分を働かせ、自分自身を發展させる。自分は人間を發展させもしなければ、人間として發展もしない、けれど、自分として自分は――自分自身を發展させる。

これが――唯一者の意義である。

三　唯一者

基督教以前及び基督教時代は相互に反對な目的を追求したのである。前者は現實を理想化せんと欲し、後者は理想を現實化せんとした。前者は『聖なる精神』を求め、後者は『光榮化された肉體』を求めた。故に、前者は現實に對する無感覺、即ち『この世の侮辱』をもつて終りを告げた。そして後者は理想の放棄、『精神の侮蔑』をもつて終りを告げるであらう。

現實と理想の相反は和解すべからざるものである、そして、一方は決して他の者とはなり得ない。若しも理想が現實になれば、それは最早理想ではなくなるであらう。そして、若し現實が理想になれば、こんどは理想のみになつて、現實は少しも存在しなくなるであらう。兩者の反對は何物かが兩者を絶滅せざる限り、消滅せしめられはしないであらう。この『何物』、即ち第三者によつてのみ、その對抗がその終りを見出すのである。然らずんば理想と現實とは決して調和されはしないであらう。觀念はそれが觀念として止まつてゐる間は決して現實化されはしない、そしてそれが觀念として死ぬ時にのみ始めて實現される。そして、それは又現實の場合に於ても同一である。

さて、我々は我々の面前に觀念の固執者としての古代人と、現實の固執者としての近代人とを有してゐる。兩者は決してその對抗を脫却し得ない、そして兩者は唯だ徒らに喘いでゐる、一方は精神に向つて、そしてこの古代世界の渴望が滿足せしめられ、この精神が現はれたやうに思はれた時に、他の一方は直に再びこの精神の推理化を渴望するのである、それが永久に『敬虔な願望』として殘らなければならないのである。

古代人の敬虔的願望は聖所であつた、近代人の敬虔的願望は具體である。しかしながら、古代人の要求が滿足せしめられたなら（それは憧憬に於てのみ成り立つてゐた）それが沒落しなければならないやうに、かくして又具體は決して基督教性の圏内に於ては到達せしめられ得ない。聖化又は純化の形跡が古代世界に通じて行はれたやうに、無形のそれが基督教的世界を通じて橫行する。神がこの世に飛び込んで、肉體になり、この世を救濟せんと欲する、卽ち、彼自身をもつてこの世を充さうとする。しかし、彼が『觀念』であり又は『精神』であるが故に、人民（たとへばヘエゲル）は遂にその觀念を一切の物にまで輸入し、この世にまで引き入れ『觀念と理性とが一切に存在すること』を證據立てようとする。『人間』は今日の敎養では異敎的なストイックが『賢人』として揭げた者に符合する。後者は前者と等しく――肉體のない存在である。ストイック派

の非現實的な『賢人』、この肉體のない『聖者』が現實人に、肉體のある『聖者』に、肉體化された神に歸つた。そして非現實的な『人間』、無形の自我が具體自我の自分の中で現實になるであらう。

基督教を通じて『神の存在』に關する疑問が絶えず轉回してゐる、それは幾度となく取りあげられて、存在、具體、人格、現實に對する渇望が絶えず心に多忙と極めてゐたと云ふ證據を與へてゐる、なぜなら、それは決して滿足な解決を見出さなかつたからである。遂に、神の存在に關する疑問が倒れた、しかしそれは唯だ再び『神聖』が存在を有してゐた(フォイエルバハ)と云ふ命題に於て立ちあがつて來たのみである。けれどこれとても何等の存在がないのである、そして『純粹な人間的』が實現されるべきであると云ふ最後の隱れ家も亦その命脈はあまり長くはないであらう。凡そ如何なる觀念も實在はしない、なぜなら、如何なる觀念も具體たり得ないからである。煩瑣哲學派の現實論と名目論との爭鬪は同一の內容を有してゐる。要するに、これは全基督教史を通じてそれ自からを繰り返してゐるので、到底、その中にあつては終りを告げはしないのである。

基督教徒の世界は人生の個々の關係、教會と國家の制度並に法律に於て種々なる觀念を實現しようとして働らいてゐる。しかしながらそれ等の觀念が抵抗する、そして常に、非具體的な(現

實化せられざる）何物かを把んで離さない。それにも拘らず、この具體が絶えず追求されてゐる、そして、如何にその具體が絶えず實現せられることに失敗しても意とせられないのである。

なんとなれば現實の諸相は實現者にとつて重要な問題ではないのである。唯だそれ等が觀念の實現化であるか否かが一切なのである。故に彼は常にその實現せられた物が眞實、その中に住するその核たる觀念を有するか否かを新らしく吟味しつゝあるのである。そして、現實を試驗すると同時に觀念をも試驗して、果して、それが彼の考へるが如く實現せられ得べきものであるか、或は唯だ不正確に彼によつて思考せられたものであるか、そしてそれが爲めに實行せられざるものであるかを見ようとするのである。

基督教者は最早、家族、國家（等）を現存の實在として懸念しないのである。基督教者は古代人の如くこれ等の『聖なる物』の爲めにかれ等自身を犧牲としてはならないのである。只だこれ等はその中に精靈を生かす爲めに利用せらるべきである。現實の家族が沒交渉になつた、そしてその中から理想的なものが生れて來なければならないのである、それこそ神によつて祝福された『眞に實な』神聖な家族で、自由人の考へ方によれば『合理的』な家族となるのである。古代人にとつては家族、國家、祖國（等）は現存せる物として神聖である。近代人にとつてはそれが依然として

神聖な期待するものである、現存のものとして、それは唯だ罪に汚れた、この世のもので、それは早晩『救濟され』て、眞に實なるものとならなければならない。これは又次の如き意義を持つてゐる。――家族（等）は現存で現實なものではなく、神聖や、理想が現存眞實である。この家族は眞に實な理想をとりあげてそれ自からを實現するか否かは今なほ未定なのである。神聖なるものとして家族に奉仕することは個人の仕事ではない、それとは正反對に、聖なる物に仕へ、それにまで不神聖な家族を引き揚げ、理想の名の下に一切を服從せしめ、理想の旗幟を至る處に揚げ、その觀念を眞實の功果に齎すことが個人の仕事である。

しかしながら、基督教の干渉が、古代人のそれの如く、神聖なものに對してはゐるが、かれ等はその結果に於て常に反對な方向を現はしてゐる。異教の終りに於て神聖は現世外（extramudane）になり、基督教の終りに於ては現世內（intramudane）になる。古代はそれを全然この世界外に驅逐することに成功しなかつた、そして基督教がこの仕事を成就する時に、神聖はこの世の中に歸へることを欲し、この世を『救濟する』ことを欲するのである。しかしながら、基督教の範圍に於ては現在內の神聖が眞に現在それ自からになると云ふことは不可能なことである。其處には未だ『惡』で、不合理で、偶然で、『自我的』で、惡い意味で『現世的』な不徹底を主張しなければならな

いものが充分存在してゐるのである。基督教は神が人間になることをもつて始まる、そして凡ゆる時代を通じて發心と救濟の仕事を繼續し、萬人と凡そ人間的な一切に神の座を準備し、精靈をもつて一切を貫徹せしめようとする。それは『精靈』の爲めに玉座を準備することに固執する。

遂に、人間或は人類の上にアクセントが置かれることになつた時に、それは又かれ等が『永遠として宣言した』觀念であつた。『人間は死なない!』かれ等は今や、その理想の現實を發見したと考へた。人間が歷史の、世界歷史の主人公(自分)である。眞に發展して、卽ち彼自身を實現するものこそ彼であり、この理想である。彼こそ眞實正銘な具體人である、なぜなら歷史が彼の具體であつて、個人はその中にゐる成員に過ぎない。基督は世界歷史の自分であり、基督教以前の主人公でさへある。近代的解釋によれば、それは人間である。基督の姿が人間の姿にまで發展したのだ! かくの如き人間、絕對な人間が、歷史の『中心點』である。『人間』に於て、想的像な始まりが再び戾つて來る。なぜなら『人間』は基督と同樣想像的なものである。『人間』は世界歷史の自己の如く、基督教的解釋の圓周を結んでゐる。

若しも、現存と天職との引き伸ばされた關係が、卽ち、ありのままの自分と、自分が將にしかあるべき自分との間の關係が止んだなら、基督教の魔法は破られるであらう。それは具體に對す

る觀念の憧憬としてのみその存在を主張する、そして兩者の關係の弛緩せる分離と共に消滅する。その觀念が――觀念として存在する時にのみ（人間若しくは人類は實際、無形な觀念である）、基督教は依然として存在する。具體的觀念、具體的又は『完成された』精神は、基督教徒の眼前に『その時代の終り』又は『歷史の目的』とし漂つてゐる。それは彼にとつては現在ではないのである。

個人は唯だ神の王國の建設の爲めに僅かにそれに干與することが出來るのみである。即ち、近代的な觀念に從へば人道と歷史の發展に與かると云ふことである。そして、彼がそれに干與する限りに於て、基督教的（若しくは人道的價値）が彼に附與されるのである。そして、自餘の彼は微塵の如く、蛆蟲の如きものである。

個人が彼自から一個の世界歷史であり、世界歷史の自餘を彼の所有として所有すると云ふこととは基督教徒たることを遙かに超越することである。基督教徒にとつて、世界歷史は自己以上に高きものである、なぜなら、それが基督の歷史であり『人間』の歷史だからである。エゴイストにとつては彼の歷史のみが價値を有して居る、なぜなら、彼は唯だ彼自身を發展させんと欲する者で、人類の理想や神の計畫や、攝理の目的や、自由（等）を發展させようとする者ではないからで

ある、彼は自からをある觀念の道具、又は神の器とは見做さないのである、彼は何等の天職をも認めない、彼は人類の進歩發展の爲めに存在してゐるとも、又自己の瑣末をその爲めに寄與しなければならないとも思つてはゐない、彼はそれによつて人道がよくならうがわるくならうが一向頓着なしに、彼自身を生き盡くす。たとへ、その觀念が原始的狀態を讃美するものと混同せられる恐れがないとしても、人はレナウの『三人のジプシイ』を思ひ起すでもあらう。――なんだつて、自分はこの世の中に色々の觀念を實現する爲めに存在してゐるのだつて？　まあ、自分の市民たる義務を盡し、『國家』と云ふ觀念の實現の爲めに努力し、結婚をして、所天だの、父親だのと云はれ、家族と云ふ觀念を實現させなければならないのだつて？　そのやうな御役目はなんで自分に關係があるものか？　私に若し務めと云ふやうなものがあれば、花が自分の務めに從つて成長したり、よい香りを發散したりすると少しも變りはないのである。

『人間』と云ふ理想は基督教的解釋が回轉して、『この唯一者たる自分が人間である。』と云ふ命題になつた時に實現される。『人とはなんぞや？』と云ふ概念的な質問が――『人とは誰れだ？』と云ふ具體的質問に變はるのである。『なに』と云ふことは、それを實現する爲めに求められた概念である。『だれ』と云ふのは最早、少しも質問ではない、その答へは直に問者それ自からによつて答へ

られる。質問がそれ自身に答へてゐるのである。

人々は神に就て『さま〲な名稱も汝を名付け得ず』、と云つてゐる。それはまた將に自分に當て嵌まる。なん等の概念も自分を説明はしない、自分の本質として名付けられる如何なるものも自分を説明し盡しはしない。それ等は單に名である。かれ等は又等しく神に就て、彼は完全なるが故に、彼には完全を求めるの務めなし、と云つてゐる。それも又自分によく當て嵌つてゐる。

自分は自分の力の所有人である、それは自分が自分自身を無二として知る時にのみさうであり唯一者に於て、所有人彼自身は彼の創造的虛無に歸へる、其處から彼が生れて來る。自分以上の一切の本質は、それが神であれ、人間であれ、悉く自己の唯一性の感情を薄弱にする、そして、それはこの自覺の太陽の前にのみ蒼白くなる。若しも自分が唯一者たる自分自身の爲めに自からを干與するならば、その時、自分の干與はその刹那に變はる、具體創造者の上に安住し、創造者は彼自からを消費して、自分は

萬物は己にとつて無だ、と云ひ得る。

自我經

大正十年十二月二日印刷
大正十年十二月八日發行

不許複製

定價參圓參拾錢

譯者　辻　潤

發行者　鷲尾浩
東京市日本橋區本銀町二ノ八

印刷者　鈴木角藏
東京市小石川區西古川町廿五番地

印刷所　東山堂
東京市小石川區西古川町廿五番地

發行所　東京市日本橋區本銀町二ノ八　冬夏社
電話本局三一一二番
振替東京四五四四六番